

空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊

# 空港跡地遺跡 V

2002年3月

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
香 川 県 土 地 開 発 公 社

空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊

# 空港跡地遺跡 V

2002年3月

香 川 県 教 育 委 員 会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
香 川 県 土 地 開 発 公 社



SHa05 遺物出土状況

## 序 文

香川県教育委員会では、四国横断自動車道や高松東道路の建設、高松空港跡地の整備など、大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書刊行業務を財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して実施しております。

このたび、『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 空港跡地遺跡V』として刊行いたしますのは、空港跡地遺跡西半部の調査についてであります。当地域は、国の重要文化財に指定された『弘福寺領讃岐国山田郡田岡』の比定地の一部とされ、古代の遺構・遺物について注目されております。また、当地域からは前方後円墳の起源を考えるうえで重要な前方後円形と前方後方形の周溝墓が検出されるなど、多岐にわたる遺構・遺物が出土しております。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、香川県土地開発公社及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成14年3月

香川県教育委員会  
教育長 折 原 守

## 例 言

1. 本報告書は、空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第5冊であり、香川県高松市林町に所在する空港跡地遺跡（くうこうあとちいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土地開発公社から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、予備調査を平成2年4月から同年9月まで実施し、本調査を平成2年12月から平成9年11月まで実施した。本報告書に収録された地区については、平成3年4月から平成5年6月まで調査を実施した。
4. 調査にあたって下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）  
英明高等学校、林地区開発協議会、地元自治会
5. 報告書の作製は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。本報告書の編集は同センター文化財専門員 木下晴一が担当した。
6. 報告書の作製にあたって下記の方々の御教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）  
通商産業省工業技術院地質調査所（当時）主任研究官 寒川 旭、京都大学文学部教授 金田章裕、愛媛大学講師 吉田広、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
7. 本報告書で用いる方位の大半は国土座標第IV系の北であり、方位記号のみの場合は国土座標第IV系の北を示す。また、方位記号にT.N.を付すものは真北を示す。標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。遺構は下記の略号により表示している。  
S A 柵列跡    S B 掘立柱建物跡    S D 溝状遺構    S E 井戸跡  
S H 竪穴住居跡    S K 土坑    S P 柱穴跡    S R 自然河川跡    S T 墳墓  
S Z 水田遺構    S X 性格不明遺構
8. 本報告にあたっては、奈良教育大学教授 三辻利一氏に出土須恵器の蛍光X線分析を依頼し、玉稿をいただいた。
9. 挿図の一部に、国土交通省国土地理院5万分の1地形図「高松南部」、2.5万分の1地形図、1962年撮影空中写真、1947年アメリカ空軍撮影空中写真を使用した。

# 本文目次

第1章 調査の経緯と経過	
1. 発掘調査の経過 .....	1
2. 整理調査の経過 .....	3
第2章 立地と環境	
1. 地形環境 .....	7
2. 周辺の遺跡 .....	13
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法と各調査区の概要	
1. 調査の方法 .....	18
2. 調査成果の概要 .....	18
第2節 北地区の調査	
1. 土層 .....	31
2. 遺構・遺物 .....	31
第3節 西地区の調査	
1. 土層 .....	80
2. 遺構・遺物 .....	85
第4節 南地区の調査	
1. 土層 .....	136
2. 遺構・遺物 .....	136
第4章 自然科学的調査の成果	
第1節 土壌中火山灰抽出分析 .....	175
第2節 プラント・オパール分析 .....	181
第3節 空港跡地遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 .....	186
第5章 まとめ	
第1節 遺構の変遷 .....	190
第2節 『弘福寺領讃岐国山田郡田図』との関連 .....	197

# 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図 (1/50,000) ……………	1	第60図	SXa02 平面図、出土遺物実測図 ……………	67
第2図	報告地区割図 ……………	2	第61図	北地区 中世包含層 断面図 ……………	68
第3図	調査区割図 ……………	5	第62図	北地区 中世包含層 出土遺物実測図 (その1) ……………	68
第4図	高松平野 1m等高線図 ……………	8	第63図	北地区 中世包含層 出土遺物実測図 (その2) ……………	69
第5図	遺跡周辺の微地形分類予察図 ……………	9	第64図	北地区 中世包含層 出土遺物実測図 (その3) ……………	69
第6図	発掘された微高地、旧河道 ……………	11	第65図	SKa18~22 平・断面図 ……………	70
第7図	「旧中州」説明図 ……………	12	第66図	SKa19、20 出土遺物実測図 ……………	71
第8図	遺跡周辺の主な遺跡(1) ……………	14	第67図	SKa23 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	72
第9図	遺跡周辺の主な遺跡(2) ……………	16	第68図	SKa24 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	73
第10図	北地区 遺構配置図 ……………	21	第69図	SDa11、12 出土遺物実測図 ……………	73
第11図	西地区 遺構配置図 ……………	23	第70図	SDa13 断面図、出土遺物実測図 ……………	74
第12図	南地区 遺構配置図 ……………	25	第71図	SDa14~16 出土遺物実測図 ……………	74
第13図	北地区 南壁断面 (その1) ……………	27	第72図	池台池、SDa17、18 出土遺物実測図 ……………	75
第14図	北地区 南壁断面 (その2) ……………	28	第73図	SKa25~34 平・断面図 ……………	76
第15図	北地区 南壁断面 (その3) ……………	29	第74図	北地区 包含層等 出土遺物実測図 (その1) ……………	77
第16図	北地区 南壁断面 (その4) ……………	30	第75図	北地区 包含層等 出土遺物実測図 (その2) ……………	78
第17図	SKa01 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	31	第76図	試掘トレンチ 出土遺物実測図 ……………	79
第18図	SKa02 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	32	第77図	西地区 南壁断面 (その1) ……………	81
第19図	SKa03 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	32	第78図	西地区 南壁断面 (その2) ……………	82
第20図	SKa04 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	33	第79図	西地区 西壁断面 (その1) ……………	83
第21図	SKa05 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	34	第80図	西地区 西壁断面 (その2) ……………	84
第22図	SKa06 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	35	第81図	西地区 西壁断面 (その3) ……………	85
第23図	SKa07 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	36	第82図	SKa35 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	85
第24図	SKa08 平・断面図 ……………	36	第83図	SKa36 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	86
第25図	SKa08 出土遺物実測図 ……………	37	第84図	SKa37 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	86
第26図	SKa09 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	38	第85図	SKa38 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	87
第27図	SKa10 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	39	第86図	SKa39 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	87
第28図	SKa11 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	39	第87図	SKa40 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	88
第29図	SKa12 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	40	第88図	SHa02 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	89
第30図	SKa13 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	40	第89図	SHa03 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	90
第31図	SKa14 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	41	第90図	SXa03 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	91
第32図	SKa15~17 平・断面図 ……………	41	第91図	SXa04 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	92
第33図	SRa01 断面図 ……………	43	第92図	SDa22 断面図、出土遺物実測図 ……………	93
第34図	SRa01 上層出土遺物実測図 ……………	44	第93図	SDa23 断面図、出土遺物実測図 ……………	94
第35図	SRa01 出土遺物実測図 (その1) ……………	45	第94図	SRa03 出土遺物実測図 (その1) ……………	95
第36図	SRa01 出土遺物実測図 (その2) ……………	46	第95図	SRa03 出土遺物実測図 (その2) ……………	96
第37図	SRa02 断面図 ……………	47	第96図	SRa03 出土遺物実測図 (その3) ……………	97
第38図	SRa02 出土遺物実測図 (その1) ……………	48	第97図	SRa03 出土遺物実測図 (その4) ……………	98
第39図	SRa02 出土遺物実測図 (その2) ……………	49	第98図	SRa03 出土遺物実測図 (その5) ……………	99
第40図	SRa02 出土遺物実測図 (その3) ……………	50	第99図	SRa03 上面噴砂 平・断面図、 粒径加積曲線図 ……………	100
第41図	SRa02 出土遺物実測図 (その4) ……………	51	第100図	SHa04 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	101
第42図	SRa02 出土遺物実測図 (その5) ……………	52	第101図	SHa05 平・断面図、貼床除去後平面図 ……………	102
第43図	SHa01 平・断面図 ……………	53	第102図	SHa05 遺物出土状況 平・断面見通し図 ……………	102
第44図	SHa01 出土遺物実測図 ……………	54	第103図	SHa05 出土遺物実測図 ……………	103
第45図	SZa01、02 平面図 ……………	56	第104図	SHa06 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	104
第46図	SZa01関連 出土遺物実測図 ……………	57	第105図	SHa07 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	104
第47図	SZa01、02関連 出土遺物実測図 ……………	58	第106図	SHa08 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	105
第48図	SEa01、SDa01 平・断面図 ……………	59	第107図	SHa09 平・断面図 ……………	106
第49図	SEa01 出土遺物実測図 ……………	60	第108図	SHa09 遺物出土状況平面図 ……………	107
第50図	SDa01、02 断面図、出土遺物実測図 ……………	61	第109図	SHa09 出土遺物実測図 ……………	108
第51図	SDa03 断面図、出土遺物実測図 ……………	62	第110図	SHa10 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	109
第52図	SDa04 断面図、出土遺物実測図 ……………	63	第111図	SDa24 断面図、出土遺物実測図 ……………	110
第53図	SBa01 平・断面図 ……………	63	第112図	P-4付近包含層 遺物出土位置図、土層柱状	
第54図	北地区 柱穴出土遺物実測図 ……………	64			
第55図	SDa05~07 断面図、出土遺物実測図 ……………	64			
第56図	SDa08 断面図、出土遺物実測図 ……………	65			
第57図	SDa09 断面図 ……………	65			
第58図	SDa10 断面図、出土遺物実測図 ……………	65			
第59図	SXa01 平・断面図、出土遺物実測図 ……………	66			

	図、粒径ヒストグラム……………	111
第113図	P-4付近包含層 出土遺物実測図(その1)…	112
第114図	P-4付近包含層 出土遺物実測図(その2)…	113
第115図	P-4付近包含層 出土遺物実測図(その3)…	114
第116図	SBa02 平・断面図、出土遺物実測図 …	115
第117図	SAa01 平・断面図 ……………	116
第118図	SAa02 平・断面図 ……………	116
第119図	SAa03 平・断面図 ……………	116
第120図	西地区 柱穴出土遺物実測図……………	117
第121図	SKa41 平・断面図 ……………	117
第122図	SEa02 平・断面図 ……………	117
第123図	SDa25、26 断面図、出土遺物実測図 …	118
第124図	SDa27 断面図、出土遺物実測図 ……………	118
第125図	SDa28 断面図 ……………	119
第126図	SDa28 出土遺物実測図 ……………	120
第127図	SDa29 断面図、出土遺物実測図 ……………	120
第128図	SDa30 断面図 ……………	120
第129図	SDa31 断面図、出土遺物実測図 ……………	121
第130図	SXa05、06 断面図、出土遺物実測図 …	121
第131図	SBa03 平・断面図 ……………	122
第132図	SBa04 平・断面図 ……………	122
第133図	SKa42 平・断面図 ……………	122
第134図	SKa43~47、SXa07 平・断面図 ……………	123
第135図	SKa48~51 平・断面図、SDa32~35 断面図……………	124
第136図	SXa08、09 断面図、SKa52~54 平・断面図……………	125
第137図	SKa55、56 平・断面図 ……………	126
第138図	SKa57 平・断面図 ……………	126
第139図	SKa58~63 平・断面図 ……………	127
第140図	SKa63 出土遺物実測図 ……………	128
第141図	SKa64、65 平・断面図 ……………	128
第142図	SKa66~68 平・断面図 ……………	129
第143図	SDa36 断面図 ……………	129
第144図	西地区 包含層①出土遺物実測図……………	130
第145図	西地区 包含層②出土遺物実測図……………	131
第146図	西地区 上面精査中出土遺物実測図 (その1) ……………	131
第147図	西地区 上面精査中出土遺物実測図 (その2) ……………	132
第148図	南地区 北壁断面図(その1) ……………	133
第149図	南地区 北壁断面図(その2) ……………	134
第150図	南地区 北壁断面図(その3) ……………	135
第151図	SHa11 平・断面図 ……………	136
第152図	SKa69 平・断面図、出土遺物実測図 …	137
第153図	SKa70 平・断面図、出土遺物実測図 …	137
第154図	SKa71 平・断面図、出土遺物実測図 …	138
第155図	SKa72 平・断面図、出土遺物実測図 …	138
第156図	SKa73 平・断面図、出土遺物実測図 …	139
第157図	SKa74 平・断面図、出土遺物実測図 …	140
第158図	SKa75 平・断面図、出土遺物実測図 …	140
第159図	SKa76 平・断面図、出土遺物実測図 …	141
第160図	SHa12 平・断面図、出土遺物実測図 …	142
第161図	U-23付近の柱穴 平面図 ……………	142
第162図	SKa77 出土遺物状況図、断面図 ……………	143
第163図	SKa77 出土遺物実測図(その1) ……………	144
第164図	SKa77 出土遺物実測図(その2) ……………	145
第165図	SKa77 出土遺物実測図(その3) ……………	146
第166図	SKa77 出土遺物実測図(その4) ……………	147

第167図	SKa77 出土遺物実測図(その5) ……………	148
第168図	SKa77 出土遺物実測図(その6) ……………	148
第169図	STa01 平・断面図、出土遺物実測図 …	149
第170図	STa02 平・断面図 ……………	150
第171図	STa03、04 平・断面図 ……………	151
第172図	STa03主体部平・断面図 ……………	151
第173図	STa03出土遺物実測図 ……………	151
第174図	STa04 出土遺物実測図 ……………	152
第175図	STa05 平・断面図 ……………	153
第176図	STa05 遺物出土位置図 ……………	154
第177図	STa05 出土遺物実測図 ……………	155
第178図	STa05内幕拵 平・断面図 ……………	155
第179図	STa06 平・断面図 ……………	156
第180図	STa07 平面・見通し断面、出土遺物実測図 ……………	157
第181図	SDa37 断面図 ……………	158
第182図	SDa38 断面図、出土遺物実測図 ……………	158
第183図	SDa39 断面図、出土遺物実測図 ……………	159
第184図	SDa40 断面図、出土遺物実測図 ……………	159
第185図	SDa41 断面図、出土遺物実測図 ……………	160
第186図	SDa42、43 断面図、出土遺物実測図 …	160
第187図	SDa44 断面図、出土遺物実測図 ……………	161
第188図	SDa45 断面図 ……………	161
第189図	SDa46 断面図、出土遺物実測図 ……………	162
第190図	SAa04、05 平・断面図、周辺出土の遺物 実測図……………	163
第191図	U-27付近柱穴出土遺物実測図 ……………	164
第192図	STa08 平・断面図、出土遺物実測図 …	165
第193図	SDa47~49 断面図、出土遺物実測図 …	166
第194図	SDa50 出土遺物実測図 ……………	166
第195図	SDa51 断面図、出土遺物実測図 ……………	167
第196図	SDa52 断面図、出土遺物実測図 ……………	167
第197図	SDa53 断面図、出土遺物実測図 ……………	168
第198図	SDa54 断面図 ……………	168
第199図	SDa55 断面図、出土遺物実測図 ……………	169
第200図	SDa56 断面図、出土遺物実測図 ……………	169
第201図	SKa78~80、SDa57、58 平・断面図 …	170
第202図	SKa81~86 平・断面図 ……………	171
第203図	SKa87~90 平・断面図 ……………	172
第204図	SKa91 平・断面図 ……………	173
第205図	SDa59 断面図 ……………	173
第206図	SKa92~94 平・断面図 ……………	173
第207図	南地区 包含層出土遺物実測図……………	174
第208図	南地区 機械掘削、攪乱 出土遺物実測図 ……………	174
第209図	火山灰層検出位置断面図……………	175
第210図	試料採取層準土層模式柱状図および 分析結果……………	178
第211図	土層断面図と分析試料の採取箇所……………	182
第212図	イネのプラント・オパールの検出状況…	184
第213図	主な植物の推定生産量と変遷……………	184
第214図	K-Ca、Rb-Sr指紋図 ……………	186
第215図	伽耶群—陶邑群間の2群間判別分析…	187
第216図	陶邑群—三郎池群間の2群間判別分析…	187
第217図	遺構変遷図(その1) ……………	191
第218図	遺構変遷図(その2) ……………	193
第219図	遺構変遷図(その3) ……………	195
第220図	「田図」と検出遺構の関係図……………	199
第221図	「田図」の構成……………	202



## 表 目 次

<p>第1表 a地区 各調査区の概要 …………… 2</p> <p>第2表 発掘調査および整理調査の体制…………… 3</p> <p>第3表 空港跡地遺跡 各地区の調査概要…………… 4</p> <p>第4表 土壌中火山灰(火山ガラス)抽出分析処理 順序表 ……………177</p>	<p>第5表 各遺跡より検出した火山ガラスの特性と琵琶湖ボー リングの火山灰、広域テフラの特性との比較 ……180</p> <p>第6表 空港跡地遺跡における火山ガラス濃集層準と その特徴 ……………180</p> <p>第7表 プラント・オパール分析結果 ……………182</p> <p>第8表 蛍光X線胎土分析データ ……………189</p>
---	---

## 図 版 目 次

<p>図版1 遺跡周辺空中写真(1) (アメリカ空軍1948年撮影)</p> <p>図版2 遺跡周辺空中写真(2) (国土地理院1962年撮影)</p> <p>図版3 空港跡地遺跡全景(西北上空から) 空港跡地遺跡a地区全景(東上空から)</p> <p>図版4 北地区西端付近空中写真(左が北)</p> <p>図版5 北地区 SZa01 空中写真(左が北)</p> <p>図版6 北地区全景(南上空から) 北地区全景(東から)</p> <p>図版7 北地区 SKa01 土器出土状況 北地区 SKa02 土器出土状況 北地区O-17完掘全景(南から) 北地区 SKa04 断面(東から) 北地区 SKa10 土器出土状況(北から)</p> <p>図版8 北地区 SRa01 (西から) 北地区 SRa01 断面A-A' 北地区 SRa02 断面(西から) 北地区 SHa01 掘削状況(西から) 北地区 SHa01 掘削状況(南東から)</p> <p>図版9 北地区全景(西から) 北地区全景(南から) 北地区全景(南から) 北地区 SZa01 2-3間水口 北地区 Sza01 A-A' 断面</p> <p>図版10 北地区 O-21 完掘全景(南から) 北地区 SEa01 完掘(西から) 北地区 SEa01 B-B' 断面(西から) 北地区完掘全景(東から) 北地区 SDa01、02 断面(東から)</p> <p>図版11 北地区 SBa01 完掘(東から) 北地区 SZa02 検出状況(東から) 北地区 SXa01 検出状況(北東から) 北地区 SXa02 (南西から) 北地区 中世包含層A-A' 断面(北から) 北地区 SKa23 断面(南から) 北地区 SDa15 検出状況(南から) 北地区 SDa15 ゲタ出土状況(南西から)</p> <p>図版12 西地区完掘状況(南から) 西地区完掘状況(東から)</p> <p>図版13 西地区 SKa40 断面(南から) 西地区 SKa40 遺物出土状況(東から) 西地区 SKa37 断面(北から) 西地区 SHa02 掘削状況(西北から) 西地区 SHa02 掘削状況(西から)</p> <p>図版14 西地区 SHa03 完掘状況(北から) 西地区 SXa03 掘削状況(東から)</p> <p>図版15 西地区 SDa23付近 掘削状況(西から)</p>	<p>西地区調査区北壁 SDa23 断面(南から)</p> <p>西地区 SDa22 遺物出土状況(南から)</p> <p>西地区 SRa03 遺物出土状況(南から)</p> <p>西地区 SRa03 完掘状況(西から)</p> <p>図版16 西地区 SHa05 遺物出土状況 西地区 SHa05 掘削状況(東から) 西地区 SHa05 掘削状況(東から) 西地区 SHa05 断面(西壁) 西地区 SHa05 遺物出土状況</p> <p>図版17 西地区 SHa04 断面(東から) 西地区 SHa06 遺物出土状況(南から) 西地区 SHa06 断面(西から) 西地区 SHa07 断面(北から) 西地区 SHa07 遺物出土状況(東から)</p> <p>図版18 西地区 SHa08 完掘状況(南から) 西地区 SHa08 完掘状況(東から) 西地区 SHa08・SP03 遺物出土状況 西地区 SHa09 完掘状況(北から) 西地区 SHa09 遺物出土状況(南南西から)</p> <p>図版19 西地区 SHa09 断面(北東から) 西地区 SDa24 完掘状況(東から) 西地区 SDa24 断面(東から) 西地区包含層遺物出土状況(南から) 西地区包含層遺物出土状況(南から)</p> <p>図版20 西地区 SBa05付近(北から) 西地区 U-4.5付近のSP(西から) 西地区 SKa41 (東南から) 西地区 SEa02 断面(南から) 西地区 SEa02 完掘状況(南から)</p> <p>図版21 西地区 SDa26、25 掘削状況(東から) 西地区調査区北壁 SDa28 断面(南から) 西地区 SDa28付近 掘削状況(北から) 西地区 SBa04 完掘状況(南から) 西地区西壁 池台池南肩 断面(東から)</p> <p>図版22 西地区 SRa03 上面砂脈と柱穴(東から) 西地区 SDa31 断面(南から) 西地区 SRa03 砂脈断面 西地区 SDa30 掘削状況(北から)</p> <p>図版23 南地区 周溝墓群(西から) 南地区全景(東から) 南地区全景(西から) 南地区全景(東から)</p> <p>図版24 南地区 SKa71 (東から) 南地区 SKa72 (東から) 南地区 SKa73 遺物出土状況(東から) 南地区 SHa11 (北から) 南地区 SKa85 断面(西から)</p>
---	---

- |      |                                   |                            |
|------|-----------------------------------|----------------------------|
| 図版25 | 南地区 SKa77 廃棄土器群出土状態<br>(第1面)(西から) | 南地区 STa03 主体部棺内 完掘状況       |
|      | 南地区 SKa77 廃棄土器群<br>(第3面)(西から)     | 南地区 STa03 完掘状況(東から)        |
|      | 南地区 SKa77 廃棄土器群<br>(第2面)(西から)     | 南地区 STa04 北壁断面(南から)        |
|      | 南地区 SKa77 廃棄土器群<br>(第4面)(西から)     | 南地区 STa04 完掘状況(南から)        |
|      | 南地区 SKa77 完掘状況(西から)               | 図版29 南地区 STa04 遺物出土状況      |
| 図版26 | 南地区 STa07(北から)                    | 南地区 STa05 遺物出土状況(東から)      |
|      | 南地区 STa07(北から)                    | 南地区 STa05 完掘状況(北西から)       |
|      | 南地区 SHa12 焼失面(北から)                | 南地区 STa05 遺物出土状況(北西から)     |
|      | 南地区 SHa12(北から)                    | 南地区 STa05内SK 完掘状況(北から)     |
|      | 南地区全景(西から)                        | 図版30 南地区 STa06以東 完掘状況(西から) |
| 図版27 | 南地区 STa01~04付近 空中写真<br>(合成、上が北)   | 南地区 SDa44 断面(東から)          |
|      | 南地区 STa05、06付近 空中写真<br>(合成、上が北)   | 南地区 SDa46中層 遺物出土状況(東から)    |
| 図版28 | 南地区 STa02 完掘状況(東から)               | 図版31 南地区 SPa20 土器出土状況(南から) |
|      | 南地区 STa03 完掘状況(南から)               | 南地区 SDa41 南壁断面(北から)        |
|      | 南地区 STa03 主体部掘り方断面(北から)           | 南地区 SDa55 土器出土状況(東から)      |
|      | 南地区 STa03 主体部棺内断面(北から)            | 南地区 SDa40 断面(南から)          |
|      |                                   | 南地区 STa08(南東から)            |
|      |                                   | 図版32 遺物写真                  |
|      |                                   | ~48                        |
|      |                                   | 図版49 火山灰 顕微鏡写真             |
|      |                                   | 図版50 プラント・オパール顕微鏡写真        |

## 付 図 目 次

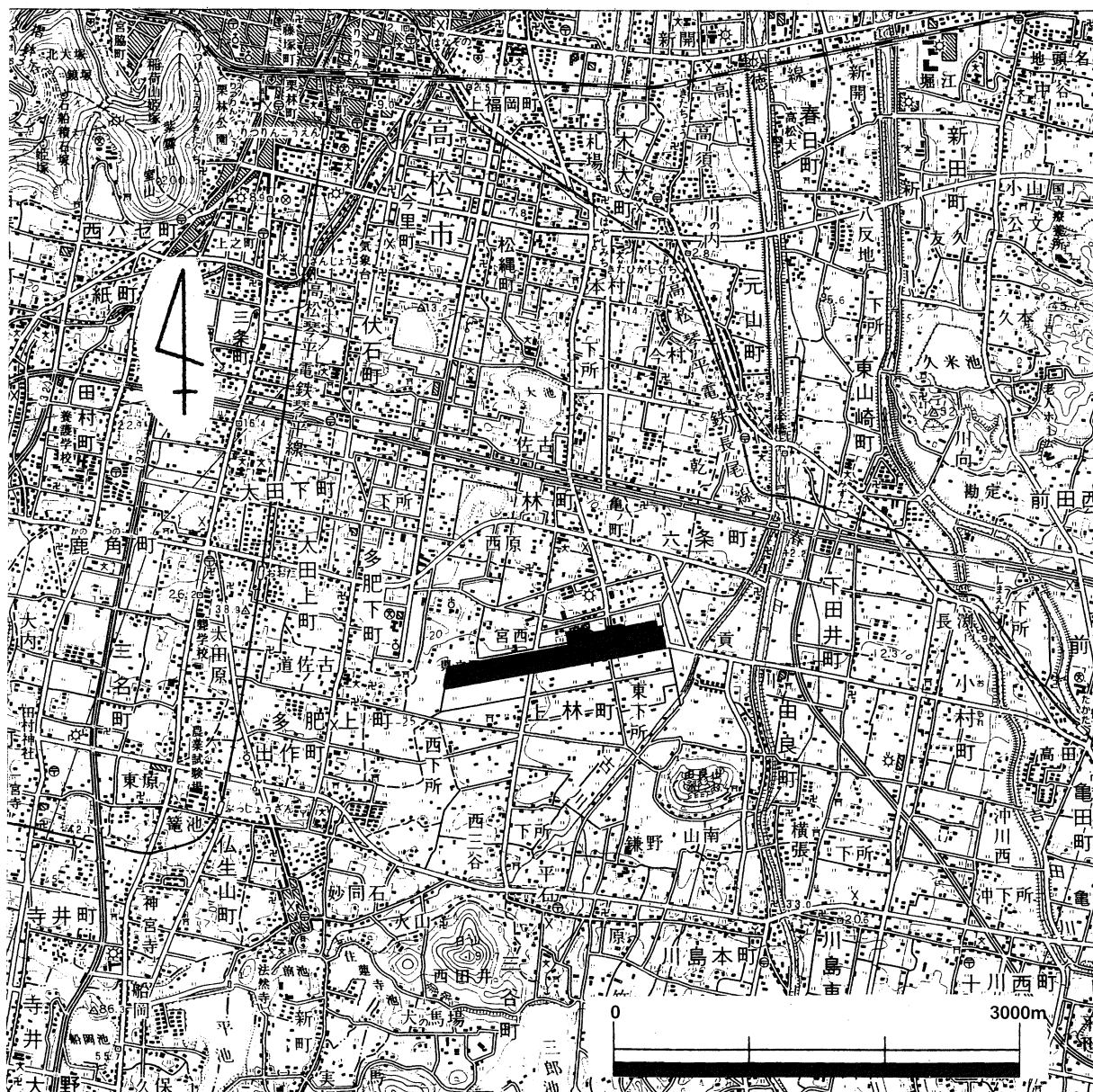
付図1 遺構配置図

付図2 空港跡地遺跡と条里型地割

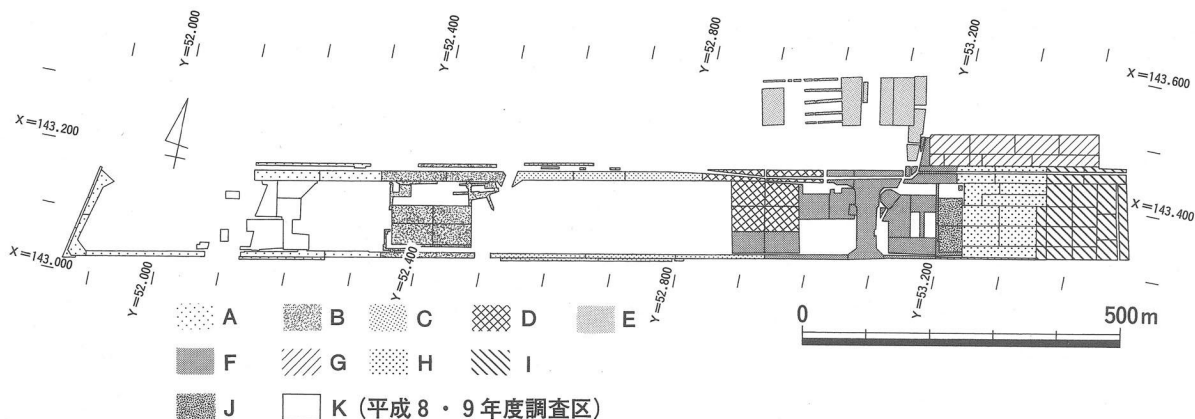
# 第1章 調査の経緯と経過

## 1. 発掘調査の経過

空港跡地遺跡は高松市林町に所在する。第2次世界大戦末期に陸軍の軍用飛行場として建設が進められ、戦後、一部が高松空港として供用された。しかし、路線の拡大や航空機のジェット化などのため手狭となり、平成元年12月に香川郡香南町の新空港に移転した。これにより約32万haの広大な跡地が生まれ、香川県は空港跡地開発整備事業計画を策定した。香川県教育委員会は、空港跡地の埋蔵文化財の包蔵状況やその取扱いについて検討を進め、遺跡の所在が確認された範囲については財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに調査を委託することとなった。詳細な経緯、経過については、本報告書シリーズ第1冊を参照されたい。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000) (国土地理院地形図「高松南部」)



第2図 報告地区割図 (1/12,000)

以下、本報告書に所収する遺跡西半部のa地区の調査(平成3～5年度)の経緯を記す。

平成3年度

空港跡地遺跡の発掘調査が本格化した年度である。年度前半は1班、後半は2班体制で香川県立図書館・文書館用地(I-1～4区、7,000m<sup>2</sup>)および空港跡地の北辺を東西に走る県道成合町六条線用地のうちI-6～9区(9,200m<sup>2</sup>)、空港跡地の南辺を東西に走る市道上林町六条線用地のうちI-5区(1,500m<sup>2</sup>)の合わせて約17,700m<sup>2</sup>が調査された。また、年度後半に1班体制で前述の市道上林町六条線用地のうちI-10、11区(1,760m<sup>2</sup>)、II-8～11区(4,520m<sup>2</sup>)が調査された。調査はいずれも工事請負方式で行った。

本報告書は、I-8～11区の調査成果を収録する。

平成4年度

年度前半に1班が、市道上林町六条線用地の西半と空港跡地の西限を南北に走る市道林多肥上町線用地(I-14～16区、3,720m<sup>2</sup>)と平成3年度に調査したI-10区の南側のI-17区(650m<sup>2</sup>)を調査した。また、年度後半に1班が、II-14～16区と平成3年度調査のI-8、9区の北側(I-13区、720m<sup>2</sup>)を調査した。前者は工事請負、後者は直営方式で実施した。

本報告書は、I-13～17区の調査成果を収録する。

地区名	調査年度	面積(m <sup>2</sup> )	調査担当	出土遺物量
I-8	平成3年度	2,300	森 格也・山本主税・間瀬 香	コンテナ10箱
I-9	平成3年度	2,300	山下平重・真鍋嘉宏・(高橋佳緒里)	コンテナ28箱
I-13	平成4年度	720	片桐孝浩・清水 渉・森澤千尋	コンテナ16箱
I-14、15	平成4年度	3,720	木下晴一・真下拓也・安藤くに子	コンテナ15箱
I-16	平成4年度			コンテナ21箱
I-22	平成5年度	750	山元素子・山本主税・森澤千尋	コンテナ10箱
I-10	平成3年度	1,760	森下英治・大西義則・(高橋佳緒里)	コンテナ15箱
I-11	平成3年度			コンテナ24箱
I-17	平成4年度	650	木下晴一・真下拓也・安藤くに子	コンテナ6箱
合計		12,200		コンテナ145箱

第1表 a地区 各調査区の概要

平成5年度

前述のI-14～16区の西側（I-22区、750m<sup>2</sup>）の調査が直営方式で行われている。

2. 整理調査の経過

空港跡地遺跡の整理調査は、第2図に示すとおり遺跡を11の区画に分割し、平成6年度より順次行っている。これまでにC地区・E地区・I地区・F地区の報告書が刊行された。本報告書に掲載する遺跡西半部a地区の整理調査は、平成12年4月1日より平成13年3月31日まで実施した。発掘調査および整理調査に係る体制は、第2表に示すとおりである。

発掘調査

整理調査

香川県教育委員会

平成3年度			平成4年度			平成5年度			平成12年度		
課長	中村 仁		課長	中村 仁		課長	中村 仁		課長	小原 克己	
主幹	菅原 良弘		主幹	菅原 良弘		主幹	菅原 良弘		課長補佐	小国 史郎	
主幹	浮田 清市		課長補佐	小原 克己		主幹	小原 克己		副主幹	廣瀬 常雄	
課長補佐	小原 克己		係長	宮内 憲生		係長	源田 和幸		係長	中村 禎伸	
係長	宮内 憲生		係長	源田 和幸		主任主事	櫻木 新士		主任主事	三宅 陽子	
主任主事	櫻木 新士		主任主事	櫻木 新士		主任主事	石川 恵三子		主任主事	亀田 幸一	
主任主事	石川 恵三子		主任主事	石川 恵三子		主任主事	藤原 和子		主任主事	西岡 達哉	
係長	藤好 史郎		係長	藤好 史郎		係長	藤好 史郎		文化財専門員	森 格也	
主任技師	岩橋 孝		主任技師	國木 健司		主任技師	國木 健司		文化財専門員	宮崎 哲治	
主任技師	北山 健一郎		主任技師	北山 健一郎		主任技師	森下 英治				

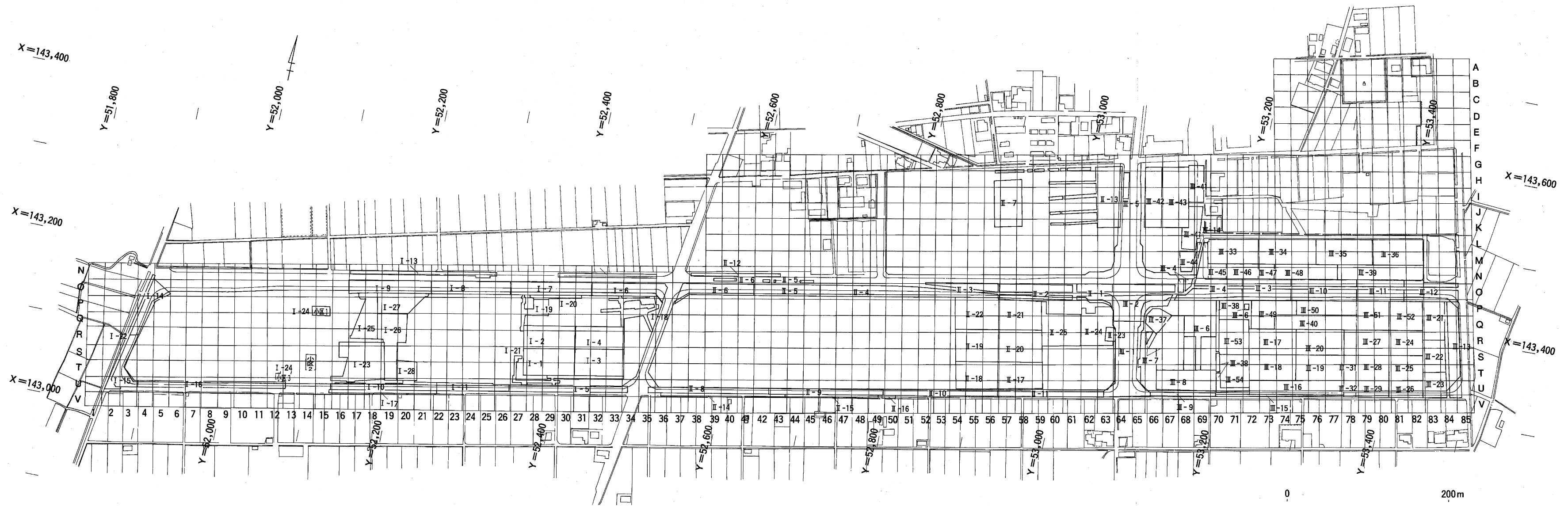
財団法人香川県埋蔵文化財センター（本報告に関連する調査区のみ）

所長	松本 豊胤		所長	松本 豊胤		所長	松本 豊胤		所長	小原 克己	
次長	安藤 道雄		次長	市原 敏則		次長	真鍋 隆幸		次長	川原 裕章	
係長	加藤 正司		係長	土井 茂樹		係長	土井 茂樹		副主幹	大西 誠治	
係長	土井 茂樹		係長	今田 修		係長	上林 和明		係長	新 一郎	
主査	山地 修		主任主事	斉藤 正好		主任主事	斉藤 政好		主査	山本 和代	
係長	今田 修		主任主事	糸目 末夫		主任主事	西村 厚二		主任文化財専門員	大山 眞充	
主任主事	斉藤 正好		主任主事	大山 眞充		主任主事	糸目 末夫		文化財専門員	木下 晴一	
参事	篠丸 博		主任技師	片桐 孝治		参事	大山 眞充				
係長	廣瀬 常雄		主任技師	真下 拓也		主任技師	山元 素子				
主任技師	大西 義則		技師	木下 晴一		技師	山本 主税				
主任技師	真鍋 嘉宏		技師	清水 渉		調査技術員	森澤 千尋				
技師	山本 主税		調査技術員	森澤 千尋							
技師	森 格也		調査技術員	安藤 くに子							
技師	山下 平重										
技師	森下 英治										
調査技術員	高橋 佳緒										
調査技術員	間瀬 香										

第2表 発掘調査および整理調査の体制

地区名	面積(m <sup>2</sup> )	主  な  遺  構	主な遺物	報 告 書
A地区	12,200	弥生時代 竪穴住居、溝、土坑、自然河川 古墳時代 竪穴住居、前方後円・前方後方・方形周溝墓 古 代 溝、土坑、水田 中 世 溝、土坑、水田 近 世 溝、土坑		本報告書
B地区	16,033	弥生時代 竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑 古墳時代 竪穴住居 古 代 掘立柱建物、溝、土坑墓 中 世 掘立柱建物、溝、土坑、井戸 近 世 溝、土坑		未 刊
C地区	11,890	弥生時代 竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑 古墳時代 竪穴住居、掘立柱建物、土坑 古 代 掘立柱建物、溝、井戸、土坑 中 世 掘立柱建物、溝、土坑、井戸、自然河川 近 世 掘立柱建物、溝、土坑	二 彩 陶 器	『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊空港跡地遺跡Ⅰ』1996.12
D地区	11,171	弥生時代 掘立柱建物、溝 古 代 溝 中～近世 掘立柱建物、溝、土坑		未 刊
E地区	14,599	弥生時代 掘立柱建物、溝、土坑 古墳時代 溝 中 世 掘立柱建物 近 世 溝、土坑、井戸、出水状遺構	人形土製品	『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊空港跡地遺跡Ⅱ』1997.9
F地区	27,836	弥生時代 竪穴住居、溝 中 世 掘立柱建物、溝、土坑、井戸、出水状遺構 近 世 掘立柱建物、溝、土坑、井戸		『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊空港跡地遺跡Ⅳ』2000.3
G地区	14,676	弥生時代 竪穴住居、掘立柱建物、溝、粘土採掘土坑群 古 代 溝 中 世 掘立柱建物、溝、土坑、井戸 近 世 掘立柱建物、溝、土坑		未 刊
H地区	22,855	弥生時代 竪穴住居、掘立柱建物、溝、出水状遺構 古 代 溝 中 世 掘立柱建物、溝 近 世 溝、土坑、井戸	鋏形木製品	未 刊
I地区	16,725	弥生時代 掘立柱建物、自然河川 古 代 掘立柱建物、溝、土坑 中 世 掘立柱建物、溝、土坑 近 世 掘立柱建物、溝、土坑		『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊空港跡地遺跡Ⅲ』1998.10
J地区	2,780	古 代 掘立柱建物、溝 中 世 掘立柱建物、土坑 近 世 掘立柱建物、溝、土坑		『四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告空港跡地遺跡』1997.3
香川大学 工 学 部	12,200	弥生時代 自然河川、溝、土坑 古墳時代 周溝墓 古 代 溝 中 世 溝		未 刊

第3表 空港跡地遺跡各地区の調査概要



第3図 調査区割図 (1/4,000)

## 第2章 立地と環境

空港跡地遺跡の立地と環境については、『空港跡地遺跡Ⅰ』に「大規模調査の成果」、「弘福寺領讃岐国山田郡田図調査の成果」、「関連遺跡について」と題して、御坊川以東、春日川以西の地域についての状況が概観されている。また、『空港跡地遺跡Ⅳ』において、「高松平野中央部における中世地域社会」「中世遺跡群の動向」と題して、中世における地形的な地域区分と庄園・公領の単位の対応についての予察および考古学の方法による中世集落の変遷について検討が為されている。

本章では、空港跡地遺跡西半部周辺の地形について概括するとともに、『空港跡地遺跡Ⅰ』執筆終了（平成8年3月）以後に調査されたり調査成果が公表された遺跡について概要をまとめる。

### 1. 地形環境

空港跡地遺跡は香東川（流路長約33km、流域面積約119.6km<sup>2</sup>）が形成した緩傾斜扇状地上に位置する。高松平野という視点からは山地に近接した平野奥部に位置するが、扇状地上の位置は扇端付近にあたる。

高松平野の地形環境については、高松市教育委員会が主体となって行った『弘福寺領讃岐国山田郡田図』の調査の際に高橋学氏が行った詳細な分析がある<sup>10)</sup>。高橋氏の分析によって多くの知見が明らかにされ、高松平野における遺跡の立地や性格を考えるうえで立脚点となるものである。空港跡地遺跡西半部の地形環境を考えるうえで参考になる点を以下に要約する。

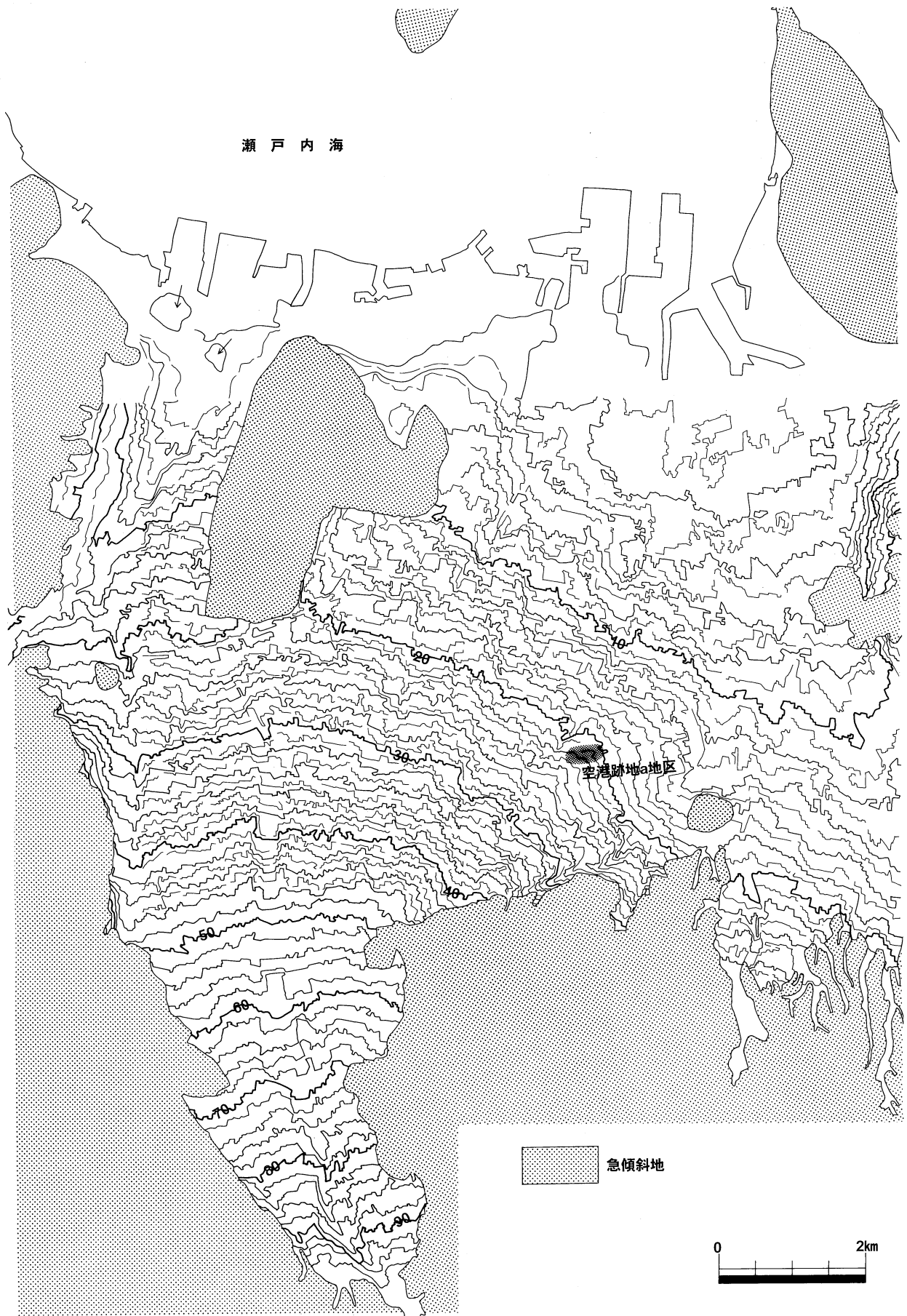
高橋氏によると高松平野の平野域は最も低位の沖積面と更新世に属する4面の段丘面の5面の地形面からなり、これらは成因的に見ると、沖積面は三角州帯と扇状地帯として形成され、更新世段丘は扇状地帯として形成されている。『弘福寺領讃岐国山田郡田図』の比定地である空港跡地遺跡から北側の大池にかけての地域は、扇状地帯として形成された沖積面にあたる。ここでは扇状地を構成する旧中州、旧河道と自然堤防帯を構成する微地形である自然堤防、後背湿地、旧河道とが入り交じって分布している。扇状地帯から自然堤防帯に変化した時期は、従来は縄文時代後期に属するものが多いことが知られていたが、縄文時代前期かそれ以前に遡る部分の存在も明らかとなっている。旧中州や自然堤防といった微高地間の相対的に凹地となっている部分の埋積が、主として縄文時代晩期から弥生時代前期を中心に進行し、条里型地割が施工される頃には極めて平坦な状況になっていたと考えられる。

上記の沖積面は、詳細には洪水の被害を受ける現氾濫原面と既に洪水に遭わなくなった完新世段丘面とに二分される。完新世段丘は弥生時代前期～中期前半に形成されたⅠ面と古代末に形成されたⅡ面が知られているが、高松平野においては今のところⅠ面とⅡ面を区別する崖は確定できていない。

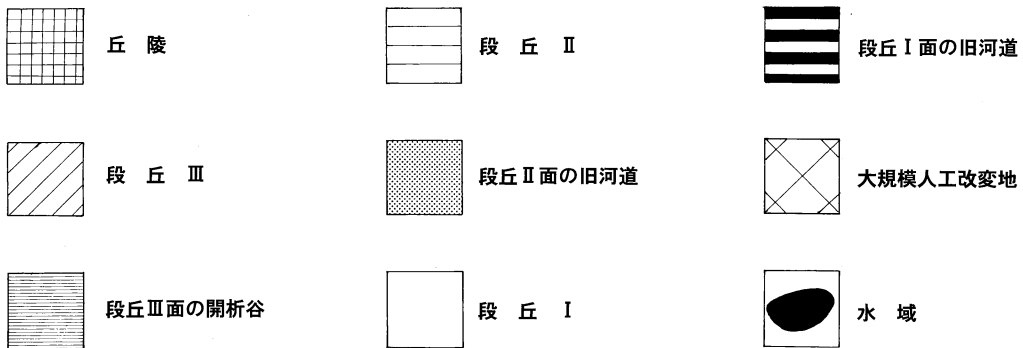
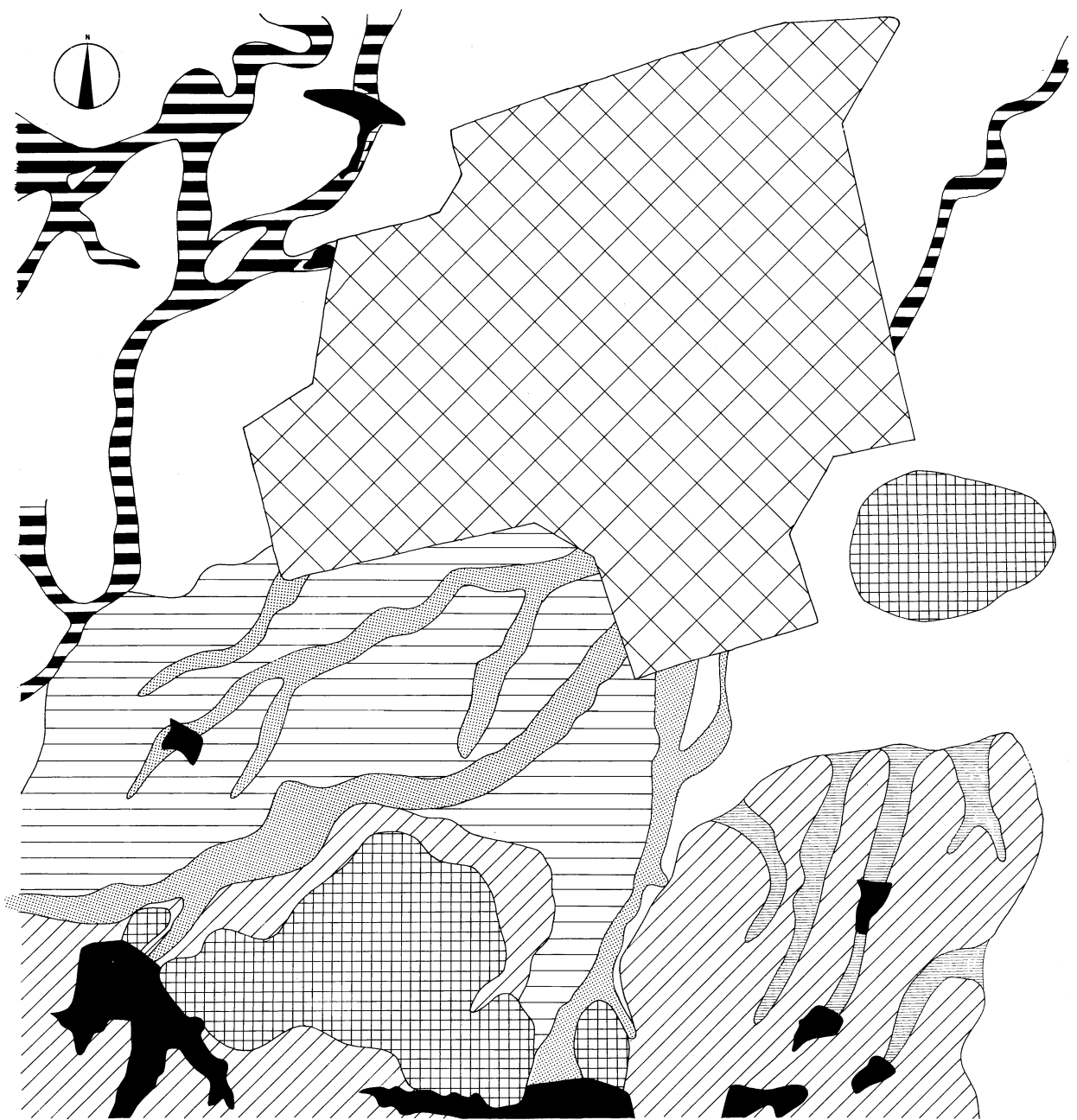
このほか、水不足に陥りやすい高松平野での特色として、例えば19世紀前半の史料では埋没旧中州や埋没自然堤防などの微高地、埋没微高地にあたる場所は、水田化されず畑として土地利用されたり土地条件上の評価が低い、などの諸点が明らかにされている。

高橋氏によって示された地形環境分析の方法を模倣して、微地形分類図が公表されていない空港跡地遺跡南側について検討したのが第5図である。空港跡地遺跡の所在する飛行場造成地の北側と南側は地形面が異なっていると考えられる。空港跡地遺跡の南側は北側に比較して起伏に富み、北側に拵がっている条里型地割（一町方格の地割）がほとんど見られない。この地形面は最も低位の更新世段丘面に相当する。飛行場の造成は、この地形帯の微凹地の標高に合わせるように平坦化されており、微高地部分





第4図 高松平野1m等高線図



第 5 図 遺跡周辺の微地形分類予察図

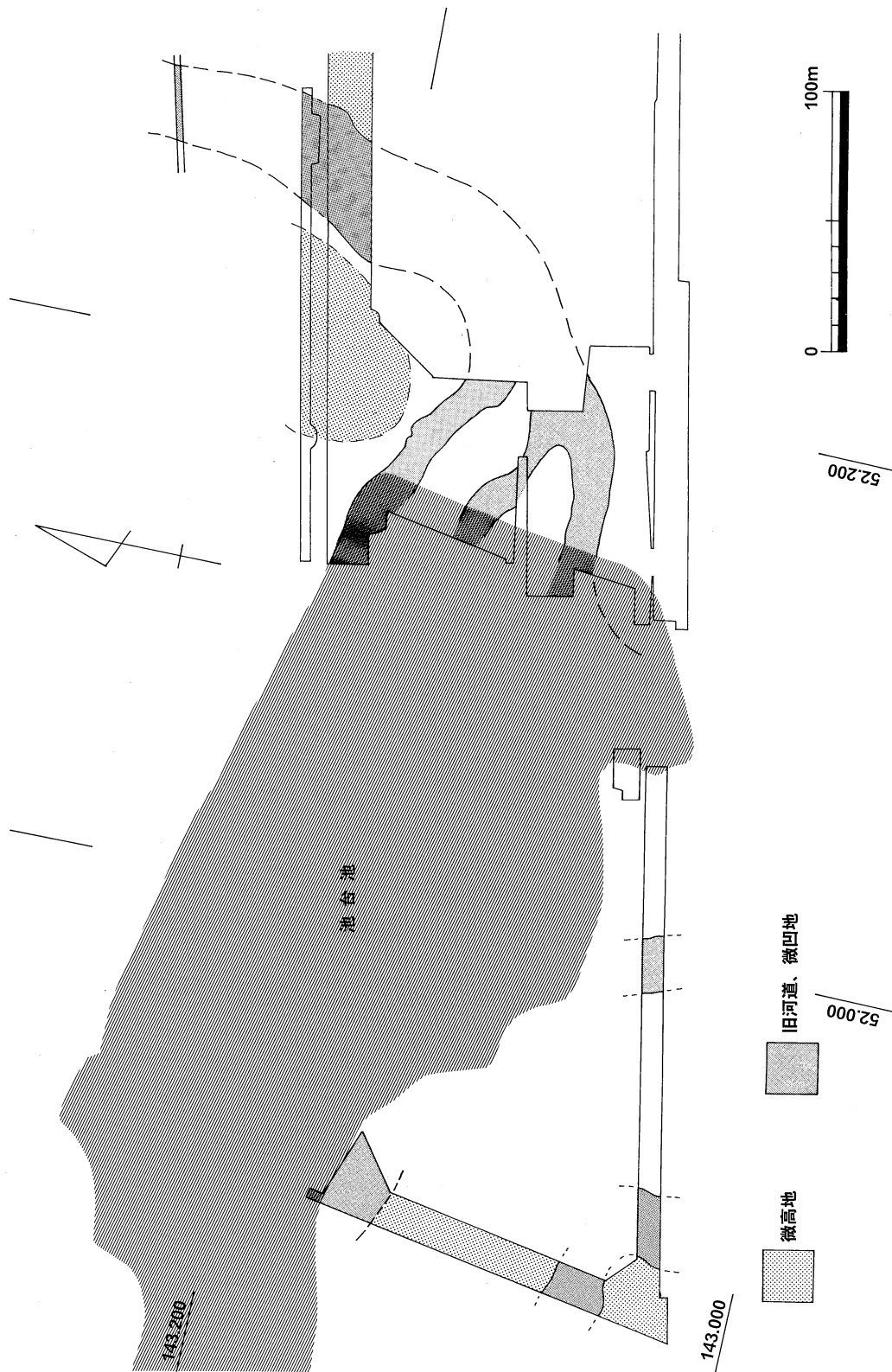
は1～1.5m程度削平されている。空港跡地遺跡周辺では、飛行場造成によってかなり地下げしたという聞き取りが得られるが、空港跡地遺跡の発掘調査では逆に遺構の残存状況は良好で、むしろ大規模な削平を受けている可能性は低いという知見が得られている。恐らく大規模な削平を受けたのは飛行場造成地南側の地形帯部分であり、空港跡地遺跡ではほとんど削平されなかったと考えられる。

この地形面には、現在古川と呼ばれる小河川が流れる幅約100mの旧河道が存在している。この旧河道は、三郎池や住蓮寺池などの溜池が構築された開折谷を合流させながら東北方向に流れ春日川の水系に合流している。上流側は仏生山町勝神社の社前に形成された社前町によって不明瞭となっているが、香東川に連続する可能性が高く、香東川の旧河道の一つと考えられる。この他、この地形帯上には数条の明瞭な旧河道が認められるが、飛行場造成地における流路は不明である。

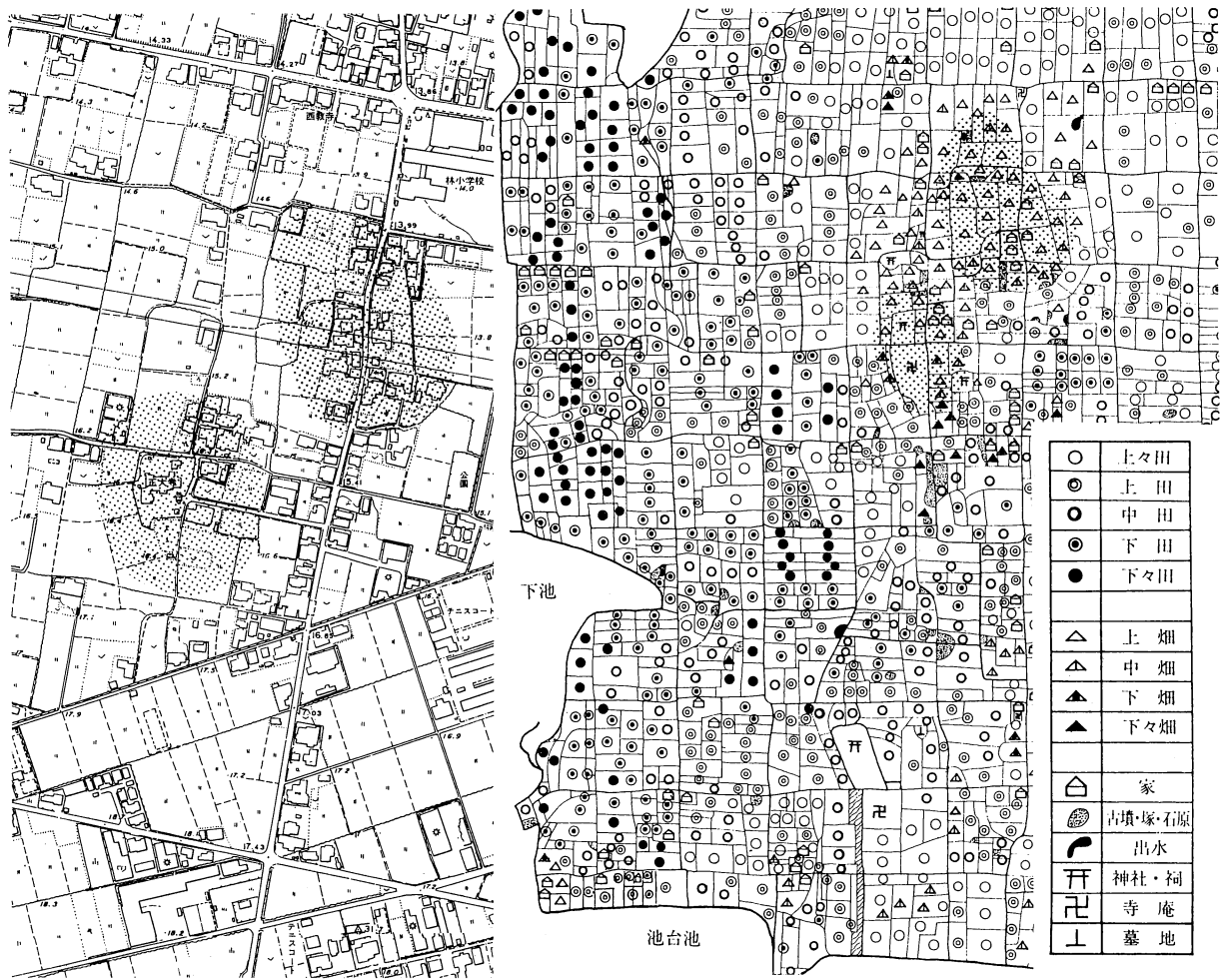
次に、本報告書に所収する空港跡地遺跡西半部の微地形について検討する。第6図は、検出された微高地と旧河道を示したものである。微高地は調査着手時の地表面から比較的浅い位置によく締まった礫層が現れる部分で、旧中州と考えられるものである。(ここで言う微高地とは、香東川扇状地上の旧中州に自然堤防状の堆積物が付着して形成された微地形を指すものとする。したがって『空港跡地遺跡Ⅱ』でいう旧河道によって画される地形面すべてを微高地と呼んでいる点とは異なる。)旧河道は弥生時代前期末～中期初めの遺物を包含するものと弥生時代後期の遺物を包含するものがある。旧河道は断片的に検出されており、また、平成8、9年度に調査された空港跡地遺跡の香川大学工学部用地の旧河道の内容が不明確であるため、どのように連続するのかがはっきりしたことは不明である。可能性として多肥宮尻遺跡から東流し、分ヶ池(池台池)を経て、矢印のように流れる可能性が最も高いと考えられる。また本報告書の西地区と南地区の間も、分ヶ池の池敷が谷状の平面形を為し、その南側の飛行場造成以前の地割(旧公図による)では条里型地割とは異質の斜行する地割が存在することから、旧河道が存在している可能性が考えられる。いずれも現時点では断定できない。

礫層が盛り上がっている旧中州は、この近辺には幾つか所在している。第7図中のスクリーントーンで示すところは周囲の条里型地割に規制されるものとは異質の地割のまとまりが認められる。ここは周囲よりも若干標高が高く、表土中に礫が多数見られ、埋没旧中州と考えられる。「山田郡林村順道図絵」(1819年)ではこの部分が「畑」「家」として土地利用されており、埋没した旧中州や自然堤防が19世紀段階での土地利用や土地条件上の評価にも影響与えているとする先の高橋氏の指摘のとおり状況が見られる。このような微高地が、まとめの章に述べる『弘福寺領讃岐国山田郡田図』に記される小丘状の地形を意味する「壘」に当たる可能性が考えられる。

(1) 高橋学「高松平野の地形環境—弘福寺領山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に—」高松市教育委員会『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』1992年

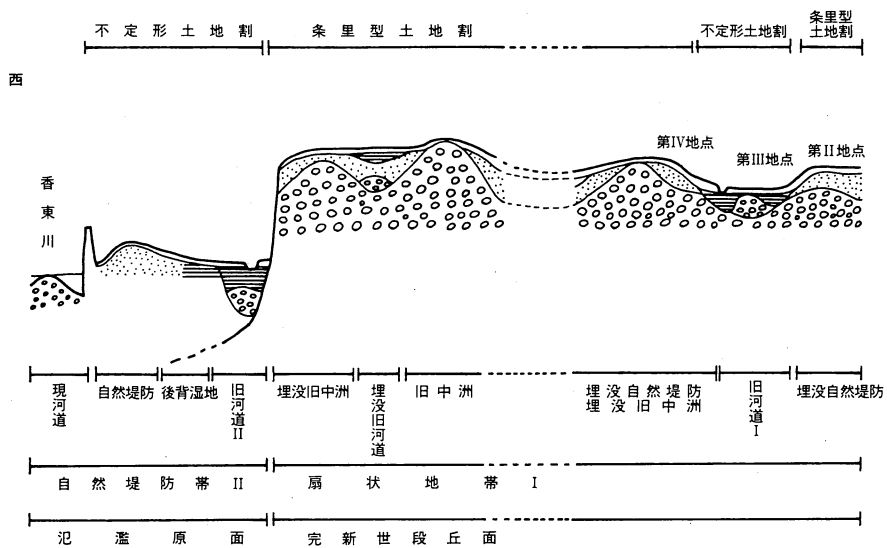


第6図 発掘された微高地・旧河道



高松市都市計画図（縮尺 1/5000）

高松市教育委員会『弘福寺領讃岐国山田郡田図  
比定地域 発掘調査概報Ⅲ』より引用（一部加筆）



高松市教育委員会『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域 発掘調査概報Ⅰ』より引用

第7図 「旧中洲」説明図

## 2. 周辺の遺跡

以下に『空港跡地遺跡Ⅰ』執筆終了（平成8年3月）以後に調査されたり、調査成果が公表された遺跡について概要をまとめる。

### 日暮・松林遺跡

都市計画道路福岡多肥上町線建設地の南北約580m、幅20mの調査で、北端と南端に所在する旧河道に挟まれた微高地上に位置する。北側の旧河道は河床近くから弥生時代中期～後期の遺物が多量に出土し、古代にはほぼ埋没している。南側の旧河道は古墳時代後期より埋没が始まり13世紀頃までに完了している。微高地上では、弥生時代中期の16棟の掘立柱建物、弥生時代後期の9棟の竪穴住居跡などの遺構が検出されている。なお、南側の旧河道からは、本報告書所収の西地区包含層などから出土した古墳時代の須恵器と同時期の土器が出土している。（文献1）

### 多肥松林遺跡（高松土木事務所）

新設高校の南側に位置する。報告書の刊行は次年度以降の予定である。弥生時代後期ごろから埋没をはじめ、平安時代後期ごろにはほぼ埋没したSR03からは、須恵器か黒色土器の底部外面に墨書の見られる土器が24点出土しており注目される。（文献2）

### 多肥松林遺跡（新設高校）

遺跡名は所在地の小字名で命名する慣例があるが、香川県の場合一つの小字の範囲が広いという特徴があり、一つの小字内で複数の開発行為が集中した場合の遺跡名の付け方に苦慮する場合がある。高松市多肥上町の字松林では新設高校、県施設（高松土木事務所）、県道などの建設が集中し、香川県が調査を行ったものについては多肥松林遺跡、高松市のものは日暮・松林遺跡、松林遺跡と呼称している。

多肥松林遺跡（新設高校）では調査対象地中央を南北に縦断する旧河道があり、東側微高地に日暮・松林遺跡から拡がる集落が検出された。旧河道からは弥生時代中期中葉を年代の中心とする土器のほか、多量の木製品が出土している。河道西側の微高地からは弥生時代後期中葉ごろの竪穴住居、溝を検出している。（文献3）

### 多肥松林遺跡（県道）

高松土木事務所の南側に接して東西に延びる県道太田上町志度線建設に伴い調査が行われた。報告書の刊行は次年度以降の予定である。弥生～奈良時代の複数の自然河川、弥生時代の堰状遺構、古墳時代の溝状遺構、平安時代の掘立柱建物群等を検出している。（文献4）

### 多肥宮尻遺跡

県道太田上町志度線の建設に先だって調査が行われた。用地買収の関係で調査は平成9年度から11年度にかけて3次にわたり行われた。報告書刊行は次年度以降の予定である。弥生～古墳時代の複数の自然河川、古墳時代の溝状遺構、中世のピット群などを検出した。なお、自然河川から本報告書所収の西地区包含層など出土の古墳時代の土器と同時期の遺物が、比較的まとまって出土している。（文献5～7）

### 「弘福寺領山田郡田図比定地」関連遺跡

国の重要文化財に指定されている『弘福寺領讃岐国山田郡田図』に関する総合的な調査は、昭和61年度の「高松市太田地区遺跡詳細分布調査事業」以降、平成10年度にかけて継続して行われている。『空港跡地遺跡Ⅰ』の刊行以後に文献8が刊行されている。『弘福寺領讃岐国山田郡田図』南地区比定地の考古学的調査として、下池と分ヶ池に挟まれた範囲で6ヶ所のトレンチ調査が実施された。



第8図 遺跡周辺の主な遺跡(1)

B調査区で弥生時代前期の土坑、弥生時代後期の竪穴住居3、弥生時代後期、古墳時代後期の土器などを包含する不明遺構2、中世の石組み井戸1などを、D調査区で弥生時代後期の溝状遺構3を、F調査区で弥生時代前期末から中期初頭の溝状遺構などを検出している。なお、この調査によって『山田郡田図』の比定地を確定するような資料は得られていない。(文献8)

#### 一角遺跡

弥生時代後期後半の竪穴住居数棟、掘立柱建物、旧河道などを検出している。報告書では、一角遺跡の旧河道を本報告書所収のSR a01の延長としているが位置がずれており、後述の宮西一角遺跡のSR 03が該当すると考えられる。(文献9)

#### 宮西一角遺跡

市道建設に先だって調査が行われたもので、調査地は本報告書の北地区の北側に約50m離れて平行する幅2mの細長い調査区である。調査地西半で弥生時代前期末～中期初頭の土坑を多数検出し、弥生時代後期前半の竪穴住居3棟を検出している。いずれも空港跡地遺跡検出遺構との関連が考えられる。また、平安時代の水田跡が検出された旧河道(SR 03)は、本報告書のSR a01の延長である可能性が高い。なお、宮西一角遺跡の隣接地が『弘福寺領山田郡田図』関連遺跡のA調査区(文献8)であるが、遺跡内容は同一と考えられる。(文献10)

#### 木太本村II遺跡

高松市木太町木太2区の中小河川宮川改修工事によって発見された遺跡である。検出遺構は内法約0.9mの正方形に縦板を並べ、四隅に立てた柱と横棧で固定する「縦板組隅柱横棧どめ」と呼ばれる井戸1基である。出土遺物は僅少で、8世紀中頃から後半に埋没したと推定される。この型式の井戸は平城京で多数検出されており、律令国家的な様相を持つと評価できる。また、『弘福寺領讃岐国山田郡田図』に近い時期の遺構でもあり、当該期の高松平野を考えるうえで貴重な資料である。(文献11)

#### 汲仏遺跡

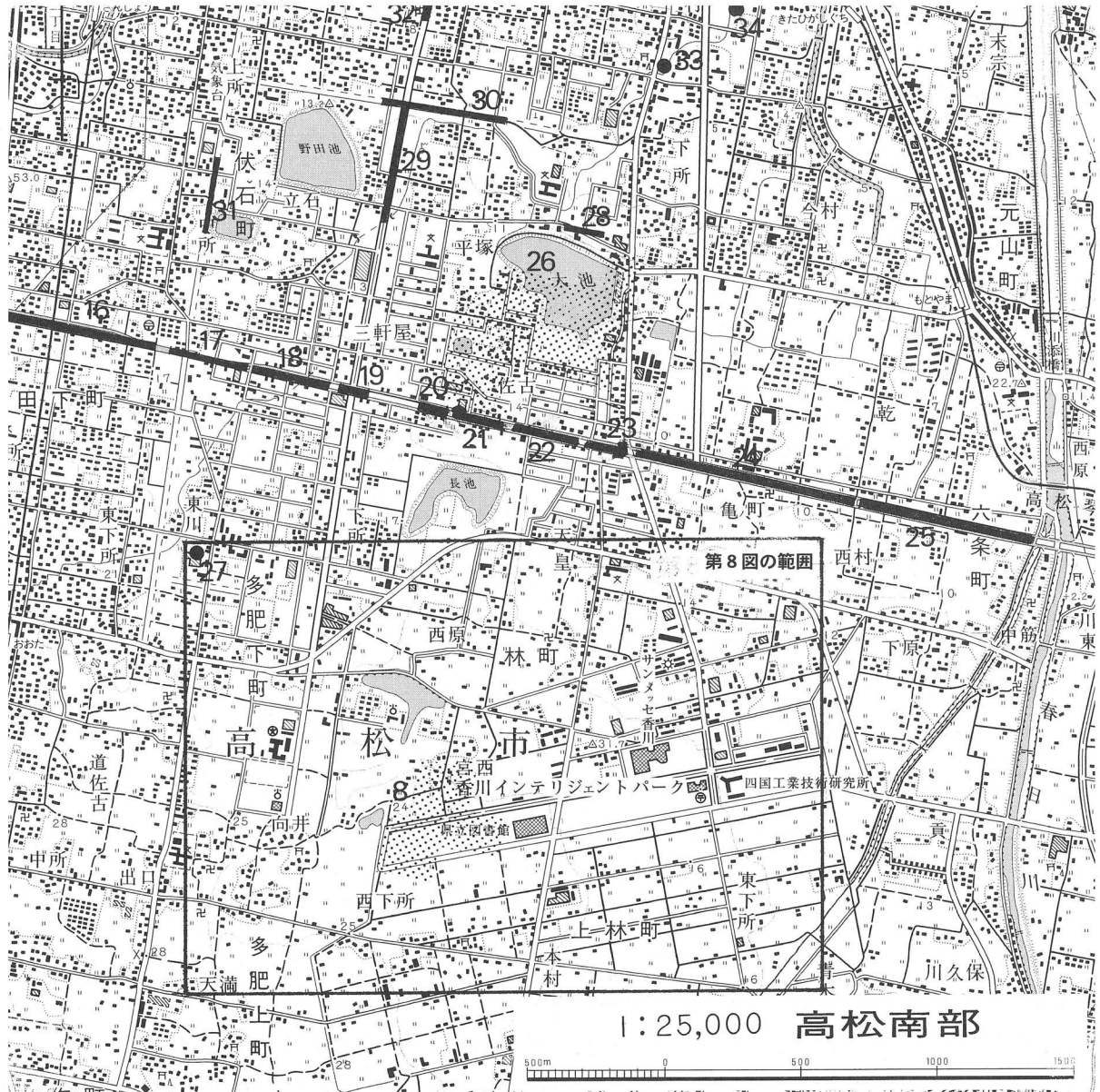
高松市多肥下町に所在する遺跡で、県警察本部機動隊舎建設に先だって調査が行われた。検出遺構には弥生時代前期の二重の環濠の可能性の高い溝状遺構がある。外側のものが幅約2.4m、深さ0.3m、内側のものが幅1m、深さ0.5mを測る。溝状遺構の内側から弥生時代前期の遺物を多量に含む土坑が数基確認されている。このほか弥生時代後期の溝状遺構、土器棺墓、平安時代の掘立柱建物などが検出されている(文献12、13)。また、北側の水路工事に伴う発掘調査では、柱穴から5.7×3.5×1.5cmの大きさで両面を研磨し側面に擦り切り痕をもつ流紋岩に「大」の字を12個線刻した石材が出土している。10世紀前後のものと考えられている。(文献14)

#### 空港跡地遺跡(香川大学工学部)

平成2年度から7年度にかけて約15万㎡におよぶ広大な面積の発掘調査が行われた空港跡地遺跡内に、香川大学工学部が新設されることになり、平成8、9年度に発掘調査が行われた。調査地は本報告書に所収するa地区の北地区の西半と南地区の西半に挟まれた所である。a地区のSR a02に連続する旧河道やST a03、04の北半部が検出されるなど、本報告書と関連する遺構が検出されている。また、明治時代中期頃以降に設置されたと考えられる池台池のユルが検出されている。(文献15、16)

文献1 山本英之、中西克也『高松市埋蔵文化財調査報告書第34集 日暮・松林遺跡 都市計画道路福





- 1. 空港跡地遺跡    2. 多肥宮尻遺跡    3. 多肥松林遺跡 (県道)
- 4. 多肥松林遺跡 (高松土木)    5. 多肥松林遺跡 (高校)    6. 日暮・松林遺跡
- 7. 松林遺跡    8. 弘福寺領田図比定地南地区    9. 弘福寺領田図関連調査地
- 10. 宮西・一角遺跡    11. 一角遺跡    12. 宗高・坊城遺跡    13. 上林遺跡
- 14. 公務員宿舎遺跡    15. 凹原遺跡    16. 太田下・須川遺跡    17. 蛙股遺跡
- 18. 居石遺跡    19. 井出東Ⅱ遺跡    20. 井出東Ⅰ遺跡    21. さこ・長池Ⅱ遺跡
- 22. さこ・長池遺跡    23. さこ・松ノ木遺跡    24. 林坊城遺跡    25. 六条上所遺跡
- 26. 弘福寺領田図比定地北地区    27. 汲仏遺跡    28. 上西原遺跡
- 29. 松縄下所遺跡    30. 境目下西原遺跡    31. キモンドー遺跡
- 32. 天満・宮西遺跡    33. 木太本村Ⅱ遺跡    34. 白山神社古墳

第9図 遺跡周辺の主な遺跡(2)

- 岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高松市教育委員会 1997年
- 文献2 北山健一郎ほか『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 多肥松林遺跡』  
1995年
- 文献3 山下平重『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 多肥松林遺跡』香川県教育  
委員会 1999年
- 文献4 西村尋文ほか「多肥松林遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』(財)  
香川県埋蔵文化財調査センターほか 1998年
- 文献5 松本和彦ほか「多肥宮尻遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』(財)  
香川県埋蔵文化財調査センターほか 1998年
- 文献6 植松邦浩「多肥宮尻遺跡」『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度』(財) 香川県埋蔵  
文化財調査センターほか 1999年
- 文献7 小野秀幸「多肥宮尻遺跡」『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度』(財) 香川  
県埋蔵文化財調査センター 2000年
- 文献8 山本英之「発掘調査の成果」『高松市埋蔵文化財調査報告第37集 讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ  
第2次弘福寺領讃岐国山田郡田岡調査報告書』高松市教育委員会 1999年
- 文献9 大嶋和則『高松市埋蔵文化財調査報告書第44集 特別養護老人ホームさくら荘建設に伴う埋蔵  
文化財発掘調査報告書 一角遺跡』高松市教育委員会 2000年
- 文献10 山元敏裕『高松市埋蔵文化財調査報告第48集 市道林町47号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財  
発掘調査報告書 宮西・一角遺跡』高松市教育委員会 2000年
- 文献11 木下晴一『木太本村Ⅱ遺跡 宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会  
1998年
- 文献12 山元素子ほか『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度 汲  
仏遺跡』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 1999年
- 文献13 蔵本晋司『香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成12年度 汲仏遺  
跡』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター 2001年
- 文献14 山本英之、末光甲正「汲仏遺跡」香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度』  
1992年
- 文献15 宮崎哲治『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成8年度』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター  
1997年
- 文献16 山元素子『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成9年度』(財) 香川県埋蔵文化財調査センター  
1998年

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の方法と各調査区の概要

#### 1 調査の方法

調査方法の詳細については『空港跡地遺跡Ⅰ』に記されているので参照されたい。また、東西1.7km、南北0.3kmの広大な面積を複数年度にわたり調査したことによって生じた問題点等については『空港跡地遺跡Ⅰ～Ⅳ』に触れているので参照されたい。なお、これまでの空港跡地遺跡関係の報告書においては、空港跡地全体に設定した20mメッシュの調査区割の国土座標値が示されていないので、以下に記す。

空港跡地遺跡では、遺跡を東西に横断する県道成合町六条線の道路センターを基準線とし、道路設計上のセンター杭を基準に20mのグリッドを設定し、グリッド名は西北隅の杭名によっている。座標値はグリッド杭O-31が $X = 143258.956$ 、 $Y = 52398.667$ （国土座標第Ⅳ系）、O-34の座標値は $X = 143269.929$ 、 $Y = 52457.657$ である。したがって、グリッドの方向は座標北から $10^{\circ} 32' 15''$ 西に振っていることになる。

調査用のグリッドを道路センター杭に置くことには一長一短がある。空港跡地遺跡の場合、基準となった県道成合町六条線の方向が他の諸施設の基準線ともなっているため、各調査区のグリッドは調査区の区画に整合するように配置できた。したがって調査とは直接関係しないが、工事請負による掘削土量の管理には有効であった。また、恒久的な構築物である道路のセンター位置は調査終了後でも現地で比較的容易に確認できるから、調査位置を漠然と確認するためには便利なものである。しかし、道路建設後10年近くたった現在では、管理者である土木事務所において道路センターの座標値の管理はしていないため、資料を適切に保管しておく必要がある。また、県道成合町六条線自体が空港跡地遺跡の西端付近と東端付近でわずかにカーブしており、東西端のグリッドと道路センターは合致しない。さらに、グリッド方向が任意の方向であるから、調査時に検出遺構の方位を知る基準にならない。グリッドをもとに作製した手書き図面に方位を書き入れる手間が増える。（調査時にグリッドの北側の方向を「北」と漠然と認識した結果、グリッド北の方向に方位を書くミスが生じていたりし、混乱する場合があった。）グリッドの座標値が整数でないため座標計算が煩雑である、などの短所もある。いずれにしても、発掘調査の手法としてどのようなグリッド設定が有効であるか、長短を検討したうえで適当なものを採用する必要がある。

次に、蛇足となるが、整理作業を進めるうえで支障となったことに、土層に対する分層や注記に個人差が大きく、異なる調査区での同一遺構の層位の対照が難しい場合があったことがあげられる。近年の香川県での発掘調査では『標準土色帖』を用いるなど、情報の共有化を図っているため解消の方向にあるが、一定のルールを確立する必要がある。とりわけ、土層を遺物を分離して取り上げるための単位とだけ見なし、土層名は一種の記号として捉える場合もあるが、土層の成因を説明できるような分層ができれば、それに越したことはない。今後、土層観察にはどのような視点が必要なのか、検討すべき課題と思われる。なお、本報告書では、断面図の注記は調査者の注記を尊重し、層の対比などは本文中で触れることとした。

#### 2 調査成果の概要

##### ① 地区割について

a 地区は、県道成合町六条線、市道林多肥上町線、市道上林町六条線の3路線部分が発掘調査の対象となった。これらは「池台池」の池敷部分の大半が埋蔵文化財が包蔵しなかったため連続していないため、県道成合町六条線部分を「北地区」、市道林多肥上町線部分を「西地区」、市道上林町六条線部分を「南

地区」として報告することとした。北地区はI-8、9、13区の3つの調査単位、西地区はI-14~16、22区の4つの調査単位、南地区はI-10、11、17区の3つの調査単位からなる（第1表、第3図参照）。

## ② 北地区の調査成果の概要

北地区では、西端で池台池の池敷きが現れ、池の落ち際付近に弥生時代前期末～中期初め頃の遺物を包含する旧河道（SR a02）が検出された。この旧河道の北側には弥生時代前期末～中期初め頃の遺物を包含する土坑が20基近く散在している。土坑の性格はよくわからない。北地区東端にも幅約35m、深さ約1.7mの旧河道（SR a01）が存在する。弥生時代前期末～中期初め、弥生時代後期、古代、中世の遺物が包含され、出土遺物中には銅剣の先端部を鑿に転用した青銅製品が含まれている。旧河道が埋没する過程で、水田として土地利用されており2面以上の水田面が検出されている。SR a01の西には、香川県内で「出水（ですい）」と呼称されている人工的な湧水施設が検出されている。これは井戸状の掘り込みから、旧河道の流路に沿うように溝状遺構が延びているものである。古代から中世にかけて機能していたと考えられる。このほか調査区中央部で弥生時代後期の竪穴住居跡1棟が検出されているほか、調査区西部を中心に中世の掘立柱建物1棟をはじめ中世の遺構・遺物が検出されている。

## ③ 西地区の調査成果の概要

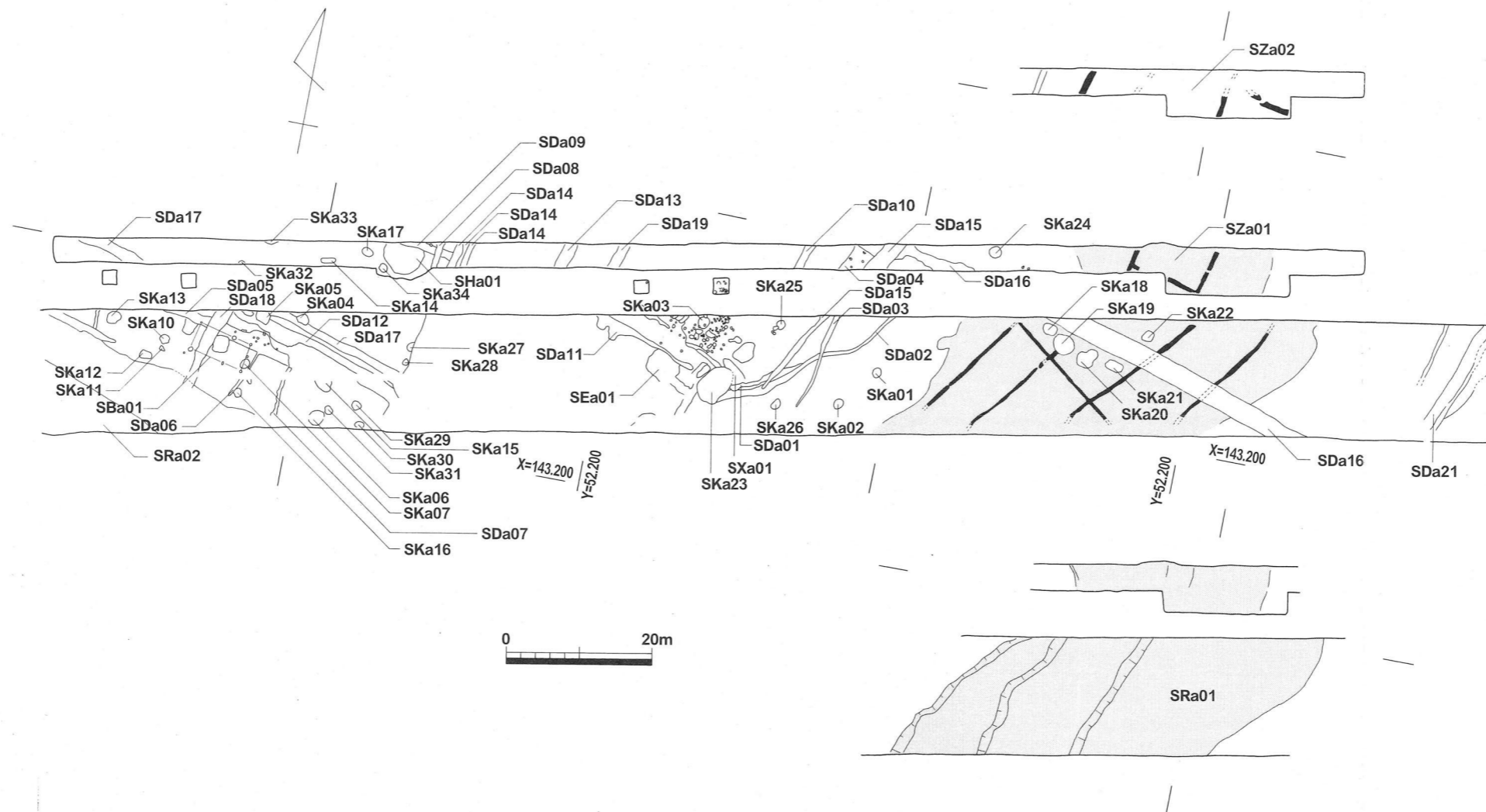
西地区は、空港跡地遺跡の西端を南北方向に延びる長さ約150mとその南端から東西方向に延びる長さ約220mの調査区である。ここでも弥生時代前期末～中期初めの土坑が数基検出されている。また、弥生時代後期の竪穴住居4棟（可能性のあるものを含む）のほか、溝状遺構、旧河道（SR a03）などが検出されている。このうちSR a03は幅約20m、深さ1mほどの規模で古墳時代中期のものと混在する状況で遺物が包含され、上層では中世土器が包含されていた。埋土上面には中世遺構を壊して、大地震の際に発生する噴砂と思われるひびわれが見つかっている。

調査区西北部を中心に古墳時代中期の竪穴住居跡7棟が検出されているほか、包含層中からも完形に近い土器が採集されている。砂地盤であるため本来存在していたはずの遺構が検出できなかった可能性が考えられる。竪穴住居跡のうちSH a05からは甕2点、甗、須恵器杯身が、土器が実際に使用されていた状況を復原できる状態で出土している。このほか西地区からは中世の掘立柱建物、柵列、溝状遺構などが検出されている。

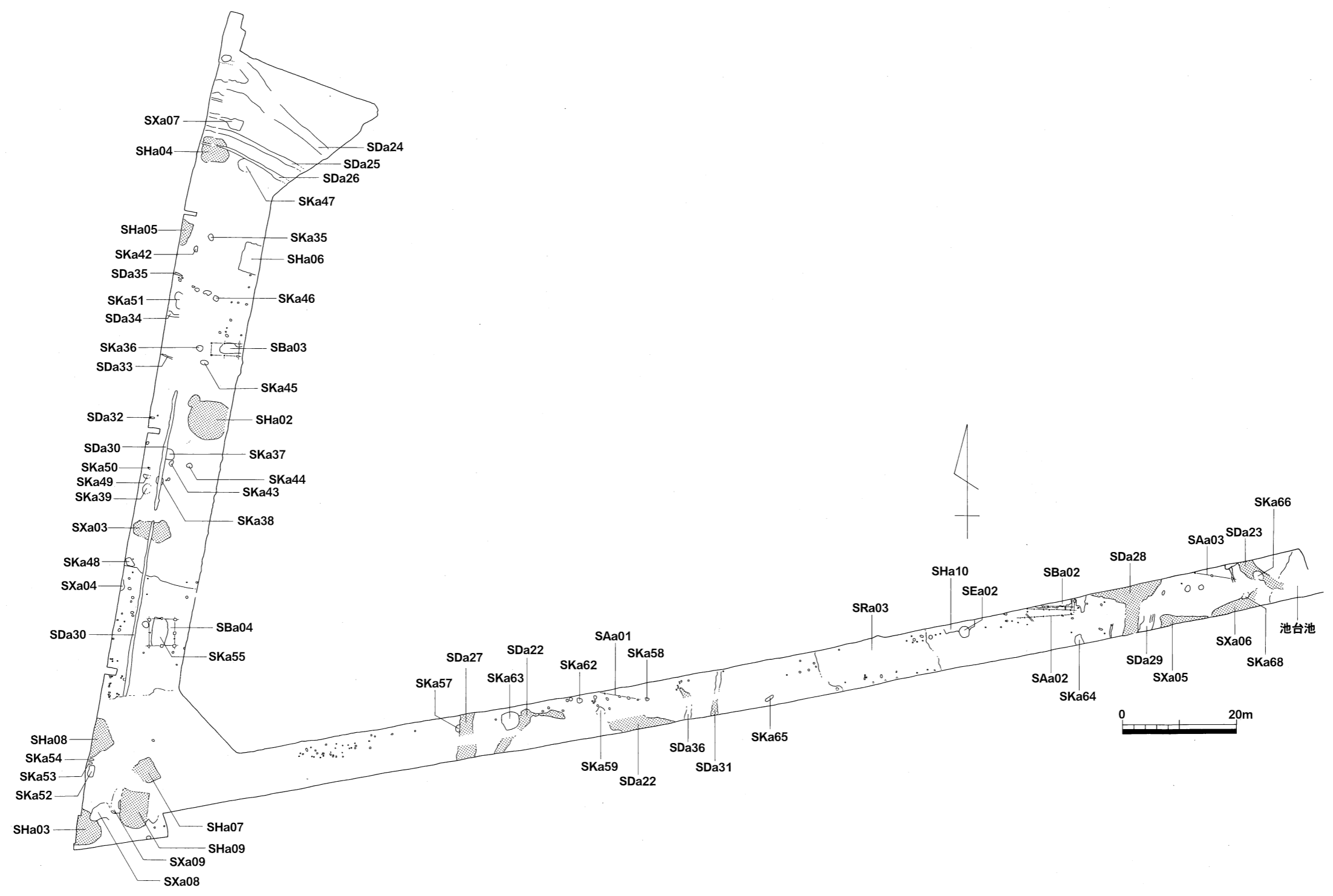
## ④ 南地区の調査成果の概要

南地区は、西地区の東端から50mほど離れたところから東西方向に延びる長さ230mほどの調査区である。ここでは弥生時代前期末の可能性が考えられる竪穴住居1棟のほか、数基の弥生時代前期末～中期初頭の土坑が検出されている。弥生時代後期の遺構としては、竪穴住居1棟のほか、大量の遺物が複数回投棄されている土坑（SK a77）が検出されている。SK a77は上底約1m、下底約1.4m、高さ約1.7mの台形の平面形で深さ約0.5mで、コンテナ10箱に及ぶ土器が出土した。これらは層位的に4面に分けられ廃棄の単位を示すものと考えられる。

南地区の特筆すべき遺構として周溝墓群が検出されている。これは円形のもの2基（ST a03、04）前方後円形のもの（ST a01）の一群と方形（ST a06）、前方後方形（ST a05）の平面形を採る一群から構成される。平面形が前方後円形や前方後方形のものが含まれる点が重要である。このほかに南地区からは弥生時代後期～古墳時代前期の数条の溝条遺構が検出されているほか、中世の柵列、柱穴、土坑墓、土坑、溝状遺構などが検出されている。



第10図 北地区 遺構配置図

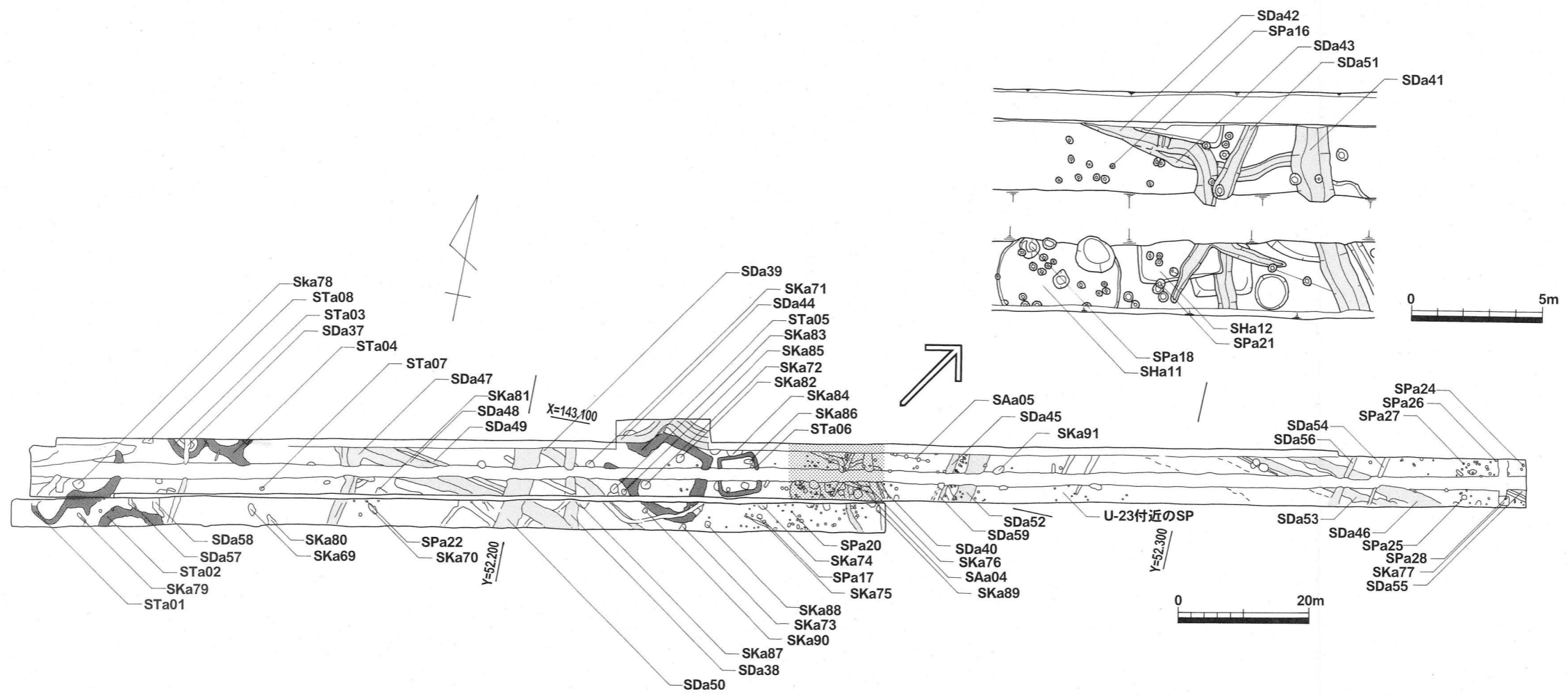


X=143.100

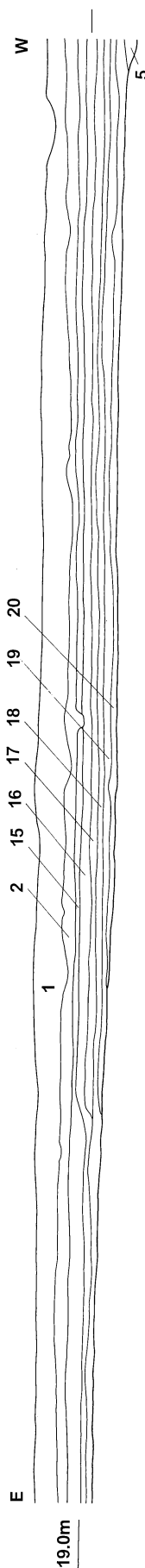
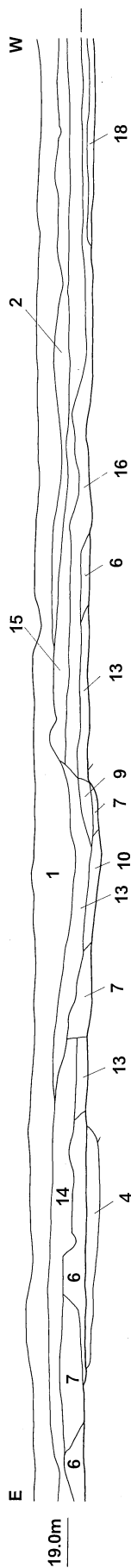
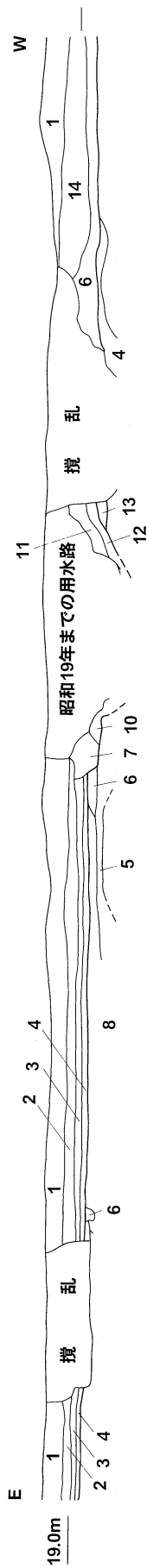
Y=51.900

Y=52.000

第11図 西地区 遺構配置図



第12図 南地区 遺構配置図

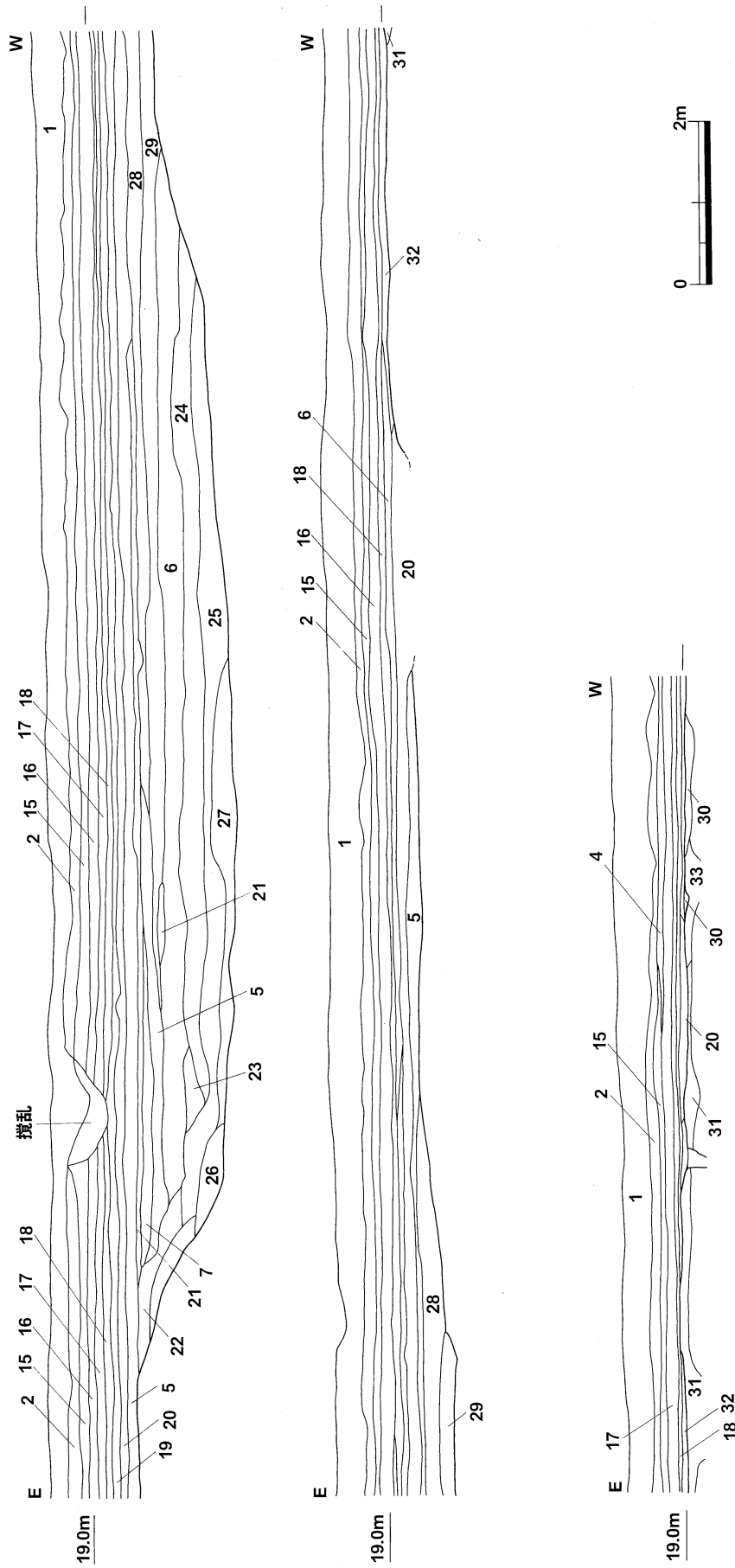


- (第13、14図)
- |           |                       |
|-----------|-----------------------|
| 1. 造成土    | 11. 黄灰色粘土             |
| 2. 耕作土    | 12. 灰褐色砂まじり粘質土        |
| 3. 耕作土    | 13. 暗灰色粘質土            |
| 4. 床土     | 14. 茶褐色砂礫土 (2~5cm大の礫) |
| 5. 黒褐色粘質土 | 15. 淡灰色砂質土            |
| 6. 灰色粘質土  | 16. 淡灰色粘質土            |
| 7. 灰色粘質土  | 17. 灰褐色粘質土            |
| 8. 灰茶色粘質土 | 18. 暗茶色粘質土            |
| 9. 褐色粘質土  | 19. 灰色粘質土             |
| 10. 灰色砂   | 20. 暗茶灰色粘質土           |



第13図 北地区 南壁断面 (その1)

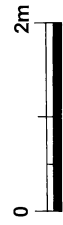
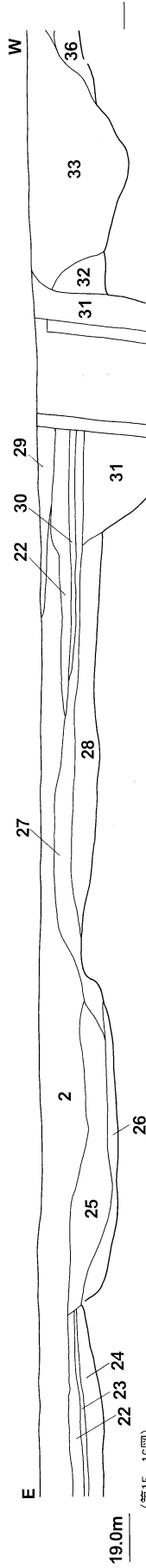
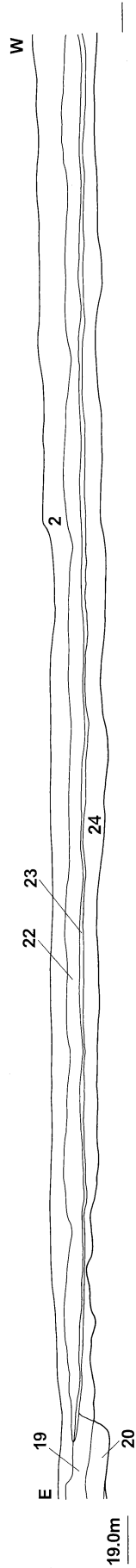
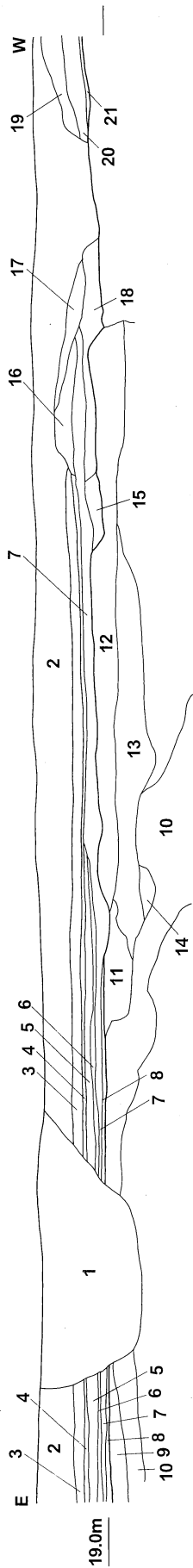




第14図 北地区 南壁断面 (その2)

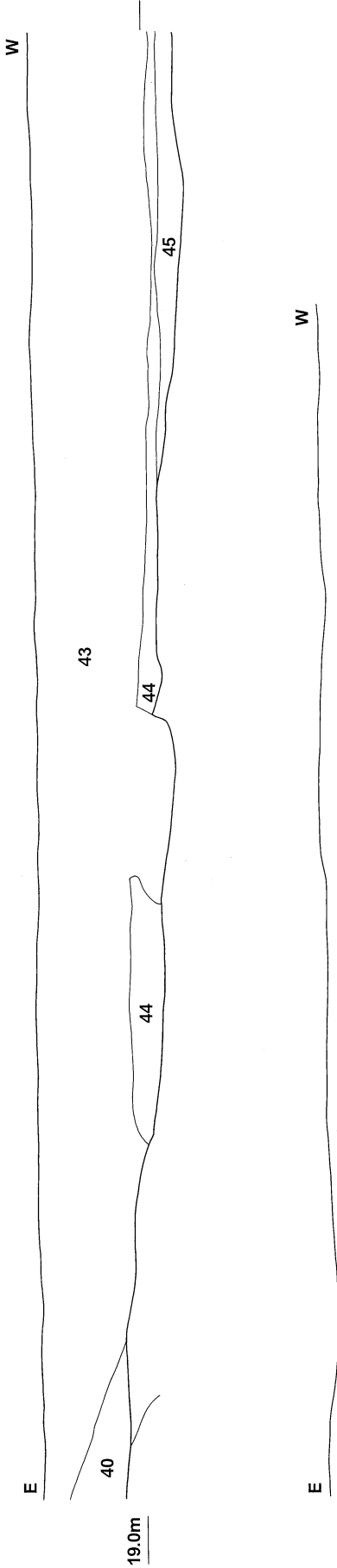
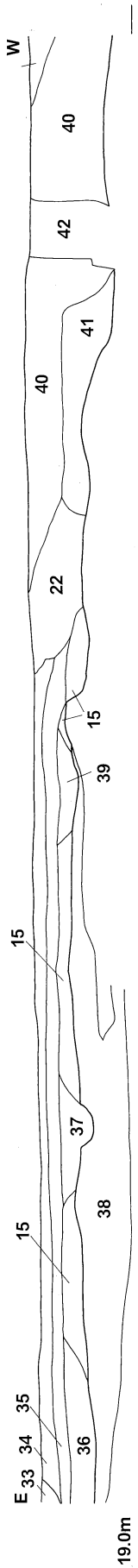
(第13、14図)

- |                        |            |
|------------------------|------------|
| 21. 暗茶褐色砂質土            | 31. 暗褐色粘質土 |
| 22. 茶黄色粘質土             | 32. 茶褐色粘質土 |
| 23. 暗黄灰色粘質土            | 33. 黄灰色粘質土 |
| 24. 灰色砂まじり粘質土          |            |
| 25. 暗茶褐色粘質土 (粘性強い)     |            |
| 26. 暗灰色砂礫土 (2~10cm大の礫) |            |
| 27. 暗灰色砂               |            |
| 28. 暗黄灰色粘質土            |            |
| 29. 暗茶色粘土              |            |
| 30. 暗茶褐色粘質土            |            |



第15図 北地区 南壁断面 (その3)

- (第15、16図)
- 1. 灰色及び淡茶灰色 シルトブロック層 (試掘Tr.)
  - 2. 白黄色シルト、20cm以下の礫を含む淡茶灰色シルト (整地土)
  - 3. 灰色シルト (旧耕作土)
  - 4. 黄褐色シルト (旧床土)
  - 5. 白灰色シルト、白色粗砂～細砂をわずかに含む (旧耕作土)
  - 6. 黄褐色シルト
  - 7. 白灰色シルト Mn (旧耕作土)
  - 8. 黄褐色シルト Mn (旧床土)
  - 9. 淡灰黄シルト Mn 地山
  - 10. 灰白シルト (火山灰) 地山
  - 11. 灰～淡灰黄色粗砂 地山
  - 12. 黄褐色シルト 地山
  - 13. 白灰色シルト層 地山
  - 14. 灰白色粗砂 地山
  - 15. 淡茶色シルト
  - 16. 白灰シルト～細砂 大畦
  - 17. 淡灰茶色シルト～細砂 (土壌化)
  - 18. 白灰色シルト 大畦
  - 19. 白灰色シルト～細砂
  - 20. 白灰色シルト、20cmまでの礫を含む
  - 21. 黒色シルト (包含層)
  - 22. 白灰色シルト
  - 23. 黄褐色シルト～細砂 (旧床土)
  - 24. 灰色シルト
  - 25. 淡灰茶色シルト 茶色及び黄褐色シルトブロック混 (埋め戻し土、現代)
  - 26. 灰茶色シルト (20cmまでの円礫を多量に含む)
  - 27. 白灰色シルト～細砂 やや茶色を帯びる
  - 28. 白灰色シルト 黄褐色のくさり礫 (5cm程度) やや茶色を帯びる
  - 29. 茶灰色シルト (土壌化)
  - 30. 白灰色細～中砂層



(第15、16図)

- 31. 茶灰色シルトと10cm以下の礫の混合層 (コンクリート水路の掘り方)
- 32. 白黄色シルト (地山)
- 33. 茶色シルト、礫・コンクリートを含む (現代)
- 34. 灰白色シルト
- 35. 黄灰色シルト
- 36. 茶色シルトブロックを含む淡茶灰色シルト
- 37. 茶色シルト～細砂
- 38. 淡黄灰色細～中砂
- 39. 茶色シルト
- 40. 灰黑色シルトと淡黄灰中・細砂のラミナ
- 41. 白黄～淡茶灰色シルト
- 42. 灰黑色シルトと淡黄灰色シルトの混合層 (埋め戻し土、鉄管)
- 43. 20cmまでの円礫・茶色シルトブロックを含む淡茶灰色シルト (なめ池)
- 44. 灰色シルト
- 45. 黑色シルト (礫・前包含層)



第16図 北地区 南壁断面 (その4)

## 第2節 北地区の調査

### 1. 土層

北地区はI-8区、I-9区、I-13区の3調査区よりなる。第13~16図はI-8区、I-9区の調査区南壁の土層断面図である。第13図はI-8区東半、第14図はI-8区西半、第15図はI-9区東半、第16図はI-9区西半に当たる。

北地区は昭和19年に飛行場が造成された時および高松空港供用時の盛土の下に昭和19年以前の水田耕作土が一部残存している。この水田耕作土の下層には水田床土や旧耕作土と考えられる明灰色系の土が堆積し、以下に遺構面が現れる。遺構面はI-9区東半付近で中世土器を包含する堆積層の上面と下面の2面となるほか、旧河道の埋没過程で複数の遺構面を形成している。しかし、それ以外では概ね1面の遺構面で以下は地山となる。北地区の地山は水平方向に砂礫層、砂層、シルト層に変化しており複雑である。東端と中央付近の西寄りでは砂礫層の盛り上がりが見られる。最も盛り上がるころでは造成土、耕作土直下に現れ、下層に潜り込んでいる。礫の粒径などの情報はないが、砂岩の垂円礫を主体とする砂礫層で扇状地の旧中州の堆積物と考えられる。この層上面は削平を受けているためか、ほとんど遺構が検出されなかった。なお、砂礫層の周囲はより不透水性の細粒の堆積物が堆積するため、砂礫層の地下水位が高くなる傾向があるようで、SE a 01が長期的に使用された理由の一つと考えられる。

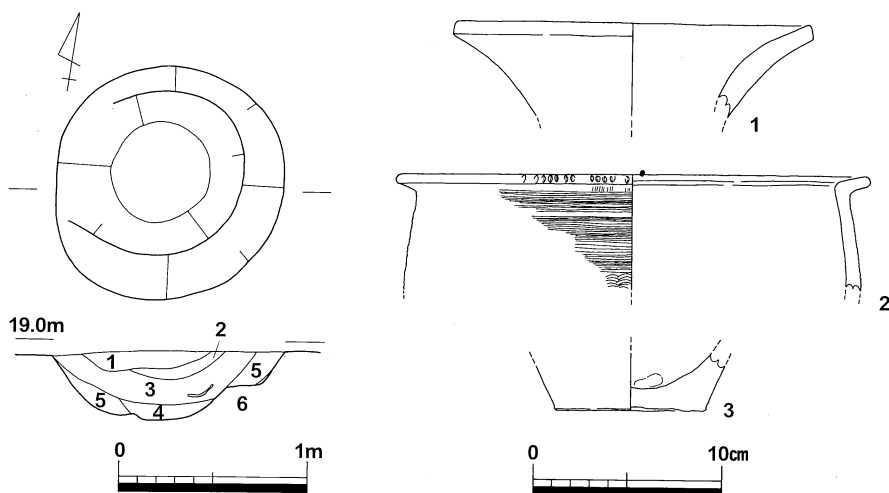
### 2. 遺構・遺物

#### (1) 縄文時代晩期~弥生時代中期初め

##### ① 土坑

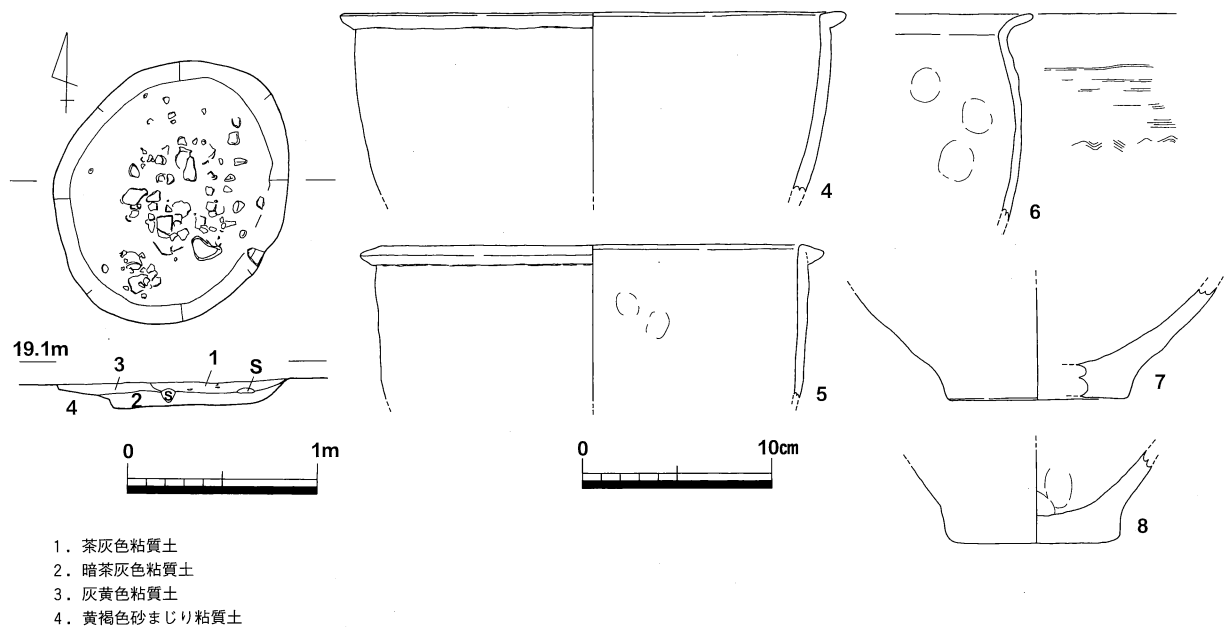
SK a 01

I-8区、X=143.222、Y=52.238付近で検出した土坑である。平面形は円形、断面は皿状から、さらに中央部で皿状の窪みをもつ形状である。径約122cm、深さ約55cmを測る。埋土は数層に細分される。埋土中から弥生時代前期末から中期初めにかけての遺物細片が3個体分出土している。1は壺の口縁部、口縁端部は四角におさめている。2は甕、如意状口縁で、口縁端部にO字状の刻み目、体部上半に櫛描きの沈線、波状文が描か



- |               |               |
|---------------|---------------|
| 1. 茶褐色粘質土     | 4. 暗灰色粘質土     |
| 2. 灰茶色砂まじり粘質土 | 5. 暗灰茶色粘質土    |
| 3. 暗茶褐色粘質土    | 6. 黄褐色砂まじり粘質土 |

第17図 SKa01 平・断面図、出土遺物実測図



第18図 SKa02 平・断面図、出土遺物実測図

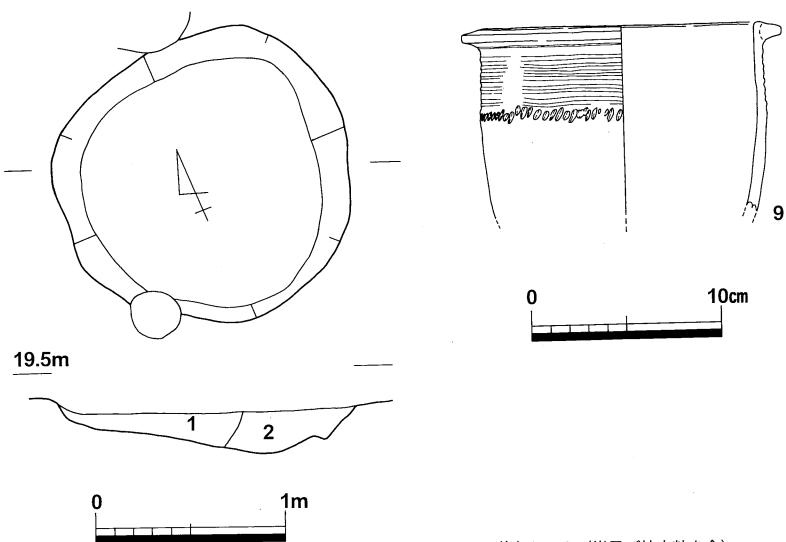
れる。口縁下半にはハケが認められる。3は弥生土器底部である。

SKa02

I-8区, X=143.217、Y=52.233付近で検出した土坑である。平面形は円形、断面は浅い皿状を呈する。径約130cm、深さ約26cmを測る。埋土は3層に細分される。SKa02には埋土中(底から浮いた状態)に多量の遺物細片が包含されていた。4~6は甕、4、5は逆L字状口縁、6は如意状の口縁である。磨滅する。このほかSKa02からは同時期の土器片が若干量出土している。

SKa03

I-9区, X=143.225、Y=52.213付近で検出した土坑である。平面形は円形、断面は浅い皿状を呈する。径約160cm、深さ約23cmを測る。9はSKa03から出土した逆L字状口縁の甕である。計7条の櫛描沈線の下に米粒状の列点文が巡る。このほかSKa03からは同時期の土器片が若干量出土している。

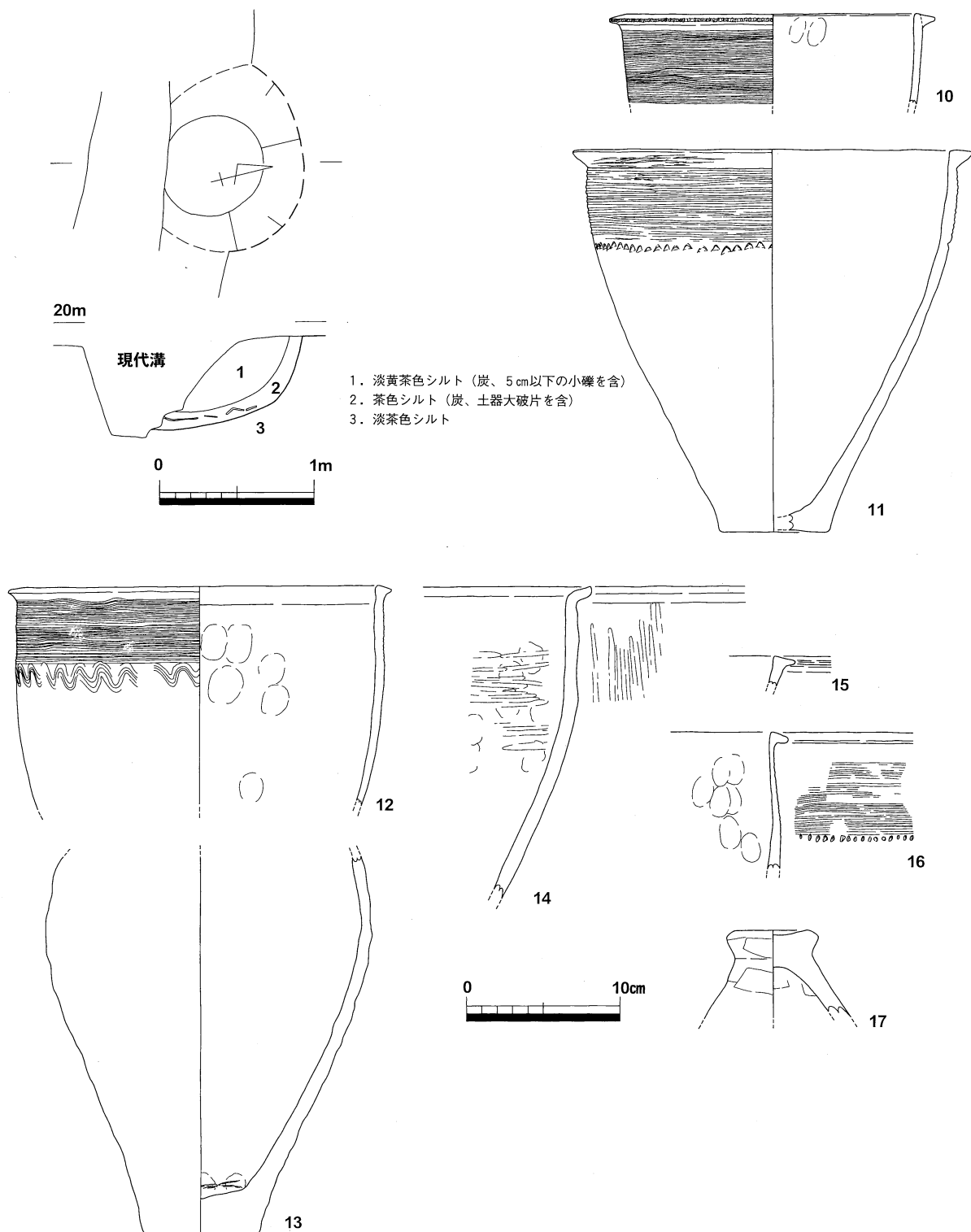


第19図 SKa03 平・断面図、出土遺物実測図

SKa04

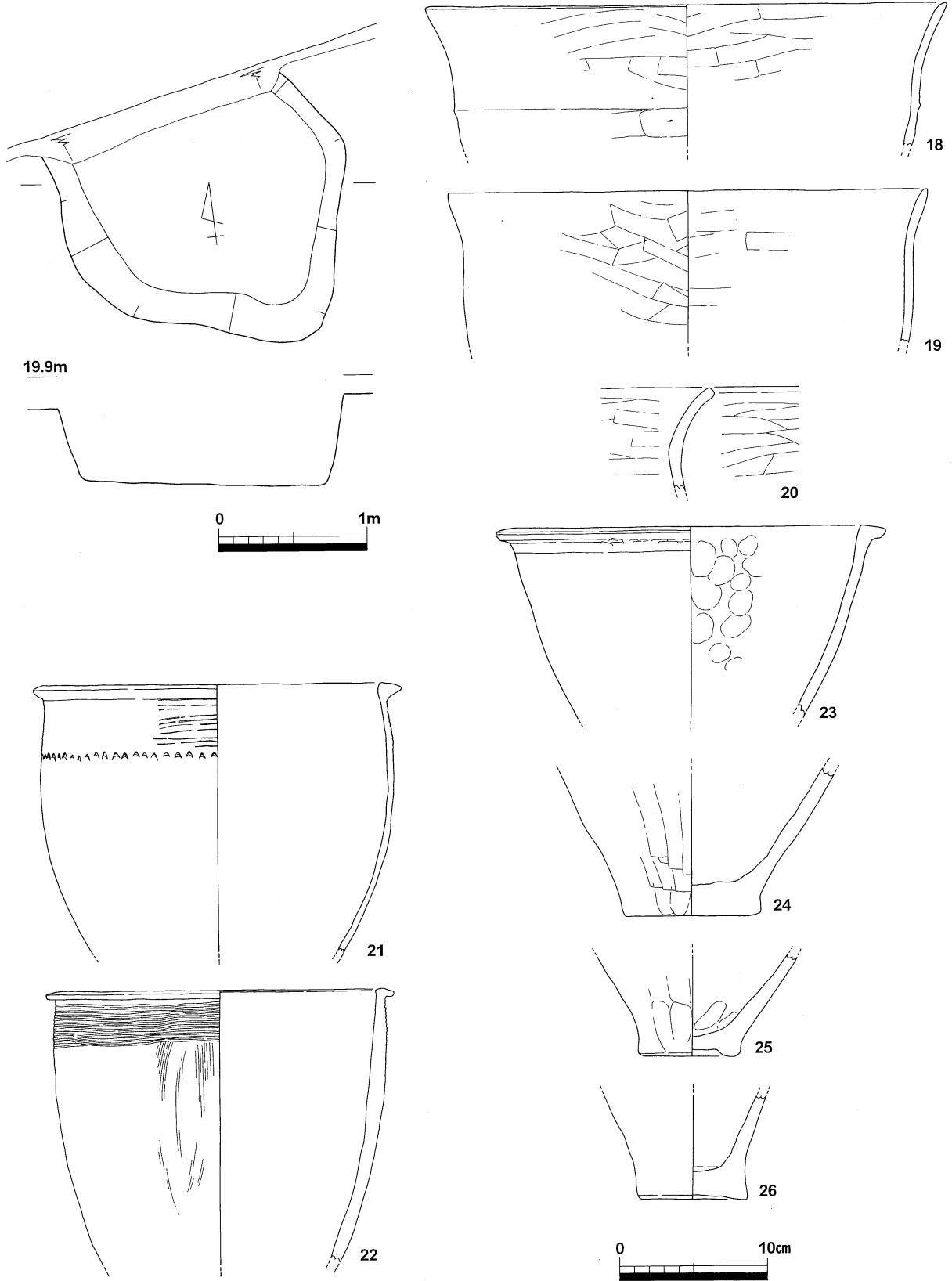
I-9区, X=143.215、Y=52.159付近で検出した土坑である。現代の溝に半分程度壊されている。底部を中心に遺物片が出土して

いる。10～16は甕である。10は逆L字状の口縁の端部に密に刻み目を施し、外面に櫛描きの沈線を施す。11は櫛描き沈線の下に三角形の列点文を、12は3条の複線の波状文を施している。14は如意状の口縁、内外面にヘラ磨きが認められる。17は蓋形土器。頂部下のくびれには板状工具による整形の際の圧痕が認



第20図 SKa04 平・断面図、出土遺物実測図

められる。SK a04からはこのほかに同時期の遺物片が28%コンテナ1/2箱分出土している。なお、遺物は埋土の層毎に取り上げられているが、時期的な差は見られない。



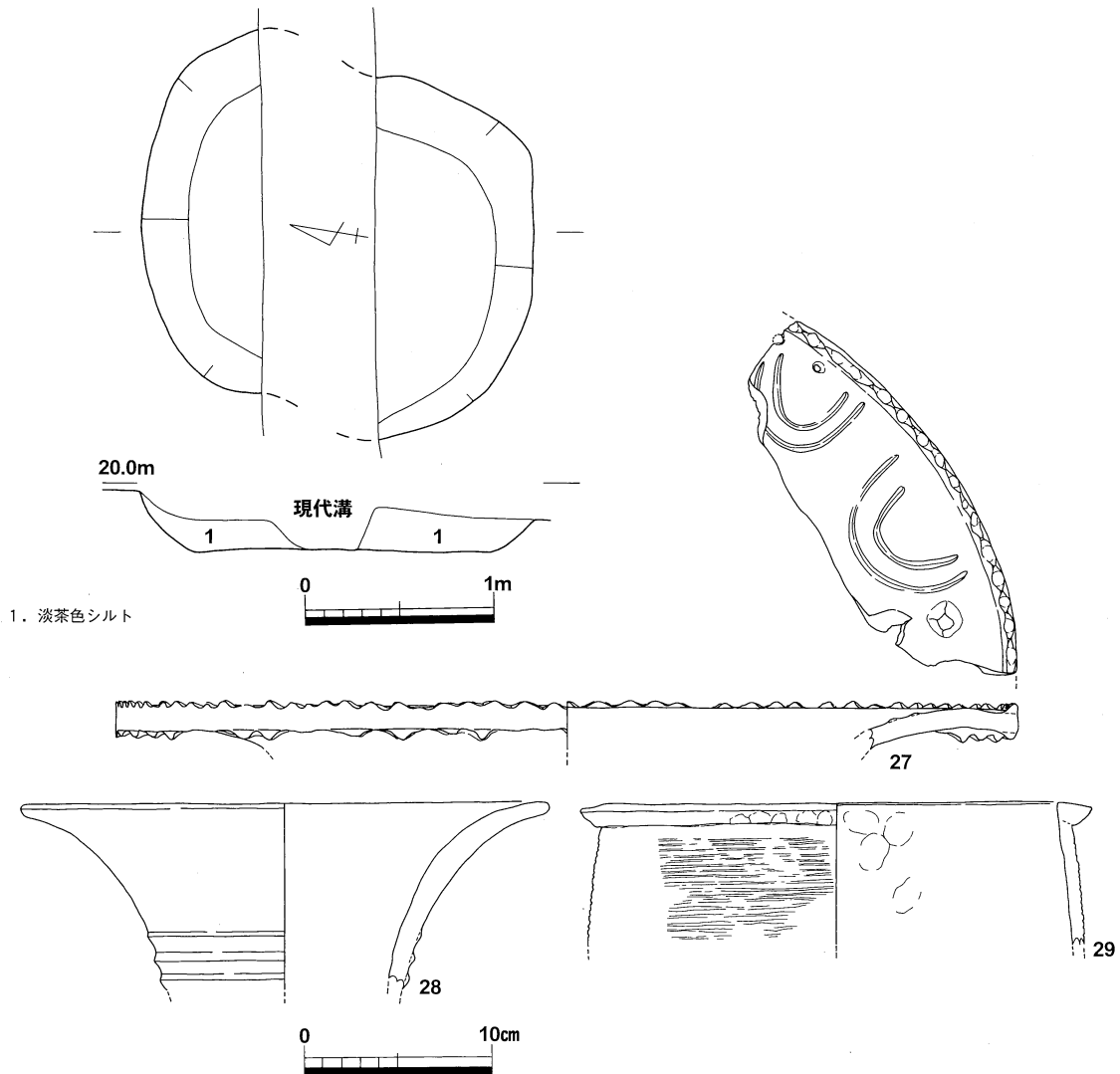
第21図 SKa05 平・断面図、出土遺物実測図

S K a 05

I - 9 区で検出した土坑である。平面形は不整形円形、断面は逆台形状を呈する。深さ約60cmを測る。S K a 05からは縄文時代晩期の深鉢片、弥生時代前期末～中期初めの土器片が出土している。18～20は縄文時代晩期の深鉢である。20は小片のため傾きは推定、緩い波状口縁になる可能性もある。21～23は甕、21、22は櫛描沈線が施される。24～26は底部、25、26は上げ底状の形態である。このほかS K a 05からは同時期の遺物片が28のコンテナ 1 箱分出土している。

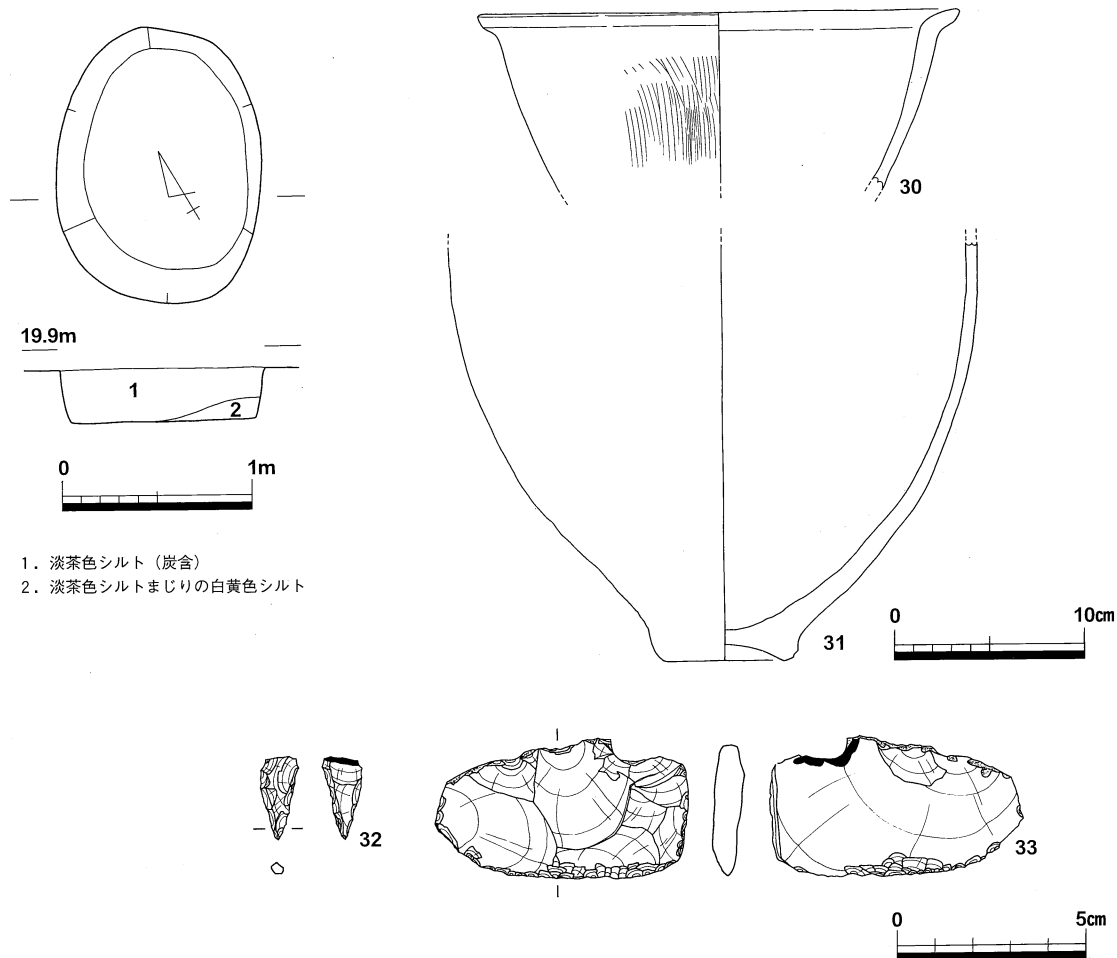
S K a 06

I - 9 区, X = 143.201、Y = 52.163付近で検出した土坑である。平面形は円形、断面は浅い皿状を呈する。径約200cm、深さ約30cmを測る。27は装飾性に富む壺口縁部の破片である。口縁端部に粘土紐を継ぎ足し上下に拡張し、断面三角形になるように刻みを入れている。口縁部内面には2条の平行する貼り付け突帯により半円形の文様を施す。口縁端部付近に2孔の有孔、口縁部に1孔の穿孔が見られる。28は頸部に3条以上の貼り付け突帯を付す壺、29の甕外面は多条のヘラ描き沈線である。このほかS K a 06からは同時期の遺物片が若干量出土している。



第22図 SKa06 平・断面図、出土遺物実測図





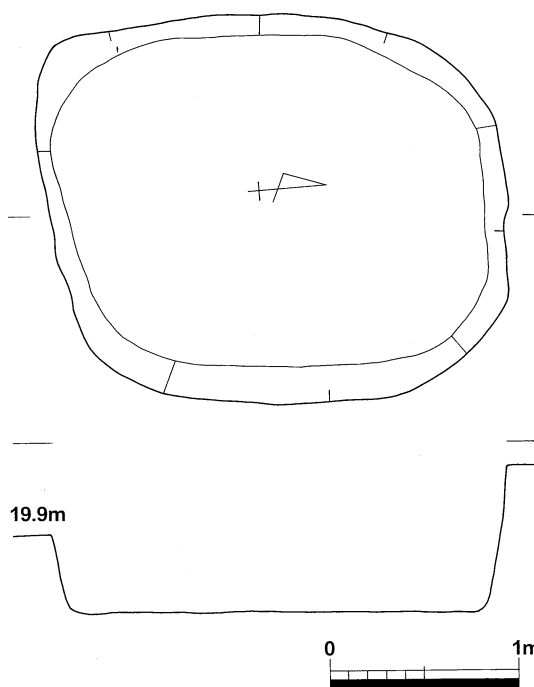
第23図 SKa07 平・断面図、出土遺物実測図

SKa07

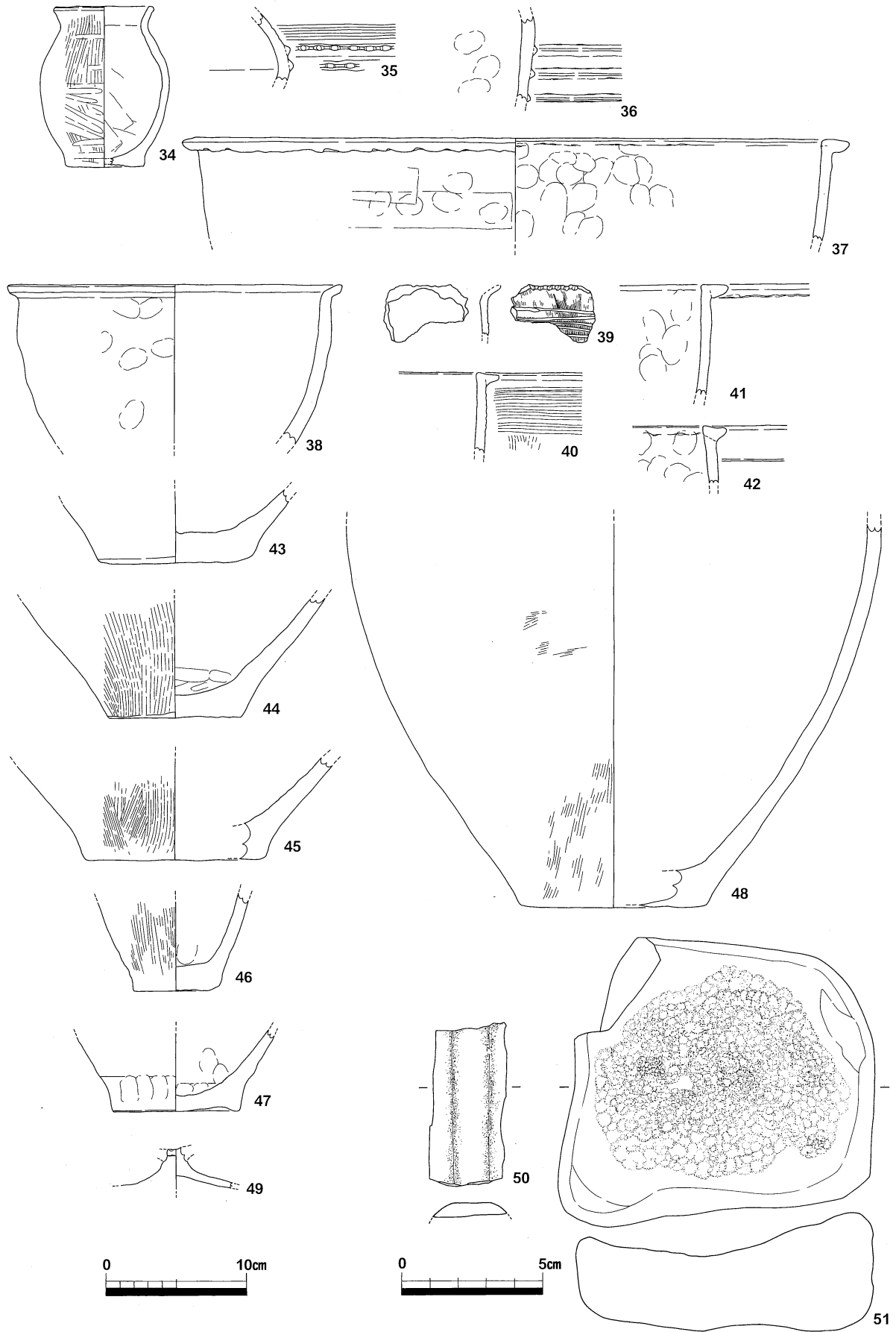
I-9区で、X=143.207、Y=52.152付近検出した土坑である。平面形は楕円形、断面は逆台形状を呈する。長径約146cm、短径約106cm、深さ約29cmを測る。如意状口縁で外面にハケが施される甕、底部が上げ底状を呈する壺、サヌカイト製の石錐、スクレイパーのほか、同時期の細片が28㊦コンテナ1/10箱分出土している。

SKa08

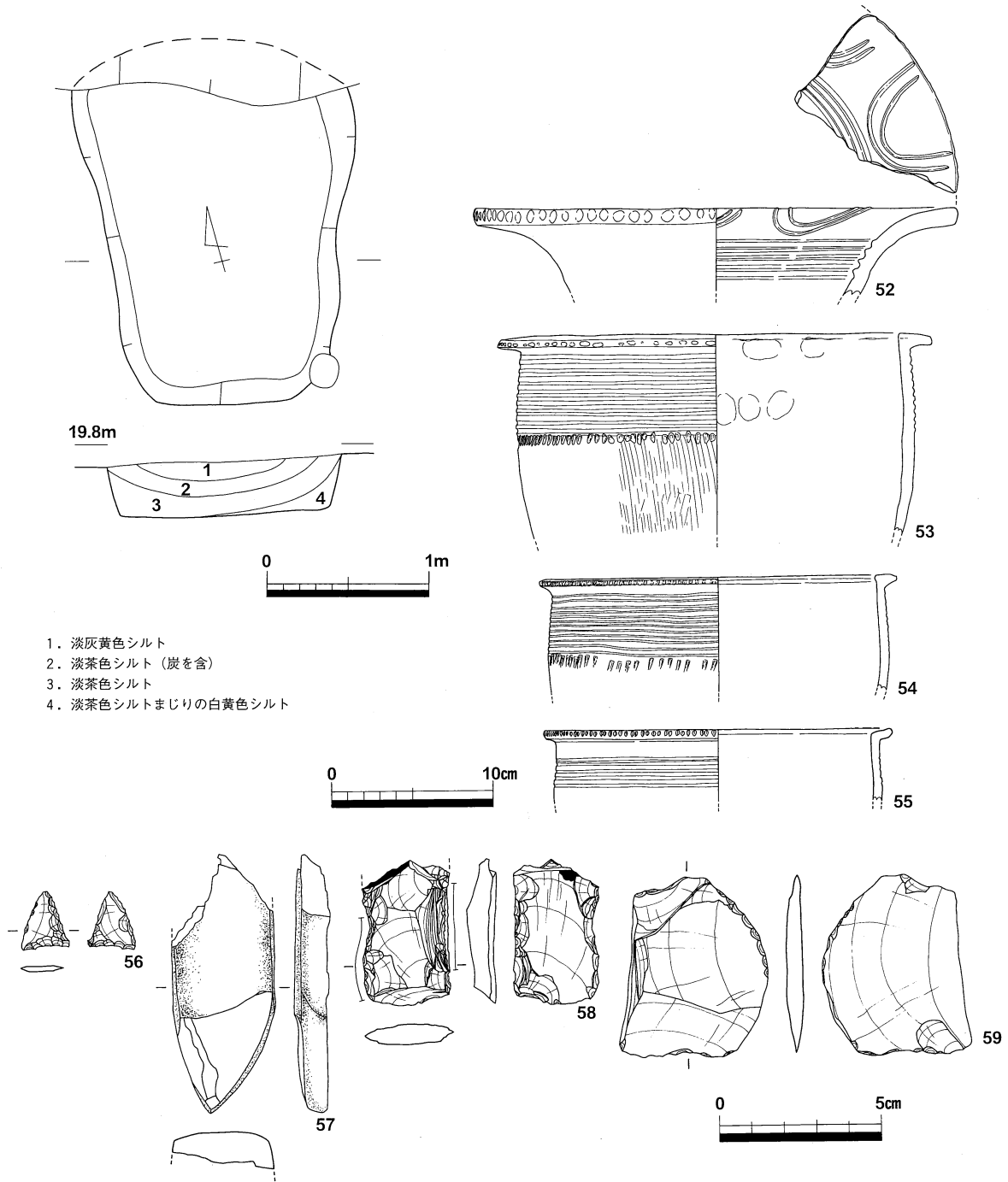
I-9区、X=143.209、Y=52.149付近で検出した土坑である。平面形は隅丸方形、断面は逆台形状を呈する。長辺約240cm、短辺約210cm、深さ約75cmを測る。SKa08からは28㊦コンテナ1箱弱分の遺物が出土している。34は器高11.3cmの小型の壺である。外面は縦ハケの後ヘラ磨きを施す。35は細片であるが、体部最大径付近の破片であろう。刻み目を



第24図 SKa08 平・断面図

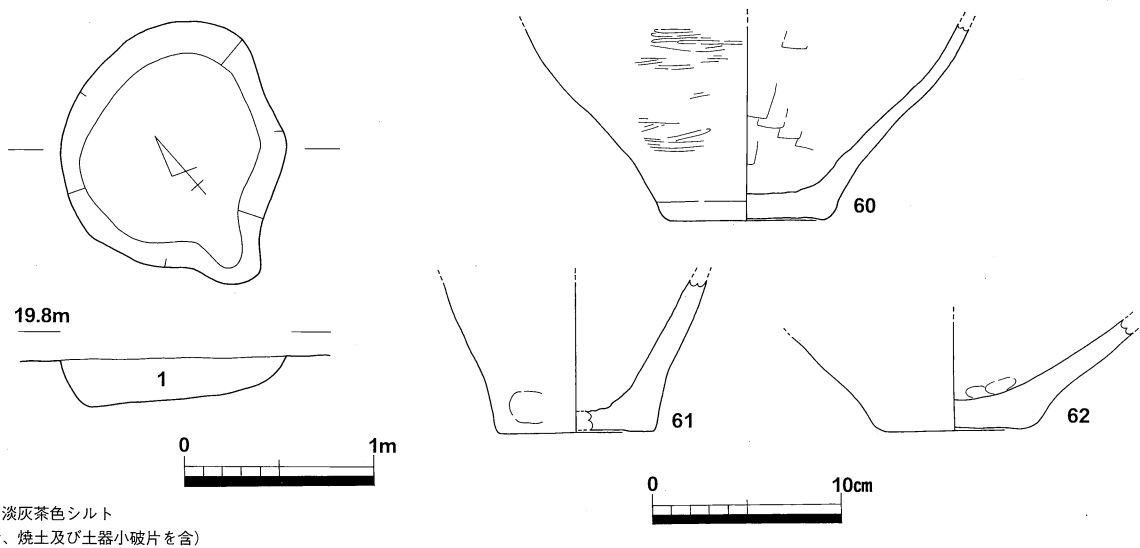


第25図 SKa08 出土遺物実測図



第26図 SKa09 平・断面図、出土遺物実測図

施した2条の平行する突帯を貼り、3条のヘラ描き沈線を巡らせる。36は断面三角形の貼り付け突帯を付した破片である。壺の頸部ではないかと思われる。37～42は甕、43～48は底部である。49は蓋形土器と思われる。つまみ部に2ヶ所の欠損部があり取っ手状のものが付加されていたと思われるが類例に乏しい。50は緑泥片岩製の磨製石斧の破片、51は凹み石である。砂岩垂円礫で敲打による凹みが認められる。



第27図 SKa10 平・断面図、出土遺物実測図

SKa09

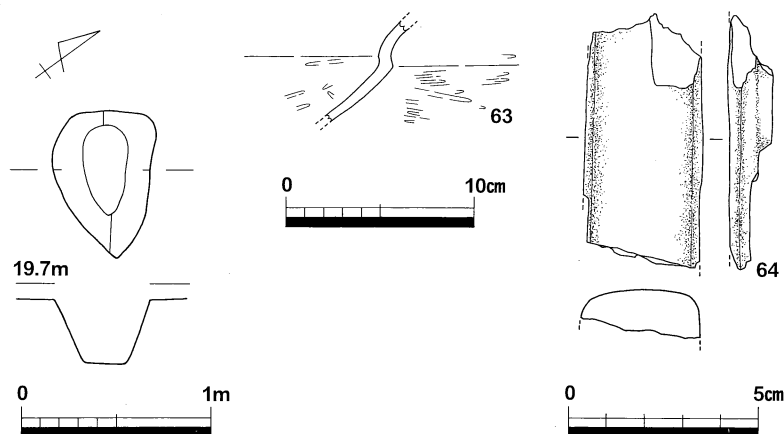
I-9区, X=143.211、Y=52.144付近で検出した土坑である。北側をSDa05に壊されるため本来の形状、規模は不明である。断面は逆台形を呈する。52は口縁部端面に刻み目、口縁部内面に2条の平行する貼り付け突帯による半円状の文様と4条以上の平行する突帯を付す壺である。53~55は甕。53、54は櫛描き沈線が巡る。いずれも口縁端部にO字状の刻み目が施される。56は石鏃、57は緑泥片岩製の柱状片刃石斧片である。58は両側縁を押圧剥離、刃潰しによって整形している。基部、刃部を欠損した打製石斧と思われる。このほかSKa09からは同時期の遺物片が28リットルコンテナ1/8箱分出土している。

SKa10

I-9区, X=143.209、Y=52.141付近で検出した土坑である。平面形は南部でやや突出する円形、断面は皿状を呈する。径約125cm、深さ約24cmを測る。60~62の底部片のほか弥生時代前期末~中期初めに属すると思われる遺物片が若干量出土している。

SKa11

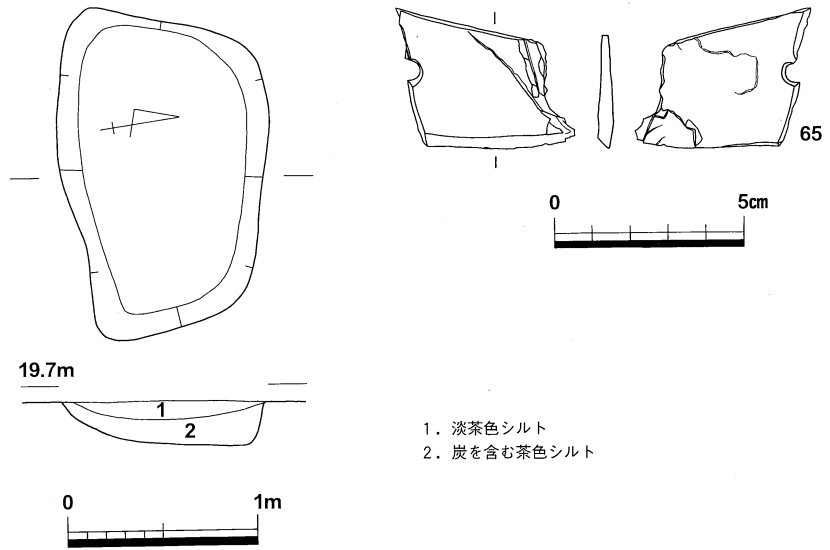
I-9区で検出した土坑である。平面形は隅丸三角形、断面形は逆台形を呈する。埋土などの情報が欠如するが、調査担当者が他遺構との関係から弥生時代前期の遺構と判断している。63は弥生時代後期の高杯か鉢の小片である。混入したものか。64は緑泥片岩製の磨製石斧片である。このほかSKa11からは前期の遺物片が28リットルコンテナ1/4箱分出土している。



第28図 SKa11 平・断面図、出土遺物実測図

SK a 12

I - 9区, X = 143.205、  
Y = 52.139付近で検出した土  
坑である。平面形は隅丸四角  
形、断面形は皿状を呈する。  
長辺約170cm、短辺約110cm、  
深さ約19cmを測る。磨製石包  
丁片のほか弥生時代前期末～  
中期初めと思われる土器片40  
点あまりが出土している。

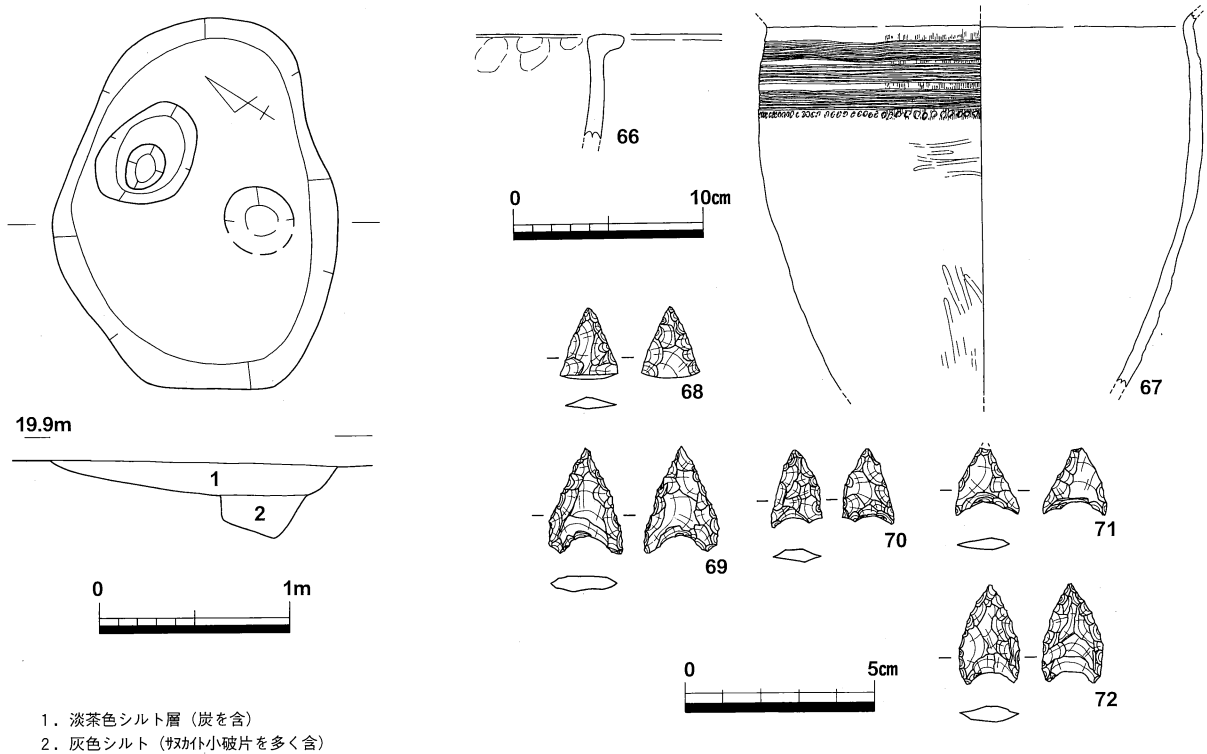


第29図 SKa12 平・断面図、出土遺物実測図

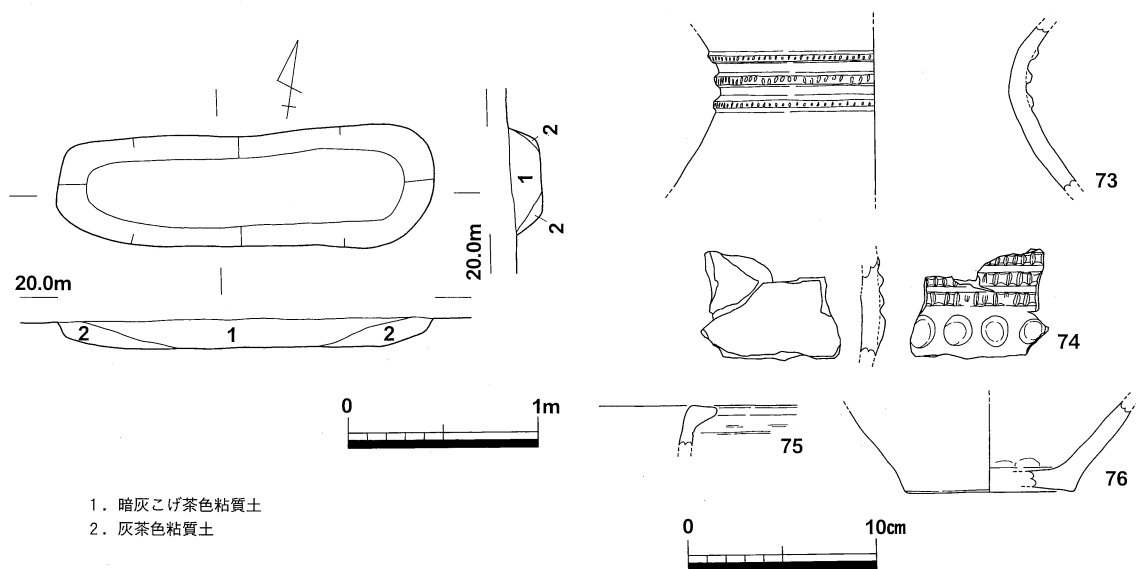
SK a 13  
I - 9区, X = 143.210、  
Y = 52.133付近で検出した土  
坑である。平面形は不整形、  
断面形は皿状を呈する。土坑内に2基の柱穴状の落ち込みがある。長辺約196cm、短辺約150cm、深さ約42cmを測る。66、67は甕、68～72はサヌカイト製の石鏃である。68が基部を欠損している他はほぼ完形で、凹基式石鏃である。このほかSK a 13からは当該期の遺物細片が40点あまり出土している。

SK a 14

I - 13区, X = 143.224、Y = 52.161付近で検出した土坑である。平面形は細長い隅丸方形、断面形は



第30図 SKa13 平・断面図、出土遺物実測図

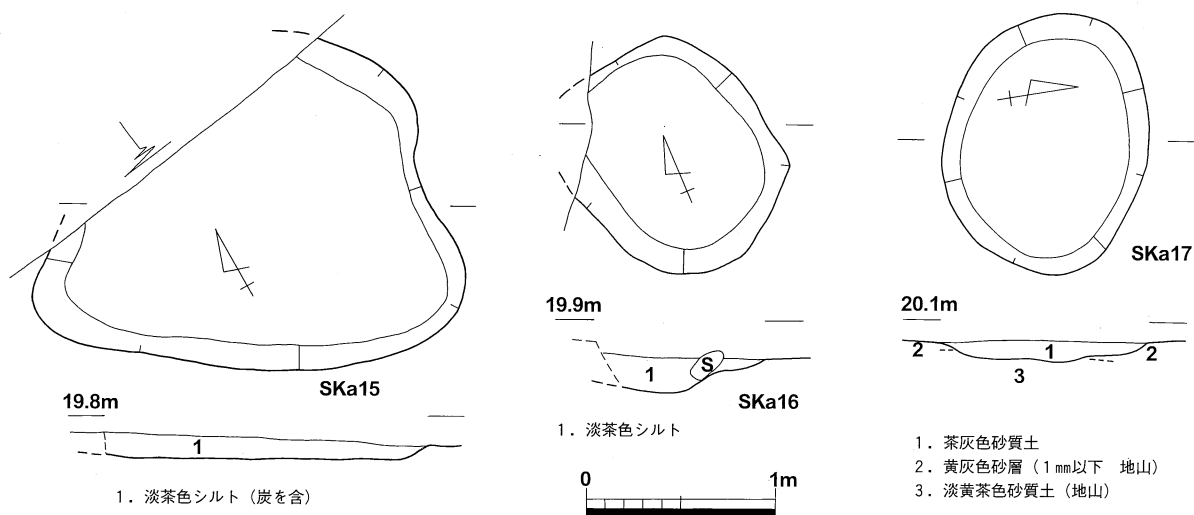


第31図 SKa14 平・断面図、出土遺物実測図

浅い皿状を呈する。長辺約198cm、短辺約58cm、深さ約17cmを測る。73は頸部に刻み目を施した3条の突帯が貼り付けられた壺、74は3条以上の刻み目を施した突帯と円形浮文を貼り付けた体部片である。

SKa15~17

SKa15~17は図化できる遺物は出土していないが弥生時代前期末~中期初めのもと考えられる。SKa15はX=143.206、Y=52.163付近、SKa16はX=143.203、Y=52.152付近、SKa17はX=143.226、Y=52.166付近で検出したものである。



第32図 SKa15~17 平・断面図

## ② 旧河道

### S R a 01

I-8、13区では弥生時代前期末～中期初めの遺物、弥生時代後期の遺物、古代～中世の遺物を含む旧河道を検出した。河道は北から東へ40° 振った方向を西南から東北に流れ、調査区北部でやや北側に蛇曲している。河幅約35m、最深部は標高17.2mで、地表面からの深さ約2.4mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、河底付近では砂層や粘質土層が複雑に堆積し、その上面には数層の粘質土層が水平方向に堆積し、水田が営まれていた。出土遺物と出土層位の関係から、河川として機能していたのは弥生時代前期末～中期初めで、河川の機能を喪失したのが弥生時代後期と判断される。以後、凹地の埋積が進行する過程で水田が営まれた。

S R a 01の北側約50mに高松市教育委員会が発掘調査を行った宮西・一角遺跡が所在するが、宮西・一角遺跡で検出された旧河道（S R 03）が、規模、層序、出土遺物の点でS R a 01と類似しており、連続するものと考えられる。なお、宮西・一角遺跡でも河川埋没後の凹地部分から水田畦畔が検出されている。（高松市教育委員会『高松市埋蔵文化財調査報告 第48集 宮西・一角遺跡 市道林町47号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2000.3）

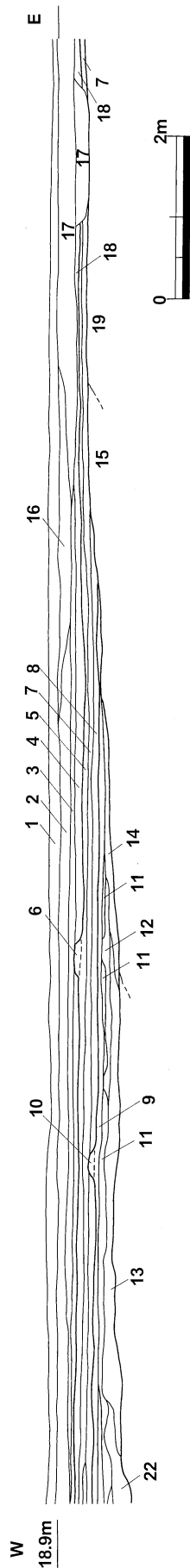
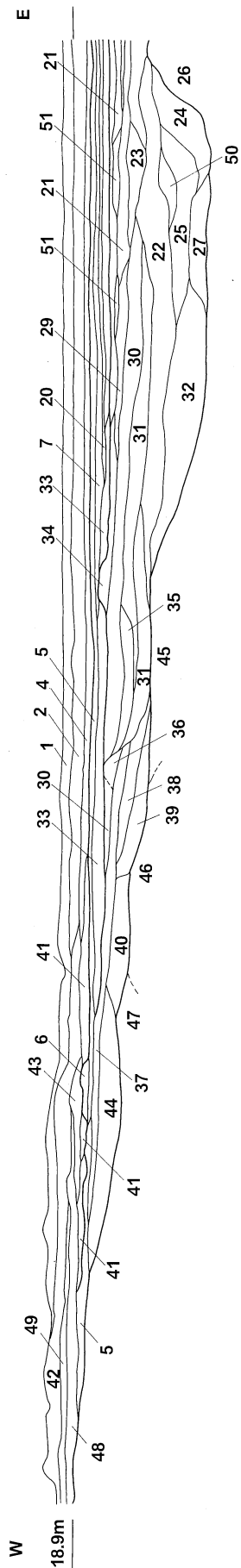
第34図はS R a 01の上層から出土した遺物実測図である。90のように見込みに砂目積の見られる陶器が含まれており、弥生時代前期から古代、中世、近世の土器が混在している。

第35図はI-8区部分のS R a 01から出土した遺物実測図である。95は壺である。最大径は中央よりやや下側になる。底部は円盤状に突き出し、頸部内面に絞り目、内外面に指おさえが多く見られる。96は球状の断面形の体部の破片である。櫛描文の下に三角形の列点文が巡る。97～99は甕、100～103は底部の破片である。100の底部外面は平坦で凹線文状の窪みが円形に巡るやや特異な形状を呈する。

104は青銅製の武器（銅剣）の先端部を転用したもので、鑿と考えられる。当初は、銅鏃もしくは楔と推定していたが、(1)先端部の刃部は片側により研ぎ出しており片刃の鑿の形状である。(2)先端部は本来尖っていたものを平らに加工しており、ここに使用痕と思われる縦方向の細かい傷が見られる。これは鑿として使用したことにより出来たものと解釈することができる。(3)基部は柄をつけるために加工されており、本来の剣の刃部を面取りしていることから銅鏃とは考えがたい、などの点が鑿と考える根拠である。（愛媛大学 吉田広氏より御教示を得た。）本品はトレンチ掘削中に出土したもので、厳密には出土層の特定は出来ていないが、類似する遺物の年代観と、S R a 01出土遺物から弥生時代前期末～中期初めに属するのが妥当であり、第35図に掲載する。

第36図はI-13区部分のS R a 01から出土した遺物実測図である。河底付近から弥生時代前期末～中期初めの遺物が、埋土の中位付近から弥生時代後期の遺物が出土している。105は器壁が頸部から段状に肥厚し、外反する口縁をもつ壺である。106～111は甕である。106は櫛描き沈線の下に櫛描きの山形文を施す。107の口縁端部は欠損している。櫛描きによる多条沈線が施される。108の内面は口縁部付近は横方向のヘラ磨き、以下は縦方向のヘラ磨きが主に施される。外面は磨滅するがヘラ磨きが施されている。109の口縁屈曲部の外面には棒状工具による圧痕が見られる。112～115は底部である。114はわずかに上げ底状で、体部の立ち上がりが急なことから蓋の可能性も考えられる。

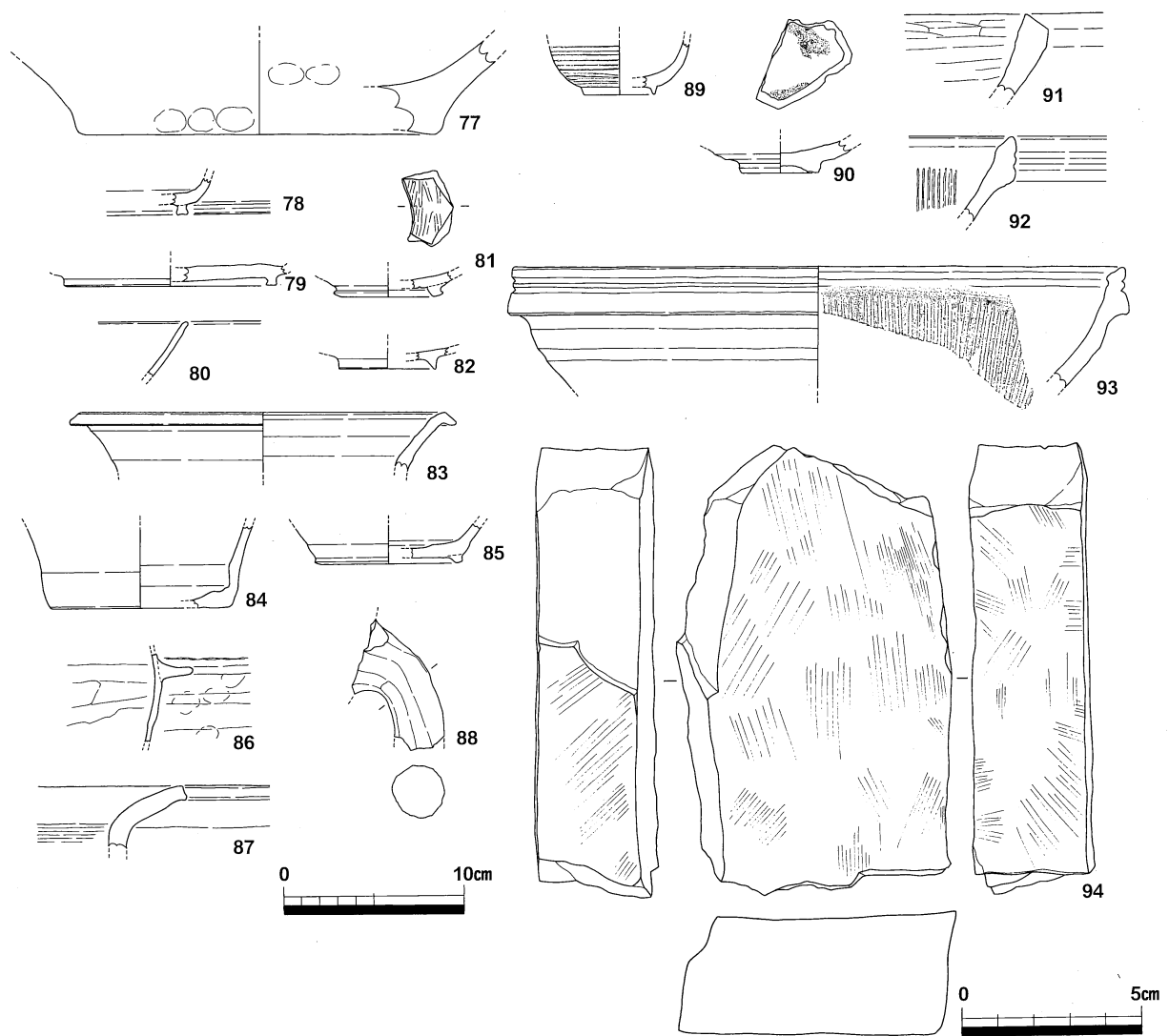
116～120は弥生時代後期のもので、いずれも下川津B類土器、磨滅している。119の高杯か鉢は大きく外反する口縁で、内面は強くナデられている。120は口縁端部を水平方向に摘み出し、頂部に平坦面をつ



- 1. 耕作土
- 2. 暗茶灰色粘質土
- 3. 茶灰色粘質土
- 4. 淡茶灰色粘質土 (1mm前後の砂粒を含む)
- 5. 灰茶色粘質土 (1mm前後の砂粒を含む) SZ a 02
- 6. 濁茶灰色粘質土 (1mm前後の砂粒を含む)
- 7. 濁茶灰色粘質土 (1~2mm程度の砂粒を含む)
- 8. 暗茶灰色粘質土 (1~2mm程度の砂粒を含む)
- 9. 灰茶黒色粘質土 SZ a 01
- 10. 茶黒色粘質土
- 11. 灰色砂層と茶黒色粘質土層のまじった土
- 12. 褐茶色粘土
- 13. 12層と灰色砂質土のまじった土
- 14. 暗灰色粘砂土
- 15. 黄茶色粘質と5~10cmの円礫まじり土 (ほとんど礫 地山)
- 16. 暗灰色粘質土 (旧耕土)
- 17. 褐灰色粘質土 (旧耕土)
- 18. 灰黄茶色粘質土 (床土)
- 19. 黒色粘土に5~10cmの円礫を多量に含む (地山)
- 20. 7層とほぼ同じ 砂粒が少ない
- 21. 濁茶白色砂質土
- 22. 濁茶灰色粘質土
- 23. 濁黄白色砂質土
- 24. こげ茶灰色砂質土
- 25. 濁茶灰色砂質土 (地山)
- 26. 灰茶灰色粘質土 (地山 1~20cm程度の円礫を含む)
- 27. 灰茶色砂質土 (地山)
- 28. 暗茶灰色粘質土
- 29. 暗茶灰色砂まじり粘質土 (1~10cm程度の円礫を含む)
- 30. 暗茶色砂まじり粘質土 (5mmから2cm程度の風化礫を含む)
- 31. 暗茶灰色砂まじり粘質土
- 32. 暗黒灰色粘砂 (シルト質) 土
- 33. 暗茶灰色砂まじり粘質土
- 34. 33層より砂が少量より黒が強い
- 35. 灰茶色砂まじり粘質土
- 36. 明黄茶色粘質土
- 37. 灰茶色粘質土
- 38. 茶灰色粘質土
- 39. 黄灰茶色粘質土
- 40. 茶灰色砂質土
- 41. 濁茶白色砂質土
- 42. 濁茶灰色粘質土
- 43. 濁黄白色砂質土
- 44. こげ茶灰色砂質土
- 45. 濁茶灰色砂質土 (地山)
- 46. 灰茶灰色粘質土 (地山 1~20cm程度の円礫を含む)
- 47. 灰茶色砂質土 (地山)
- 48. 暗茶灰色粘質土
- 49. 暗茶灰色砂 (ルーズ)
- 50. 暗黒灰色砂
- 51. 灰茶色砂まじり粘質土 (弥生後期包含層)

第33図 SRa01 断面図

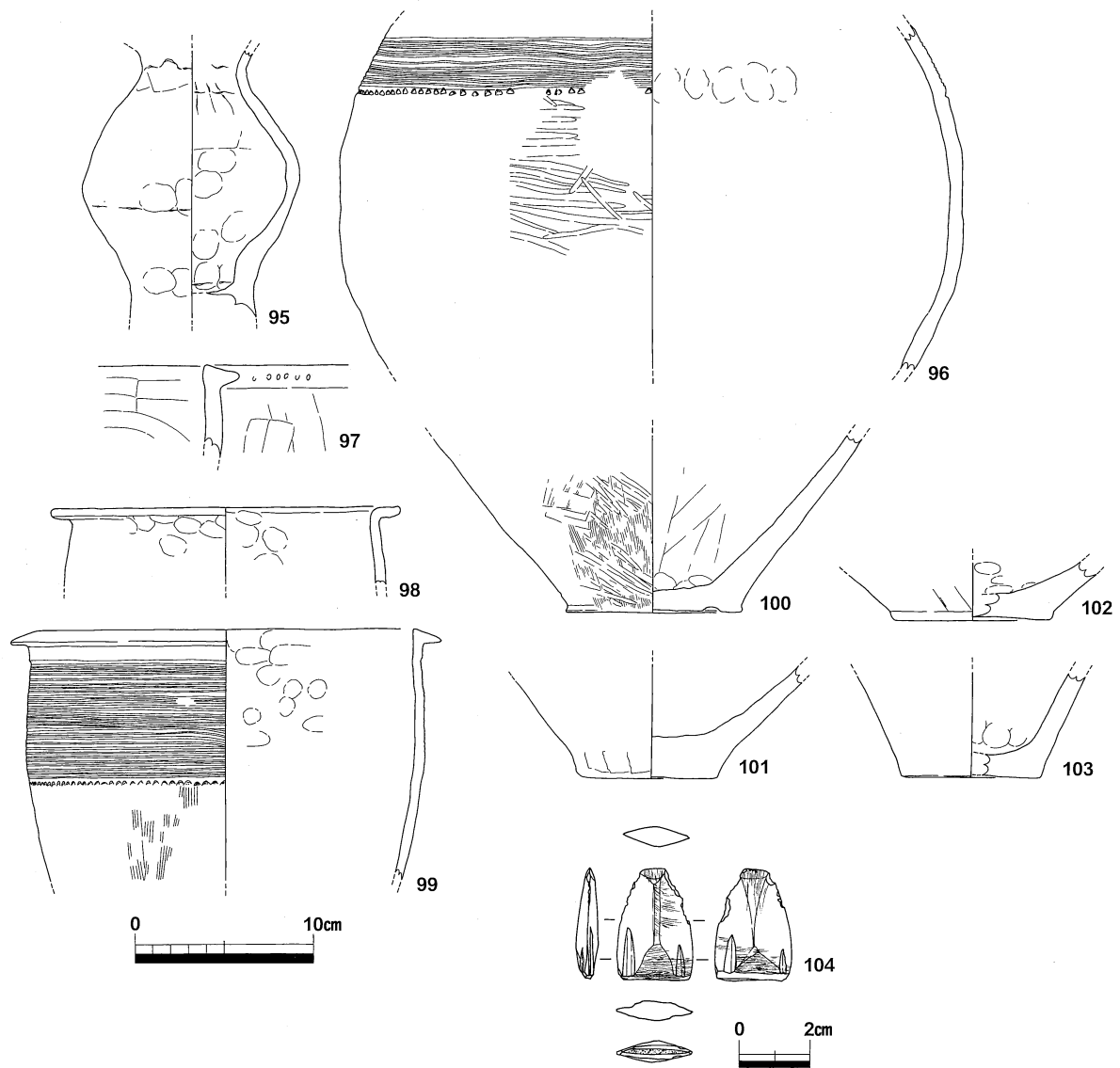




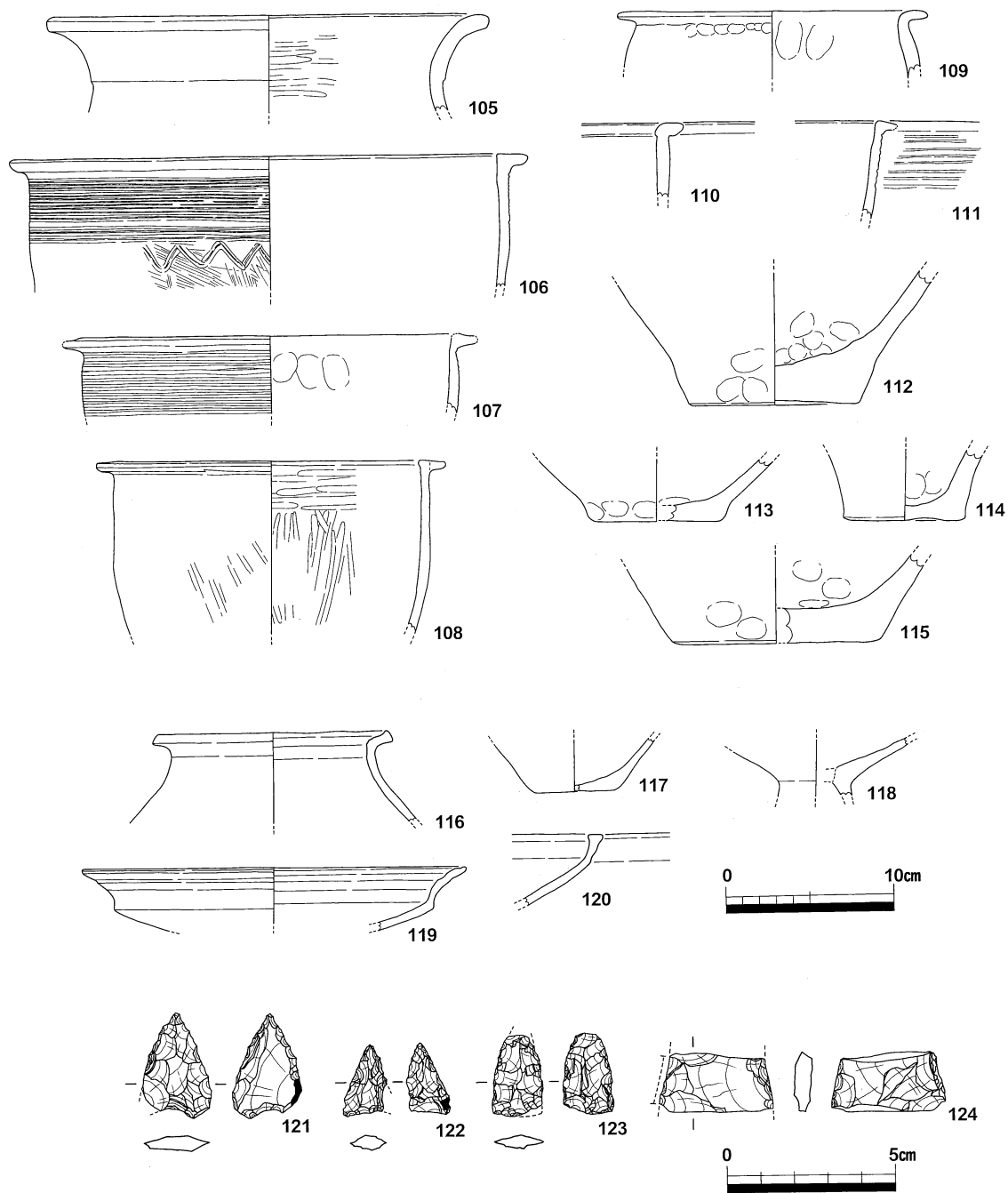
第34図 SRa01 上層出土遺物実測図

くっている。

121～124は打製石器である。122が前期末～中期初めの遺物包含層から出土した以外は、後期の包含層から出土したものである。121、122は凹基式石鏃、123は折損するが平基式石鏃である。124は両側縁に押圧剥離を加え整形し、一側縁には刃潰しが見られる。小型の打製石斧ではないかと考えている。



第35図 SRa01 出土遺物実測図（その1）

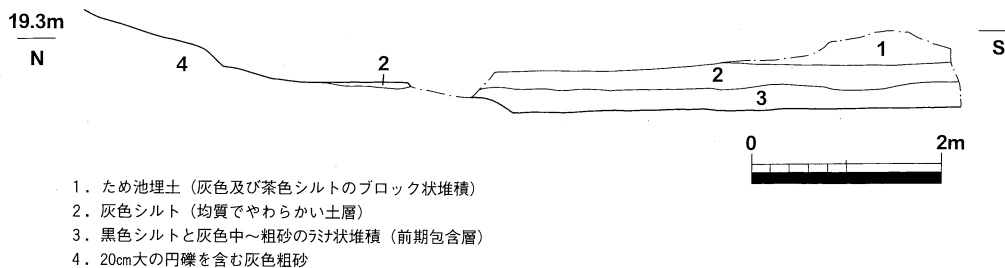


第36図 SRa01 出土遺物実測図（その2）

SR a 02

I-9区西端で検出した西から東方向に流れる旧河道である。昭和19年に埋立られた池台池の池底に埋土の一部が遺存している状況で、本来の規模は不明であるが、東から20°ほど南に振った方向に流れている。残存していたSR a 02埋土は、川幅6.5m、深さ0.5mほどで、均質でやわらかい灰黒シルト層の上層と黒色シルト層と灰色の中～粗砂層が互層状に堆積する下層の2層に分層される。

第38～42図はSR a 02から出土した遺物実測図である。125～216は②層出土のもの、217～224は①層とトレンチから出土したもの、225～239は予備調査の3トレンチを再掘削した際に出土した遺物の実測図



第37図 SRa02 断面図

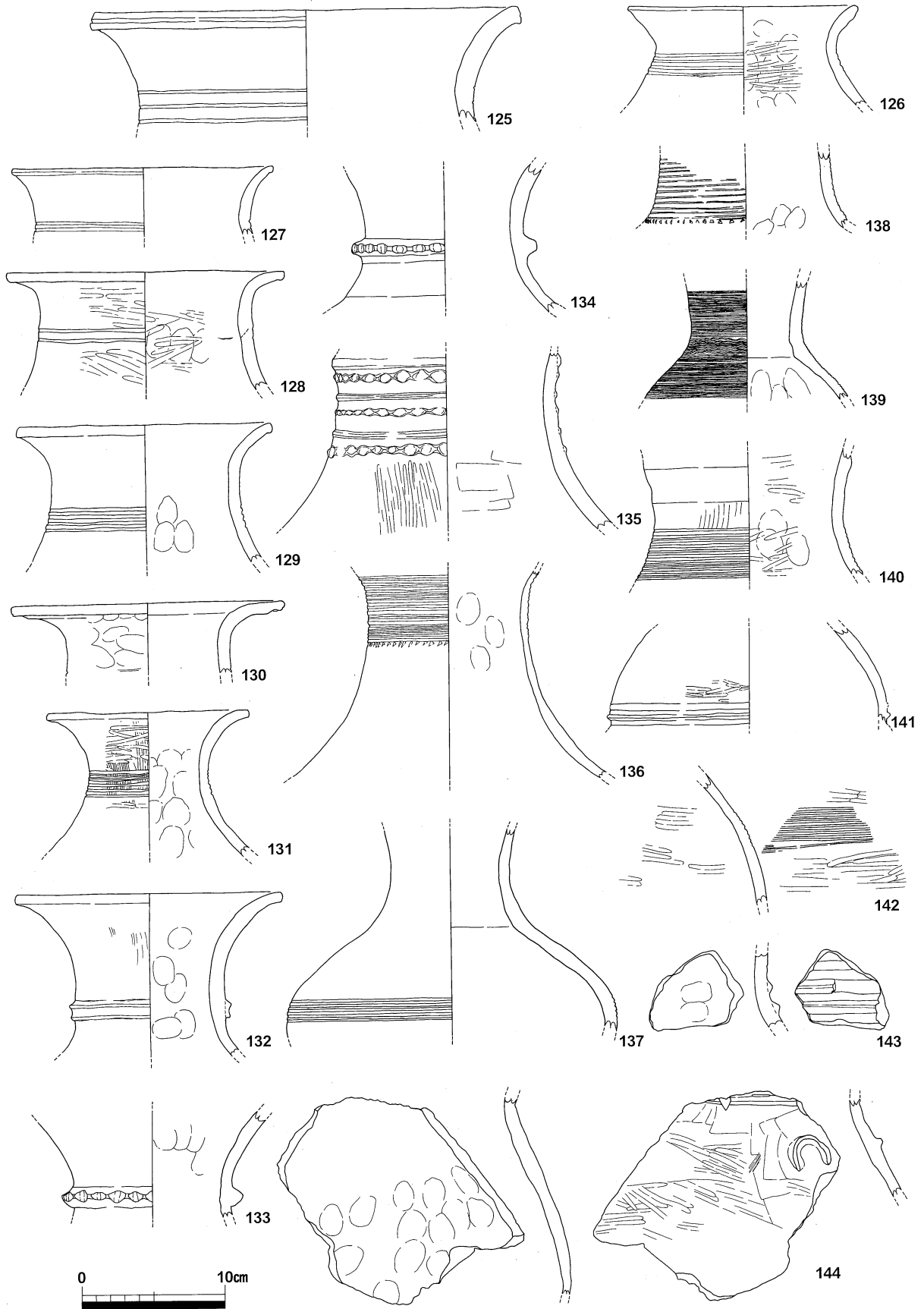
である。

125～147、149、150は壺および壺と考えられる破片である。頸部にヘラ描きの沈線の巡るもの、突帯を貼り付けるもの、突帯に刻み目を施すもの、櫛描きで多条の沈線を施すもの、櫛描き文の一部を波状文にするものなどバラエティがある。125は口縁端部に沈線が巡る。130は弥生時代前期末～中期初めのものとするには異質な形状であるが、胎土、頸部の沈線などから当該期と考えられる。132の貼り付け突帯は、幅広で中央部を窪ませて2条の突帯が巡るように見せている。135は6条以上の突帯を貼り付け、O字状の刻み目を施すものと無文のものを交互に並べている。137は体部最大径付近に5条のヘラ描き沈線が巡る。140は壺頸部と考えたが、径・傾きは不明確である。143は壺頸部の破片と考える。3条の貼り付け突帯を巡らすが、突帯の剥落部にヘラ描きの沈線が巡っており、突帯の貼り付け位置を決めるために施された可能性が考えられる。144は壺体部上半の破片である。破片上端にヘラ描き沈線か削り出し突帯が見られるが、詳細不明である。以下に半円状の小突帯を付している。145は7条以上の貼り付け突帯を巡らしている。突帯間に丁寧なヘラ磨きが施される。149は無頸壺、150は小片のため傾き不明確である。口縁端部直下を肥厚させているから壺と考えた。

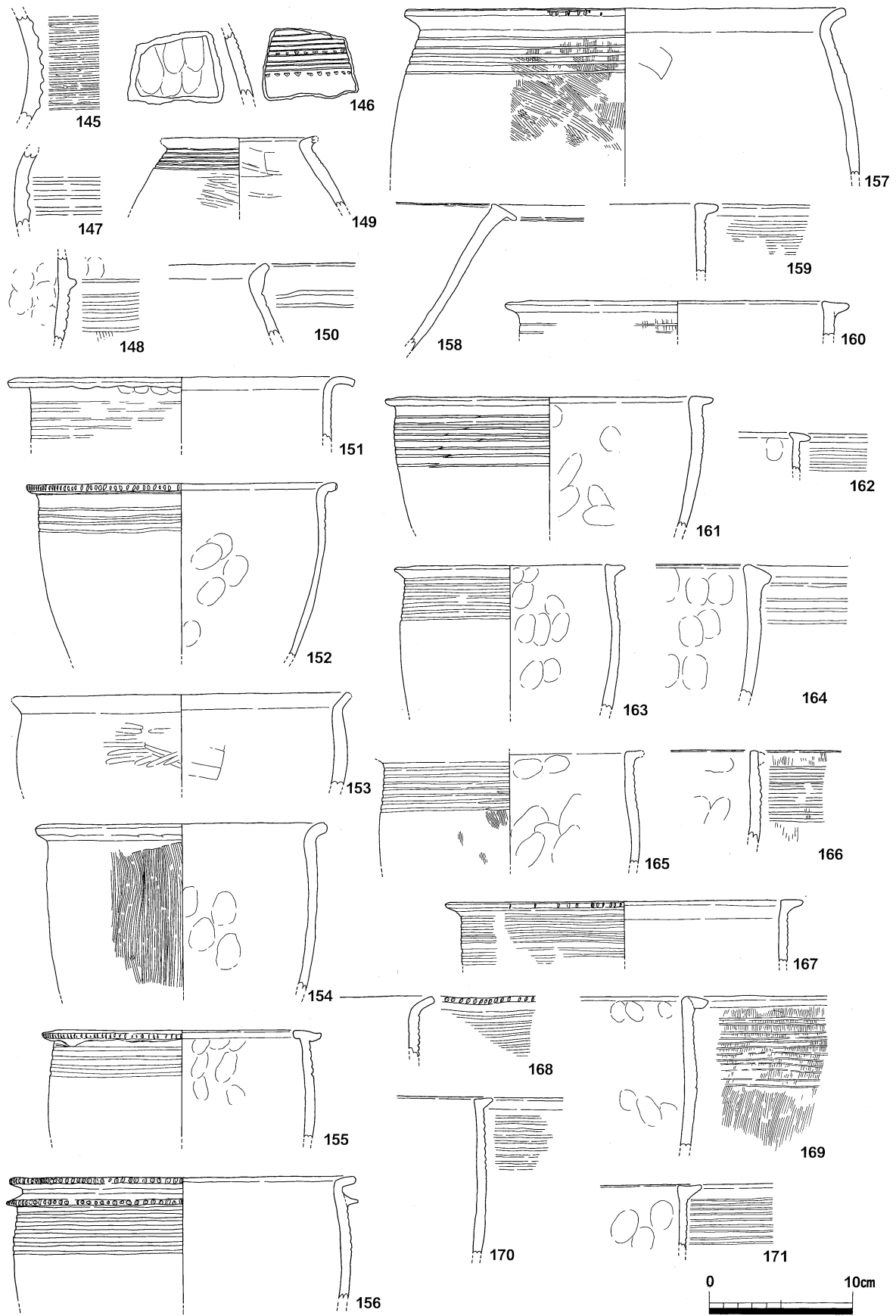
148、151～185は甕である。151は大きく屈曲させる如意状口縁、152は口縁端部に刻み目を施し、口縁部直下に1条のヘラ描き沈線、体部上半に4条のヘラ描き沈線を巡らす。153は小片のため復原径、傾きは不明確である。154の体部外面には縦方向のハケが丁寧に施されている。155の口縁部は内側にも摘み出してT字状の形態を呈する。156は如意状の口縁の下部にも突帯を付し、端面に刻み目を施す。158はやや外反する傾きのものである。159～167、169～185は断面三角形の逆L字状の口縁形態である。166は口縁部が剥落するが、剥落部にハケ、直下にヘラ描き沈線が巡る。このことからハケ調整の後にヘラ描き沈線を施し、次に口縁部を貼り付ける工程が復原できる。169は口縁部整形後にハケ、後にヘラ描き沈線を施し、後に沈線付近の一部をナデている。178は薄い器壁である。外面はハケの後3条の櫛で多条の櫛描き文を描き、その下に米粒状の列点文が巡る。179は櫛描き沈線の下に平面三角形の列点文を巡らしている。

186～189は蓋形土器である。頂端部を外側に摘み出し、体部と明瞭な境界を作るものが多い。190～215は壺、甕、甑の底部片である。191は底部付近にまでハケを施している。193はややいびつな上底状を呈する。198は胎土中に結晶片岩粒を多く含む点の特徴である。200の底部も指オサエによって窪み、わずかに上げ底状を呈している。201、211の底部は円盤状ではなく指オサエによって薄く仕上げられる。202は底部外面にもヘラ磨きが施される。

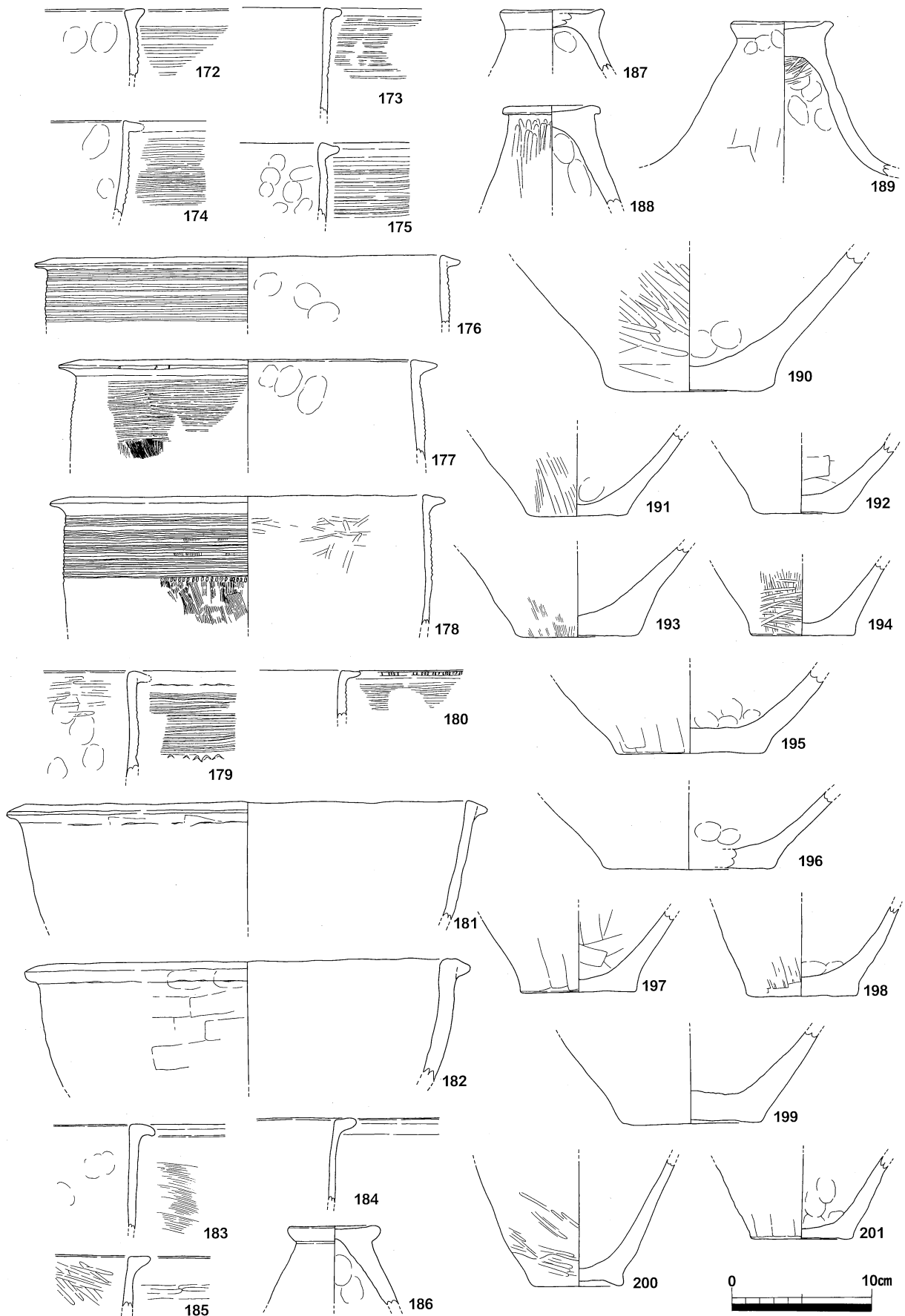
212の底部付近外面はやや窪み、それから体部が立ち上がっている。蓋形土器の可能性もある。214、215



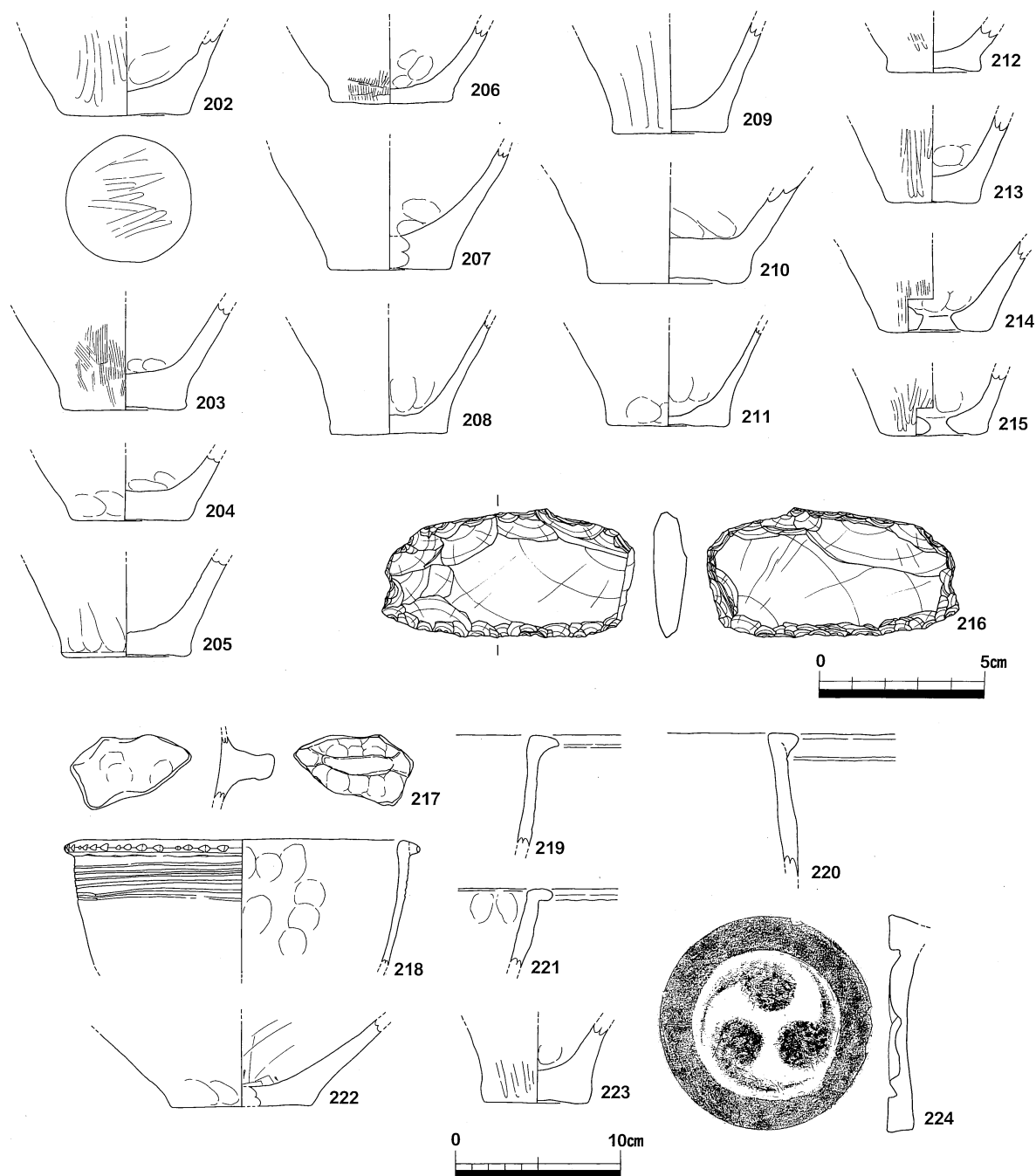
第38図 SRa02 出土遺物実測図（その1）



第39図 SRa02 出土遺物実測図 (その2)



第40図 SRa02 出土遺物実測図（その3）



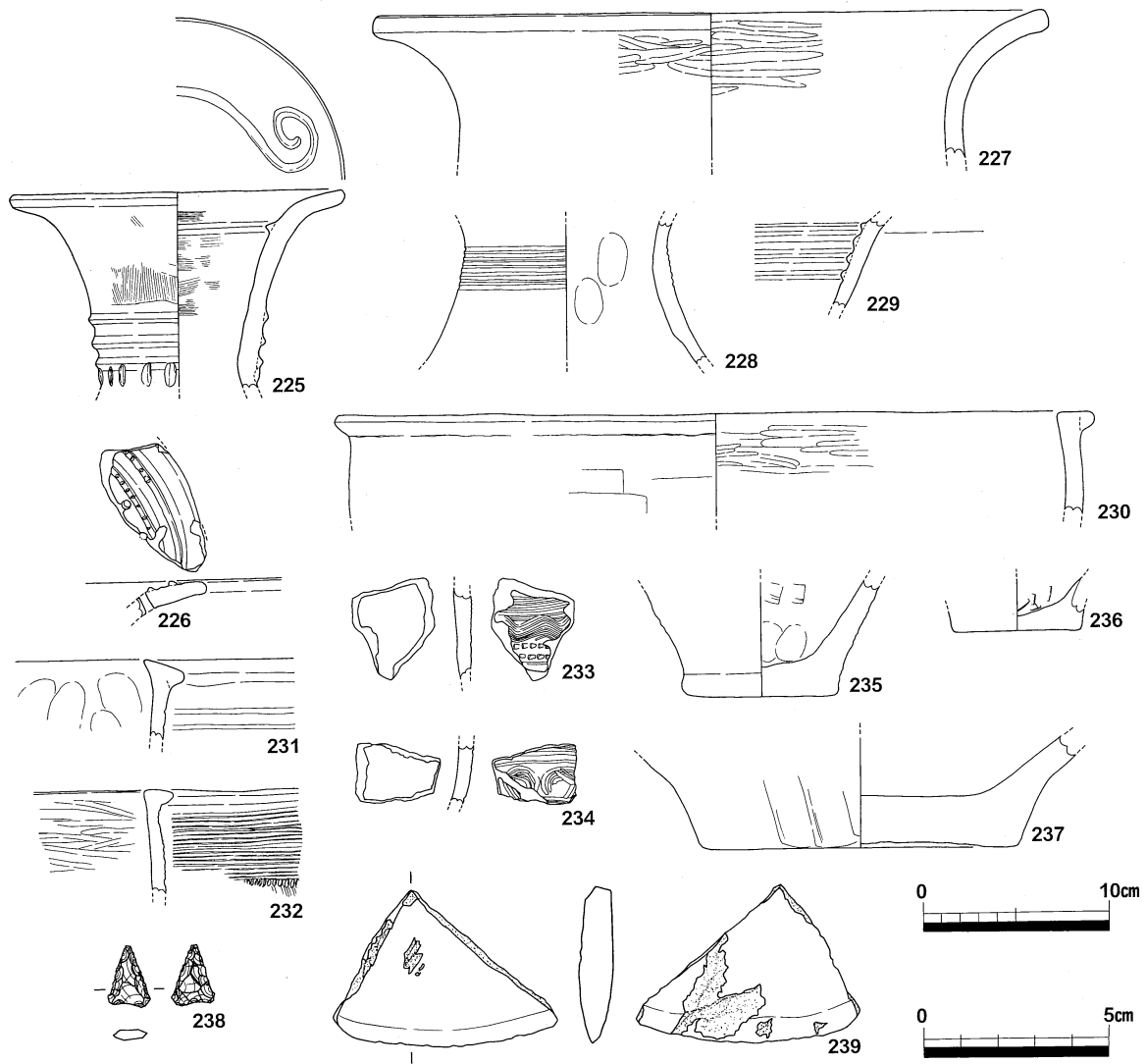
第41図 SRa02 出土遺物実測図（その4）

は甑である。焼成後に1孔を穿孔している。216はサヌカイト製の打製石包丁である。刃部はわずかに外湾し、背面は押圧剥離と刃潰しで整形している。一側縁には抉りを入れている。

217は舌状の突出部をもつ土器片である。甕の体部上半につけられるなどの類例があり把手と考えられる。218～221は甕である。220は磨滅するが、口縁部下の外面に1条の沈線の痕跡が認められる。222は形態から壺の底部、223は形態から甕の底部であろう。224は巴文軒丸瓦である。珠文を持たない。明らかに混入した遺物である。

225～229は壺である。225は口縁部の破片で、端部付近はヨコナデ、以外は内外面にハケが施される。





第42図 SRa02 出土遺物実測図（その5）

頸部外面に3条以上の突帯を付し、上から3条目の下側に縦方向に突帯を付す。口縁部内面には突帯で蕨手状の文様を作っている。226は口縁部付近の小片である。内面に2条の突帯を巡らす。突帯の両側は強いナデにより凹線文状に窪んでいる。突帯には刻みが施される。また、2孔の有孔が見られる。227はラッパ状に開く口縁部の破片である。内外面に丁寧なヘラ磨きが施される。228は頸部の破片。7条のヘラ描き沈線が巡る。229は4条の貼り付け突帯が平行に付された小片である。口縁部内面に付されたものとして図化している。230～232は甕である。233、234は体部の小片。233は櫛描きの沈線と波状文およびD字状の列点文が施されている。234はヘラ描きにより渦巻状の文様や直線の沈線が描かれている。235～237は底部、238は凹基式の打製石鏃、239は磨製石包丁を折損後に再利用した石器である。現存部の一侧辺に整形痕が見られる。

(2) 弥生時代後期

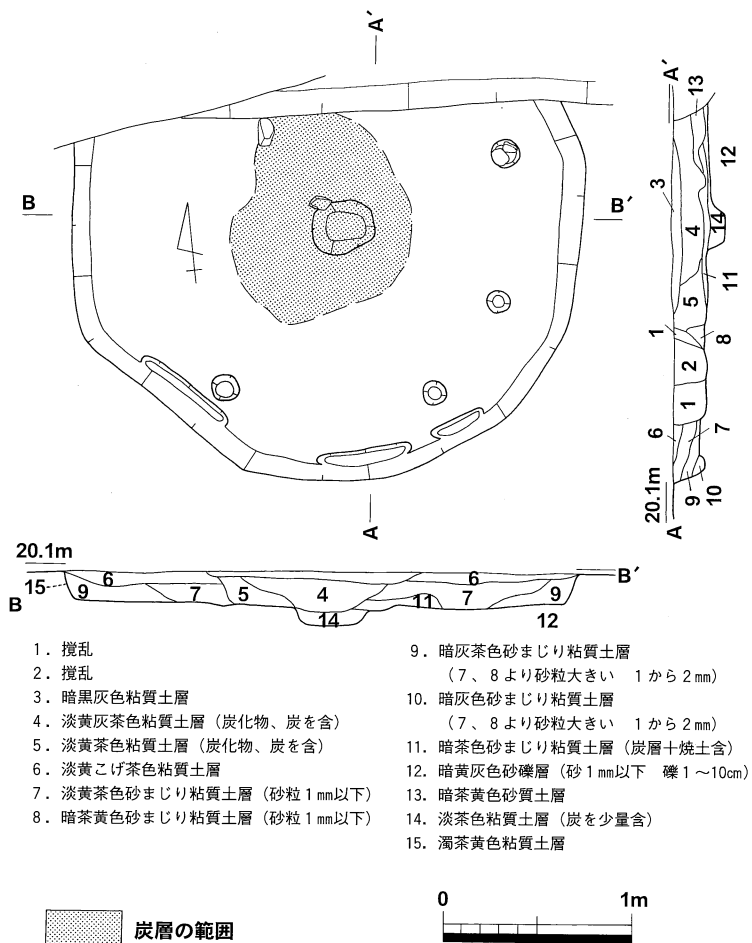
① SHa01

I-13区、X=143.227、Y=52.171付近で弥生時代後期の竪穴住居を検出した。北地区の弥生時代後期の遺構・遺物は、SRa01の埋土中に遺物が包含されている程度で、僅少である。特に弥生時代後期前半について北側の宮西・一角遺跡の調査成果(注)からSHa01を南限とし北側に当該期の集落が広がる可能性がある。なお、SHa01は旧中州と考えられる砂礫層の盛り上がり近接しており、微高地に位置するものと考えられる。

(注) 高松市教育委員会『宮西・一角遺跡 市道林町47号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2000.3

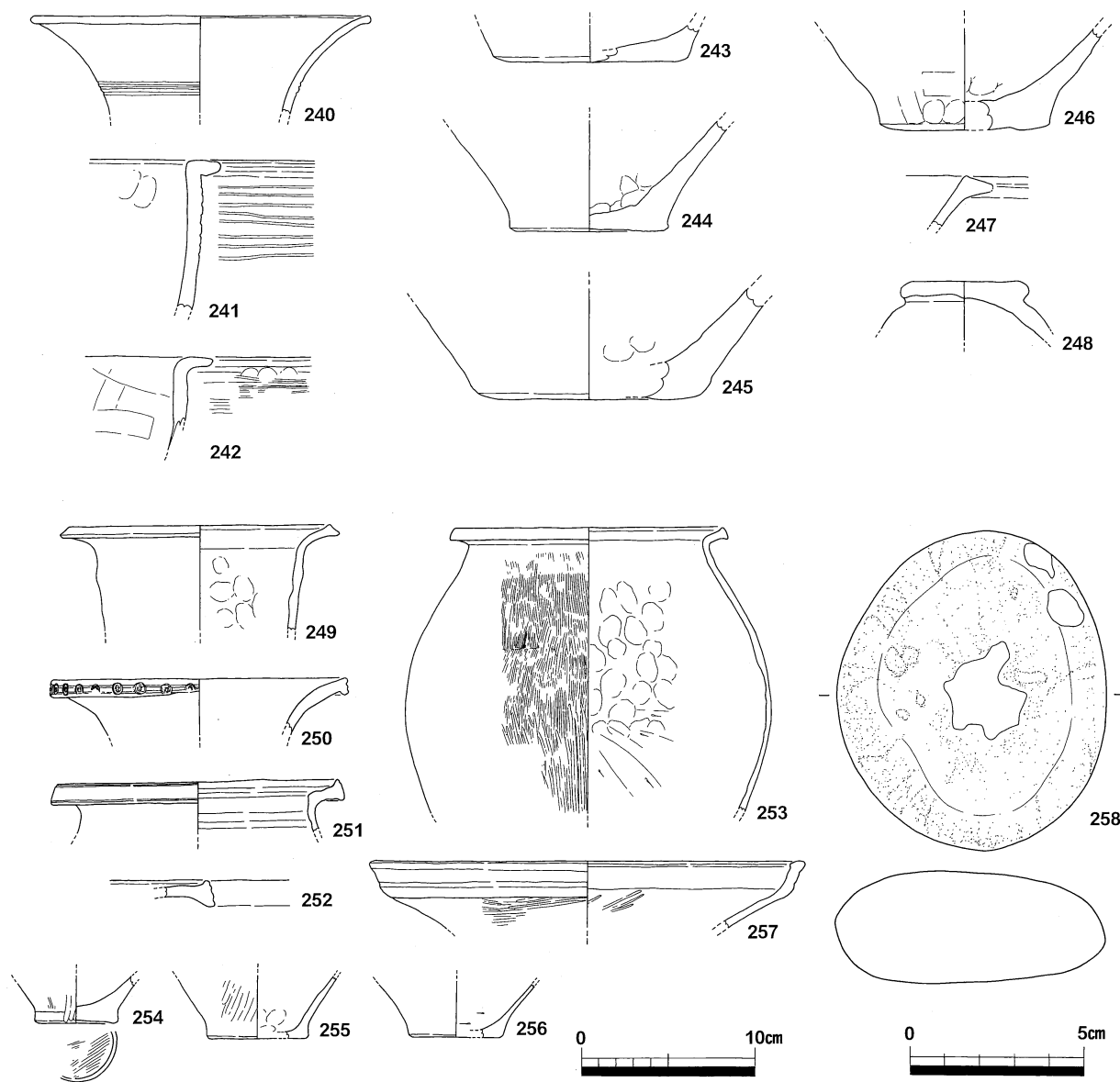
SHa01は北側が調査区外で、一部をSDa09に壊されているため、全形は不明である。径5.4mほどの多角形の平面形であるが、内角は28~50°とばらつきがあり、不整な八角から十角形の平面形態と推定される。一部に幅18cm、深さ3cmほどの壁溝と4基の柱穴を検出できた。また、中央には長径68cm、短径52cm、深さ18cmほどの楕円形の土坑があり、炉とかんがえられる。炉の周辺には炭層が広がっており、一部には焼土も見られた。埋土はやや複雑な堆積をしており、埋没の過程を復原するのは困難である。

第44図はSHa01出土の遺物実測図である。240~248は弥生時代前期末~中期初めのもの、249~257は弥生時代後期前半のものである。248は蓋形土器である。底部平面形は不整な楕円形、頂部側縁は外側に粘土がせり出したままで未調整である。形態から底部の破片である可能性もある。249~257のうち、249、255は3層、250、253は4層、256は2層から出土している。247~253、255~257は下川津B類土器である。250は口縁端部を下方に摘み出し2条のヘラ描き沈線と竹管による二重の円形の文様を施す。251は頸部から大きく外反し、端部は上下に摘み出している。253は外面上半がハケ、下半がハケ後ヘラ磨き、内面上半は指オサエ、下半はヘラ削りで後に多出する下川津B類甕の調整手法が見られる。254は平底の底部と外面にハケ、体部外面にはヘラ磨きの痕跡が認められる。257は高杯か鉢である。口縁端部に水平方向の平坦面をつくる形態である。258は砂岩円礫の擦り石である。一面に磨滅が見られる。SHa01は床面から良好な状態で遺物は出土しなかつ



第43図 SHa01 平・断面図

たが、出土遺物全般の様相から弥生時代後期前半のものと考えられる。



第44図 SHa01 出土遺物実測図

### (3) 古代

#### ① 水田 (SZ a 01、02)

弥生時代前期から後期の遺物を埋土中に包含するSR a 01は流水による複雑な堆積をしているが、ほぼ河川としての機能を喪失した段階以後は、凹地に細砂やシルト、粘土などの細粒物質が水平に堆積する。この層は水田として土地利用されており2面以上の水田が検出されている。I-8区では古代の水田が、I-13区ではI-8区に連続する可能性のある水田とその上位からもう一面の水田遺構が検出されている。

I-8区で検出された水田は、幅50cm、高さ5cmほどの畦畔で区切られたもので8面の圃地が確認され

た。これらは河道の方向とほぼ平行する座標北から38～41° 東に振った方向に直線的に4条の畦畔を配し、これと直角に交わる畦畔によって圃地を造っている。直交する畦畔は1条しか検出出来なかったため、残念ながら一筆の圃地の規模は不明であるが、検出範囲の面積を測定すると少なくとも一筆の面積は170m<sup>2</sup>を越えている。各圃場の高さは、直交する畦畔より南側で、西端が18.75～80m、以下東に18.72～79m、18.69～73m、直交する畦畔より北側で、西端が18.72～76m、以下東に18.65～73m（地筆界は推定）、18.63～68m、18.69～75mを測る。幅20cmほどの水口を2ヶ所検出しているが、配水の復原は難しい。

I-8区の北側のI-13区では2面の水田が検出された。下層の水田は2条の平行する畦畔と、これに直交する畦畔が検出されている。上層水田は痕跡も含めて3条の同一方向の畦畔と、これと直交する畦畔が断片的に検出されている。

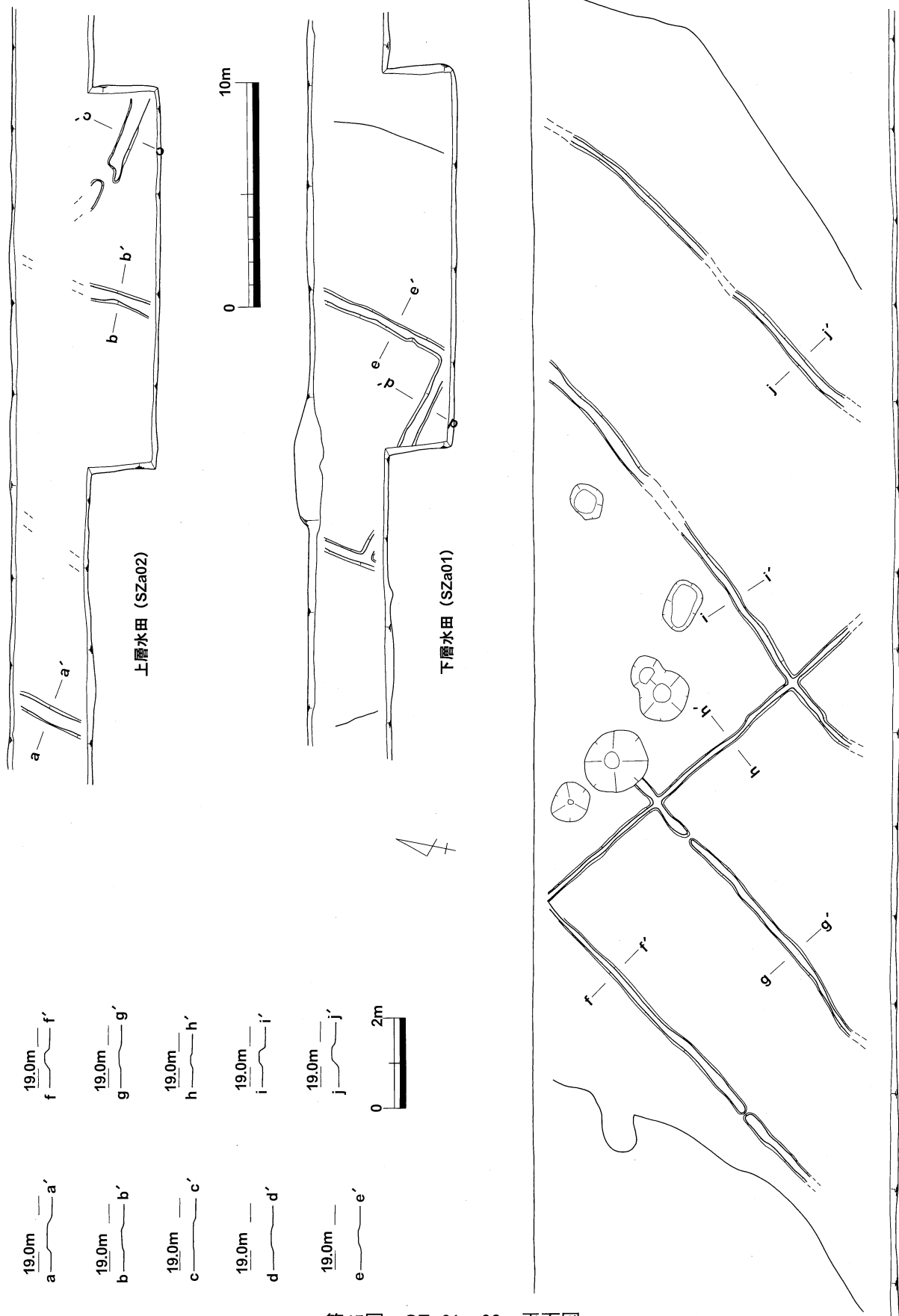
調査年度に作製された概報（『空港跡地遺跡発掘調査概報 平成4年度』）では、上位の水田面をI-8区で検出された水田と連続するものとしているが、両調査区の断面図および断面写真を検討した結果、上位の水田面がI-8区の水田と連続することはあり得ず、I-13区の下位の水田が連続する可能性が高いことが判明したので訂正する。しかし、I-8区の水田とI-13区の下層の水田をすると、わずか4.5m離れた両調査区で畦畔の方向が食い違っており、同一の水田面として良いかどうか問題が残る。また、航空測量によって作製された平面図では両者に20cmほどの高低差があり（標高はI-8区水田とI-13区上層水田の方が整合する）、I-8区とI-13区下層水田は近接する時期の水田であるものの、同一水田面ではなく別時期のものである可能性もあり得、確定できない。調査年度、調査担当者が異なる以上、土層の分層などで不整合が生じるのは避けられないことで、遺憾ではあるが整理段階においてI-8区の水田とI-13区の2面の水田の関係については確定させることはできない。

I-8区の水田に関連して、出土量は28リットル入りコンテナ1箱ほどの比較的多くの遺物細片が出土している。第46図259～289はI-8区から出土した水田関連の遺物である。第47図はI-13区の水田関連の出土遺物である。第46図259～264は1層（第14図18層）出土、265～289は2層（第14図19層）の遺物実測図である。2層は水田耕土の直上を覆う堆積土、1層はその上層である。259～261は須恵器蓋の口縁部小片である。259と261の端部は下方に屈曲させやや尖り気味におさめ、260は端部を水平方向に屈曲させるとともに下方に摘み出している。内側には沈線が巡る。262～264は須恵器の底部の小片である。262は杯Bの底部と考えられる。見込み部にロクロによらないナデ調整が見られる。

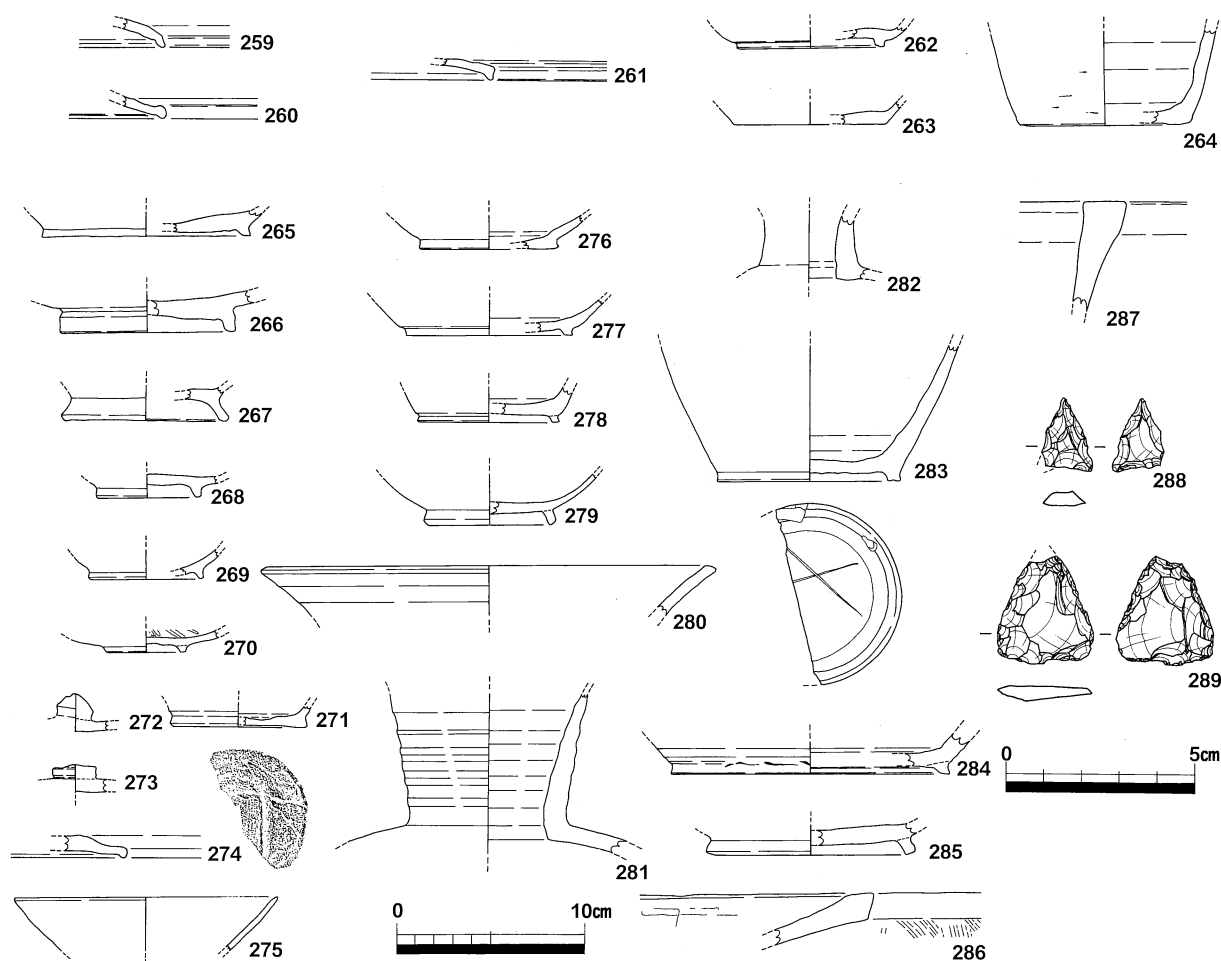
265～268は土師質に焼成された土器である。269は黒色土器碗、270は瓦器碗、271は円盤状高台の土師器の底部片である。274～278は須恵器である。272、273は須恵器蓋の宝珠形のつまみ部の破片である。274は口縁端部の小片。相対的に肉厚な器壁が端部で薄く引き伸ばされ段状を呈する。端部は下方に屈曲され丸く収めている。279は東海地方産の灰釉陶器碗の底部破片である。いわゆる三日月高台で、内面全体、体部外面と高台部の一部が施釉される。279は黒笹90号窯式（9世紀後半）に属すると考えられる。280～285も須恵器、286は土師器土鍋の口縁部小片、287は土師器甕、垂直に立ち上がり口縁端部を外側に肥厚させ、頂部に平坦面をつくっている。288は凹基式、289は平基式の石鏃である。

2層出土の遺物は、混入と考えられる287を除いても、270、286といった中世の遺物を含み、時期幅をもつが、平安時代の年代観と考えられる。

第47図はI-13区の水田関連の出土遺物で、290～309がS Z a 02耕土、310～313がS Z a 02とS Z a 01の間の堆積土出土、314～316がS Z a 01を覆う堆積土出土、317～319がS Z a 01耕土、320～323



第45図 SZa01、02 平面図

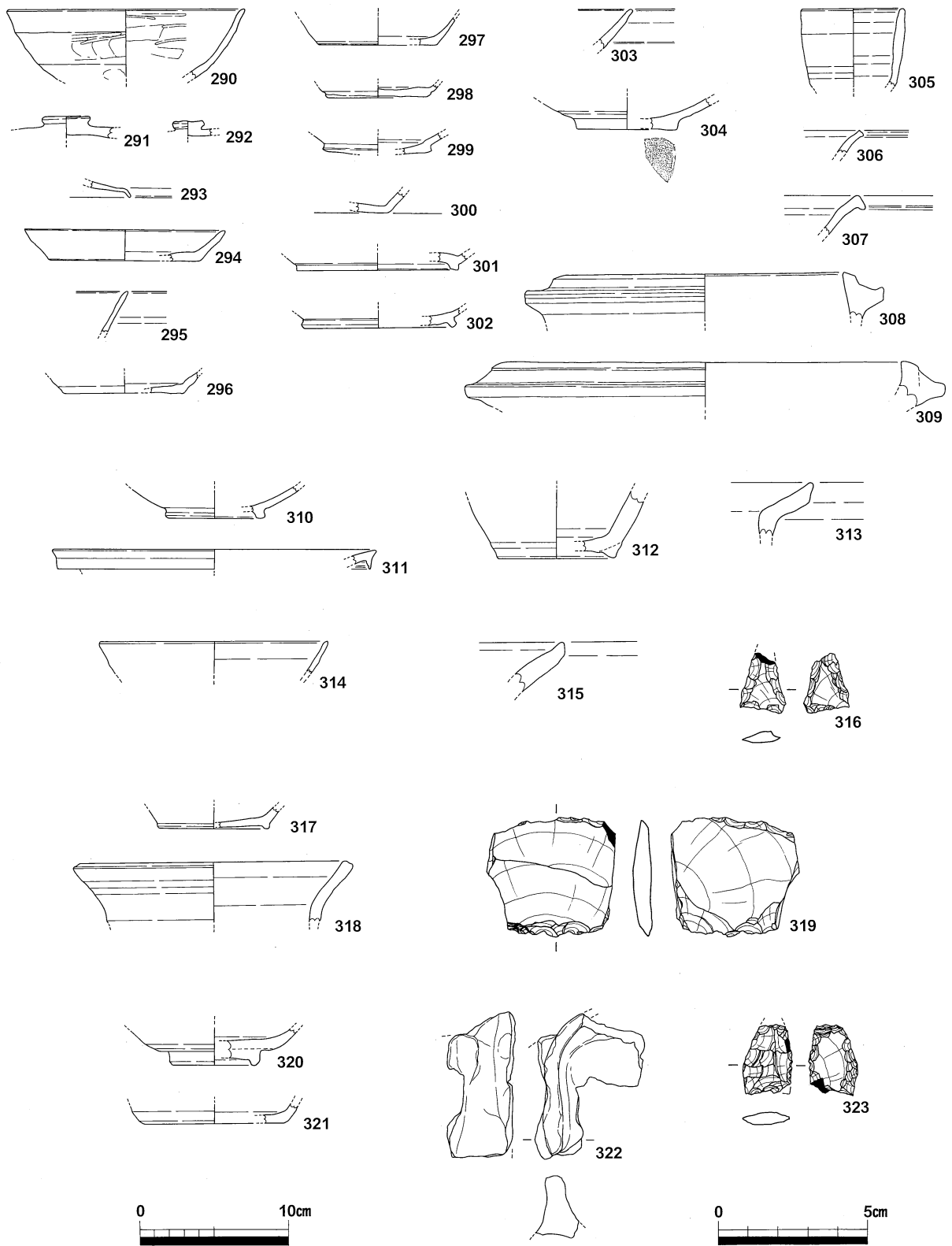


第46図 SZa01関連 出土遺物実測図

が出土層位不明のものである。(第46図のレイアウトの順と異なり、290～309が上位の層から出土し、317～319が下位の層から出土している。) いずれも細片のものが多く、径の復原や土器の傾きにやや不正確な点がある。290はいわゆる西村産の椀、291～302は須恵器、303、304は緑釉陶器椀である。303、304は接合できないが、同一個体の可能性がある。304は円盤状の高台を削り出し、高台を含む内外面に薄く施釉している。305～307は須恵器の壺や甕の小片、308、309は土師器土釜の小片である。

310は内面黒色の黒色土器椀、311は須恵器壺。口縁端部を下方に摘み出し、尖らせる。312の須恵器は体部ラインの延長のような断面三角形の貼り付け高台が付される。313、315は土師器土鍋の口縁部小片、316は先端部を欠損する平基式石鏃である。

317は須恵器杯の底部、318は須恵器甕の口縁部の小片である。319はスクレイパーと考えて図化した、刃部は鋭利ではない。320は青磁椀である。



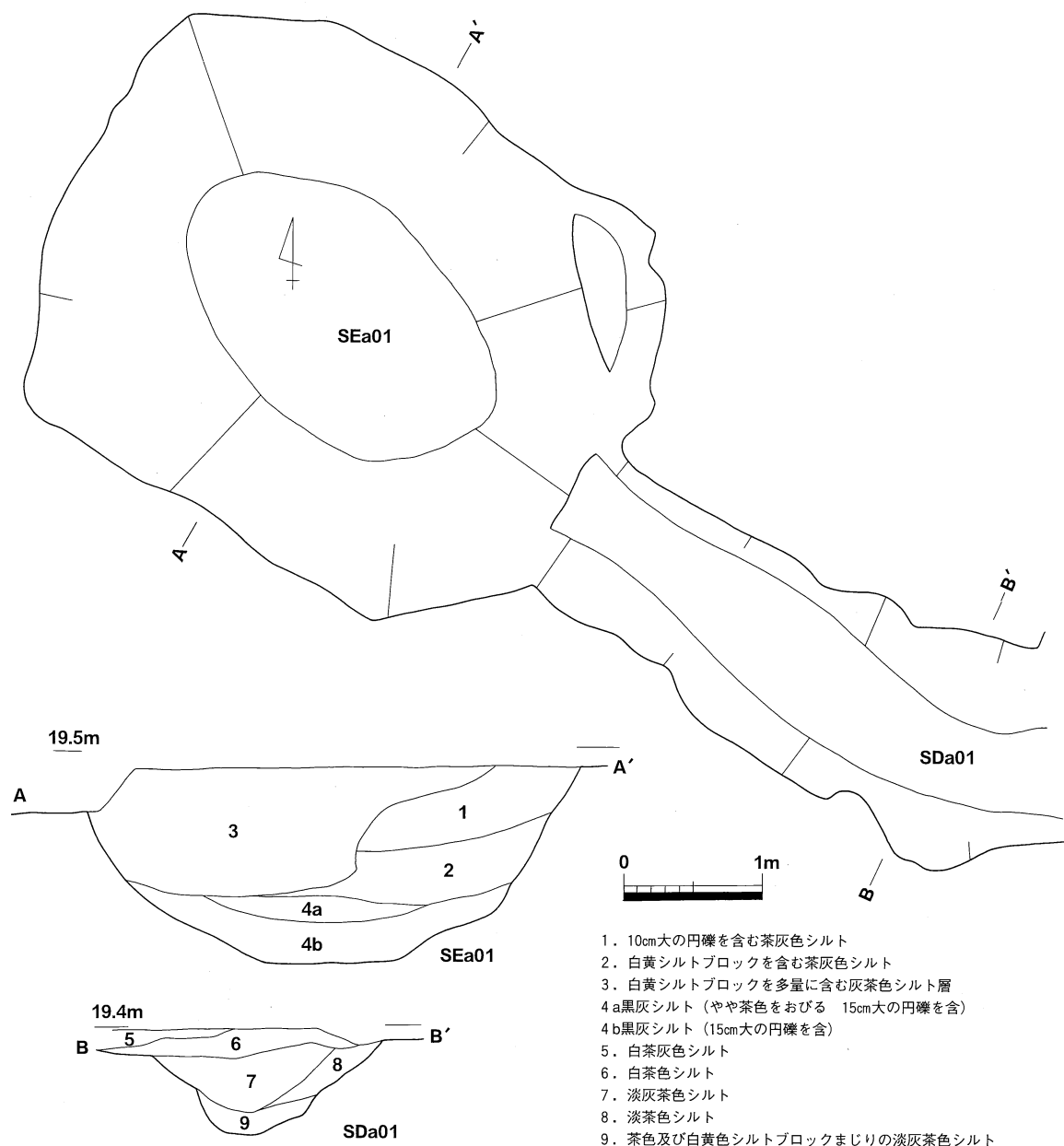
第47図 SZa01、02関連 出土遺物実測図

② 出水 (SEa01)

X=143.218、Y=52.208付近に長辺4.5m、短辺3.5m、深さ1.15mの隅丸方形の土坑が検出された。この土坑の短辺から溝状遺構 (SDa01) が派生している。土坑は地山である砂礫層を掘り込んでおり、調査中も湧水が見られた。この遺構は構造から、この地方で出水と呼ばれている灌漑施設と考えられる。

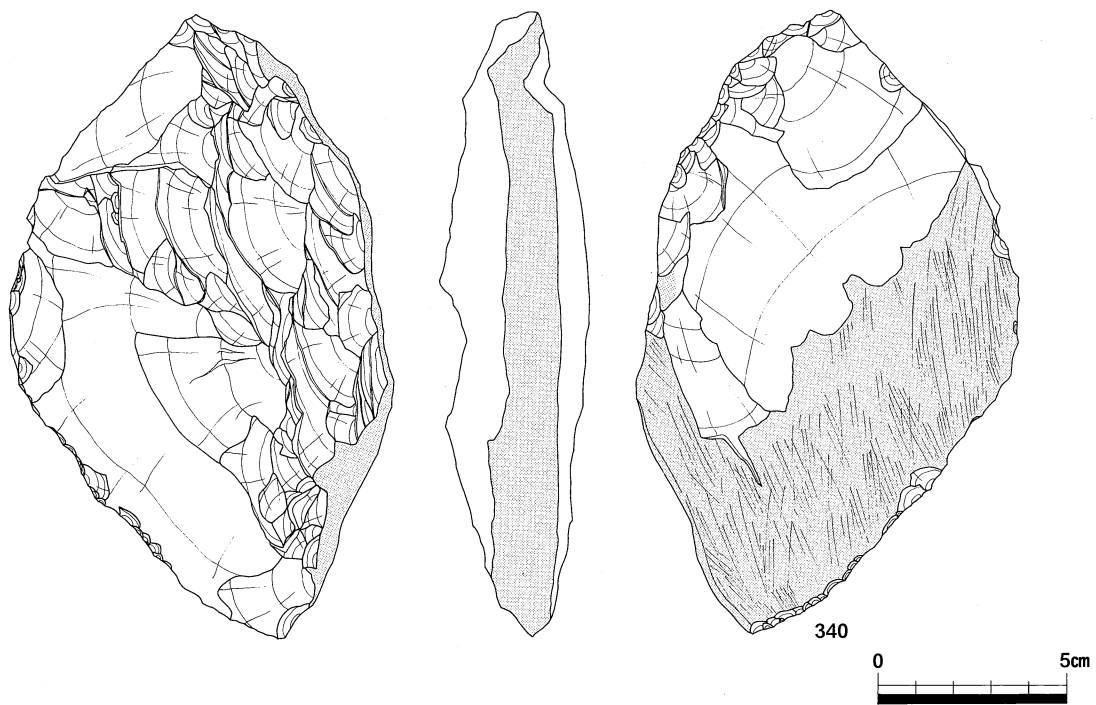
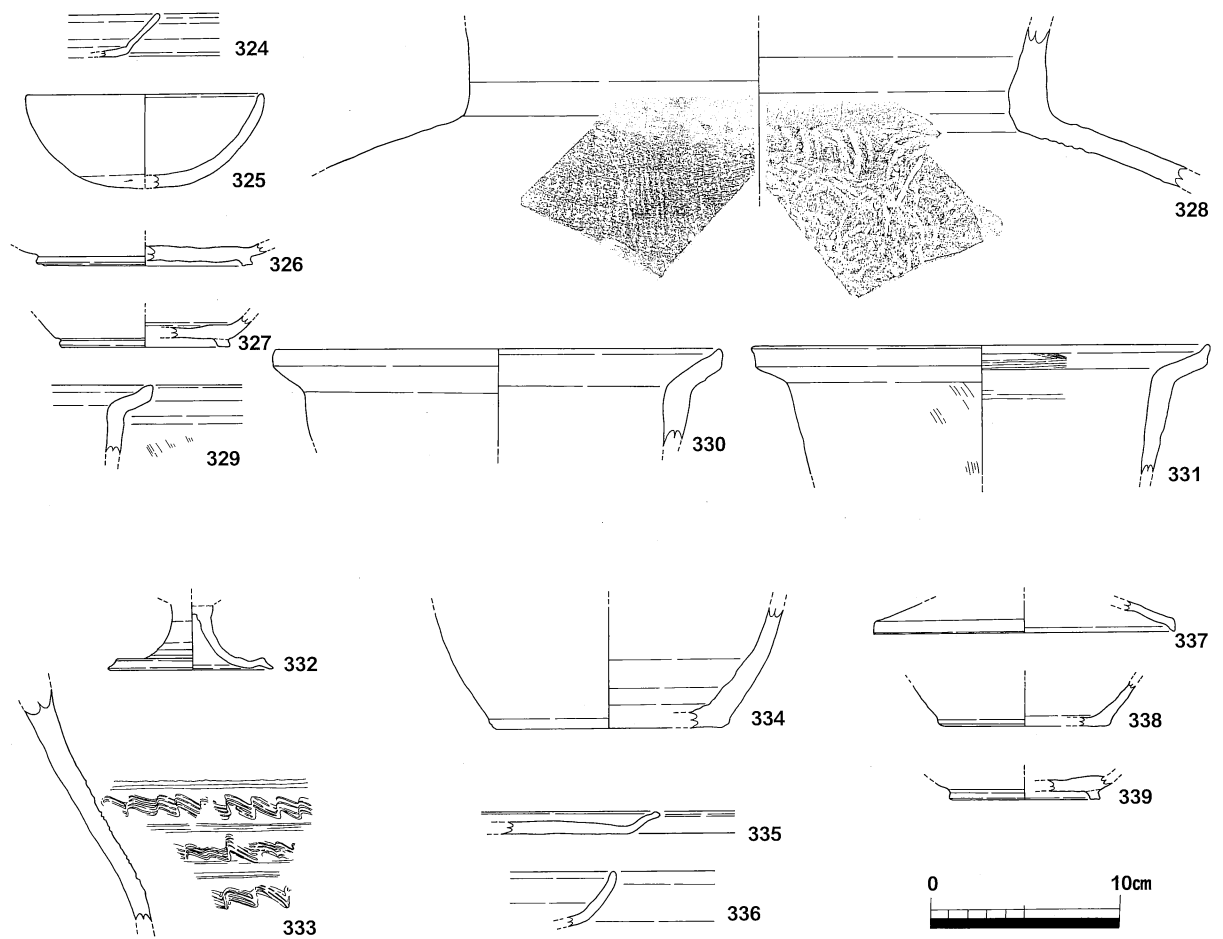
香川県には、出水と呼ばれる灌漑施設が多数存在するが、これは地下水が被圧されているところを掘り下げるなどの方法で、地下水を湧出させ、溝に導くものである。遺構略号をSEとしていたが、地中に掘削した穴に滲出した地下水を人力等で汲み上げる井戸とは構造が異なる。なお、他地域ではこのような構造の遺構を「溜井」と呼称することが多い。

SEa01は、旧中州と考えられる砂礫層の東側縁辺に位置し、SRa01の西肩に沿うように溝を掘削



第48図 SEa01、SDa01 平・断面図



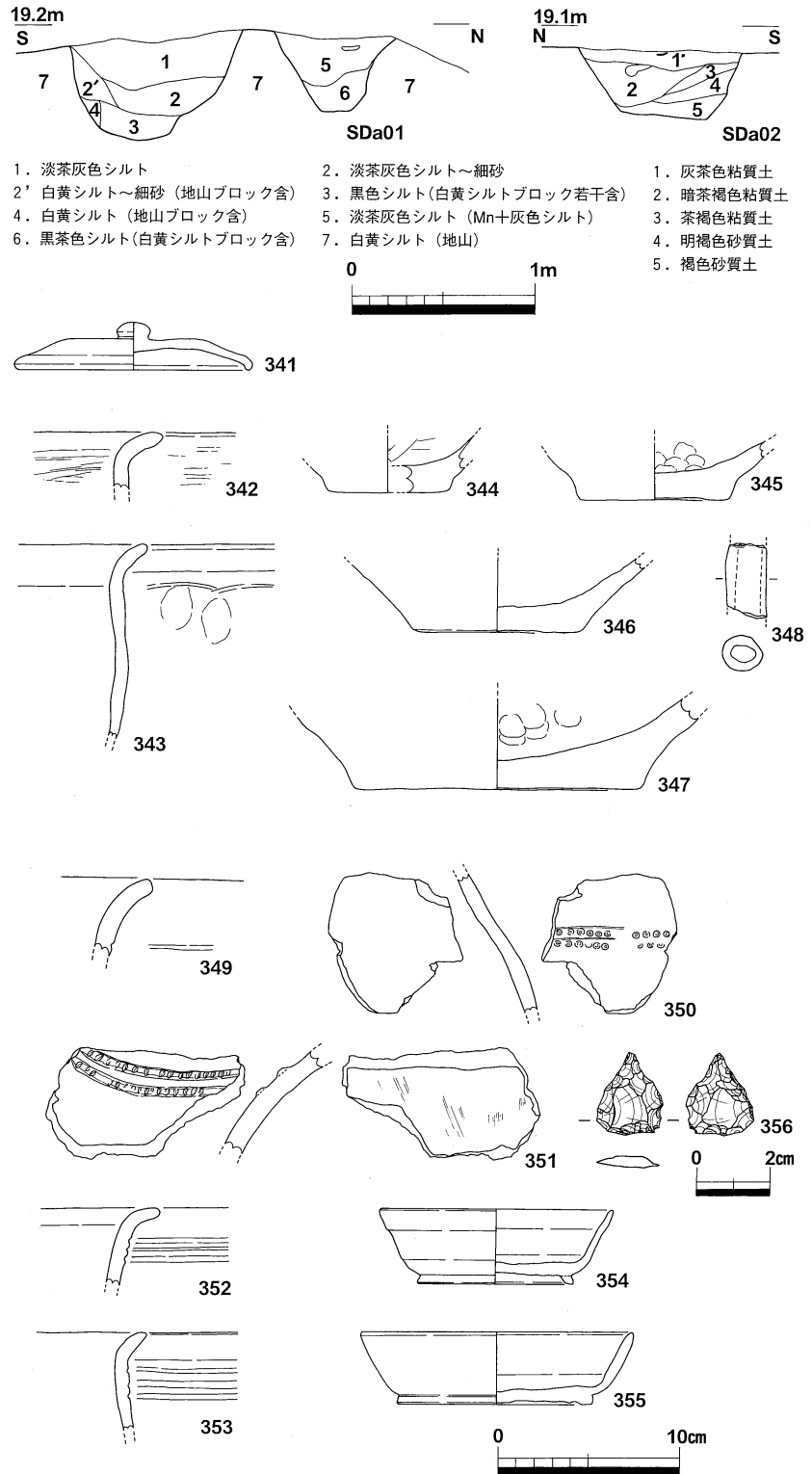


第49図 SEa01 出土遺物実測図

している。後述する出土遺物の年代観からS Z a 01や02の北側に広がる水田に灌水するものであったと推定できる。埋土は断面図の通り、4 b、4 a、2、1層の過程で埋没した後、再び掘削され3層が堆積している。遺物はコンテナ1.25箱分の土器、石器が出土している。3層には中世に属する土器片が含まれるが、4 a、4 b層には見当たらない。

また弥生土器片も多く含まれ、中世土器片とともに磨滅が著しい。後述のS E a 01から派生する溝出土の遺物の年代観とも合わせると、古代から中世にかけての長期にわたり、底浚えをしながら維持された可能性が考えられる。第49図はS E a 01出土の遺物実測図であるが、324~331は再掘削された3層から出土したもの、332、334は2層出土、334、340は1層出土、335、336は4層出土、337~339は出土層位不明の遺物である。

324は土師器杯の小片で、中世に下るものである。325の土師器杯は、欠落する破片が多いが、ほぼ完形に近い状態で出土したものと推定される。丸底で底部から稜を持たずに球状に立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。326、327は須恵器底部。328の須恵器甕は1~3層から出土した破片が接合された。体部外面は目の細かい格子目叩きの後ナデている。329~331は土師器土鍋である。332は須恵器高杯の脚部。やや細身の軸部が大きく外方に開き、上方に屈曲して段を形成してから下方に屈曲する形態である。333の須恵器甕は体部の破片で、平行するヘラ描き沈線によって区画した



第50図 SDa01、02 断面図、出土遺物実測図

中に複線波文帯を3条以上巡らしている。334は平底の須恵器底部、335は土師器皿である。口縁部は外湾気味に立ち上がり、端部は上方に丸くおさめる。口縁内面に凹線状の沈線が1条巡る。336の須恵器は器壁の厚いつくりで、口縁端部は丸く収めている。340は一面の一部と側面に磨滅が見られ、一面のものは無数の擦痕が見られる。

### ③ 溝状遺構

S D a 01、02

S E a 01から派生する溝で、S D a 01と02の2条が確認されている。両者には切り合いがありS D a 02が新しい。S D a 01は幅0.4~1.5m、深さ約55cm、S D a 02は幅約1m、深さ約45cmで、ほぼ同じ規模である。S D a 01、02は、S E a 01から10mほど東流した後、S R a 01に沿って東北方向へ流れている。第50図はS D a 01、02出土の遺物実測図で、341~348がS D a 01出土、349~356がS D a 02出土のものである。341の須恵器蓋は半分に割れた状態で出土した。宝珠形つまみを持ち、天井部は平らで時計回りの回転ヘラ削りが施されている。口縁端部は下方に短く屈曲し、内側にかえりは持たない。342~347は弥生時代前期末~中期初めの土器である。343の甕は、如意状口縁下の外面に1条のヘラ描き沈線が痕跡的に巡る。348は両端を欠損する管状土錘片である。

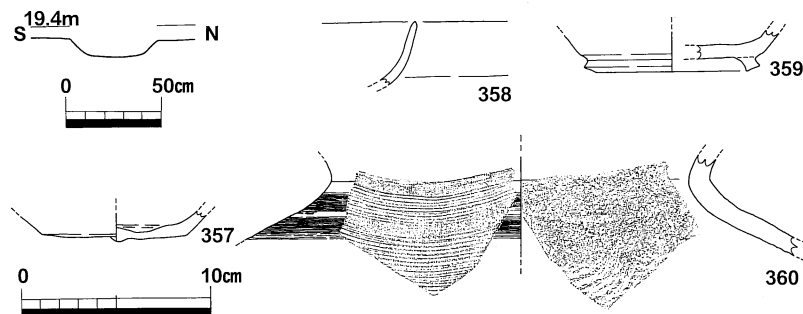
349~353は弥生時代前期末~中期初めの土器である。349の壺小片は1条のヘラ描き沈線が認められる。350は壺体部の小片である。3条のヘラ描き沈線とその間に平行する竹管文が施される。351は内面に貼り付け突帯を付した壺口縁部の破片で、傾きは推定である。352、353は如意状口縁の甕小片である。いずれも3条のヘラ描き沈線が施される。354、355は須恵器杯である。いずれも完形に近い状態で出土している。354の底部外面は回転ヘラ切り後ナデている。355はやや焼成不良、見込み部は回転ナデの後にナデている。

S D a 03

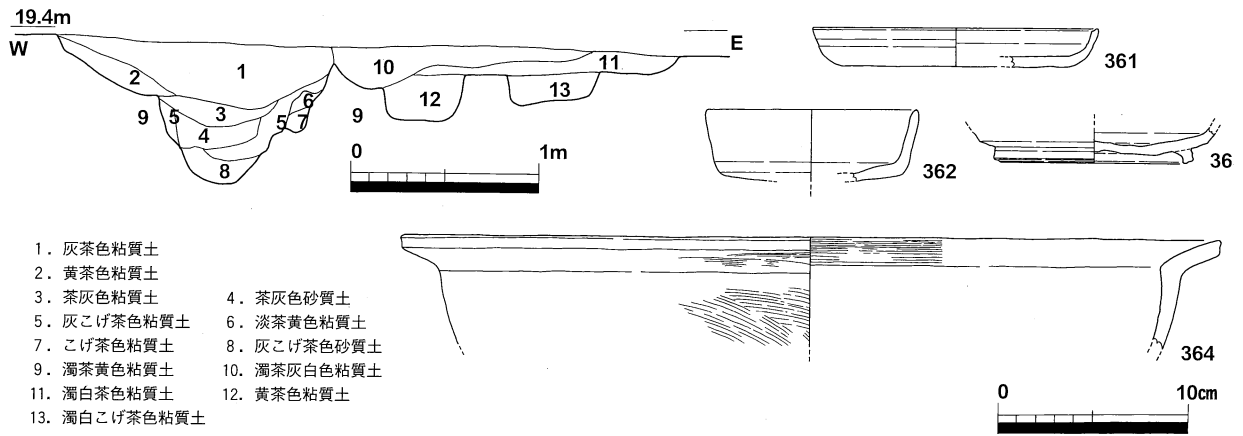
X=143.220、Y=52.230付近で検出された溝状遺構である。調査区南部で出現し、次第に幅と深さを増して北流し調査区外に抜ける。最大幅60cm、最大深さ18cmを測るが、この付近は遺構面よりやや下で遺構検出しているため、本来の規模はより大きい。S D a 01と切り合い関係がありS D a 03の方が新しい。第51図357は土師器杯である。磨滅する。底部外面は回転ヘラ削りで、図の中央の盛り上がりは削り残しの粘土である。358は磨滅した瓦器の小片である。359は須恵器底部、器壁厚く外側に開く貼り付け高台を付す。360の須恵器甕は焼成やや不良、外面は格子目叩きをナデ消した後にカキ目、内面は同心円文をナデ消している。

S D a 04

I-13区で検出した溝状遺構である。位置関係からI-8区のS D a 03に連続する可能性があるが、確証が得られないため別遺構として報告する。近現代の溝S D a 15に一部壊されているため規模は不明確であるが、幅1.5m以上、

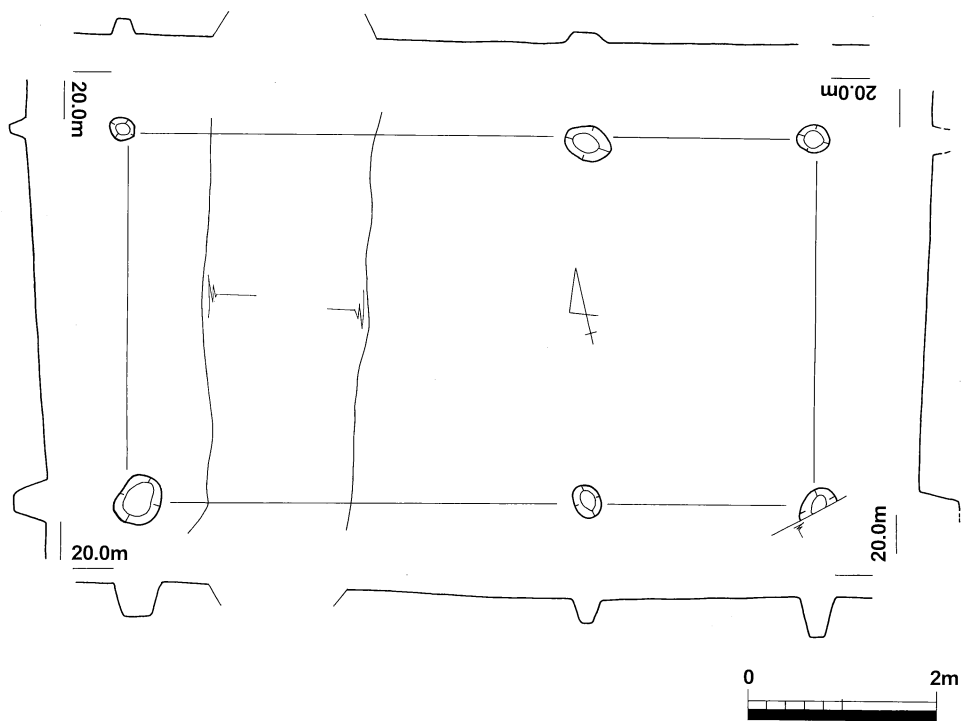


第51図 S D a 03 断面図、出土遺物実測図



第52図 S Da04 断面図、出土遺物実測図

高さ75cmを測る。第52図はS D a 04出土の遺物実測図で、361は土師器皿である。底部から口縁への立ち上がりは稜を持たずに丸く移行しており、口縁端部内側に沈線が巡る。362は須恵器杯である。底部が平らで口縁が直立気味に立ち上がる形態である。364は土師器土鍋である。口縁端部は角状におさめ、口縁部内外面はハケ、体部外面もハケを施す。



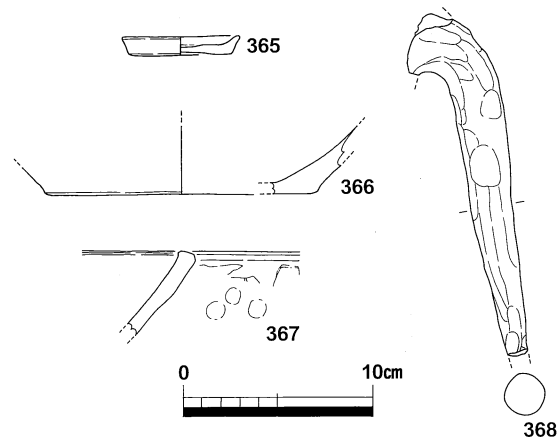
第53図 SBa01 平・断面図

(4) 中世

① 掘立柱建物、柱穴

S B a 01

X=143.209、Y=52.149付近で検出された掘立柱建物である。梁行一間(柱穴芯間4 m)、桁行二間(7.3m)の規模であるが、S D a 18に壊されており、本来は桁行三間であった可能性が高い。建物軸は座標北から76度西に振った方向で、周辺の条里型地割の方向とほぼ合致している。S D a 05と切り合い関係があり、S D a 05埋没後にS B a 01が建てられている。4つの柱穴から中世に所属する土器細片が出土している。第54図368はS B a 01を構成する柱穴の一つであるS P a 01から出土した土師器土釜脚部である。また、365はS B a 01の北側に散在する同一埋土の柱穴の一つであるS P a 02から出土した土師器小皿の破片である。



第54図 北地区 柱穴出土遺物実測図

第54図368はS B a 01を構成する柱穴の一つであるS P a 01から出土した土師器土釜脚部である。また、365はS B a 01の北側に散在する同一埋土の柱穴の一つであるS P a 02から出土した土師器小皿の破片である。

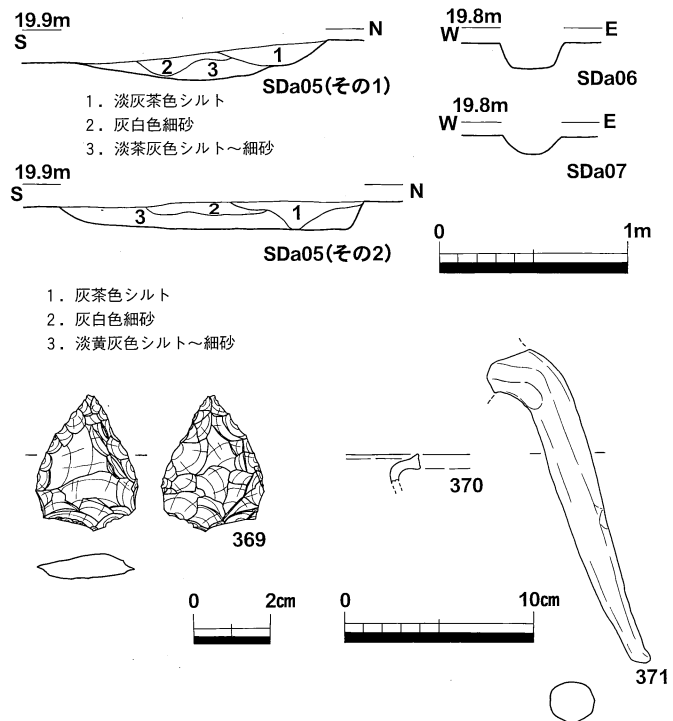
その他の柱穴

北調査区では、S B a 01付近の他に、X=143.225、Y=52.215付近に柱穴の集中する箇所がある。建物を復原できる規則的な柱穴配置は見られないが、同一もしくは類似する埋土で、中世の遺物を包含するものが多い。第54図366、367はS P a 03、04から出土した遺物の実測図である。

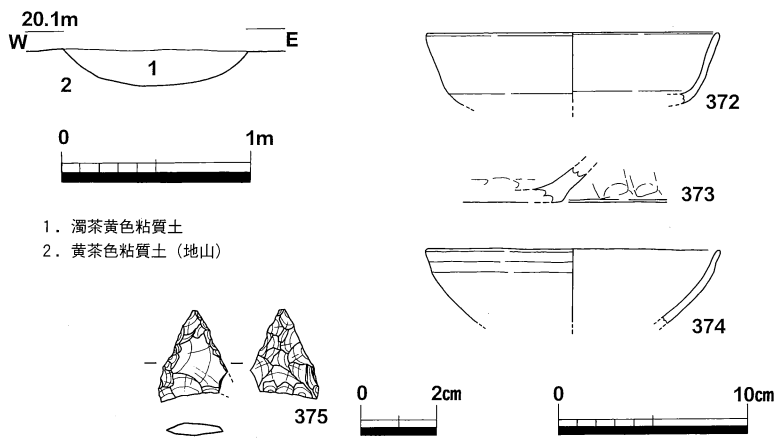
② 溝状遺構

S D a 05~07

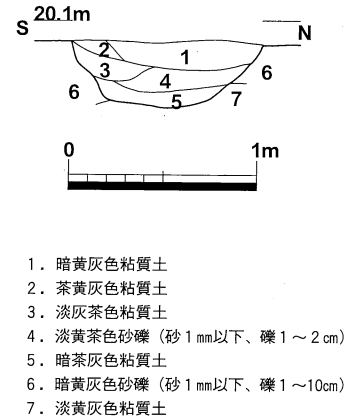
I-9区(X=143.210、Y=52.150付近)で検出した溝状遺構である。幅1.1~3 m、深さ25cmほどを測り、座標北から76度西に振った周辺条里型地割と同じ流向である。東側は旧中州の砂礫層により消滅する。流向と直交する方向の2条の小溝が切り合い関係を持たずに接続している。西側のS D a 06は幅30cm、深さ約15cm、東側のS D a 07は幅30~50cm、深さ10cmほどの規模である。なお、S D a 05について調査時には、S D a 18の西側をS D 09、東側をS D 13と呼称しているが、埋土等を検討した結果同一遺構と判断している。出土遺物の大半は弥生時代前期、後期の土器細片で、わずかに土師器杯などの中世の遺物が含まれる。遺物量はコンテナ1/10箱程である。第55



第55図 S Da05~07 断面図、出土遺物実測図



第56図 S Da08 断面図、出土遺物実測図



第57図 S Da09 断面図

図369はS D a 18の東側で出土したもので、凸基式とも平基式ともとれる基部をもつやや大型の石鏃である。370、371はS D a 18の西側で出土したもので、370は弥生時代後期、下川津B類の甕、371は板ナデにより整形した土師器土釜の脚部である。

S D a 08

I-13区 (X=143.227、Y=52.175付近) で検出した溝状遺構である。幅0.9m、深さ約20cmを測る。検出長は約3.5mと短いが条里型地割の方向と合致するものと考えられる。南側のI-9区には連続しない。出土遺物量は僅少で器種不明の細片を中心に20点ほどの破片が出土している。第56図372~375はS D a 08出土の遺物実測図である。372は須恵器杯、373は土師器こね鉢の底部と思われる小片、374は瓦器椀である。374の口縁端部は僅かに外反し、端部下外面にナデによるくぼみが認められる。

S D a 09

S D a 08に直交する溝状遺構である。S D a 08と切り合い関係があり、S D a 08より古い。幅約1m、深さ約35cmを測る。20片ほどの土器細片が出土したが、図化不能である。弥生土器と思われる細片に混じって、中世土師器の小皿か杯の破片が含まれている。

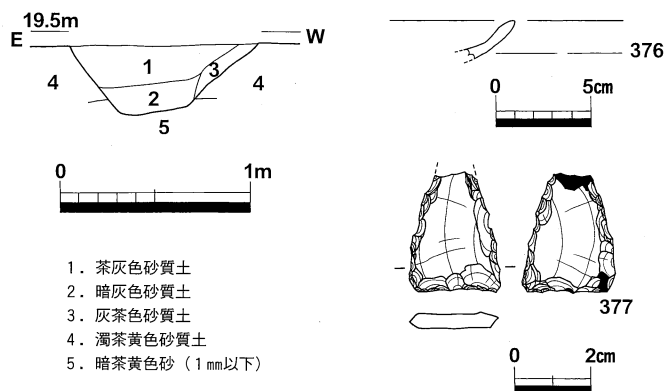
S D a 10

I-13区 (X=143.235、Y=52.225付近) で検出した溝状遺構である。幅約1m、深さ約35cmを測る。検出長は約3.5mと短いが条里型地割の方向と合致するものと考えられる。出土遺物は20片ほどの土器細片のみで、中世土器と考えられるものが中心である。

③性格不明遺構

S X a 01

X=143.220、Y=52.218付近で検出した遺構である。S X a 01は長軸3.7m、短軸1.5m、深さ25cmほどの不整形の落ち込みで、埋土中に犬頭大から人頭大の垂円礫、垂角礫が多量に含まれるものである。平面・断面形ともに不整形であり、また、S X a 01の西側には地

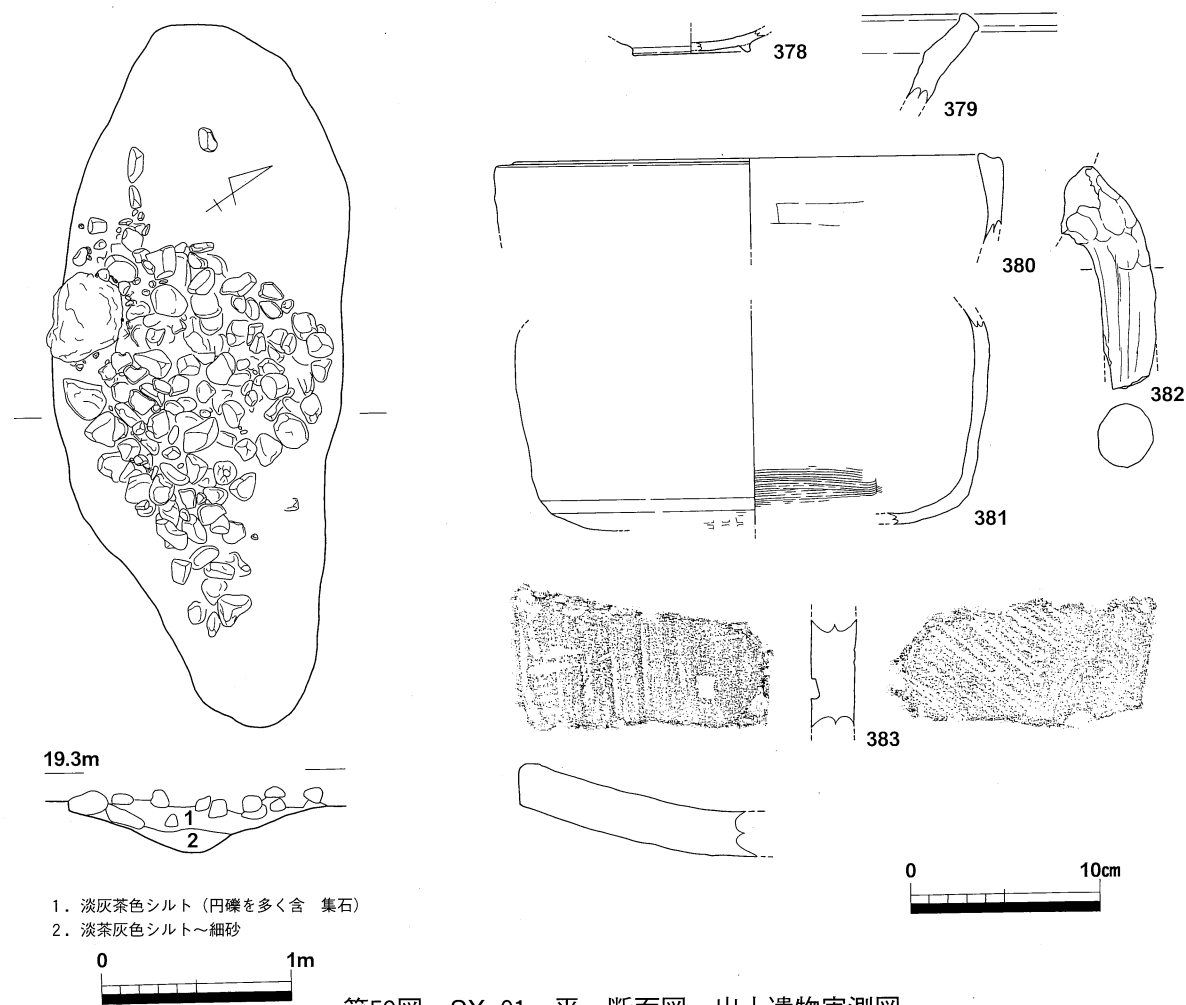


第58図 S Da10 断面図、出土遺物実測図

表面近くまで砂礫層の盛り上がりが見られるため、耕作などの土地利用に際し邪魔になる石材を集積した遺構の可能性が考えられるが、石材はやや大型のものを選択している可能性もあり、本来の性格は不明である。遺物は少なく、20点余りの土器細片が出土している。第59図378は土師器椀、379は土師器土鍋、380は土師器土釜である。380は罫が消滅した段階のものである。383は瓦質の平瓦で、両面とも板ナデとナデにより整形される。この他に備前焼と考えられる小片などが出土している。

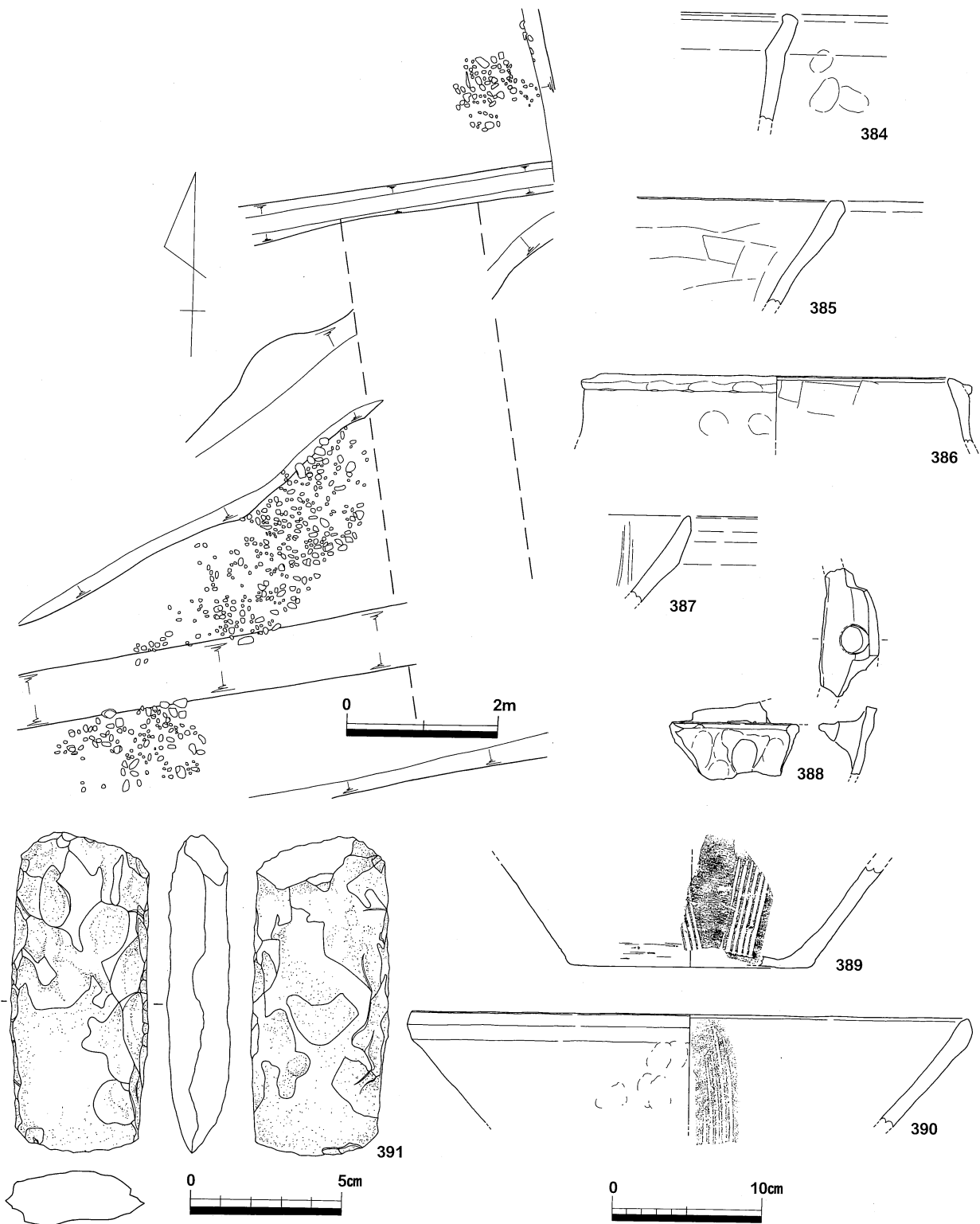
S X a 02

X=143.215、Y=52.220付近で検出した遺構である。途中試掘トレンチで寸断されるが、検出長11m、幅1.5mの範囲に拳大～人頭大の礫を集積した遺構である。方向は周辺条里型地割の方向と合致している。S X a 01と同様に付近の砂礫を集積したもので、調査担当者は大畦として調査を行っている。畦、小径、小規模な土塁の基礎など可能性が考えられるが性格不明である。第60図384～391はS X a 02出土の遺物である。384、385は土師器土鍋である。384の口縁部は屈曲の度合いがやや小さく直立した形状で、口縁端部を内側に肥厚させているため玉縁状になっている。385は口縁部と体部の屈曲は不明瞭であるが、土鍋と考えられる。386は土師器土釜。形骸化した罫を付す。387は須恵器スリ鉢。口縁部外面は幅広で不明瞭な稜で体部に移行する。内面に2条の卸し目が刻まれる。388は土師器把手付鍋。把手部側縁は山形になるが、頂部からずれた位置に孔がつけられている。389は備前焼スリ鉢。回転ナデによる体部に6条の卸し目が刻まれる。390は土師器スリ鉢。5条の卸し目をやや斜め方向に刻んでいる。391は石斧である。



第59図 SXa01 平・断面図、出土遺物実測図

打製で整形した後に磨いている。刃部に使用痕と思われる磨滅、擦痕が見られる。

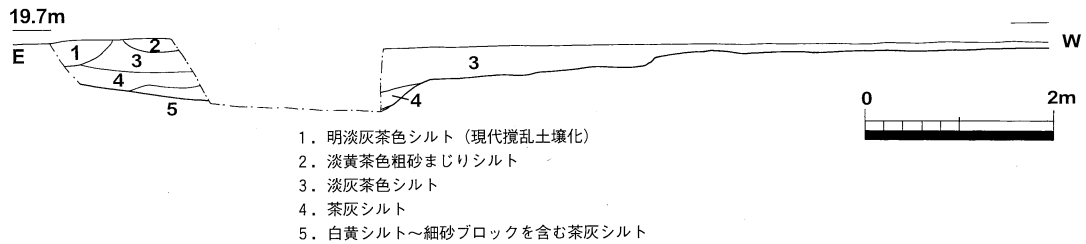


第60図 SXa02 平面図、出土遺物実測図



北地区 中世包含層

I-9区東北端付近は、北側に落ちる微凹地があり中世土器を包含する層が堆積している。調査時にはS X03として調査を行っているが、自然形成の凹地と考えられる。このほか、S X01、S K10として遺物の取り上げを行っている遺構があり、周囲の遺構番号の順序からこの付近の遺構と推定できるが、写真・図面が残されておらず内容不明である。この地区での調査は検出時に積極的に遺構と認定し、掘削段階で遺構でないと確認したものがあるため、S X01、S K10も最終的に遺構ではないと判断された可能性が高

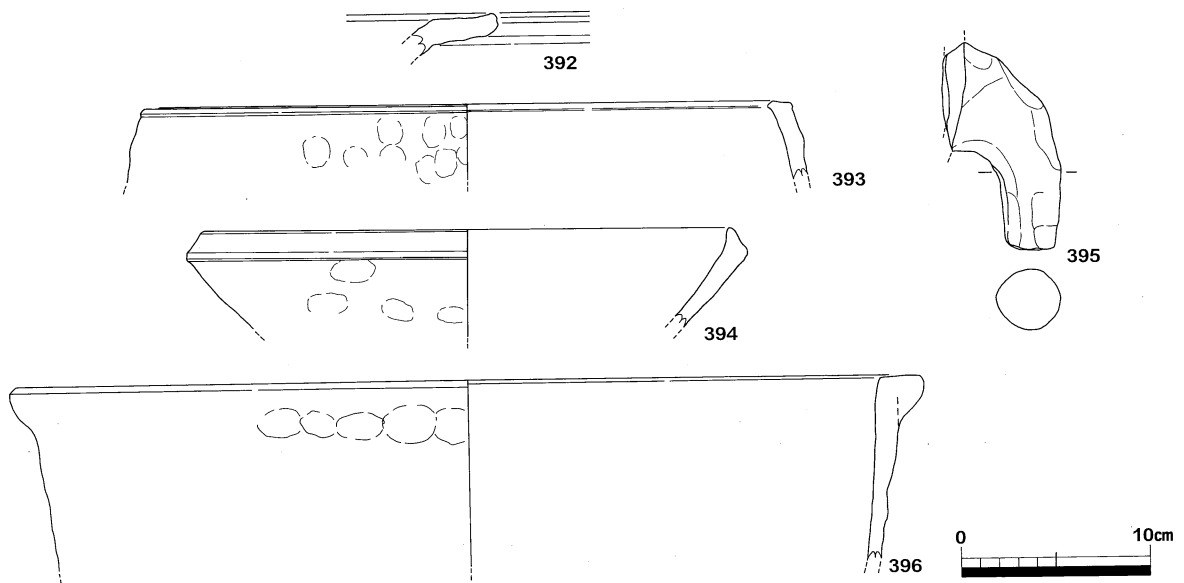


第61図 北地区 中世包含層 断面図

く、包含層出土遺物として本項において報告する。

第62図はS X03として取り上げられた遺物である。コンテナ1/4箱分の土器片が出土している。392は土師器土鍋、393は土師器土釜である。393の土釜は鏝というよりも形骸化して突帯状になっている。394は土師器こね鉢、端部は上方に尖り気味におさめている。395は土師器土釜の脚部である。396は土師器の甕もしくは井筒である。口縁端部を外側に肥厚させ、頂部に平坦面をもつ断面三角形の形状に整形している。396は後代の遺物である。

第63図はS X01として取り上げられた遺物である。コンテナ1箱分の土器片が出土している。397は唐津皿、398、399は備前焼である。398は玉縁状をなす口縁部の小片で、壺と考えられる。399は甕である。400~403は土師器土釜である。400、401の口縁は内傾し、形骸化した鏝が付されている。404は土師器の茶釜形鍋である。直立する口縁部をもち、肩部に孔があり、その外側に把手が付される形状である。405は東播系こね鉢、406は土師器こね鉢、407は備前焼すり鉢の口縁部小片である。408は須恵質の平瓦小片



第62図 北地区 中世包含層 出土遺物実測図 (その1)

である。内面は布目圧痕、外面は格子目叩きを丁寧にナデ消している。409は土師質の丸瓦小片である。内面は布目圧痕、外面はナデである。

第64図はS K 10として取り上げられた遺物である。S K 10からはビニール袋(20×10 cm) 1袋分の土器片が出土している。410の土師器杯は立ち上がりの緩やかな形態であるが、口縁部の歪みのため、もう少し立つ傾きに復原される。

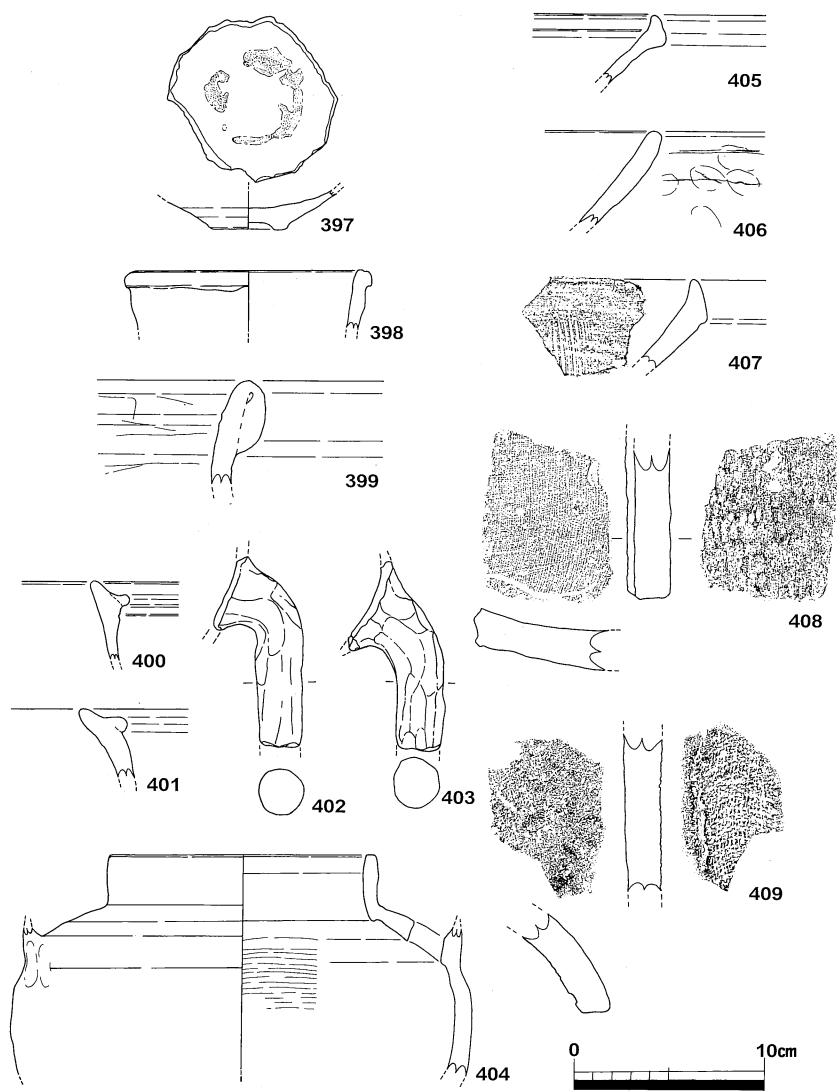
(5) 近現代、時期不明

① 土坑

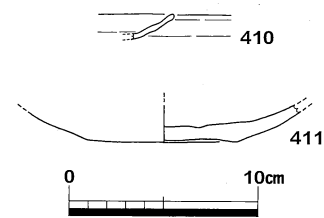
S K a 18~22

I-8区の埋没したS R a 01の上面で検出した土坑である。ここではS K a 18~21の4基の土坑が条里型地割の方向に沿って並列し、S K a 21の東北約5 mのところにS K a 22が所在している。位置関係や埋土の状況からS K a 18~22は近接する時期のものと考えられる。

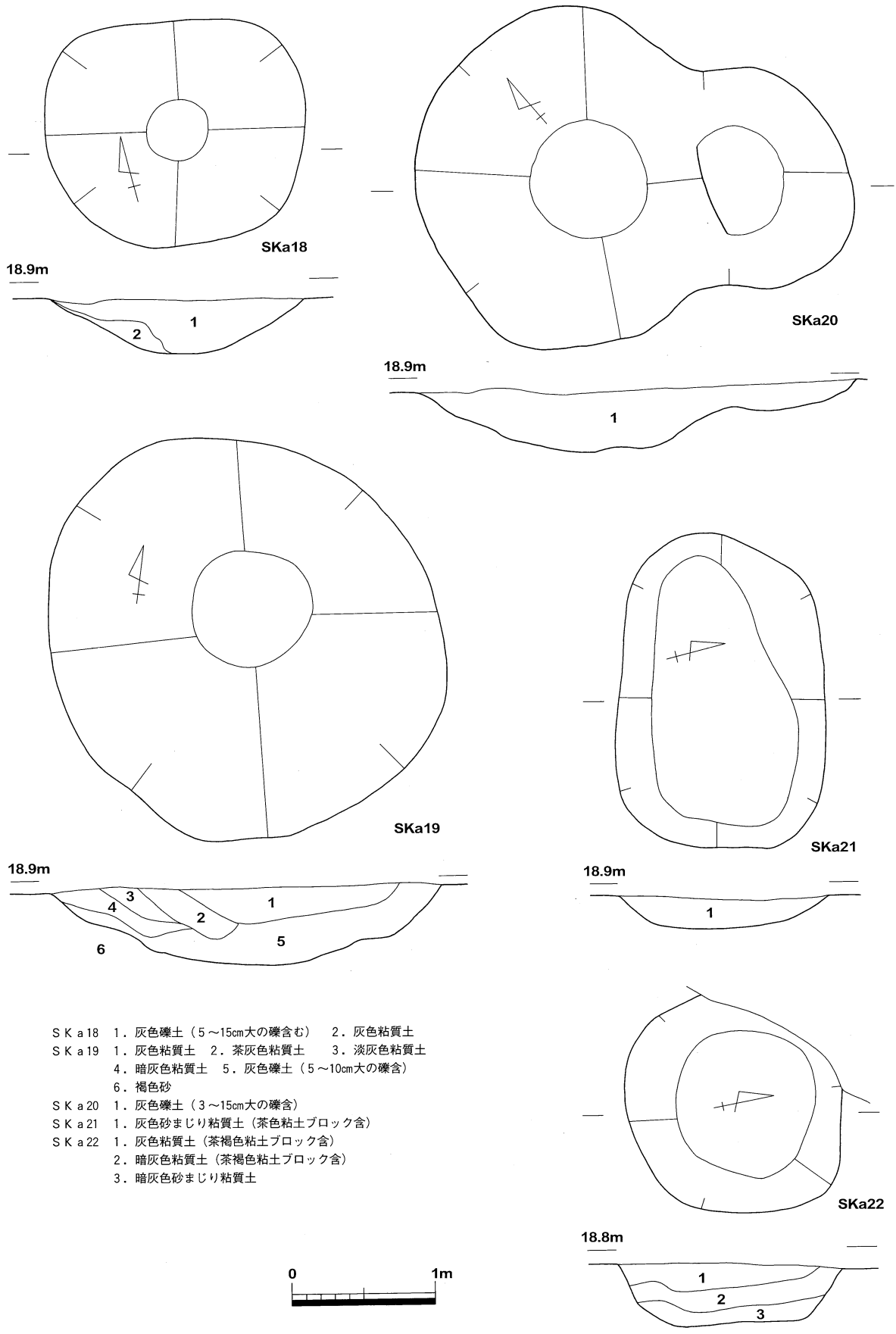
S K a 18 (X=143.233、Y=52.260) の平面形は不整円形、断面形はなだらかな傾斜で底にいたるすり鉢状を呈する。長径1.9m、短径1.6m、深さ0.43mを測る。底に鉄分が沈着し、以下がグライ化していることから滞水状態にあったと考えられる。S K a 19 (X=143.232、Y=52.262) の平面形は円形、断面形はなだらかな傾斜で底にいたるすり鉢状を呈する。径2.8m、深さ0.56mを測る。底に沿うように垂円礫、亜角礫が乱雑に堆積する。S K a 20 (X=143.230、Y=52.265) の平面形は二つの土坑が連結したような瓢箪形、断面形はなだらかな傾斜で底にいたるすり鉢状を呈する。長軸3.2 m、主体となる坑の径2.3m、深さ0.4mを測る。S K a 21は (X=143.230、Y=52.269) の平面形は隅丸長方形、断面形は浅い皿状を呈する。長辺2.2 m、短径1.5m、深さ0.2mを測る。S K a 22は (X=143.235、Y=52.273) の平面形は円形、断面形はU字状を呈する。径約1.5m、深さ0.41mを測る。埋土は三層に細分されるが、級化構造をもつもので一層として把握できる。



第63図 北地区 中世包含層 出土遺物実測図(その2)



第64図 北地区 中世包含層 出土遺物実測図(その3)



- SKa18 1. 灰色礫土 (5~15cm大の礫含む) 2. 灰色粘質土  
 SKa19 1. 灰色粘質土 2. 茶灰色粘質土 3. 淡灰色粘質土  
 4. 暗灰色粘質土 5. 灰色礫土 (5~10cm大の礫含む)  
 6. 褐色砂  
 SKa20 1. 灰色礫土 (3~15cm大の礫含む)  
 SKa21 1. 灰色砂まじり粘質土 (茶色粘土ブロック含)  
 SKa22 1. 灰色粘質土 (茶褐色粘土ブロック含)  
 2. 暗灰色粘質土 (茶褐色粘土ブロック含)  
 3. 暗灰色砂まじり粘質土

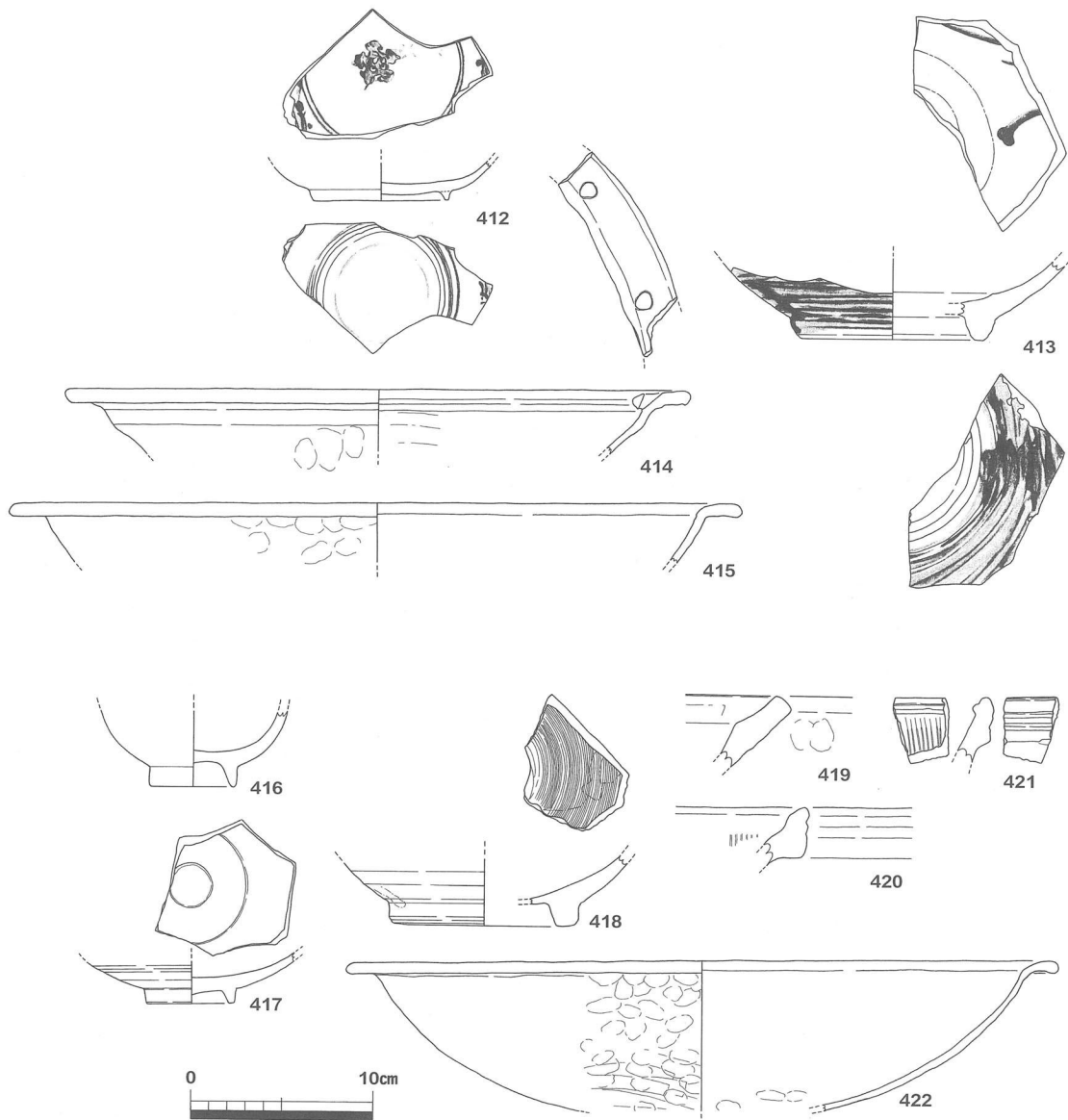
第65図 SKa18~22 平・断面図

S K a 18は須恵器片1点のみが出土した。S K a 19は後述する実測遺物のほかに、青磁片、備前焼の小片、染め付け片など若干量の遺物が出土。S K a 20も実測遺物のほかに土釜脚部、染め付けなど混在する時期の若干量の遺物が出土。S K a 21は遺物は出土しなかった。S K a 22は土師器の杯か小皿の小片、須恵器の破片、サヌカイト片など10点ほどの遺物片が出土している。

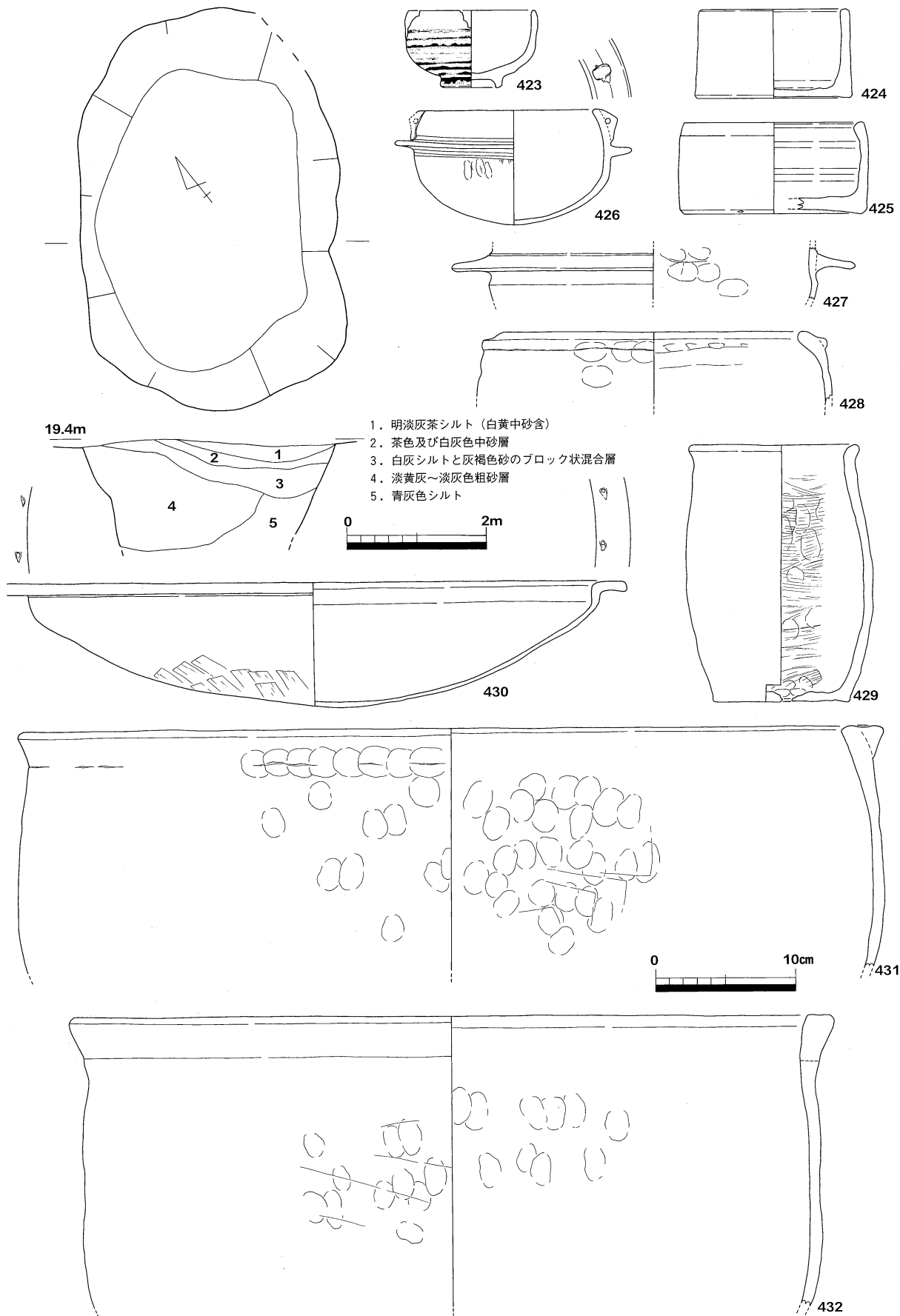
第66図はS K a 19と20から出土した遺物実測図で、412～415はS K a 19、416～422はS K a 20から出土したものである。412は磁器皿、413は陶器鉢、414、415は土師器の焙烙、416は陶器椀、417は磁器椀、418は陶器鉢、419は土師器土鍋、420、421は備前焼すり鉢、422は土師器焙烙である。

S K a 23

I-9区 (X=143.217、Y=52.216) で検出した土坑である。平面形は不整楕円形で、断面形はU字状を呈すると考えられる。湧水が激しく底まで完掘できなかった。長径5.6m、短径3.6m、深さ1.5m以上を測る。コンテナ1.25箱分の土器片が出土している。423は陶器椀、424、425は備前焼鉢、426～428は土師器土釜である。426は口縁部外面に孔をあけた縦方向の耳を一对付す。429は土師器甕。底部中央付近に



第66図 SKa19、20 出土遺物実測図



第67図 SKa23 平・断面図、出土遺物実測図

焼成後に一孔の穿孔が認められる。430は土師器焙烙。口縁部に二孔一対の内耳があるが、円孔は貫通していない。431、432は体部が緩く球状をなすことから甕と考えられる。

S K a 24

I-13区 (X=143.242、Y=52.250) で検出した土坑である。平面形は円形で、断面形はU字状と呈する。径1.65m、深さ0.35mを測る。土師器土鍋の口縁部の細片 (433)、形骸化した鏝を付す土師器土釜の口縁部小片 (434) が出土している。この土坑は出土遺物から見ると中世後半に属すると思われるが、調査担当者は近現代の遺構としている。記録が残らないが、埋土等の状況から判断したのであろう。

② 溝状遺構

S D a 11

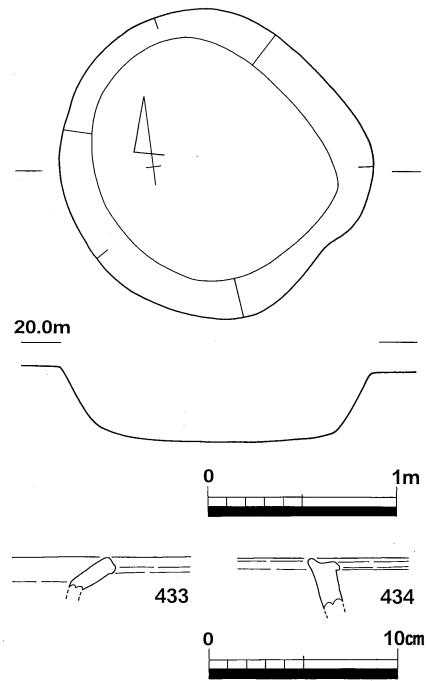
I-9区 (X=143.221、Y=52.205付近) で検出した溝状遺構である。幅0.5~1m、深さ0.1mほどで、北側で溝幅が3mほどに拡大する。検出長約15mで、座標北から71度西に振った方向にほぼ直線に流れる。S E a 01と切り合いがあり、S E a 01よりも古い。出土遺物は僅少で、弥生時代前期の土器底部 (第69図435、436) のほか、弥生時代後期を含む土器片がビニール袋一袋分出土している。S D a 11は周辺条里型地割の方向と合致しており、S D a 09に連続する可能性のある位置関係にあるが、S D a 09のS D a 14以東の存在が確認できていないため別遺構として把握した。詳細な時期を決定できる根拠がないため時期不明の溝状遺構として報告する。

S D a 12

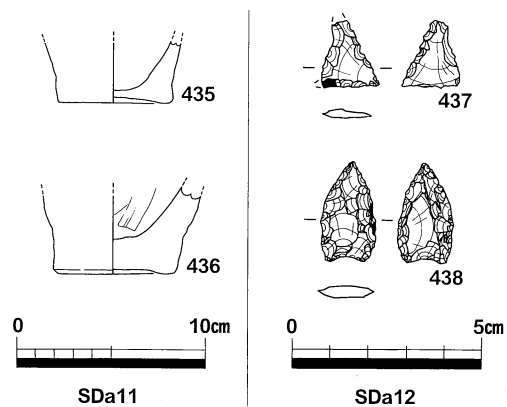
I-9区で検出した溝状遺構で、南側にS D a 05、北側にS D a 17が平行して流れる。流向は周辺の条里型地割の方向に合致する。幅0.9~2.3m、深さ約0.3mを測る。出土遺物は弥生時代前期土器、後期土器、須恵器細片がビニール袋一袋分出土しているが、図化できるのは第69図437、438の2点の石鏝のみである。周辺の遺構の遺物の出土状況を見ると、中世や近現代の遺構でも弥生時代前期、後期の磨滅した土器細片が含まれており、年代決定の根拠に欠ける。

S D a 13

I-13区 (X=143.230、Y=52.193付近) で検出した溝状遺構である。幅1.6m、深さ0.08mを測る。検出長は3mほどであるが、周辺の条里型地割の方向に合致する可能性が高い。弥生前期土器、後期土器を主体にビニール袋二袋分の遺物が出土している。第70図439~442はS D a 13出土の遺物実測図である。439は弥生時代後期の甕である。口縁部はやや内傾させた後に外湾



第68図 SKa24 平・断面図、出土遺物実測図

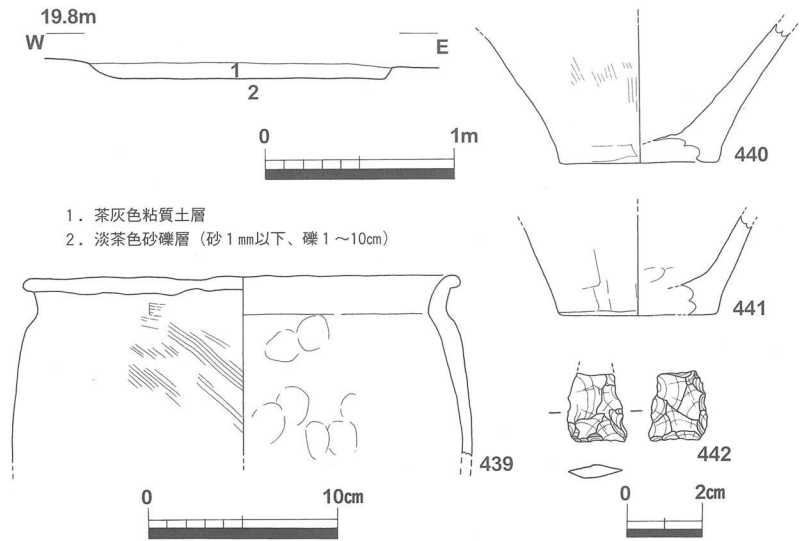


第69図 SDa11、12 出土遺物実測図

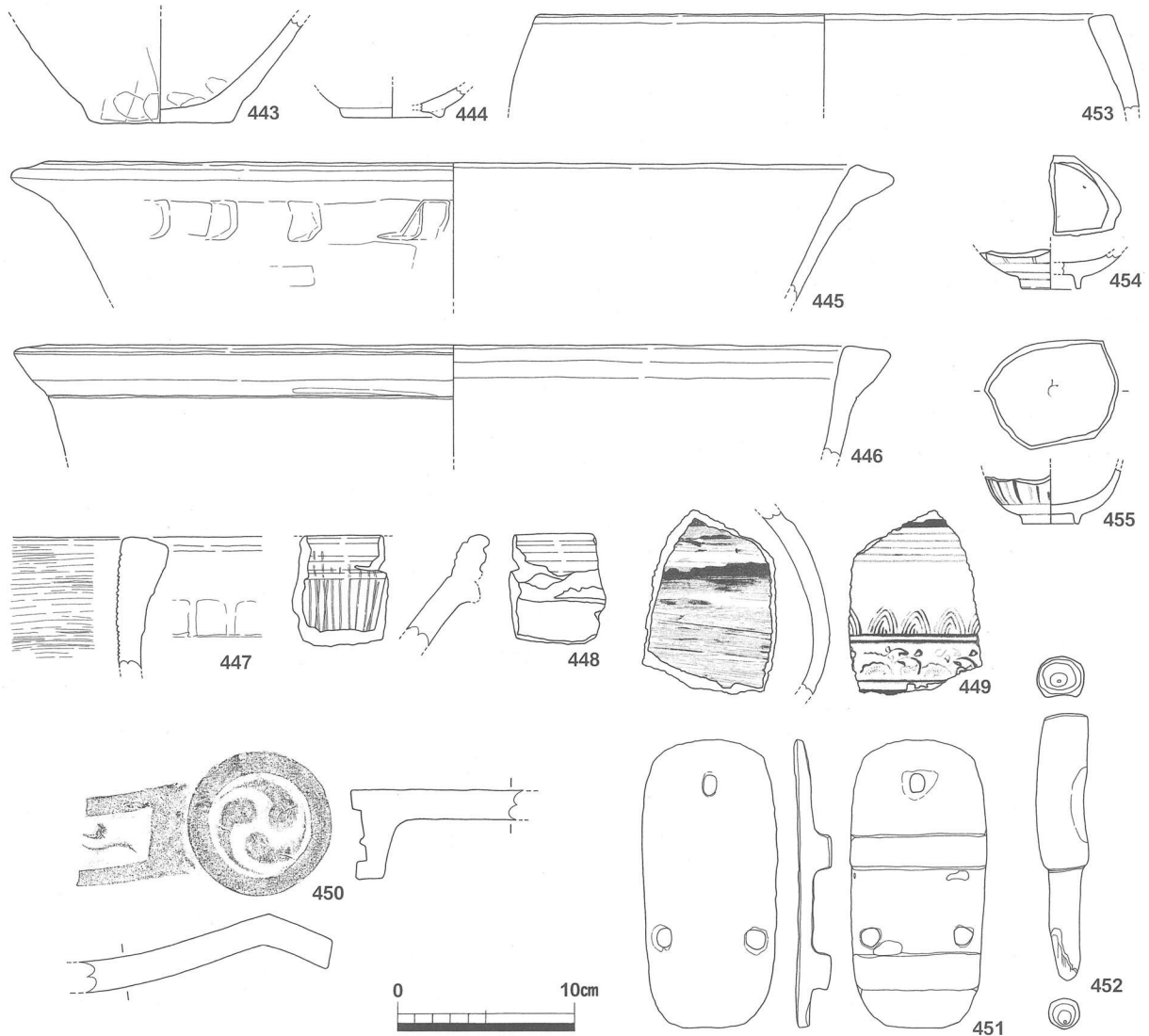
させている。端部は丸くおさめている。440、441は弥生時代前期の壺甕の底部である。なお、出土遺物中に1点の染め付け椀の小片が含まれていることから、SD a 13は近世以降に属する。

SD a 14

I-13区 (X=143.228、Y=52.180付近) で検出した溝状遺構である。幅2.2mを測る。検出長は短いが周辺の条里型地割の方向に合致する可能性が高い。



第70図 SDa13 断面図、出土遺物実測図



第71図 SDa14~16 出土遺物実測図

磁器小片、中世土師器の杯から小皿の小片、弥生土器と思われる磨滅する小片が若干量出土している。第71図443はS D a 14出土の弥生前期の壺底部である。出土遺物中に磁器小片が含まれることからS D a 14は近世以降に属する。

#### S D a 15

I - 13区 (X=143.238、Y=52.235付近) で検出した溝状遺構である。石組みの溝で、掘り方幅2.4m、石組みの内法0.5mほどの規模である。周辺の条里型地割の方向に合致し、昭和19年飛行場造成の際に埋められた溝である。第71図444~447、449~452はS D a 15出土の遺物実測図である。444は土師器椀、445~447は土師器甕である。445は口縁下の外面に形骸化しているが小突起を付している。447は井筒の可能性もあるが、小片のため不明。450は軒棧瓦、451は木製の下駄、452は用途不明の木製品である。

#### S D a 16

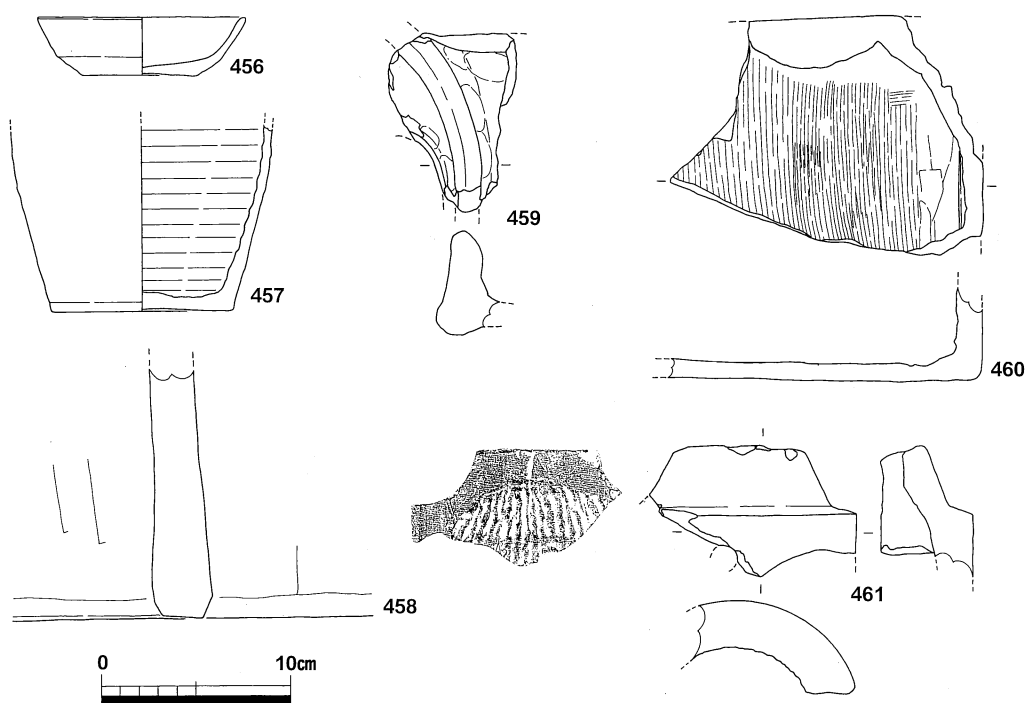
I - 8、13区で検出した溝状遺構である。S D a 15と直交する方向に流れる。S D a 15とは切り合いがあり、S D a 15よりも古い。幅1.2~2.5m、深さ0.1mほどの規模である。第71図448のスリ鉢、453の土師器、454、455の磁器椀はI - 13区のS D a 16出土の遺物実測図である。

#### S D a 17

I - 9区で検出した溝状遺構で、南側にS D a 12、S D a 05が平行して流れる。流向は周辺の条里型地割の方向に合致する。幅約1m、深さ約0.5mを測る。出土遺物は図化不能であるが、土師器土釜脚部ほか数点の時期不明の土器細片が出土している。調査担当者によると昭和19年の飛行場造成の際に埋め立てられた溝とのことである。

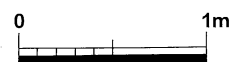
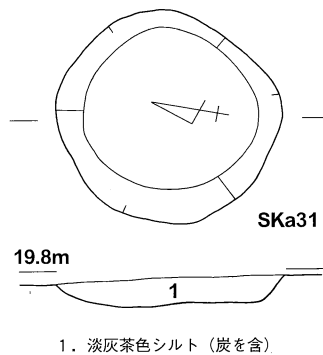
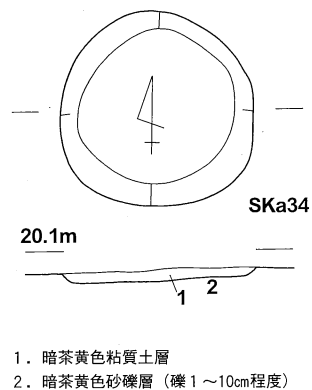
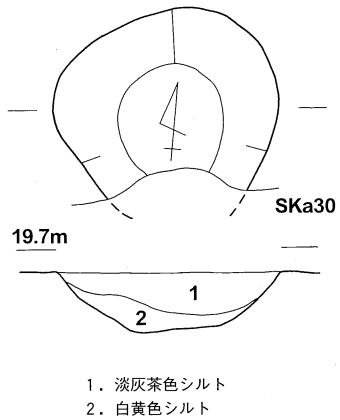
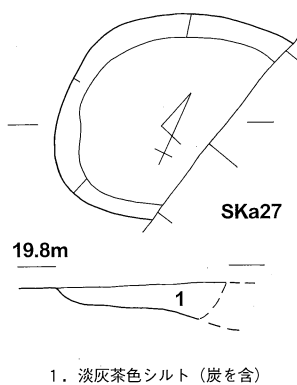
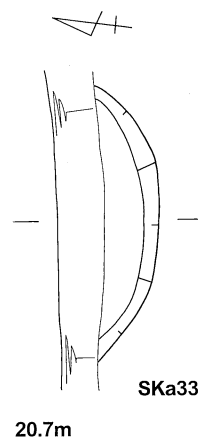
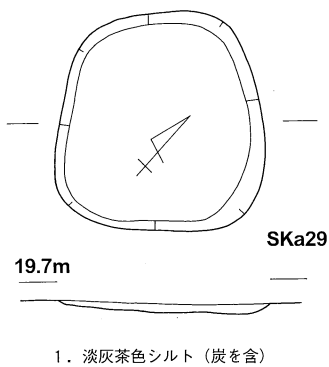
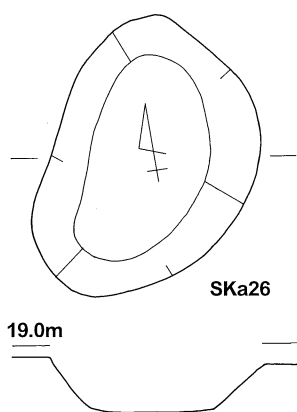
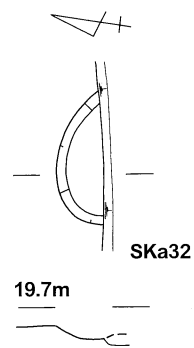
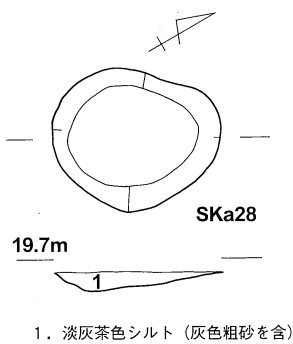
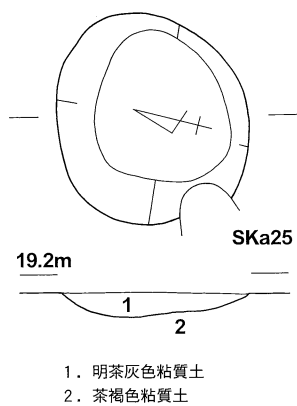
#### S D a 18

I - 9区で検出した幅2mほどの溝状遺構で、S D a 17と直交する方向に流れ、I - 13区では延長が



第72図 池台池、SDa17、18 出土遺物実測図





第73図 SKa25~34 平・断面図

検出されていないことから、S D a 17とT字形に接続するものと考えられる。南側は池台池に連続しており、池台池から延びる灌漑用水路と判断できる。第72図456～461は池台池の埋立て土およびS D a 18から出土した遺物で、456は底部は回転糸切りの土師器杯、457は陶器徳利の底部と思われる破片、458は土師器の井筒下端と思われる破片、459は土師器かまどの破片、460は土師器の平面方形の鉢形になるとと思われる破片、461は丸瓦玉縁部の破片である。

S K a 25～34

S K a 25～34は、出土遺物が無かったか僅少のため時期決定できない土坑である。

S K a 25はI-8区 (X=143.227、Y=52.224付近) で検出した土坑である。平面形は円形、断面形は浅い皿状を呈する。径1.1m、深さ0.12mを測る。遺物は出土しなかった。

S K a 26はI-8区 (X=143.216、Y=52.215付近) で検出した土坑である。平面形は不整楕円形、断面形はやや深い皿状を呈する。長径1.5m、短径1.1m、深さ0.25mを測る。時期不明の素焼き土器小片2点が出土している。

S K a 27はI-9区 (X=143.214、Y=52.174付近) で検出した土坑である。平面形はS D a 14に壊されているが、不整円形と推定される。断面形は皿状を呈する。短径1.2mを測る。弥生時代前期に属すると思われる磨滅した土器細片が僅かに出土している。

S K a 28はI-9区 (X=143.212、Y=52.174付近) で検出した土坑である。平面形は不整円形、断面形は浅い皿状を呈する。径0.76～0.9m、深さ0.09mを測る。遺物は出土しなかった。

S K a 29はI-9区 (X=143.210、Y=52.168付近) で検出した土坑である。平面形は隅丸方形、断面形は浅い皿状を呈する。一辺約1.1m、深さ0.06mを測る。遺物は出土しなかった。

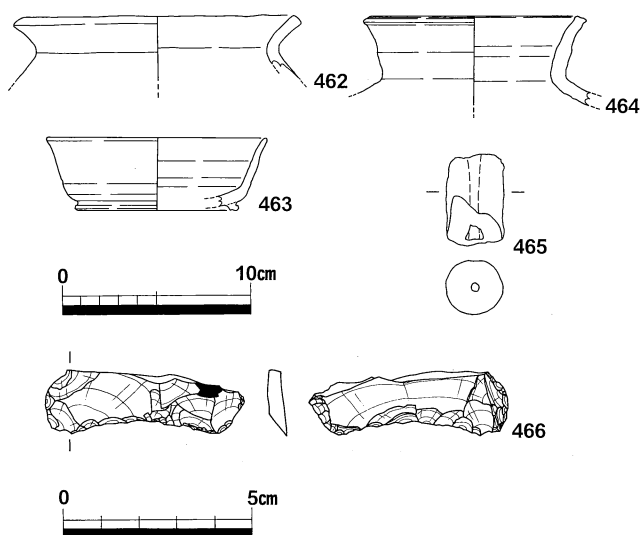
S K a 30はI-9区 (X=143.202、Y=52.168付近) で検出した土坑である。平面形は不整円形、断面形はU字状を呈する。径1.2mほど、深さ0.27mを測る。時期不明の磨滅した土器細片数点が出土している。

S K a 31はI-9区 (X=143.203、Y=52.163付近) で検出した土坑である。平面形は円形、断面形は皿状を呈する。径1.2m、深さ0.11mを測る。遺物は出土しなかった。

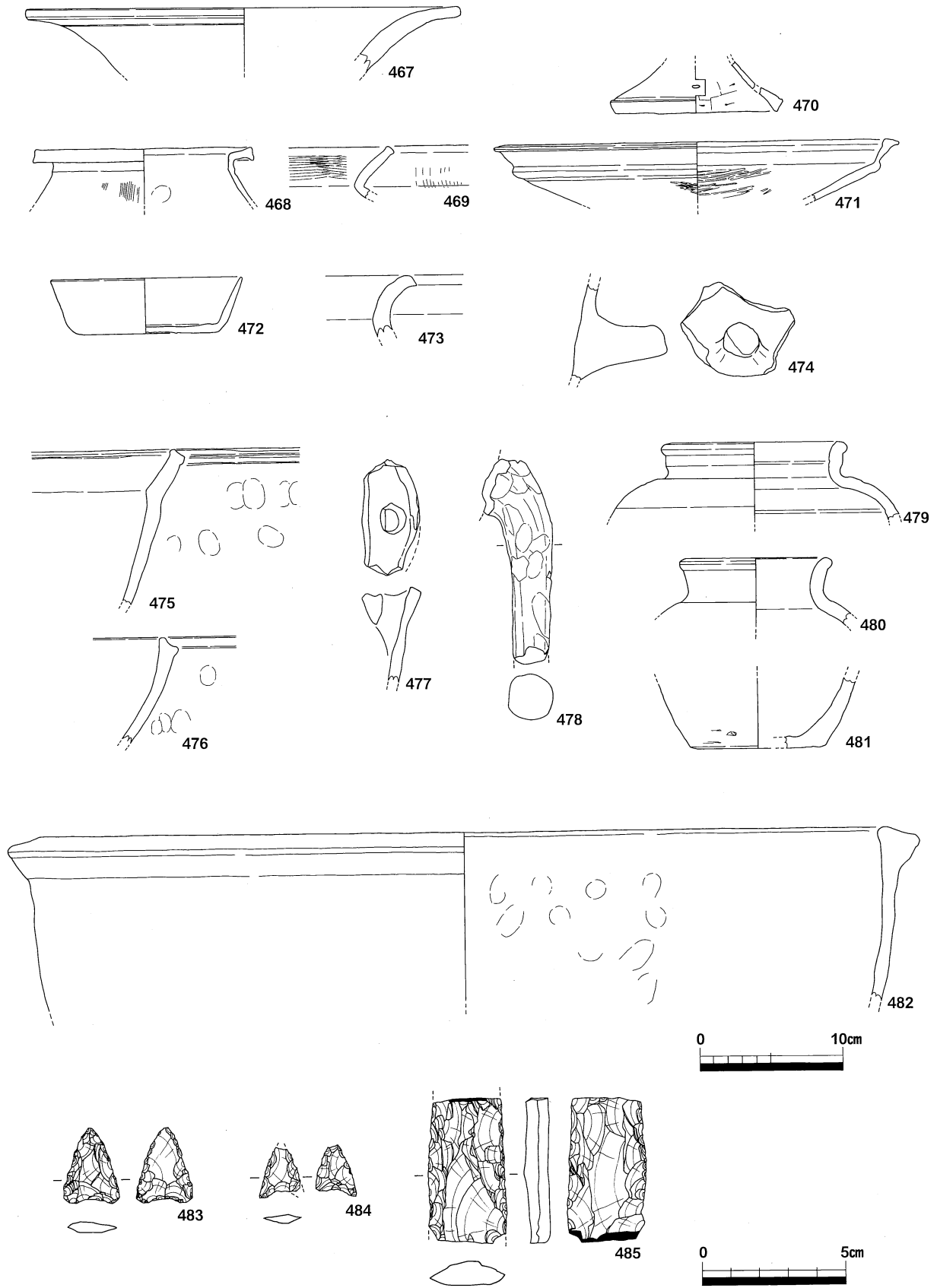
S K a 32はI-13区 (X=143.221、Y=52.149付近) で検出した土坑である。大半が調査区外に延びるため、平面形、断面形は不明である。遺物は出土しなかった。

S K a 33はI-13区 (X=143.225、Y=52.152付近) で検出した土坑である。大半が調査区外に延びるため、平面形、断面形は不明である。時期不明の磨滅した土器細片数点が出土している。

S K a 34はI-13区 (X=143.224、Y=52.168付近) で検出した土坑である。平面形は円形、断面形は浅い皿状を呈する。径約1m、深さ0.05mを測る。遺物は出土しなかった。



第74図 北地区 包含層等 出土遺物実測図(その1)



第75図 北地区 包含層等 出土遺物実測図 (その2)

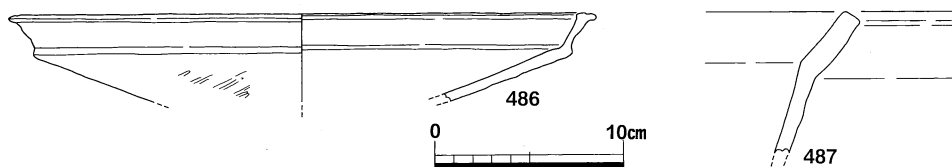
(6) 包含層出土の遺物

第74～76図は包含層、トレンチ、遺構検出時などに出土した遺物実測図である。

462は弥生土器甕、I-8区包含層から出土した。463～465はI-8区の調査区南北端の排水溝を掘削中に出土したもので、463は須恵器杯、464は須恵器甕、465は土錘である。466はI-8区包含層から出土したもので、側縁を細部調整により整形し、一辺に内湾する刃部をつくっている。破片のため全体像は不明であるがスクレイパーとして報告する。

467～485はI-9区の包含層、攪乱層から出土した遺物、遺構検出作業中に出土した遺物、出土層位不明の遺物の実測図である。467は弥生時代前期の壺である。器表は磨滅するが口縁下側の外面に一条のヘラ描き沈線が認められる。468、469は弥生時代後期の甕。468は下川津B類土器である。470、471も下川津B類土器である。470は高杯の脚部、471は高杯か鉢の口縁部である。471の口縁端部は外側に拡張し、頂部に平坦面をつくっている。472は須恵器杯、I-9区東半の包含層中から出土した。473は須恵器甕、474は土師器の甑か甕の把手である。牛角状ではなく斜め上方に直線に延びる形状である。475は土師器土鍋、476は土師器こね鉢と考えられる。小片である。477は土師器の把手付き鍋、478は土師器土釜脚部である。479～481は備前焼壺。体部から直立する口縁で端部は外側に玉縁をつくり丸くおさめている。482はやや内傾する断面形から土師器の甕と思われる。483、484は石鏃、485は石槍とした。485は先端と基部を欠損する。細かな剥離によって刃部を整形している。残存部の両側縁の下端に挟りが入ることから基部に近い部分と考えられる。

第76図はI-9区の北側への遺跡の拡がりを確認するために実施された試掘によって出土した遺物である。486は弥生時代後期の高杯か鉢である。下川津B類土器で、口縁端部を外側に拡張する形態である。487は土師器土鍋である。



第76図 試掘トレンチ 出土遺物実測図

### 第3節 西地区の調査

#### 1. 土層

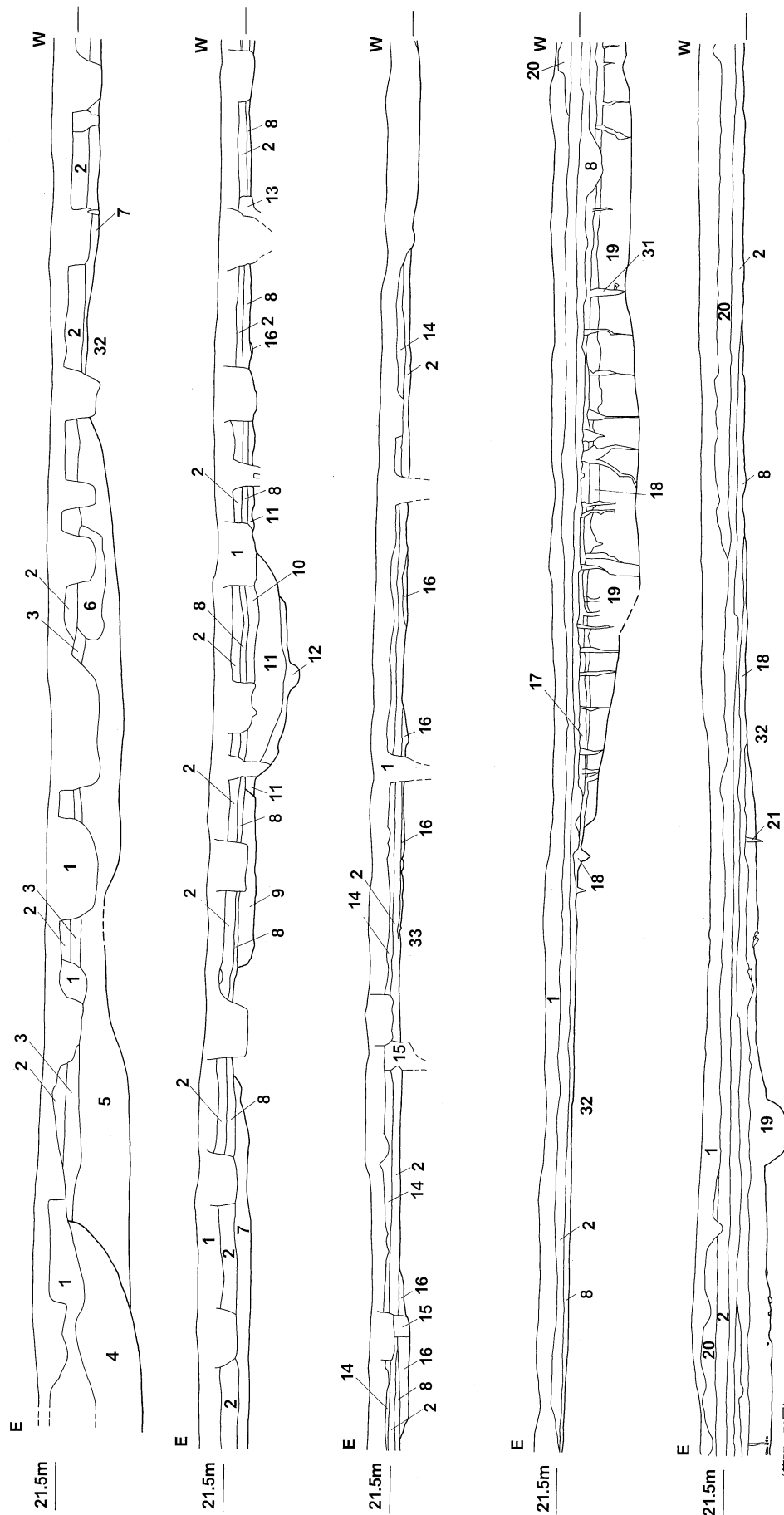
西地区は空港跡地遺跡の西端と西南端の逆L字状の調査区で、空港跡地遺跡西半部の西端の南北およそ150m、幅13m、西南端の東西およそ220m、幅8mほどの細長い調査区である。I-14,15区（計画時には2調査区としていたが、実際は1区として調査した）、I-16区、I-22区の3つの調査区からなる。第77～81図は西地区の調査区断面の実測図で、第77、78図はI-16区の調査区南壁の断面、第79、80図はI-14,15区の調査区西壁の断面、第81図はI-22区の調査区西壁断面図のうち北端の池台池付近のものである。

第77図の東端部では池台池の落ちが見え、後述南地区の西端部までが池台池の池敷きとなる。地表面には昭和19年の飛行場造成の際の盛り土が認められる。この層の下面には2mほどの間隔で、一辺0.6m、深さ0.3mほどの落ちが見られるが、これは高松空港南辺に設けられていたフェンスの支柱の掘り方である。造成土の下には昭和19年当時の水田耕作土が残存し、この直下に遺構面が現れる。遺構面は1面で、地山は灰色極細砂質土層で安定している。第77図の西端部付近には暗灰色極細砂質土で埋没する落ち込みがある。極めて緩やかな傾斜で落ち込むが、深さは最大で0.5mに達している。この層中から弥生時代後期を中心に時期幅のある遺物が出土している（第144図）。第78図のI-14,15区・I-22区でも、SHa08の北約3mから幅12mほどの緩やかな落ち込みがあり、暗茶灰色極細砂質土で埋没している。出土遺物は弥生時代後期と考えられる土器片少量である。第77図西端付近の落ち込みと連続するものと思われる。

上記の落ち込みの北側には、SHa02付近をピークに旧中州と考えられる砂礫層の盛り上がりが見られる。砂礫は径0.5～5cmほどの砂岩垂円礫よりなり、礫間には中～粗砂が充填している。この砂礫層は北に向かって落ち込んでおり、その上面に砂層が堆積している。砂層は厚さ0.1～0.4mほどが暗茶色極細砂質土で以下はやや黄色をおびる灰色細砂質土に変化している。この層中には古墳時代中期を年代の中心とする遺物が完形に近い状態で出土している（第113～115図）。本来存在していた遺構が後世の土色の変化によって確認できなくなった可能性が高い。なお、砂礫層のピークの南側で砂礫層の上面に堆積した砂層中から火山灰層を検出した。北地区（I-9区）での層序や層相からアカホヤ火山灰と考えられる。

西地区では多数の竪穴住居が検出されているが、旧中州とそれに付着する自然堤防堆積物と考えられる砂層からなる微高地上を選んで、集落が営まれていることが伺える。

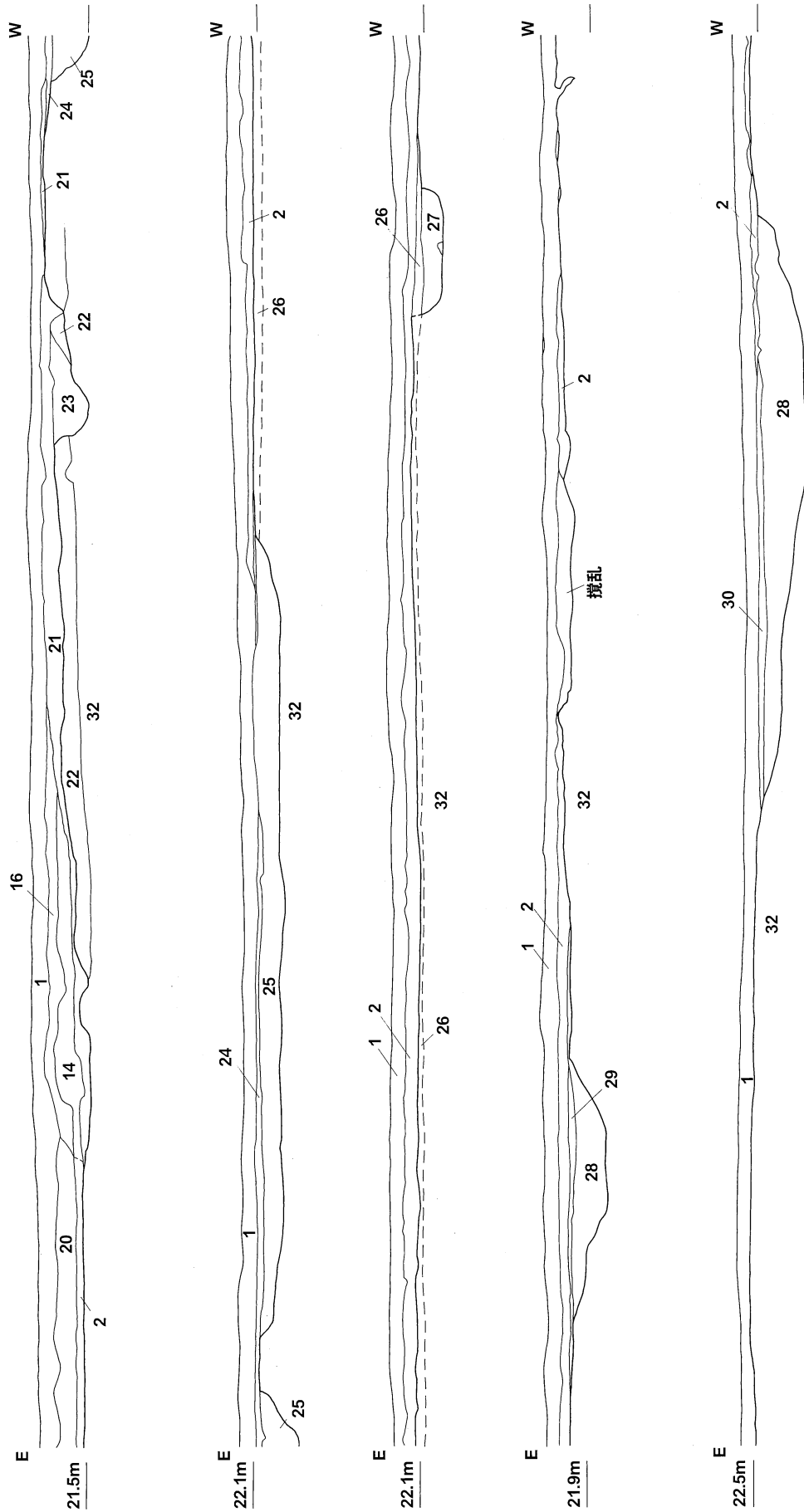
砂礫層北側の砂層は北に向かって落ち込んでおり、上面に複数の遺物包含層が堆積している。落ち込みの傾斜の方向に直交して数条の溝状遺構が検出されている。さらに、調査区北端で昭和19年に埋め立てられた池台池の南岸が検出されている。



- (第77・78図)
1. 表土層 (茶灰色礫まじり砂質土 2~5 cm程の礫多くまじる 植物根多)
  2. 明灰色細砂質土 (Fe多く含 旧耕作土)
  3. 明灰色細砂質土 (Feわずか含 旧耕作土)
  4. 茶灰色砂礫まじり細砂質土 (1~8 cm程の珪円礫が乱雑に入る。溜池埋土)
  5. 明灰色シルト質土、明灰色極細砂、灰色粘質土がブロック状に堆積
  6. 明灰色礫層 (2~10 cm程の砂岩重円礫乱雑に入る Mは茶灰色シルト質土)
  7. 明灰色極細砂質土 (Mn、Fe含 S X a 06埋土)
  8. 明灰色極細砂質土 (Mn、Fe含、2層よりやや色調暗く緻密 Feの沈着により2層に細分される)
  9. 灰色極細砂質土 (Feわずかに含 Mn多く含 S D a 29埋土)
  10. 明灰色極細砂質土 (Fe、Mn含 8層に対しMn多く含 S D a 28上層)
  11. 茶色をおびる灰色極細砂質土 (Mn多く含 Fe含 S D a 28上層)
  12. 灰色シルトまじり極細砂質土 (Mn、Fe含 地山ブロックわずか含 S D a 28下層)
  13. 茶灰色極細砂質土 (2、8層のブロック)
  14. 明灰色極細砂質土 (Fe、Mn含 小礫含)
  15. 茶灰色極細砂質土
  16. 明灰色極細砂質土 (Fe多く含 スキ藻か)
  17. 灰白色極細砂質土 (Fe含 Mn粒わずかに含)
  18. 灰色シルト質土 (Mn粒含 Fe含 19層の土塊層か)
  19. 暗茶色シルト質土 (小礫、Fe含 ぐさり小礫 S R a 03埋土)



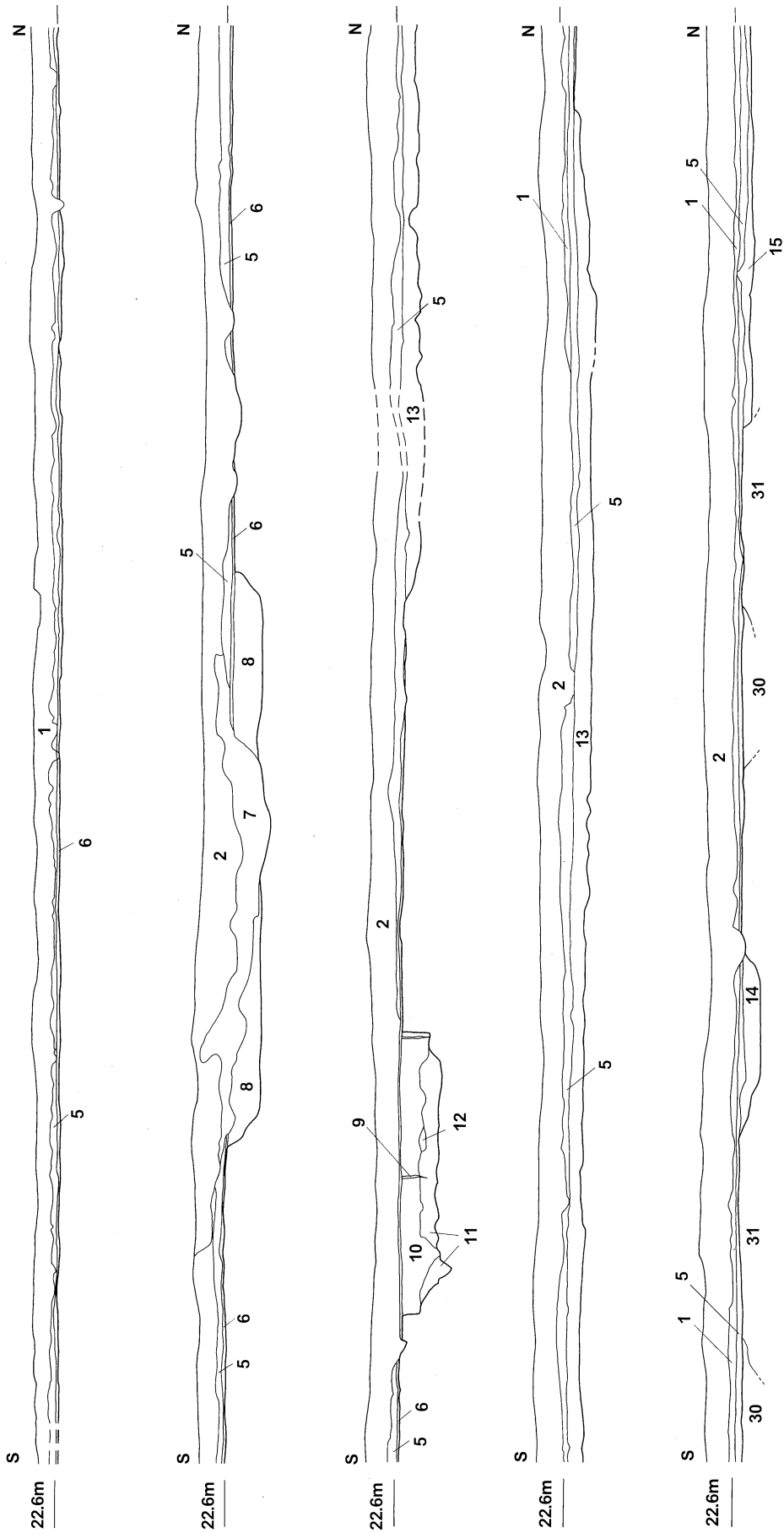
第77図 西地区 南壁断面 (その1)



(第77・78図)

- 20. 灰色シルト質土 (水田耕土)
- 21. 暗灰色小礫まじり細砂質土 (1~3cmの礫まばらに含 Mn含)
- 22. 暗茶色小礫まじりシルト質土 (1~3cmの礫まばらに含 Fe含)
- 23. 暗灰色小礫まじり細砂質土 (2cm程の礫まばらに含 S D a 31埋土)
- 24. 灰色極細砂質土 (5mm程のMn粒多く含)
- 25. 暗茶褐色小礫まじり砂質土 (Fe、Mn含 細~中砂主体 S D a 36埋土)
- 26. 灰色細砂 (Fe、Mn含)
- 27. 茶灰色細砂 (Fe含 S D a 22埋土)
- 28. 暗灰色極細砂質土 (Mn、Fe多く含 U-4.5包含層)
- 29. 灰色小礫まじり細砂質土 (Fe、Mn多く含)
- 30. 明灰色極細砂質土 (Mn多く含 Fe含)
- 31. 明茶灰色砂質土 (礫砂)
- 32. やや青味かかる明灰色シルト質土 (地山)

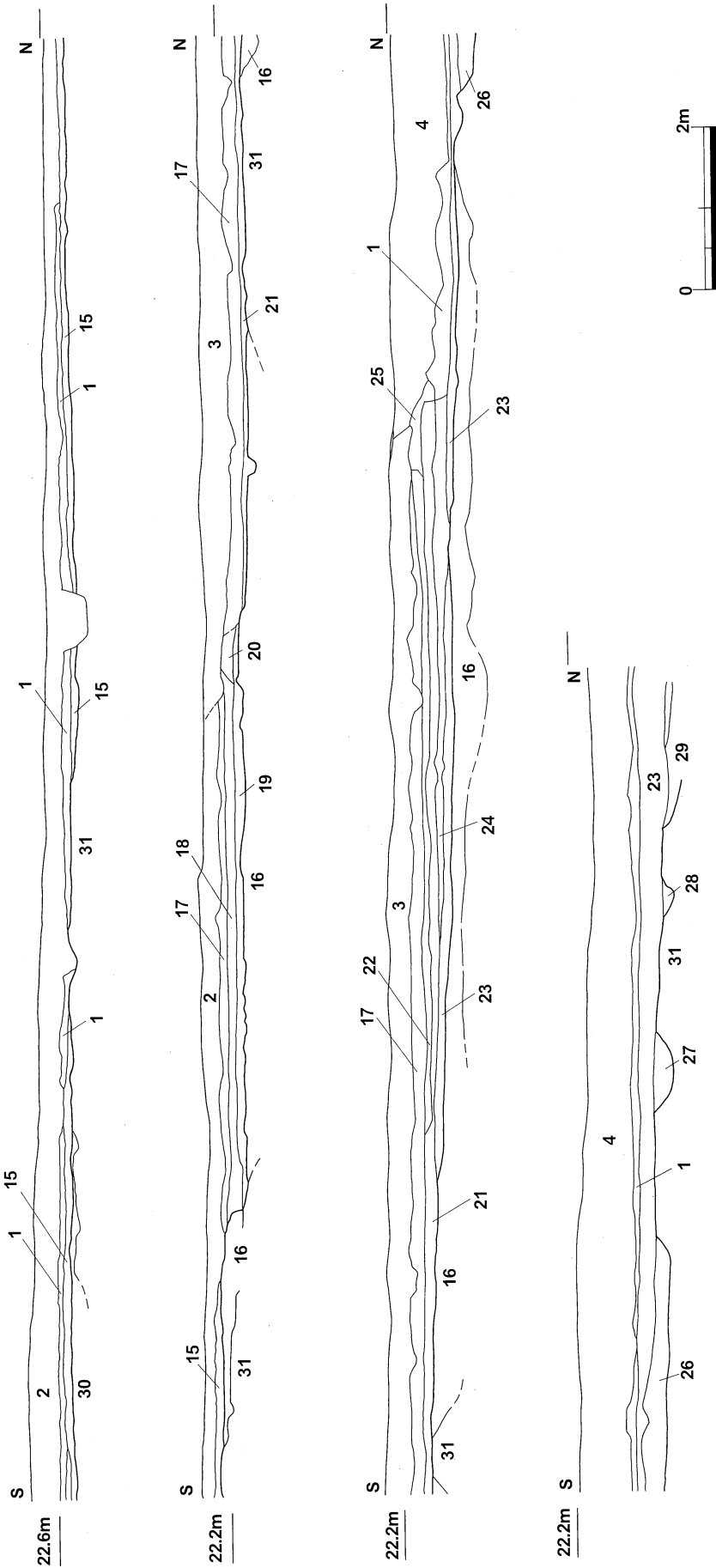
第78図 西地区 南壁断面 (その2)



第79図 西地区 西壁断面 (その1)

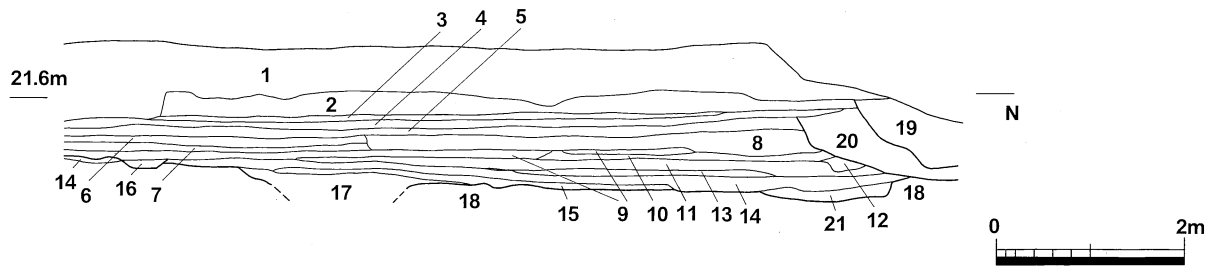
- (第79、80図)
1. やや茶色をおびる灰色極細砂質土 (旧耕土 Fe、細礫含)
  2. 攪乱 (灰色礫、暗灰色粘質土 花崗土のブロック 礫は1~5cm)
  3. 養土 明灰色シルト質土 (植物根多く含 小礫含)
  4. 攪乱 (暗茶灰色砂質土 明灰色細砂質土よりなるブロック)
  5. 灰白色細砂質土 (Fe多く含 Mn含 床土)
  6. 灰色細砂質土 (Fe非常に多く含 床土)
  7. 明灰色極細砂質土 (Fe含 小礫わずか含 攪乱)
  8. 暗茶色極細砂質土 (Mn、Fe含 SHa0.9埋土)
  9. 明茶灰色砂質土 (噴砂)
  10. 茶灰色シルト質土 (上面にFe、Mnを含)
  11. 茶灰色シルト質土 (10層より色調がうすくやや黄色味がかっている)
  12. 茶灰色シルト質土 (炭化物や焼土含む)
  13. 暗茶灰色シルト質土 (Mn、Fe含 S T包含層)
  14. 茶色礫まじりシルト質土 (3cm程の砂岩面礫多く含 SXa0.3埋土)
  15. 灰白色細砂まじりシルト質土 (Fe含 Mnわずかに含 旧耕土)
  16. 黄灰色シルト質土 (Mn、Fe含 古墳時代中期包含層)
  17. 灰色極細砂質土 (Fe含 旧耕土)
  18. 明灰色粗砂まじり極細砂質土 (Fe含 床土)
  19. 明灰色粗砂まじり極細砂質土 (Fe多く含 床土)
  20. 明灰色小礫まじり極細砂質土





第80図 西地区 西壁断面 (その2)

- (第79, 80図)
- 21. 灰色極細砂質土 (Fe多く含 床土)
  - 22. 明灰色細砂質土 (Feわずか含)
  - 23. やや紫味をおびる灰白色極細砂質土 (24層よりやや色調淡い)
  - 24. やや紫味をおびる灰白色極細砂質土 (Feわずか含)
  - 25. やや茶色をおびる灰白色極細砂質土
  - 26. 暗茶灰色極細砂質土 (上面でMn多い 1~5 cmの層まばらに含)
  - 27. 明灰色シルト質土 (Mn, Fe含)
  - 28. 明灰色シルト質土 (Mn, Fe含 0.5~1 cm程の層含)
  - 29. 明茶灰色極細砂質土 (上面にMn沈着、北に向かい粘質化する)
  - 30. 灰白色極細砂質土 (Mn, Fe含 地山)
  - 31. 灰色礫 (0.5~5 cm程の砂岩垂円礫、Mは灰色細砂 地山)



- |                      |                                      |
|----------------------|--------------------------------------|
| 1. 花崗土・造成土           | 12. 明灰色砂質土 (Fe混)                     |
| 2. 灰色砂質土 (旧耕土)       | 13. 褐灰色砂質土 (くさり礫含)                   |
| 3. 赤茶灰色砂質土 (Fe多 旧耕土) | 14. 暗茶灰色砂質土 (Mn含)                    |
| 4. 明灰色砂質土 (旧耕土)      | 15. 暗茶褐色粘質土混砂質土 (17層より暗い)            |
| 5. 不明                | 16. 明茶灰色砂質土 (SD)                     |
| 6. 赤褐色砂質土 (旧耕土)      | 17. 暗茶褐色粘質土混砂質土 (SD)                 |
| 7. 灰褐色砂質土 (Fe含)      | 18. 暗茶灰色砂質土                          |
| 8. 明褐色砂質土 (Fe含 旧耕土)  | 19. 明褐色砂質土 (Fe、くさり礫混 北では茶色粘土も混 溜池埋土) |
| 9. 明黄灰色砂質土 (Fe含 旧耕土) | 20. 明褐色砂質土 (溜池埋土)                    |
| 10. 明茶灰色砂質土 (くさり礫含)  | 21. 暗褐色砂混粘質土 (Fe含 SD)                |
| 11. 明茶灰色砂質土 (Mn含)    |                                      |

第81図 西地区 西壁断面 (その3)

## 2. 遺構・遺物

### (1) 弥生時代前期末～中期初め

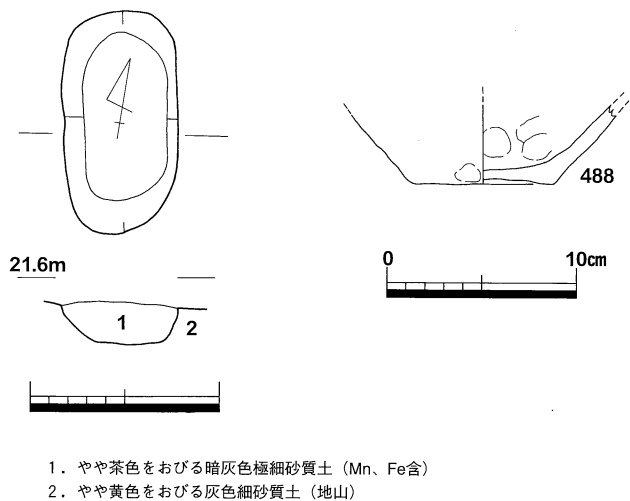
#### ① 土坑

S K a 35

I-14、15区 (X=143.128、Y=51.881付近) で検出した土坑である。平面形は隅丸方形、断面形は皿状を呈する。長径1.1m、短径0.6m、深さ0.21mを測る。弥生時代前期の壺底部(第82図488)のほか、弥生時代前期に属すると思われる胎土中に砂粒の目立つ細片が10点あまり出土している。

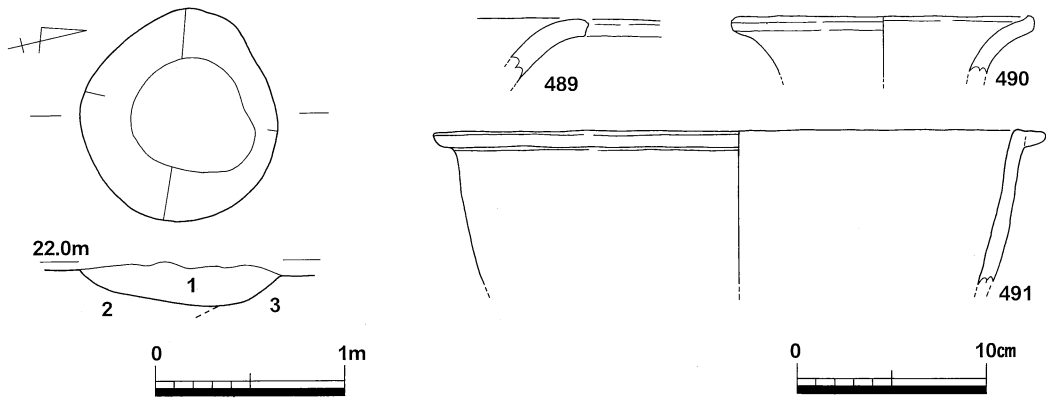
S K a 36

I-14、15区 (X=143.109、Y=51.879付近) で検出した土坑である。平面形は不整形円形、断面形は皿状を呈する。径約1.1m、深さ0.2mを測る。第83図489～491はS K a 36出土の遺物実測図である。489、490は弥生時代前期の壺、491は逆L字状口縁の甕である。このほか弥生時代前期に属すると思われる器壁



1. やや茶色をおびる暗灰色極細砂質土 (Mn、Fe含)  
2. やや黄色をおびる灰色細砂質土 (地山)

第82図 SKa35 平・断面図、出土遺物実測図



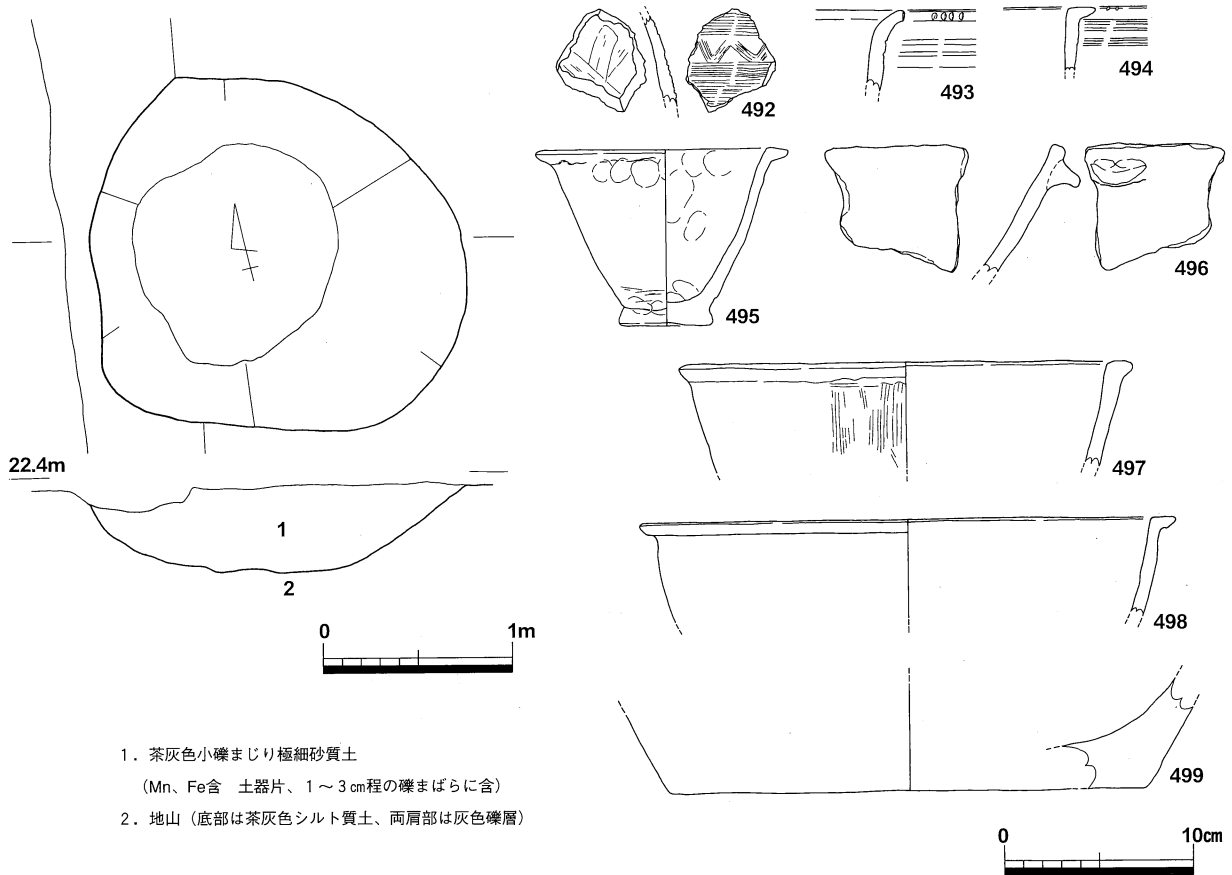
1. やや茶色をおびる灰色細砂質土  
(中砂含 1cm程の礫わずかに含)
2. 黄灰色極細砂 (地山)
3. 灰色砂礫 (1~3cm Mは灰色中、粗砂 地山)

第83図 SKa36 平・断面図、出土遺物実測図

の厚い、胎土中に砂粒の目立つ細片が15点あまり出土している。

SKa37

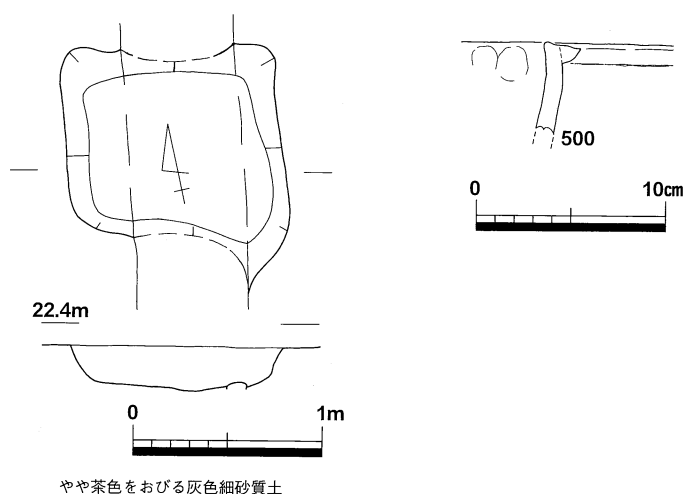
I-14、15区 (X=143.090、Y=51.874付近) で検出した土坑である。SDa30に一部壊される。平面形は不整円形、断面形は皿状を呈する。径約1.8~2m、深さ0.45mを測る。SKa37からは比較的多く



1. 茶灰色小礫まじり極細砂質土  
(Mn、Fe含 土器片、1~3cm程の礫まばらに含)
2. 地山 (底部は茶灰色シルト質土、両肩部は灰色礫層)

第84図 SKa37 平・断面図、出土遺物実測図

の遺物が出土し、コンテナ1 / 3箱分にのぼる。弥生時代後期の下川津B類の甕の破片が1点含まれる（混入と考えられる）ほかは弥生時代前期に属する土器の破片である。第84図492~499はSK a 37出土の遺物実測図である。492はヘラ描き沈線（多条）と山形文を施した壺体部と考えられる破片である。493は如意状口縁の甕である。口縁端部に逆D字の刻み目、口縁部直下に2条のヘラ描き沈線が巡る。494は逆L字状口縁の甕である。口縁直下に4条のヘラ描き沈線が巡る。



第85図 SKa38 平・断面図、出土遺物実測図

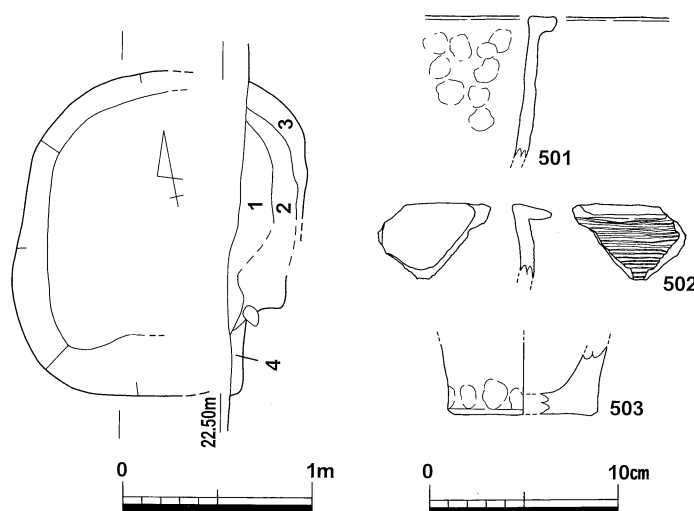
口縁端部の刻み目は剥落のため不明瞭である。495は鉢とした。先端部が尖り気味の如意状口縁をもつ。円盤状の底部に体部を接続しているが、ここに板状の圧痕が認められる。496の甕は口縁直下に把手状の突出部を付している。497、498は逆L字状口縁の甕、499は壺の底部破片である。

#### SK a 38

I-14、15区（X=143.085、Y=51.872付近）で検出した土坑である。SD a 30に一部壊される。平面形は隅丸方形、断面形はU字状を呈する。一辺約1.15m、深さ0.23mを測る。第85図500はSK a 36から出土した逆L字状口縁の甕である。このほかに弥生時代前期に属すると思われる器壁の厚い、胎土中に砂粒の目立つ細片が5点あまり出土している。

#### SK a 39

I-22区（X=143.084、Y=51.870付近）で検出した土坑である。東半はI-14、15区との間に掘り残した部分にあたるため本来の形状は不明であるが、I-14、15区では検出されなかったことから、平面形は楕円形と推定できる。断面形はU字状を呈する。長径約1.7m、深さ0.35mを測る。第86図501~503はSK a 39出土の遺物実測図である。501、502は逆L字状口縁の甕である。502には櫛描きの多条沈線が施されるが、沈線との位置関係から施文後に口縁部を付加していることがわかる。503は甕の底部である。

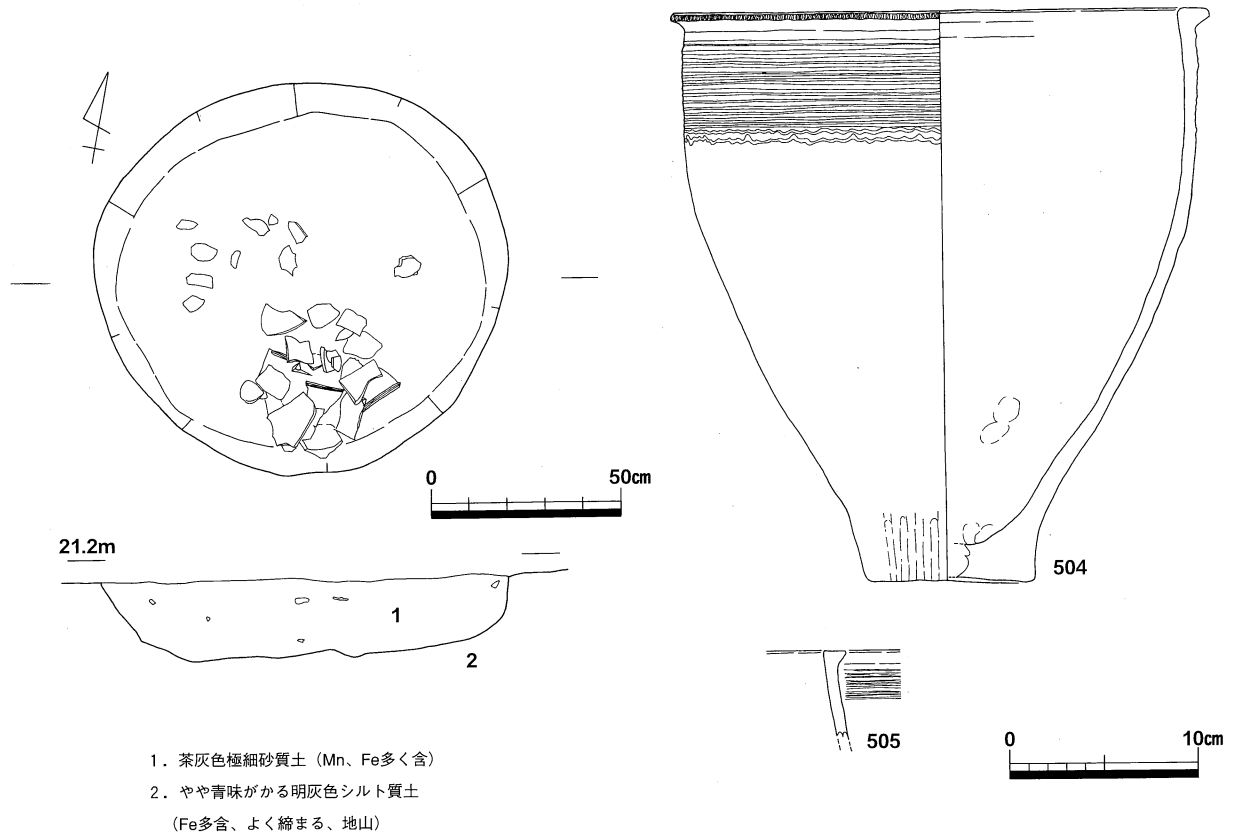


1. 茶灰色粘質土（Mn混）
2. 暗茶褐色粘質土（炭混）
3. 暗茶灰色粘質土（礫混）
4. 暗茶褐色粘質土（黄色土混）

第86図 SKa39 平・断面図、出土遺物実測図

S K a 40

I-16区東端 (X=143.065、Y=52.052付近) で検出した土坑である。周辺に同時期の遺構が見られず、見かけ上は単独で所在している。平面形は円形で、断面形はU字状を呈する。径1.1m、深さ0.2mを測る。S K a 40からは甕 (第87図504) が、ほぼ完形で横倒しの状況で出土している。504は口縁端部に刻み目をもつ逆L字状口縁の甕で、口縁部下に櫛描き沈線 (3条一対、計15条)、以下にやや稚拙な2条の複線波文を施している。底部外面に縦方向のヘラ磨きが認められるが、それ以外は磨滅のため不明である。505は頂部に平坦面をもつ断面三角形の逆L字状口縁の甕である。



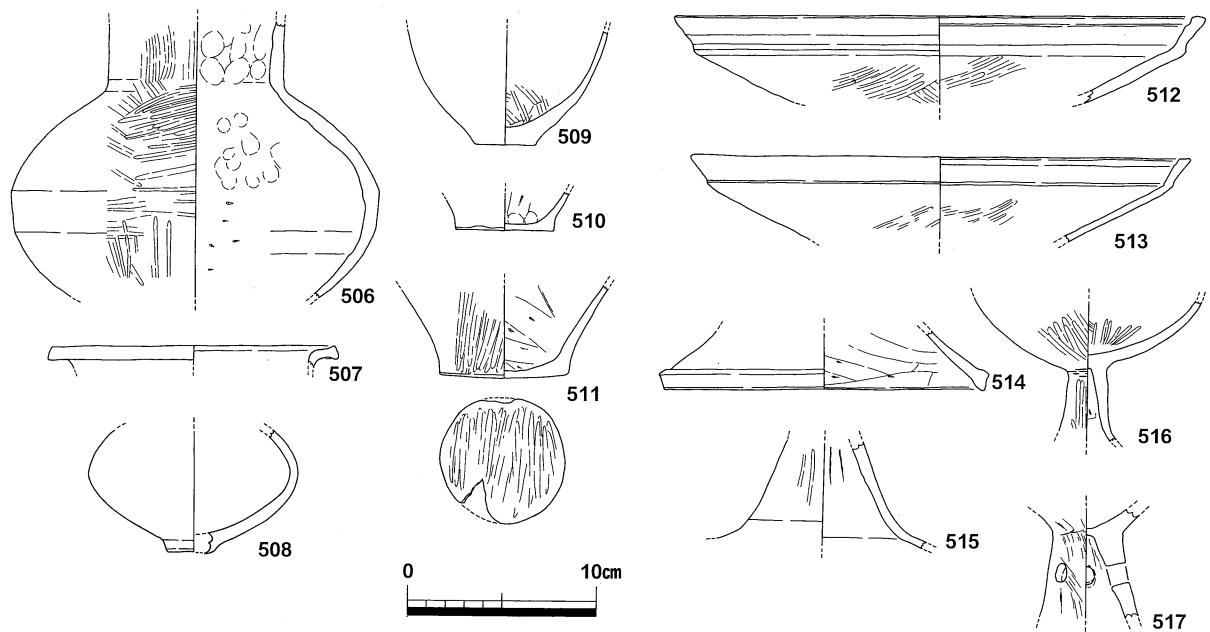
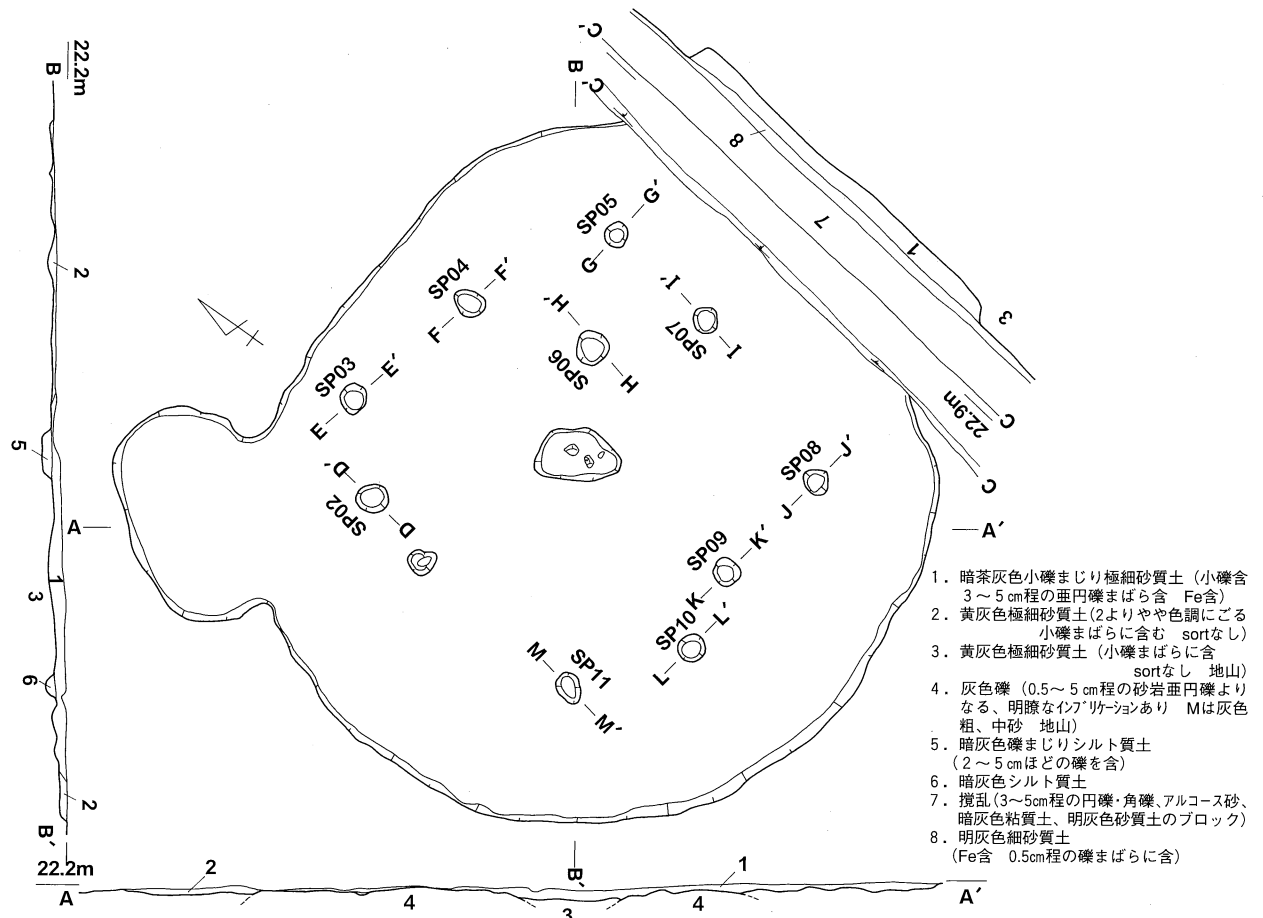
第87図 SKa40 平・断面図、出土遺物実測図

(2) 弥生時代後期

① 竪穴住居跡

S H a 02

I-14、15区 (X=143.106、Y=51.881付近) で検出した竪穴住居である。土層の節で記述したとおり、この付近は耕作土直下に砂礫層が盛り上がり、微高地を選んで住居を構えていることがわかる。竪穴住居の平面形は円形で、直径6.8~7.3mほどの大きさ、西北に隅丸長方形 (2.3×1.4m) の張り出しが付く。残存する深さはおよそ0.2mである。埋土の状況から判断すると増改築は行われていない。中央部に長軸0.9m、短軸0.55mほどの不整形の土坑がある。埋土に灰や炭化物などは含まれないが、位置から炉と



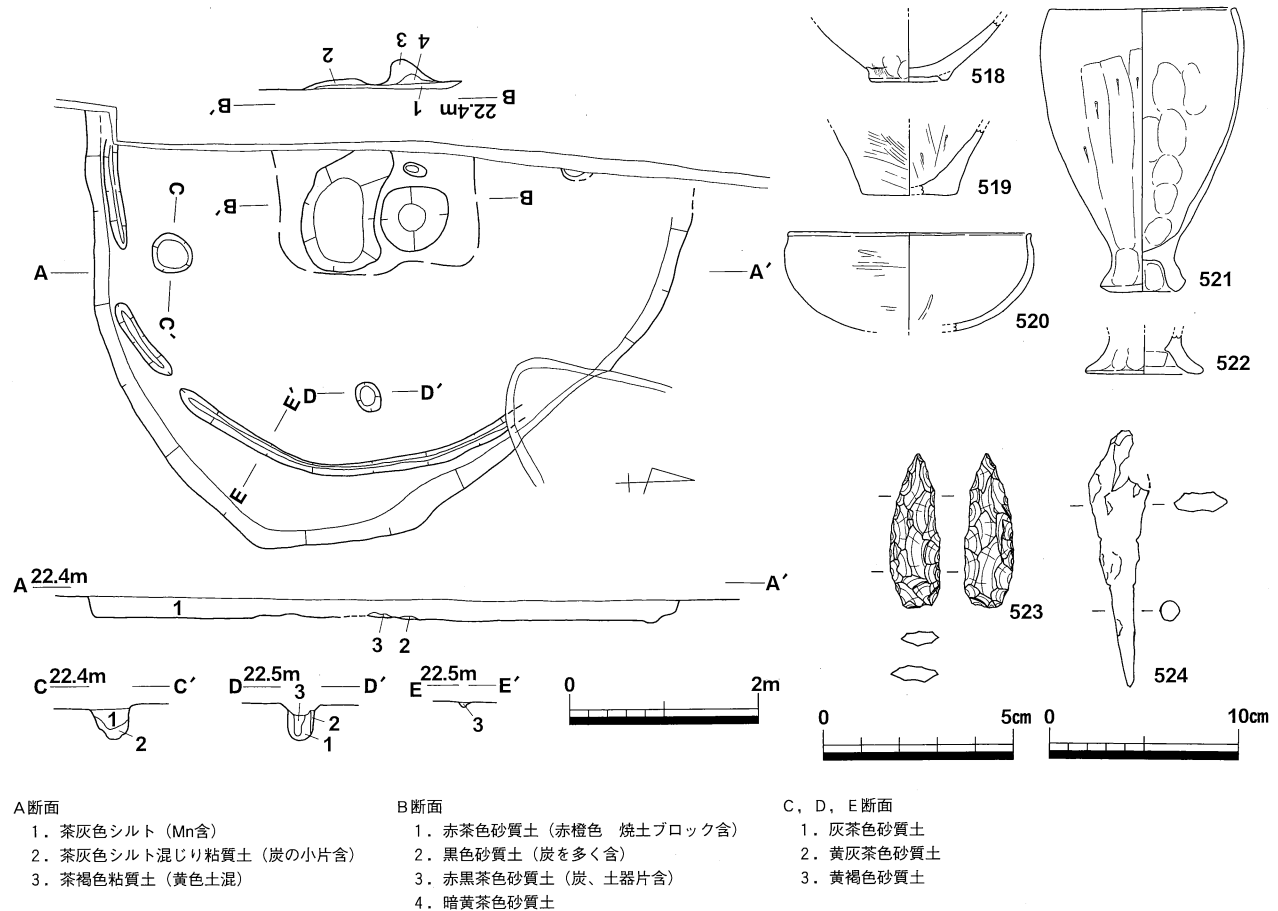
第88図 SHa02 平・断面図、出土遺物実測図

考えられる。柱穴は、砂礫層のため検出が困難であったが合計11基を検出した。S P 06を除くと概ね方形の柱穴配置が認められるが、柱穴配置の復原は困難である。ベッド状遺構や壁溝は検出されなかった。

検出面から遺構の底までの深さが浅かったため、出土遺物はほとんど床面直上といえる位置からの出土である。第88図506～517はS H a 02出土の遺物実測図である。506の壺と507の甕は下川津B類土器である。508は粘土円盤を付した底部をもつ壺である。509は平底の底部である。内面は比較的丁寧にはけ調整されている。510、511は下川津B類土器の底部である。平底で器壁を薄く仕上げる。510は磨滅するが、511の外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りが施される。512～514も下川津B類土器である。512、513は高杯か鉢、口縁端部は水平方向に平坦面をつくり口縁部内面に1条の凹線を巡らす。磨滅するが杯部内外面は四分割ヘラ磨きが施される。514は高杯脚部である。515は高杯脚部の小片、裾部内外面ヨコナデ、軸部外面ヘラ磨き、内面は絞りが見られる。516の高杯は椀形の杯部と細い軸部からなる。杯部内面は放射状のヘラ磨き、杯部外面、軸部もヘラ磨きが施される。517の高杯はS H a 02検出作業中に出土したものである。軸部中位に3ヶ所の円孔がある。

### S H a 03

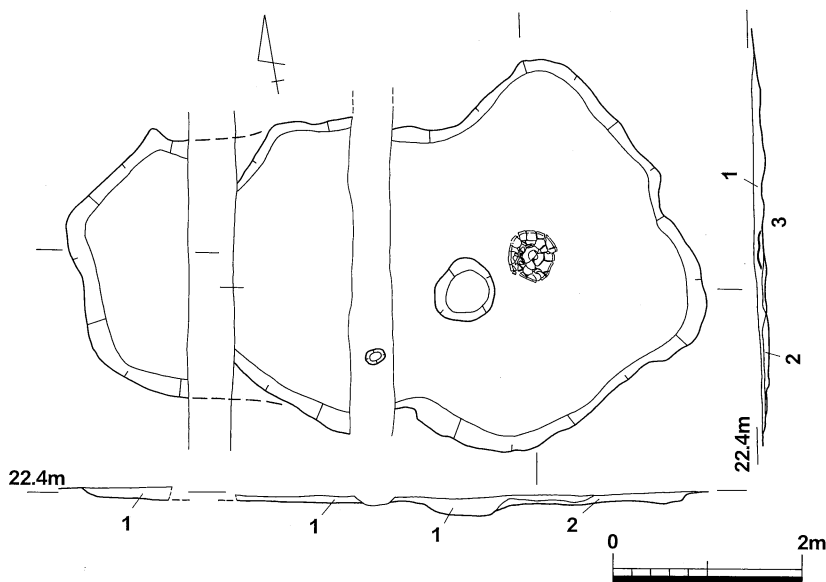
I - 22区 (X=143.023, Y=51.860付近) で検出した竪穴住居である。西地区調査区の西南端で検出され、住居の西半分は調査区外に延びる。平面形はやや不整形であるが直径6.4mほどの円形に復原される。検出面から床面までの深さは0.25mである。断続的に幅0.12m、深さ0.08mの壁溝が検出されている。住居東側は掘り込みラインと壁溝との間が最大で0.9mほど張り出しており (張り出しているところと住居床



第89図 SHa03 平・断面図、出土遺物実測図

面とはレベル差は無い)、概報段階では張り出しの可能性が指摘されている。しかし、張り出しとされる  
ところの平面プランに明瞭な張り出しと認定できるものがなく、むしろ竪穴住居の掘り方が何らかの理由  
で不整形になっていると考えられる。

住居中央には一辺2.1m×1.4m以上の隅丸方形の範囲に焼土、炭化物の見られる範囲があり、ここに長  
径1.4m、短径0.75m、  
深さ0.1mの楕円形の土  
坑と直径0.7m、深さ0.3  
mほどの不整形形の土  
坑が並列する。土坑内  
はいずれも炭化物を多  
く含んでおり炉と判断  
できるが、二つの土坑  
の機能を細分する情報  
は得られなかった。柱  
穴は3基確認され、住  
居内での位置から4主  
柱穴になると判断でき  
る。



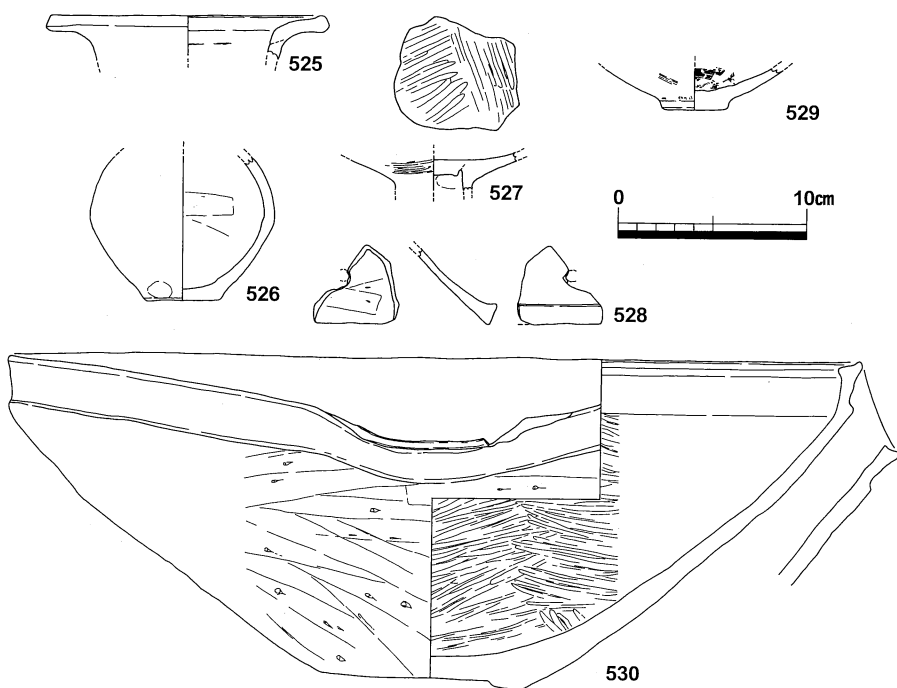
1. 茶色礫混じりシルト質土  
(3 cm程の円礫まばらにまじる 2層の不明瞭なブロック混入)
2. やや黄色をおびる明灰色極細砂質土 (下半に炭化物層がわずかに認められる)
3. 灰色礫層 (1~5 cm程の砂岩、垂円礫 インクリージョン Mは灰色粗砂、細礫 地山)

第89図はS H a 03出  
土の遺物実測図である。

518は粘土紐により高台  
状のものを付した底部  
破片である。胎土中に  
赤色粒が含まれている。

519は内面ヘラ削り、外  
面を強い板ナデで器壁  
を薄く仕上げた平底の  
底部破片である。520は  
土師器杯である。鉄鉢  
状の形態で口縁端部は  
丸くおさめる。内外面  
ヘラ磨きが施される。

521、522は製塩土器で  
ある。521は台脚付深鉢  
形で、体部は内湾気味  
に立ち上がり、外面へ  
ラ削り内面は指おさえ



第90図 SXa03 平・断面図、出土遺物実測図



後ナデている。台脚は断面八字状を呈する。523は柳葉形の石鏃、524は鉄鏃である。524は腐食が進んでいるが、圭頭形の鉄鏃で長さ14cmを測る。

S H a 03出土遺物は、弥生時代後期から古墳時代にかけて時期幅のあるものであるが、S H a 03付近は後代に広く攪乱されており、後代の遺物が混入してしまった可能性が高い。

S X a 03

I - 14、15、22区 (X=143.076、Y=51.872付近) で検出した遺構である。I - 14、15区調査時には西半部が調査区外に延びるため遺構の性格が分からなかったが、次年度に行われたI - 22区調査によって長軸6.7m、短軸2.9~4.2m、深さ0.12mほどの不定形の落ち込みであることが判明した。平面形からは遺構の性格は分からないが、形が整わないのは砂礫層上面で掘られたからだとすれば、遺存状況の悪い竪穴住居の可能性が高い。

第90図525~530はS X a 03出土の遺物実測図である。530の大型の片口鉢は完形で、底面から僅かに浮いた位置で付せられた状態で出土している。それ以外は破片で出土し、図化遺物のほかには若干量の細片が出土するのみである。525、526は弥生土器壺である。527、528は下川津B類の高杯である。527の杯部内面は四分割ヘラ磨き、杯部と軸部の接合は円盤充填法による。529は内外面ハケ調整で、円盤状の底部を付す鉢の底部である。530は口径45cmの大型の片口鉢である。下川津B類土器で、内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り、口縁部ヨコナデで整形している。

S X a 04

I - 22区 (X=143.067、Y=51.866付近) で検出した遺構である。遺構の大半が調査区外で、東端がわずかに検出できた。第91図531はS X a 04から出土した下川津B類の弥生土器甕である。下川津B類の胎土であるが531は雲母を多く含んでおり、外面のハケも1cmあたり5条と通有の下川津B類の甕よりもやや粗いという特徴をもつ。

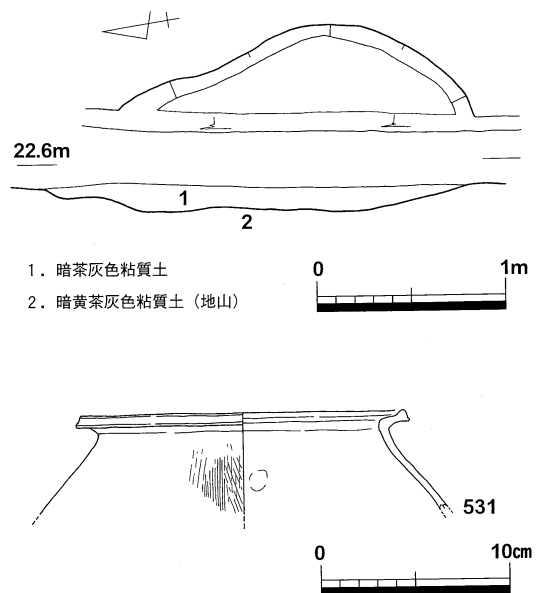
S X a 04は遺構の一部分のみの調査で遺構の性格を特定できないが、周辺に同時期の竪穴住居が数棟検出されており、埋土の様相が類似することから竪穴住居の可能性のある遺構として本節に報告する。

② 溝状遺構

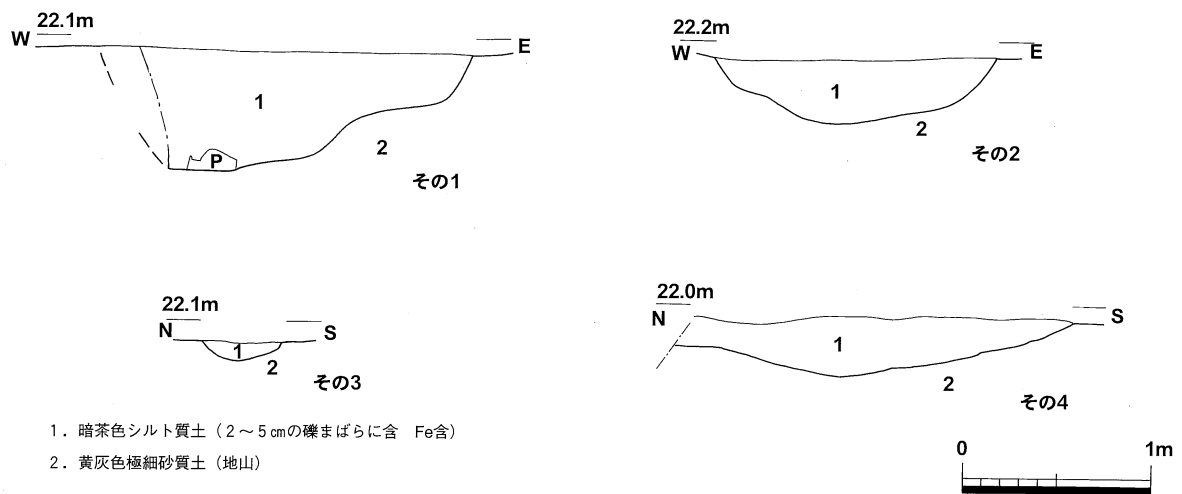
S D a 22

I - 16区 (X=143.040、Y=51.935付近) で検出した溝状遺構である。座標北から東へ34度振った方向で幅約1.3m、深さ0.35~0.65mの規模で北流し、東へ屈曲し幅0.4m、深さ0.1mほどの規模で東流する。東への流れは途中から幅が広がっている。このようにS D a 22は溝幅、深さが一定しないものであるが、暗茶色シルト質土一層で埋没している。

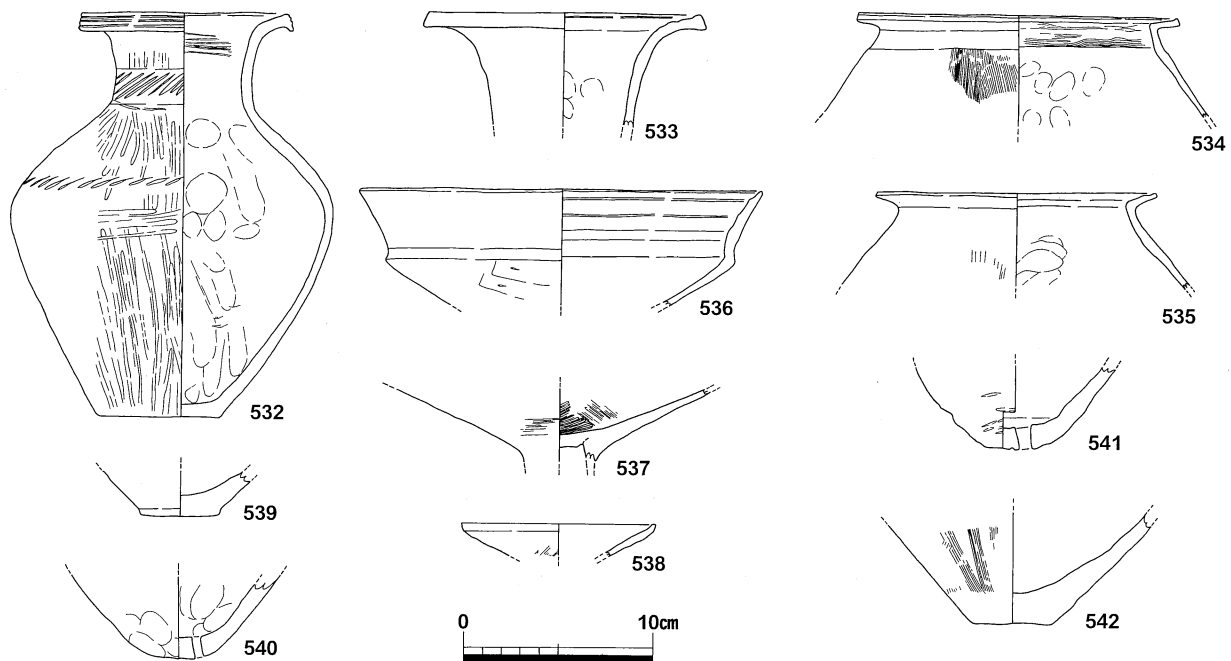
出土遺物はコンテナ2/3箱分の弥生時代後期の土器である。調査時には南北流部分をS D 10①、東西流のうち調査区中央を東西に横切る現代の排水溝の北側をS D 10②、南側をS D 12として遺物を取り上げている。このうち第92図532の壺は溝底に横倒しになった状態ではほぼ完



第91図 SXa04 平・断面図、出土遺物実測図



1. 暗茶色シルト質土 (2~5cmの礫まばらに含 Fe含)  
 2. 黄灰色極細砂質土 (地山)

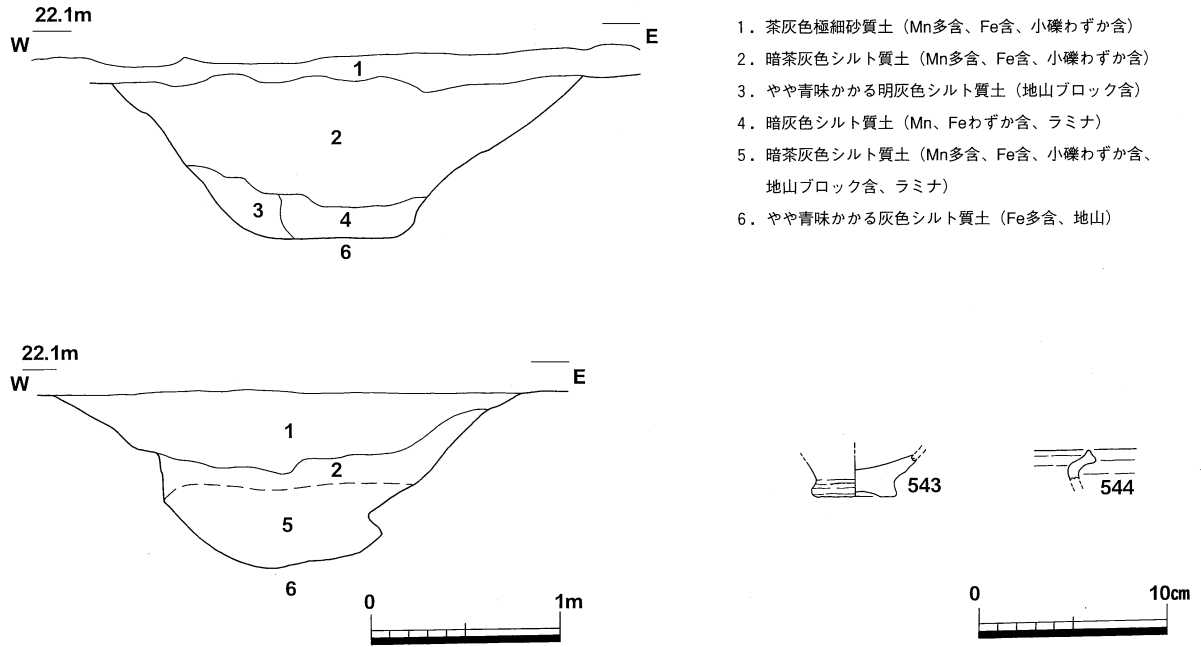


第92図 SDa22 断面図、出土遺物実測図

形で出土した。第92図532~542はSDa22出土の遺物実測図である。(532~540は調査時のSD10①、541、542はSD12から出土した。)532は下川津B類の壺である。頸部から緩く外反し口縁端部を下方に摘み出し端部に3条の沈線を施す。頸部下半と体部最大径付近に右上がりのヘラ描き斜線を施している。頸部外面、体部外面の上半、下半は縦方向のヘラ磨き、最大径付近は横方向のヘラ磨き、内面は指オサエ後ナデ、頸部内面上半には板ナデによりついたと思われる乱れた条痕が巡る。533~537は下川津B類土器である。533は壺である。磨滅する。534、535は甕である。536は高杯か鉢。口縁端部を尖り気味に仕上げている。537は高杯。いわゆる円盤充填法が見られる。内外面ヘラ磨きで、外面は磨滅のため不明であるが内面は四分磨きである。538は口縁端部の面取りや口縁部の傾きからみて小型の器台とした。539は底部。平底の底部外面にも丁寧なハケ調整が見られる。540、541は甑、542は底部である。

S D a 23

I-16区の東端 (X=143.075、Y=52.065付近) で検出した溝状遺構である。やや湾曲しながら東南方向から西北方向に流れている。溝上面の幅約2.4m、底幅約0.7m、深さ0.8~0.95mの規模で、断面形は逆台形状を呈する。検出長は約8.5mで北は調査区外、南は池台池によって壊されている。出土遺物はコンテナ1/8箱の弥生時代後期の土器で、細片が多い。第93図543は底部に粘土を押しつけて脚台を付した底部である。544は下川津B類土器の甕口縁部の小片である。

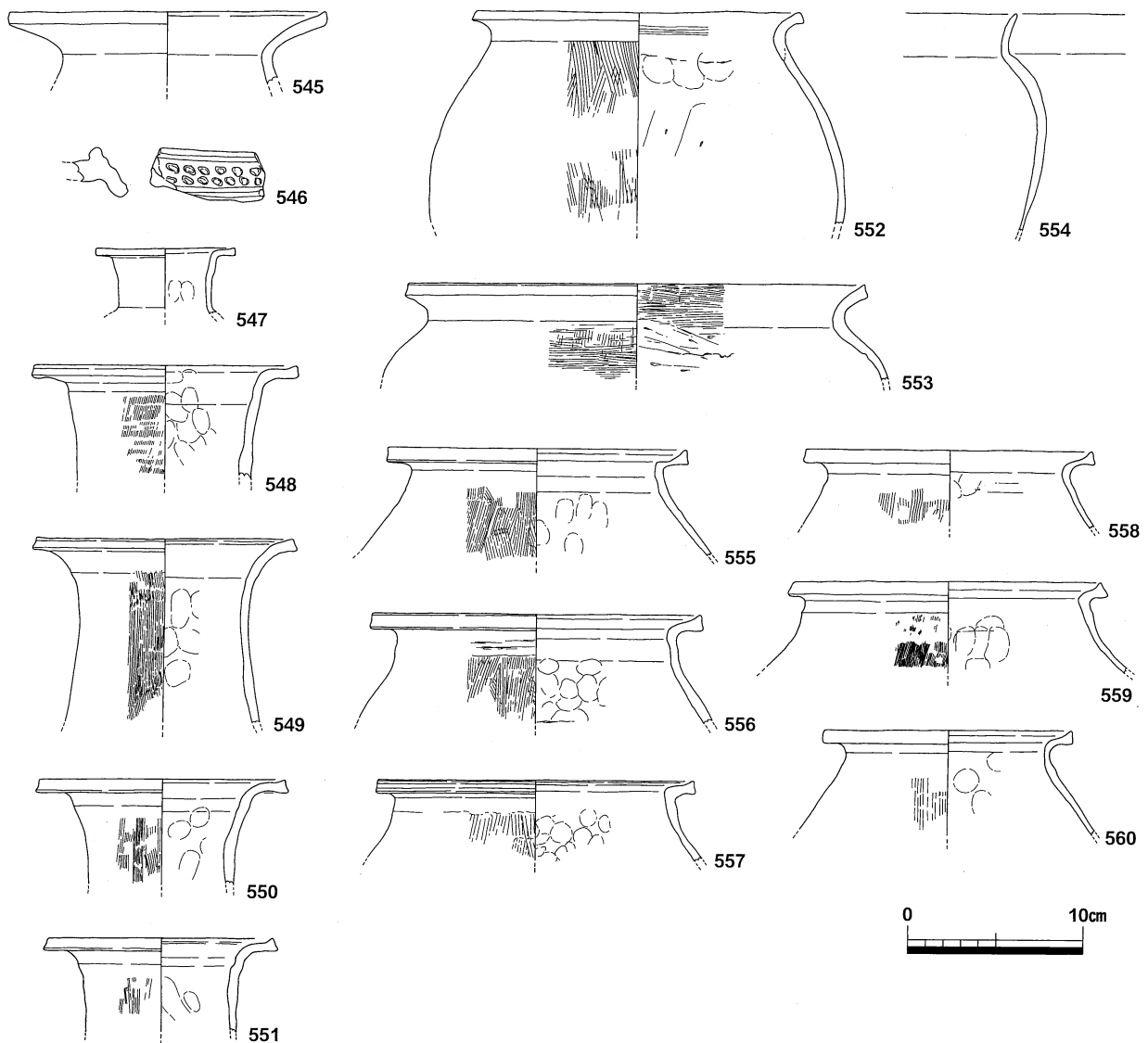


第93図 S Da 23 断面図、出土遺物実測図

S R a 03

I-16区 (X=143.055、Y=52.000付近) で検出した旧河道である。調査区北端で幅20m、南端で17.5mほどの規模で、河岸から河底までなだらかな傾斜で下がり、浅い皿状の断面形を呈する。北側では幅約9.5m、深さ約1m (東側) と幅約7m、深さ約0.7m (西側) の二つの流れに分岐している。埋土は小礫や鉄分を含む暗茶色シルト質土が主体で、暗茶色シルト質土で埋没した後に残った微凹地に灰白色極細砂質土が堆積し、この層には中世の遺物が包含されている。また、この層の上面において大地震の際に発生する噴砂と考えられるひびわれを検出した。

S R a 03からはコンテナ9箱の遺物が出土したが、掘削当初から河底付近で弥生時代後期の土器と古墳時代中期の土器が混在する状況が注意された。遺物は4mメッシュのグリッド毎に20cmほどの深さに区切って取り上げているが、古墳時代中期の土器はほぼ全域で河底や埋土中から出土している。一方、弥生時代後期の遺物は、調査区の南に集中する傾向がある。調査区の北壁と南壁での土層観察では異なる時期の遺構が存在する証左は得られず、むしろ、積極的に一層 (暗茶色シルト質土) で埋没していると判断された。しかし、古墳時代中期に河道が埋没する際に弥生後期土器が混入したとするには、弥生後期土

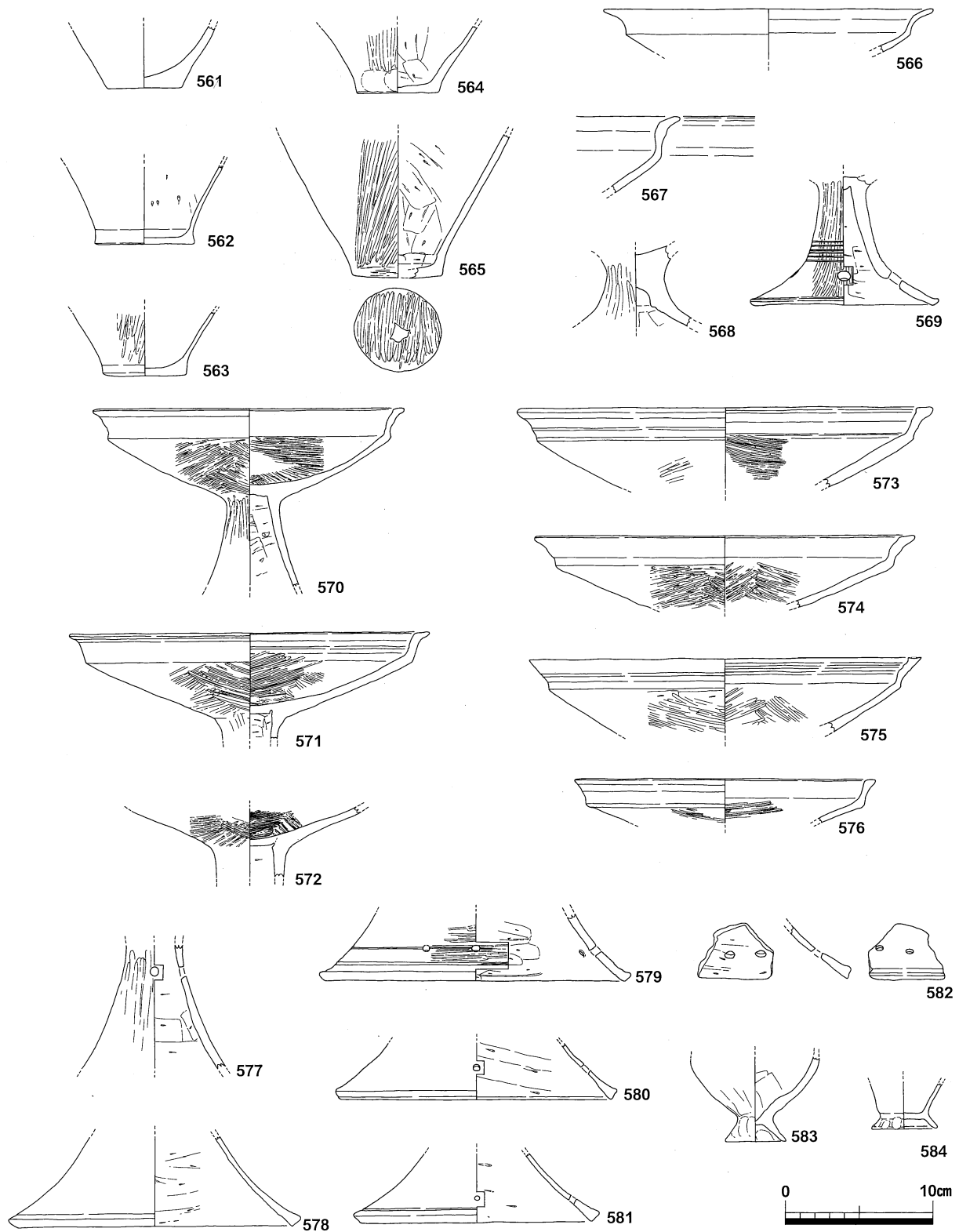


第94図 SRa03 出土遺物実測図（その1）

器にほとんど磨滅が見られない点で考えにくい状況であった。

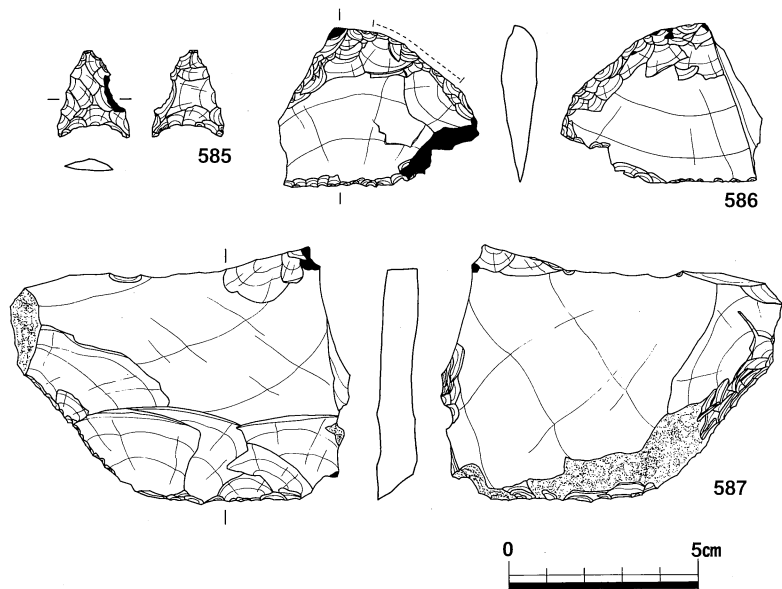
調査時には、遺物に時期幅がある理由はわからなかったが、整理段階で得られた一つの見通しは以下のとおりである。遺構配置図を見るとSRa03の河底南側に東西方向の溝状の落ち込みが見られる。弥生後期の土器はこの落ち込みの上層付近で特に集中する傾向があるため、当初ここに弥生時代後期の溝状遺構もしくは落ち込みが所在し、後の古墳時代中期頃にSRa03が埋没したという見方である。そうであれば北壁や南壁の土層の観察では理由がわからず、弥生後期土器が集中する地域の土層の違いを見落としたために混乱が生じてしまったことになる。

第94～98図はSRa03出土の遺物実測図である。第94～96図は弥生土器および石器、第97図は土師器、須恵器、第98図は中世土器を収集した。545～551は壺である。545は明瞭な稜をもたずに斜め上方に開く口縁で、端部は軽く上に摘み上げている。546は口縁端部の破片である。端部を上下に摘みだし、幅広の端面の上下に沈線、その間に2条の列点文を施す。547～551は下川津B類土器である。直立する頸部が



第95図 SRa03 出土遺物実測図（その2）

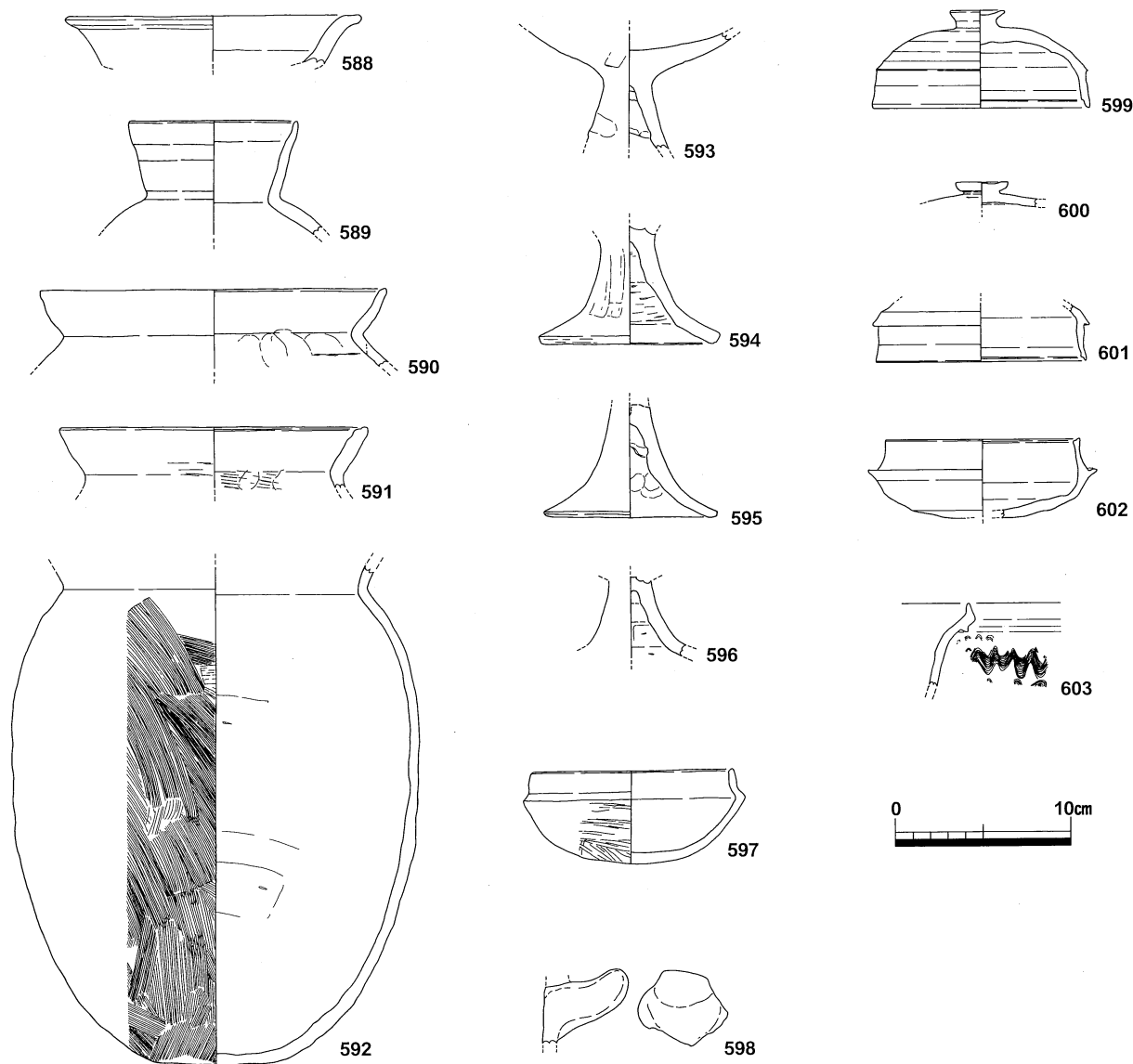
ら水平方向に屈曲し端部を軽く上方に摘み上げる口縁で、548～551は頸部外面ハケ、内面には指オサエ痕が顕著にのこる。552～560は甕である。552は「く」の字状に開く口縁で、体部外面ハケ、内面下半はヘラ削り、上半は指オサエ後ナデている。口縁部の屈曲部付近内面は横方向のハケを施している。553は径26cmと大型である。口縁部内面ハケ、内面は屈曲部付近までヘラ削りが施されている。555～560は下川津B類土器の甕である。



第96図 SRa03 出土遺物実測図（その3）

561～565は甕の底部である。562～565は下川津B類土器である。明瞭な平底を呈し、外面と底部外面にヘラ磨き、内面はヘラ削りを施す。566～582は高杯である。566、567は体部から内湾気味に屈曲したのち大きく外上方に開く口縁をもつ。いずれも磨滅のため調整不明である。568は低脚の高杯脚である。569の高杯は、軸部から緩やかにラッパ状に開く裾部をもつ。軸部内面は横方向のヘラ削り、裾部内面は板ナデ、軸・裾部外面は縦方向にヘラ磨きを施した後、横方向に6条のヘラ描き沈線で加飾する。4個の穿孔をもつ。570～572は下川津B類の高杯である。口縁端部は水平方向の平坦面をつくり、体部内外面四分割ヘラ磨き、軸部内面ヘラ削り、外面ヘラ磨き、杯部と軸部の接合に円盤充填が見られる。573～576も下川津B類土器で、高杯か鉢である。577～582も下川津B類土器である。577は外面は縦方向のヘラ磨き、内面は横方向のヘラ削り、軸部に一孔が認められる。579、582は裾部に二孔一対の穿孔が認められる。580、581は小片のため孔数は不明である。583は内湾気味に大きく開く体部形状をもつ製塩土器である。脚台部は指オサエ、体部と脚台部との接合部は棒状工具でなでつけている。585は薄い剥片を用いた凹基式の石鏃である。586はスクレイパー、素材剥片の鋭利な部分を利用してわずかな調整で刃部を整形している。背面に刃潰しが見られる。587は2次加工のあるサヌカイト剥片である。

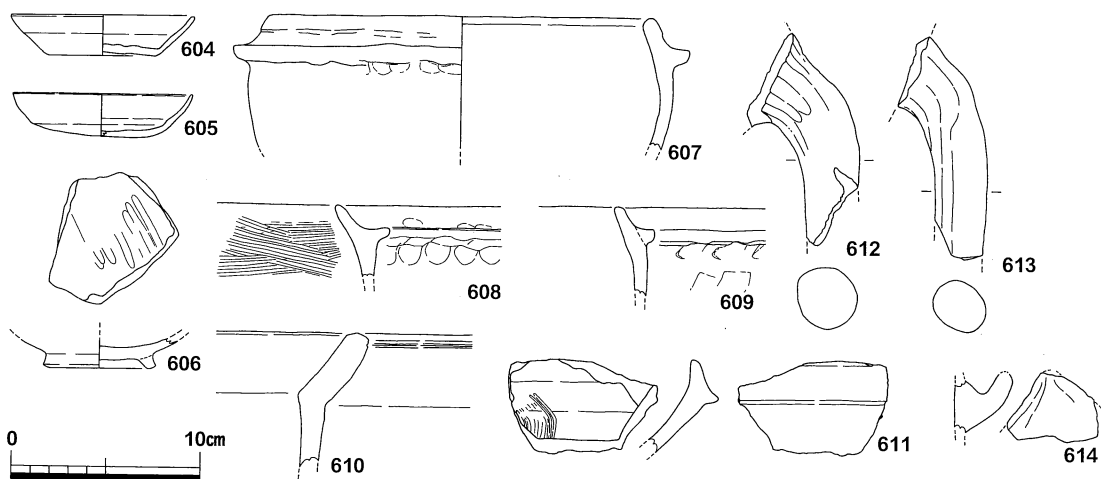
第97図588は二重口縁壺の口縁端部の小片である。器壁は厚く外側に摘み出す形態である。589は小形丸底土器、外側に開く口縁で先端はナデにより尖り気味に仕上げる。590～592は甕である。口縁部はわずかに内湾気味に開き、端部は内側にナデて平坦面をつくっている。592の外面は9条/cm、ハケ原体幅1.7cmほどのハケが施され、底部との境界は不明瞭であるが、ハケの見られない平らな面をもつ。内面はヘラ削りである。593～596は高杯脚部である。いずれも軸部は粘土紐を螺旋状に巻き上げており、内面にその痕跡が見られる。593の杯部と軸部の接合は粘土を巻き足し、板状工具で押しつけて補強している。594の外面は軸部から裾部になだらかに移行しラッパ状を呈するが、内面は稜をもつ。597は土師器の杯である。完形で出土した。須恵器を模倣した形態で、体部と口縁部に境界をつくり、ここが最大径となる。口縁部は内傾して立ち上がり端部は丸くおさめている。内面は磨滅するが、外面は丁寧にヘラ磨きされている。598は土師器の甕か甑の把手である。



第97図 SRa03 出土遺物実測図（その4）

599～603は須恵器である。599は天井部中央に中くぼみのつまみをもつ蓋で、天井部3/4は回転ヘラ削り、天井部と口縁部を分ける稜は短く、口縁部の立ち上がりは約2cm、端部内面に段を有する。600も天井部に中くぼみのつまみを付す蓋である。602は杯身である。口縁は内傾し、端面も内傾し段をつくっている。口径は11.4cmを測る。603は甕である。緩やかに外方に湾曲し、口縁端部を上方に摘み上げる。口縁端部直下に断面三角形の突帯を付し、その下部に櫛描きの波状文を描いている。

第98図604、605は土師器杯である。604は底部から外上方に直線状に立ち上がる形態、605は底部から明瞭な屈曲をもたずに丸味を帯びて口縁に移行する形態である。606は内面黒色の黒色土器碗の底部である。607～609は土師器土釜である。鏝下半に板ナデもしくは棒状工具による押圧痕が見られる。610は土師器土鍋、611は備前焼と思われるスリ鉢、612、613は土師器土釜の脚部である。



第98図 SRa03 出土遺物実測図（その5）

SRa03上面で検出された噴砂状のひび割れ

SRa03において中世土器を包含する灰白色極細砂質土の上面には亀甲状のひび割れが見られる。このひび割れは2種類あり、ひとつは幅8cm近い幅広のもので茶灰色極細砂質土が充填している。もう一つは灰色シルト質土が充填しているものである。ひび割れの成因として日照りによって生じるものと震度5以上の大地震によって発生する噴砂によるものの2つが考えられたため、通商産業省工業技術院地質調査所（当時）の寒川旭博士に鑑定を依頼した。

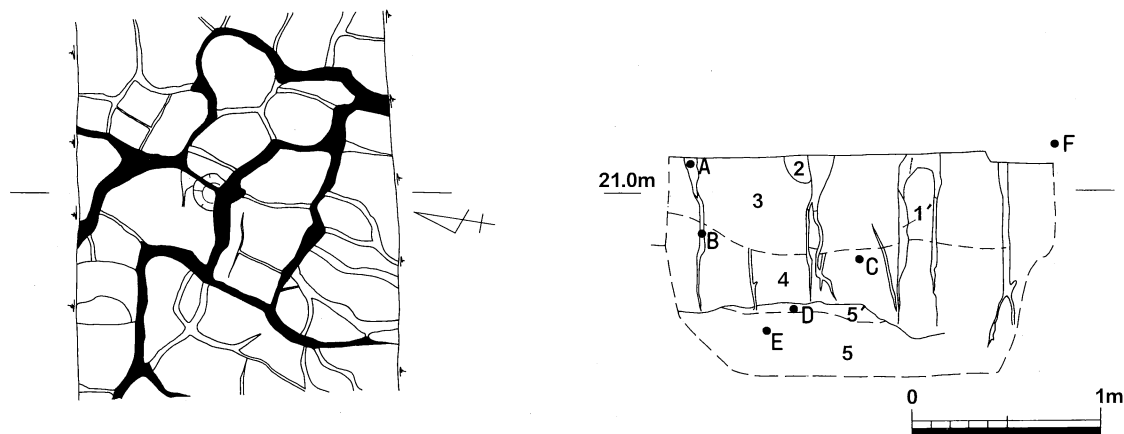
寒川博士によると、噴砂の平面形は雁行状にひび割れが生じるものと、脈状にひび割れが生じるものとが確実なもので、亀甲状のものは判断がつかない場合が多い。ひび割れを縦方向の断面観察して、下層に砂礫層（液状化層）の有無を確かめ、ひび割れが液状化層に達しているかどうか確認すること、ひび割れや砂礫層から試料を採取して、篩分け、液状化層とひび割れの粒子を比較した結果によって判断すると良いとの御教示を得た。

このため、ひび割れが柱穴を壊しているところが断面にかかるようにトレンチを掘削し、断面観察を行った。この結果、下部から砂礫層が現れ、灰色シルト質土が充填するひび割れは砂礫層には達せずに上の方で途切れているが、茶灰色極細砂質土が充填しているひび割れは砂礫層に達していることが判明した。またひび割れは屈曲したり2本のものが途中で1本になっていたりしていた。ひび割れの上部と下部、砂礫層の上部とやや下から試料を採取し、水洗して粘土分を除去し乾燥させた後に4.75mm、2mm、850 $\mu$ 、425 $\mu$ 、250 $\mu$ 、106 $\mu$ 、75 $\mu$ の篩で篩い分けを行い、図のような粒径加積曲線を得た。これによると下の試料から上部の試料の順で砂の粒子の大きさが小さくなっており、砂礫層が液状化をおこし、細かい粒子のみが上昇したと考えて良いことがわかった。つまり、断面観察と試料の篩い分けの結果、ひび割れを噴砂と考えると良いことがわかった。

噴砂は14世紀頃の中世土器包含層が堆積するところではそれを壊して、包含層上面まで達しており、また、柱穴を壊している。壊された柱穴からは遺物は検出されなかったが、周辺には同一もしくは類似する埋土の柱穴のみが所在し、遺物は中世のもののみが検出されていることから、14世紀頃以降に生じたことがわかるが、下限は不明である。香川県内で震度5以上の揺れをおこす地震は、周期的に発生している南海地震の可能性が高いが、近年、県内の長尾断層に見られる低断層崖の形成がかなり新しい年代に推定



されることが分かってきており、今後資料の蓄積を図る必要がある。



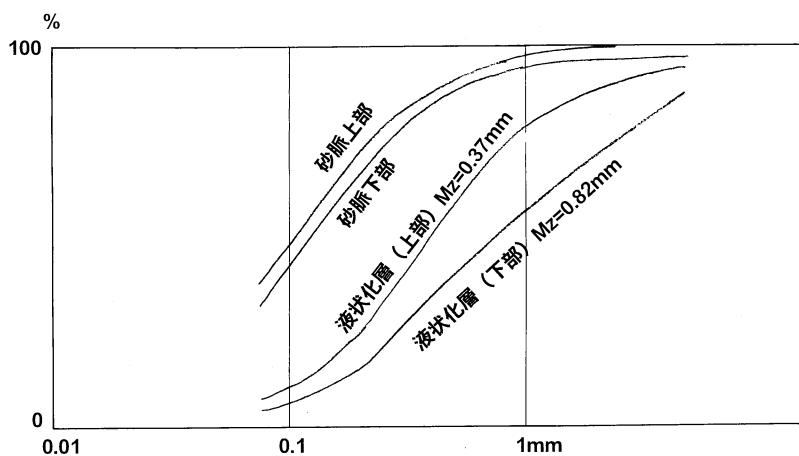
- 1. 茶灰色極細砂質土 (Fe、Mnわずか含、淘汰)
- 1' 灰色極細砂質土 (淘汰)
- 2. 明灰色極細砂質土 (Fe含、柱穴)
- 3. 暗茶色小礫混じりシルト質土 (Fe含、SRa03埋土)
- 4. 明黄灰色小礫混じりシルト質土 (Fe含、地山)
- 5. 灰色砂礫 (径1~3cmの砂岩壺円礫、マトリックスは中~細砂)
- 5' 灰色砂 (径1~3cmの礫を疎らに含、中~細砂)

試料採集

- A 砂脈上部    B 砂脈下部    C 地山
- D 液状化層 (上部)    E 液状化層 (下部)    F 砂脈上面の堆積層

試料名	水洗前重量	水洗後重量	4.75mm	2.00mm	850 $\mu$	425 $\mu$	250 $\mu$	106 $\mu$	75 $\mu$	75 $\mu$ 以下
A	100.00	69.62	1.65	1.00	1.86	5.01	7.65	21.76	8.14	21.56
B	20.65	17.72	0.00	0.06	0.51	1.39	1.81	5.23	2.08	6.64
C	150.00	95.71	1.56	2.56	5.97	9.89	13.47	33.00	9.11	20.15
D	130.00	99.90	5.66	6.17	13.28	22.55	20.40	21.12	3.59	7.13
E	100.00	94.34	12.06	17.11	16.28	15.21	14.10	12.91	2.14	3.77
F	65.00	50.06	0.00	0.25	1.63	4.00	6.00	18.02	7.23	12.93

単位はg



第99図 SRa03 上面 噴砂 平・断面図、粒径加積曲線図

(3) 古墳時代中期

① 竪穴住居

SHa04

I-14、15、22区 (X=143.144、Y=51.882付近) で検出した竪穴住居の可能性の高い落ち込みである。砂礫層上面に掘り込まれている。東西4.7m、南北4.0mほどの規模で、東側は歪な形状であるが西側は方形のプランである。方形プランの方向はほぼ真北を向いている。柱穴を1基検出している。南に同様の規模のSHa05、06が所在していることも合わせてSHa04は遺存状況の悪い竪穴住居と考えられる。遺物は若干量の土器片、石器片が出土している。第100図615は土師器杯である。鉄鉢状を呈する口縁部の小片、端部は内傾気味の平坦面をつくり、端部内側はわずかに肥厚している。616は器種不明の石器である。細部調整によって一辺に内湾する形状をつくりだしており石器とわかるが、折損のため本来の形状は不明である。

SHa05

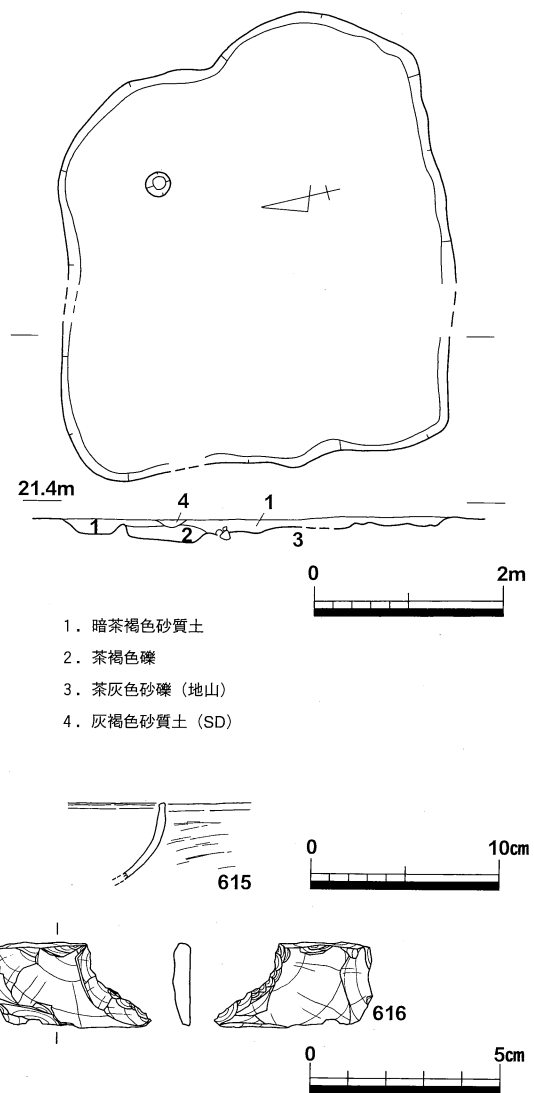
I-22区 (X=143.130、Y=51.877付近) で検出した方形の竪穴住居である。東半のみが検出され西半は調査区外に延びる。平面形は方形もしくは長方形を呈する。建物軸の方向は座標北から23度東に向いている。

SHa05は、一辺3.5mほどの方形プランの北側に幅0.6mほどのやや浅い区画が接している。両者は住居の東辺において直線につながっており、調査担当者は張り出し部と考えている。しかし、土層断面図では両者に切り合い関係があるともとれる堆積状況であり、改築(縮小)している可能性も考えられる。狭い方の区画では北辺と東辺の南部、南辺に幅10cmほどの壁溝が巡る。また、北側の区画にも北辺に壁溝の可能性の高い落ち込みがある。

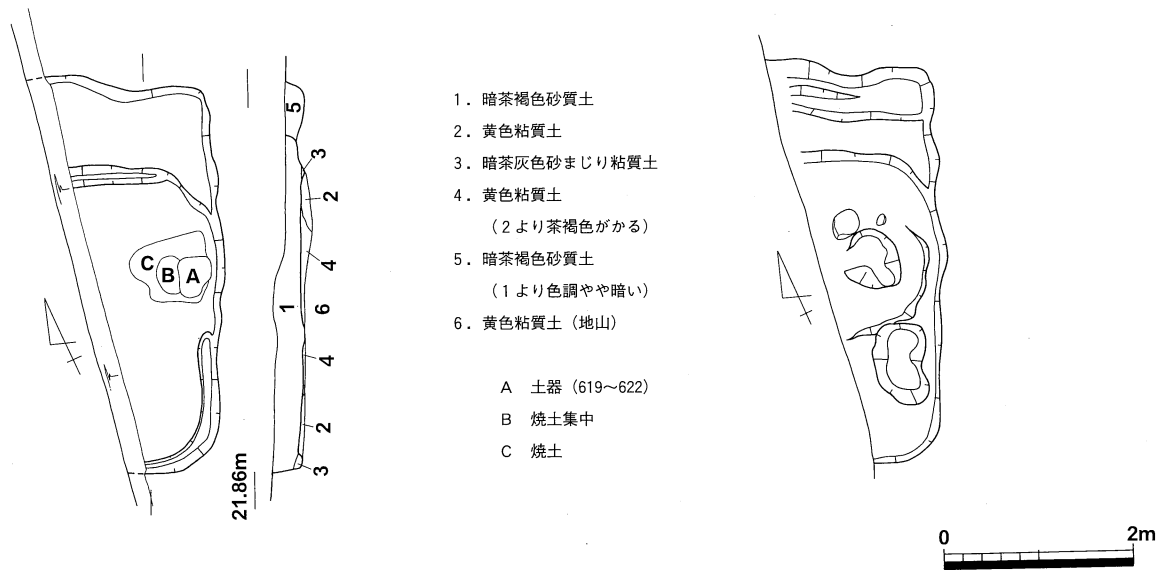
SHa05では、土層断面図の4層上面で、後述するように土器が集中して出土した。このことから4層上面が床面と判断される。4層の下面は、長径85cm、短径50cm、深さ20cm(南側)と径62cm、深さ20cmほど(北側)の落ち込みがあるほか、全体的に凸凹している。ここに4層を貼って床としているが、凸凹の意味はよくわからない。

第103図はSHa05から出土した遺物実測図である。617、618、623~626は貼床下から出土したもの、619~622は貼床上層から出土したもの、627~632はどちらからの出土であるか不明である遺物である。

617は弥生土器底部である。弥生時代前期のものである。618は北東隅付近で検出したもので、口縁部



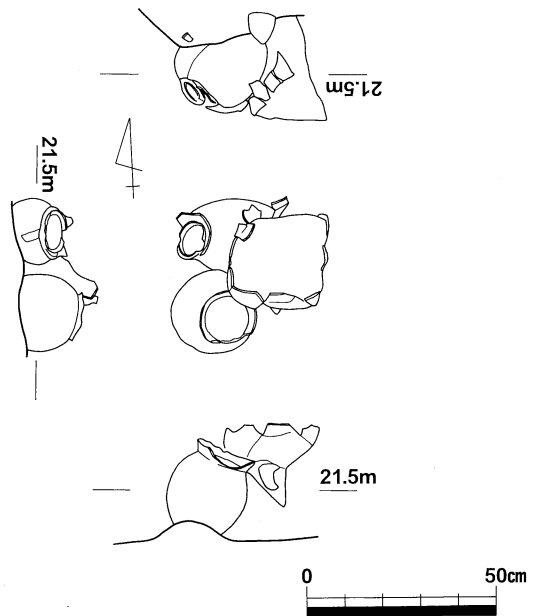
第100図 SHa04 平・断面図、出土遺物実測図



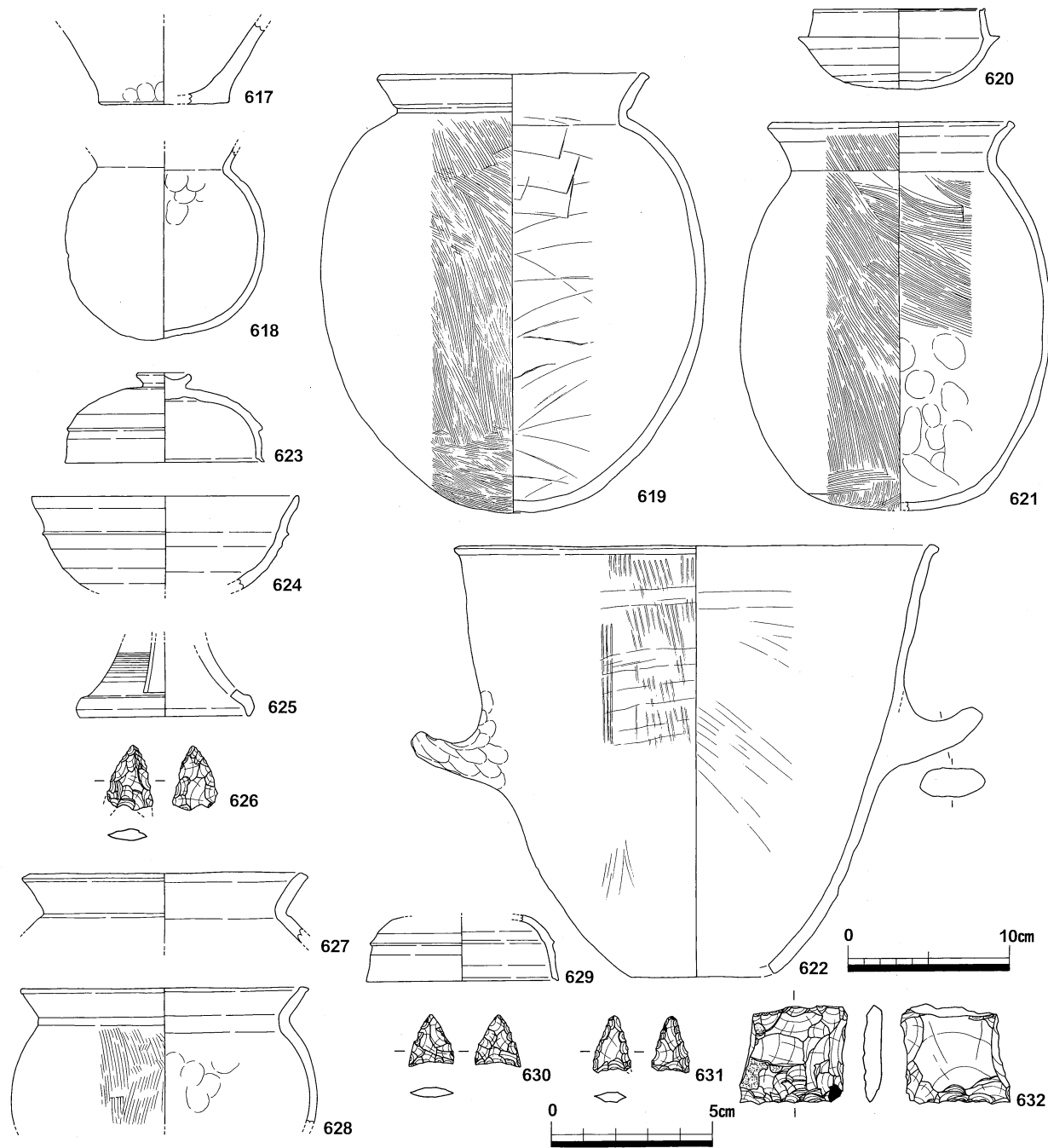
第101図 SHa05 平・断面図、貼床除去後平面図

を欠損する小形丸底土器である。球状の体部で底部はやや歪であるが丸底を呈する。619~622はひとまとまりで出土したもので、土器が使用されていた段階の状況を復原できる点で貴重な資料である(第102図、カラー図版参照)。619~622はSHa05東端のほぼ中央部の貼床の上で検出した。619の甕がやや東に傾いた状態で直立し、その北側に621の甕が西側に傾いた横倒しに近い状態で在り、口縁部に620の須恵器杯身が見込みを下にして蓋としてはめ込まれていた。二つの甕の上に622の甕が口縁部を東側に横倒しの状況で出土した。これらは、622の甕が半分程度の遺存であるほかはほぼ完形で出土している。土器の配置は2点の甕が方向を違えて傾き、甕がそれに乗るように横倒しになっていることから、2次的に移動した可能性は低く本来の位置を保っていると考えられる。

619の土師器甕はやや長胴化した形状で、底部は丸底、くの字状に屈曲する口縁である。体部外面は密に右下がりのハケを施している。体部内面は板ナデである。620の須恵器杯の底部は丸味をもつ。3/5ほどが時計回りの回転ヘラ削り、受部は水平方向に突出し、先端の稜は鋭い。立ち上がりは肉厚で端部は内傾し段を有する。621は長胴形の体部に明瞭な稜を持たずにくの字状に屈曲し、外湾気味の口縁をもつ。口縁端部は丸くおさめる。体部外面および口縁部下半は右下がりのハケ、体部内面上半ハケ、下半は指オサエの後ナデている。622の甕は上に向かって開くバケツ状の断面形で、体部中央付近に牛角状の把手が二つ付けられる。底部は欠損しており孔数や形状は不明で

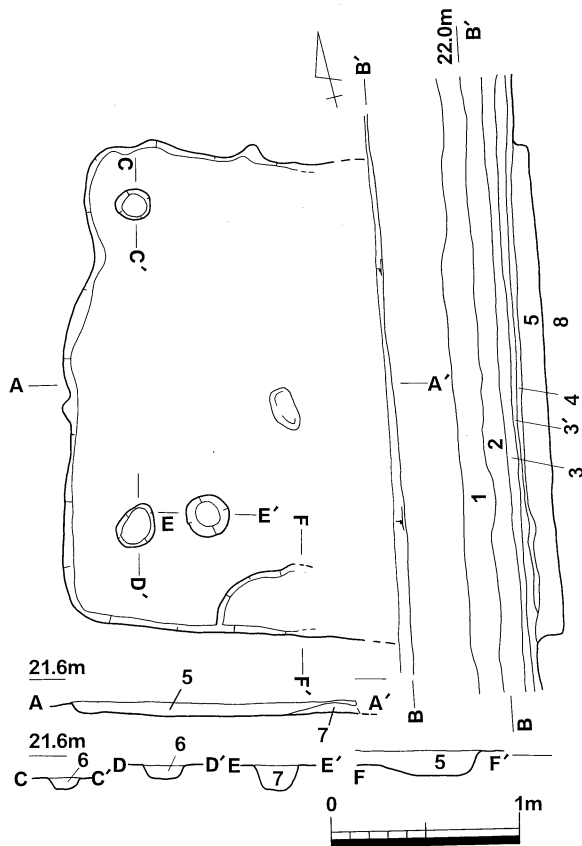


第102図 SHa05 遺物出土状況平・断面見通し図

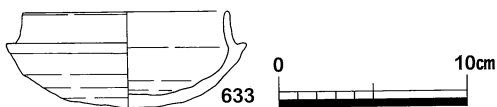


第103図 SHa05 出土遺物実測図

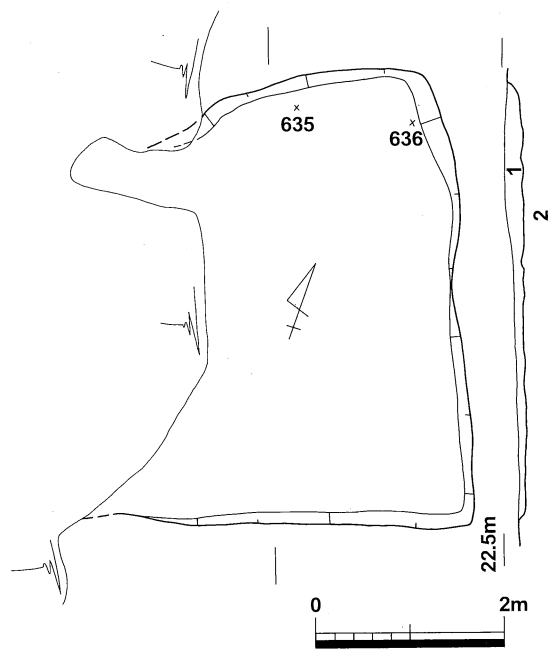
ある。体部外面は板ナデもしくは粗いハケの後ナデで、口縁部はヨコナデで仕上げている。623は須恵器蓋、天井部ほぼ中央に中窪みのつまみがつく。天井部と口縁部境の稜は鋭さを欠く。立ち上がりは直線的で2cmあり、端部は内傾させている。624は須恵器の無蓋高杯の口縁部である。小片で出土し、口縁端部が若干歪むため復原径はやや不正確である。口縁部は緩やかに外反し端部は丸くおさめている。口縁部と底部をわける稜は鋭さを欠く。625は須恵器高杯の脚部である。端部を下方に突き出し丸くおさめる。軸部外面にカキ目を施す。長方形の透かし孔があるが、何孔であるかはわからない。626は薄い剥片を利用した凹基式の石鏃である。627、628は土師器甕の口縁部、629は須恵器蓋である。629は焼成不良のため



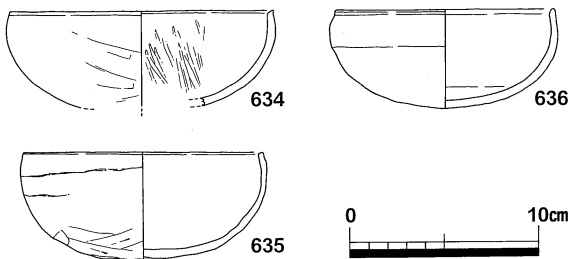
1. 灰色礫まじりシルト質土 (2cm程の垂円礫まばらに含 植物根多く含)
2. 明灰色極細砂質土 (小礫まばらに含 耕土)
3. 明灰色極細砂質土 (Fe含 床土)
- 3' 明灰色極細砂質土 (Fe多く含)
4. Mn粒の多く沈着する部分
5. やや黄色味をおびる暗灰色細砂質土 (Fe含)
6. 暗灰色極細砂質土
7. 暗茶灰色シルト質土 (1cm程の礫含)
8. 明黄灰色極細砂質土 (地山)



第104図 SHa06 平・断面図、出土遺物実測図



1. 茶灰色極細砂質土 (Fe、Mnわずかに含)
2. 黄灰色細砂質土 (Fe含 sortあり 地山)



第105図 SHa07 平・断面図、出土遺物実測図

紫灰色を呈する。口縁部と天井部を分ける稜は甘く、口縁端部は段を有する。632は一長側辺にやや粗雑な刃部を整形するスクレイパーである。

#### SHa06

I-14、15区 (X=143.124、Y=51.888付近) で検出した方形の竪穴住居である。旧中州と考えられる砂礫層が北側向かって落ち込み、砂層がその上に堆積する境界付近に位置するため、床面の南半4/5は砂礫層、以北に砂層が露出している。東半は調査区外になるが、平面形は現状から一辺5mの方形と推定する。主軸方向は座標北から17度東に振った方向である。深さは約30cmを測る。3つの柱穴を検出した。柱穴配置から四隅に支柱穴をもつ竪穴住居と考えられるが、柱穴が隅に寄りすぎている。検出した住居の外縁にベッド状遺構が巡っていた可能性を考慮すべきかもしれない。南側に深さ25cmほどの不定形の落ち込みを検出したが性格不明である。

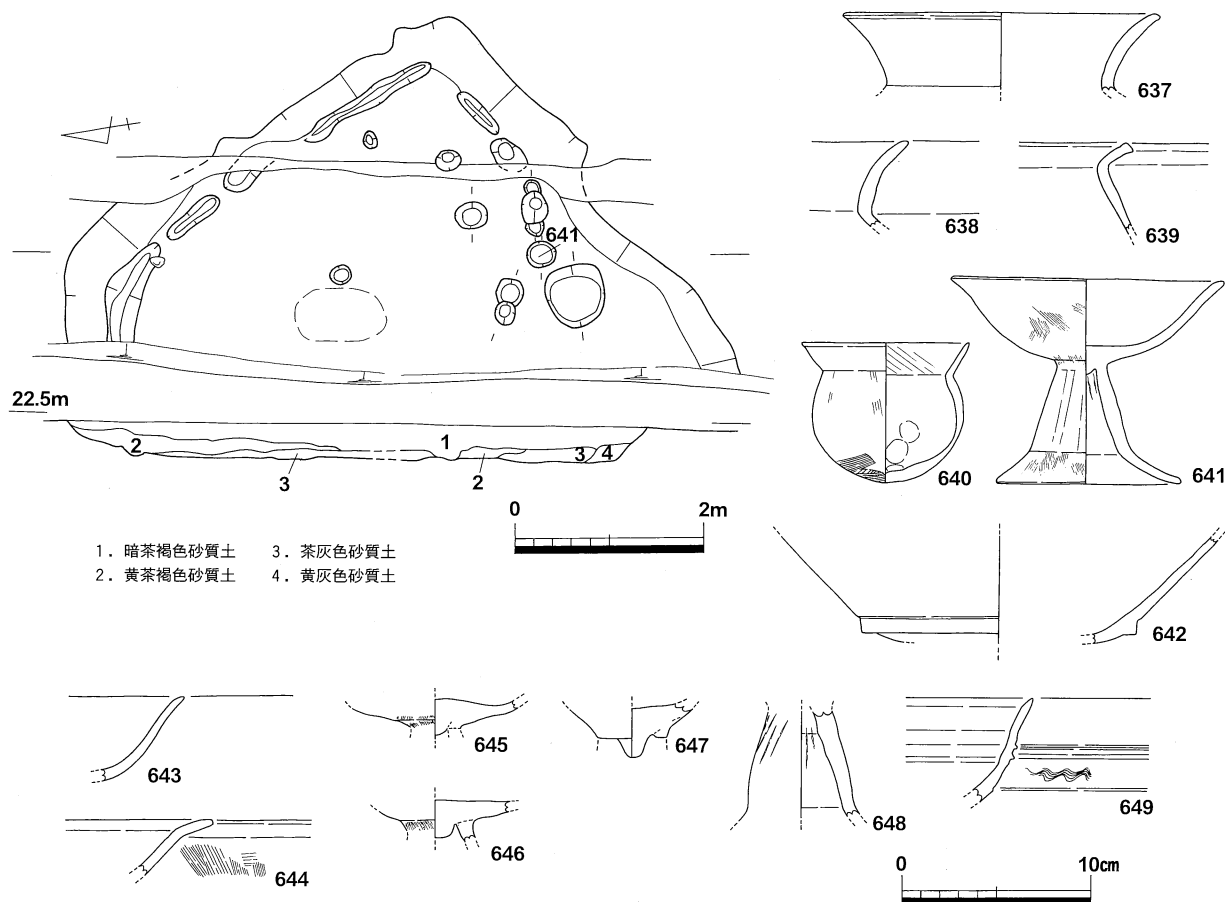
SH a 06からは第104図633の須恵器杯身のほか、磨滅した土師器甕の体部破片などコンテナ1/10箱ほどの遺物が出土している。633は床面からほぼ完形で出土したものである。焼成不良、立ち上がり約2cmの内傾する口縁の端部は丸くおさめ、受部の突出とともに鋭さに欠ける。

SH a 07

I-14、15区 (X=143.035、Y=51.870付近) で検出した竪穴住居である。西側は攪乱されて壊されているため本来の形状、規模は不明であるが、現状では一辺4.85mほどの方形になるものと推定する。検出面からの深さ約0.2mを測る。柱穴等の建物内部の遺構は検出されなかった。SH a 07からは2点の完形の土師器杯のほか、土師器杯の小片など若干量の遺物が出土している。第105図634～636はSH a 07から出土した土師器杯である。635、636はほぼ完形で、底部を下にして出土している。634～636はいずれも鉄鉢状に内湾する口縁で端部に内傾気味の平坦面をもつ。磨滅のため調整はよくわからないが、体部下半にヘラ削りもしくは板ナデ、体部内面にヘラ磨きが施されるものがある。

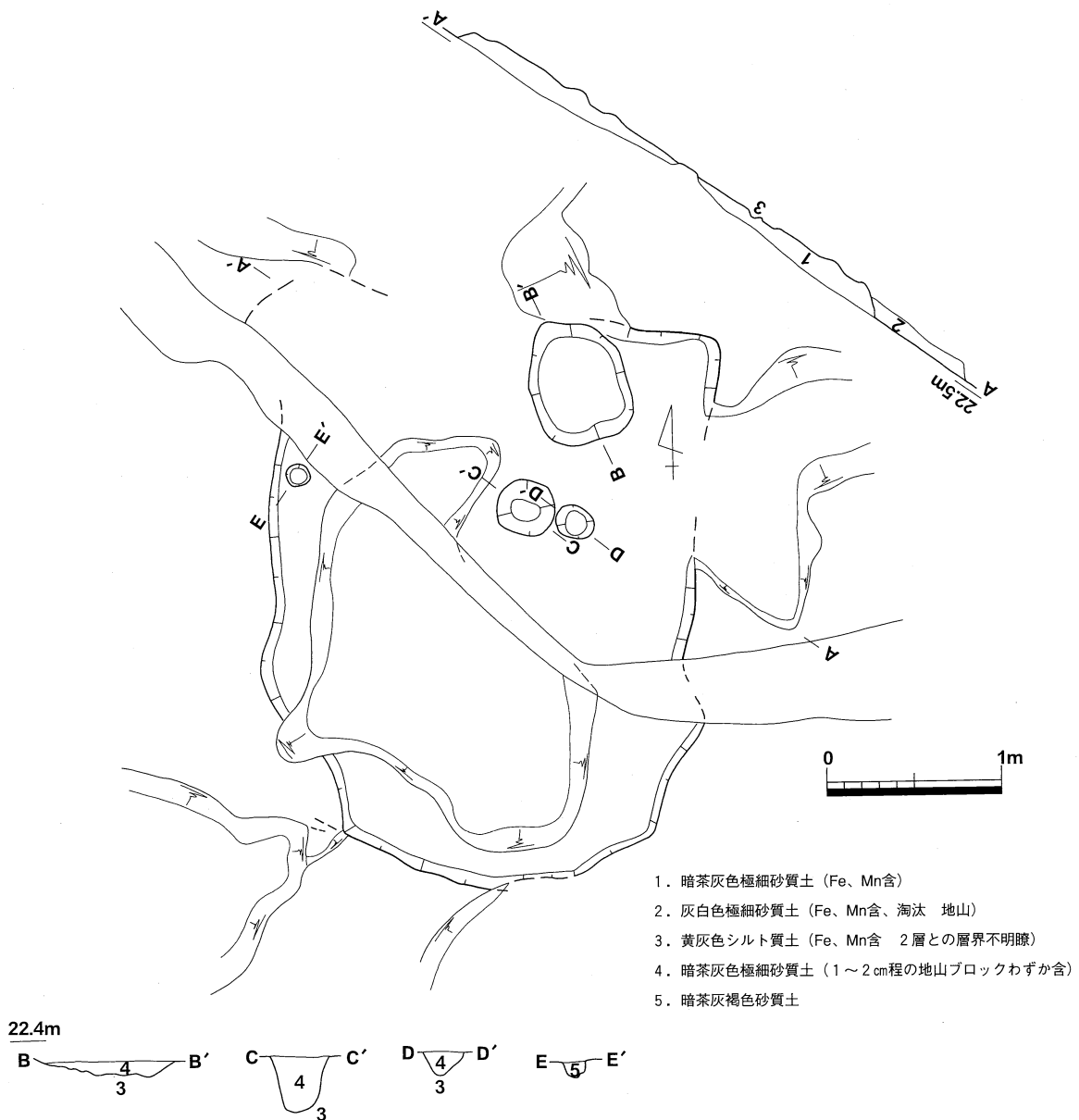
SH a 08

I-14、15、22区 (X=143.040、Y=51.862付近) で検出した竪穴住居である。一辺約5.3mほどの方形を呈するが、西側は調査区外になる。住居の掘り込みに沿って断続的に幅0.15m、深さ0.08mほどの壁溝が検出できた。また、多数の柱穴を検出しているが、主柱穴の配置はわからない。第106図のSH a 08平面図中に示される点線は炭化物が集中して検出された範囲である。これは埋土中の3層上面から検出されて



第106図 SHa08 平・断面図、出土遺物実測図

おり、炭化物は数cmの厚さで堆積していた。柱穴等の遺構は3層を除去した段階で検出されており、2、3層上面が床になるのではなく、2、3層は竪穴住居の埋没の過程で堆積したものであり、炭化物もその過程で堆積したと判断できる。出土遺物は細片が多く、コンテナ1/2箱ほど出土している。住居内の遺構から出土したものと埋土から出土したものが接合できた例が多く、遺物は混在する傾向がある。なお第106図641の土師器高杯は柱穴から直立する状態で出土したものである。637、638は土師器甕の口縁部の小片である。緩やかに外湾する口縁で、637の端部はわずかに外方に摘み出している。639は弥生土器甕の口縁部小片である。混入したものであろう。640はくの字状に外反する口縁部をもつ土師器小形丸底土器である。口縁部内面の削痕はナデによるものである。641~648は土師器高杯である。641の杯部は明瞭な稜をもたずに緩やかに外反し、口縁端部は丸くおさめている。脚部はエンタシス状に中太りする軸部から大きく屈曲する裾部をもつ。軸部の外面は板ナデである。642は杯部の破片である。中位の屈曲部に断面

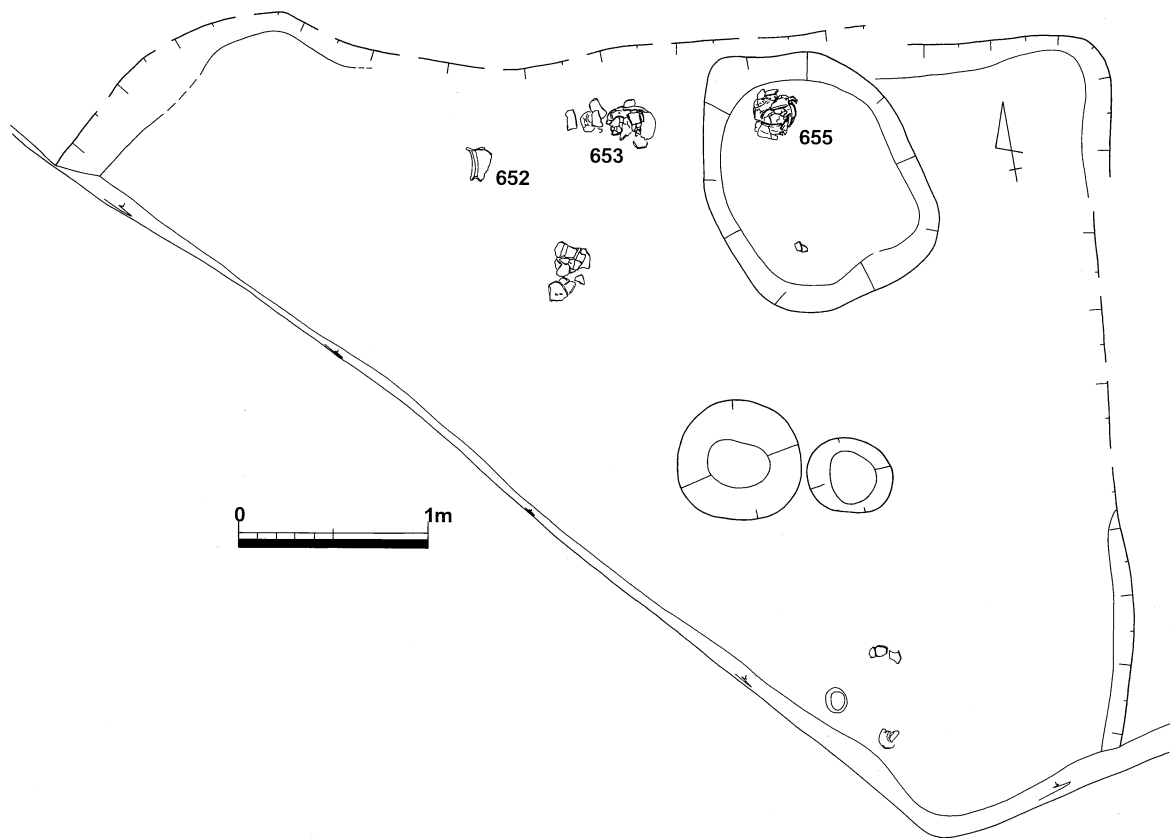


第107図 SHa09 平・断面図

三角形の突帯が付される。643、644は口縁部の小片である。緩やかに外湾する口縁で、643の端部は尖り気味に、644は丸くおさめている。645～647は杯部と脚部の接合部の破片である。いずれも接合部外面に粘土紐を貼り足し、645、646は縦ハケを施している。648は軸部の破片である。中太り状の軸部で、内面には絞り目が見られる。内外面磨滅するが、外面に工具痕と思われる斜め方向の直線状の沈線が認められる。649は須恵器の無蓋高杯の口縁部の小片である。緩く外反する口縁で端部は丸くおさめる。口縁部と底部との境に2条の凸線、櫛描き波状文、1条以上の凸線からなる文様帯がある。

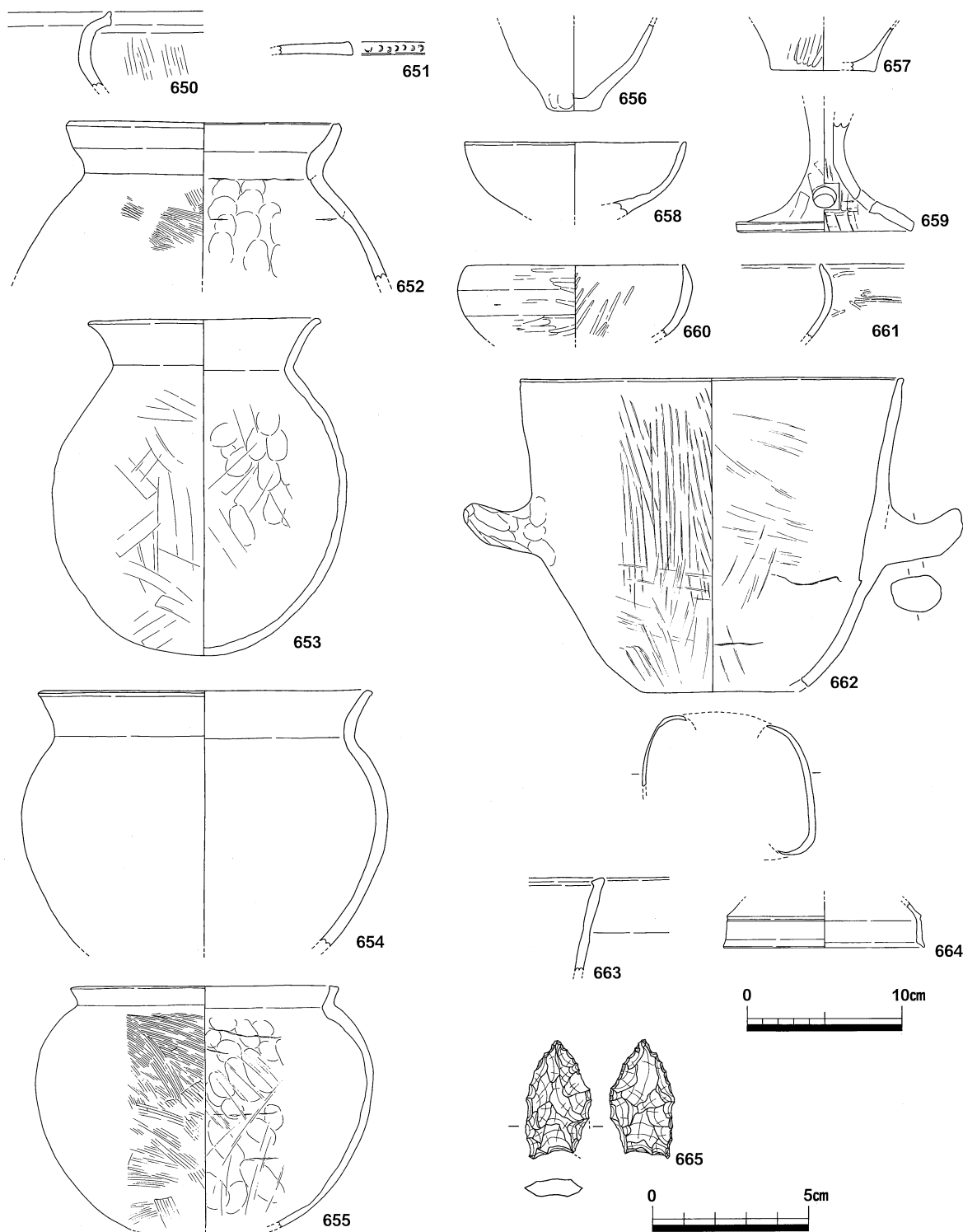
S H a 09

I-14、15、22区 (X=143.025、Y=51.867付近) で検出した竪穴住居である。周囲の攪乱が著しく本来の平面形状は不明であるが、北東隅が直角に屈曲することから長方形のプランに復原され、長辺約6.5m、短辺約4.8mほどの規模と推定される。住居内部で土壇1基、柱穴3基を検出したが主柱穴配置は不明である。遺物は北側のI-14、15区に集中し、コンテナ1箱分出土している。第109図はS H a 09出土の遺物実測図である。650、651、654、656、657、665は埋土中、652、653、658～662、664は床面上から、655は竪穴住居内の北側にある土坑の埋土上面から出土したものである。650、651は弥生土器壺である。650は下川津B類土器である。頸部から緩く外反し上下にわずかに摘み上げた短い口縁をもつ。651は口縁部小片、内外面にヘラ磨きが施される。幅狭の口縁端部に半裁竹管文が施される。652～655は土師器甕。652は明瞭な稜を持たずに屈曲し内湾気味に立ち上がる口縁をもつ。口縁端部上面には1条の沈線が巡る。653は明瞭な稜を持たずにくの字状に屈曲し、わずかに外湾する口縁をもつ。口縁端部は外側に肥厚する。



第108図 SHa09 遺物出土状況平面図





第109図 SHa09 出土遺物実測図

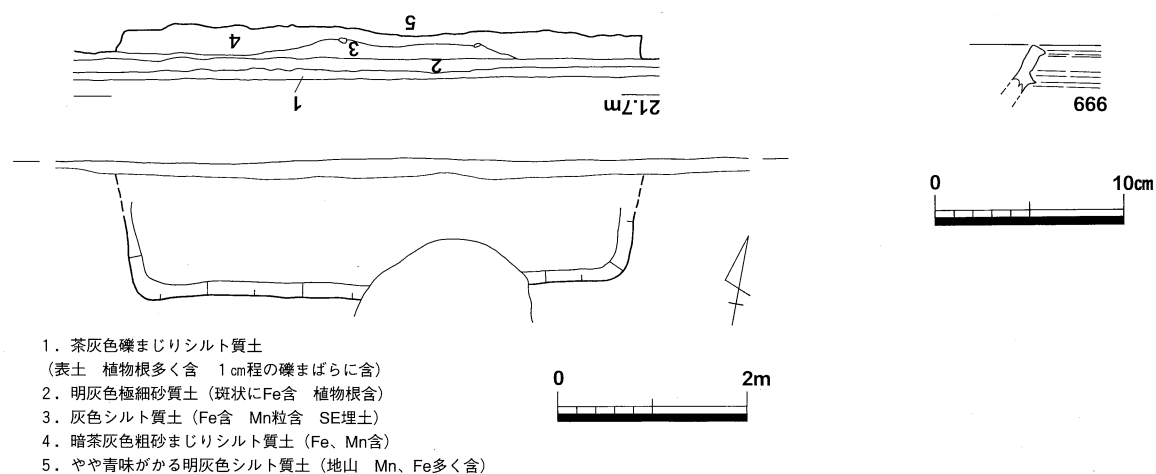
体部は楕円球状で丸底、調整は粗雑で内外面指オサエの後板ナデを施している。654は小片のため傾き不正確である。やや内湾気味に立ち上がり緩く外反する口縁部をもつ。器壁は厚い。655は球状の体部にくの字状に屈曲し直立気味の短い口縁が付く形状である。口縁端部は内側に肥厚させ水平方向の平坦面をつくっている。656は弥生土器の鉢底部と思われる。657は弥生土器（下川津B類土器）の底部である。6

58と659の土師器高杯は接合できないが同一個体の可能性が高い。658は椀形の杯部の破片である。659は脚部で、軸部から明瞭な稜をもたずに裾部に移行する。裾端部は四角におさめる。径1.4cmほどの大振りな孔が3ヶ所空けられている。660、661は鉄鉢状を呈する土師器の鉢である。660の口縁端部は尖り気味におさめ、外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面は放射状にヘラ磨きを施している。662は土師器甑である。バケツ状の形態で、底部は破損のため詳細不明であるが、楕円形の孔が2ないし3あると推定できる。663も土師器甑の口縁部の小片と思われる。664は須恵器蓋である。天井部と口縁部をわける稜はやや甘く、稜の下に凹線状の窪みができている。口縁端部は内傾する。

#### SH a 10

I-16区 (X=143.059、Y=52.012付近) で検出した竪穴住居の可能性の高い遺構である。一辺5.3mほどの方形になると推定されるが、北側の大半が調査区外になる。深さ0.25mで底面は微細な凹凸はあるが巨視的には平坦である。中世の井戸 (SE a 02) に壊される。出土遺物は第110図666のほか時期を特定できない細片が若干量出土している。666は須恵器甑の口縁部の小片である。口縁端部を下側に拡張し、直下に断面三角形の突帯を付している。

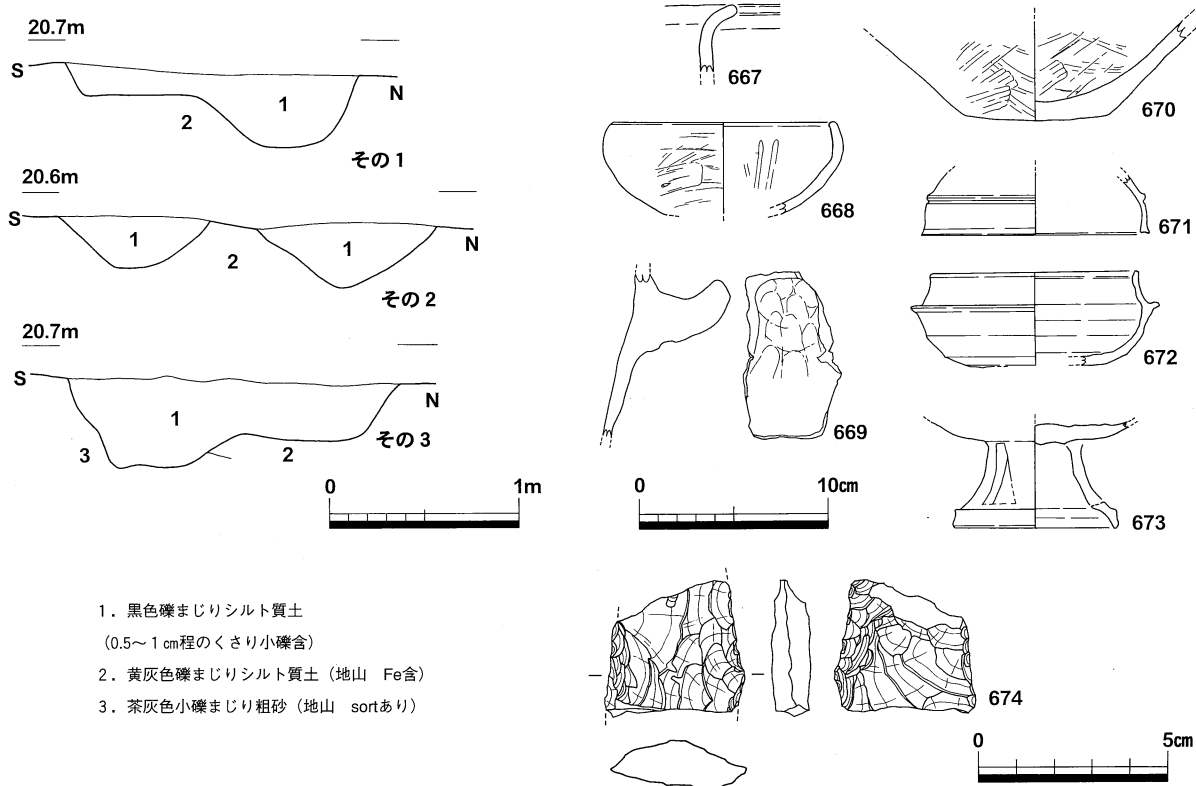
SH a 10は同時期のSH a 04～09が一つの微高地 (旧中州) にまとまっているのに対し、離れた位置に所在している。しかし、西側を流れるSR a 03から同時期の遺物が出土していることと合わせると、この付近にも当該期の居住域が広がる可能性が高いものと思われる。



第110図 SHa10 平・断面図、出土遺物実測図

#### SD a 24

I-14、15区 (X=143.150、Y=51.890付近) で検出した溝状遺構である。幅1.7m、深さ0.2～0.5mほどの規模で座標北から50度西に振った方向にほぼ直線に流れる。北側では3条の流れに分かれている。SD a 24の流れは、SR a 02の流路に相当する池台池の最も幅の広いところの東西の凹地に沿っているものと考えられ、西北から東南方向に流れる溝と推定される。弥生時代前期から古墳時代中期にいたる時期幅のある遺物細片がコンテナ1／8箱ほど出土している。667は弥生土器である。胎土中に2mmほどの砂粒を多く含むことから弥生時代前期の土器と思われる、如意状口縁の甕もしくは壺の口縁部と考えられる。668は鉄鉢状を呈する土師器杯である。体部外面は指オサエの後板ナデしている。669は体部が直線であることから土師器甑と思われる。牛角状の把手である。670は弥生時代前期の壺の底部である。671は須恵器蓋

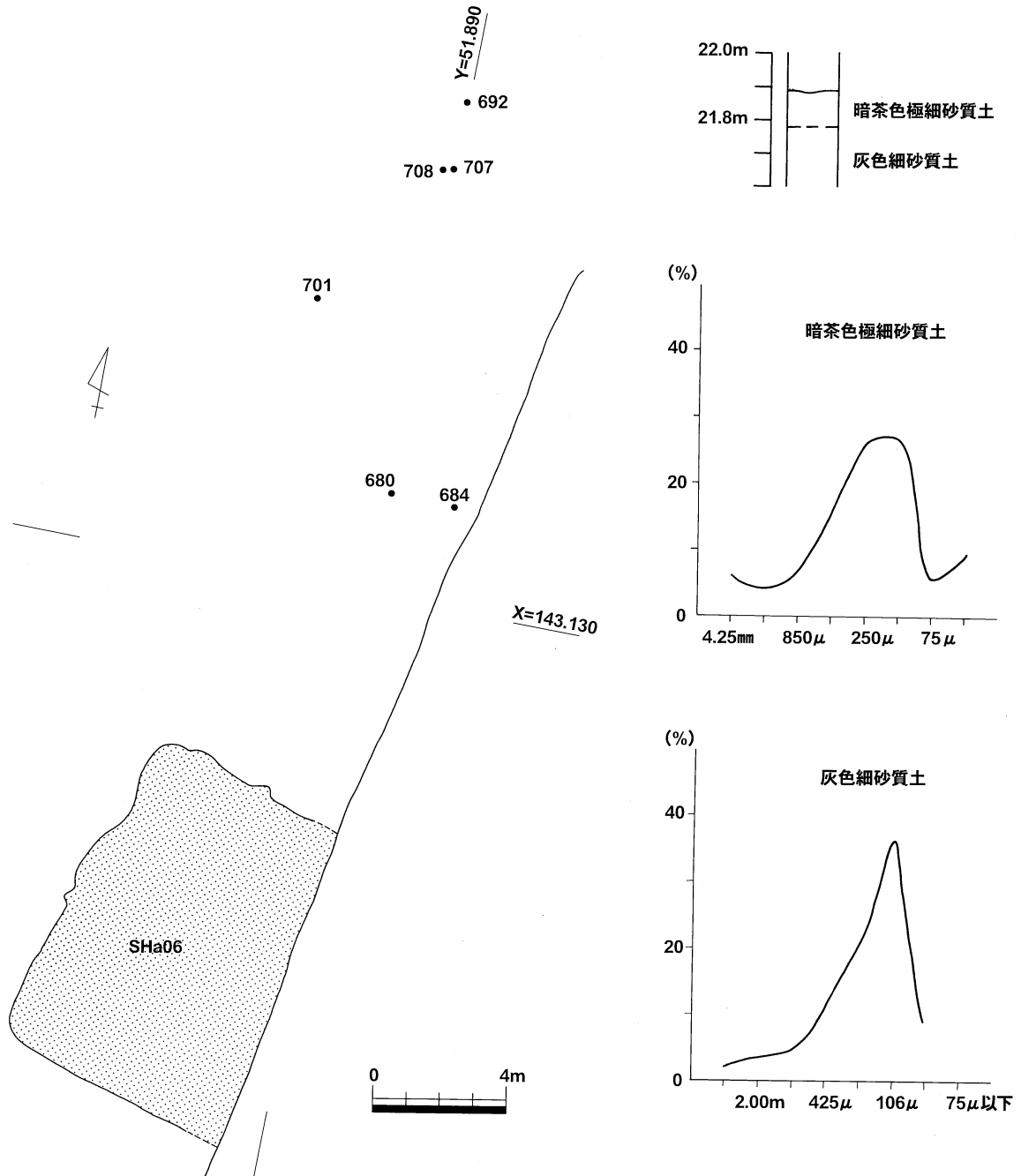


第111図 SDa24 断面図、出土遺物実測図

である。天井部と立ち上がり部を分ける稜や口縁端部の形状など全般に甘い感じである。胎土中に1mmほどの砂粒を含んでいる。672は須恵器杯（有蓋高杯の可能性もある）である。内傾する立ち上がり部は約2cmと長く、端部は外反気味に丸くおさめる。立ち上がりと杯部の境の稜はやや甘い感じである。673は須恵器高杯の脚部である。三方に台形の透かし孔を穿っている。透かし孔は杯部下面に到っている。脚端部は上下に肥厚するが、特に上方が鋭い稜となっている。674は基部、刃部を折損する打製石斧と考えられる。両側縁を細部調整する。

#### 西地区北端付近の包含層出土遺物

I-14、15区では旧中州と考えられる砂礫層の盛り上がりがある。この砂礫層は北側に落ち込んでいくが、その上面に砂層が堆積している。砂層は厚さ0.1~0.4mほどが暗茶色極細砂質土で、以下にやや黄色味をおびる灰色細砂質土が堆積している。南側に所在するSHa06の検出面が暗茶色極細砂質土層の上面であったことから、この上面で遺構検出をおこなったが遺構は見つからなかった。しかし、この層中に遺物片が包含されていたため、暗茶色極細砂質土を除去し灰色細砂質土上面まで掘り下げることとしたが、掘削中に完形に近い土器が複数検出され、焼土塊も出土した。このため、遺構が存在するものの検出できていないと考え精査を繰り返したが、砂層上面は足を踏み入れると足跡がついてしまうほど未固結な状態で、結局遺構を検出することはできなかった。第112図はSRa03の上面で検出した噴砂の粒度分析と同じ方法で行った砂層の粒度分析の結果である。これによると上層の暗茶色極細砂質土層と下層のやや黄色味をおびる灰色細砂質土層の粒度組成は、よく似ていることがわかる。つまり、両層は本来1層に把握されるべきもので、上側が後世の土壌化などの作用で変色して、見かけのうえで2層に分かれて見えるものと考えられることができる。この先は推察であるが、本来は暗茶色極細砂質土層の上面から掘り込まれた遺構が所

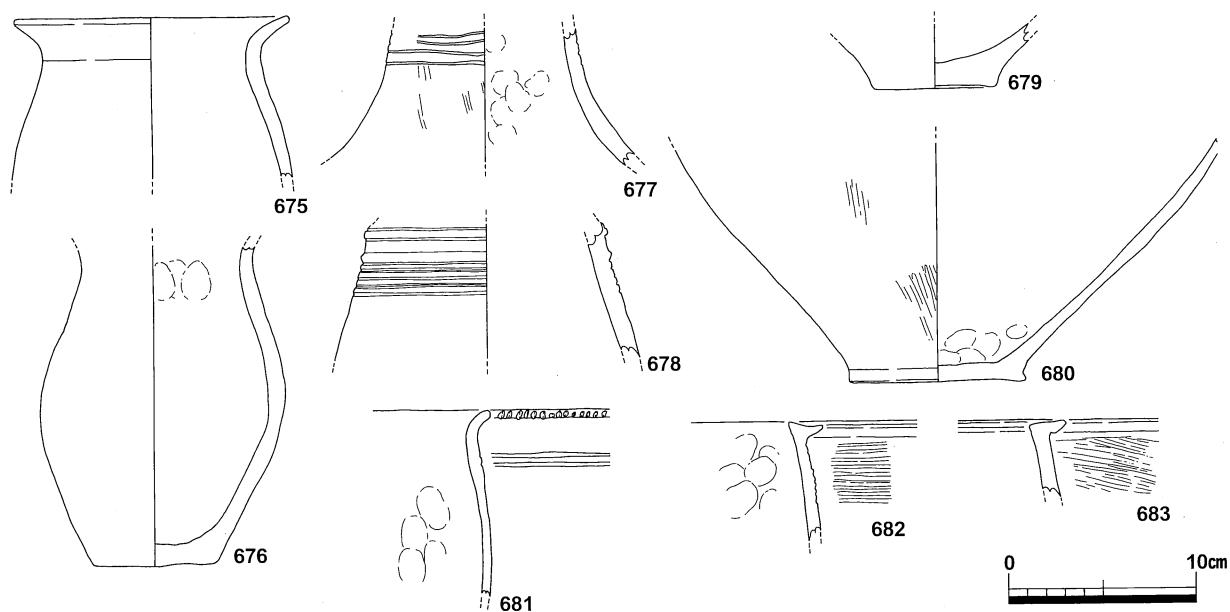


第112図 P-4付近包含層 遺物出土位置図、土層柱状図、粒径ヒストグラム

在し、出土した遺物はその遺構に含まれるものであったが、後世の土色の変化によって遺構が見づらくなってしまったものと考えられる。

西地区北端付近の包含層から出土した遺物は、前述のとおり完形に近いものが多い。また、弥生時代前期の土器が若干含まれるものの、大半は古墳時代中期に属することから本節で報告する。

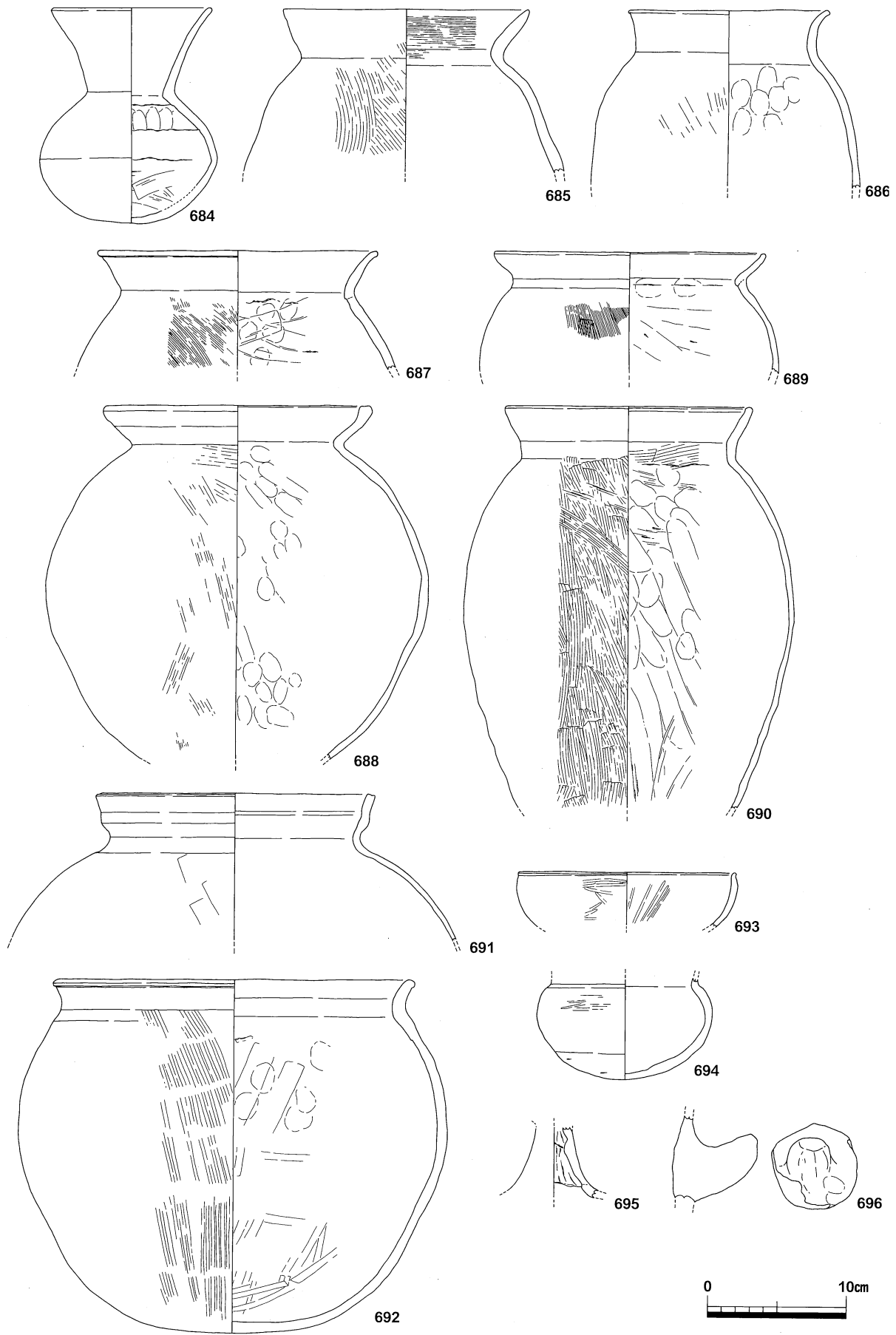
第113～115図は西地区北端包含層から出土した遺物実測図である。675～678は弥生時代前期の壺である。675は口縁が歪んでおり口径、傾きは正確でない可能性がある。磨滅する。676は胴部が張らない細身の形状である。677、678は壺の頸部から体部にかけての破片である。677は頸部に4条以上のヘラ描き沈線が巡る。678は2条の貼付け突帯の下に4条のヘラ描き沈線が巡る。679、680は壺の底部である。681～683は甕である。681は如意状口縁、口縁端部に刻み目、口縁部下に2条のヘラ描き沈線が巡る。682、



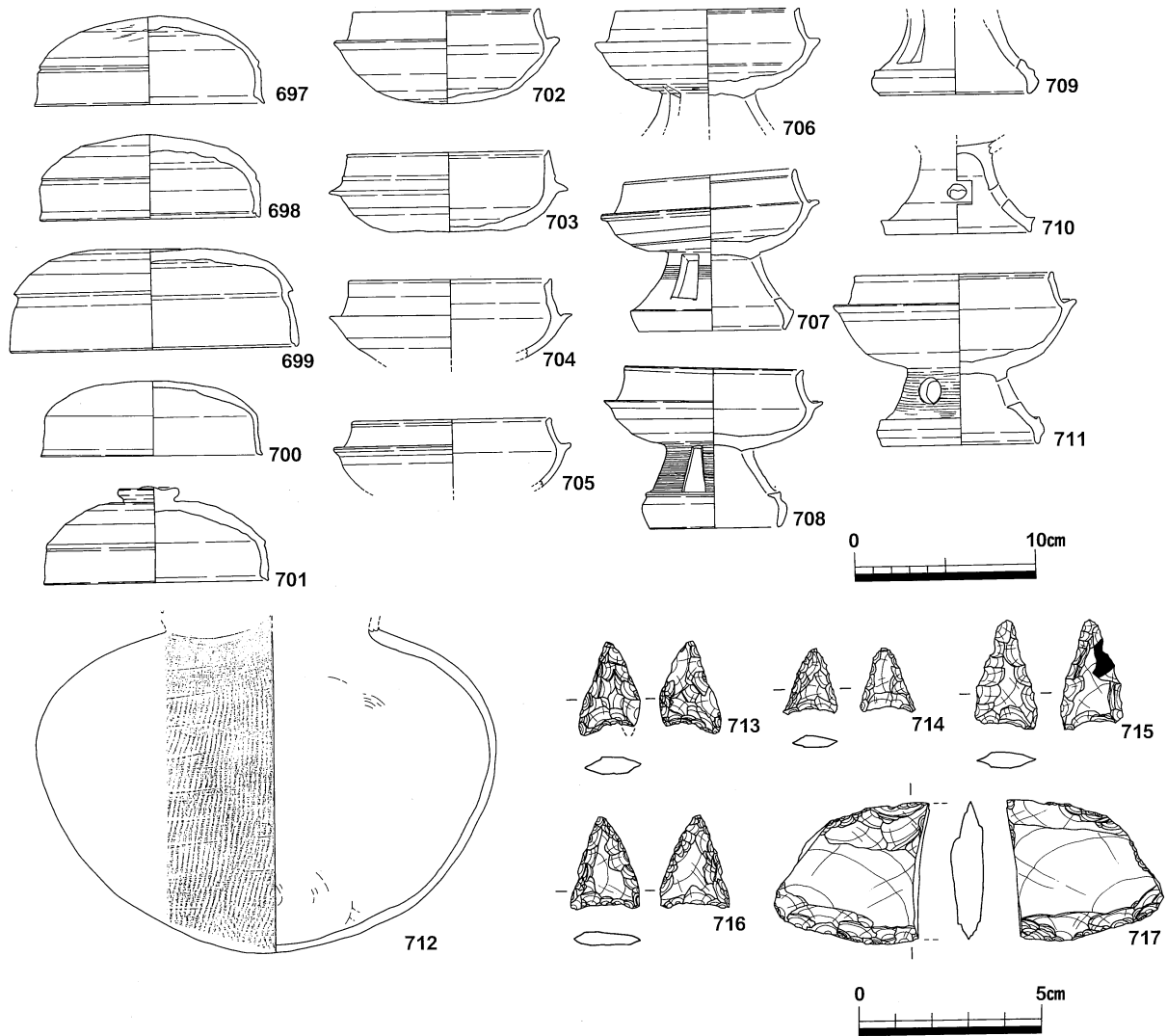
第113図 P-4付近包含層 出土遺物実測図(その1)

683は逆L字状口縁の甕である。683の外表面は右下がりのハケが施される。675～683は小片で出土したものが多い。684は土師器壺である。完形で出土した。胎土中に赤色粒を含むこと、包含層の他の遺物の年代観から土師器と考えている。口縁部は外湾気味に立ち上がり端部は丸くおさめている。玉葱状の体部は中央付近に最大径がある。685～692は土師器甕である。685～689は明瞭な稜を持たずにくの字状に屈曲する口縁をもつ。685、688～690の口縁はやや内湾し、686、687はやや外反している。687の口縁端部はやや外側に肥厚させ、688は水平方向の平坦面をつくっている。688の体部は球状を呈する。690は長胴形で、体部からわずかに直立してから外側に開く口縁をもつ。691は二重口縁形態の甕である。明瞭な稜を持たずにくの字状に外反したのち上方に屈曲する。口縁端部は四角におさめている。692は器高が低く、口径が大きい特徴的なプロポーシオンである。短く屈曲する口縁の端部は外側に摘み出している。不明瞭であるが平底状の底部をもつ。体部外面は粗いハケの後ナデている。692は形態から韓式土器もしくはその影響を強く受けた土器と思われる。693、694は土師器杯である。693は鉄鉢状を呈する。694は鉄鉢状を呈する体部で上方に立ち上がる口縁部をもつ。695は土師器高杯。軸部から明瞭な稜を持たずに裾部に移行する。内面には粘土紐を巻き上げた螺旋と絞り目が見られる。

697～712は須恵器である。697～701は蓋、702、703は杯身、704、705は杯身か高杯、706～711は高杯、712は甕である。697、698は天井部と口縁部を分ける稜はほとんど無く凹線を巡らしている。端部は内傾させ明瞭な稜をもつ。天井部は697が1/2ほど、698が3/4ほどが反時計回りの回転ヘラ削りである。698はほぼ完形で出土した。699は西地区出土の須恵器蓋のなかでは大型で、口径16cmを測る。天井部と口縁部の境は突出は小さいが明瞭な稜を持ち、以下に1条の凹線が巡る。天井部は扁平で3/5が反時計回りの回転ヘラ削りである。口縁端部は内傾しシャープさに欠けるが段をもつ。700は天井部と口縁部の境界に稜は入るが突出はない。立ち上がり約2cmの口縁部の端部は水平方向の平坦面をつくる。内外面ともに回転ナデで仕上げている。701は天井部と口縁部をわける稜は痕跡的で1条の凹線が巡る。口縁



第114図 P-4付近包含層 出土遺物実測図(その2)



第115図 P-4付近包含層 出土遺物実測図(その3)

端部は内傾するがシャープさに欠ける。天井部は丸く、約1/2が反時計回りの回転ヘラ削り、中心からややずれた位置に扁平なつまみが付く。702の受け部は大きく突き出す、内傾する立ち上がりは1.5cmほどで肉厚である。端部は内傾し段を有する。これらはいずれもシャープさに欠ける。703の受け部はやや下方に突き出す。約2cmの立ち上がりはやや内傾気味で、端部も内傾し段を有する。704の受け部は鋭く突出する。約2cmの立ち上がり部はやや厚手で端部は内傾し明瞭な段を持つ。底部は3/4程度反時計回りの回転ヘラ削りが施される。705は全体的にシャープさに欠けるつくりである。706は焼成不良、3方に方形の透かし穴をもつ。蓋の受け部は断面三角形状に突き出し、立ち上がり部は内傾し約2cmの高さである。端部は内傾し段を有する。これらは全体的にシャープさに欠ける。707も焼成やや不良である。数ヶ所にロクロに精通していないために生じたと思われる歪みが見られる。受け部は大きく突出するが甘く、口縁立ち上がりも肉厚で、内傾する端部も段をもたない。脚部には3方に台形透かし穴をもち、外面にカキ目の痕跡が認められる。脚端部は全体的に甘く、内傾させ丸くおさめている。708の受け部は鋭く斜め上方に突出する。約2cmの立ち上がりは内湾し、端部は内側に明瞭な段を持つ。脚部は3方に台形の透かし穴をもち、外面はカキ目が施される。脚端部の上面に突帯をつくり端部は丸くおさめている。709は破片

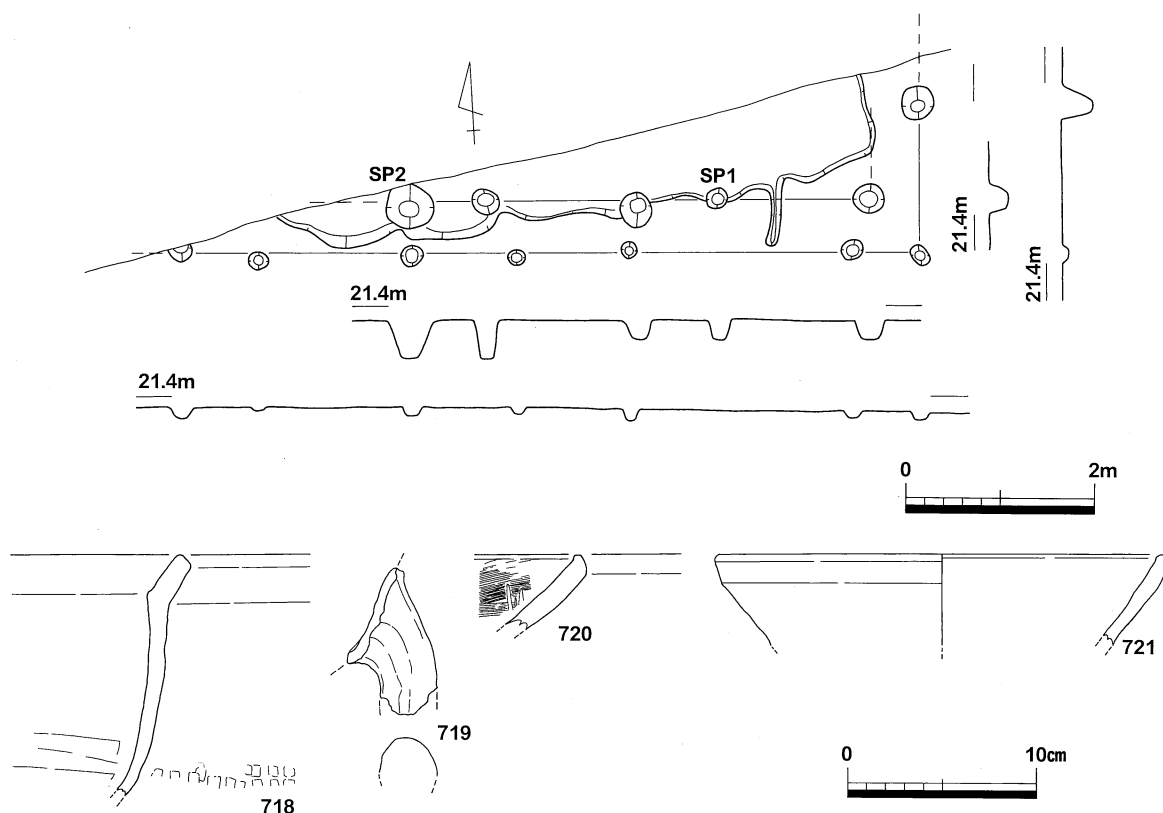
であるが、3方の方形の透かし穴をもつと推定される。脚端部上側に断面三角形の小突帯をつくり端部は丸くおさめている。710は円形の透かし穴をもつ脚部小片。透かし穴の数は不明である。脚端部は断面三角形の突帯をつくりだしたのち尖り気味に仕上げている。711は焼成不良のものである。3方に円形の透かし穴を持つ。受け部は断面三角形に斜め上方に突出する。脚端部は上下に摘み出している。脚部外面にカキ目を施している。712の甕は口縁部を欠損する。体部最大径は2/3付近にある。外面は平行タタキ、内面はスリ消し調整をしている。713~716は凹基式の石鏃、717は外湾する刃部をつくり背面も整形する形状から石包丁とした。

#### 4. 中世の遺構・遺物

##### (1) 掘立柱建物、柵列

S B a 02

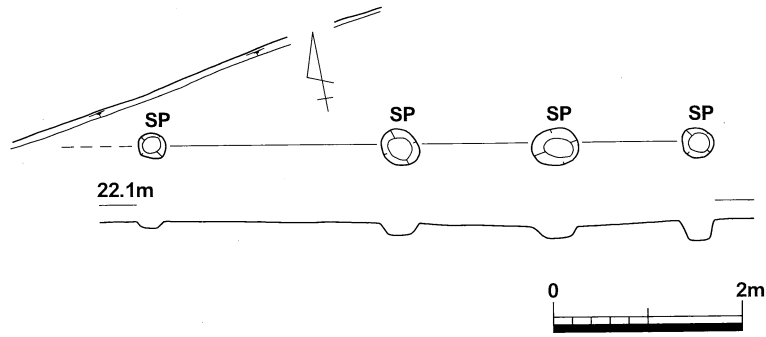
I -16区 (X=143.063、Y=52.030付近) で検出した掘立柱建物である。一側辺4間 (6 m) 以上、一側辺1間 (1.3m) 以上の規模で、外縁に庇状に浅い柱穴が巡る。北半は調査区外に延びる。建物の主軸方向は座標北から83度西に振った方向である。この柱穴列を掘立柱建物と考えるのは、柱穴埋土がすべて明灰色極細砂質土であること、建物と推定する範囲に2~3 cmのわずかな落ち込みがあり柱穴列と関連すると考えられること、東側に雨落ち溝状の3 cmほどの落ち込みが検出されていることが理由である。第116図はS B a 02内のS P 1とS P 2から出土した遺物実測図である。718、720、721がS P 1、719がS P 2から出土したものである。718は土師器土鍋である。明瞭な稜を持たず緩やかに外反する口縁をもつ。外面に格子目タタキが見られる。719は土師器土釜の脚部小片である。720、721は土師器こね鉢である。



第116図 S Ba02 平・断面図、出土遺物実測図



このほか S B a 02 の柱穴からは土師器の杯か小皿の小片など中世の土器片が若干量出土している。



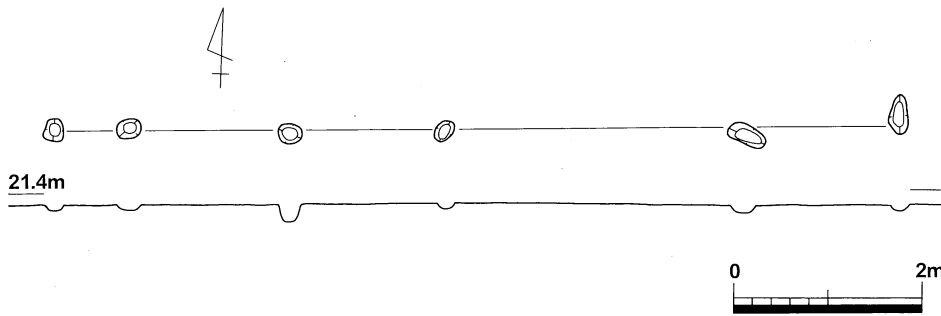
S A a 01

I -16区 (X=143.048、Y=51.952 付近) で検出した柵列である。

4 基の柱穴が直線に並ぶもので、

第117図 SAa01 平・断面図

全長 6 m を測るが、調査区北側にさらに延びる可能性がある。方向は座標北から約 80 度西に振っている。柱穴から遺物は出土しなかったが、周辺の同一埋土（明灰色極細砂質土）の柱穴から中世に属する土器細片が出土しており、中世の遺構と考えられる。なお、西地区南部の柱穴のすべての埋土は同一であり、S B a 02 と同一時期のものと考えられる。



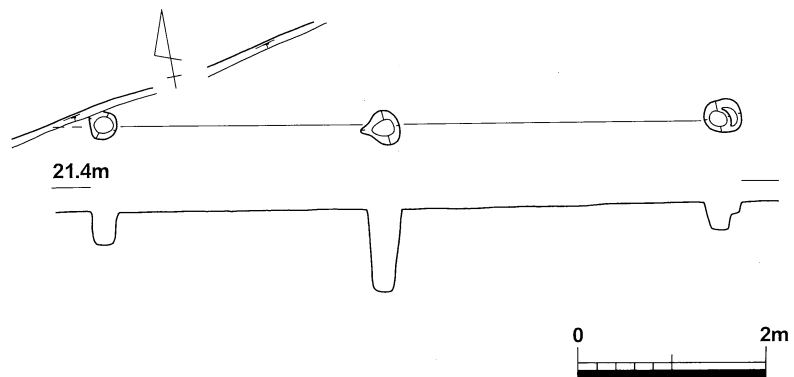
第118図 SAa02 平・断面図

S A a 02

I -16区 (X=143.061、Y=52.025 付近) で検出した柵列である。6 基の柱穴が直線に並ぶもので、全長 9 m を測る。方向は座標北から 86 度西に振っている。東から 3 番目の柱穴から器種不明の土器細片が出土しているほかは遺物は出土していない。しかし、S A a 01 と同じ理由から同時期の遺構と考えられる。

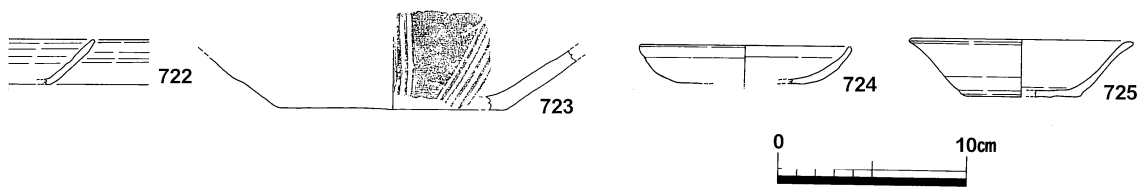
S A a 03

I -16区 (X=143.067、Y=52.056 付近) で検出した柵列である。3 基の柱穴が直線に並ぶもので、全長 6.5 m を測る。方向は座標北から 80.5 度西に振っている。



西側と真ん中の柱穴から遺物が

第119図 SAa03 平・断面図

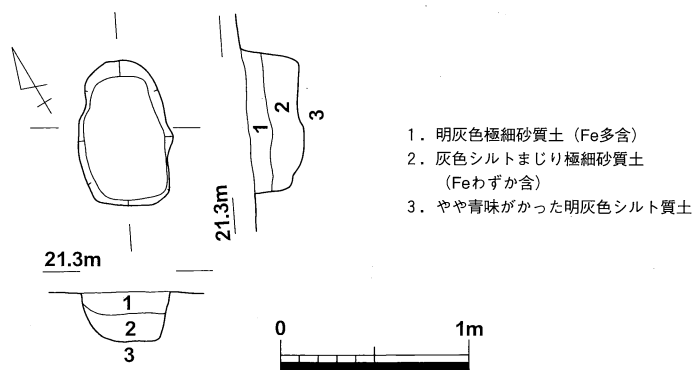


第120図 西地区 柱穴出土遺物実測図

出土している。図化できないが、土師器杯の口縁部の小片2点と器種不明の小片数点である。このことからS A a 03も中世に属することがわかる。

そのほかの柱穴

西地区では東西方向に細長く伸びる南部の調査区において多数の柱穴を検出している。これらの埋土の大半は明灰色極細砂質土で、ほぼ同時期のものと推定され、出土遺物は中



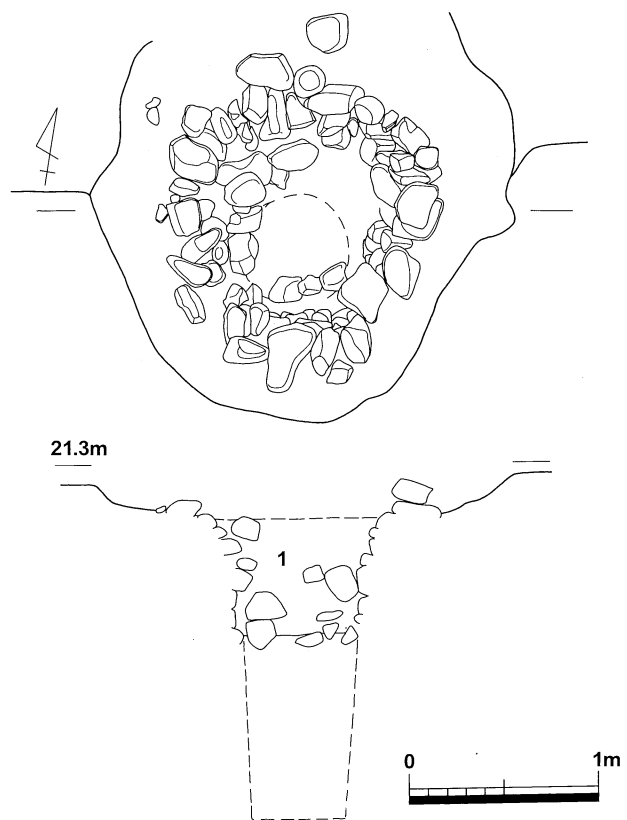
第121図 SKa41 平・断面図

世遺物を下限とするものであった。第120図722、723はX=143.053.9、Y=51.983.6付近に所在するS P a 13から出土したものである。722は土師器杯の口縁部の破片、723は瓦質のスリ鉢の底部に近い体部の小片である。5条の卸し目が認められる。724はX=143.046.8、Y=51.947.8付近に所在するS P a 14から出土した土師器杯である。底部と口縁が明瞭な稜をもたずに丸味をもって立ち上がる形態である。725はX=143.049、Y=51.863.5付近に所在するS P a 15から出土した土師器杯である。

(2) 土坑、井戸

SK a 41

I-16区 (X=143.064、Y=52.047付近) で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形、断面形はU字状を呈する。長辺0.78m、短辺0.5m、深さ0.26mを測る。主軸方向は座標北から23度東に振った方向である。埋土は2層に細分され、垂直に近い掘り込みと平坦な底面をもつ土坑であることが注意される。出土遺物は僅少で中世土師器の杯か小皿の小片、器種不明の土器細片数点のほか、人間の奥歯片が1点出土している。奥歯片はSK a 41調査中の比較的早い段階で検出したため、墓である可能性が高いと考え精査したが確証は得られなかった。



第122図 SEa02 平・断面図

SE a 02

I-16区 (X=143.057、Y=52.013付近) で検出した石組みの井戸である。井戸掘り方は径2.2mほどの円形で、石組みは径1mほどの円形である。崩落の危険があったため南半分を2.5×3mほどの範囲で掘り下げ、井戸を半裁する方法で調査をおこなった。石材は犬頭大から人頭大の砂岩垂円礫、垂角礫を組み上げたもので、検出面から井戸底までの深さは1.8mである。井戸底には薄板を曲げた曲物が据えられている。井戸断面を垂直にするために石材の抜き取り作業を行っていた段階で降雨があり、井戸掘り方の埋土が流失し、崩落の危険が増したため図化作業を途中で中止している。

遺物は上層埋土を中心にコンテナ1/8箱分出土した。土師器の杯か小皿の小片、土師器土鍋や土釜と考えられる小片、土師器や須恵器の器種不明の小片などで、中世に属するものが大半である。

(3) 溝状遺構

SD a 25、26

I-14、15、22区 (X=143.143、Y=51.890付近) で検出した平行する2条の溝状遺構である。北側のSD a 25は幅0.7m、深さ0.1m、南側のSD a 26は幅0.4m、深さ0.1mほどの規模で、両溝は2mほどの間隔で平行し、座標北から61度西に振った方向に直線に流れている。検出長はおよそ18mである。

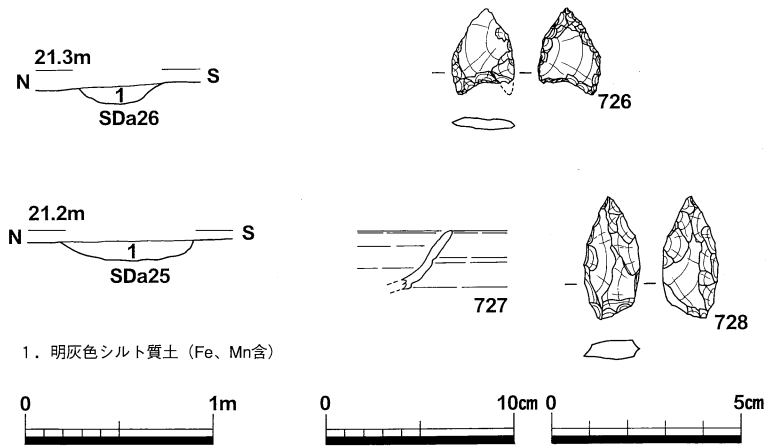
SD a 25からは第123図727の土師器杯の口縁部小片をはじめ、土釜

小片、弥生土器小片、石鏃、サヌカイト片など若干量の遺物が出土し、SD a 26からは中世の土師器杯と考えられる小片、20点あまりの器種不明の土器細片、石鏃が出土している。

SD a 25、26はかなり正確に平行な間隔を持つことから、同時併存のものであると考えられる。走向は周辺の条里型地割の方向に合致しないが、北側を流れる古墳時代中期のSD a 24とも同じ方向をとることから、旧中州から池台池に落ち込む斜面の傾斜方向に順応した方向を取っていると判断してよいであろう。

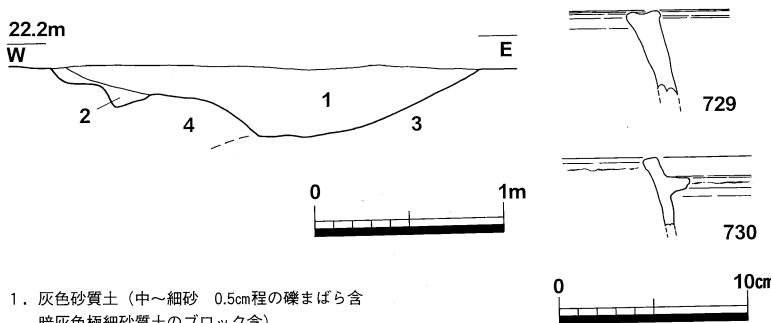
SD a 27

I-16区 (X=143.040、Y=51.925付近) で検出した溝状遺構である。幅2.3m、深さ0.36mほどの規模で、断面形は皿状を呈する。ほぼ座標南北の方向に流れ、検出長は8mほどである。埋土は2層であるが、



第123図 SDa25、26 断面図、出土遺物実測図

1. 明灰色シルト質土 (Fe、Mn含)



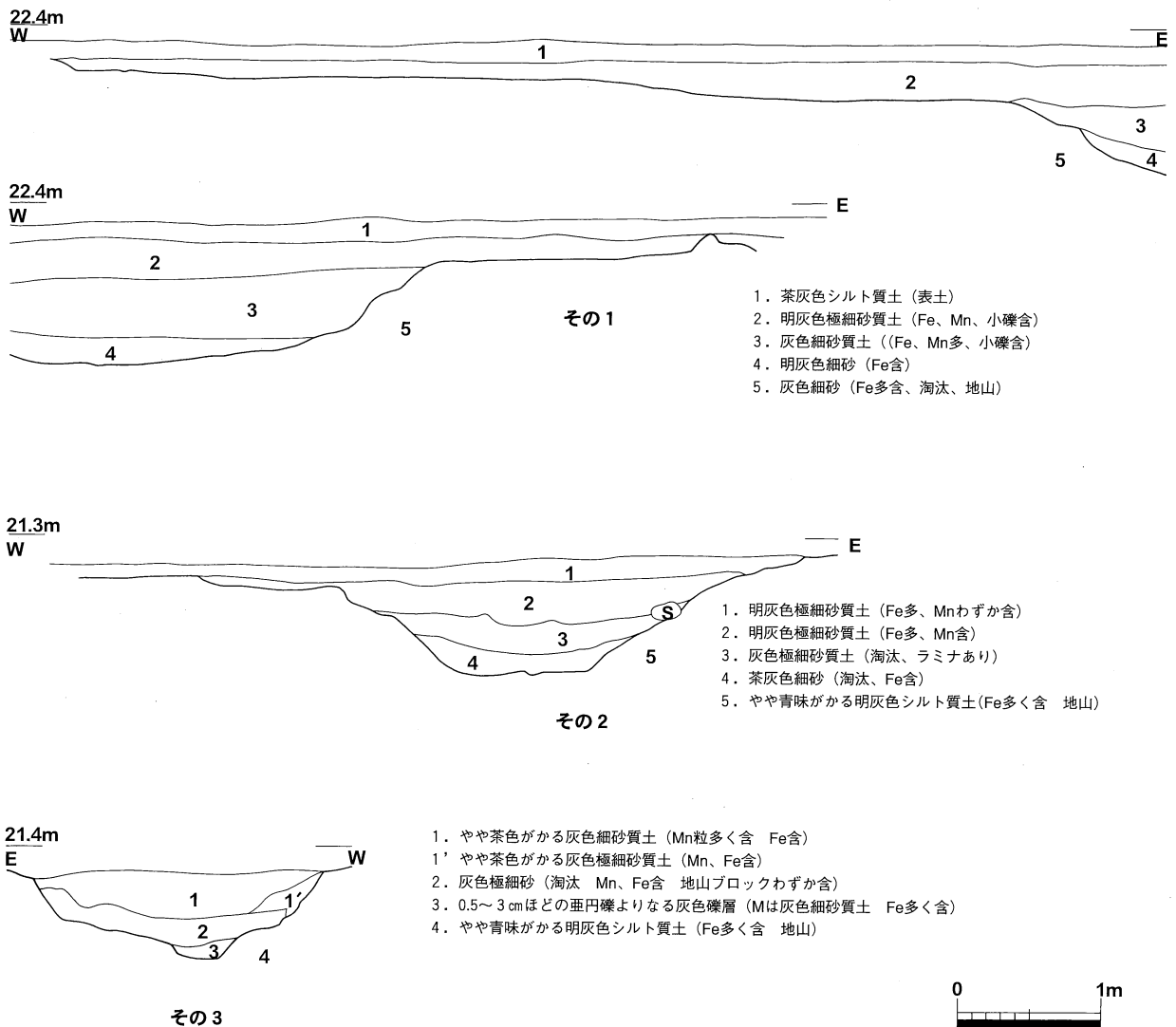
1. 灰色砂質土 (中～細砂 0.5cm程の礫まばら含 暗灰色極細砂質土のブロック含)
2. 暗灰色砂質土 (細砂 0.5cm程の礫まばらに含 SD埋土)
3. 茶灰色細砂 (地山 1層との境界きわめて不明瞭、淘汰)
4. 灰色砂礫 (1～5cm程の円礫 Mは灰色粗砂)

第124図 SDa27 断面図、出土遺物実測図

断面図の第2層は溝肩付近に断片的に見られ、大半は第1層で埋没している。再掘削していると判断できる。出土遺物は僅少で、第124図729、730の2点の土師器土釜のほか、土師器杯か小皿の小片、器種不明の小片、サヌカイト片が10余点出土したのみである。729は内傾する口縁部直下にほとんど痕跡と化した鏝が付されている。730は内湾気味の口縁の下に比較的しっかりとした鏝が付されている。

SD a 28

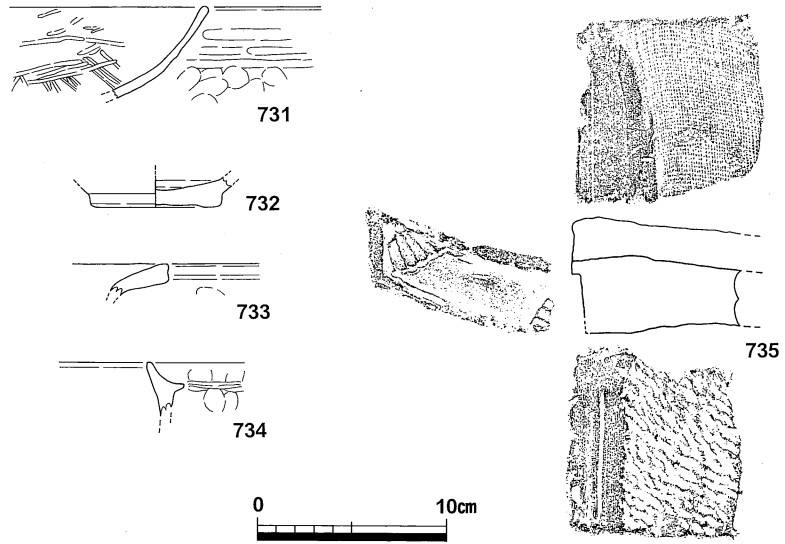
I-16区 (X=143.062、Y=52.042付近) で検出した溝状遺構である。幅2.2~3.7m、深さ1.2mほどの規模で、断面形は逆台形を呈する。座標北から5度ほど東に振った方向で流れるが、北側では東方向に曲がり始めている。埋土最上層の明灰色極細砂質土層は10cmほどの厚さで西岸の北半に広がっている。SD a 28からはコンテナ1/8箱分の遺物が出土している。小片が多く、概観すると中世の土器7割、弥生土器3割程度である。第126図はSD a 28出土の遺物実測図である。731は和泉型の瓦器椀の小片である。732は白磁碗、見込み部に灰白色に発色する薄い釉が残る。削り出し高台で、外面は露胎である。733は土師器土鍋の口縁、734は土師器土釜の口縁である。735は軒平瓦の破片である。



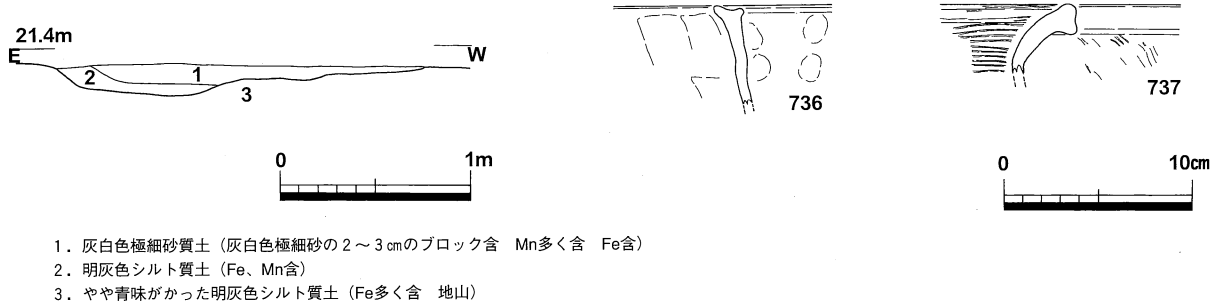
第125図 SDa28 断面図

SD a 29

I-16区 (X=143.060, Y=52.045付近) で検出した溝状遺構で、SD a 28の東岸側でSD a 28に平行して流れている。幅1.8m、深さ0.15mのきわめて浅いもので、SD a 28最上層の明灰色極細砂質土層と同一と思われる第1層の下に、幅0.5mほどの小流(第2層)が流れる状況である。出土遺物は5点ほどの土器細片のみであった。第127図736は土師器土釜の口縁部小片、737は瓦質土器の甕の口縁部小片である。737の内面は1cm当たり4条ほどの粗いハケが施されている。亀山産と思われる。



第126図 S Da28 出土遺物実測図



1. 灰白色極細砂質土 (灰白色極細砂の2~3cmのブロック含 Mn多く含 Fe含)
2. 明灰色シルト質土 (Fe, Mn含)
3. やや青味がかった明灰色シルト質土 (Fe多く含 地山)

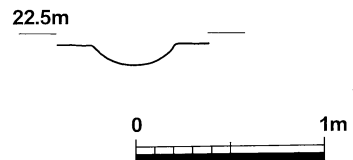
第127図 S Da29 断面図、出土遺物実測図

5. 近現代の遺構・遺物

(1) 溝状遺構

SD a 30

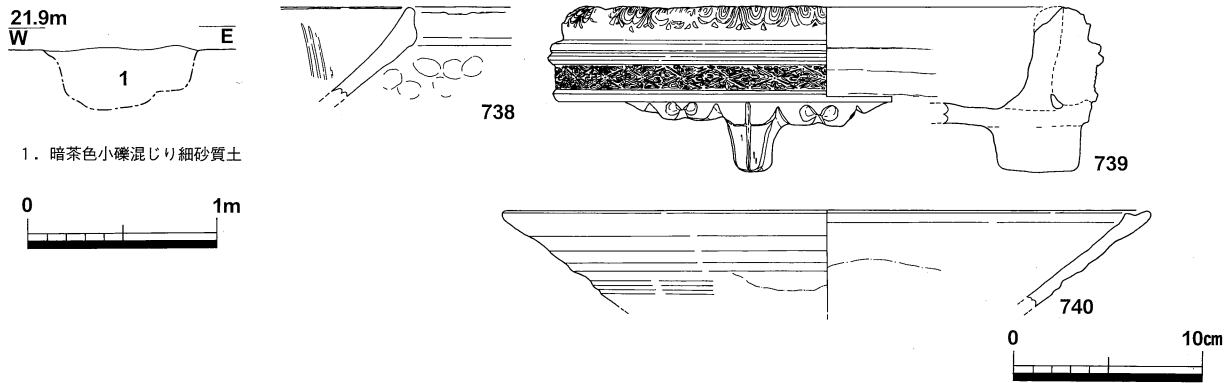
I-14, 15区 (X=143.080, Y=51.871付近) で検出した溝状遺構である。調査区の西壁と同じ方向(座標北から4.5度東に振った方向)で、幅0.4~0.6m、深さ0.1mほどの規模で、約54mにわたって検出した。南端は攪乱によって壊され、北端は自然に消滅している。出土遺物は僅少で、染め付け片1、鉄砲玉1のほか弥生時代前期を中心とする土器細片10余点、サヌカイト片1点が出土したのみである。



第128図 S Da30 断面図

S D a 31

I-16区 (X=143.050、Y=51.969付近) で検出した溝状遺構である。幅0.8m、深さ0.33mの規模で、座標北から4度ほど東に振った方向に直線に流れている。出土遺物は僅少で、図化遺物のほか数点の中世土師器の杯か小皿片、器種不明の土器細片が出土している。738は土師器スリ鉢、739は瓦質土器の浅鉢、740は陶器鉢である。739は均等な位置にはならないが3足が付され、断面観察では底部の円盤をつくり、脚および鉢内面部を貼り付け、その外面に文様帯 (スタンプ) を施した粘土帯を貼り付けている。

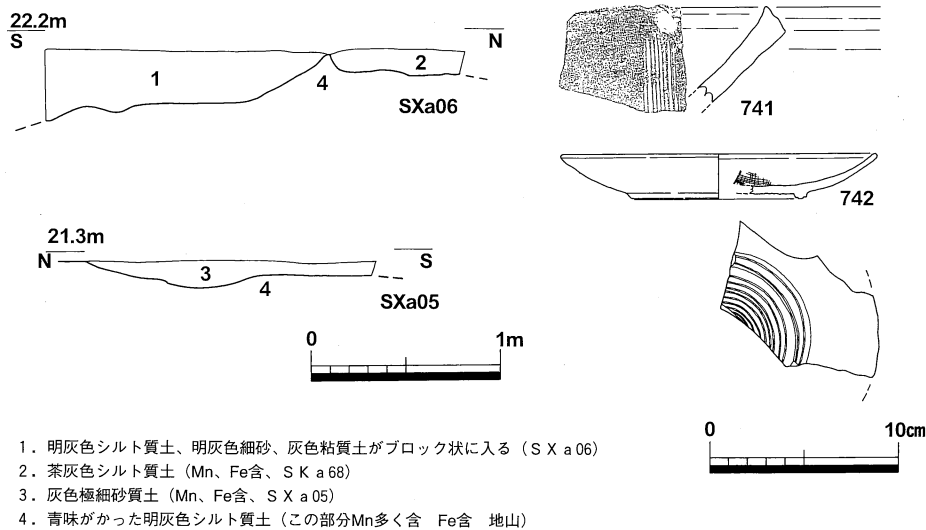


第129図 SDa31 断面図、出土遺物実測図

(2) 性格不明遺構

S X a 05、06

I-16区 (X=143.060、Y=52.055付近) で検出した性格不明の落ち込みである。平面形は不定形の落ち込みで、検出した範囲では S X a 05が深さ0.1m、S X a 06が深さ0.4mほどを測る。S X a 06の東半は池台池によって壊されている。S X a 05、06両者の埋土は異なっているが、前後関係は不明である。若干量



1. 明灰色シルト質土、明灰色細砂、灰色粘質土がブロック状に入る (S X a 06)
2. 茶灰色シルト質土 (Mn、Fe含、S K a 68)
3. 灰色極細砂質土 (Mn、Fe含、S X a 05)
4. 青味がかった明灰色シルト質土 (この部分Mn多く含 Fe含 地山)

第130図 SXa05、06 断面図、出土遺物実測図

の遺物が出土している。

## 6. 時期不明の遺構

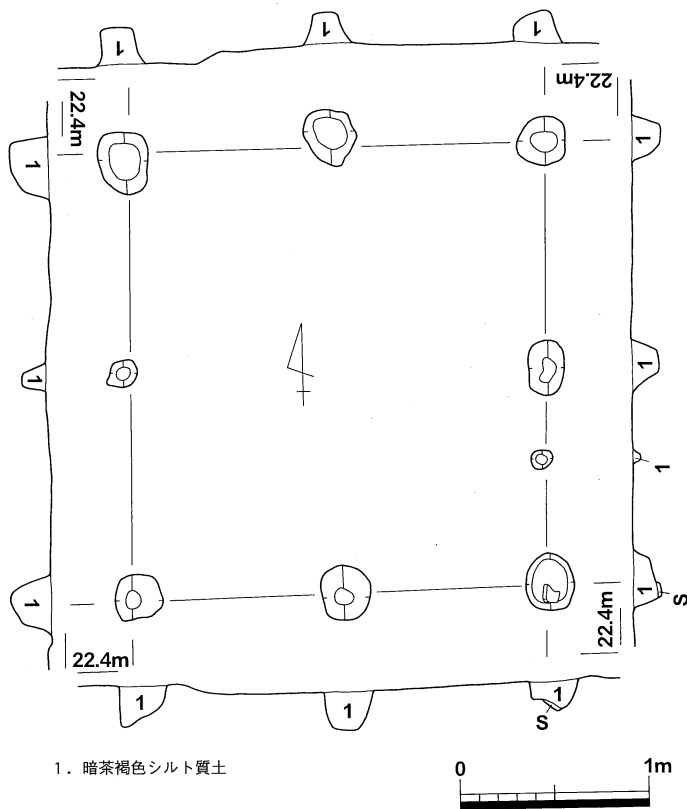
### (1) 掘立柱建物

S B a 03

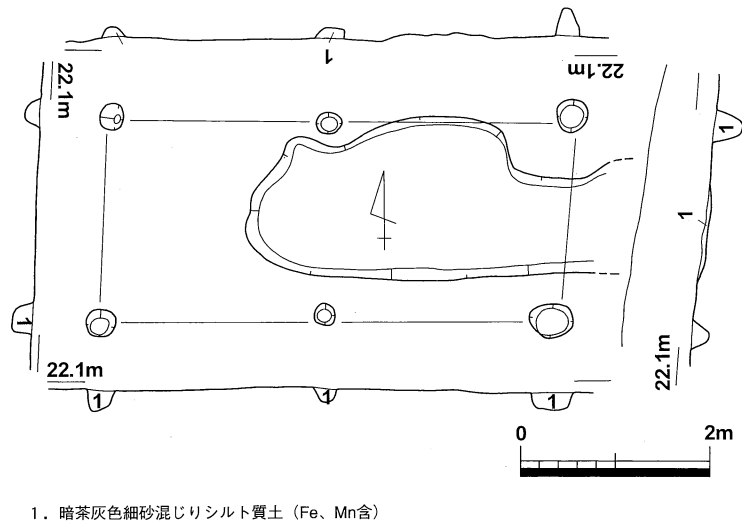
I -14、15区 (X=143.108、Y=51.884 付近) で検出した掘立柱建物である。東側は調査区外に延びる可能性がある。桁行はほぼ東西方向で、桁行2間 (5 m) 以上、梁行1間 (2.1m) の規模である。掘立柱建物を構成する柱穴および周辺の同一埋土の柱穴から遺物が出土しなかったため時期不明である。

S B a 04

I -14、15区 (X=143.058、Y=51.872付近) で検出した掘立柱建物である。2間×2間の側柱建物で、規模は南北2.3m、東西2.2m、方向はほぼ真北を向いている。時期不明のS K a 55より古い遺構であるが、柱穴から遺物は出土せず時期不明である。



第132図 S Ba04 平・断面図

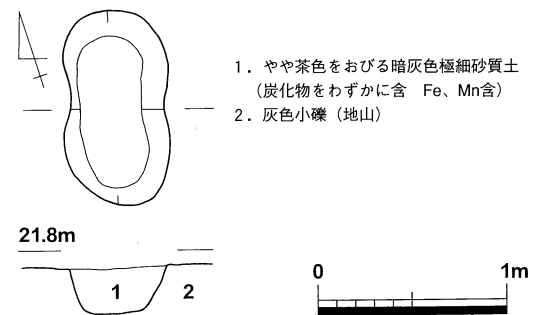


第131図 S Ba03 平・断面図

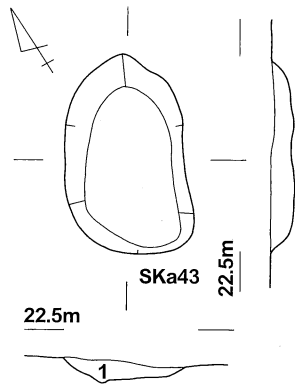
### (2) 土坑

S K a 42

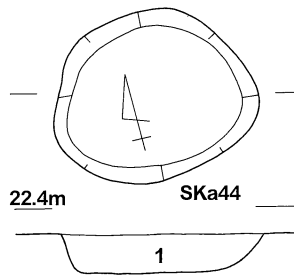
I -14、15区 (X=143.128、Y=51.881 付近) で検出した土坑である。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈し、長径1.02 m、短径0.55m、深さ0.24mを測る。東北に約3 m離れたところに弥生時代前期のS K a 35があり、規模が類似するため弥生時代前期の遺構である可能性があるが、埋土がやや異なり、遺物も出土して



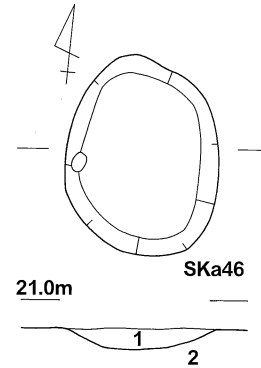
第133図 S Ka42 平・断面図



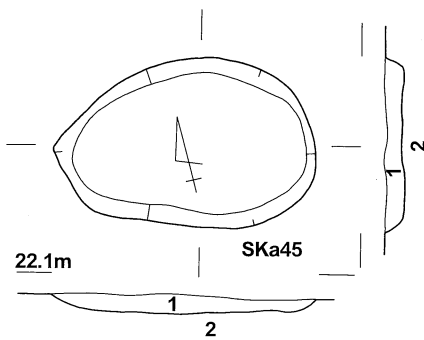
1. 暗茶灰色細砂質土 (Fe、Mn含)



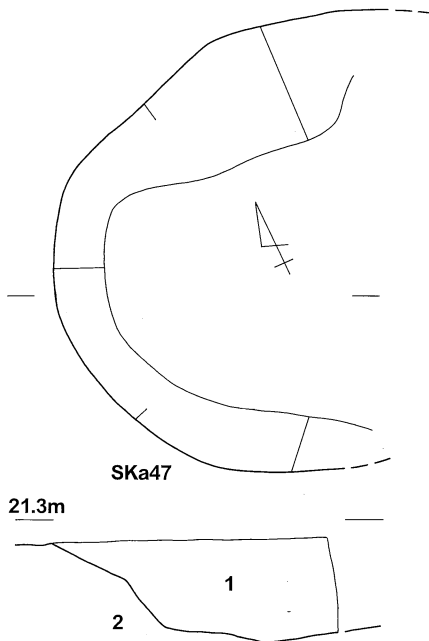
1. 暗茶灰色細砂質土 (Fe、Mn含)



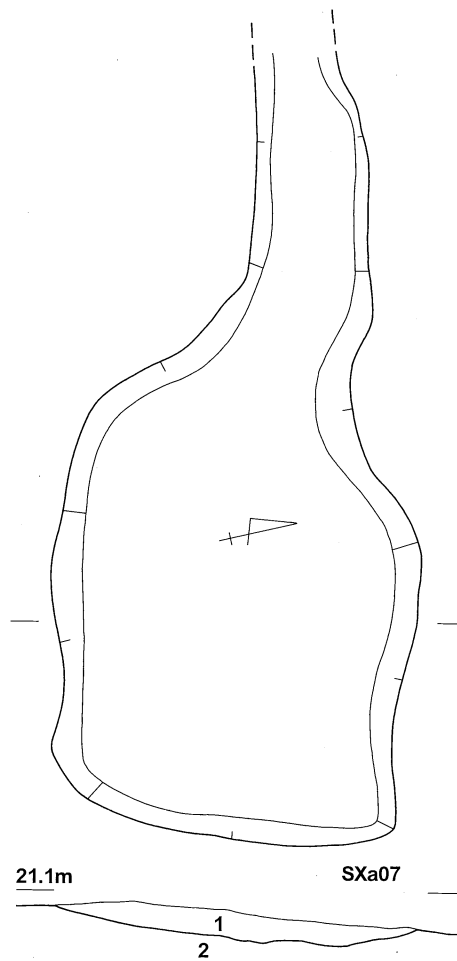
1. 暗茶灰色細砂質土 (Fe、Mn含)  
2. 灰色礫 (0.5~3cmの亜円礫  
Mは灰色中~粗砂 地山)



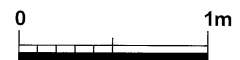
1. やや茶色をおびる灰色細砂質土  
(1cm程の礫わずかに含)  
3. 黄灰色極細砂 (地山)



1. 暗灰色礫まじり極細砂質土  
(1~3cm程の礫まばら含 くさり小礫わずかに含)  
2. 灰色礫 (0.5~5cm程の亜円礫層 Mは灰色細砂)



1. 暗灰色細砂質土 (0.5cm程の礫まばら含 くさり小礫わずかに含)  
2. 灰色礫 (0.5~5cm程の亜円礫層 Mは灰色細砂)



第134図 SKa43~47、SXa07 平・断面図



いないため時期不明である。

SKa43

I-14、15区 (X=143.089、Y=51.874付近) で検出した土坑である。平面形はやや不整な楕円形、断面形は皿状を呈し、長径1.05m、短径0.62m、深さ0.1mを測る。時期不明の土器細片が若干量出土している。

SKa44

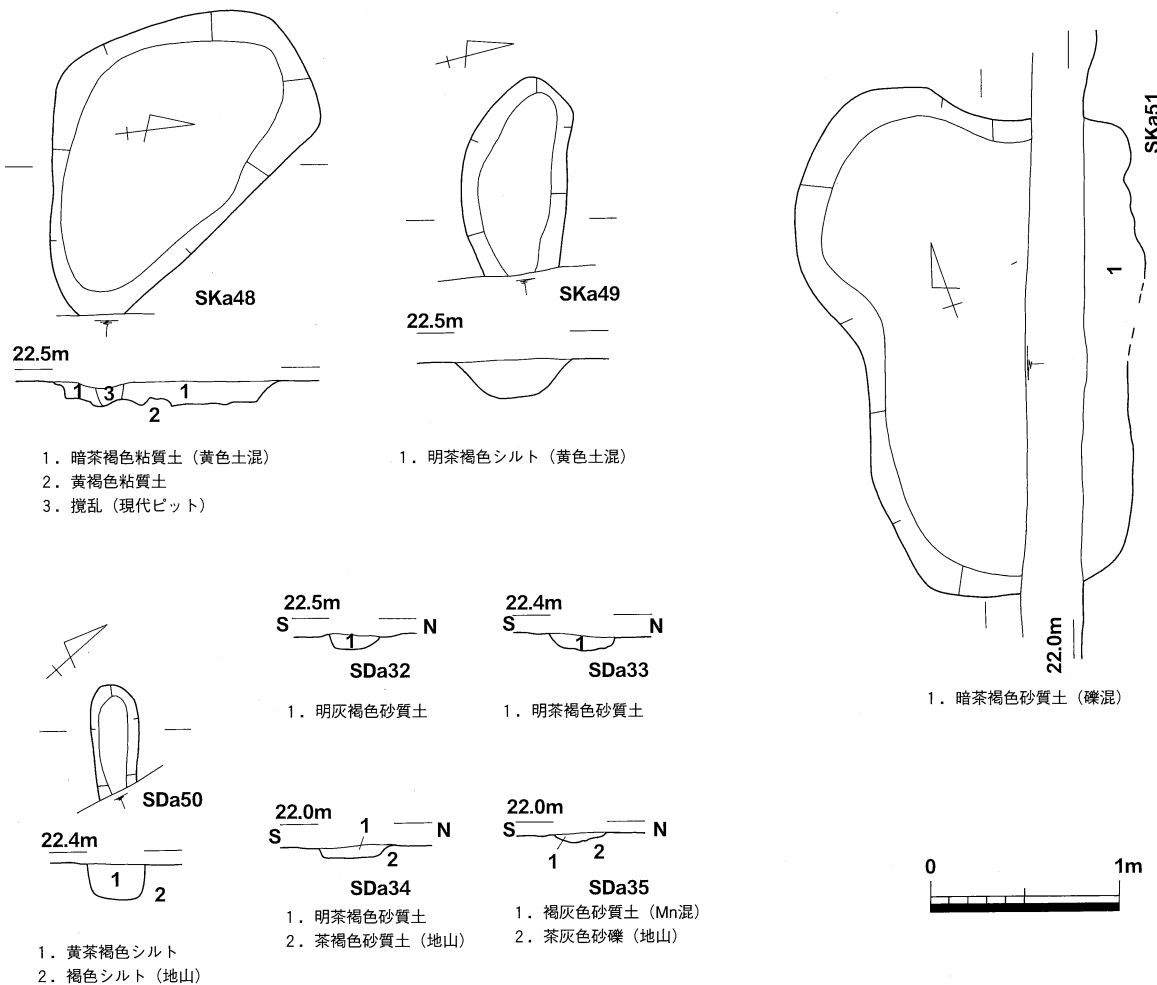
I-14、15区 (X=143.088、Y=51.877付近) で検出した土坑である。平面形はやや不整な円形、断面形はやや深い皿状を呈し、径0.9m、深さ0.2mを測る。須恵器片、サヌカイト片、弥生土器と思われる細片、土師器か弥生土器か不明の細片などビニール袋1袋分出土している。

SKa45

I-14、15区 (X=143.106、Y=51.880付近) で検出した土坑である。平面形はやや不整な楕円形、断面形は皿状を呈し、長径1.37m、短径0.9m、深さ0.1mを測る。弥生時代後期の可能性のある土器細片1点とサヌカイト片1点が出土しているが、時期決定の根拠としては薄弱である。

SKa46

I-14、15区 (X=143.117、Y=51.882付近) で検出した土坑である。平面形はやや不整な楕円形、断面形は皿状を呈し、長径1.05m、短径0.8m、深さ0.1mを測る。遺物は出土しなかった。



第135図 SKa48~51 平・断面図、SDa32~35 断面図

S K a 47

I-14、15区 (X=143.141、Y=51.887付近) で検出した土坑である。東半がトレンチによって壊されたため推定であるが、平面形は円形、断面形はやや深い皿状を呈し、径2.43m、深さ0.55mを測る。弥生土器か土師器の磨滅した細片、須恵器小片などビニール袋1袋の遺物が出土しているが時期の確定は困難である。

S X a 07

I-14、15区 (X=143.148、Y=51.885付近) で検出したもので、長辺2.5m、短辺1.9mほどの長方形の落ち込みの西側に幅0.55mほどの溝状遺構が接続している。落ち込みと溝状遺構の深さは0.1mほどを測る。遺物は出土せず、遺構の性格も不明である。

S K a 48

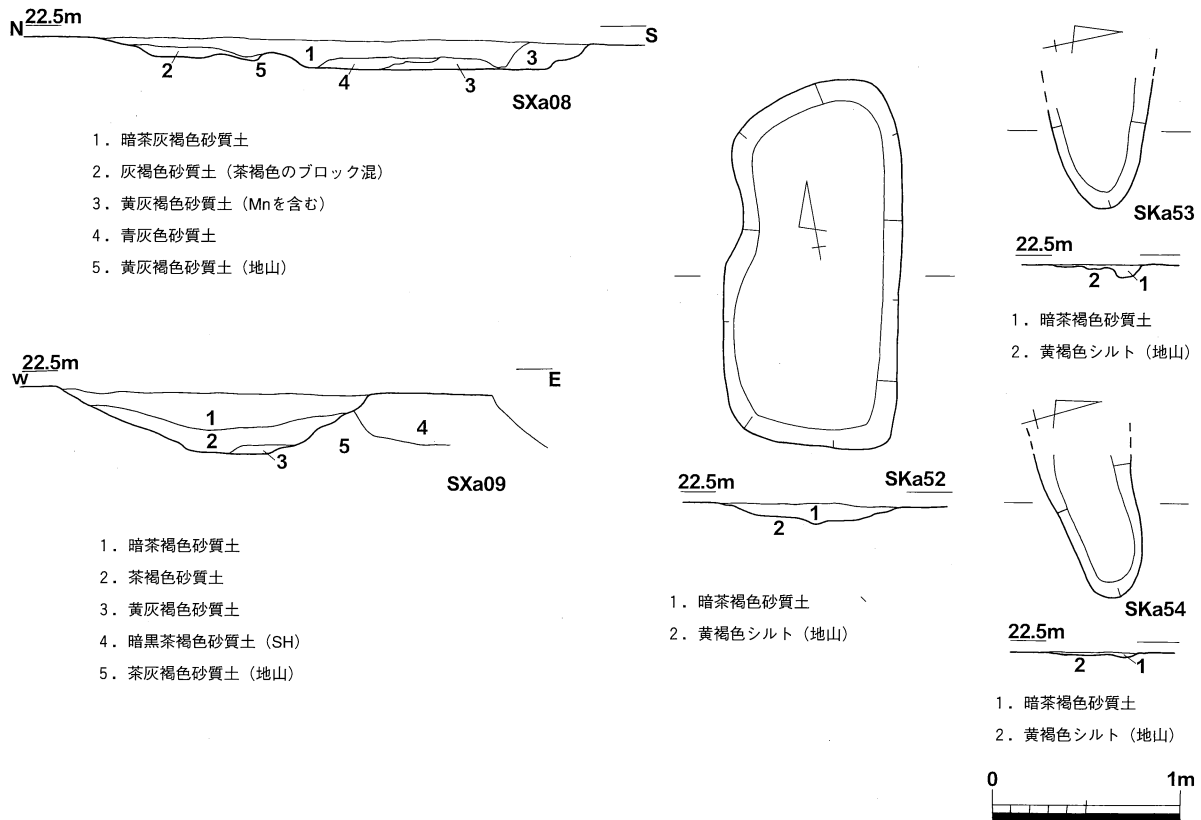
I-22区 (X=143.071、Y=51.867付近) で検出した土坑である。平面形は不定形、断面形は浅い皿状を呈し、深さ0.13mを測る。弥生土器か土師器の器種不明の小片を2点検出したのみで時期不明である。

S K a 49

I-22区 (X=143.086、Y=51.870付近) で検出した土坑である。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。長径1.05m以上、短径0.55m、深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

S K a 50

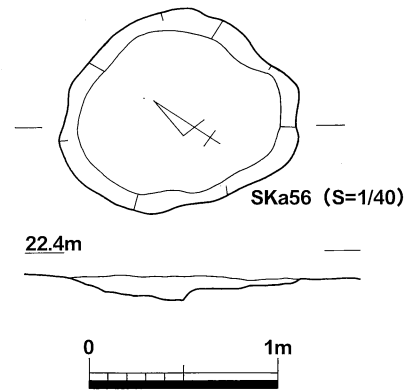
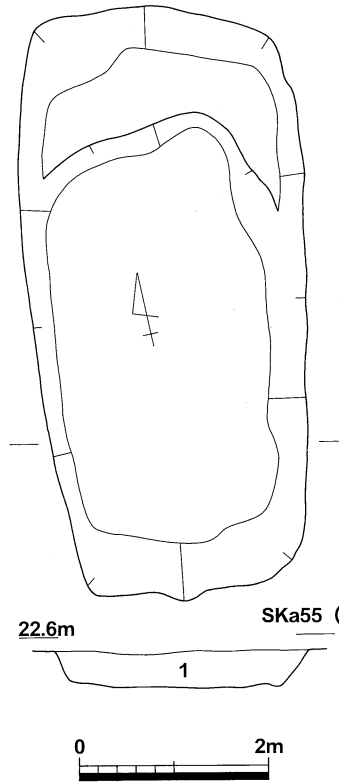
I-22区 (X=143.088、Y=51.870付近) で検出した土坑である。平面形は細長い楕円形、断面形はU字状を呈する。長径0.55m以上、短径0.25m、深さ0.18mを測る。遺物は出土しなかった。



第136図 SXa08、09 断面図、SKa52～54 平・断面図

S K a 51

I -22区 (X=143.117, Y=51.876 付近) で検出した土坑である。東半は I -14, 15区に延びるが検出できなかった。平面形は不定形、断面形は皿状を呈し、深さ0.3mを測る。弥生時代前期と思われる砂粒を多く含んだ土器片、時期不明の土器片が10余点出土したが時期決定は困難である。



S D a 32

I -22区 (X=143.096, Y=51.871 付近) で検出した溝状遺構である。東は自然消滅し、西側は調査区外に延びる。幅0.25m、深さ0.08m、検出長は0.7mである。遺物は出土しなかった。

1. 明灰色細砂質土  
(Fe含 Mnわずか含 黄灰色シルト質土のブロック含 未分解)

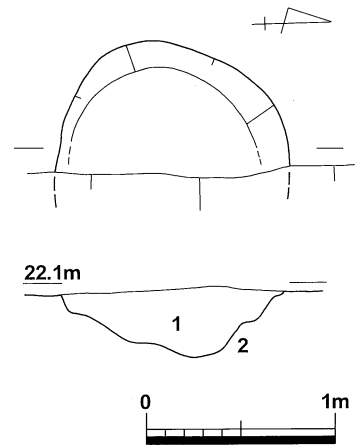
第137図 SKa55、56 平・断面図

S D a 33

I -22区 (X=143.107, Y=51.873 付近) で検出した溝状遺構である。幅0.35m、深さ0.08m、検出長は2m、座標北から65度西に振った方向に直線に流れる。遺物は出土しなかった。

S D a 34

I -22区 (X=143.115, Y=51.875付近) で検出した溝状遺構である。幅0.4~0.8m、深さ0.06m、検出長は2mである。遺物は出土しなかった。



S D a 35

I -22区 (X=143.121, Y=51.876付近) で検出した溝状遺構である。東は自然消滅し、西側は調査区外に延びる。幅0.25m、深さ0.05m、検出長は1.3mである。器種不明の遺物細片が数点出土したが、時期決定は困難である。

S X a 08

I -22区 (X=143.026, Y=51.863付近) で検出した落ち込みである。平面形は不定形、深さ0.15mを測る。S H a 03、S H a 09を壊している。下川津B類土器の破片、須恵器小片のほか器種不明の土器片が30余点出土しているが、時期を決める根拠はない。

1. 暗茶褐色シルト質土  
(1cmほどの礫をまばら含 Fe含)  
2. 茶灰色細砂  
(地山 北方で礫層に変化する)

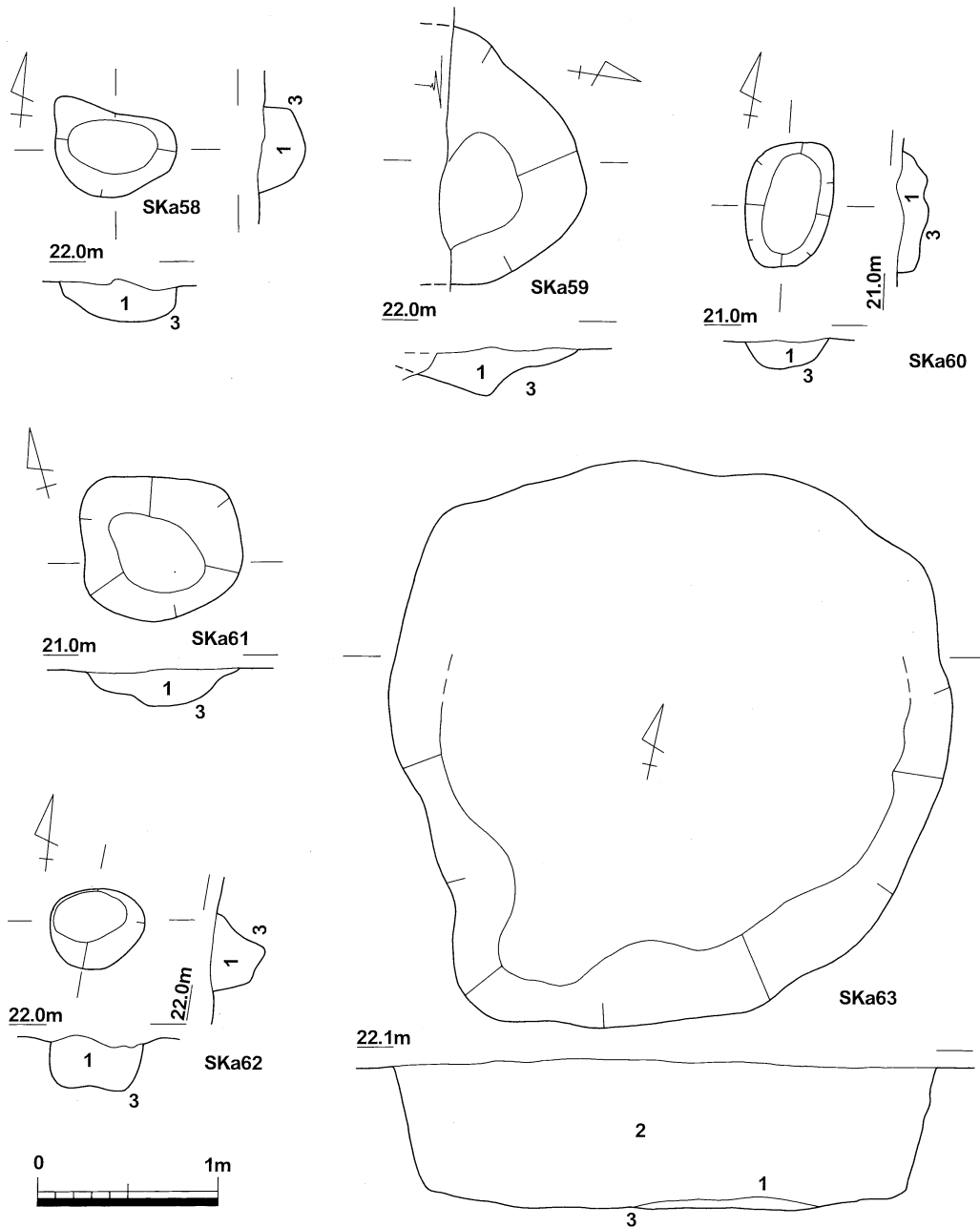
第138図 SKa57 平・断面図

S X a 09

I-22区 (X=143.027、Y=51.865付近) で検出した落ち込みである。平面形は不定形、深さ0.3mを測る。S H a 09を壊している。須恵器小片 1 点のほか器種不明の土器片が40余点出土しているが、時期を決める根拠はない。

S K a 52

I-22区 (X=143.034、Y=51.860付近) で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形、断面形は皿状を



第139図 SKa58~63 平・断面図

呈する。長辺1.95m、短辺0.95m、深さ0.1mを測る。弥生時代前期に属する沈線の入る小片など弥生時代前期に属する可能性の高い細片10点あまりと器種不明の細片数点が出土しているが、時期を明確に示すものではない。

S K a 53

I -22区 (X=143.035、Y=51.860付近) で検出した土坑である。西半は調査区外に延びる。深さ0.07mを測る。遺物は出土しなかった。

S K a 54

I -22区 (X=143.036、Y=51.860付近) で検出した土坑である。西半は調査区外に延びる。深さ0.03mを測る。遺物は出土しなかった。

S K a 55

I -14,15区 (X=143.058、Y=51.872付近) で検出した大型の土坑である。平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形状を呈する。長辺6.2m、短辺2.9m、深さ0.3mを測る。埋土の状況からかなり新しい時期(近現代)のものと思われるものの、若干量の遺物細片が出土しているのみで時期を明確に示すものはない。

S K a 56

I -14,15区 (X=143.060、Y=51.870付近) で検出した土坑である。平面形は歪な円形、断面形は浅い皿状を呈する。径約1.25m、深さ0.13mを測る。弥生時代前期に属すると思われる遺物細片を中心に若干量の遺物細片が出土しており、弥生時代前期の遺構である可能性があるが、細片が混入したような状況で出土しているため時期不明として報告する。

S K a 57

I -16区 (X=143.042、Y=51.924付近) で検出した土坑である。中世の溝状遺構である S D a 27 に東半を壊されている。平面形が円形に復原されるとすれば、径約1.25m、深さ0.35mを測る。断面形はスリ鉢状を呈する。遺物は出土しなかったため中世以前の遺構としかわからない。

S K a 58

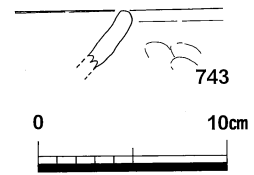
I -16区 (X=143.047、Y=51.957付近) で検出した土坑である。平面形は歪な楕円形、断面形はU字状を呈する。長径約0.65m、短径約0.45m、深さ0.2mを測る。中世土師器の杯か小皿の細片1点が出土しているが時期を特定することは困難である。

S K a 59

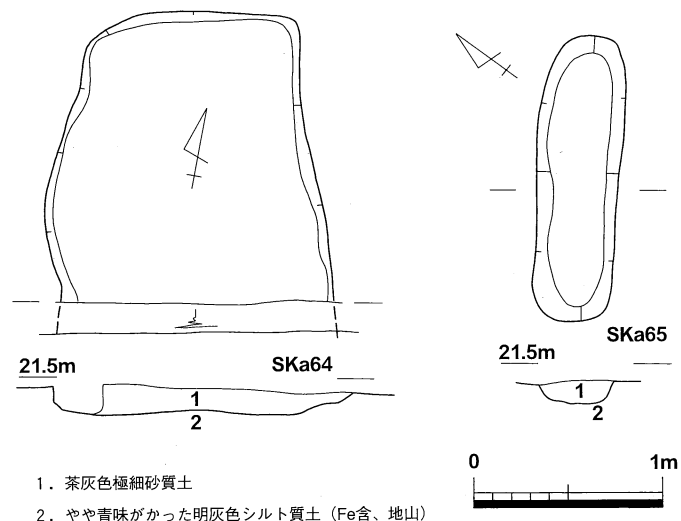
I -16区 (X=143.045、Y=51.949付近) で検出した土坑である。南側を空港営業時の排水溝で壊されている。平面形が円形であれば径約1.4mほどの規模で、深さ0.25mを測る。遺物は出土しなかった。

S K a 60

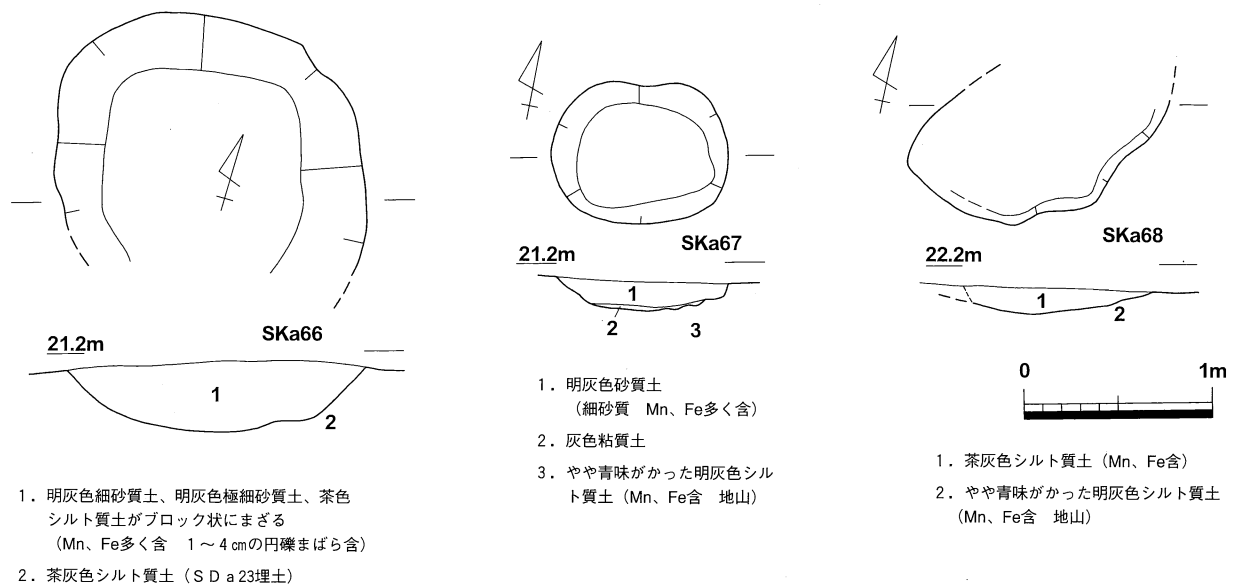
I -16区 (X=143.047、Y=51.948付近) で検出した土坑である。平面形は楕円形、



第140図  
SKa63 出土遺物実測図



第141図 SKa64、65 平・断面図



第142図 SKa66~68 平・断面図

断面形は皿状を呈する。長径約0.7m、短径約0.5m、深さ0.15mを測る。土師器の杯か小皿の細片2点、器種不明細片3点が出土しており、中世に属する可能性があるが、時期確定は困難である。

SK a 61

I-16区 (X=143.047、Y=51.945付近) で検出した土坑である。平面形は歪な円形、断面形は皿状を呈する。径約0.8m、深さ0.2mを測る。土師器の杯か小皿の小片1点と器種不明の小片1点が出土しているが、時期確定は困難である。

SK a 62

I-16区 (X=143.047、Y=51.944付近) で検出した土坑である。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。径約0.45m、深さ0.25mを測る。土師器の杯か小皿の小片のほか器種不明の小片1点が出土しているが、時期確定は困難である。

SK a 63

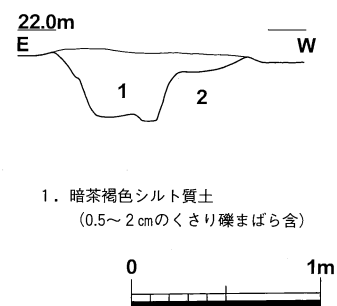
I-16区 (X=143.043、Y=51.934付近) で検出した大型の土坑である。平面形は歪な円形、断面形は逆台形状を呈する。径約3.1m、深さ0.8mを測る。弥生土器片や、第140図743の土師器こね鉢など中世土器片が若干量出土しているが、埋土に昭和19年以前の耕作土の下層に見られる明灰色系の土がブロック状に入ることから近現代のものである可能性が高い。

SK a 64

I-16区 (X=143.057、Y=52.033付近) で検出した落ち込みである。南半は調査区外に延びる。検出部分での平面形は長方形、断面形は浅い皿状を呈する。南北辺1.55m以上、東西辺1.5m、深さ0.1mを測る。器種不明の小片数点が出土しているが、時期確定は困難である。

SK a 65

I-16区 (X=143.047、Y=51.979付近) で検出した土坑である。平面



第143図 SDa36 断面図

形は細長い隅丸方形、断面形は皿状を呈する。長辺約1.5m、短辺約0.4m、深さ0.12mを測る。器種不明の小片10余点が出土しているが、時期確定は困難である。

S K a 66

I-16区 (X=143.067、Y=52.064付近) で検出した土坑である。弥生時代後期の S D a 23の埋土上面で検出した。南半は空港営業時の排水溝で壊されている。平面形は円形であるとする。径約1.65m、断面形はやや深い皿状を呈し、深さ0.4mを測る。須恵器片を含む器種不明の小片20余点が出土しているが、時期確定は困難である。

S K a 67

I-16区 (X=143.065、Y=52.054付近) で検出した土坑である。平面形は円形、断面形は浅い皿状を呈する。径約0.95m、深さ0.15mを測る。磨滅した器種不明の小片1点が出土しているが、時期確定は困難である。

S K a 68

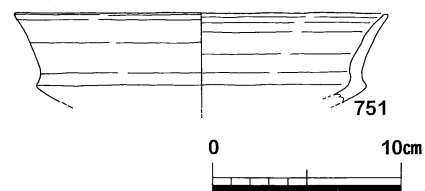
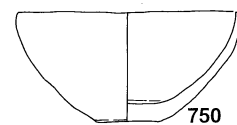
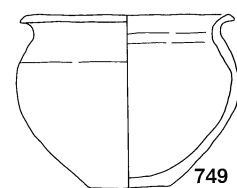
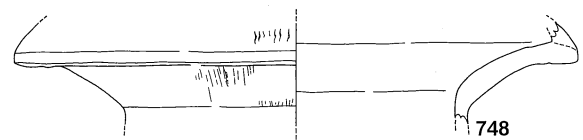
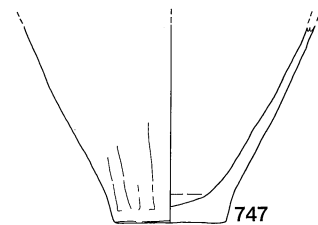
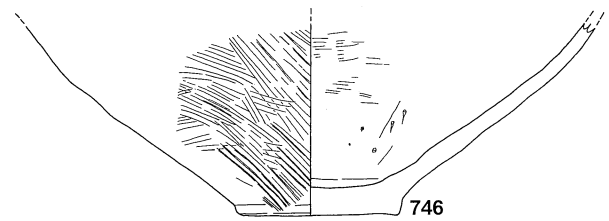
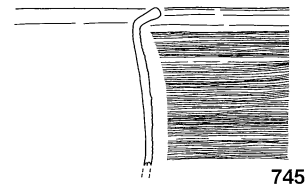
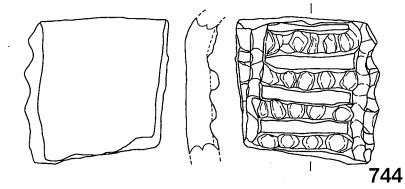
I-16区 (X=143.063、Y=52.062付近) で検出した土坑である。北半は空港営業時の排水溝で壊される。平面形は不定形、深さ0.14mを測る。S X a 06を壊している。遺物は出土しなかった。

S D a 36

I-16区 (X=143.044、Y=51.964付近) で検出した溝状遺構である。幅約1m、深さ0.35mを測る。検出長2mで空港営業時の排水溝より北側には存在しない。遺物は出土しなかった。

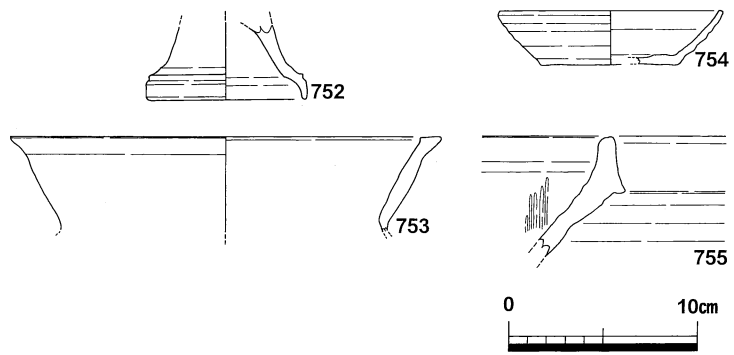
7. 包含層出土の遺物

西地区は逆L字形の調査区であるが、屈曲部付近の東側 (X=143.045、Y=51.900付近) に弥生時代後期の遺物を中心に時期幅のある遺物が、比較的多く含まれる暗灰色極細砂質土層が堆積している。この層は極めて緩やかに落ち込んでいるが、深さは0.5mにも達している。旧河道の可能性も考えられるが、平面形は不定形で規模、



第144図 西地区 包含層①出土遺物実測図

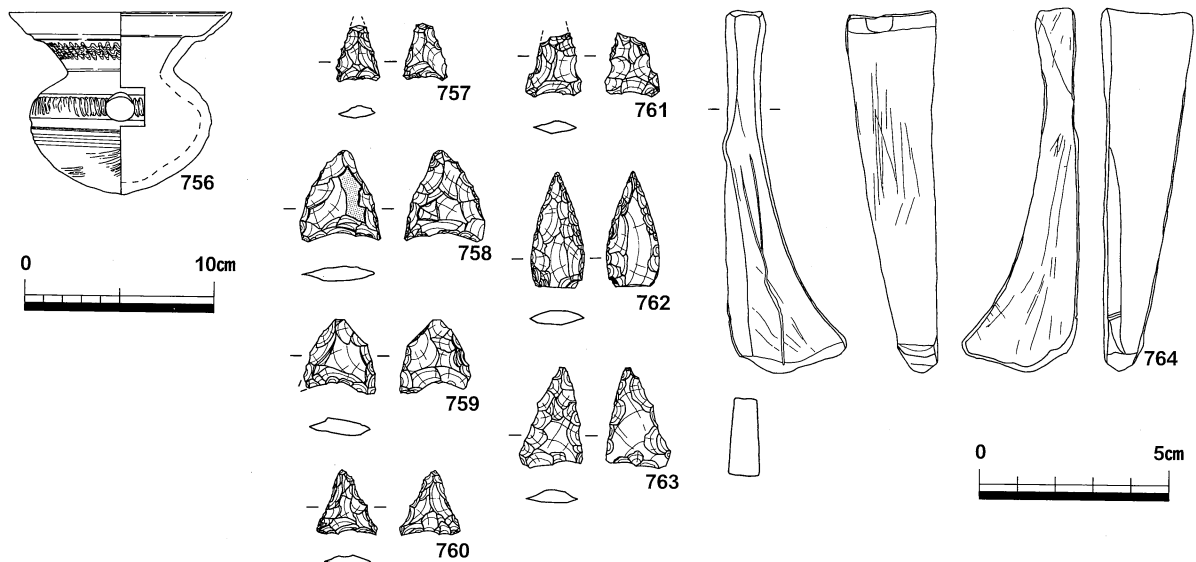
流向なども不明であるため包含層として把握することとした。第144図744～751は、この包含層から出土した遺物である。744は弥生時代前期末～中期初の壺の破片である。水平方向に4条以上の粘土帯を貼り付け、刻み目を施す。縦方向にも2条以上の突帯を付している。745は弥生土器甕である。如意状口縁で外面は櫛描きの多条沈線である。746、747は弥生土器底部。748は弥生土器の二重口縁の壺と思われる。頸部から大きく外反したのち内側に傾く形態、全般に磨滅するが口縁部外面に縦方向の波状文風の沈線およびハケの痕跡が見られる。749は小形の甕である。平底、球状の体部、明瞭な稜をもたず緩やかに外反する口縁部をもつ。750は弥生土器鉢である。平底、やや内湾気味に立ち上がり端部は尖り気味におさめている。751は弥生土器高杯か鉢である。下川津B類土器である。



第145図 西地区 包含層②出土遺物実測図

第145図752～755は I-16区の遺構面の土層に堆積する灰白色砂質土層から出土した遺物実測図である。752は須恵器高杯である。割れ面の状況から長方形の透かし孔を3方にもつ。脚端部は丸くおさめ端部上側に凸帯をつくる。753は須恵器甕、口縁端部を尖り気味に外側に摘み出し水平方向の平坦面をつくっている。754は土師器杯、755は備前焼のスリ鉢である。

第146図756～764は I-22区での上面精査時に出土した遺物、出土位置不明の遺物の実測図である。756は須恵器はそうである。遺構検出作業中にはほぼ完形で出土した。出土範囲は I-22区の南端から S H a 08 までの範囲内である。器高9.5cmの小型のもので口縁部は逆八字形に外上方にのび段をなしてさらに外上方にのびる。口縁部の径は体部の最大径よりも大である。口縁部下段には波状文が施される。体部は球形に近く最大径は体部1/2付近にある。体部外面には上下2本の凹線によって囲まれた刻み目の文様帯

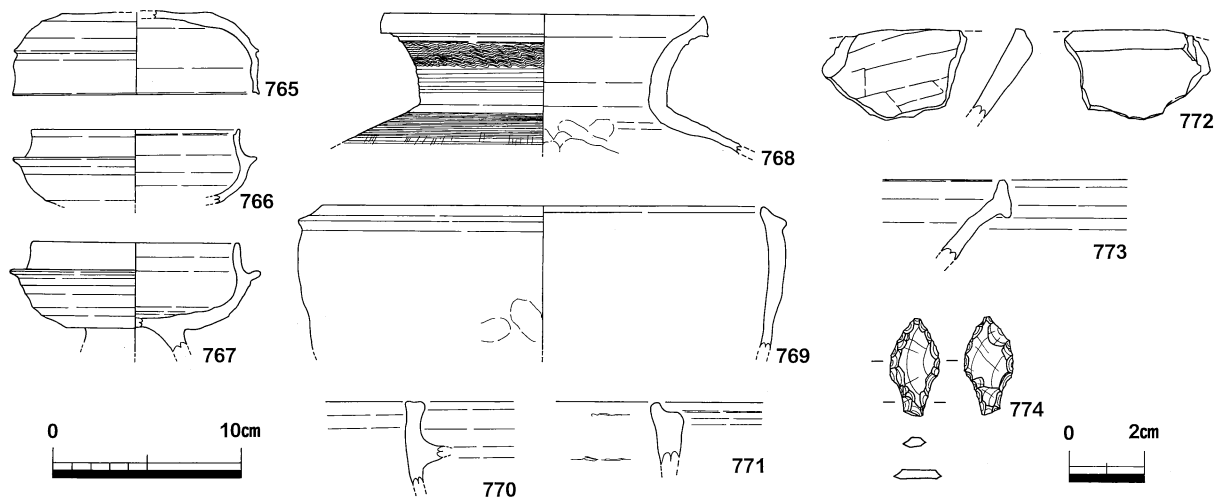


第146図 西地区 上面精査中出土遺物実測図 (その1)

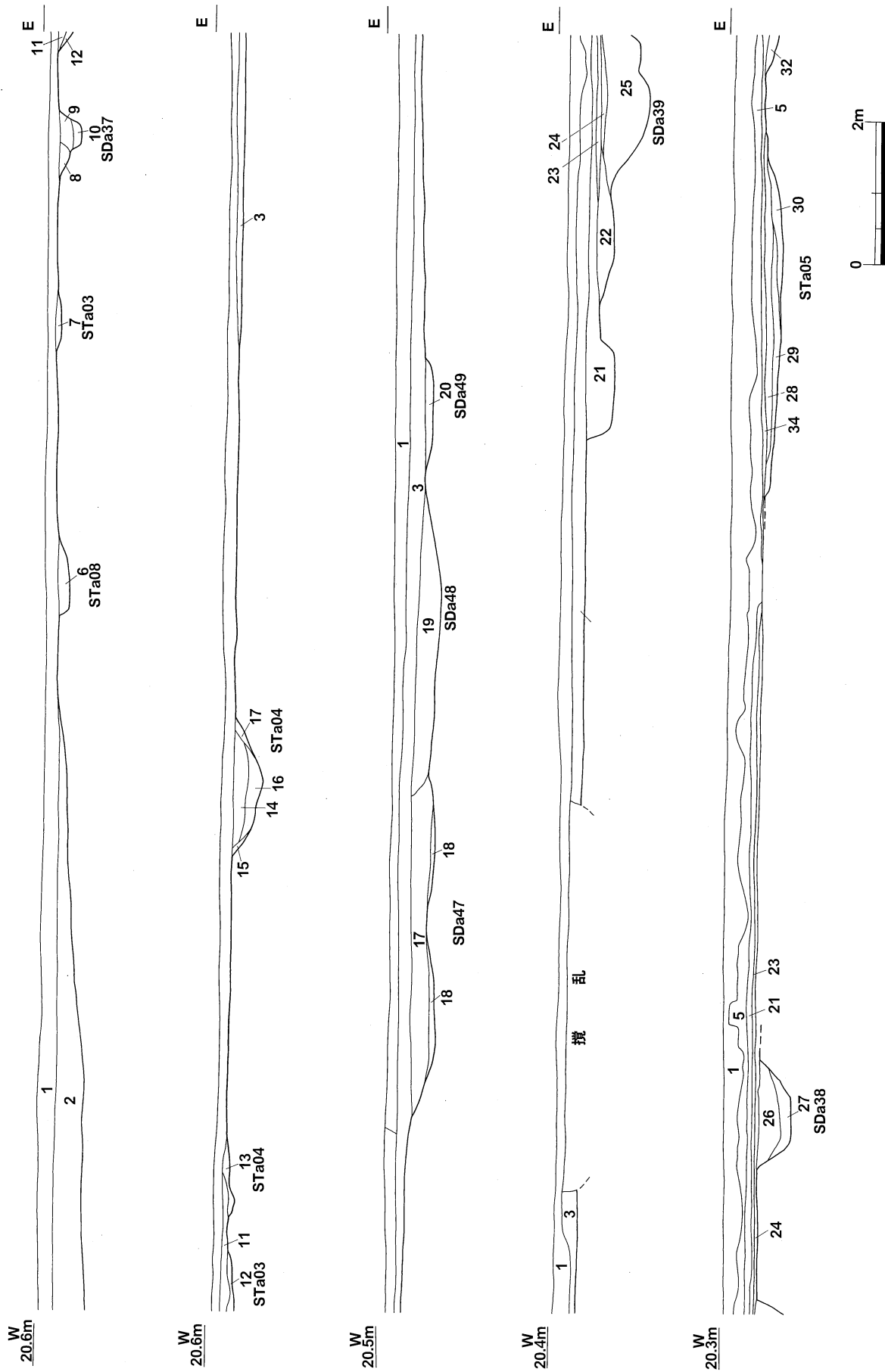


があり、この下部にカキ目が施されている。757～763はサヌカイト製の打製石鏃である。761はアメリカ式石鏃のように両側縁の基部付近に抉りが見られる。764は砥石かと思われる。長辺四面に磨滅が見られる。

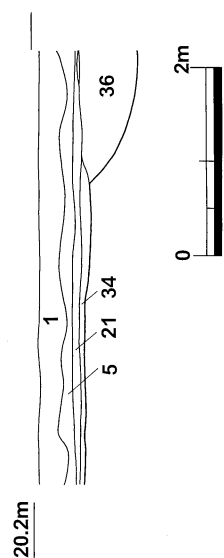
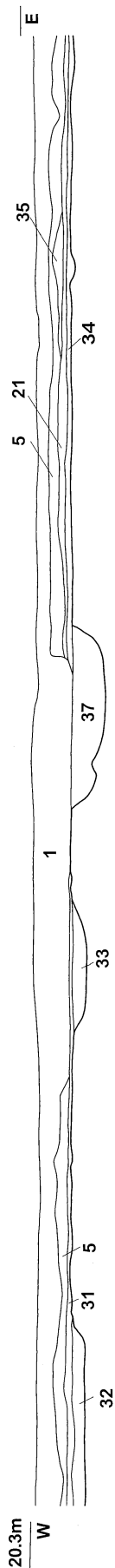
第147図765～774はI-14～16区での上面精査時に出土した遺物、出土位置不明の遺物実測図である。765は須恵器蓋である。小片のためつまみの有無は分からない。766は須恵器杯か高杯である。立ち上がり端面は著しく内傾し、内面に段を構成する。口径11cmで小型である。767は有蓋高杯である。口縁端部は丸くおさめている。768は須恵器甕である。口縁端部は上下に摘み出し稜をもつ。口縁下に小さな断面三角形の突帯を付し、以下頸部は波状文、カキ目が見られる。体部は格子目叩きの後上半部はカキ目が見られる。769～771は土師器土釜である。770は鋳部上側で口縁が外側に開く形態のものである。772は土師器こね鉢である。小片であるが片口である。内面はハケに近い板ナデが施される。773は東播系こね鉢の小片、774は凸基式の石鏃である。



第147図 西地区 上面精査中出土遺物実測図（その2）



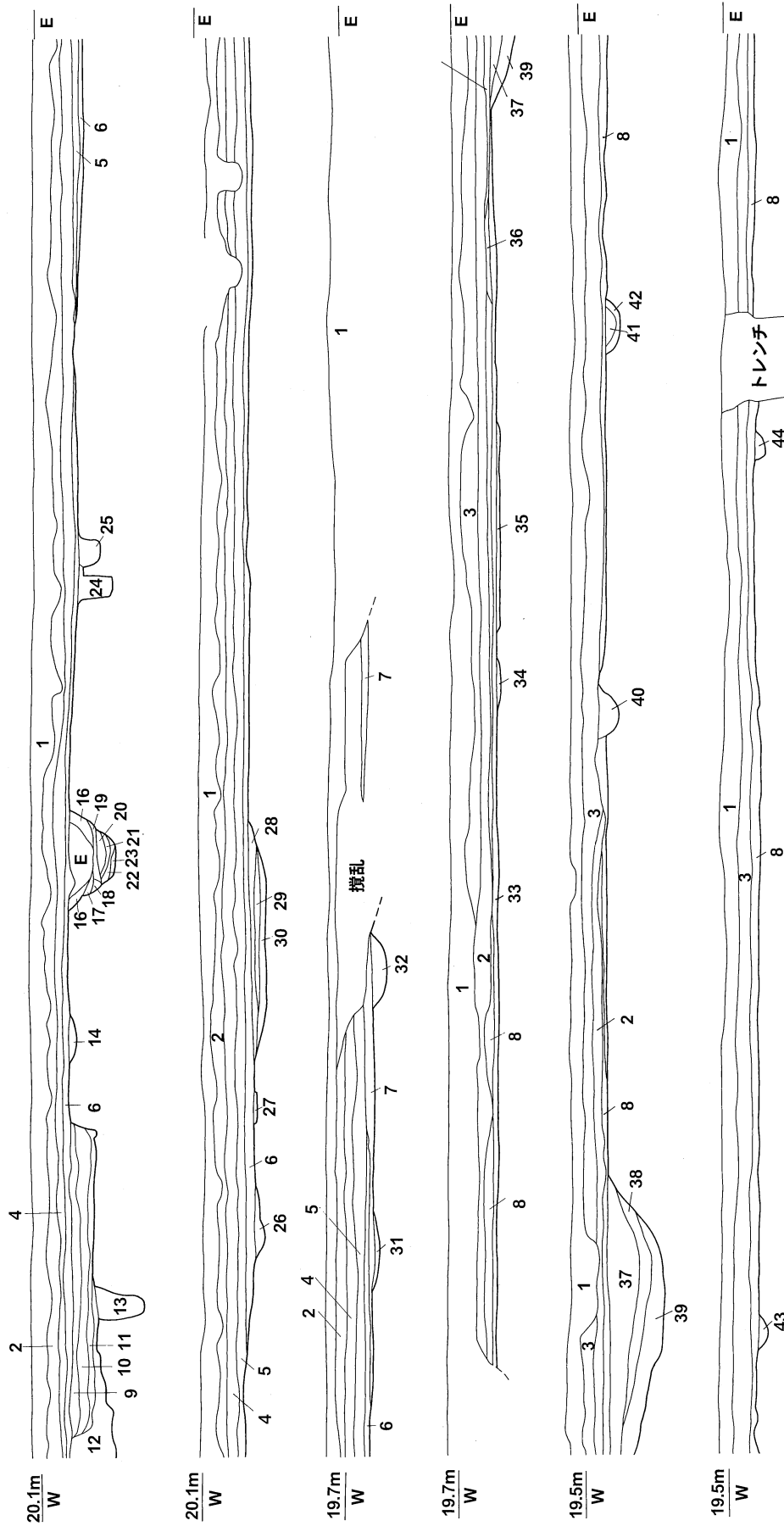
第148図 南地区北壁土層断面図 (その1)



(第148、149図)

第149図 南地区北壁土層断面図 (その2)

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 盛土層</li> <li>2. 溜池埋土</li> <li>3. 灰黄色粘質シルト (旧床土)</li> <li>4. 攪乱</li> <li>5. 暗灰色砂混粘質シルト (旧耕土)</li> <li>6. (S T a 08)</li> <li>7. 茶褐色粘質シルト (黄色・橙色土ブロック多く含む S T a 03)</li> <li>8. 濁灰褐色土</li> <li>9. 淡褐色砂質シルト (乳灰色土ブロック多く含む S D a 37)</li> <li>10. 暗褐色粘質シルト (かたくしまる S D a 37)</li> <li>11. 暗茶褐色砂質シルト (黄橙色土ブロック混)</li> <li>12. 濁灰黄褐色砂質シルト (褐色土ブロック混 S T a 03)</li> <li>13. 暗黄褐色砂質シルト (細かな褐色土ブロック及びびMn粒含む S T a 04)</li> <li>14. 茶褐色粘質シルト (黄色土ブロック少量混 S T a 04)</li> <li>15. 濁黄褐色砂質シルト (褐色土ブロック混)</li> <li>16. 黒褐色粘質シルト (1~5m大の礫を混 S T a 04)</li> <li>17. 淡黄灰褐色礫混中砂 (S D a 47)</li> <li>18. 淡灰色砂礫 (0.5~2cm大の礫 S D a 47)</li> <li>19. 淡灰黄色砂質シルト (S D a 48)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>20. 濁灰黄色砂質シルト (S D a 49)</li> <li>21. 黄橙色砂質シルト (床土)</li> <li>22. 濁灰黄色シルト混細砂</li> <li>23. 灰褐色砂質シルト</li> <li>24. 暗褐色粘質シルト</li> <li>25. 暗褐色粘質シルト (S D a 39)</li> <li>26. 乳灰褐色中砂ブロック混砂質シルト (S D a 38)</li> <li>27. 乳灰黄白色中~粗砂 (S D a 38)</li> <li>28. 黒茶褐色粘質シルト (S T a 05)</li> <li>29. 淡褐色砂質シルト (S T a 05)</li> <li>30. 淡黄褐色中砂 (S T a 05)</li> <li>31. 暗褐色粘質シルト</li> <li>32. 黒茶褐色粘質シルト (S T a 05)</li> <li>33. 暗茶褐色粘質シルト</li> <li>34. 暗褐色粘質シルト (上面にMnの流着)</li> <li>35. 灰黄褐色粘質シルト</li> <li>36. S D a 47、48埋土</li> <li>37. 淡茶褐色粘質シルト (S K a 84)</li> </ul> |
|---|---|



- 1. 盛土層
- 2. 灰白色砂混粘シルト
- 3. 暗灰色粘質シルト
- 4. 床土層
- 5. 灰白色砂混粘質シルト
- 6. 包合層
- 7. 淡灰色シルト
- 8. 黄灰褐色粘質シルト (SHa12)
- 9. 淡灰褐色粘質シルト (SHa12)
- 10. 茶灰色粘質シルト (SHa12)
- 11. 淡灰色粘質シルト (SHa12) (黄色土ブロック多量含)
- 12. 灰黑色粘質シルト (黄灰色土層をラミナ状に含)
- 13. 暗灰褐色粘質シルト (中~粗砂多)
- 14. 暗灰色粘質シルト
- 15. 茶灰色粘質シルト (上位にFe含 15~22層はSDa41)
- 16. 灰褐色粘質シルト (ベースブロック混)
- 17. 淡灰色砂混粘質シルト
- 18. 暗灰色粘質シルト
- 19. 淡灰褐色粘質シルト (SHa12)
- 20. 灰黑色粘質シルト (灰黄砂をブロック状に含)
- 21. 乳灰色中砂 (黄色土ブロック多量含)
- 22. 灰黑色粘質シルト
- 23. 淡灰黄色中~粗砂 (褐色土ブロック混)
- 24. 暗茶褐色粘質シルト
- 25. 淡茶灰色粘質シルト
- 26. 礫混灰色砂混粘質シルト (SDa45)
- 27. 灰褐色砂混粘質土
- 28. 淡灰褐色粘質シルト (SDa52上層)
- 29. 乳灰黄色中~粗砂 (SDa52中層)
- 30. 暗褐色中~粗砂 (SDa52下層)
- 31. 淡灰色砂
- 32. 溝状遺構 (埋土不明)
- 33. 不明
- 34. 灰色粘質シルト
- 35. 乳灰褐色中砂ブロック混粘質シルト (SDa53)
- 36. 淡褐色白色砂質シルト
- 37. 淡灰褐色粘質シルト (SDa46上層)
- 38. 暗灰色粘質シルト (SDa46中層)
- 39. 乳灰黄色細~中砂 (SDa46下層)
- 40. 灰色砂混粘質シルト (SDa56)
- 41. 乳灰白色粘質シルト (SDa54)
- 42. 灰黄色粘質シルト (SDa54)
- 43. 淡灰褐色粘質シルト (黄色土ブロック混)
- 44. 灰褐色粘質シルト

第150図 南地区北壁土層断面図 (その3)

## 第4節 南地区の調査

### 1. 土層

南地区は、空港南辺の東西に細長い調査区でI-10、11、17区にあたる。I-10、11区が東西にのび、I-10区の南に接してI-17区が所在するという位置関係である。東端の座標はX=143.122、Y=52.351、西端はX=143.075、Y=52.125でI-10、17区の南北幅は約7.5~13.5m、I-11区の南北幅は約7.5mを測る。

第148~150図は南地区の調査区北壁の土層断面図である。いずれも地表から昭和19年飛行場造成時の盛り土層、昭和19年以前の水田耕作土層、床土層の順に堆積し、この直下に遺構面が現れるが、I-10区東端付近では暗褐色粘質シルト層が2~5cmの層厚で堆積し、以下の淡黄灰色砂層が地山である。暗褐色粘質シルト層の上面で弥生時代後期の遺構が検出され、除去すると弥生時代前期の遺構が現れることから層の形成年代を推定できる。

淡黄灰色砂層の下層は黄橙色~灰青色粘土層で安定した堆積状況を示している。なお西端付近では一部砂礫層が見られるが、形成要因は不明である。南地区東部では周溝墓群が検出されている。これらは明確な微高地に選地しているわけではなく、薄い包含層が形成されるような微高地とも低地ともいえない地形面に立地していることがわかる。遺構面の標高は西端で20.5m、東端で19.3mである。

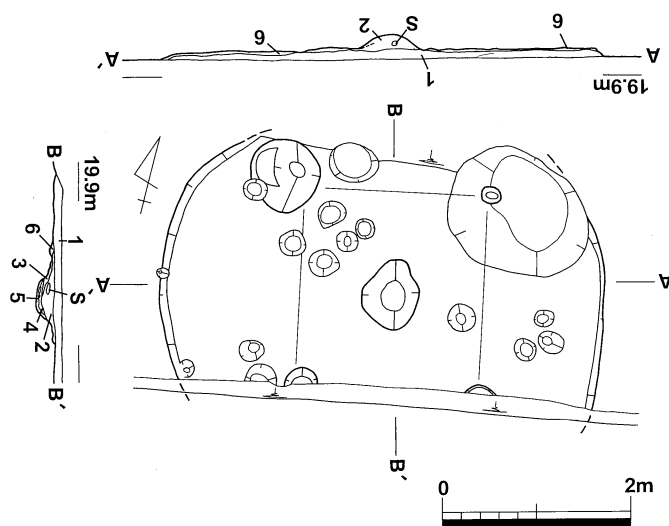
### 2. 遺構・遺物

#### (1) 弥生時代前期の遺構・遺物

##### ① 竪穴住居

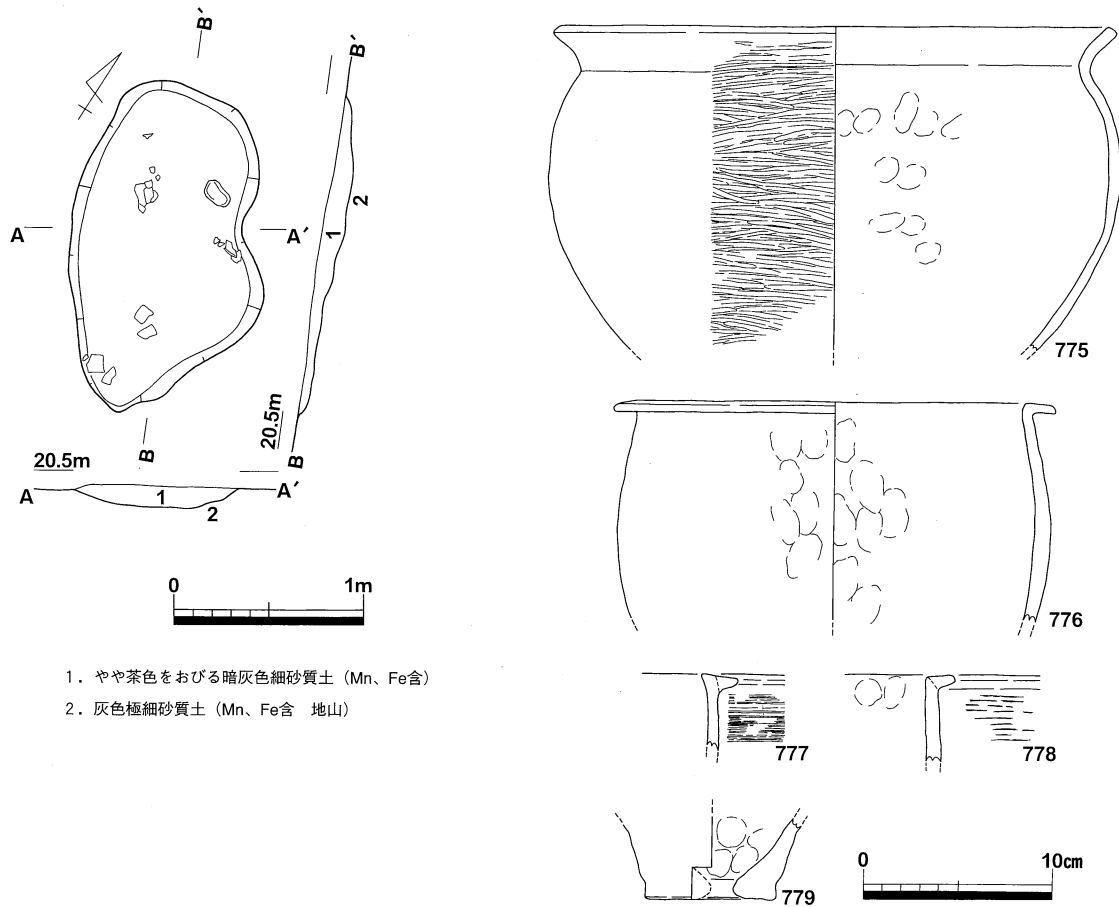
SH a 11

I-10区東端(X=143.096、Y=52.244付近)で検出した竪穴住居である。径約4.8mほどの円形の掘り方の中央付近に炉跡を検出している。炉跡は平面形は不整円形、断面形は浅い皿状を呈し、埋土に焼土を含む。SH a 11に伴うと考えられる柱穴は4穴で、4本主柱の構造と考えられる。なお、北東の柱穴は柱材抜き取りによって生じたと思われる土坑を伴っている。SH a 11に伴う遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが、調査担当者は、検出時の様相などから弥生時代前期に属する遺構と判断している。



1. 黒褐色粘質シルト (焼土、地山ブロック少量混)
2. 黒灰色粘質シルト (炭、焼土ブロックが多い)
3. 茶灰色砂質シルト
4. 炭化物和焼土がブロック状にまじる
5. 淡茶灰色中砂 (炭が少量まじる)
6. 濁黄灰色砂質シルト (Mn粒多)

第151図 SH a 11 平・断面図



第152図 SK a 69 平・断面図、出土遺物実測図

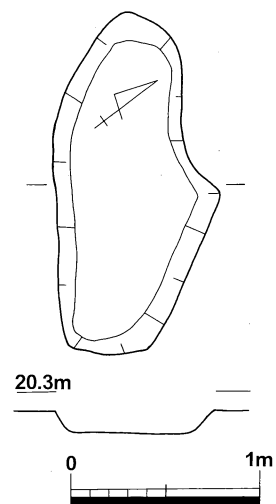
② 土坑

SK a 69

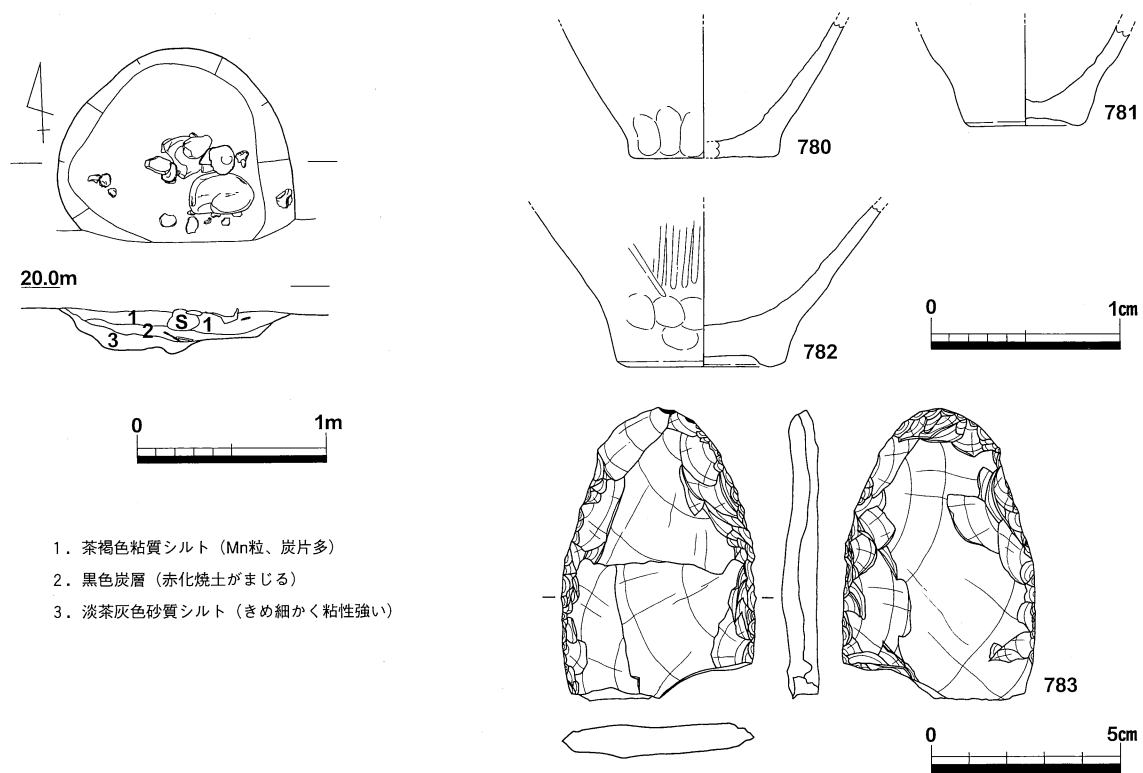
I-17区 (X=143.077、Y=52.162付近) で検出した土坑である。平面形は不整形、断面形は浅い皿状を呈する。長辺1.8m、短辺1m、深さ0.1mほどの規模である。弥生時代前期の遺物が若干量出土している。775~778は弥生時代前期の甕である。775は器高に対して口径の大きいずんぐりとした形態の甕である。外面に横方向のヘラ磨きが密に施されている。776は如意状口縁の甕である。口縁付近はかなり歪んでおり、端部が下方に垂れ下がるような形状である。777、778は逆L字状口縁である。磨滅するが櫛描きと思われる多条沈線が認められる。779は甑の底部である。底部中央付近から少し離れた位置に孔が一つ空けられている。

SK a 70

I-17区 (X=143.081、Y=52.179付近) で検出した土坑である。平面形は不整形、断面形は浅い皿状を呈する。長辺1.8m、短辺0.85m、深さ0.1mほどの規模である。図化できる遺物は無かったが、若干量の土器片が出土している。砂粒を多く含む胎土から弥生時代前期の土器片と考えられ、土坑の埋土もSK a 69などの弥生時代前期のものに類似すること



第153図 SK a 70平・断面図



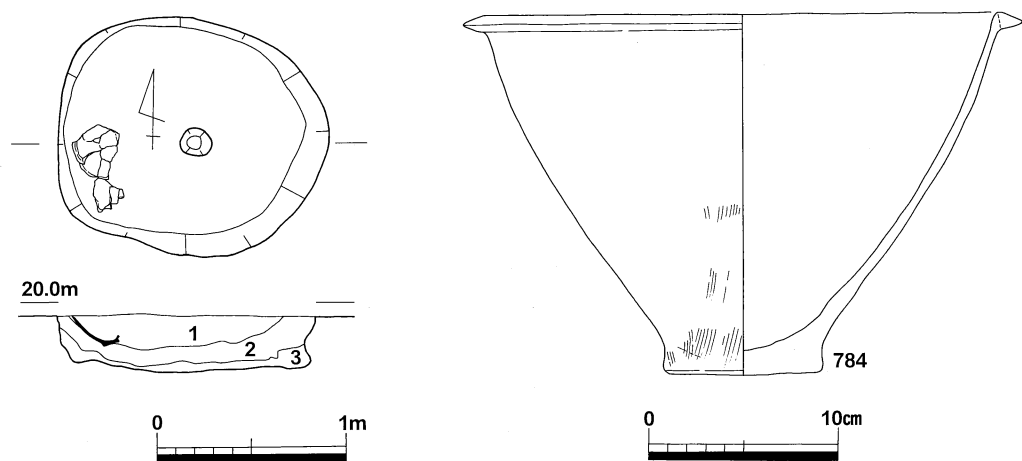
1. 茶褐色粘質シルト (Mn粒、炭片多)
2. 黒色炭層 (赤化焼土がまじる)
3. 淡茶灰色砂質シルト (きめ細かく粘性強い)

第154図 SK a 71 平・断面図、出土遺物実測図

から弥生時代前期の土坑と考えられる。

SK a 71

I-10区 (X=143.094、Y=52.211付近) で検出した土坑である。南側は空港供用時の排水溝に壊されているが、径1.2mほどの円形を呈し、断面形は深さ0.2mほどの皿状を呈する。コンテナ1/5箱ほどの遺物片が出土しているが、いずれも弥生時代前期の遺物と考えられる。780~782は底部である。782は外縁



1. 茶褐色砂質シルト (Mn粒、焼土を少量含)
2. 暗茶褐色砂質シルト (黄色粘土ブロック少量含)
3. 淡茶褐色中砂 (ベースの砂層が混入)

第155図 SK a 72 平・断面図、出土遺物実測図

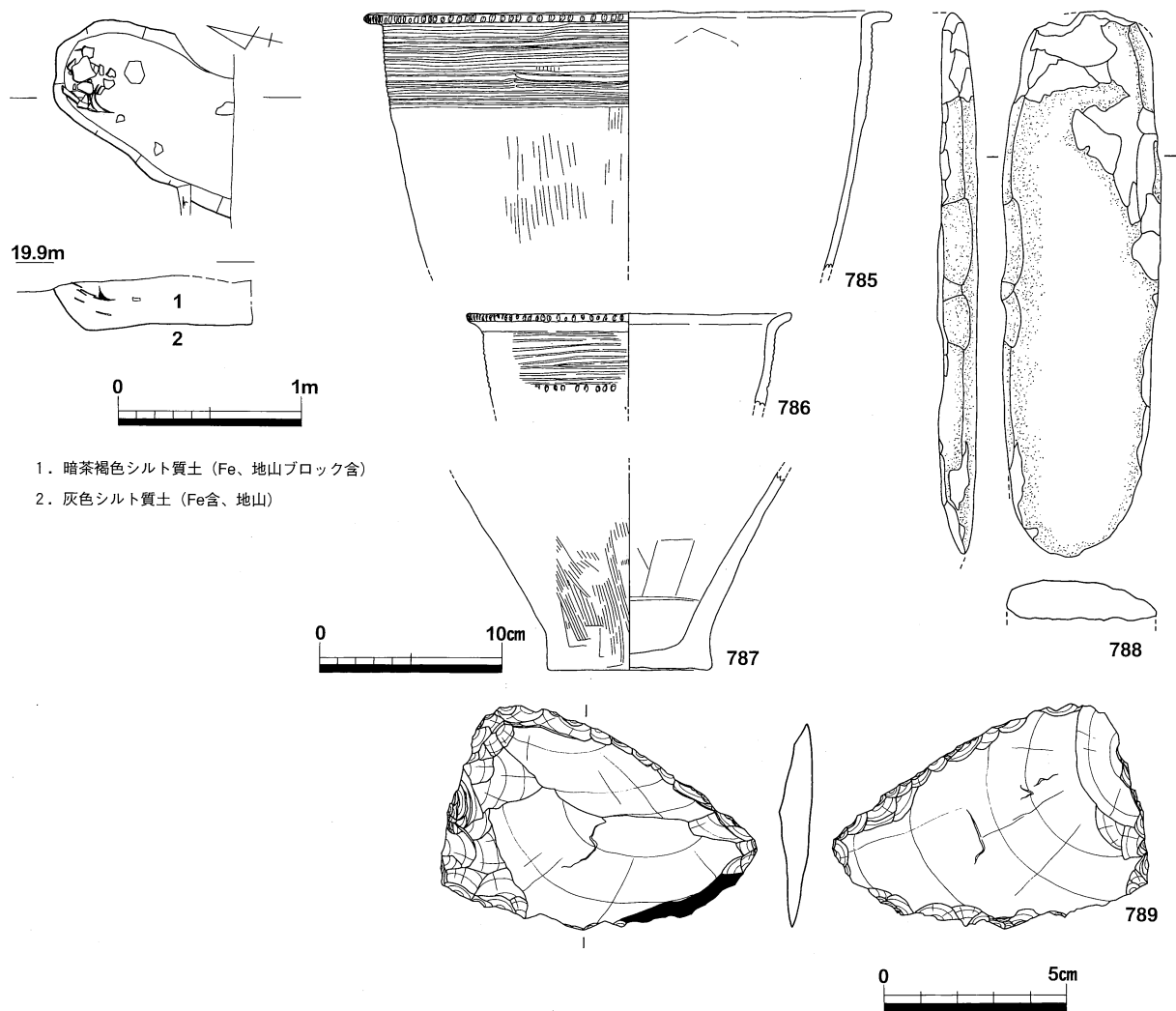
に高台があるような上げ底状を呈する。783は打製石斧である。刃部は破損している。

S K a 72

I-10区 (X=143.092、Y=52.220付近) で検出した土坑である。平面形は円形、断面形は垂直に近い掘り方で底部は平坦な長方形状を呈する。径1.4m、深さ0.3mを測る。コンテナ1/8箱ほどの遺物片が出土している。784は弥生時代前期の甕である。逆L字状口縁で器高より口径の方が大きい形状である。全体の5/8程度遺存している。

S K a 73

I-17区 (X=143.086、Y=52.226付近) で検出した土坑である。南側は調査区外に延びるため平面形は不明であるが、検出範囲から細長い楕円形が想定される。断面形は逆台形状を呈し、深さ0.25mを測る。コンテナ1/4箱ほどの遺物片が出土している。785、786は弥生時代前期の甕口縁部である。如意状口縁の端部にO字状の刻み目があり、以下にヘラ描きの多条沈線、786は以下にO字状の列点文が施される。788は緑泥片岩製の柱状片刃石斧の破片である。縦方向に剥離し片側のみ遺存する。一側縁に2ヶ所の抉りが認められる。



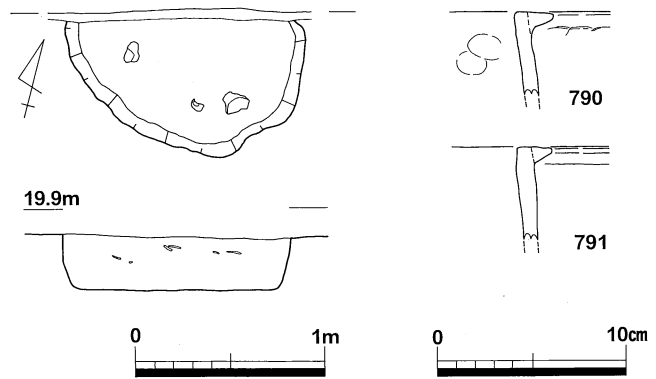
第156図 S K a 73 平・断面図、出土遺物実測図



789は背部も押圧剥離により整形しているがスクレイパーとして報告する。

S K a 74

I-17区 (X=143.093、Y=52.238付近)で検出した土坑である。北側はI-10区との境の未掘部分になり形状不明であるが、不整円形と想定される。断面は垂直に近い掘り方と平坦な底面で長形状を呈する。径1.3m、深さ0.28mを測る。若干量の土器片が出土したが、いずれも弥生時代前期に所属すると思われる。790、791は断面三角形の逆L字状口縁の甕である。



1. 黒褐色粘質土

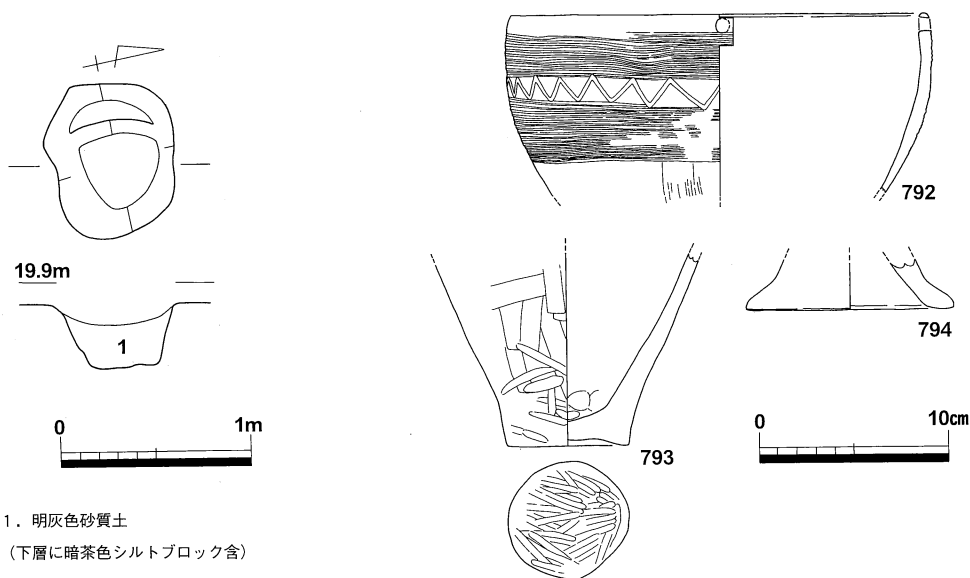
第157図 S K a 74 平・断面図、出土遺物実測図

S K a 75

I-17区 (X=143.091、Y=52.238付近)で検出した土坑である。平面形は楕円形、断面はU字状を呈する。長径0.8m、短径0.6m、深さ0.3mを測る。若干量の土器片が出土している。792は甕である。口縁端部は丸く収めており、端部直下に有孔が一つ認められる。複線の山形文の上下に櫛描きの多条沈線が施される。794は接地面が平坦をなすことから脚ではないかと考えた。

S K a 76

I-11区 (X=143.099、Y=52.252付近)で検出した落ち込みである。北側は空港供用時の排水溝に、東側はS D a 41に壊されており本来の形状は不明であるが排水溝以北には延びないため土坑の可能性が最も高い。コンテナ1/4箱ほどの弥生時代前期の遺物片が出土している。795、796は壺の口縁部の小片である。795は頸部の屈曲部にヘラ描きによる9条以上の沈線が引かれる。797は甕体部の小片。櫛描きの多条沈線とその下に水滴を逆にしたような形状の列点文が施される。798~800は如意状口縁の甕。798、



1. 明灰色砂質土  
(下層に暗茶色シルトブロック含)

第158図 S K a 75 平・断面図、出土遺物実測図

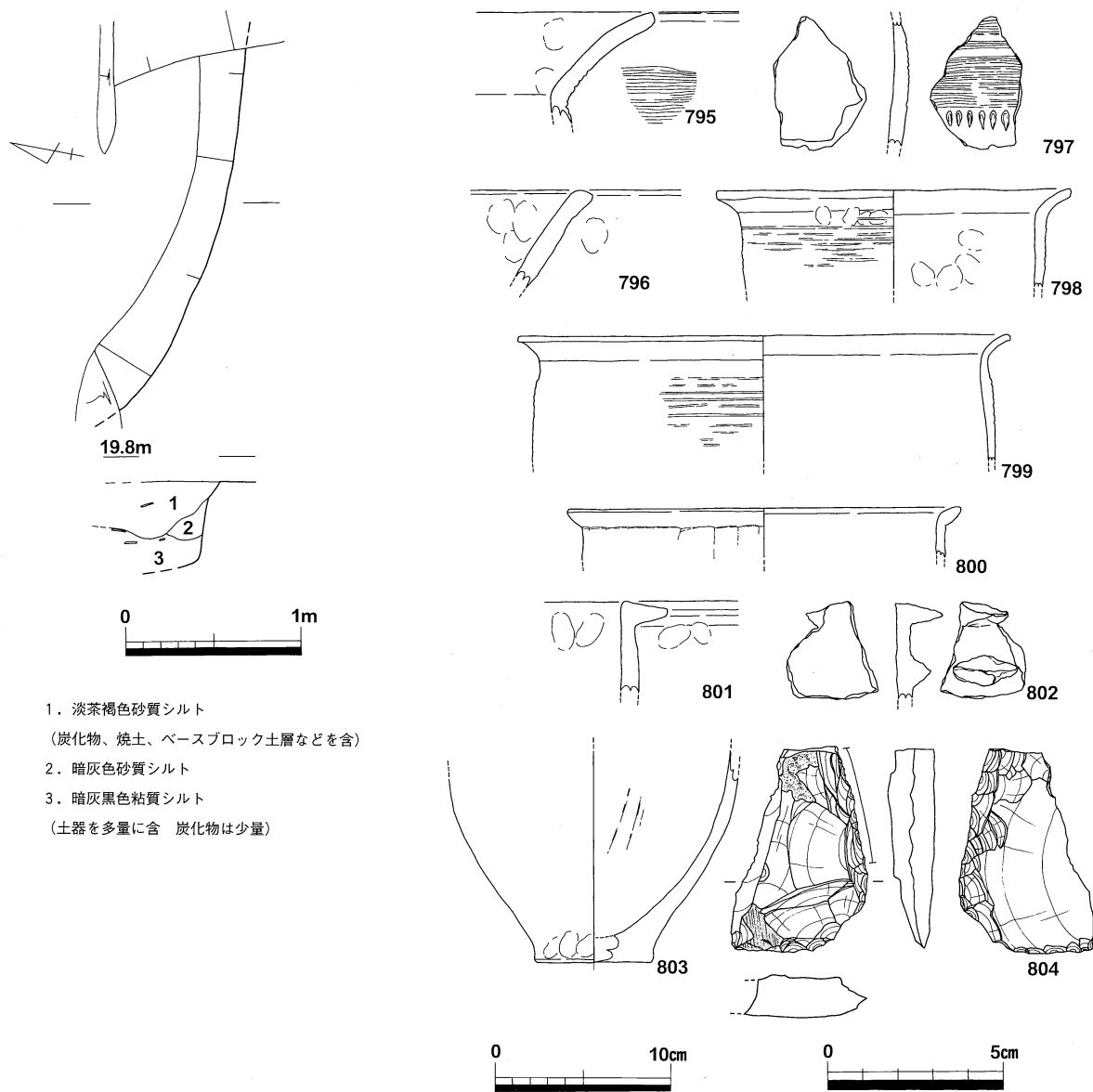
799には多条沈線が痕跡的に認められる。801、802は逆L字状口縁の甕、802は口縁直下に断面三角形の突起を付している。磨滅する。803は壺の底部、804は打製石斧の刃部の破片である。刃部先端部の片面に使用痕（磨滅および擦痕）が認められる。

(2) 弥生時代後期～古墳時代前期

① 竪穴住居

S H a 12

I-11区 (X=143.098、Y=52.248付近) で検出した方形の竪穴住居である。北半分は空港供用時の排水溝に壊されている。東側でS D a 42を壊している。一辺2.9mほどの方形で検出面からの深さは0.24mを測る。焼失家屋と考えられ、焼土、炭化材が見られ、中央寄りで土器片の集積が認められた。3者の層位関係は下から土器片→炭化材→焼土の順であった。柱穴は複数検出されたが、4本主柱であったと推



- 1. 淡茶褐色砂質シルト  
(炭化物、焼土、ベースブロック土層などを含)
- 2. 暗灰色砂質シルト
- 3. 暗灰黒色粘質シルト  
(土器を多量に含 炭化物は少量)

第159図 S K a 76 平・断面図、出土遺物実測図

定され、南西は立て替えが考えられる。30点余りの土器細片が出土しているが、S H a 12の時期を特定するものは無い。切り合い関係から当該期に属する可能性が高い。805はS H a 12出土の弥生時代前期の甕である。混入したものであろう。

#### 竪穴住居の可能性のある柱穴配置

I-11区 (X=143.104、Y=52.282付近) には同一埋土の柱穴が五角形もしくは円形に並んでいる。遺物は出土しなかったが埋土から当該期の遺構である可能性が考えられ、積極的に竪穴住居の残存である可能性を指摘したい。

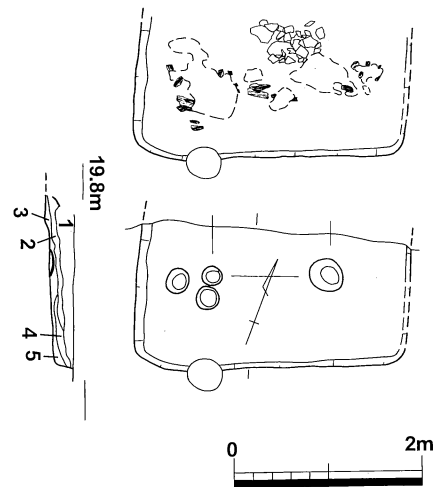
#### ② 土坑

##### S K a 77

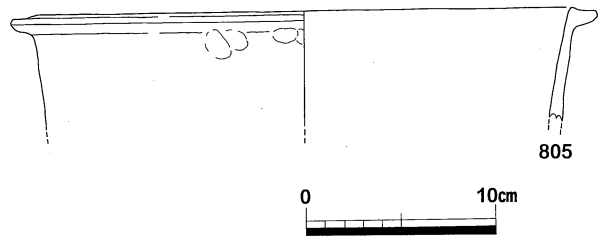
I-11区 (X=143.115、Y=52.358付近) で検出した土坑である。西辺が上底、東辺が下底となる台形の平面形で、断面形も逆台形状を呈する。上底約1m、下底約1.4m、台形の高さにあたる部分約1.7m、深さ0.53mを測る。底面から上面にかけて土器片、礫が多数出土し、遺物量はコンテナ10箱に及ぶ。これらは層位的に4面に分けられ、それぞれ廃棄の単位を示すものと

考えられる。なお、S K a 77は形状より井戸の可能性もあるが、底面は湧水層に達していないことから、当初より土器廃棄を目的として掘削された土坑と考えられる。

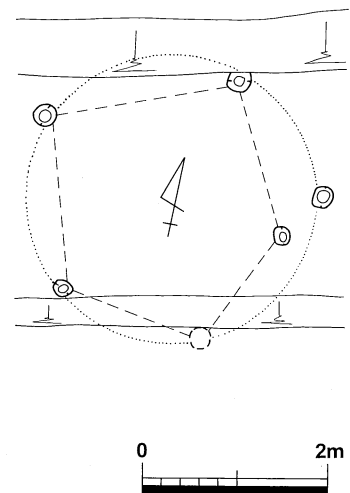
第163~168図はS K a 77から出土した遺物実測図で、第163図が4面(最も下位)出土、第164図が3面出土、第165、166図が2面出土、167図が1面(最上面)出土、168図は出土層位不明であるが、出土年月日から1面出土と判明する遺物である。806、807は下川津B類の壺である。いずれもほぼ完形で出土した。わずかに内傾する頸部から斜め上方に屈曲する短い口縁をもつ。端部は806は四角におさめ、807は上方にわずかに摘み上げている。807の体部の最大径は上部1/3付近にあり、底部は明瞭な稜をもたない丸底化の進んだ平底である。808は形態と調整から甕体部上半部の破片である。最大径部のやや上側に線刻画が描かれている。下方の4本が脚、上側は体を表現しているものと思われる。809、810は下川津B類の典型的な甕である。811は球状の体部からわずかに外反させた口縁部をもつ鉢である。端部は丸くおさめている。体部内外面はヘラ磨きされているが、外面は底部から施した結



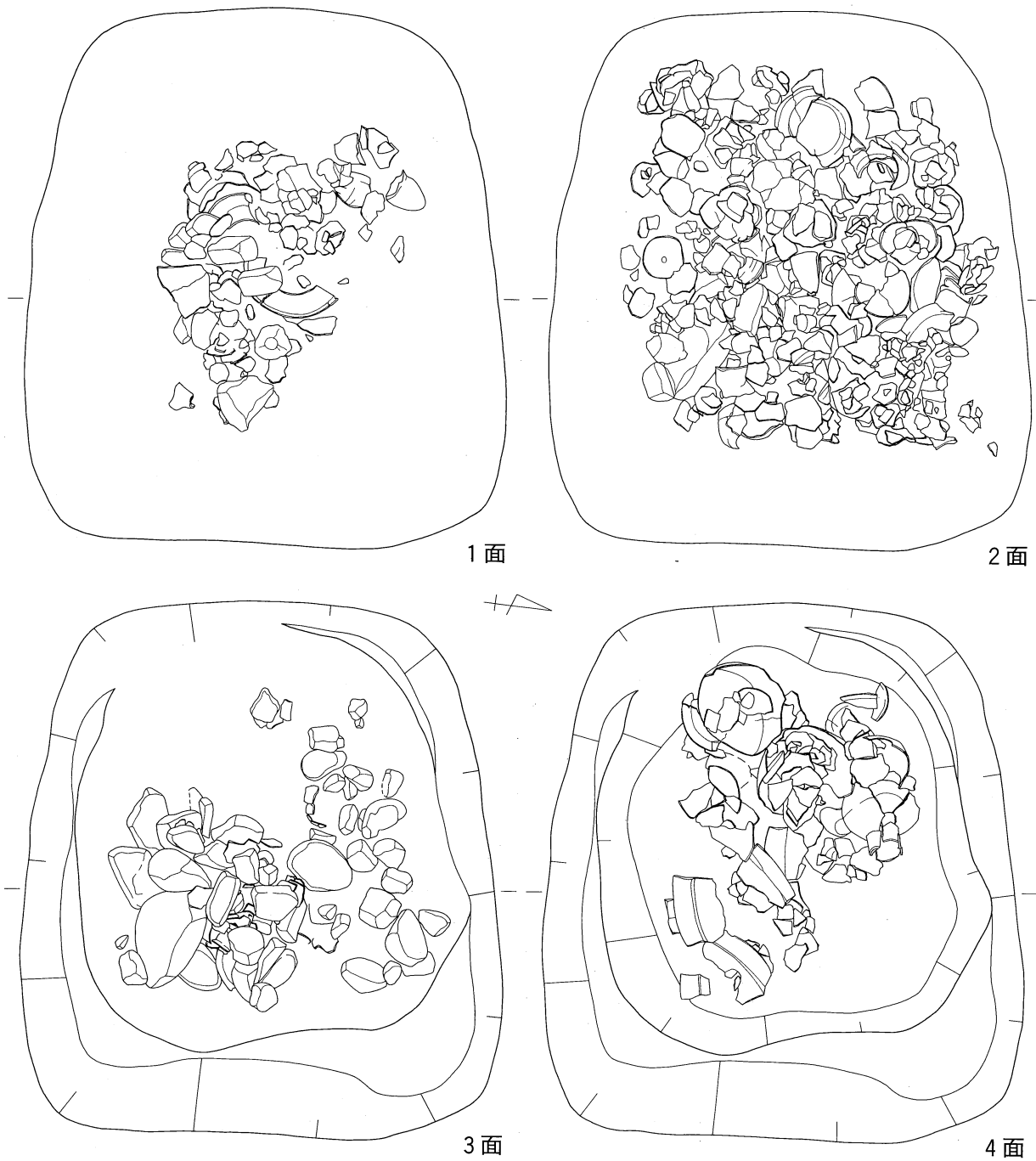
1. 淡茶灰色粘質シルト (ベースブロックを多量に含)
2. 暗茶灰色砂質シルト (焼土、炭化物を含)
3. 灰色粘質シルト
4. 暗灰色砂質シルト (ベースブロックを少量含)
5. 暗紫褐色粘質シルト (炭化材、炭化物、焼土を多量に含)



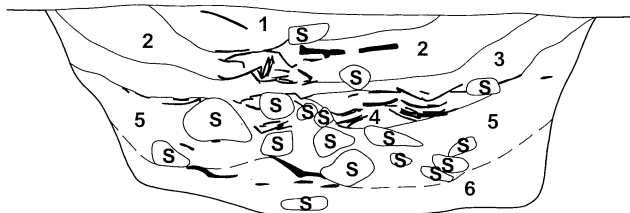
第160図 S H a 12 平・断面図、出土遺物実測図



第161図 U-23付近の柱穴平面図



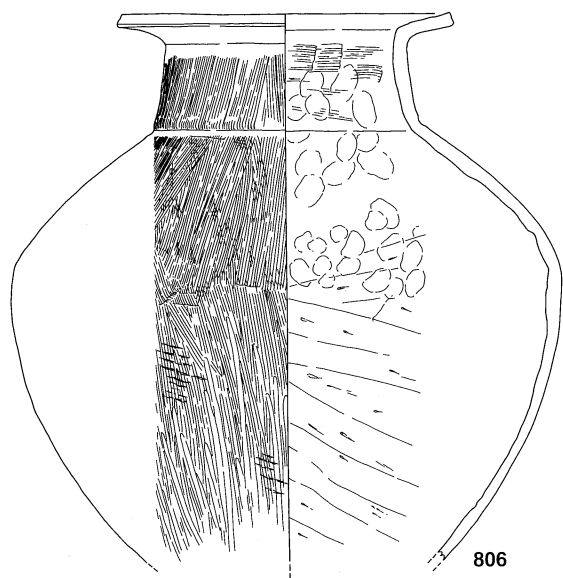
19.2m  
S



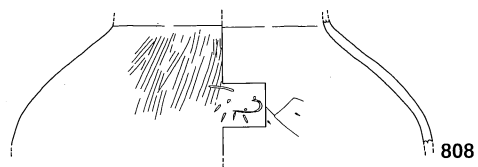
0 50cm

1. 暗灰黒色粘質シルト
2. 灰茶色粘質シルト
3. 暗灰色粘質シルト (灰色砂をラミナ状に含)
4. 暗灰褐色粘質シルト (粘性強い)
5. 淡灰褐色粘質シルト (やや砂っぽい)
6. 暗灰色粘土 (粘性強く、軟弱)

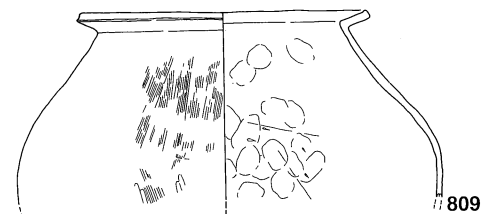
第162図 SK a 77 遺物出土状況図、断面図



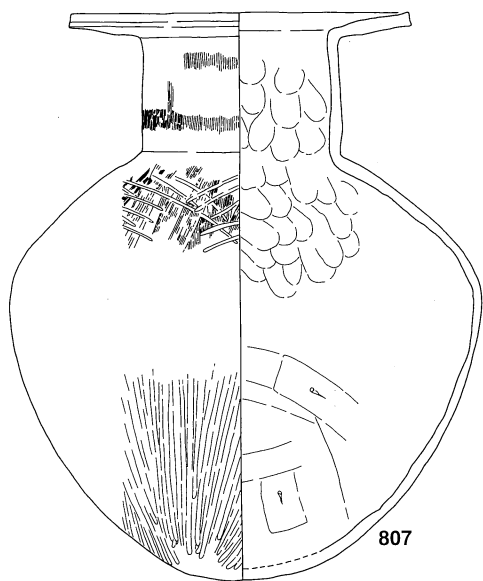
806



808



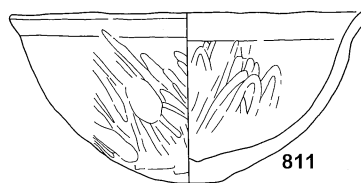
809



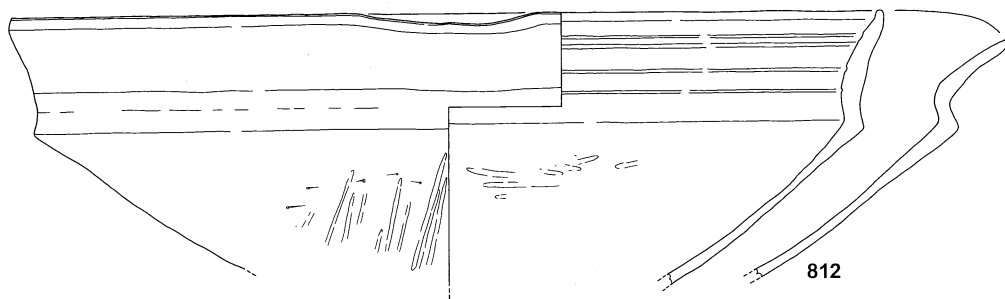
807



810



811



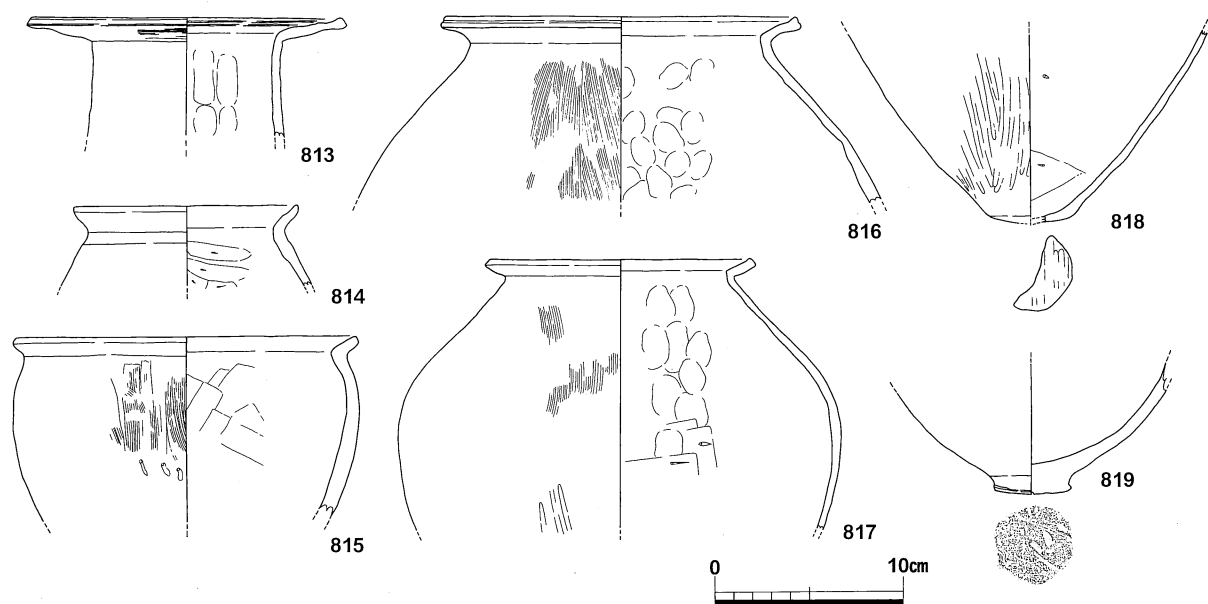
812

第163図 SH a 77 出土遺物実測図 (その1)

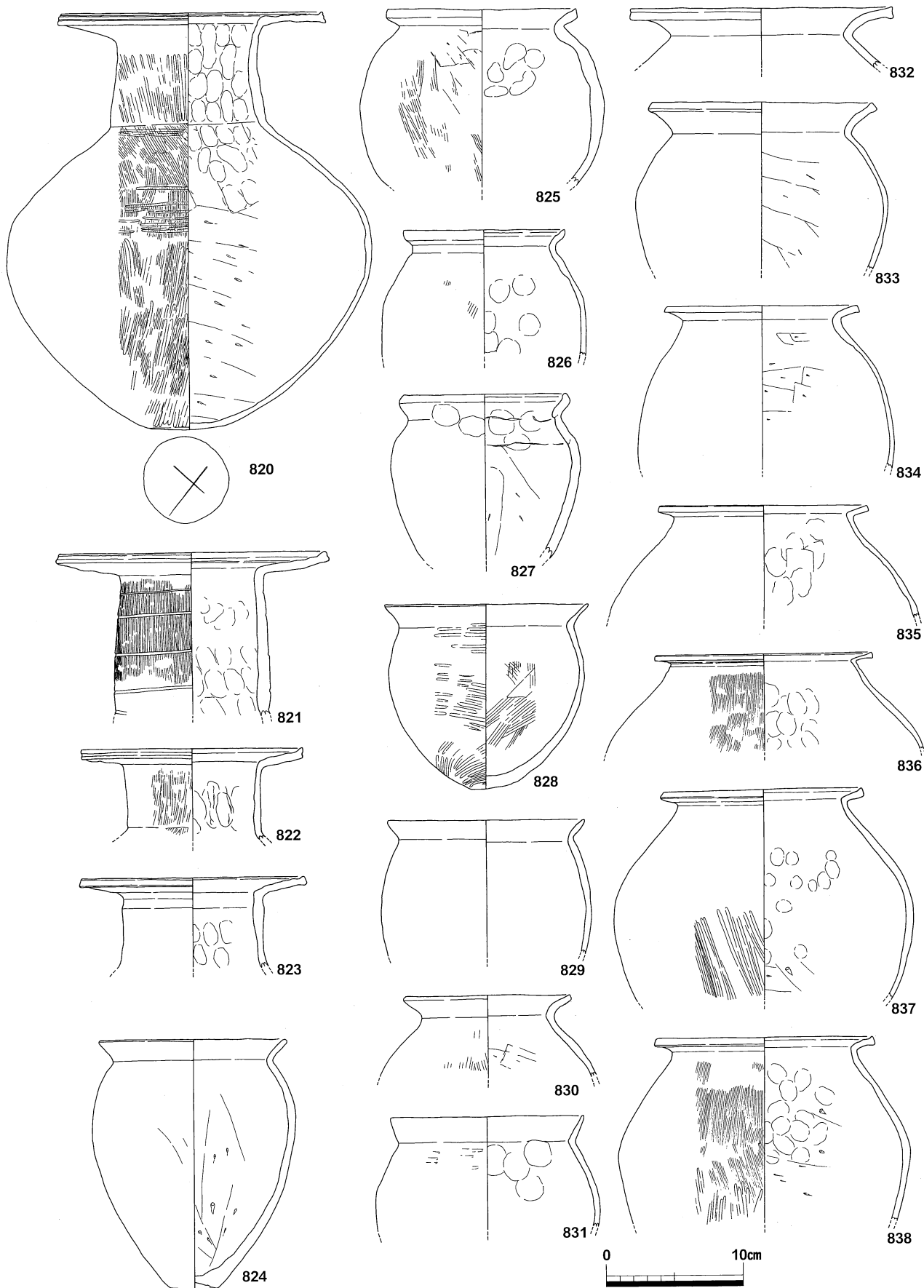
果、不明瞭な平底が形成されている。812は下川津B類の大型の片口鉢である。口縁は垂直方向に立ち上がりやや外湾する。端部は尖り気味におさめている。

第164図813は下川津B類の壺である。直立する頸部から水平方向に屈曲する口縁である。814は甕、明瞭な稜をもたず「く」の字状に屈曲する口縁で、端部は上方に摘み上げ尖らせている。815の甕は、口縁を「く」の字に屈曲させ内面を強く板ナデして整形している。体部内面を板ナデするが、器壁の厚さが不均等である。816～818は典型的な下川津B類の甕である。818の外面には黒色の付着物（煤）が認められる。819は円盤状に突出する平底の底部をもつ鉢である。体部は内湾気味に立ち上がる。底部外面に藁状の植物茎の圧痕が見られる。

第165図820～823は下川津B類の壺である。820はほぼ完形で出土した。直立する頸部から水平方向に突出する口縁で、端部は上下にわずかに摘み出している。821の頸部外面はハケ調整の後、右上がりのヘラ描き沈線を多条描いている。824～834は甕、835～839は下川津B類の甕口縁部である。824はほぼ完形で出土した。「く」の字状に緩く屈曲する口縁で、体部は砲弾形、底部は上げ底状の平底である。825は球状で器壁が相対的に厚い体部である。体部内面は指オサエが明瞭に残り、外面は指オサエによる凹凸を強いハケによって平滑化しようとしている。826、827は明瞭な稜をもたず「く」の字状に屈曲する口縁で、端部を上方に摘み上げ尖らせている。828は明瞭な稜をもち「く」の字状に屈曲するやや内湾する口縁をもつ。体部は砲弾形で底部は丸底化が進んでいる。831の口縁は薄く引き伸ばしているため端部に歪みが認められる。834は胎土中にわずかに角閃石を含み、色調も下川津B類のものに類似する。内面は口縁部直下までヘラ削りを施し器壁を薄く仕上げている。839の体部外面下半のヘラ磨きは省略されているようである。840～842、844、847は下川津B類土器の底部である。形状から840、844は甕、841、842、847は壺であろう。848、849は下川津B類の高杯である。848はほぼ完形で出土した。直立気味に立ち上がり外反する口縁で端部は丸くおさめている。口縁部内面は強いナデで凹線文状の凹凸をつくる。外面もナデ、底部は内面は四分割ヘラ磨き、外面は磨滅する。脚部は三角錐状に直線状に広がる形状で、外面の調整は不明、内面はヘラ削りである。脚部には上下2段に4孔ずつの円形の有孔がある。上段はほぼ90度



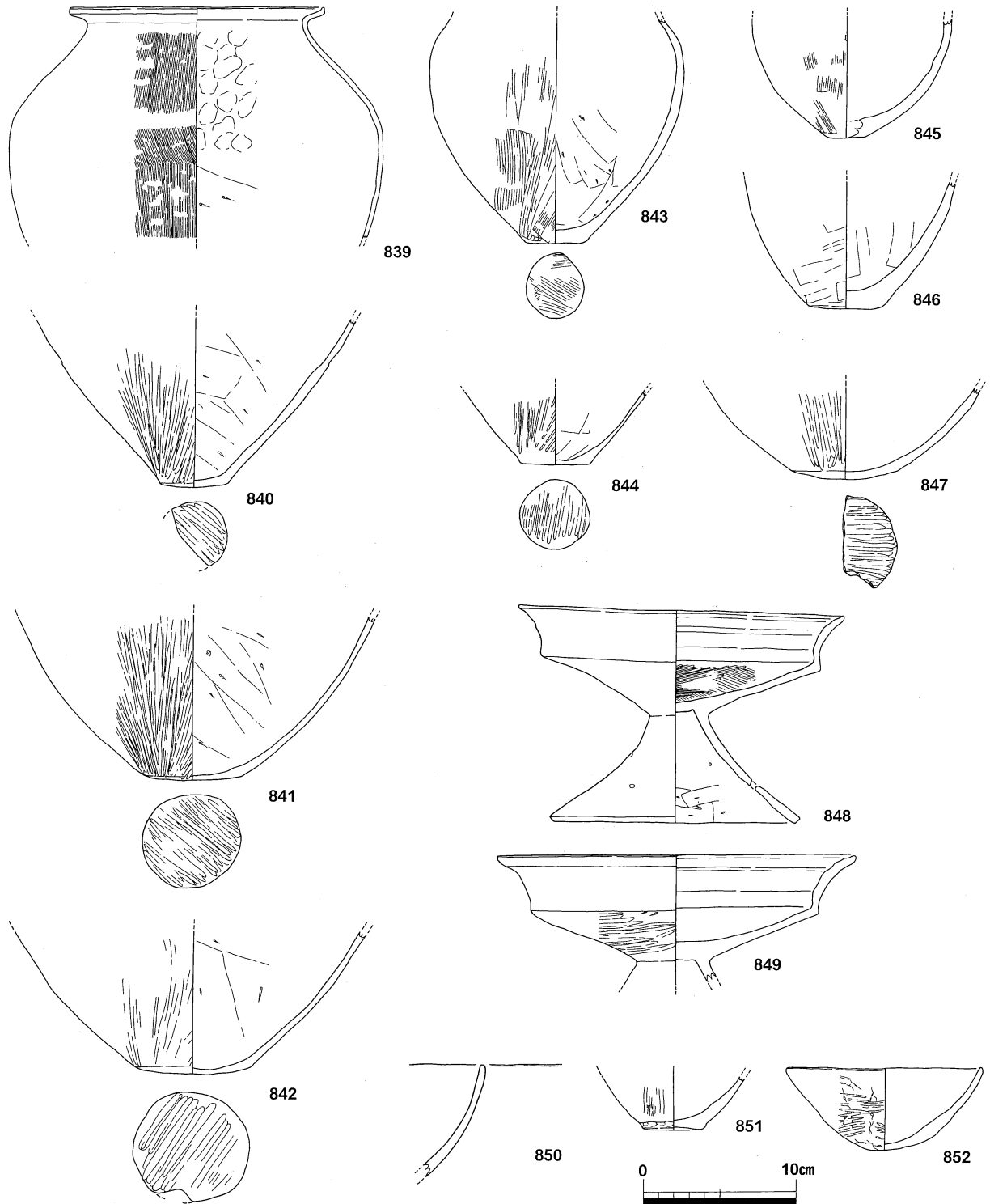
第164図 S K a 77 出土遺物実測図（その2）



第165図 SK a 77 出土遺物実測図 (その3)

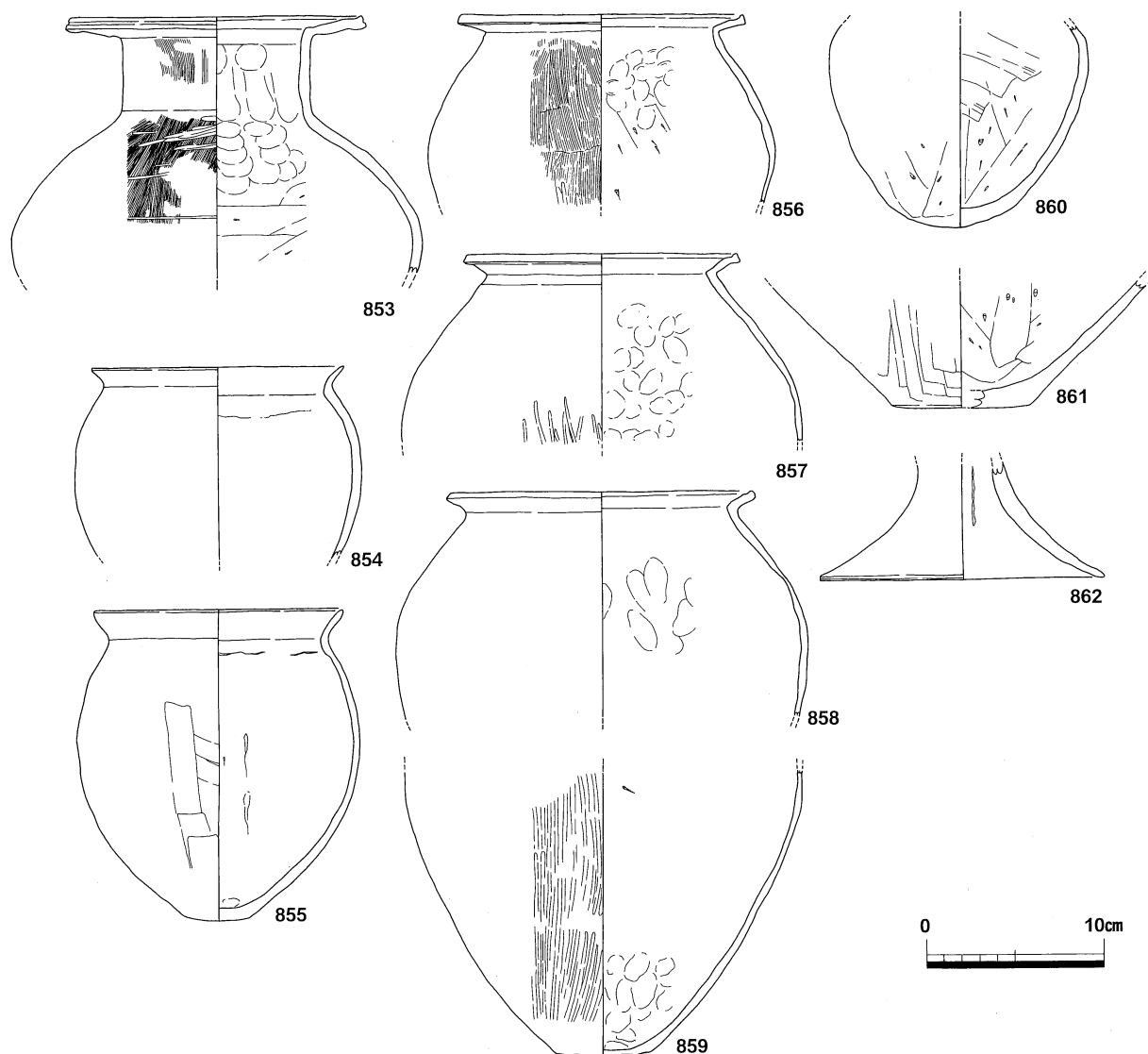
の位置にあるが、下段には規格性が無い。850～852は鉢である。851の底部は上げ底状の平底で体部との境界部は棒状工具で押圧し整形している。

第167図853は下川津B類の壺である。854、855は甕、856～858は下川津B類の甕、859は下川津B類の壺の底部である。第168図863は下川津B類の壺、864は頸部内面をハケ調整する壺、865は砲弾形の体部から引き伸ばして整形した薄手の口縁をもつ甕である。

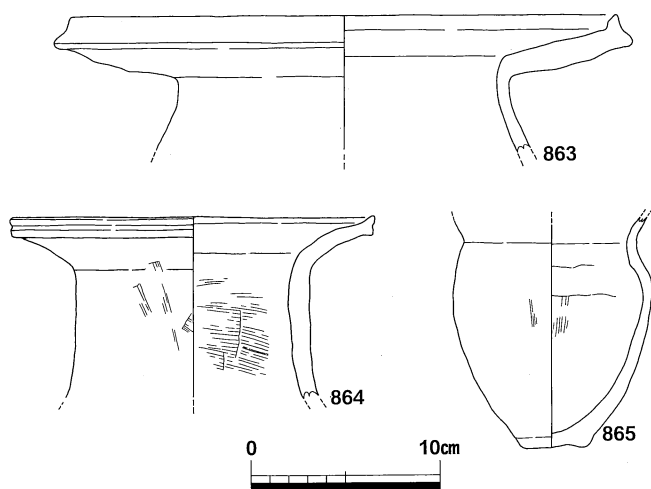


第166図 SK a 77 出土遺物実測図（その4）

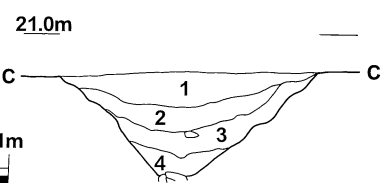
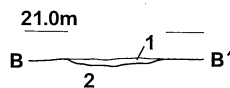
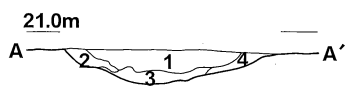
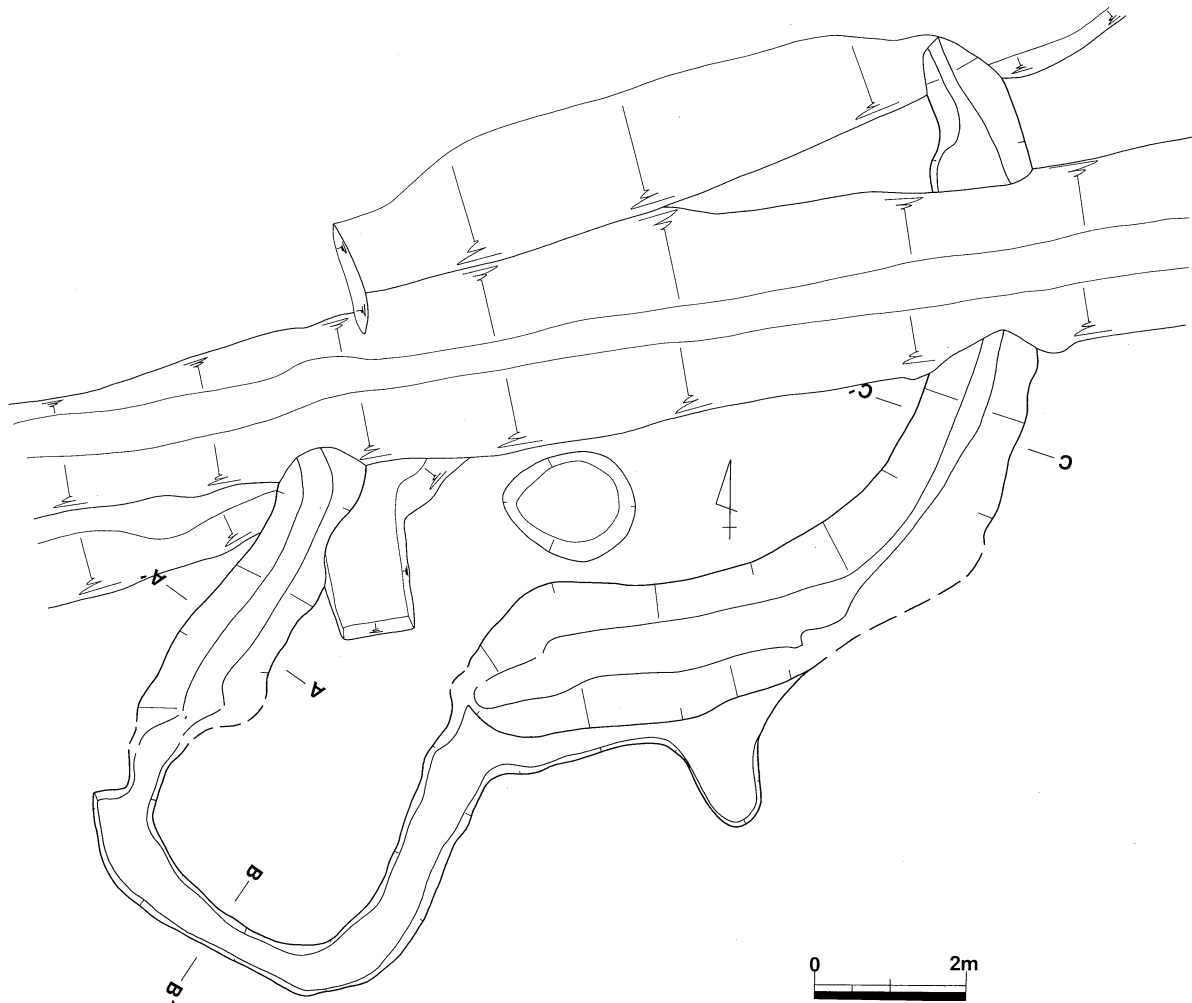




第167図 SK a 77 出土遺物実測図（その5）



第168図 SK a 77 出土遺物実測図（その6）



A-A'

1. 暗茶褐色粘質シルト
2. にごった黄灰色粘質シルト (黄色土ブロック混)
3. にごった淡黄灰色粘質シルト
4. 暗灰黄色砂質シルト (褐色土ブロック混)

B-B'

1. 茶褐色粘質シルト (礫少量混)
2. 灰色シルト質土 (やや黄色をおびる Fe、Mn含、地山)

C-C'

1. 茶灰色礫混粘質シルト
2. 黒褐色礫混粘質シルト
3. 灰褐色礫混砂質シルト (大形礫 3~5cm が多い)
4. 淡褐色歴混中砂 (大形礫 3~5cm が多い)
5. 淡灰褐色砂質シルト (小形礫まじる)
6. 暗褐色砂礫 (地山をブロック状に含む)

第169図 S T a 01 平・断面図、出土遺物実測図

③ 墳墓

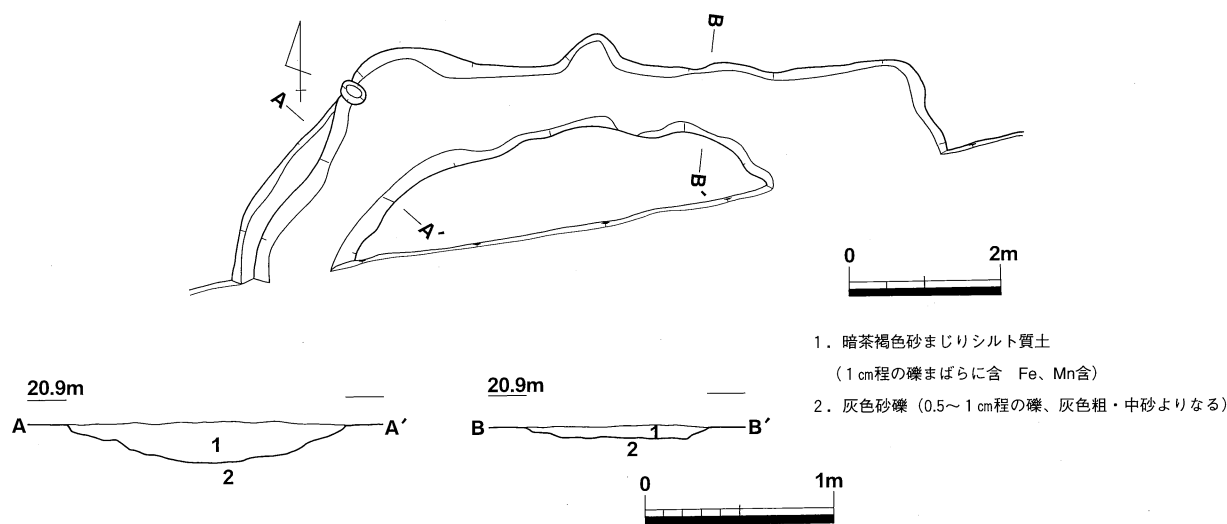
S T a 01

南地区の西端、X=143.075、Y=52.145付近で検出した周溝墓である。前方後円形に周溝が巡るが、北側は池台池と空港南辺に沿う空港供用時の排水溝によって壊されている。盛土は確認できなかった。検出された遺構をもとに規模を検討すると、円形部は周溝の内側が約4.6mほどの正円に復原でき、幅約2.5m、長さ約5.7mの前方部が取り付く。前方部の先端での幅は約3.1mに広がっており、僅かに前方部が開く形状をなす。なお、前方部先端の周溝は屈曲せずに弧状に巡る形状をなす。墳墓の主軸方位は座標北から29度東に振った方向で、全長は溝内側で約15.5mに復原される。

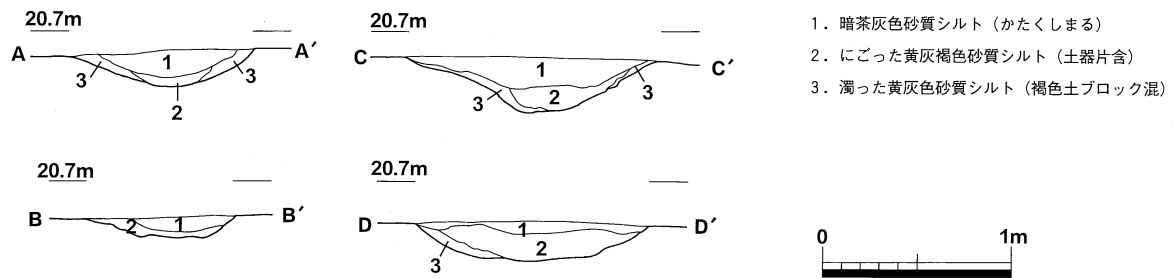
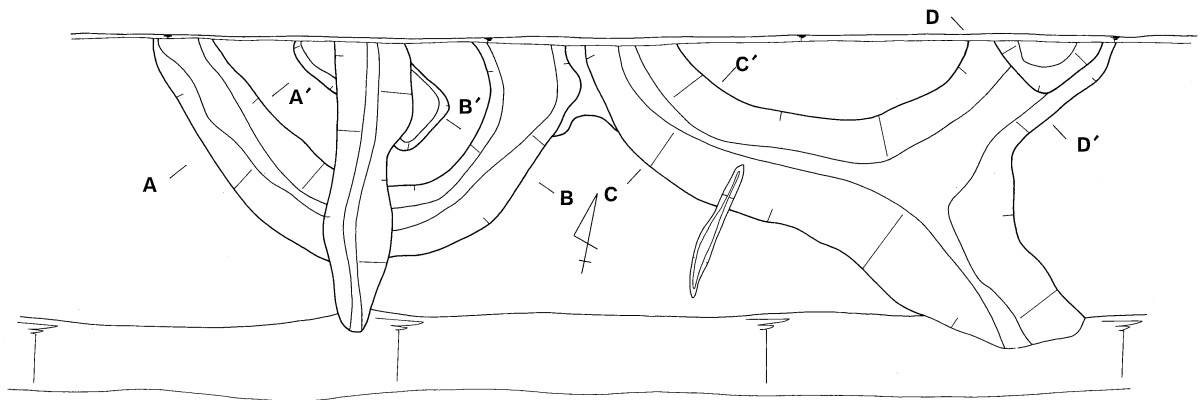
周溝は、後円部で幅140~180、深さ約55cmで断面形はV字状、前方部では幅48~85cm、深さ4~11cmを測り、断面形は浅い皿状を呈する。平成3年度概報では東側の溝（後円部）が深く、西側の溝（前方部）が浅いことから、東方向からの側面観を強調して築造したと考えたが、調査区を拡張した結果、後円部の溝が深く前方部の溝が浅いことが判明した。周溝埋土から数点の土器片が出土しているが、時期の特定は困難である。

S T a 02

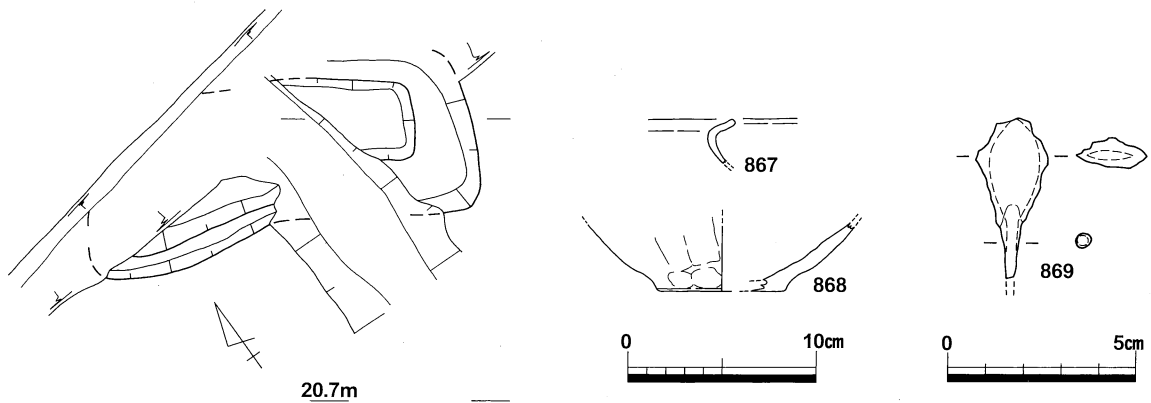
S T a 01の東側で検出した周溝墓である。S T a 01と周溝間は1.5mと近接している。S T a 02は幅90~150cm、深さ約10cmの溝が巡るものであるが、規模や埋土がS T a 01と類似し、S T a 01、03、04などと墳墓群を形成する可能性が高いと考えられ、周溝墓と判断した。溝外縁は台形状、内側は円弧状を呈している。溝の内側を基準に無理に規模を検討すると径7~8mほどの円形になるが、本来の形状は不明である。埋土中から若干量の土器細片が出土した。下川津B類土器の胎土の土器細片を含んでいる以外は詳細不明である。



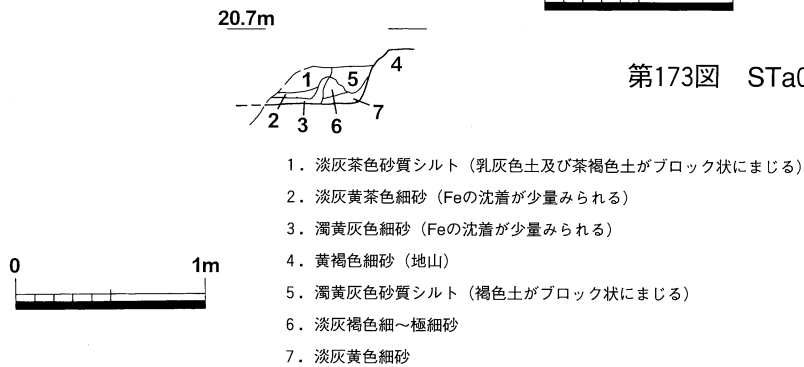
第170図 S T a 02 平・断面図



第171図 STa03、04 平・断面図



第173図 STa03出土遺物実測図



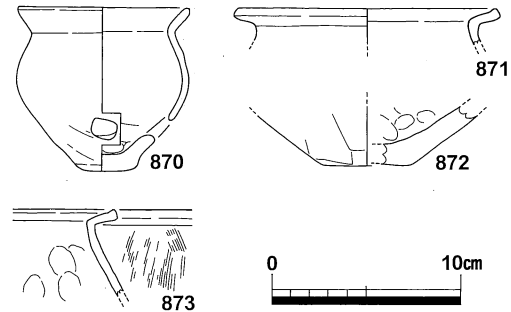
第172図 STa03主体部平・断面図

S T a 03、04

X=143.085、Y=52.155付近で検出した2基の周溝墓である。これらは周溝を一部共有して隣接する。北側は調査区外に延びるが、平成8年度に調査されたI-23区で連続する部分が調査された。この結果、S T a 03、04は円形の周溝墓になることが確認されている。

西側のS T a 03は、周溝内側で長径約4m、短径約2.7m程度に復原される楕円形の周溝墓である。楕円形の長軸に合致した主軸方位(N-63°-W)をもつ主体部1基を検出した。主体部は木棺葬と推定され、幅85cmの墓坑内に、幅44cmの棺痕跡が認められた。底面は平坦で小口穴等は認められなかった。周溝は幅0.8~1.1m、深さ0.1~0.2mで、深さが浅く盛土も低かった可能性があり、このために主体部が削平を免れたと考えられる。第173図はS T a 03出土の遺物である。867は弥生土器甕。下川津B類土器で磨滅している。868は弥生土器の底部。明瞭な平底で、外面に縦方向の板ナデが施される。内面は磨滅している。869は柳葉形鉄鏃である。869は主体部に隣接する攪乱中から出土したもので、出土位置および状況からS T a 03に伴うものと判断している。なお、主体部の埋土は水洗選別を行い微少な遺物の検出に努めたが、検出されなかった。このほかS T a 03からはコンテナ1/8程度の土器細片が出土している。下川津B類の胎土のもの、ハケ調整の見られるものなど弥生時代後期と思われるものが大半である。(869は錆落しにより長4.0cmの棒状鉄片であることがわかった。)

東側のS T a 04は、溝内部の直径が4.4mほどの規模の円形周溝墓である。周溝の幅約1.4m、深さは0.1~0.4mを測る。東南部で同規模の溝が東南方向に2mほど派生して検出されたが、もう1基の周溝墓の残存部である可能性がある。第174図はS T a 04の周溝から出土した遺物の実測図である。870は弥生土器甕。周溝



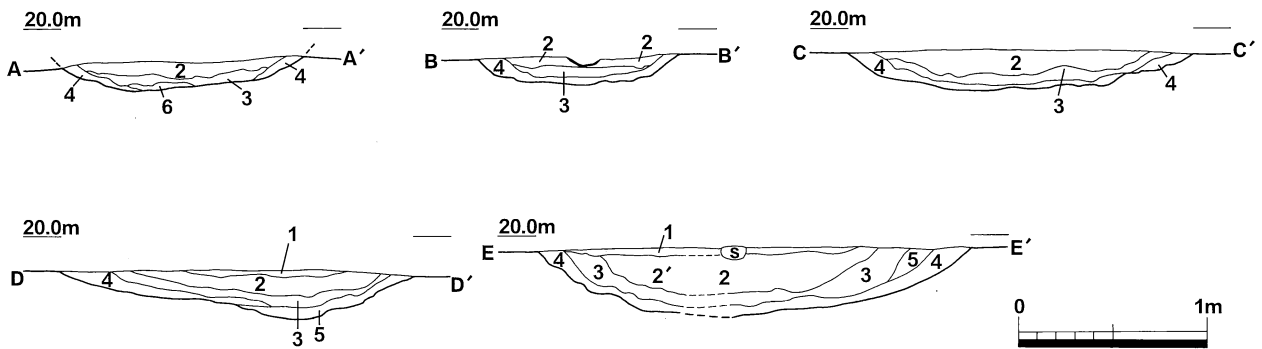
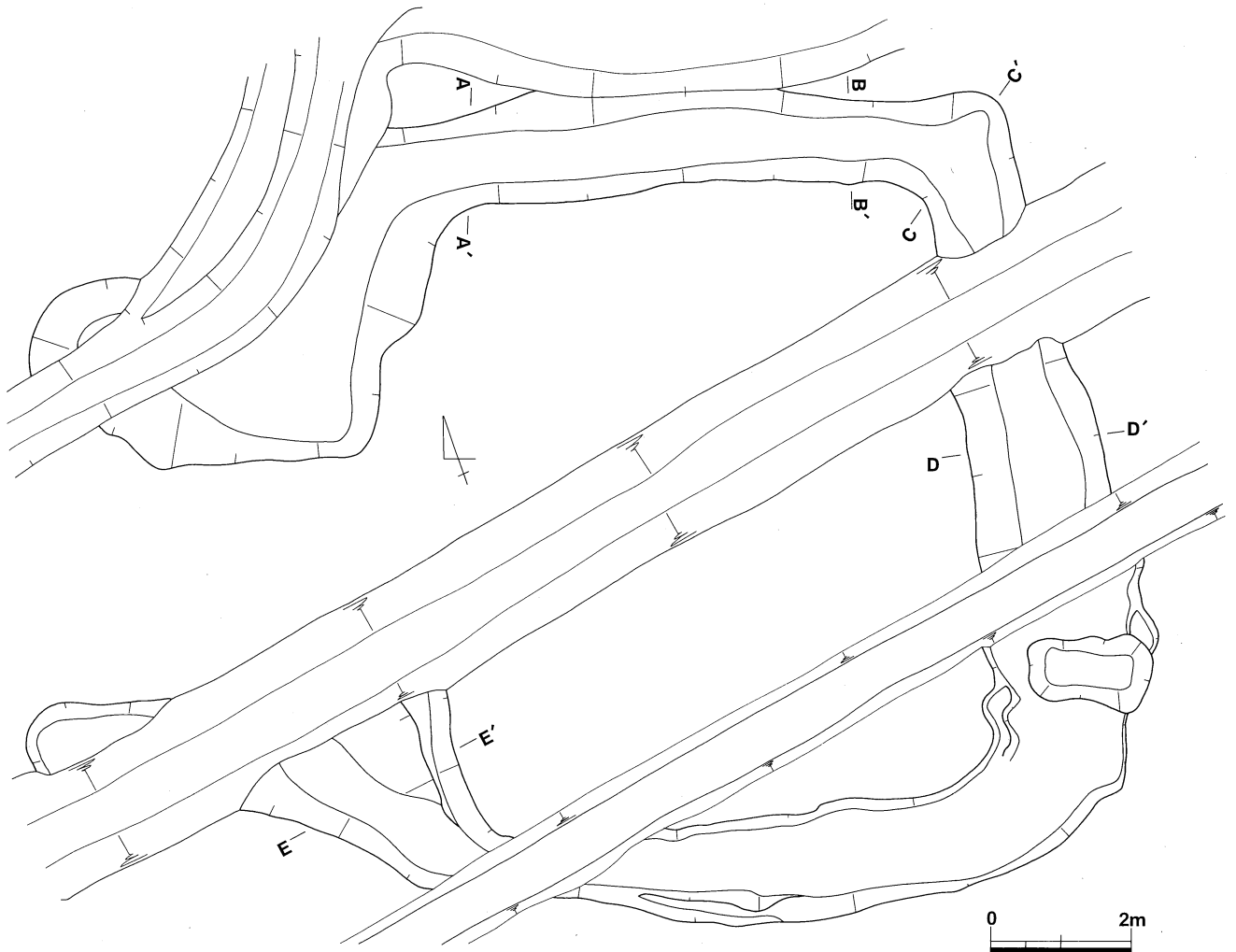
第174図 STa04 出土遺物実測図

最深部の底面から10cmほど浮いた位置で出土したものでほぼ完形である。器高8.7cm、「く」の字状に外反する口縁で、端部は丸くおさめる。底部は明瞭な平底、内面下半は指おさえ、板ナデ、以外はナデである。体部下半に径1.5cmほどの穿孔がある。871は下川津B類の甕の口縁部の小片である。磨滅する。872は弥生土器の平底の底部小片。外面板ナデ、内面指おさえが認められる。873は下川津B類の甕の口縁部の小片である。このほかS T a 04からはビニール袋(21×14cm)1袋分の土器細片が出土している。

S T a 05

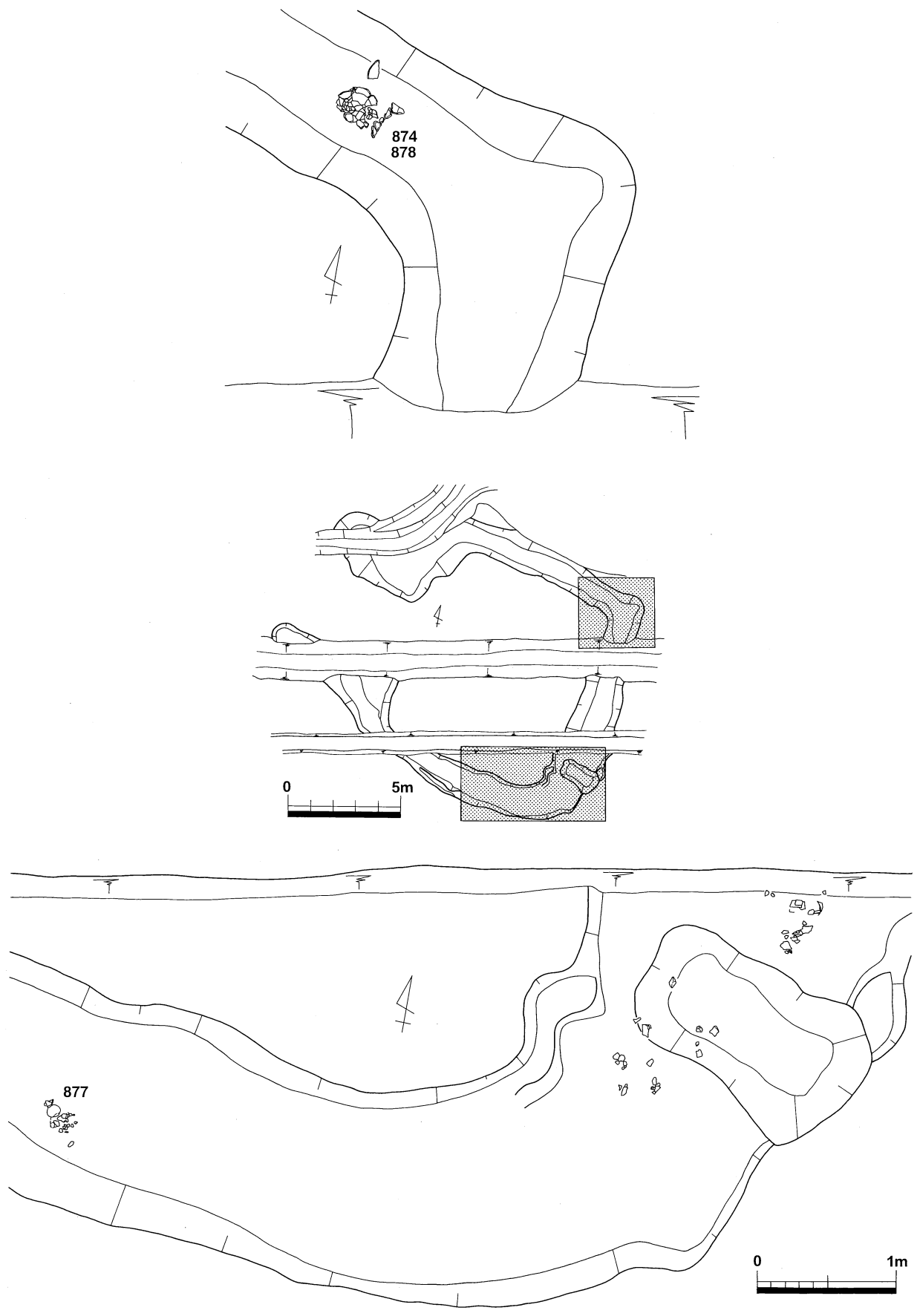
X=143.095、Y=52.223付近で検出した前方後方形の周溝墓である。主軸方向は座標北から77度西に振った方向で、全長約13~13.7m(溝内側)を測る。前方部は幅2.5m、長さ5~6mほどの長方形で、前方部北側の周溝では不定形なバチ形を呈する。前方部正面を画する溝は見られない。前方部の周溝は、内側では直線であるが、外側は後方部の周溝の外縁から次第に幅を減ずる直角三角形のような形態を呈する。後方部は主軸方向で一辺約7~7.8m、直交する方向で一辺約8.4mの方形である(溝内側での計測値)。西北部でクランク状の屈曲が見られるが、これは遺構面に段差が生じた結果できたもので、後方部は本来完全な方形のプランに復原できる。周溝幅は1.2~2.3m、深さは10~30cm、断面形は皿状を呈し、溝底のレベルはほぼ一定である。

後方部周溝の東南隅付近から墓坑の可能性のある土坑を検出した。これは周溝埋土を掘削中に検出し

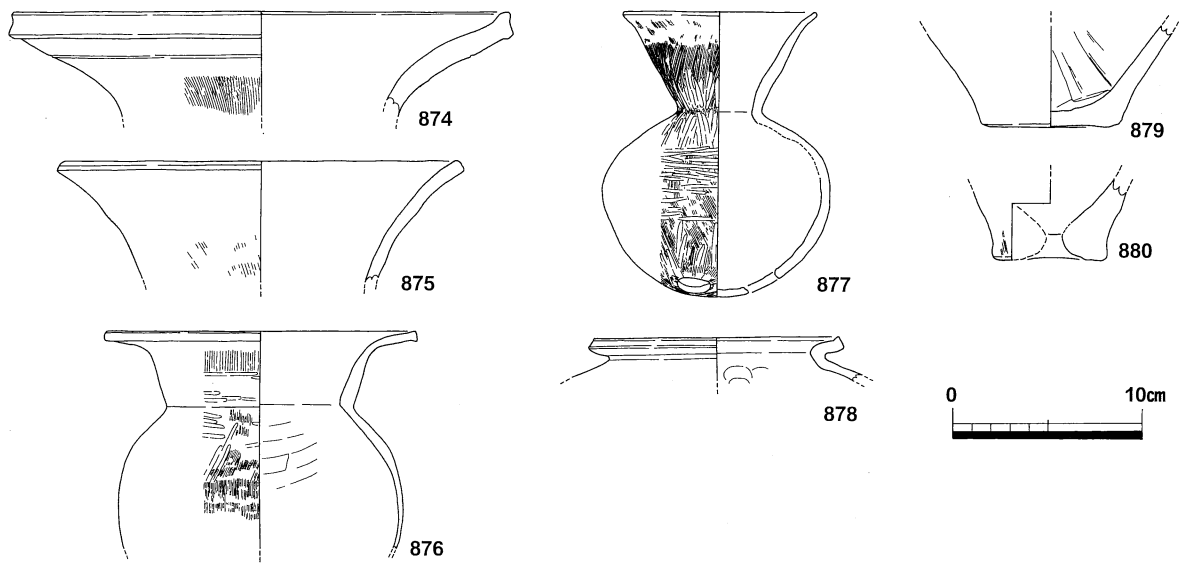


1. 暗紫褐色粘質シルト
2. 黒茶褐色粘質シルト (大形の土器片がない)
3. 淡褐灰色砂質シルト (Mn粒多い 土器片少量含)
4. 淡黄褐色中砂 (Mn粒少量 土器ほとんどなし)
5. 淡灰色中砂 (部分的にみられる)
6. 濁黄灰色粗砂 (灰色土をブロック状にまじえる)

第175図 STa05 平・断面図



第176図 STa05 遺物出土位置図

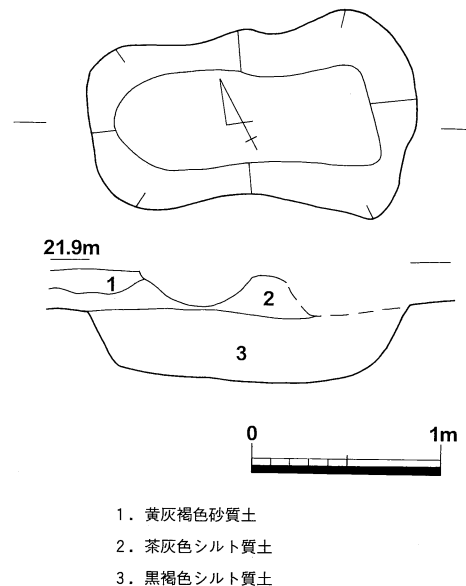


第177図 STa05 出土遺物実測図

たもので、周溝底から掘り込まれたものである。長辺173cm、短辺約90cm、深さ約35cmの規模で、平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形状を呈する。土坑底はほぼ水平で、黒褐色シルト質土で埋没していた。出土遺物は認められず、棺痕跡も確認されなかった。

第177図874～880はSTa05の周溝から出土した遺物実測図である。874、875は弥生土器壺の口縁部の破片で、下川津B類土器である。874は、頸部から明瞭な稜をもたずに斜め上方に開く口縁である。口縁端部はわずかに摘み上げている。875は胎土中に金雲母を多量に含んでいる。体部から外湾してラッパ状に開く口縁で、口縁端部は四角におさめる。外面上半は強いヨコナデ、下半にハケが認められる。内面は磨滅している。876の壺は外傾する頸部から水平方向に屈曲する口縁部で、口縁端部は四角におさめる。

口径は体部最大径よりも大きい。球形を呈する体部は器壁の薄いもので、内面板ナデ、外面は10条/cmほどのハケの後、上半部を中心にヘラミガキを施し、頸部は内面ナデ、外面はハケの後に横方向のヘラミガキを散漫に施している。胎土中には赤色粒を含み、雲母も多く含まれる。877の壺は、口縁が外湾気味に開くが、口縁部中位で緩やかに屈曲し、外反の程度が変化する。口縁端部はナデによってさらに外反する。体部は中位に最大径があり、やや扁平な算盤玉状の形状、底部は丸底である。調整は口縁部外面は13条/cmほどの細かいハケ、下半はヘラミガキ、口縁部内面は端部整形後に施された斜め方向のナデが施される。体部外面はハケ後、上半は縦方向のヘラミガキを密に、最大径付近およびその上部は横方向のヘラミガキ、下半は縦方向のヘラミガキが散漫に施される。体部内面は図化できなかったが板ナデを施してい



第178図 STa05内墓拡平・断面図



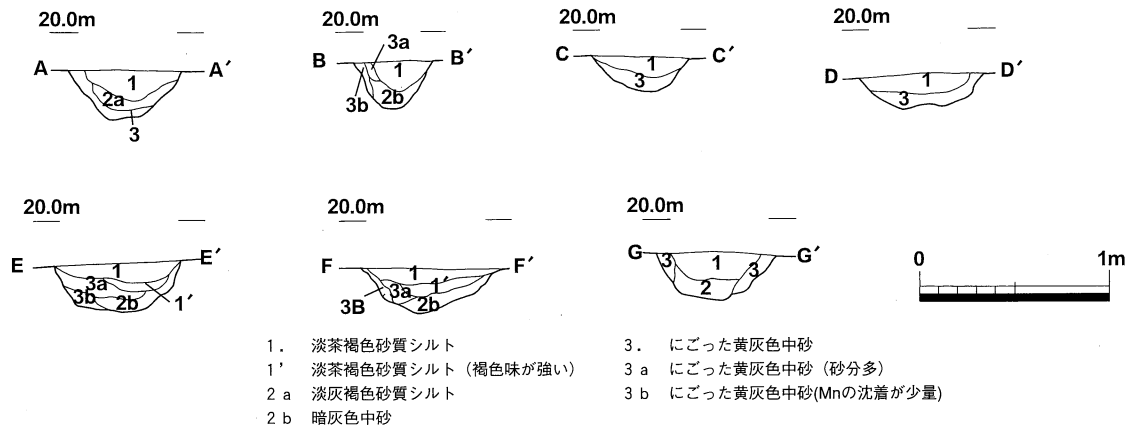
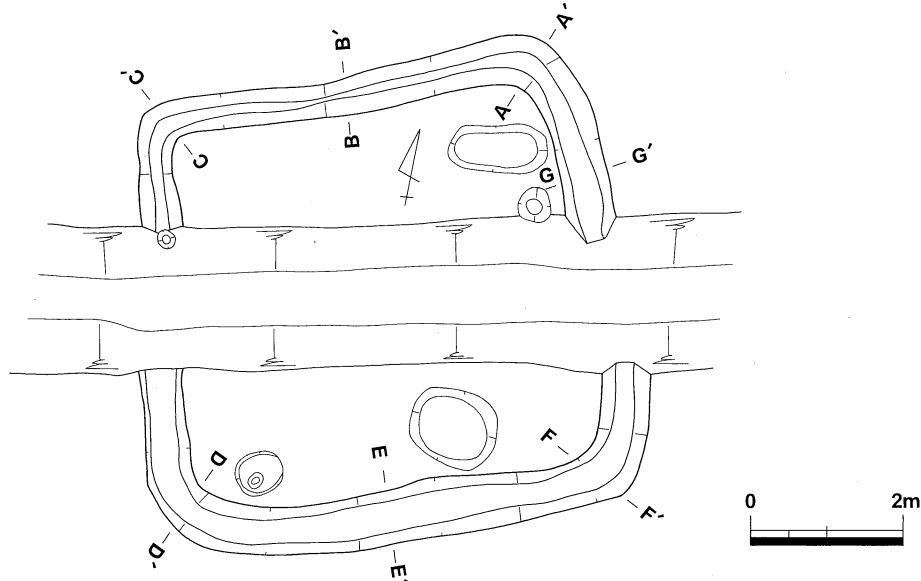
る。底部中央よりやや離れた位置に径1.6cmほどの円孔が穿たれている。また、口縁部にわずかに赤色顔料が付着する。878は下川津B類の甕の口縁部の小片である。「く」の字状に強く屈曲し、端部を上方に摘み上げている。879は形態、胎土の特徴から弥生時代前期の壺の底部と思われる。880は甑の底部小片である。磨滅する。879、880は混入したものと考えられる。このほかS T a 05からはコンテナ1 / 8程度の土器細片が出土している。

S T a 06

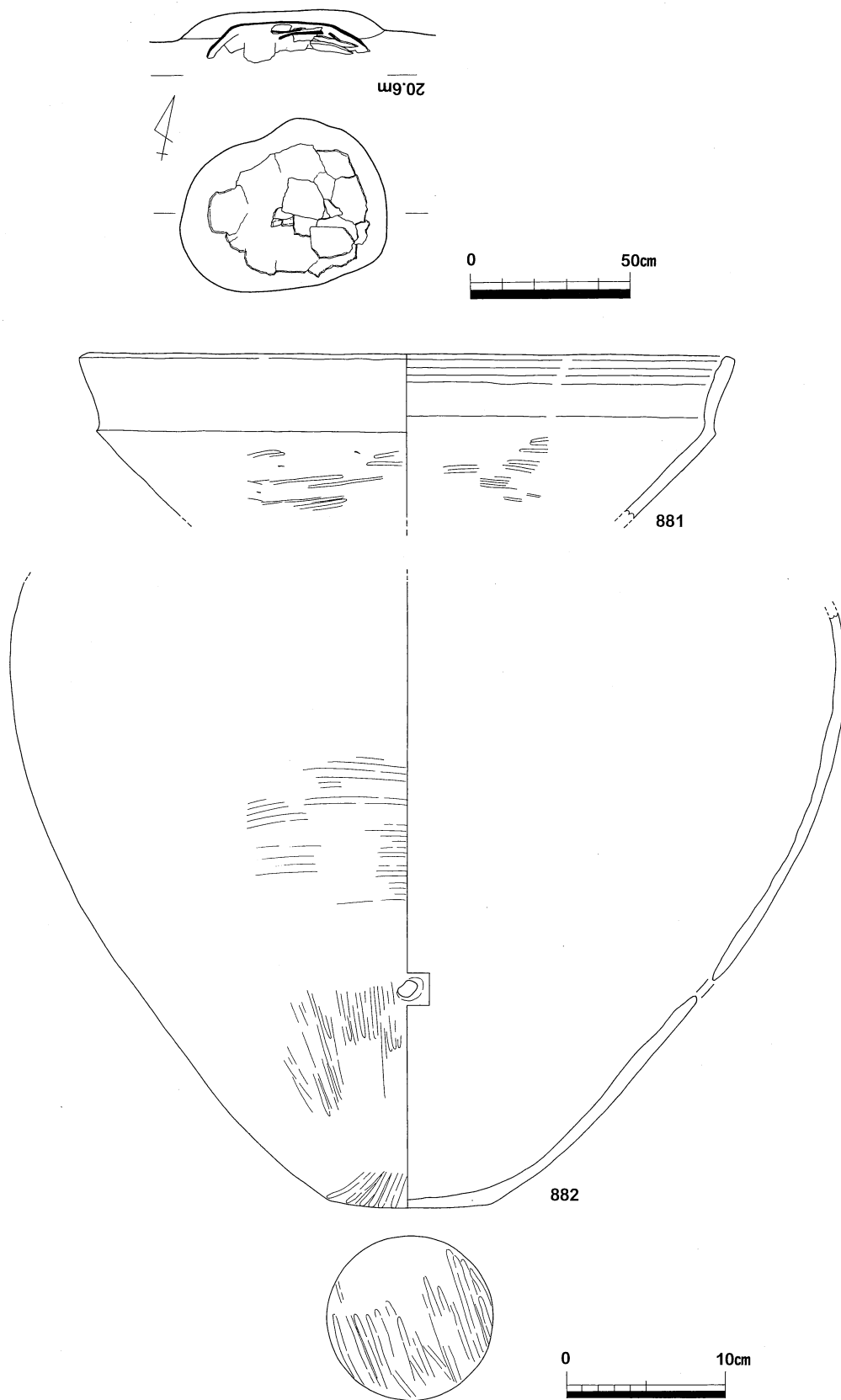
S T a 05の東に近接して検出した方形周溝墓である。一辺約5 mの規模で、ほぼ正方形のプランをもつ。一辺の方向は座標北から東へ71~72度振っている。溝幅は45~70cm、深さは20~28cmで、断面形はU字状を呈する。北西隅で楕円形の平面形の土坑S K a 86を検出したが、S Tに伴うものかどうか不明。周溝、土坑ともに時期不明の土器細片が少量出土したのみである。

S T a 07

X=143.081、Y=52.162で検出した土器棺墓である。長径65cm以上、短径50cm以上の墓坑に、底部を西に向けて壺を横倒しにし、鉢を蓋として使用したと考えられる。土器棺の上半部は削平によって喪われており、下半（土器の一侧辺）のみが遺存していた。棺としての底部に当たるところに穿孔が認められる。

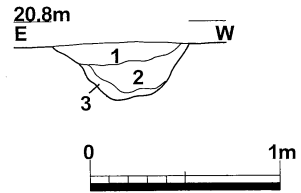


第179図 S T a 06 平・断面図



第180図 STa07 平面・見通し断面、出土遺物実測図

また、蓋として使用された鉢片が棺の内面に落ち込む状態で出土している。881は大型の鉢の口縁部破片。下川津B類。口縁部は強い横ナデ、底部内面ヘラミガキ、外面はヘラケズリの後にヘラミガキを施す。882も下川津B類土器である。



- 1. 暗茶褐色粘質シルト
- 2. 暗茶褐色粘質シルト(黄色土ブロック少量混)
- 3. 黒灰色粘質シルト(黄灰色砂質シルトのブロック混)

第181図 S D a 37 断面図

④ 溝状遺構

S D a 37

X=143.080、Y=52,150付近で検出した溝状遺構である。幅約75cm、深さ約30cmほどの規模で断面形はU字状を呈する。ほぼ南北方向で直線状に流れている。S T a 03の主体部、周溝を壊している。出土遺物は若干量の土器細片で図化しうるものは無かった。

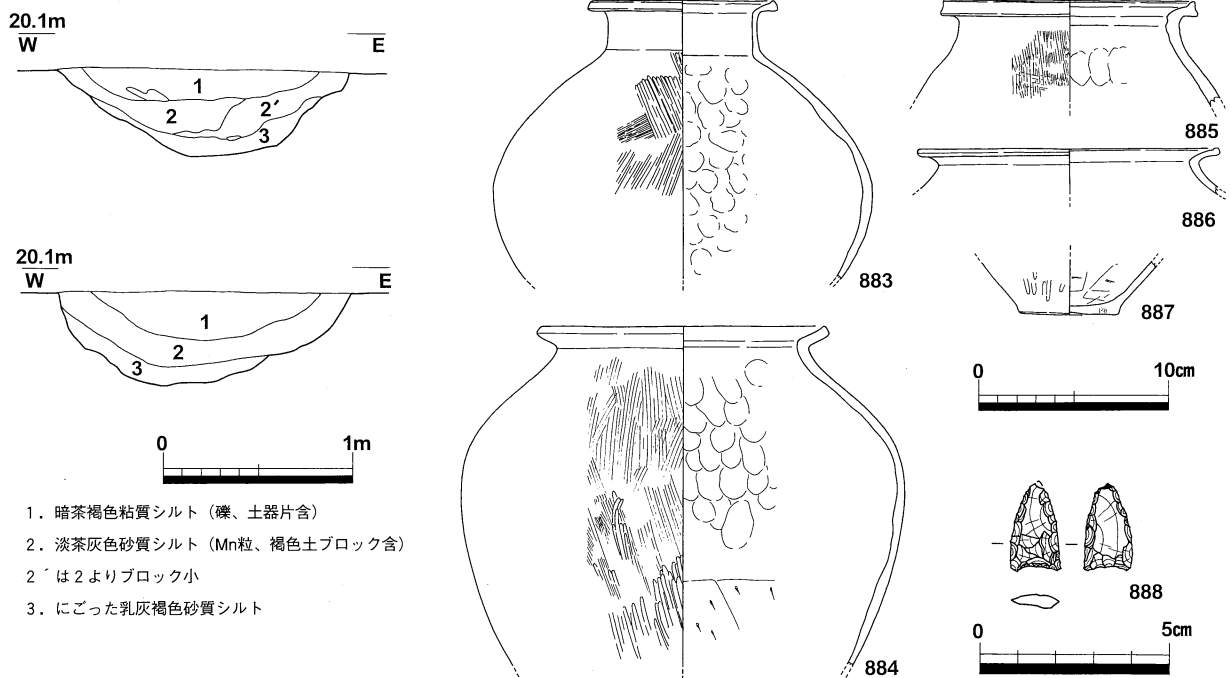
S D a 38

X=143.090、Y=52.208付近で検出した溝状遺構である。溝幅約1.5m、深さ0.5～0.65mの規模で断面形は皿状と呈する。座標北から10度ほど西に振った方向で、ほぼ直線に流れている。S D a 39とは切り合い関係があり、S D a 38の方が新しい。出土遺物は南半部に多く、コンテナ1箱分にのぼる。ほぼすべてが弥生時代後期と考えられる土器片で、下川津B類土器の胎土のものが多い。

第182図883～888はS D a 38から出土した遺物実測図である。883は弥生土器壺である。下川津B類土器。短い頸部から水平方向に屈曲する短い口縁部である。口縁端部は上方にわずかに摘み上げている。体部は通有の下川津B類土器のように肩の張る形態ではなく、最大径は体部中位にある。884～886は下川津B類土器の甕、887は下川津B類土器の甕底部である。888はサヌカイト製の凹基式の石鏃である。

S D a 39

X=143.092、Y=52.210付近で検出した溝状遺構である。幅1～1.5m、深さ約0.8mの規模で、断面形

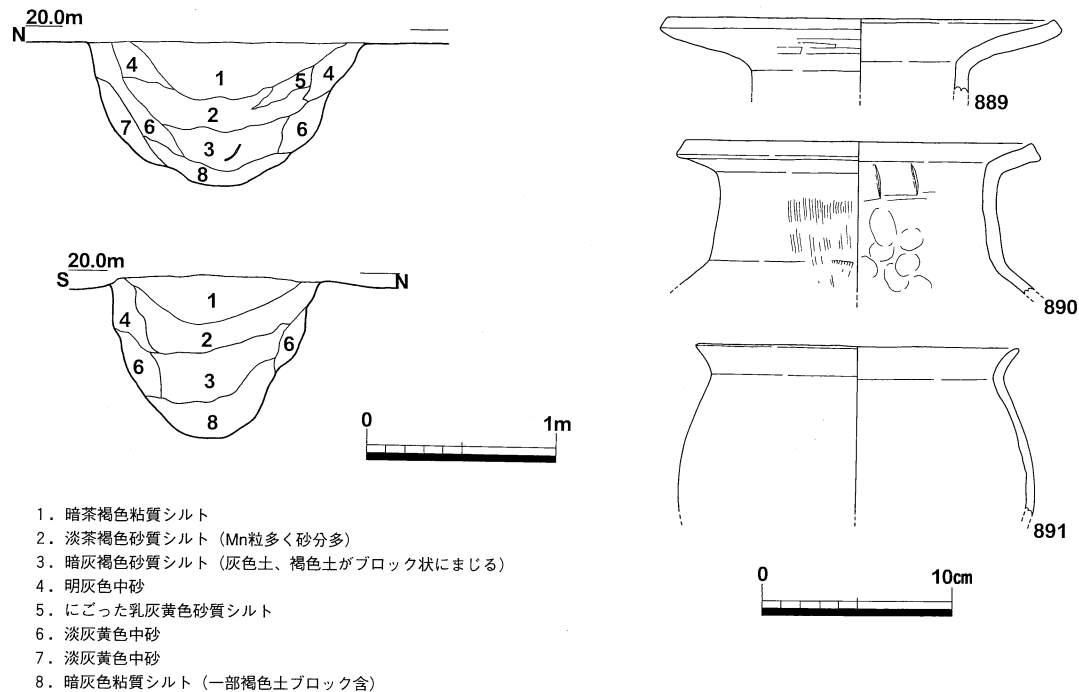


- 1. 暗茶褐色粘質シルト(礫、土器片含)
- 2. 淡茶灰色砂質シルト(Mn粒、褐色土ブロック含)
- 2' は2よりブロック小
- 3. にごった乳灰褐色砂質シルト

第182図 S D a 38 断面図、出土遺物実測図

はU字状を呈する。座標北から60度ほど西に振った方向でほぼ直線状に流れている。S D a 38と切り合い関係があり、S D a 39の方が古い。コンテナ1 / 4箱ほどの遺物が出土しているが、ほぼすべてが弥生時代後期と考えられる小片である。

第183図889～891はS D a 39から出土した遺物実測図である。889、890は下川津B類土器の壺である。890は、内傾気味の頸部から斜め上方に短く延びる口縁で、端部は四角におさめている。頸部内面上半に横方向の板ナデが施され、圧痕が見られる。891は甕である。明瞭な稜をもたずに「く」の字状に緩やかに外反する口縁で、端部は尖り気味におさめている。



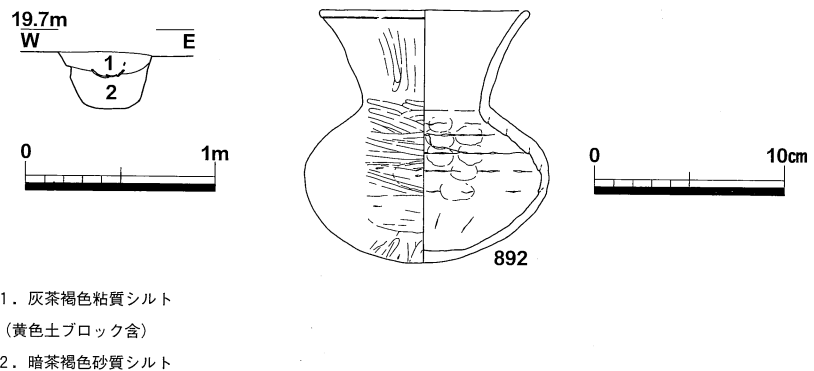
1. 暗茶褐色粘質シルト
2. 淡茶褐色砂質シルト (Mn粒多く砂分多)
3. 暗灰褐色砂質シルト (灰色土、褐色土がブロック状にまじる)
4. 明灰色中砂
5. にごった乳灰黄色砂質シルト
6. 淡灰黄色中砂
7. 淡灰黄色中砂
8. 暗灰色粘質シルト (一部褐色土ブロック含)

第183図 S D a 39 断面図、出土遺物実測図

S D a 40

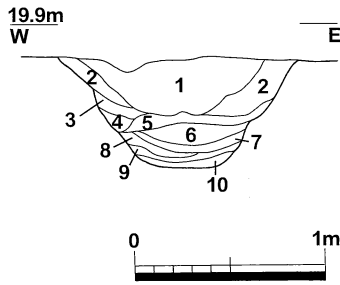
X=143.099、Y=52.255付近で検出した溝状遺構である。溝幅0.5～0.6m、深さ0.3mほどの規模で、断面形はU字状を呈する。検出長は3mである。S D a 40は、位置関係と規模の点からS D a 43に連続する可能性があるが、埋土の状況がやや異なっているため断定できない。第184図892はS D a 40から出土した壺である。算盤玉状をなす扁平な球状の体部から外湾しながらラッパ状に開く口縁部がのびる。口縁端部は丸くおさめている。底部

は丸底である。調整は、口縁部外面はナデの後縦方向のヘラミガキ、体部上半は横方向のヘラミガキが密に施されている。体部最大径以下はヘラケズリの後には散漫にヘラミガキ、口縁部内面はナデ、体部上半内面は指おさえ、粘土紐

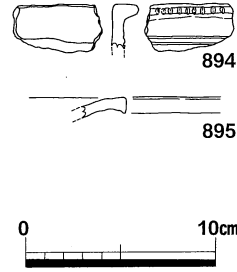


1. 灰茶褐色粘質シルト (黄色土ブロック含)
2. 暗茶褐色砂質シルト

第184図 S D a 40 断面図、出土遺物実測図



1. 淡茶灰色粘質シルト (細かいベースブロック混)
2. 濁灰黄褐色砂質シルト (大粒のMn粒沈着)
3. 濁灰褐色砂質シルト (ベースブロック混)
4. 濁灰色砂質シルト (ベースブロック混)
5. 明灰黄色中～粗砂
6. 褐色粘質シルト+灰色粗砂ブロック
7. 乳灰色細砂
8. 暗灰色粘質シルト (きめ細かい)
9. 灰褐色砂質シルト (小礫まじる)
10. 灰色粘質シルト



第185図 S D a 41 断面図、出土遺物実測図

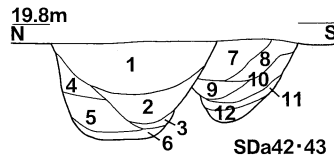
の接合痕が明瞭に残る。下半は底部から螺旋状に板ナデを施している。

S D a 41

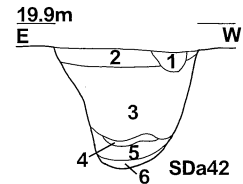
X=143.100、Y=52.255付近で検出した溝状遺構である。緩やかにカーブを描きながら南北方向に流れている。溝幅1.1~1.5m、深さ45~60cmほどの規模で断面形は逆台形状を呈する。土層断面を観察すると数回の埋没と再掘削を繰り返していることが伺われる。20点ほどの土器小片が出土している。894は弥生時代前期の甕の口縁部小片である。逆L字状口縁で、端部に刻み目、以下に2条以上のヘラ描き沈線が施されている。895は壺の口縁部小片。端部を下方に摘み出している。S D a 41と弥生時代前期のS K a 76とは切り合い関係があり、S D a 41の方が新しい。また、S D a 40よりも新しい可能性があることから、弥生時代後期もしくはそれよりもやや新しい時期の溝状遺構と考えられる。

S D a 42、43

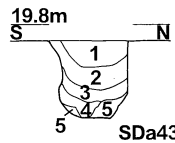
X=143.101、Y=52.249付近で検出した溝状遺構である。両者には切り合い関係がありS D a 42が新しい。S D a 42は幅80cm、深さ55cmほどの規模で、調査区南部では座標北から20度ほど西に振った方向に直線状に流れ、調査区北部で東西方向に屈曲している。S D a 43は、ほぼ東西方向に流れるもので、溝幅50cm、深さ40cmの規模である。遺物は僅かに20点ほどの小片が出土したのみで、時期決定が困難であるが、埋土の状況等から判断して弥生時代後期に属する可能性が最も高い。



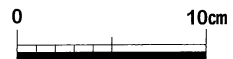
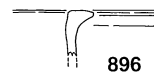
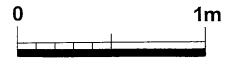
1. 暗茶褐色粘質シルト (黄色土ブロック混)
2. 黒褐色粘質シルト (層の下位に砂多い)
3. 黄灰色粘質シルト (ベース崩落土)
4. 灰茶褐色粘質シルト
5. 茶黒色粘質シルト (層の下位に砂多い)
6. 灰色中砂 (黄灰色土ブロック多く含)
7. 淡茶褐色粘質シルト (Mn, Fe粒多い 灰褐色砂)
8. 暗灰褐色中～細砂質シルト (Mn粒多い)
9. 灰色粘質シルト
10. 濁暗灰褐色中～粗砂 (Mn粒多い)
11. 暗灰色粘質シルト (黄灰～黄橙色土ブロック混)
12. 灰色砂質シルト (黄橙色土ブロック混)



1. 灰黄砂質シルト
2. 暗茶褐色粘質シルト
3. 茶灰色砂質シルト (ベースブロック多量に含)
4. 暗灰色中～細砂
5. 灰茶色砂質シルト (ベースブロック含)
6. 淡灰色中砂



1. 暗灰黒色粘質シルト (淡茶褐色砂質シルトブロック混)
2. 淡灰茶色砂質シルト (黄橙色土、褐色土の細かいブロック多混)
3. 暗灰褐色砂質シルト
4. 灰色砂質シルト
5. 灰褐色中～細砂



第186図 S D a 42、43 断面図、出土遺物実測図

(3) 古墳時代中期～古代

S D a 44

I-10区、S T a 05の北側 (X=143.101、Y=52.220付近) で検出した溝状遺構である。東北方向に湾曲しながら流れ、ほぼ直角に曲がり東南方向に「へ」の字状の流路をとる。幅1～3m、深さ0.4～0.5mを測る。断面形は西半ではU字形、東半では浅い皿状の中央部がU字状に落ちる形状である。S D a 44の不自然な流路平面形は、単なる溝状遺構ではない可能性があり調査担当者も性格不明遺構 (S X) として調査を進めているが、

それ以上のことはわからない。第187図897～899はS D a 44出土の遺物実測図である。897は須恵器の壺の口縁部の小片である。斜め上方に開く口縁で、端部は上方に摘み上げている。端部直下の下面に断面三角形の突帯、以下に櫛描き波状文が描かれる。898は凹基式のサヌカイト製石鏃、899は両側縁を細部調整し整形するサヌカイト製の石器である。器種は不明である。このほかにS D a 44からは器種不明の須恵器片数点、弥生時代後期に属すると思われる土器細片数点が出土しており、年代を確定するには資料が少ないが、897から古墳時代中期の遺構と考える。

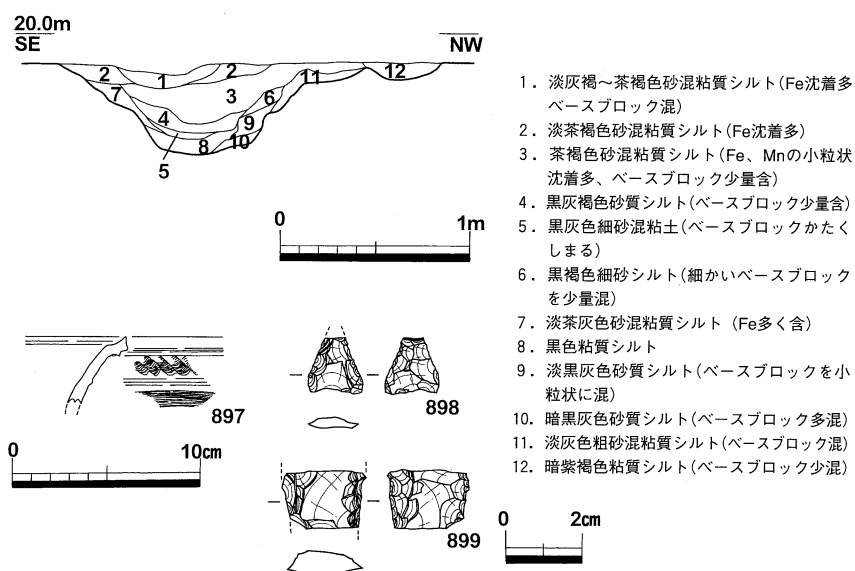
S D a 45

I-11区 (X=143.105、Y=52.265付近) で検出した溝状遺構である。幅0.5～1m、深さ0.2mほどの規模で、座標北から9度東に振った方向に流れる。1.5mほど東に平行して流れるS D a 52からは中世の遺物が出土しており、周辺の条里型地割の方向と合致する方向をもつ。出土遺物は須恵器小片など5点ほどの土器小片で年代を確定する資料に乏しいが、古代のものとする調査担当者の見解がある。

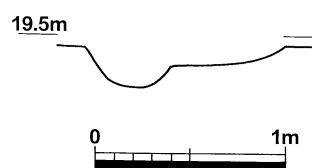
S D a 46

I-11区 (X=143.115、Y=52.325付近) で検出した溝状遺構である。幅1.6～2m、深さ0.6～0.7mほどの規模で、断面形はV字もしくは逆台形状を呈する。座標北から81度ほど西に振った方向に流れる。これは周辺の条里型地割の方向に合致するもので、付近には中世のS D a 53や近現代の溝が平行して、中世の可能性の高いS D a 54と近現代のS D a 56が直交して流れている。

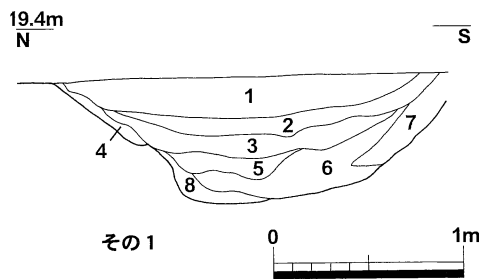
第189図900～908はS D a 46から出土した遺物実測図である。900は上層から出土した弥生土器甕である。下川津B類土器で磨滅している。901は上層から出土した須恵器蓋。やや扁平な宝珠形つまみ部の破



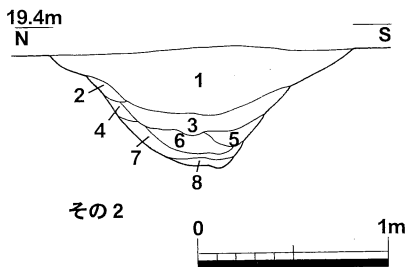
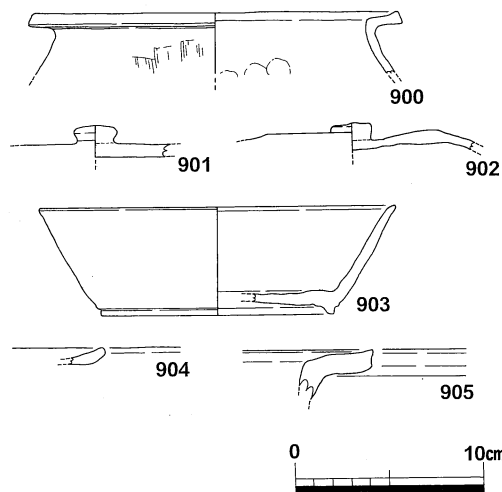
第187図 S D a 44 断面図、出土遺物実測図



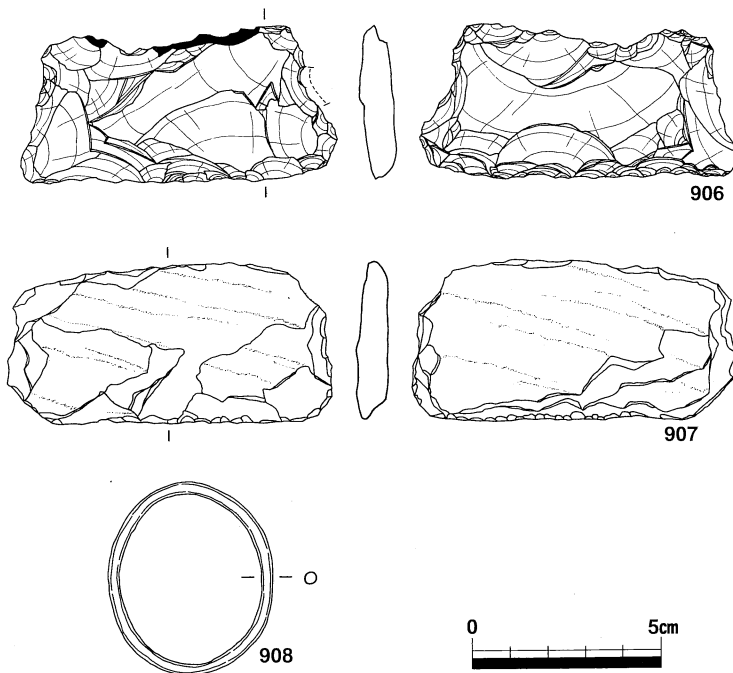
第188図 S D a 45 断面図



1. 淡灰褐色砂質シルト  
(ベースブロックと灰色粘質シルトブロック含)
2. 橙灰褐色粘質シルト (上位にFe沈着)
3. 淡灰褐色粘質シルト (極細砂をブロック状に含)
4. にごった黄灰色粘質シルト (ベース崩落土)
5. 黒灰色粘質シルト (細～中砂をブロック状に含)
6. 乳灰黄白色中～粗砂を灰色粘質シルトブロック  
(一部砂層がラミナ状に入る)
7. 灰褐色粘質シルト
8. 淡灰褐色砂質シルト (ベースブロック混)



1. 淡灰褐色砂質シルト (ベースブロック多くまじる)
2. にごった黄橙色粘質シルト (ベース崩落土)
3. 暗灰色粘質シルト (極細砂層がラミナ状に入る)
4. にごった灰黄橙色粘質シルト (ベース崩落土)
5. 暗灰色砂質シルト
6. 乳灰黄色細～中砂
7. 紫灰色中砂
8. 暗灰黒色中～粗砂 (層の下位にFeが固く沈着する)



第189図 S D a 46 断面図、出土遺物実測図

片である。902は中層から出土した須恵器蓋である。宝珠形のつまみがつく。歪んだ形状で、回転ヘラケズリを施した天井部が中くぼみする。天井部から口縁部への移行部は段状を呈する。903は焼成が良好の須恵器杯B、上層から出土した。904は上層出土の土師器小皿の小片。底部から口縁は稜をもたずに球状に移行している。905も上層出土のもので、土師器土鍋の口縁部の小片である。906は下層から出土したサヌカイト製石包丁である。ほぼ完形で、一側縁は不明瞭であるが、側縁に抉りを作っている。直線状をなす刃部はやや粗雑な作りである。907は上層出土のもので結晶片岩製の石包丁である。刃部を直線状に押圧剥離によって整形している。一側縁には抉りも見られる。908は銅製の環である。S D a 46の上面で出土した。このほかS D a 46からは下層で磨滅する弥生土器小片や須恵器片数点のほかコンテナ1/8箱分の土器片が出土している。

S D a 46は、上層に弥生時代から中世の遺物を包含し、中・下層では出土遺物が僅少という状況であ

り、また、溝埋土も中世に所属する条里型地割関連のものとは明確に分離できるものではない。したがって S D a 46は S D a 45と同様に古代に遡る遺構であると積極的に確定できる要素はなく、可能性のある遺構として捉えたい。

(4) 中世

① 柵列、柱穴

南地区では、X=143.100、Y=52.250付近と東端部のX=143.115、Y=52.345付近を中心に柱穴が集中している。これらは掘立柱建物に復原できるような規格的な配置をもつものは少ないが、集落の一部を検出したものと考えられる。

S A a 04

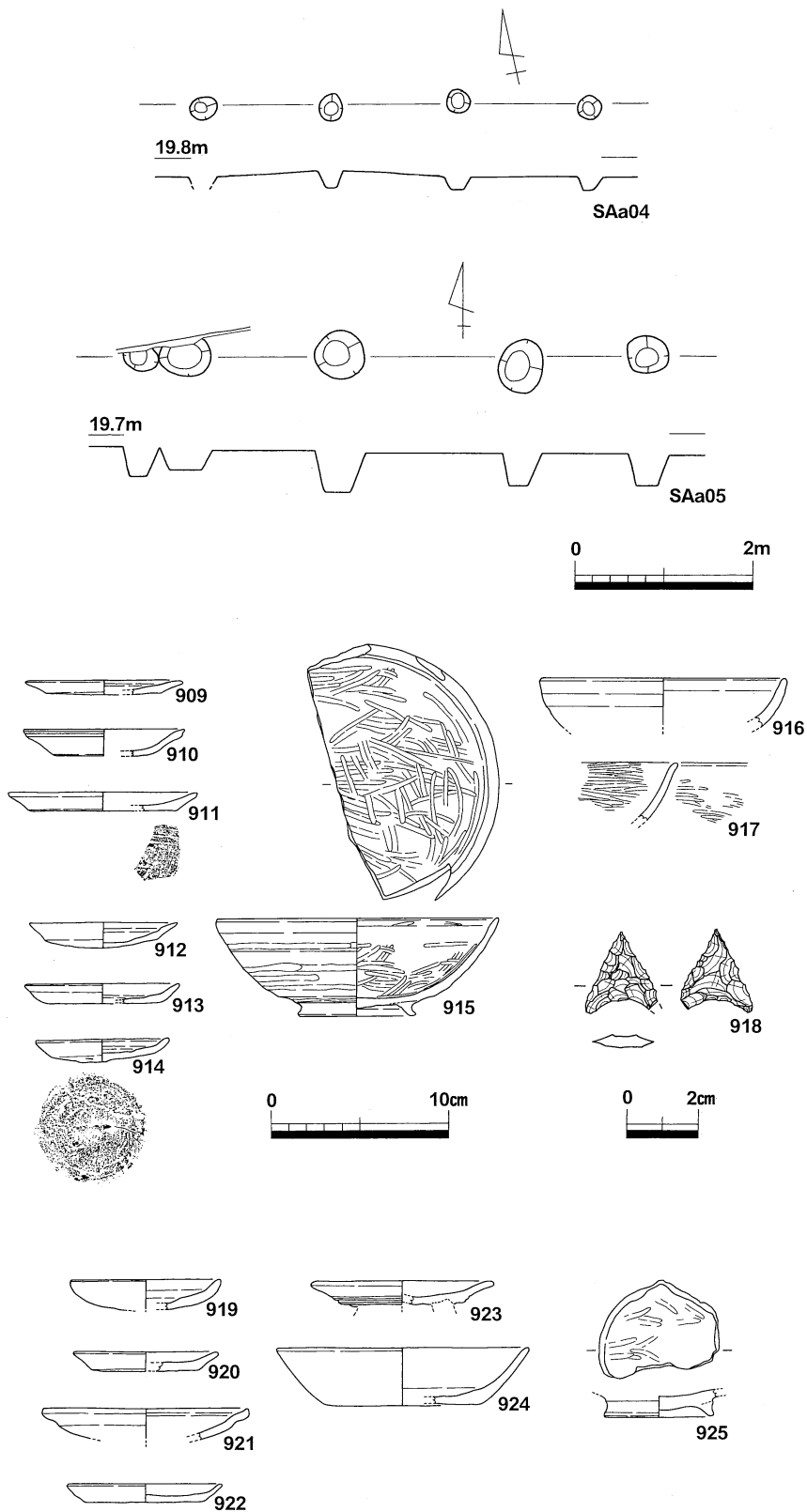
I-10、I-11区の境界(X=143.099、Y=52.250付近)で検出した柵列である。4基の柱穴が直線に並ぶもので全長4.5mを測る。方向は座標北から78度西に振っている。東端の柱穴から土師器の杯か小皿の小片が出土している。

S A a 05

I-11区(X=143.105、Y=52.260付近)で検出した柵列である。5基の柱穴が直線に並ぶもので全長6mを測る。方向はほぼ東西方向である。器種不明の土器小片が出土しているが時期を確定できるものではない。しかし、周辺の中世の遺物出土する柱穴と同一埋土であることから中世に所属すると考えられる。

そのほかの柱穴出土遺物

第190図909~918は、S A a 04、05(X=143.100、Y=5

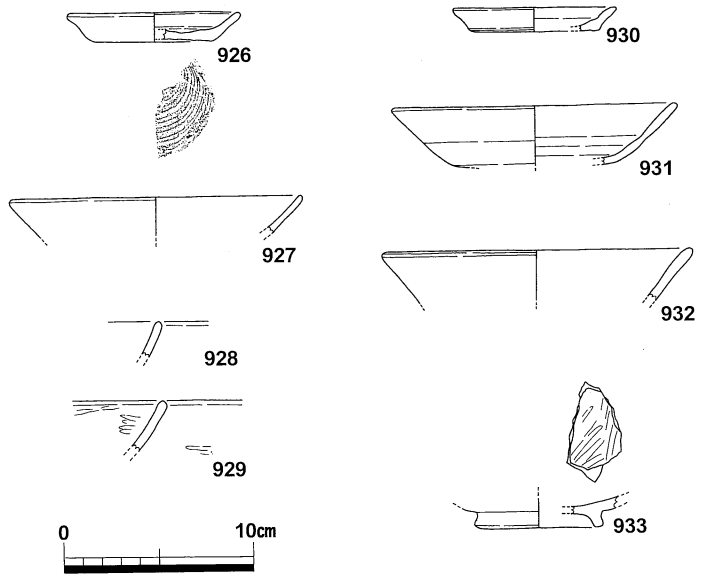


第190図 SAa04、05 平・断面図、周辺出土の遺物実測図



2.250) 付近に散在する柱穴から出土した遺物、919～925は、この付近の包含層中から出土した遺物実測図である。

909はS P a 16から出土した土師器小皿である。器高が低く、口縁部は外反気味の形状をなす。910はS P a 17出土の土師器小皿である。底部から明瞭な稜をもたずに口縁に移行し、口縁端部は外面で面取りをしたような形状をなす。911はS P a 18から出土した土師器小皿である。底部に板目状の圧痕が見られる。912はS H a 11出土の土師器小皿である。底部は歪みのため下方に膨らんでいる。913、914はS P



第191図 U-27付近柱穴出土遺物実測図

a 19出土の土師器小皿である。914の底部に回転ヘラ切りが認められる。915はS P a 20出土の内面黒色の黒色土器碗である。高台は外側に踏ん張り、内面ヘラミガキ、外面は間欠的に回転ヘラミガキが施される。916はS P a 21出土の須恵器口縁部の小片、917はS P a 16出土の瓦器碗の口縁部小片である。口縁端部はわずかに外反気味に丸く収める。口縁端部付近外面の窪みは不明瞭である。

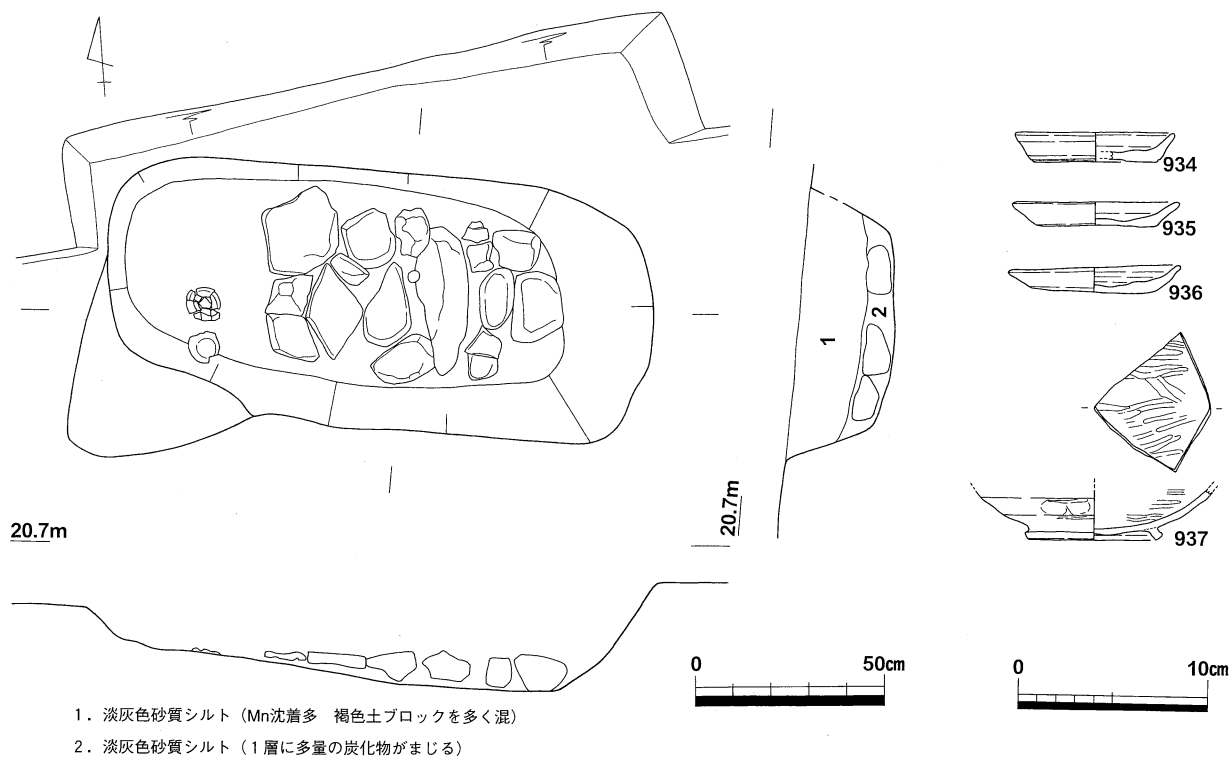
919～922は土師器小皿である。921は器厚4mmほどの「て」の字状口縁のものである。923は土師器高台付小皿である。高台部は欠落する。924は土師器杯、925は内面黒色の黒色土器碗の底部破片である。

第191図926～933は、I-11区東端部のX=143.115、Y=52.345付近に散在する柱穴から出土した遺物実測図である。926、927はS P a 23から出土したもので、926は底部糸切りの土師器小皿、927は土師器杯の口縁部である。928、929はS P a 24から出土したもので、928は土師器杯の口縁部、929は黒色土器碗の口縁部である。内面と口縁部外面が燻されている。930は土師器小皿、S P a 25から出土した。931はS P a 26から出土した土師器杯、932はS P a 27から出土した土師器杯、933はS P a 28から出土した内面黒色の黒色土器碗である。

## ② 墳墓

S T a 08

I-10区(X=143.085、Y=52.144付近)で検出した火葬墓である。平面形は長辺145cm、短軸68cmの隅丸長方形で、主軸の方向はほぼ東西方向を向く。深さは東端で約30cm、西端で約10cmを測り、断面形は逆台形状を呈する。底は東に深く、西に向かって浅くなるが、床面に凹凸はなく、ほぼ平らである。床面の東側には礫が敷き詰められ、西端部では礫は見られない。礫は東のものが大型で、西に向かって扁平なものに変わっているが、礫上面はほぼ水平に揃えられている。礫間と礫上面には炭化物が多量に混じっており、礫上面に被熱痕の見られるものもある。土坑西側には土師皿2枚が副葬されていた。南側の1枚(936)は見込み部を上、北側の1枚(935)は底部を上置かれていた。このほか礫間から土師器碗の破片(937)が出土しているほか、埋土中から土師器小皿の破片(934)ほか数点の中世の土器片が出土している。



第192図 ST a 08 平・断面図、出土遺物実測図

③ 溝状遺構

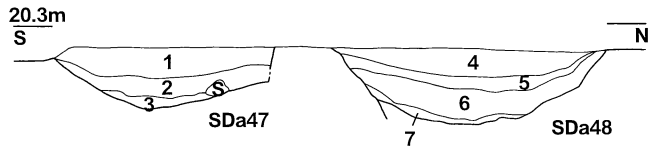
SD a 47~49

I-10、17区 (X=143.090、Y=52.180付近) で検出した3条の溝状遺構である。SD a 47は座標北から東へ13度振った方向で北流し、調査区北端で東西方向の流れに屈曲し、座標北から81度西に振った方向で東流する。北流する流れが屈曲部より北側に続くのかどうかは不明である。SD a 48は、SD a 47の東西方向の流れの北岸を壊して、SD a 47と平行する溝、SD a 49はSD a 48の北側でSD a 48と平行する溝である。これらには切り合い関係があり、SD a 47が古く、48、49の順に新しい。いずれの溝からも若干量の土器片が出土したのみである。

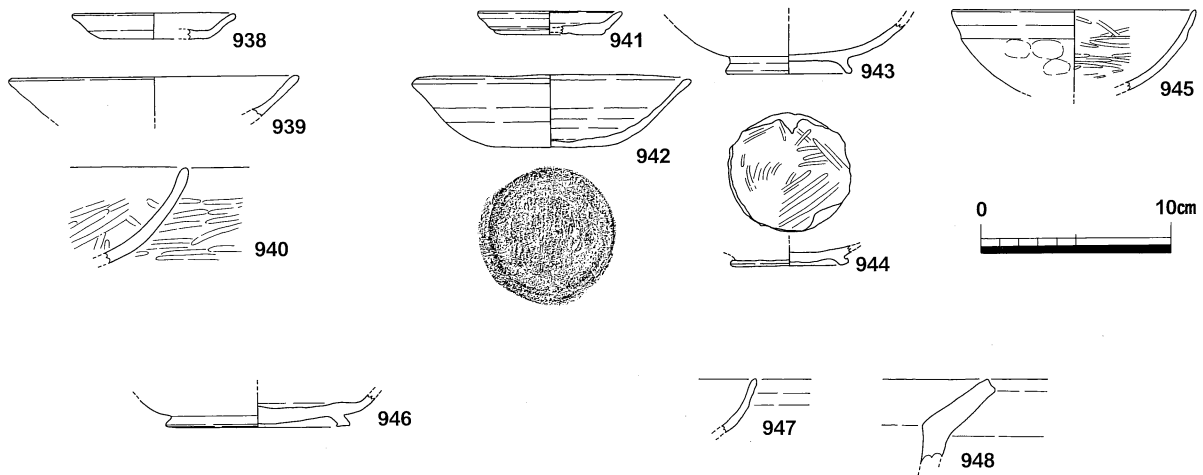
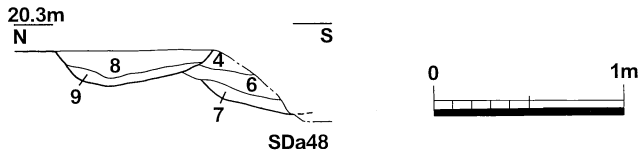
SD a 47は、幅2m、深さ0.3mほどの規模で、断面形は皿状を呈する。第193図938~945はSD a 47から出土した遺物実測図である。938は土師器小皿。939は土師器の口縁部、杯と思われる。3mm以下の砂粒が多く含まれる。940は土師器椀。器壁が厚い。941、943、944は下層出土のもので、942、945は上層から出土した。942は完形に近い状態で出土した土師器杯、944は内面黒色の黒色土器椀、945は和泉型の瓦器椀である。

SD a 48は、幅1.3~1.6m、深さ0.5mほどの規模で、断面形は皿状を呈する。第193図946はSD a 48から出土した須恵器底部である。

SD a 49は、幅0.5m、深さ0.3mほどの規模で、断面形は皿状を呈する。第193図947、948はSD a 49出土の遺物で、947は瓦質土器椀、948は土師器土鍋の口縁部の小片である。



1. 淡褐色中砂
2. 乳灰白色細砂
3. 褐色砂質シルト (礫含)
4. 淡茶褐色粘質シルト (炭、礫含)
5. 茶褐色粘質シルト (ブロック状に砂が入る)
6. 淡灰黄色砂質シルト (Mn多)
7. 明灰褐色中～粗砂 (ブロック状に細砂混)
8. 淡灰褐色中～細砂 (炭化物少量)
9. 灰褐色中砂



第193図 S D a 47～49 断面図、出土遺物実測図

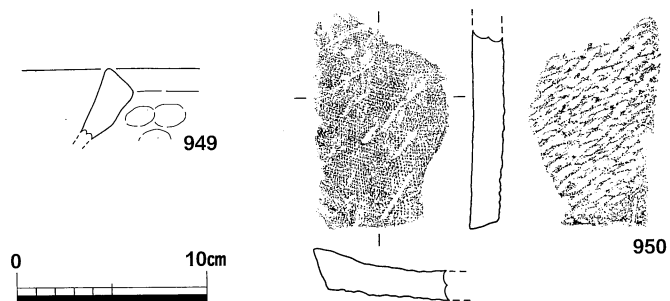
S D a 50

I-10、17区 (X=143.090、Y=52.200付近) で検出した溝状遺構である。S D a 49と切り合い関係があり、S D a 49より新しい。座標北より7度ほど東に振った方向に直線に流れる。溝幅は約3.7m、深さは0.4mほどで、西肩付近に人頭大の石材を4石ほど積み上げた石垣を構築しているが、攪乱が多く全容は不明である (断面図は第148図を参照されたい)。S D a 50からは若干量の土器片が出土したのみである。第194図はS D a 50出土の遺物実測図である。949は土師器こね鉢、950は須恵質の平瓦片である。凹面は布目、凸面はタタキ、端部は板ナデで整形する。

S D a 51

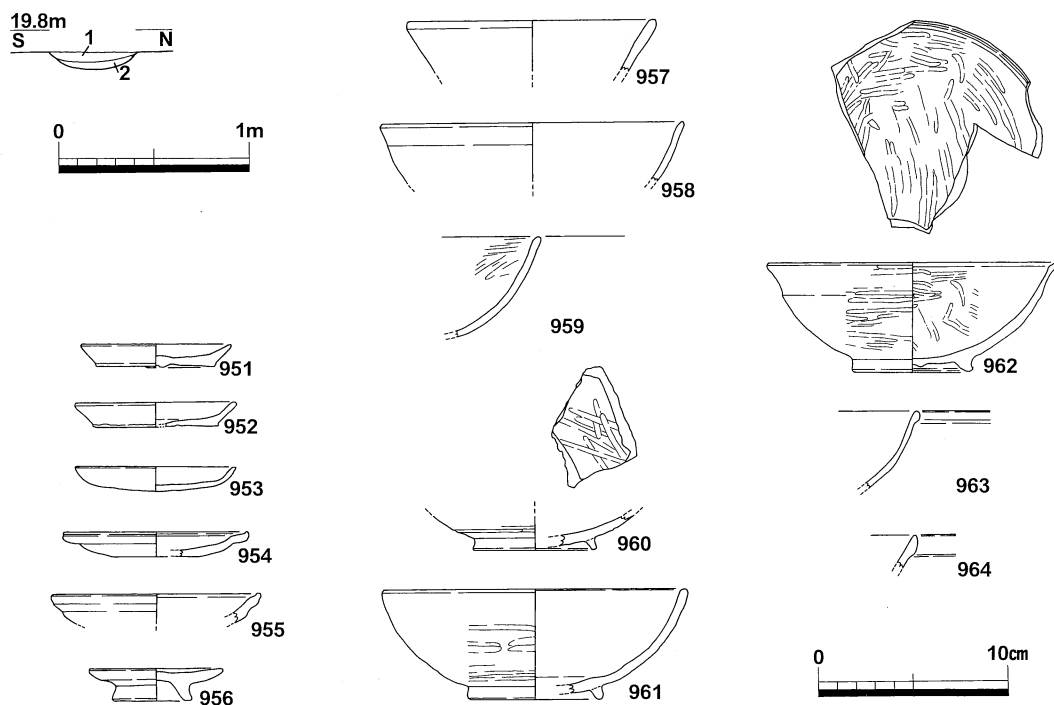
I-11区 (X=143.100、Y=52.249付近) で検出した小規模の溝状遺構である。座標北から12度東に振った方向に直線に流れ、南は消滅する。検出長約7.5m、途中で約3mの長さの小溝が直角方向に派生している。溝幅0.5m、深さ5cmほどの規模で、断面形は浅い皿状を呈する。

S D a 51からはビニール袋 (14×10cm) 1袋分の土器片が出土した。第195図951～964はS D a 51出土の



第194図 S D a 50 出土遺物実測図

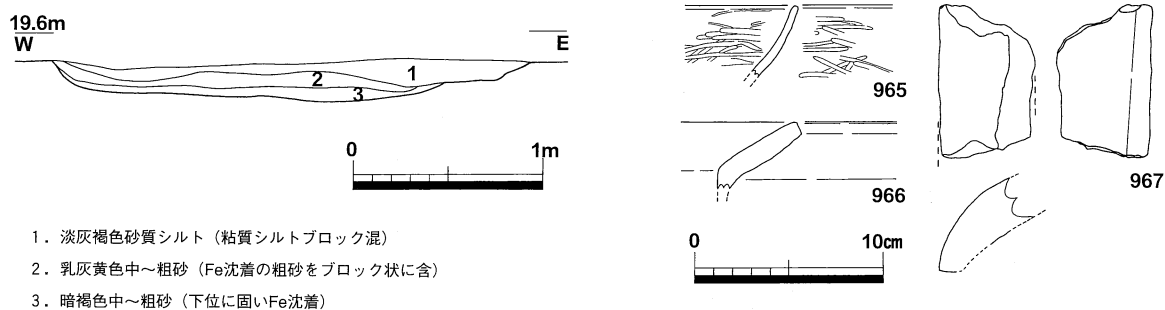
遺物実測図である。951～955は土師器小皿である。954、955は「ての字状口縁」の小皿である。954は器厚4mm、口径9.8cm、口縁端部外面に1条の沈線が巡る。956は土師器の高台付小皿である。8mmほどの高く外側に踏ん張る高台をもち扁平な皿部をもつ。957は土師器の椀と考えられる小片。958～960は内面黒色の黒色土器椀である。961は瓦質土器椀。瓦質の焼成で、口縁部内外面が黒色化する。外面に回転ヘラミガキが幅4mm、10mmほどの間隔で施されている。962は和泉型瓦器椀である。口縁端部付近外面はナデにより凹面ができています。外反する口縁端部内面に段が形成される。964は胎土中に黒色粒の混じる白磁椀である。玉縁状を呈する口縁をもつ。



第195図 S D a 51 断面図、出土遺物実測図

S D a 52

I-11区 (X=143.105、Y=52.269付近) で検出した溝状遺構である。座標北から11度ほど東に振った方向で直線に流れる。溝幅2.4～2.7m、深さ0.3mほどの規模で、断面形は浅い皿状と呈する。S D a 52からはビニール袋 (14×10cm) 2袋分の土器片が出土している。器種不明の細片が多い。第196図965～967は

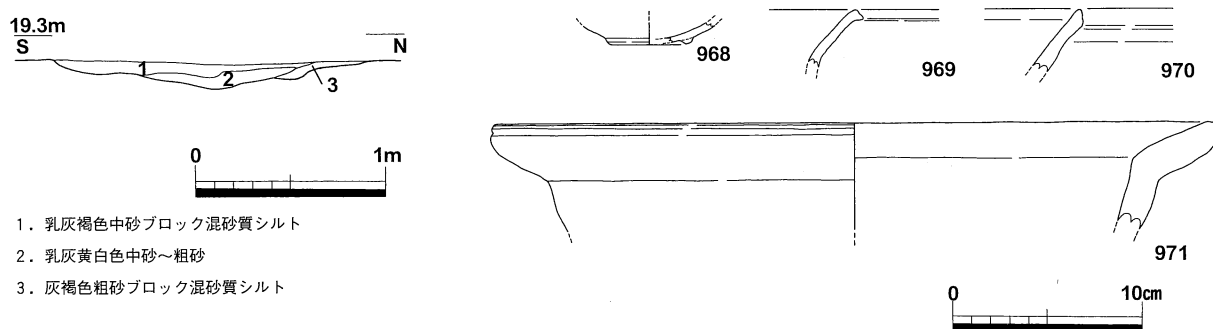


第196図 S D a 52 断面図、出土遺物実測図

S D a 52出土の遺物実測図である。965は黒色土器碗である。内面および口縁付近外面が燻されている。966は土師器土鍋の口縁部小片。磨滅する。967は土師質の丸瓦片である。凹面に線状の擦痕が複数認められる。

#### S D a 53

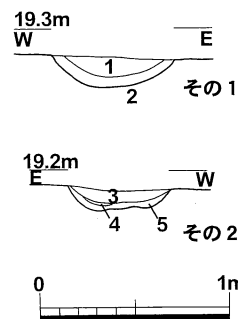
I -11区 (X=143.113、Y=52.320付近) で検出した溝状遺構である。座標北から80度ほど西に振った方向で直線に流れる。溝幅約1.1m、深さ0.1~0.2mを測る。S D a 53からはビニール袋 (21×10cm) 1袋分の土器片が出土した。第197図968~971はS D a 53出土の遺物実測図である。968は瓦器碗の底部小片である。断面台形の高台が貼り付けられる。969は須恵器壺の口縁部小片。端部は外側に摘み出し断面三角形の形状をなす。970は須恵器の口縁部小片である。斜め上方に延びる口縁で端部は上方に摘み上げている。壺と思われる。971は土師器土鍋の口縁部片である。丸く収める端部に1条の沈線が見られる。



第197図 S D a 53 断面図、出土遺物実測図

#### S D a 54

I -11区 (X=143.117、Y=52.329付近) で検出した溝状遺構である。座標北から11度ほど東に振った方向で直線に流れる。溝幅0.5~0.7m、深さ0.2mを測る。断面形は皿状を呈する。S D a 53と切り合い関係があり、S D a 54の方が新しい。若干量の土器片が出土している。図化不能であるが、須恵器片1、土師皿もしくは杯の小片2点が含まれている。時期を確定させる資料に欠けるが、調査担当者の判断や埋土の様相から、中世のものと考えられる。



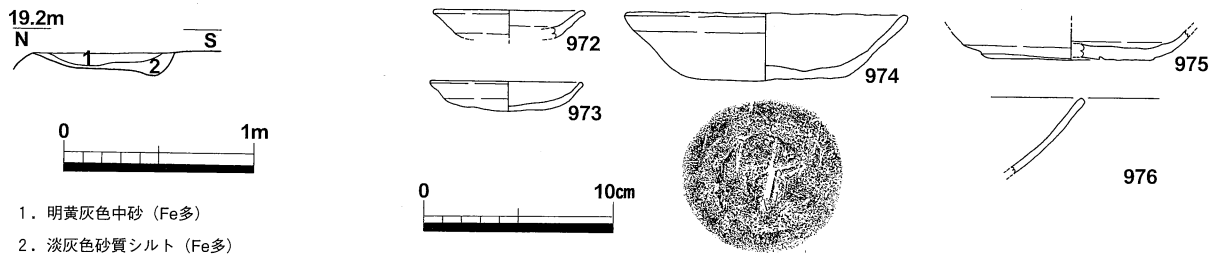
1. 乳灰白色砂質シルト
2. 灰色砂質シルト (ベースブロック少量混)
3. 灰色中砂質シルト
4. 茶灰色粘質シルト (ベースブロック)
5. 暗灰色粗砂質シルト (ベースブロック少量混)

第198図 S D a 54 断面図

#### S D a 55

I -11区東端 (X=143.117、Y=52.350付近) で検出した溝状遺構である。座標北から83度ほど西に振った方向で直線に流れる。検出長はわずかに2.5mほどで、調査区内の溝の延長部に当たる地点でも見出せない。

深さ0.1mほどの浅いものなので、消滅しているものと考えられる。幅は0.8mで、断面形は浅い皿状を呈する。若干量の土器片が出土している。第199図972~976はS D a 55出土の遺物実測図である。972は土師器小皿。973は瓦質土器の小皿である。手捏ねの後に口縁部と内面に回転ナデ調整を加えている。内面にはヘラミガキが見られる。974はほぼ完形で出土した。口径14.6cmを測る土師器杯である。975も土師器杯、976は須恵質の碗である。

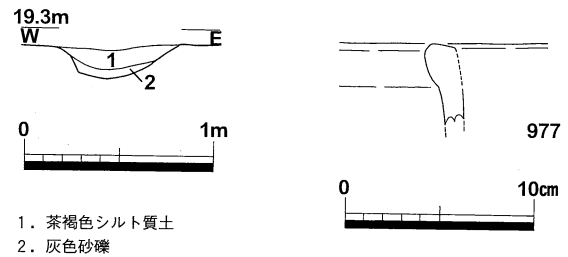


第199図 S D a 55 断面図、出土遺物実測図

(5) 近現代、時期不明

S D a 56

I-11区 (X=143.115、Y=52.322付近) で検出した溝状遺構である。S D a 46、53と切り合い関係があり、最も新しい。また、座標北から約77度西に振った方向に流れる幅約4mの昭和19年埋没の溝とも切り合い関係があり、S D a 56の方が新しい。S D a 56は幅0.5~1.4m、深さ0.2mほどの規模で、座標北から12度ほど東に振った方向に直線に流れている。第198図977は土師質の甕である。口縁部を内側に肥厚させ、端部頂部に平坦面をつくる。



第200図 S D a 56 断面図、出土遺物実測図

S K a 78

I-10区 (X=143.076、Y=52.135付近) で検出した土坑である。平面形は円形で、直径約1.6mを測る。断面形は皿状を呈し、深さは0.15mほどである。土器小片が数点出土したが、時期を確定できるものはなかった。

S K a 79

I-17区 (X=143.072、Y=52.136付近) で検出した土坑である。平面形は細長い隅丸長方形で、断面形は浅い皿状を呈する。長軸1.75m、短軸0.5m、深さ0.08mを測る。遺物は出土しなかった。

S D a 57、58

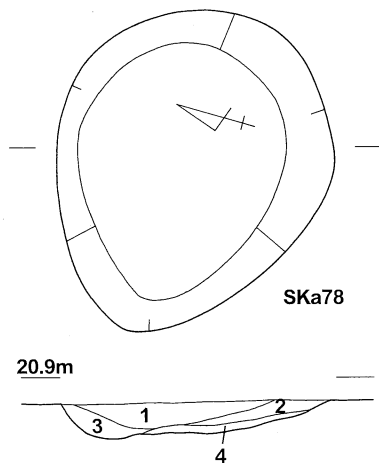
I-17区 (X=143.075、Y=52.143付近、X=143.075、Y=52.147付近) で検出した溝状遺構である。S D a 57は幅0.5m、深さ5cmほどの規模でS字状の平面形である。南側はS T a 02に壊される。遺物は出土しなかった。S D a 58は幅0.4~1m、深さ5cmほどの規模で南北方向に直線状の平面形で南側で東南方向に緩やかに折れ曲がっている。遺物は出土しなかった。S D a 57、58は溝状遺構としたが、自然形成の落ち込みである可能性もある。

S K a 80

I-17区 (X=143.076、Y=52.165付近) で検出した土坑である。南側は調査区外に延びる。遺物は出土しなかった。

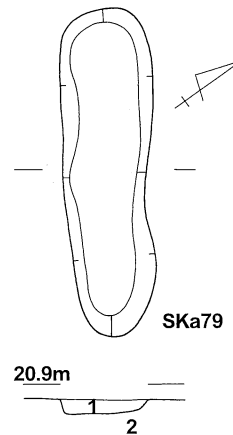
S K a 81

I-10区 (X=143.084、Y=52.180付近) で検出した土坑である。南側はI-17区との境界の幅1m未掘



SKa78

20.9m

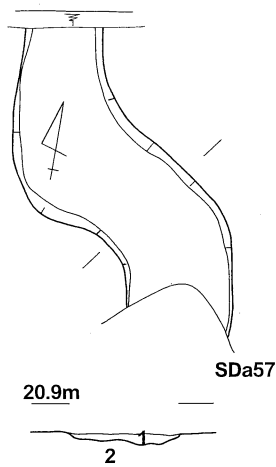


SKa79

20.9m

1. 淡灰褐色シルト質粗砂 (Mnの大粒の沈着多)
2. 濁灰褐色シルト質粗砂 (0.5~10cm大の垂円礫含)
3. 暗灰褐色粗砂 (若干シルト分含)
4. 灰褐色粗砂 (若干シルト分含)

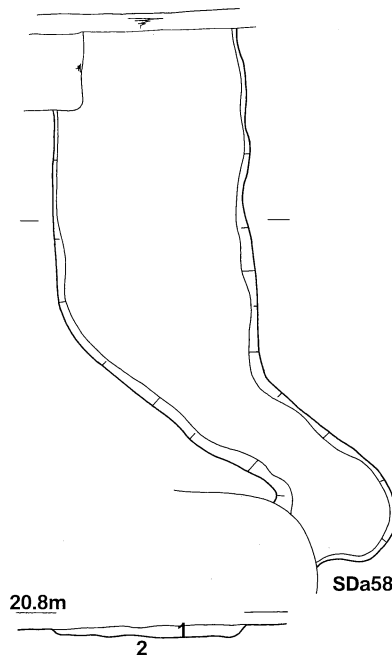
1. 灰色シルト質土  
(Mn、Fe含 0.5cm程の礫わずかに含)
2. 明灰色シルト質土 (Mn、Fe含 地山)



SDa57

20.9m

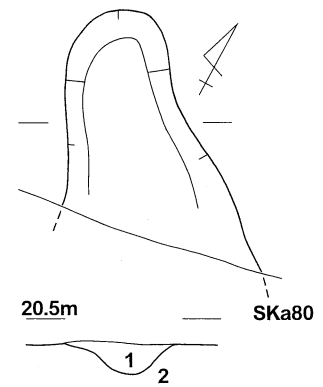
1. 茶褐色シルト質土
2. 灰色砂礫



SDa58

20.8m

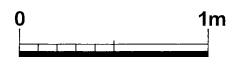
1. 茶褐色シルト質土
2. 灰色砂礫



SKa80

20.5m

1. 暗茶灰色シルト質土 (Mn、Fe含)
2. 灰色 (やや黄色をおびる) 極細砂質土 (Fe含)

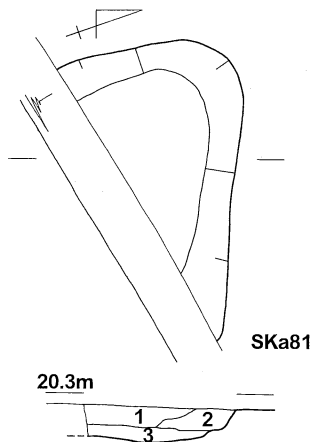


第201図 SK a 78~80、SD a 57、58 平・断面図

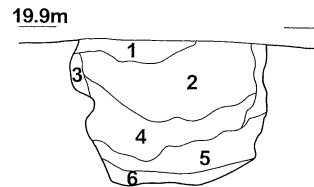
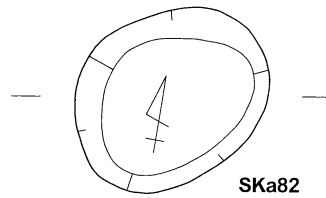
部分に延びる。遺物は出土しなかった。

SK a 82

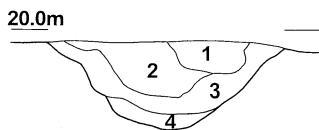
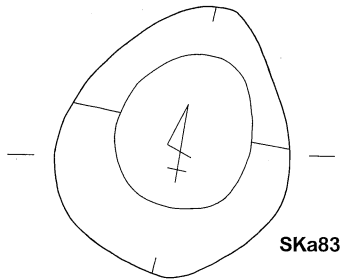
I-10区 (X=143.098、Y=52.224付近) で検出した土坑である。平面形は径0.9~1.1mの円形、断面形は深さ0.8mのU字形を呈する。調査時には井戸の可能性を考えたが、湧水層には達していないため土坑と考える。遺物は出土しなかった。



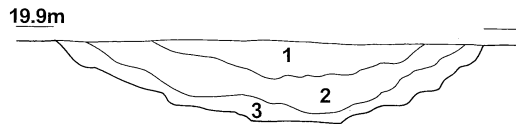
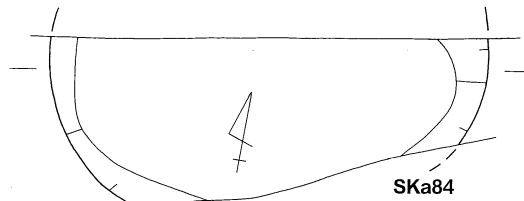
1. 淡灰褐色砂質シルト (Mn粒多)
2. 明灰色砂質シルト
3. 灰褐色中砂



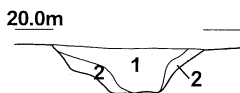
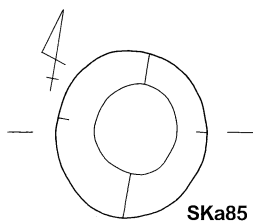
1. 暗茶褐色砂質シルト
2. 黒褐色粘質シルト
3. 暗褐灰色礫混粗～中砂 (Mn粒多、地山ブロック)
4. 濃灰色礫混中砂
5. 黒灰色粘質シルト (炭片多く含)
6. 黒灰色粘土 (水含んでしまり悪い)



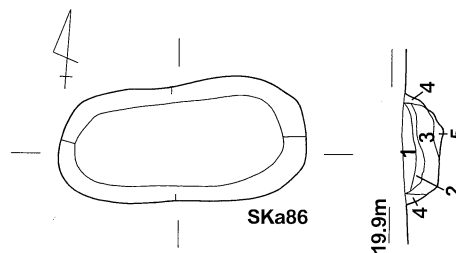
1. 黒褐色粘質シルト (礫少量混)
2. 淡茶褐色砂質シルト (Mn粒、炭片含)
3. 暗茶褐色砂質シルト (やや粘性強)
4. 淡灰茶色中砂



1. 黒褐色粘質シルト (焼土を少量含む)
2. 暗茶褐色砂質シルト (乳灰白砂ブロックを多く含む)
3. にごった乳灰色中～粗砂質シルト

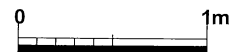


1. 淡灰褐色中砂 (2層がブロック状にまじる)
2. にごった乳黄灰色中砂



1. 淡茶灰色粘質シルト (黄色土ブロック含)
2. 茶灰色砂質シルト
3. 暗茶灰色粘質シルト (黄色土ブロック多く含)
4. にごった黄灰色中砂 (地山土崩壊土)
5. 灰褐色中砂

第202図 SKa81～86 平・断面図





S K a 83

I-10区 (X=143.091、Y=52.215付近) で検出した土坑である。平面形は径1.2~1.5mの不整形円形、断面形は深さ0.5mの深い皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

S K a 84

I-10区 (X=143.100、Y=52.231付近) で検出した土坑である。北側は調査区外、南側はS T a 06によって壊されるが、径2 mほどの円形もしくは楕円形になるものと思われる。深さは0.4mほどで断面形は皿状を呈する。遺物は出土しなかった。S T a 06よりも古い遺構であるが、周辺の弥生時代前期の土坑の埋土と明確な共通性が見出せないため時期不明である。

S T a 85

I-10区 (X=143.091、Y=52.217付近) で検出した土坑である。平面形は径0.8mの円形、断面形は深さ0.25mの皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

S K a 86

I-10区 (X=143.099、Y=52.234付近) で検出した土坑である。長軸1.3m、短軸0.6mの隅丸長方形の平面形で、断面形は深さ0.2mほどの皿状を呈する。主軸方向は座標北より80度ほど東に振った方向である。遺物は出土しなかった。S K a 86はS T a 06の主体部である可能性が考えられたが、墓坑であることを示す根拠は得られなかった。

S K a 87

I-17区 (X=143.088、Y=52.210付近) で検出した土坑である。北側はI-10区との境界の幅1 mの未掘部分に延びる。遺物は出土しなかった。

S K a 88

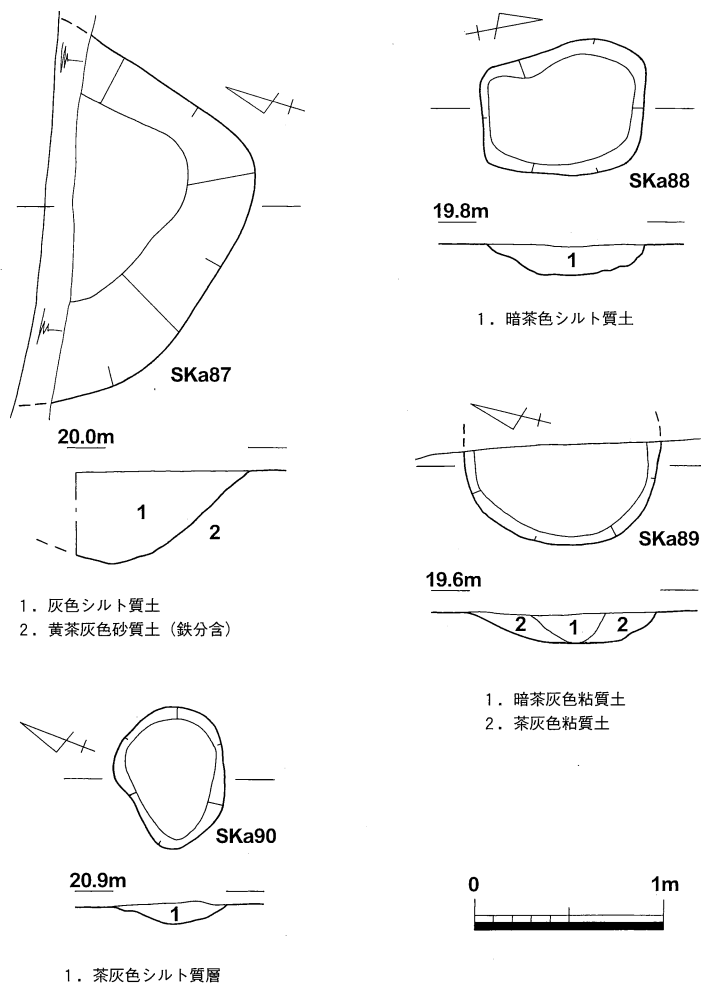
I-17区 (X=143.089、Y=52.230付近) で検出した土坑である。一辺0.8mほどの不整形な形で、断面形は深さ0.15mほどの皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

S K a 89

I-17区 (X=143.096、Y=52.255付近) で検出した土坑である。東側は弥生時代後期と推定されるS D a 41に壊される。遺存部は径1 mほどの半円形を呈し、断面形は深さ0.15 mの皿状を呈する。時期不明の土器細片が若干量出土した。

S K a 90

I-17区 (X=143.089、Y=52.220



第203図 S K a 87~90 平・断面図

付近)で検出した土坑である。長径0.75m、短径0.6mほどの不整形で、深さ0.1mほどの規模である。遺物は出土しなかった。

S K a 91

I-11区 (X=143.105、Y=52.272付近)で検出した土坑である。南側が高松空港供用時の排水溝によって壊されているため、本来の形状は不明である。遺物は出土しなかった。

S D a 59

I-11区 (X=143.100、Y=52.265付近)で検出した溝状遺構である。古代のS D a 45に壊されているため、それ以前の遺構である。幅約0.9m、深さ0.4mほどの規模で、断面形はU字状を呈する。検出長3m、南側は調査区外、北側は高松空港供用時の排水溝で壊され、排水溝以北では検出されなかった。方向は座標北から47度ほど西に振った方向である。遺物は器種不明の素焼きの土器細片が1点出土したのみである。

S K a 92

I-11区 (X=143.114、Y=52.311付近)で検出した土坑である。一辺1.4×1.3mの胴張りの方形で、深さ約0.3mの規模である。西側に至近にS K a 93が所在し、いずれも中世のS D a 53を壊している。遺物は出土しなかった。

S K a 93

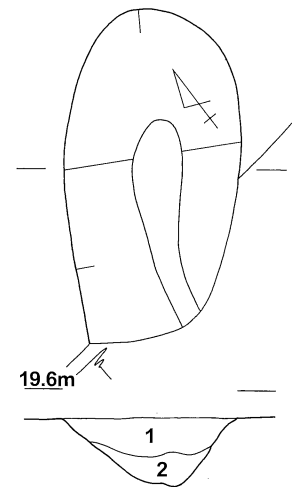
I-11区 (X=143.114、Y=52.310付近)で検出した土坑である。直径1.1mの円形で、深さ0.15mほどの規模である。遺物は出土しなかった。

S K a 94

I-11区、S K a 93に南接する土坑である。S K a 93に壊されている。直径0.85mほどの円形で、深さ0.15mほどの規模である。遺物は出土しなかった。

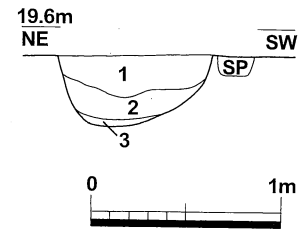
(6) 包含層等出土の遺物

第207図978、979は南地区の包含層から出土した遺物実測図である。978は弥生時代前期の甕である。土器の最大径が口縁部ではなく中位付近にあり、上半は内湾しながら逆L字状の口縁にいたる形態である。底部はやや上げ底状の平底である。上から、三条を単位とする櫛描き多条沈線、複線の山形文、櫛描き多条沈線、山形文、櫛描き多条沈線、三角形の列点文の順で施文される。また、口縁頂部の平坦面に二条の三角形の列点文が施されている。978は全体の



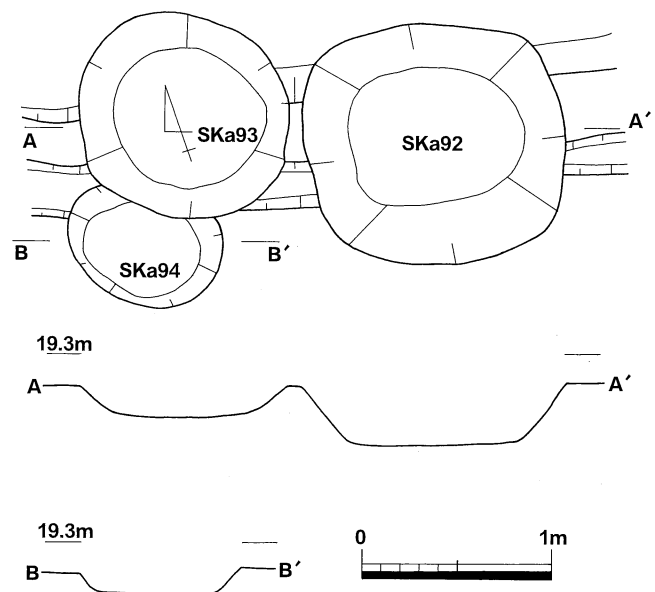
- 1. 茶褐色砂質シルト
- 2. 暗褐色粘質シルト

第204図 SKa91 平・断面図

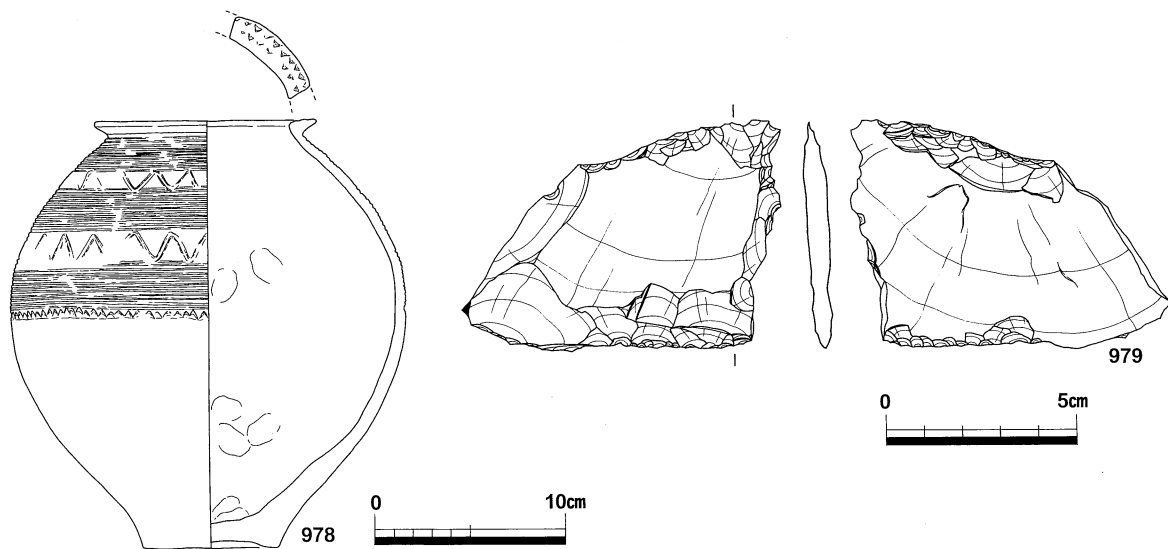


- 1. 暗茶褐色砂質シルト
- 2. 暗灰茶褐色粘質シルト(ベースブロック含)
- 3. 暗灰黄褐色中～粗砂

第205図 S D a 59 断面図



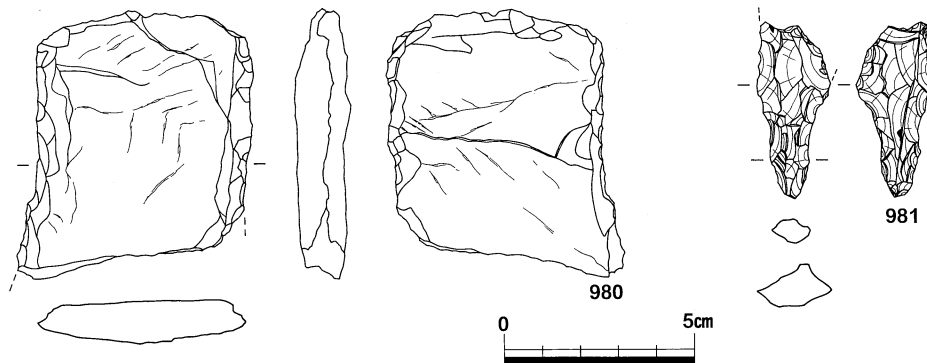
第206図 SKa92～94 平・断面図



第207図 南地区包含層出土遺物実測図

5 / 8ほど遺存しており、本来遺構に伴っていた可能性があるが、詳細不明である。979は細部調整のある剥片である。両長側辺に刃部を整形するが、途中で終わっている。

第208図の980は機械掘削中、981は攪乱から出土した遺物実測図である。980は緑泥片岩製で、形状から石斧基部の破片と思われる。981はサヌカイト製の石錐と考えられる。



第208図 南地区機械掘削、攪乱出土遺物実測図

## 第4章 自然科学調査の成果

### 第1節 土壤中火山灰抽出分析

#### 1. 高松市域で検出された火山灰層

空港跡地遺跡のI-9区(平成3年度調査)で火山灰(テフラ)層を検出し、(株)京都フィッシュン・トラックに同定を委託した。第四紀の火山灰層の検出は、明確な示準層として平野の形成史の検討に貴重な情報を提供する。また、21,000~22,000年前の降灰とされるAT(始良丹沢火山灰)と旧石器時代遺物との関係が把握できる場合もあり、火山灰層の検出に今後とも注意を払う必要がある。

これまで高松市域においては、丘陵縁辺部や臨海部の地下からATが、また、香東川扇状地の旧中州の間の谷状凹地から鬼界アカホヤ火山灰の降灰層準が確認されている。以下に概要を記す。

高松市西部の堂山山塊に付着する緩斜面上に位置する中間西井坪遺跡では、層厚5~10cmのAT層より上位から8000点以上の旧石器が出土しており、現在当センターにおいて整理作業が進められている(正式報告は2001年度刊行予定)。

高松市木太町に所在する木太本村Ⅱ遺跡では、瀬戸内海に臨む三角州性堆積物の下位からATが検出されている。検出位置の標高はT.P.マイナス0.6mで層厚は約1cmである。

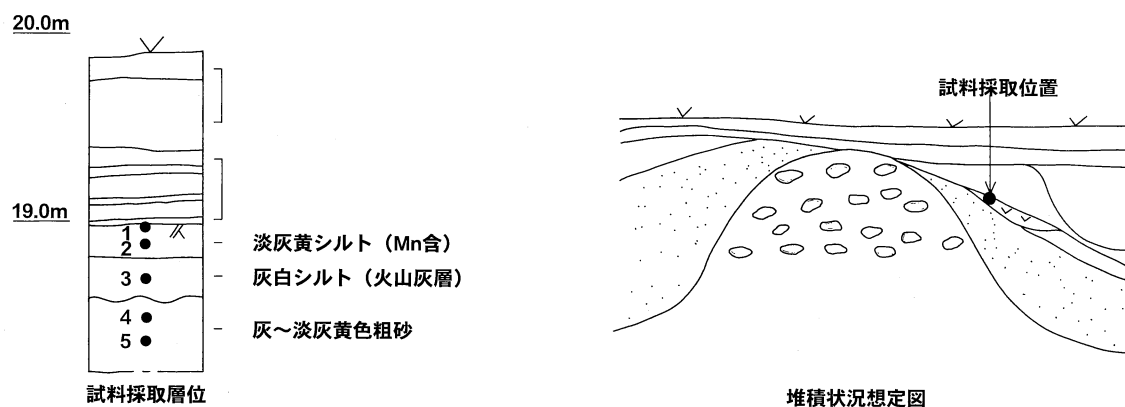
(川村教一「高松市木太町の地下から産した火山灰層について 火山ガラスの屈折率測定と電子プローブマイクロアナリシスによる同定」『木太本村Ⅱ遺跡 宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会 1998年)

空港跡地遺跡の火山灰層検出地点の北約1.5kmの高松市伏石町に所在する井手東Ⅰ遺跡は、香東川が形成した扇状地上に位置する。この扇状地の骨格をなす旧中州の間を埋める堆積物中から鬼界アカホヤ火山灰層が検出されている。検出地点は幅15m以下の谷状地形の凹地内で、層厚10cmを測る。(『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四冊 井手東Ⅰ遺跡』高松市教育委員会 1995年)

高松市域の埋蔵文化財の発掘調査により検出された火山灰層は上記のとおりであるが、ボーリングコア中からもしばしば火山灰層が検出されている。

#### 2. 空港跡地遺跡の火山灰層に関する所見

今回、火山灰層が検出されたのは北地区のSK a 23東側(X=143.215、Y=52.224付近)である。標高



第209図 火山灰層検出位置断面図

18.7m付近で層厚は約20cm、下位に灰～淡灰黄色の粗砂層が堆積している。この粗砂層は水平方向に層相の変化が著しく、北側ではシルト質に急変する。なお、火山灰層は西地区のSK a 55付近の深掘りでも確認されており、両者の状況から第2章の扇状地の骨格を形成する旧中州に付着するように堆積する細粒堆積物中に挟在するものと考えられる。この状況は、先述の井手東I遺跡の状況と巨視的に一致するものと考えられる。

(株)京都フィッシュン・トラック

### 3. 処理工程

#### (1) 色調判定

未処理試料50～100gを白紙上にとり、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修，1970）により判定表示する。

#### (2) 前処理

まず半湿潤状態の生試料を30.0g秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2ℓビーカー中で数回水替えしながら水洗し、超音波洗滌を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度1～2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗滌水の交換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別（60, 120, 250mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250mesh（1/8～1/16mm）粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤（ $N_d = 1.54$ ）を用いて岩石用薄片を作製した。

#### (3) 重鉱物分析

主要重鉱物（カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・アパタイト・ジルコン・イデイングサイト等）を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有が少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理により重鉱物を凝集することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

#### (4) 火山ガラス含有率測定

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

##### ①火山ガラス含有率

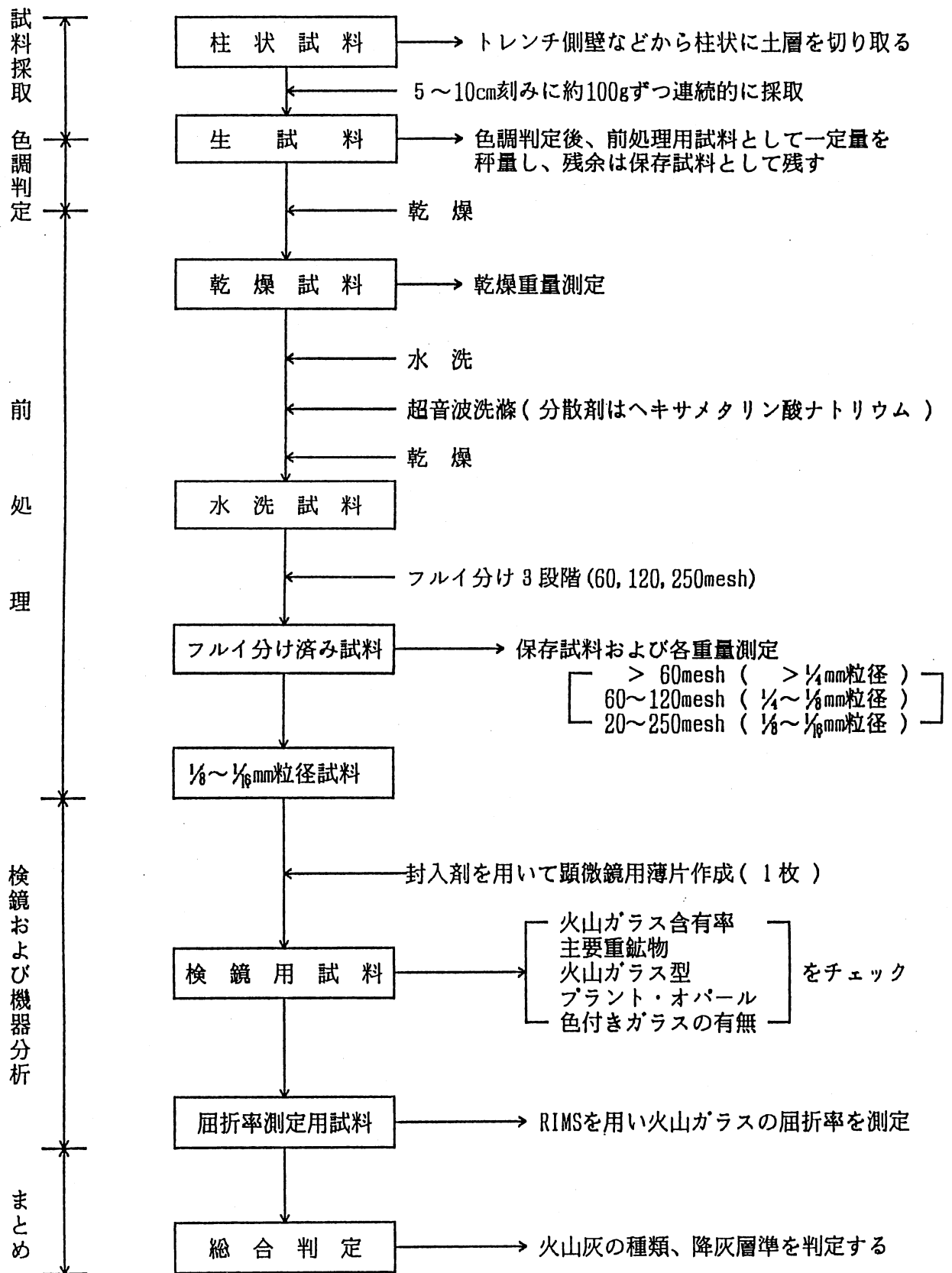
鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物（土粒子やアモルファス粒子を含む）を識別し、各含有率を測定した。

##### ②火山ガラス型

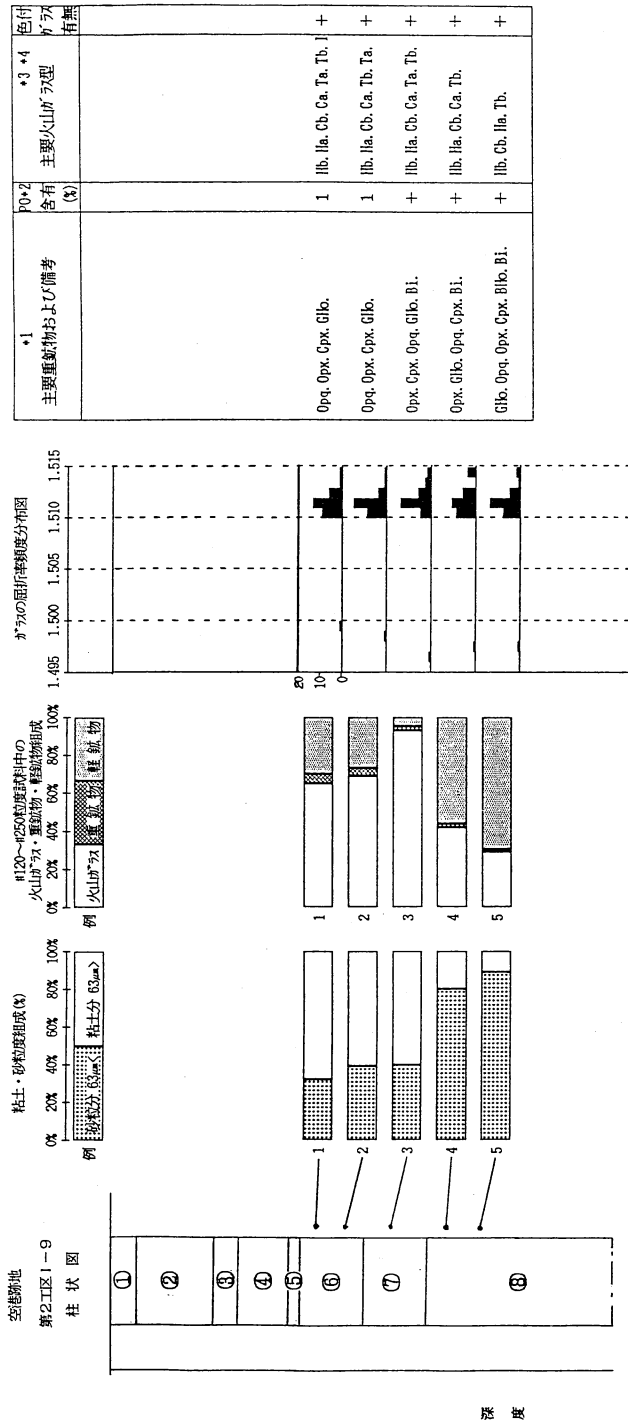
吉川（1976）の分類に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求め表示した。なお吉川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

##### ③プラント・オパール含有

鏡下でしばしばプラント・オパールが識別されるため、その有無と、比較的多い場合には全粒子に対するプラント・オパール含有率を半定量的に示した。



第4表 土壤中火山灰（火山ガラス）抽出分析処理順序表



第210図 試料採取層準土層模式柱状図および分析結果

- \*1 主要重鉱物の略称と鉱物名  
 Ol: カンラン石 Opx: 斜方輝石 Bt: 褐色普通角閃石  
 Bl: 黒雲母 Gar: ザクロ石  
 \*2 PO: プラント・オパール含有率 or 有無  
 \*3 主要ガラス型の名称 (吉川, 1976)  
 Hs, Hd: 扁平型 (バブルウォール型)  
 \*4 (吉川, 1976) 以外のガラス型の略称  
 SG: スコリア質ガラス  
 Ca, Ch: 中間型 (軽石型) Ta, Tb: 多孔質型 (軽石・繊維状型)  
 I: 不規則型

第210図 試料採取層準土層模式柱状図および分析結果

#### ④色付ガラスの有無

淡褐～淡紫色を呈する色付ガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付ガラスの有無を示した。なおここでいう色付ガラスには、スコリア（塩基性火山砕屑物）中にしばしば含まれる赤褐、褐、黄、緑色などのガラスは含まれない。

#### (5) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により調整・保存された120～250mesh（1/8～1/16mm）粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS）※(1)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として一試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

なお具体的に測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ（本報告書では省略している）、次に述べるように表示されている。まず最上位に試料名（SeriesおよびSample Name）が印刷され、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。Ndの式はその浸液温度から屈折率を換算するもの、Ndは屈折率、tは温度を示す。この式は一次式であり火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度が測定によって得られるので、この式から火山ガラスの屈折率が計算される。

$(As. + De.) / 2$ は合致温度を上昇させた時（Ascent）と下降（Descent）の平均値として求めた時の意味であるが、複雑さを避けるため測定温度は表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみが表示されている。測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。

count,min,max,range,mean,st.dev,skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。

\*ひとつが1個の火山ガラスである。

#### 4. 分析結果および考察

今回得られた分析結果は集約され、前掲の第210図に表示されている。これらの分析情報の中で考古学的に価値をもつものは、編年上意味のあるテフラ（広域テフラ）の降灰層準を合理的に認定する根拠を与える情報である。具体的には、テフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や含有量比の情報が最も重要となる。

一般に土壤中に含まれる重鉍物の分析が広く行われているが、重鉍物分析結果をテフラ降灰層準との関係で議論する場合には十分な注意が必要である。その理由は、土壤中の重鉍物は母岩起源のものを含むのが普通であり、必ずしもテフラ起源とのみ特定することができないからである。しかも同一種類の鉍物でもその組成上かなりの多様性をもつことが普通であり、純粹にテフラ起源の重鉍物のみを識別することは困難が多い。このため、今回の分析結果の考察においては、重鉍物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざるを得ないことをお断りしておきたい。

さて火山ガラスから得られる情報に注目すると、今回の試料中には少なくとも2種類の火山ガラスが識別される。それらは、各火山ガラスの特徴をもとに本地域に隣接する近畿地方でのテフラ・カタログ（第5表）※(2)や今回の分析結果（第6表）と対照すると、降灰年代の古いものから始良Tn火山灰(BB5 5)※(3)、鬼界ーアカホヤ火山灰K-Ah(B5-3(U))※(4)に対比するのが自然である。これら2つのテフラのうち、鬼界ーアカホヤ火山灰については今回の分析の結果からI-9区⑦層においてほぼ純粹層が検出



第5表 各遺跡より検出した火山ガラスの特性と琵琶湖ホーリングの火山灰、広域テフラの特性との比較 (竹村・榎原, 1988)

Table 1. Comparison among characteristics of volcanic glasses included in columnar samples at archaeological sites and those of volcanic ashes in Lake Biwa drilling samples and widespread tephras.

比較試料	項目	テフラ名・試料名	岩石と鉱物組成	<sup>14</sup> C年代 (B.P.)	火山ガラスの色と形	火山ガラスの屈折率レンジ (モード)	文献
鳥 浜		No. 6	————	————	T, C	1.499-1.503 (1.501-1.503)	*1
		No. 22	————	————	Ha, Hb (br)	1.510-1.512	*1
		No. 49	軽石質・af, Ho, Bi	————	T, C	1.521-1.524 (1.521-1.523)	*1
		56-54, 51, 50, 48-27	————	————	Ha, Hb	1.497-1.501 (1.498-1.500)	*1
板 井		————	————	————	————	————	————
		P11 No. 18 P11 No. 10	結晶質・Ho, Opx 筋石質	19,600-20,400 21,500-23,600	T Ha, Hb>C, T	1.501-1.504 (1.502-1.504) 1.499-1.502 (1.500-1.501)	*2 *2
京大構内		No. 1	————	————	Ha, Hb (br)	1.508-1.512 (1.509-1.511)	*1
		No. 3, 4, 8, 9, total	————	————	Ha	1.498-1.501	*1
琵琶湖		BB 7	————	————	C, T	1.499-1.504	*3
		B 5-9 (D)	筋石質・Opx, Cpx	————	A (br)	1.509-1.513 (1.509-1.512)	*4, 5
		BB 23	軽石質	————	B, C	1.520-1.524 (1.502-1.504)	*4, 5
		BB 51 BB 55	結晶質・Ho, Opx 筋石質・Opx, Cpx, Ho	———— ————	C A>B	1.501-1.505 1.499-1.502 (1.500-1.501)	*4, 5 *4, 5
広域テフラ		K-Ah	筋石質・Opx, Cpx	6,300	bw>pm (br)	1.508-1.514 (1.501)	*6
		U-Ok	軽石質・af, Bi, Ho	9,300	pm	1.517-1.524	*7
		大山ホーキ	結晶質・Ho, Opx, Bi	20,000	————	————	*8
		AT	筋石質・Opx, Cpx, Ho	21,000-22,000 (24,720)	bw>pm	1.498-1.501 (1.500)	*9 *10

af:アルカリ長石, Opx:斜方輝石, Cpx:単斜輝石, Ho:角閃石, Bi:黒雲母, bw:バブルウォール型, pm:軽石型, br:色付きガラス。  
\*1:竹村・榎原(1988), \*2:竹村・榎原(1987), \*3:YOSHIKAWA(1981), \*4:横山(1973), \*5:横山(1976), \*6:町田・新井(1978),  
\*7:新井ほか(1981), \*8:町田・新井(1979), \*9:町田・新井(1976), \*10:松本ほか(1987)。

第6表 空港跡地第2工区I-9地点における火山ガラス濃集層とその特徴

火山ガラス検出層準				屈折率 (Nd)	主な火山ガラス型	※(c) 対比される 広域テフラ	※(d) 降灰年代	備 考
分布層準	最大濃集層準							
サプルNo.	深度	サプルNo.	深度	地層名				
No. 1 ~ No. 5	————	No. 3	————	①層 淡黄白色シト	1.508 ~ 1.514 最頻値 =1.510 (扁平型)	H型 鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300 B. P.	全分析層準で優勢な火山ガラスが検出されるが、No. 3試料で90%を越す火山ガラス含有量が記録されほぼ火山灰純層と判定でき、降灰層準と認められる。ガラス形態はH型を主とし、濃い色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率がかなり高く、ハドレシヤン酸が観察されるのが特徴。
No. 1 ~ No. 5	————	————	————	————	1.498 ~ 1.501 最頻値 =1.500 (扁平型)	H型 始良Tn火山灰 (AT)	21,000 } 22,000 B. P.	今回の全分析層準で極微量検出されるが濃集度は非常に低く、再堆積によるものと判断され降灰層準を認定することは困難である。無色透明な扁平(バルウイ)型ガラスを主とするが、亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。

※(d)町田 洋ほか(1984): テフラと日本考古学 — 考古学研究と関係するテフラのカatalog — 古文化財の自然科学的研究, 865-928.

され、降灰層準が確定したものと判断される。ここで鬼界ーアカホヤ火山灰と判断した根拠は、以下に述べる特徴的な岩石記載的特性による。すなわち、⑦層の火山灰は $n=1.510\sim 1.515$ と比較的高い屈折率をもつバブル・ウォール型の火山ガラスを主とするテフラで、主な重鉱物としてOpx,Cpx,Opqを含有し、特徴的な濃い色付ガラスや $4\sim 5\mu\text{m}$ 厚のハイドレーション殻が観察される(檀原ほか, 1991) ※(5)ことがあげられる。地層のおよその年代を考慮するとこれらの特徴は鬼界ーアカホヤ火山灰に特定されるといってよい。なお他のAT火山灰については含有が微量のため、降灰層準決定の情報を得ることは困難と判断される。

注)

※(1)横山卓雄・檀原 徹・山下 透(1986): 温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定. 第四紀研究. 25(1), 21-30.

※(2)竹村恵二・檀原 徹(1988): 土壤中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年ー温度変化型屈折率測定装置を使用してー. 考古学と自然科学第20号, 日本文化財科学会誌. 35-50.

※(3)町田 洋・新井房夫(1976): 広域に分布する火山灰ー始良Tn火山灰の発見とその意義ー. 科学, 46, 339-347.

※(4)町田 洋・新井房夫(1978) : 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, 143-163.

※(5)檀原 徹・山下 透・岩野英樹(1991): 始良Tn(AT)及び鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)火山ガラスの識別, 日本文化財科学会第8回大会研究発表要旨. 51-52.

## 第2節 プラント・オパール分析

古環境研究所

### 1. はじめに

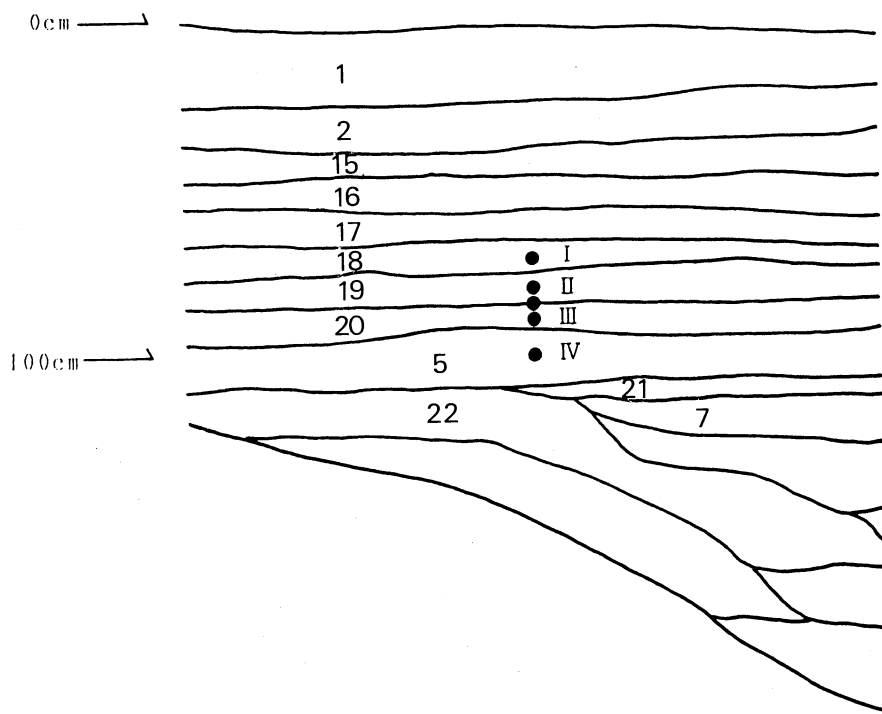
この調査は、プラント・オパール分析を用いて、空港跡地遺跡における稲作跡の調査を試みたものである。

### 2. 試料

試料は、遺跡の調査担当者によってフィルムケース等を用いて採取され、当研究所に送付されたものである。試料数は計5点である。第211図に、土層断面図と分析試料の採取箇所を示す。

### 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。



第211図 土層断面図と分析試料の採取箇所  
(土層番号は第13、14図と対応する)

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ (籾総量)		ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
				個/g	t/10a	個/g	個/g	個/g	個/g
I	65	9	1.00	5,600	5.19	0	88,000	5,600	0
II	74	8	1.00	11,900	9.81	900	151,700	6,900	0
II・III	82	4	1.00	6,000	2.47	2,000	134,500	7,000	0
III	86	5	1.00	5,900	3.04	0	103,800	12,800	0
IV	91	16	1.00	10,800	17.80	900	141,600	5,900	0

第7表 プラント・オパール分析結果

- (1) 試料土の絶乾(105°C・24時間), 仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量, ガラスビーズ添加(直径約40 $\mu$ m, 約0.02g)  
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散(300w・42KHz・10分間)
- (5) 沈底法による微粒子(20 $\mu$ m以下)除去, 乾燥
- (6) 封入剤(オイキット)中に分散, プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重(本試料は全て1.0と仮定する)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米, ヨシ属はヨシ, タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03), 6.31, 0.48である(杉山・藤原, 1987)。

#### 4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を第7表および第212図, 第213図に示す。なお、稲作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ, ヨシ属, タケ亜科, ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる), キビ族(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

#### 5. 考察

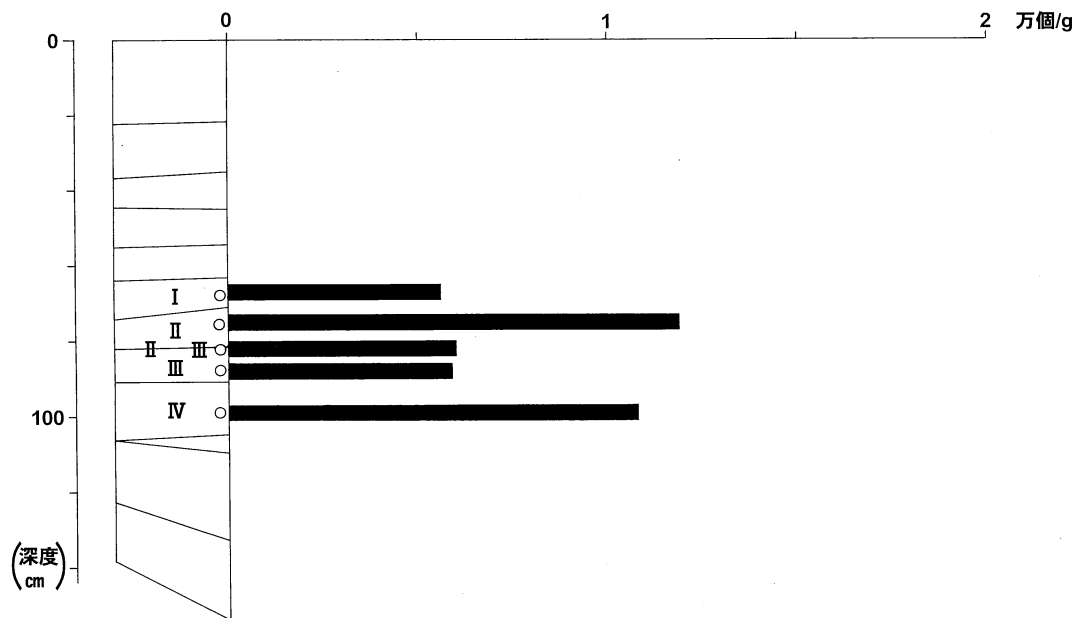
##### (1) 稲作の可能性について

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとずいて、稲作の可能性について検討を行った。

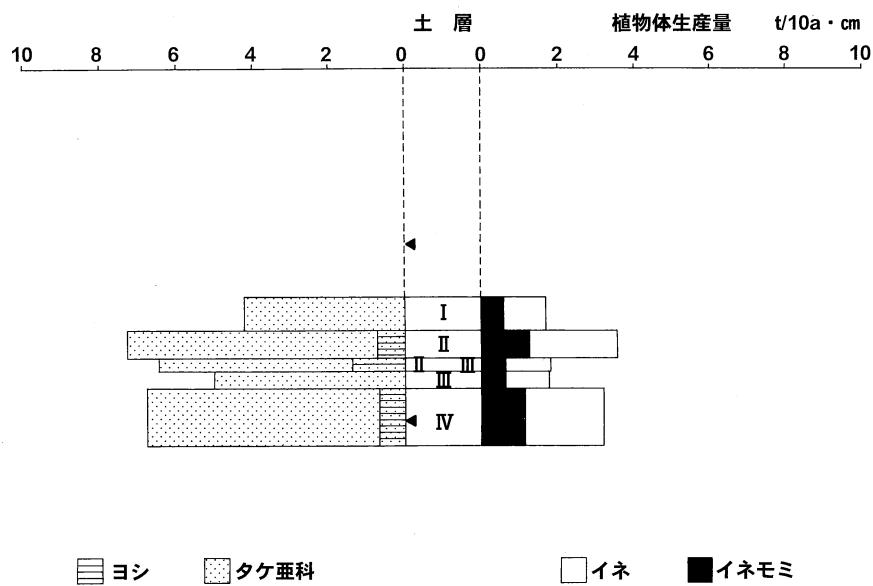
I-8区では、I層, II層, II・III層, III層, IV層の各試料について分析を行った。その結果、全ての試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうちII層とIV層では、プラント・オパール密度が10,800~11,900個/gと非常に高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。残るI層, II・III層, III層でも密度が、5,900~6,000個/gと高い値である。したがって、これらの層でも稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

##### (2) 古環境の推定 (第213図参照)

ネザサなどのタケ亜科植物は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壌条件



第212図 イネのプラント・オパールの検出状況  
(○印は分析試料の採取箇所)



第213図 主な植物の推定生産量と変遷

のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境(乾湿)を推定することができる。

I-8区では、各試料からタケ亜科(特にネザサ節など)のプラント・オパールが非常に高い値で検出されており、ヨシ属に比べタケ亜科が圧倒的に卓越していることが認められた。

このことから、I-8区では、ネザサ節などが繁茂するような、比較的乾いた土壌条件であったものと推定される。また、ネザサ節は何らかの原因で森林群落が破壊された結果、侵入する(室井, 1960)といわれ、林床では生育しにくいことから、遺跡周辺の当時の植生は森林で覆われたような状況ではなく、ネザサ節が生育するような比較的開かれた環境であったものと推定される。

## 6. まとめ

空港跡地では、I-8区のI層~IV層の各層からイネのプラント・オパールが検出され、稲作の可能性が高いと判断された。このことから、当遺跡ではI~IV層に対比される層準に当時の稲作跡が埋蔵されているものと推定される。なお、当時は比較的乾いた土壌条件であったと推定されることから、畑稲作(陸稲)であった可能性も考えられる。

### [参考文献]

杉山真二・藤原宏志. 1987. 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析.

赤山-古環境編-。川口市遺跡調査会報告, 第10集, 281-298.

藤原宏志. 1976. プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学, 9: 15-29.

藤原宏志. 1979. プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定-。考古学と自然科学, 12: 29-41.

藤原宏志・杉山真二. 1984. プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学, 17: 73-85.

### 第3節 空港跡地遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

香川県内の遺跡出土初期須恵器の産地問題は三郎池群・陶邑群、宮山群・陶邑群の2群間判別分析で決着がつく場合が多い。もし、陶質土器の可能性があれば、陶邑群・伽耶群間の2群間判別分析が適用される。他にも、可能性のある生産地があれば、それを母集団として2群間判別分析をすればよいのである。

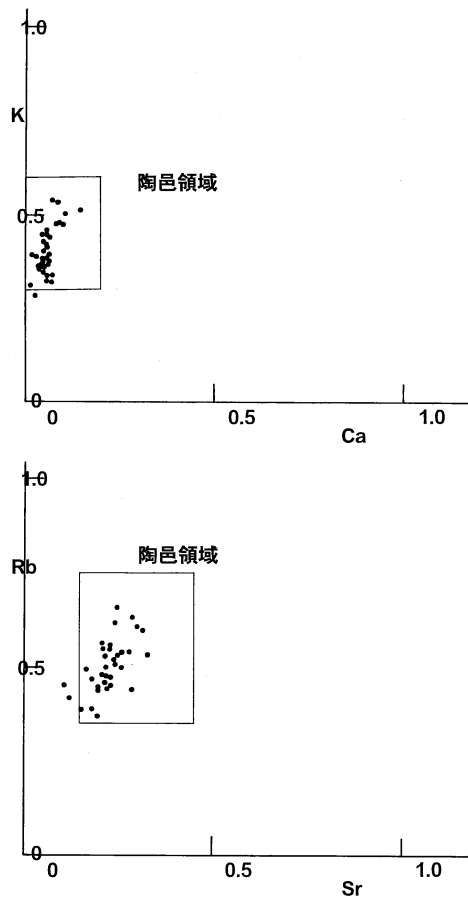
これまでのデータではほとんどが陶邑産の須恵器で、陶質土器が検出された例は少ない。また、地元の三郎池窯や宮山窯の製品もほとんど検出されておらず、まだ、分析対象とはなっていない、限られた遺跡にしか出土しないものと推定される。まして、三郎池窯や宮山窯の製品が海を渡って他の地域の遺跡から出土することは、これまでのデータを見る限り、ほとんど、可能性はない。

今回、空港跡地遺跡から良質の初期須恵器資料が出土したので、慎重に少片(0.5~1センチ角)をとり出し、蛍光X線分析を行ったので、その結果について報告する。

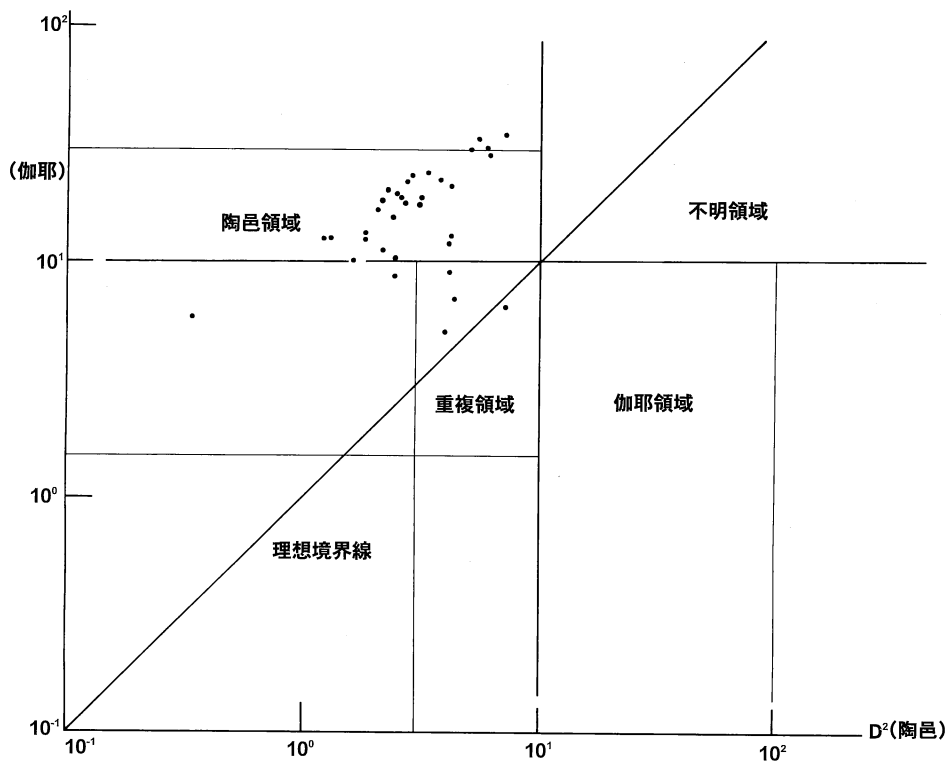
分析データは第8表にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料JG-1による標準化値で示されている。

はじめに、K-Ca、Rb-Srの両指紋図を第214図に示す。これらの図には陶邑産の須恵器が分布する陶邑領域を示してある。遺跡出土須恵器が陶邑領域に分布するかどうかで、定性的にはあるが、陶邑産の須恵器であるかどうかを予測することができる。今回分析した須恵器はほとんどが陶邑領域に分布しており、陶邑産の須恵器である可能性が充分あることを示している。

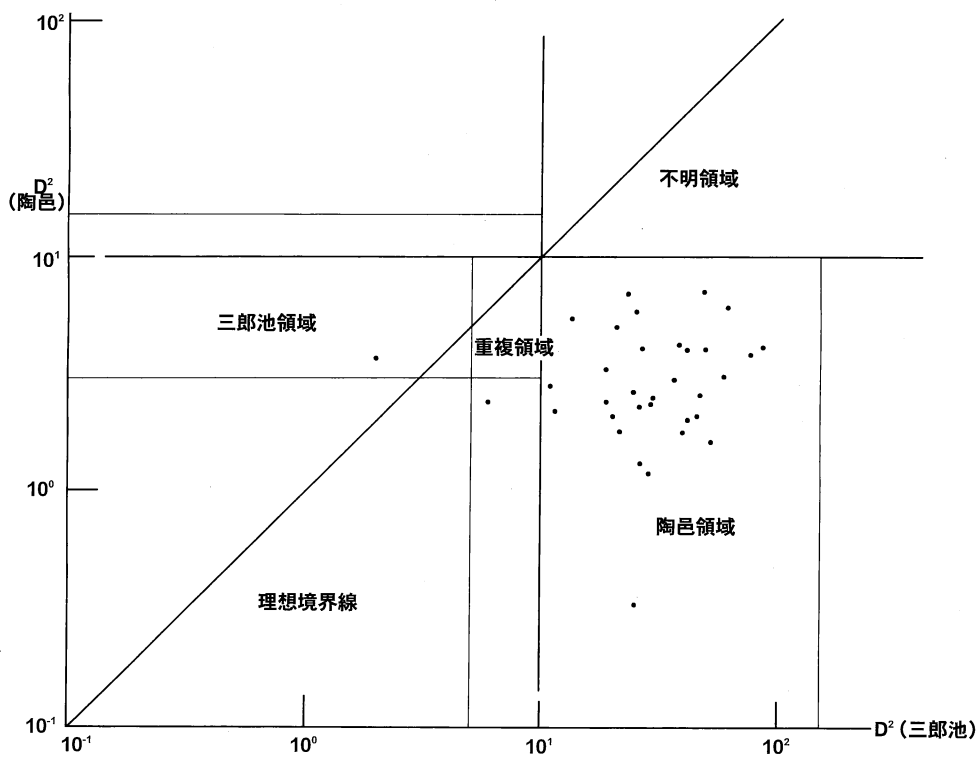
このような予察の上に、2群間判別分析を試みた。はじめに、陶質土器が含まれているかどうかをみるために、陶邑群と伽耶群間の2群間判別分析を試みた。その判別は省略するが、その結果を活用することにする。まず、5%の危険率をかけて陶邑群、伽耶群に帰属するための必要条件はD《2》(陶邑) < 10、D《2》(伽耶) < 10である。Dはマハラノビスの汎距離であり、統計学上の距離である。通常、K、Ca、Rb、Srの4因子の分析値を使って計算されるが、各母集団の重心から正、負両側の等距離を等価に扱うため、二乗して負符号を消去して使用する。陶邑群、伽耶群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値



第214図 K-Ca、Rb-Sr指紋図



第215図 伽耶群—陶邑群間の2群間判別分析



第216図 陶邑群—三郎池群間の2群間判別分析



をD《2》(陶邑)、D《2》(伽耶)と表示する。ホテリングのT《2》には母集団の試料数、使用因子数、D《2》(X)が変数として含まれる。このうち、試料数は実際に分析した母集団の試料数で筆者は通常、50~100程度の大きさの母集団を使用している。三郎池窯のように、50点も試料が集まらない場合もある。使用因子の数はK、Ca、Rb、Srの4である。変数として残るのはD《2》(X)だけである。T《2》式はF分布関数なので、5%の危険率をかけたF検定にかけられることになる。この検定に合格するD《2》値は分析試料数によって若干変動するが、通常、10~13程度の範囲に入る。それで、判別図を描くときにはD《2》=10のところに線を引いて、D《2》(X) ≤ 10を母集団(X)に帰属するための必要条件としている。陶邑群、伽耶群へ帰属するための必要条件はD《2》(陶邑) ≤ 10であり、D《2》(伽耶) ≤ 10である。ところが、陶邑群の試料はD《2》 ≤ 10の全領域に分布する訳ではない。相手群の重心から一定の距離の範囲内にしか分布しないのである。その理由は各母集団はそれぞれまとまって分布し、そのため、K-Ca、Rb-Srの両分布図でも相手群の重心から一定の距離範囲にしか分布しないのである。この範囲は両群の判別図を描いてはじめて決まるものである。第215図には、陶邑群と伽耶群の2群間判別図上に今回分析した試料をプロットしたものである。第215図に示されているように、陶邑領域は[D《2》(陶邑) ≤ 10、1.5 < D《2》(伽耶) < 30]であり、伽耶領域は[D《2》(伽耶) ≤ 10、3 < D《2》(陶邑) < 100]である。この結果、両群の領域が重なる重複領域が出来た。この領域に分布すると、どちらの母集団に帰属するのか決定できない場合があるが、その場合には中央に引かれた傾線(理想境界線という)より上側か、下側かが一つの目安となる。第215図を見ると、ほとんどすべての試料は陶邑領域に分布し、伽耶領域に分布するものは全くないことがわかる。こうして、陶質土器は含まれないことが明らかになった。

次に、地元の母集団に帰属するかどうかの問題である。地元の母集団として三郎池群と宮山群をとり上げた。陶邑群、伽耶群、三郎池群、宮山群からの各試料のD《2》値は第8表に併記してある。このうち、D《2》(宮山)の値をみると、D《2》(宮山) ≤ 10を満足するものは1点もないことがわかる。つまり、宮山群に帰属するものは1点もないということである。そこで、陶邑群と三郎池群の判別図上に今回分析した試料をプロットすることにした。その結果は第216図に示されている。陶邑群と三郎池群の相互識別の結果から、陶邑領域は[D《2》(陶邑) ≤ 10、5 < D《2》(三郎池) < 105]、三郎池領域は[D《2》(三郎池) ≤ 10、3 < D《2》(陶邑) < 15]である。重複領域はあるものの、この領域に分布するものは1点もない。第216図からNo 1は三郎池領域に分布するものの、他の試料はすべて、陶邑領域に対応し、陶邑産の須恵器と推定される。この推定結果は胎土観察とも対比してみる必要がある。

遺物番号	試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D <sup>2</sup> (陶邑)	D <sup>2</sup> (加耶)	D <sup>2</sup> (宮山)	D <sup>2</sup> (三郎池)
599	12-4141	0.407	0.050	2.51	0.479	0.211	0.093	2.0	16.6	265	40.9
601	12-4142	0.479	0.091	2.36	0.517	0.239	0.091	4.0	12.2	385	41.1
602	12-4140	0.344	0.073	1.97	0.511	0.241	0.112	3.7	22.5	92.5	2.0
620	12-4151	0.415	0.061	2.27	0.533	0.252	0.115	1.2	12.7	198	27.9
623	12-4152	0.403	0.065	2.40	0.443	0.294	0.224	4.1	13.0	156	84.6
624	12-4149	0.370	0.054	1.98	0.461	0.223	0.180	2.5	19.2	171	28.8
625	12-4150	0.371	0.046	1.69	0.474	0.232	0.161	3.0	18.2	159	35.8
629	12-4148	0.363	0.042	2.10	0.495	0.167	0.092	2.8	23.3	227	11.0
633	12-4169	0.385	0.054	1.79	0.443	0.227	0.149	2.6	18.2	205	46.8
671	12-4153	0.382	0.064	2.33	0.500	0.263	0.173	2.3	15.5	131	25.7
672	12-4155	0.376	0.050	2.16	0.503	0.221	0.103	2.1	18.2	172	20.0
673	12-4154	0.448	0.046	2.70	0.556	0.233	0.179	2.1	11.4	302	45.9
697	12-4162	0.388	0.017	2.88	0.417	0.124	0.034	6.0	28.6	415	60.8
698	12-4167	0.544	0.076	3.02	0.658	0.249	0.189	7.1	6.5	516	47.8
699	12-4168	0.344	0.055	1.96	0.448	0.236	0.111	4.1	21.5	115	26.4
700	12-4157	0.425	0.055	2.61	0.551	0.233	0.188	1.3	12.8	244	26.0
701	12-4163	0.345	0.052	2.34	0.442	0.200	0.114	3.3	23.9	161	18.7
702	12-4164	0.291	0.025	2.65	0.386	0.154	0.046	7.0	35.2	149	23.2
703	12-4156	0.437	0.065	2.15	0.550	0.214	0.186	1.8	13.0	303	21.1
705	12-4158	0.365	0.039	2.14	0.467	0.183	0.106	2.7	22.1	217	24.0
706	12-4171	0.540	0.086	1.91	0.609	0.314	0.173	3.9	5.1	388	74.8
707	12-4161	0.478	0.098	1.87	0.604	0.317	0.205	0.33	5.9	218	24.4
708	12-4160	0.316	0.011	2.62	0.451	0.110	0.011	5.4	33.9	235	13.2
709	12-4172	0.449	0.060	2.12	0.538	0.264	0.124	1.6	9.9	257	51.8
710	12-4165	0.461	0.062	1.68	0.635	0.292	0.275	2.4	10.4	219	28.7
711	12-4159	0.477	0.078	2.88	0.624	0.241	0.110	2.4	8.7	336	19.1
712	12-4166	0.509	0.108	2.71	0.537	0.279	0.343	4.1	9.0	386	48.9
752	12-4147	0.379	0.050	2.00	0.565	0.210	0.103	2.4	19.7	179	6.0
756	12-4170	0.518	0.148	2.67	0.536	0.332	0.152	4.3	7.1	308	38.0
765	12-4145	0.325	0.066	3.15	0.369	0.198	0.109	5.8	30.4	158	24.8
766	12-4143	0.432	0.048	2.77	0.533	0.223	0.195	1.8	13.0	285	39.7
767	12-4144	0.366	0.064	2.03	0.479	0.213	0.172	2.2	20.4	168	11.4
768	12-4146	0.392	0.034	2.58	0.453	0.203	0.125	3.1	18.8	256	59.3
897	12-4173	0.325	0.054	3.13	0.390	0.181	0.095	5.0	30.1	170	20.4

第8表 蛍光X線胎土分析データ

## 第5章 まとめ

### 第1節 遺構の変遷

#### 1. 弥生時代前期末～中期初頭

今回報告する遺物のうち、遺構に伴うもので最も古いものは縄文時代晩期の土器である。これは、北地区のSK a 05より弥生時代前期の遺物に混じって出土したものである。出土状況や層位が不明のため詳細はわからない。

弥生時代前期の遺構・遺物は北・西・南地区すべてで検出した。これらは甕の口縁部直下に多条化した櫛描き沈線が施される時期のものにほぼ限定され、以前のもの以後のものはほとんど見られない。検出遺構は南地区で当該期の可能性のある竪穴住居のほかは、土坑と旧河道である。

北地区では可能性のあるものも含めると20基以上の土坑を検出している。これは北50mの宮西・一角遺跡でも同様の土坑が検出されていることから、南北70m以上、東西110m以上の範囲に広がるものと考えられる。土坑の平断面形や規模に共通性は見られず、土坑中に含まれる遺物にも完形の土器が含まれる場合のほか、土器片、サヌカイト片、焦土が含まれるものなど多様である。したがって、これらの土坑の性格の特定は困難である。

西地区でも散漫ではあるが、当該期の土坑が分布する。南地区においても西半部に分布している。

#### 2. 弥生時代後期～古墳時代前期

北地区において竪穴住居1棟を検出している。近辺ではSR a 01のほかは当該期遺構は検出されていないため、竪穴住居が群として存在する状況は想定しづらい。弥生時代前期末～中期初めの遺物を包含するSR a 01が河川として機能していた最終の段階の埋土に当該期の遺物が包含されている。

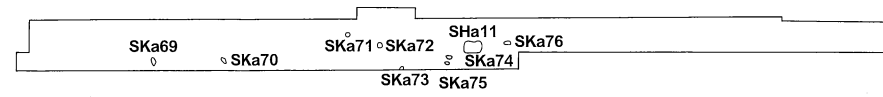
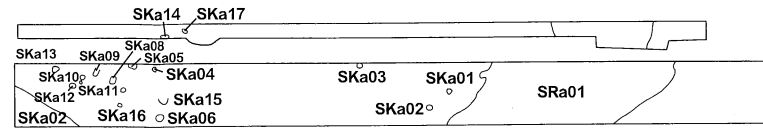
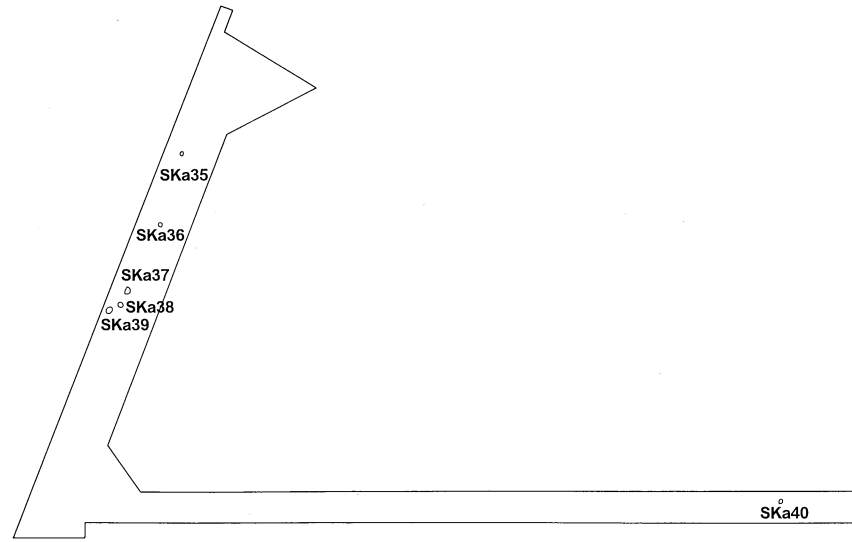
西地区では竪穴住居とその可能性の高い凹地を数基検出しているほか、数条の溝状遺構を検出している。竪穴住居は旧中州を核とする微高地に選地している。

南地区では前方後円形や前方後方形の周溝墓を含む周溝墓群が検出されている。これらはST a 01～04と東方に50mほど離れてST a 05、06が位置しており、円形を主体とする墳墓群と方形を主体とする墳墓群に分かれると推定される。また、東北東約200m離れたI-3、4区（図書館・文書館用地、未報告）には当該期集落が所在しており、集落と墳墓の関係が想定されている。なお、周溝墓が検出された付近では、当該期の溝状遺構が数条検出されており、遺構密度は低くない。南地区の南側に当該期の遺構が広がる可能性も考慮しておく必要がある。南地区東端で検出したSK a 77は、東北約100mの位置に所在するI-3、4区集落の範囲内の遺構であろう。

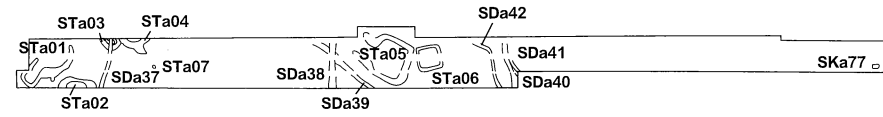
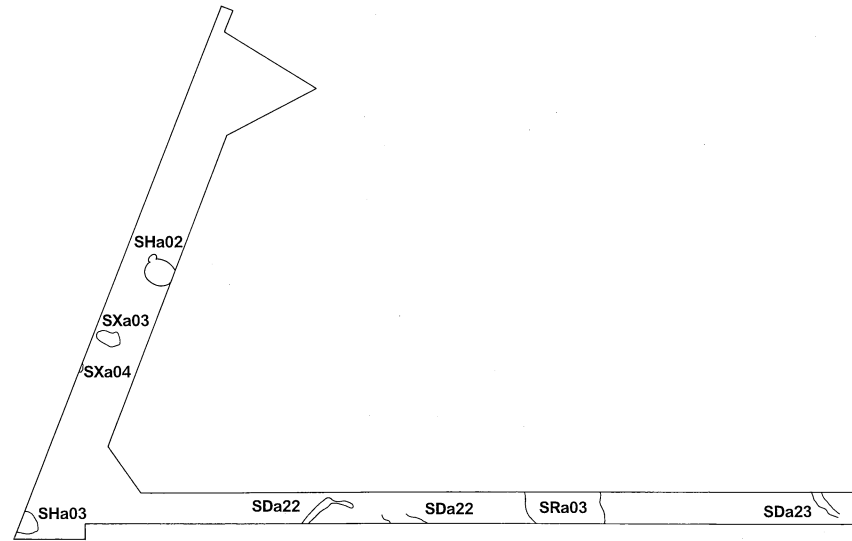
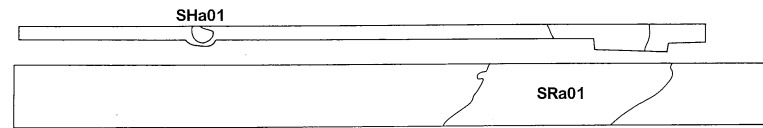
#### 3. 古墳時代後期

西地区で7棟の竪穴住居を検出した。これらの遺構は旧中州を核とする微高地を中心に分布すると考えられる。西方に近接する多肥宮尻遺跡や日暮・松林遺跡でも当該期の遺物がまとまって出土し、近辺で遺物が表採されることから、西地区の西側に集落が広がる可能性が高いと考えられる。検出した竪穴住居は方形の平面形で、SH a 05では須恵器杯身が甕の蓋として用いられたこともあることが観察された。

出土須恵器は、相対的に焼き上がりが良好で精美なつくりのものと焼き上がりが不良で稚拙なつくりのものに分類でき、高杯脚部の円形の透かし穴などは在地色を示す可能性が考えられた。このため胎土



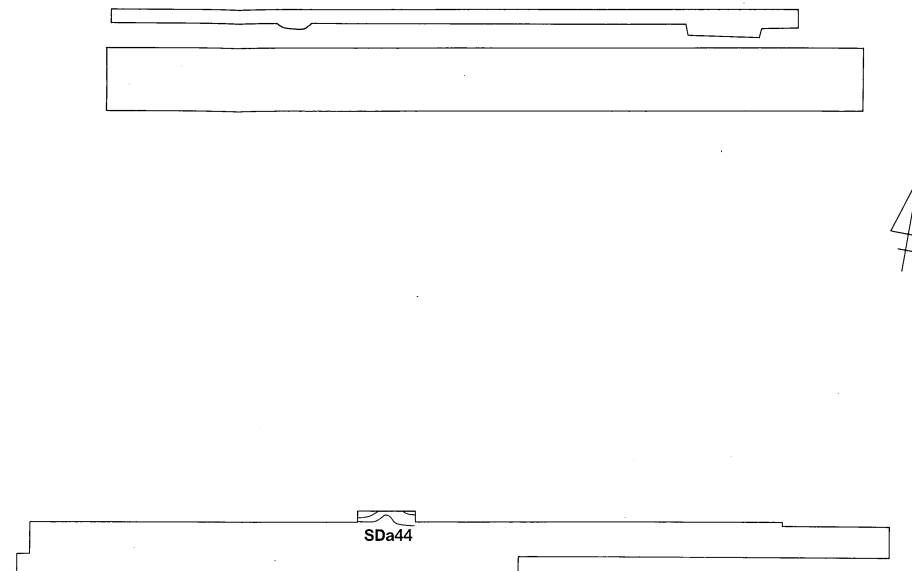
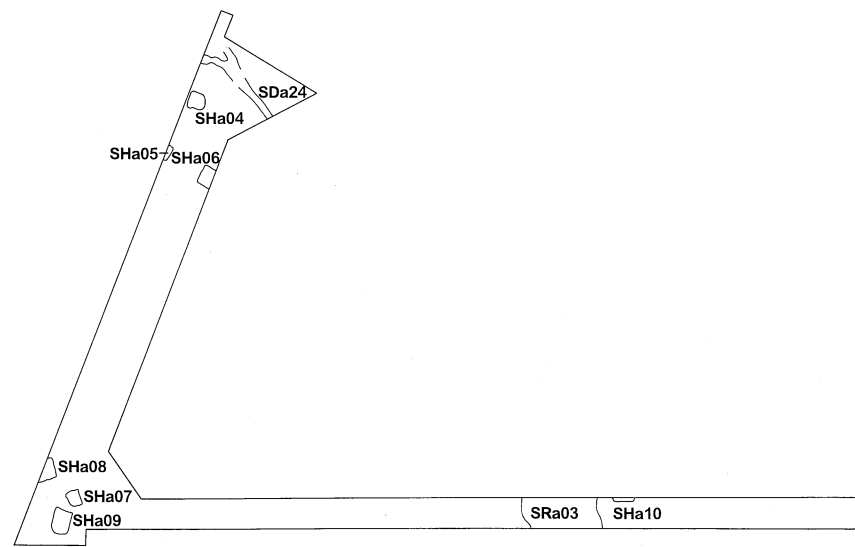
弥生時代前期



弥生時代後期～古墳時代前期



第217図 遺構変遷図（その1）



古墳時代中期



古代



第217図 遺構変遷図（その2）



の蛍光X線分析をおこなったが、ほぼすべてが陶器産に同定された。陶器編年TK47期を中心とする時期と考えられる

#### 4. 古代～中世

古代の遺構としては、北地区の旧河道の微凹地において検出された水田と、その西側で検出した湧水施設（出水）がある。水田は旧河道が河川としての機能を喪失した後、微凹地に水平に近い状態で堆積する層中で検出された。畦畔一区画を全体に検出することはできなかったが、長方形を主体とする格子状の整然とした区画がつくられていた。畦畔の方向は周辺の条里型地割の方向とは合わないが、河道の方向に規制されたことが原因と考えられる。

湧水施設は讃岐地方で出水、全国的には溜井と呼ばれることが多い施設で、穴を掘って被圧された地下水を湧出させ、溝で下流に導く灌漑施設である。施設自体は中世にも再利用されたようだが、接続する数条の溝状遺構のなかに古代の埋没と考えられるものがある。

中世の遺構は、北地区西半部、西地区東半部、南地区で検出された。いずれも柱穴や溝状遺構を主体とする。北地区西半部や西地区東半部では掘立柱建物を復原できる柱穴の配置が見られたが、調査区幅が狭い関係で、多くは柱穴が集中する状況が把握できたのみである。掘立柱建物の桁方向は、概ね条里型地割の方向と合致している。また、溝状遺構も条里型地割の方向とほとんどが合致している。

#### 5. 近世以降

北地区の西端、西地区の北端と東端、南地区の西端でそれぞれ池台池の汀線を確認した。池台池は昭和19年に東半部が埋め立てられたものであるが、造池の時期を検討する資料は得られていない。また、昭和19年の飛行場造成時に埋め立てられた溝状遺構を数多く検出している。

## 第2節 『弘福寺領讃岐国山田郡田図』との関連

### 1. 空港跡地遺跡の条里型地割の復原

今回報告した空港跡地遺跡の西半部は現存する日本最古の田図の内容を伝えられる『弘福寺領讃岐国山田郡田図』（以下『田図』と略す）の南地区の比定地にあたる。絵図の記載より推定される景観と発掘調査により知り得た景観がどのような関係にあるか、以下に検討したい。なお、『田図』は長年の研究史があり、高松市が都市開発事業に伴い実施した弘福寺領讃岐国山田郡田図関係調査事業の報告書のほか、多くの論文、刊行物がある。紙幅の都合もあって『田図』が現在の範囲に比定されるに至った根拠をはじめ、研究史の叙述は省略し、参考文献として節末に一括して掲げている。

空港跡地遺跡周辺は第2次世界大戦末期に陸軍飛行場として接収され、戦後の旧村民等による再開発のため、戦前の地割は消滅している。しかし、法務局に保管される明治時代や大正時代の地籍図を見ると、空港跡地遺跡周辺にも一町方格の条里型地割が広がっていたことを確認できる。空港跡地遺跡の検出遺構と条里型地割との関連を検討するためには、まず条里の坪界線（阡陌）がどこに当たるのか推定復原する必要がある。

この試みは、空港跡地遺跡の調査が本格化した平成3年度の概報を作成する段階でも行われた。平成3年度は各調査区の遺構平板測量図を1000分の1の縮尺に調整し、接合したものを2500分の1に縮小、同縮尺の高松市都市計画図に貼り込んだ基図を作成した。そして検出遺構のうち条里と関連すると考えられる方向を持った溝状遺構の平面的な位置と周辺地域の地割から復原した条里型地割の推定線とが、

ほぼ整合する線を坪界線と推定し、5000分の1の地図上に図示し公刊した。しかし、概報にも記されているとおり、遺構図縮小の際に生じるわずかな歪みが、接合によって無視しえないほど大きくなり、これを補正できなかったため、より精度の高い復原を行う必要があった。

今回の報告書作成にあたり、新たに復原図を作成した。今回は、平成3年度以降の調査区も加え、空中写真測量によって作成された遺構図を500分の1に縮小し接合した。接合図は、国土座標によるメッシュを記入した紙に、遺構図をトレースすることにより作成し、遺構図縮小の際に生じるわずかな歪みが全体に影響しないように、国土座標のメッシュを基準に誤差を消去した。なお、条里型地割の坪界線の位置を推定する作業のため、溝状遺構と旧河道のみをトレースした。このような手順で作成した遺構配置図に109、110、111mの3通りのメッシュをかぶせてみて、最も整合するものを坪界線と推定した。この作業によって109mのメッシュが最も合い、空港跡地遺跡中央部やや東よりを基準に坪界線を推定復原したものが付図2「空港跡地遺跡と条里型地割」である。付図2は、平成3年度の復原図よりも精度は高いが、検出遺構の年代差を考慮していないという問題がある。今後、時代差を考慮した復原を行う必要があるが、『田図』南地区の現地比定地の検討に使う資料としては一応信頼できる図と考える。

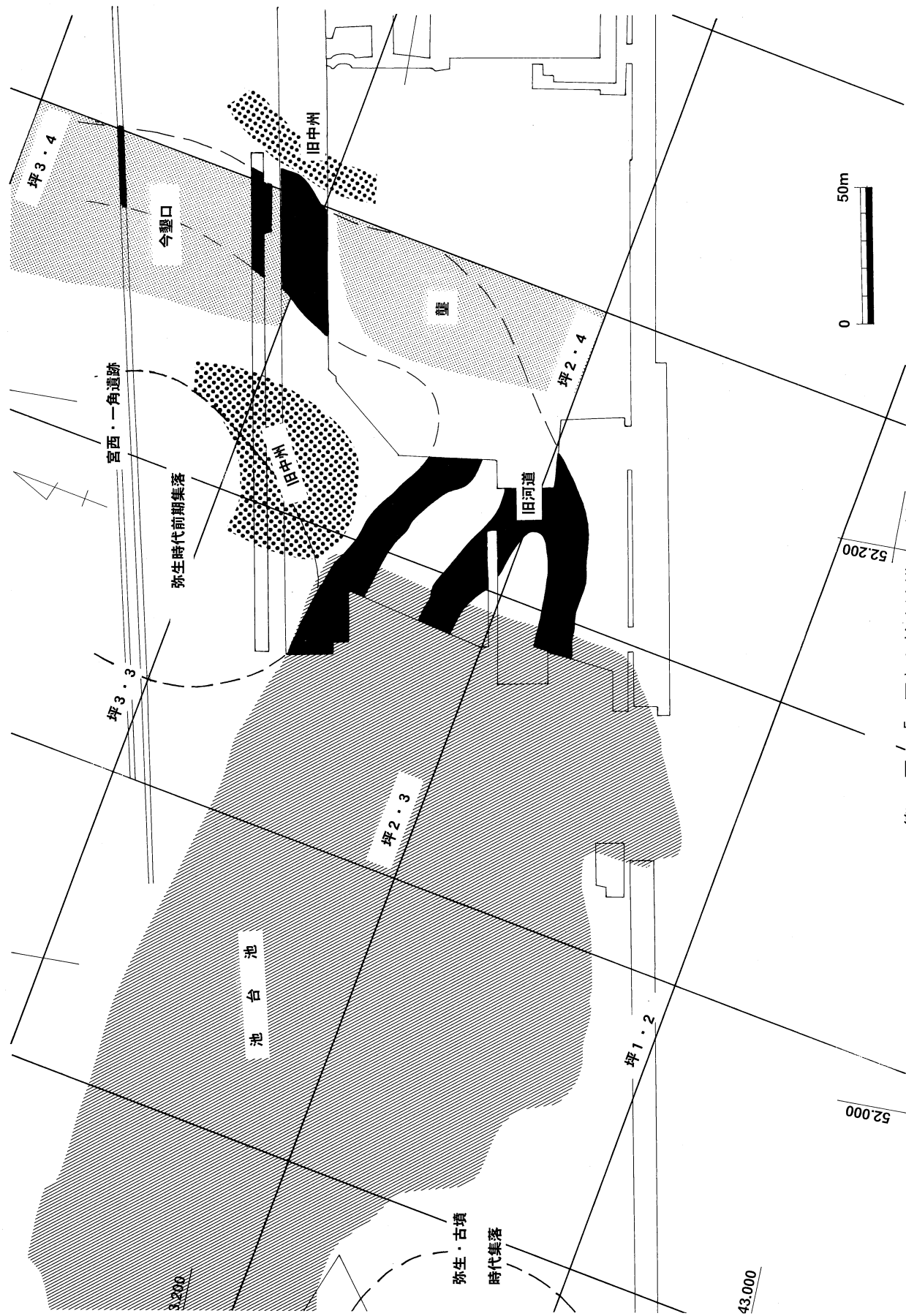
## 2. 『田図』南地区の描画

『田図』南地区は東西四坪、南北四坪の範囲のうちの十二坪分の方格区画が描かれ、それぞれに田・畠などの地目名、面積、田品、借耕料が記載されている。また、条里の坪内に描かれた地種毎に彩色が施されている。南地区では坪2・4（西南隅を坪1・1とし、東および北方向に2、3、4と付して坪位置を表す）に「壟百代」と記される部分に茶褐色顔料が、坪3・4の「今壟四××□□」と記される場所は茶褐色顔料の上に白緑を重ね塗りしている。また、坪1・1、1・2も茶褐色顔料の上に白緑を重ね塗りする範囲があると判断されている（高松市1992）。それぞれの坪の名称は「津田西口」（坪1・1）、「津田」（戸簿1・2、2・1～4、3・2～4）が判読されている。

『田図』に描かれた範囲が、実際のどの地点にあたるのかを検討する場合、あるいは比定された地点が妥当であるかどうかという点について石上英一氏は、上記の彩色部分について、「壟」については飛行場造成以前の地割りを伝える地籍図や文化15（1818）年の「山田郡下林村順道絵図」の検討から、岩田神社の馬場と御輿休およびその西側一帯に当たるとし、池台池の幹線水路が当該地南側を迂回して流れることから、微高地であったと推定し（石上1992）、具体的な地形については未発掘のため不明としている（石上1996）。坪3・4の茶褐色顔料を塗った部分は「岩田神社参道西側の北の谷と称される池台池底ユルからの水路が流下する谷状地形（弥生時代以来の谷状地形＝自然河川）に相当する（神社の西には東南之谷の地字もある）。したがって、この茶褐色顔料は、普通に想像されるような微高地を表現したのではなく、谷状地形で天平七年段階では耕作されていなかった非耕地を表現していることになる。」と解釈している（石上1996）。最後に坪1・1、1・2についてであるが、これらの坪の上半部は欠損し、残存部との境界付近に波状の墨界線が描かれ、この欠損部の縁辺に茶褐色顔料に白緑を重ね塗りした可能性の高い3ヶ所の彩色の痕跡が残されていることを指摘し、これは非耕地の微高地で北辺の形状（波状の墨界線）は後に築造された池台池の南の汀の線の地形形状と対比できるとしている。つまり、坪2・4の「壟」については微高地、坪3・4の「今壟□」については谷状地形、坪1・1、1・2については池台池南側の微高地を表現すると考えた。

第220図は付図2の作成によって復原した条里型地割の方格線と検出遺構の関連および「壟」の位置





第220図「田圃」と検出遺構の関係図

等を記入した図である。「壟」にあたる部分は未調査部分にあたり、坪2・4の西半で弥生時代前期の遺物を包含する旧河道（香川大学工学部用地）が検出されている。また、坪3・4の「今壟□」の彩色部分の南端部では弥生時代後期の段階まで河川として機能していた旧河道が検出されている。この河道は北側の宮西・一角遺跡検出のSR03に連続すると考えられ、「今壟□」比定地には旧河道が南北に縦断するように流れている。また、これら3ヶ所で検出された旧河道は、周辺の発掘調査成果から見ると本来連続する一条の河道であったと考えられる（詳細の確定は後年度の香川大学工学部用地の報告書の刊行まで待たねばならない）。つまり、香川大学工学部調査区での東西方向の流れが、本報告書の北地区のSRa01に接続するためには、第220図で示すような流路をとると推定されるから、『田図』の「壟」と描かれる部分の大半は旧河道にあたることになる。したがって、坪3・4の茶褐色顔料を塗った部分と坪2・4に描かれる「壟」は同じ谷状地形に相当することになる。石上氏が微高地を迂回するとした水路は、逆に谷状地形の対岸に用水を乗せるために南側に迂回せざるを得なかったためと解釈することも可能であろう。

このように考えると、『田図』の描画と実際の状況の比較検討の中にいくつかの疑問が生じてくる。一つは微高地を意味する「壟」が谷状地形に相当すること、二つめは「壟」や「今壟□」と記載される谷状地形と同じ旧河道が坪1・2、1・1にも連続するのに、坪3・4、2・4部分のみ彩色し、坪1・1、1・2では旧河道ではなく南岸側の微高地を彩色したのだろうかという点、三つめは、地種の描線と彩色は地形そのもの（形状あるいは景観と面積）を表現しているのではなく、地種の区分と区分された地片の凡その形状を表現していると指摘されているが（金田1992）、推定される流路と「壟」や「今壟□」として彩色された範囲の形状は異なるものであるという点である。

ここでやや論点を替えて、「壟」は緩扇状地上の旧中州に分類される微高地と考えたほうが自然なのではないか、という考えを述べたい。「壟」は他の史料中には類例に乏しいが、田畑として利用できる地域の中にある、土などが盛り上がった場所をさし、墳墓とは区別されていた用語と理解されている（例えば大山1993）。『田図』では「壟」のほか「畠」、「家」の所在地などを茶色に彩色し、田には彩色していない。また、茶褐色の上に白緑を重ねた北地区の2ヶ所の「今畠壟田」、南地区の「今壟□」は、本来田とは認定されていなかった部分を後に壟田として開発したものと推定されている。つまり、茶褐色で彩色された部分は田として開発するよりも居住適地や畠として開発するほうが適当であった地域を指すものと解釈できる。以上のことを前提に空港跡地遺跡周辺の地形を見ると、旧河道の微凹地は水田開発の適地であって、埋没する旧中州が「壟」に相当する可能性が高いのではないかと考えることができる。第2章でも述べたように、19世紀前半の「山田郡下林村順道図」に記される土地利用状況を見ると、この付近には水田が卓越する中で畑が集中するまとまりが点在する。この範囲は周囲よりも微かに高地となっており、周辺の条里型地割の方向とは異質な方向の地割によって画されるものである。発掘調査の成果から見ても、地表の直下に砂礫層が盛り上がっている範囲に整合し、旧中州が江戸時代末においても土地利用に影響を与えている様子が窺える。このような地点が「壟」と呼ばれる非耕地の微高地であったと考えられるのである。

「壟」が微高地であるという前提に立つと、『田図』南地区の比定地と実際の状況は合致しない可能性が考えられる。ただし、復原する条里型地割の南北の坪界線が東に30m程度ずれると状況が一変する。今回報告した北地区の東端部には砂礫層が盛り上がる旧中州と考えられる微高地が存在している。この

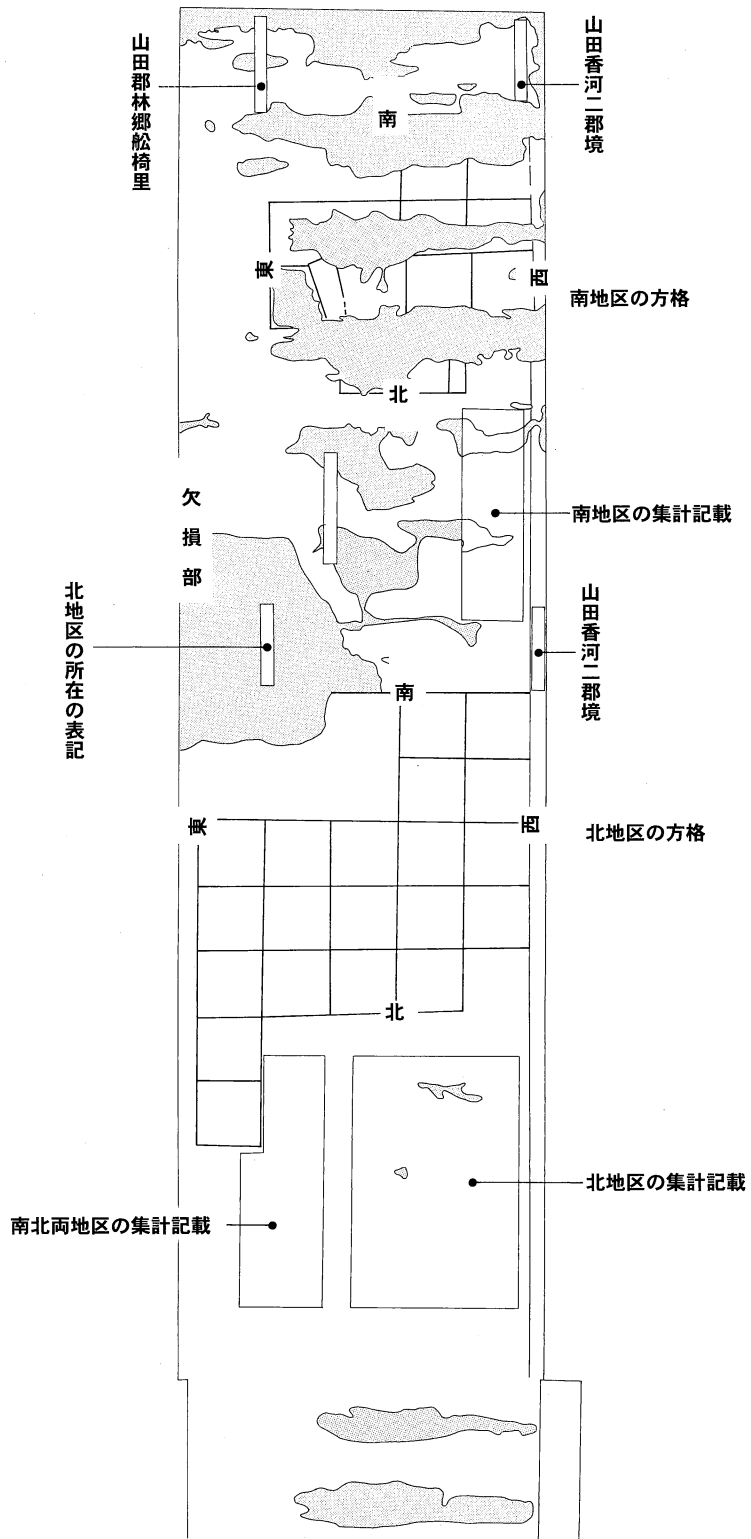
範囲は調査区の関係で不明であるが、先述の「山田郡下林村順道図」に記される土地利用状況を見ると、岩田神社馬場の東側に数筆存在する畑地に相当する可能性がある。この場合「今墾□」と記される範囲も岩田神社境内地にずれるため微高地に相当すると考えられるのである。以上を結論づけるならば、空港跡地遺跡の発掘調査によって検出した溝状遺構によって復原される当該地の条里型地割を検討の前提として、『田図』比定地と『田図』の描画を検討すると、内容が合致しない可能性の方が高いと考えられるのである。

### 3. 現地比定の方法をめぐって

小稿では詳述できなかったが、『田図』の現地比定の論拠は様々な仮定（推定）の総体のうえに成立していると考えられる。これは通常の現地比定の根拠となる何条何里という条里坪付の復原が、讃岐国については困難であることに最大の原因がある。様々な仮定とは、『田図』の範囲と同一の範囲を示すと考えられる「山田郡弘福寺田内校出文注文」では、山田郡八条と九条の里の序数が異なっており、ことによると讃岐国では各条における里の序数が、それぞれ異なっている可能性もあり、僅かに残る坪付けが記された史料の現地比定ができて、その条だけでの里の序数復原に留まる可能性があること。古代の官道である南海道が里界線となっているのも、久安元年十二月の「讃岐国善通曼荼羅寺寺領注進状」と徳治二年の「善通寺伽藍并寺領絵図」によって復原される多度郡のみであって、讃岐国全体に敷衍し、『田図』の比定の論拠としてよいか確証が無いこと、など曖昧さの残るものであって、それらの総体として一応矛盾の無い比定地が現在定説となっているものと考えられる。その中で、所領が山田郡林郷船橋里に所在すると『田図』に記載されていることから、南北地区が林郷内に含まれるという論拠がある。しかし、田図の記載様式を検討すると、これも論拠が無い可能性がある。

『田図』の右端には「□田郡□郷船橋□」という記載があり、弘福寺領の山田郡の所領は□郷に所在すると考えられてきた。□郷は一字で示される郷名で、山田郡と西接する香川郡の郡界付近では「北（喜多）」か「林（拝師）」が該当し、所領の南北二十二坪幅が収まるのは林郷内の現在の比定地以外にはないとする論拠である。しかし、『田図』の記載様式を検討すると、第221図のとおり、右端から南地区の条里方格、南地区の集計記載、北地区の条里方格、北地区および南北両地区の集計記載、最後に図定の年月日その他の順に記載されている。つまり、巨視的には南地区の記載があり、次いで北地区の記載があるというように、両地区はそれぞれが独立して記載されていると見ることができる。これは南北それぞれの条里方格に「山田香河二郡境」と記載し、それぞれに「東西南北」の方位を記していることから推定できるし、天平勝宝三（751）年の「近江国司解」（近江国水沼村墾田地図、霸流村墾田地図）の記載様式とも同一であることが根拠である。そうであれば「□田郡□郷船橋□」は南地区の所在地を指していると判断される。北地区の所在地の記載は、南地区の「山田香河二郡境」と「□田郡□郷船橋□」の位置関係と同様に北地区の「山田香河二郡境」に対する位置に記載されていたと判断でき、この部分は欠損してしまっている。このことから、北地区の所在地は林郷内にあったかどうかはわからず、北側の喜多郷、あるいは両郷にまたがっていた可能性が考えられるのである。

以上のように、『田図』の現地比定地は今のところ最も可能性が高いというものであって、確定されたものとするには、まだ検討の余地が残るものと考えられる。今回報告した空港跡地遺跡の調査成果においても、否定的な見解が示されることとなった。『田図』の現地比定をめぐっては、今後も検討を進めていかなければならないし、個人的にも可能性を示す代案があるが、この点については別稿で論述し



第221図 「田図」の構成

たい。

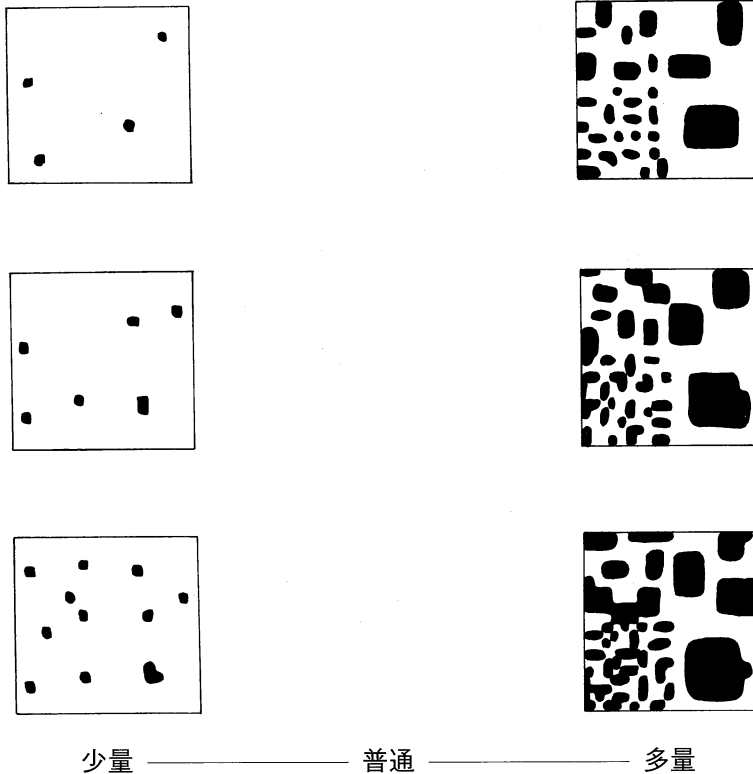
## 主要参考文献

- 高重 進 「弘福寺領山田郡田図の集落とその比定」『史学研究』55号 1954年  
(後、高重『古代・中世の耕地と村落』大明堂 1975年所収)
- 米倉 二郎 「庄園図の歴史地理的考察」『広島大学文学部紀要』12号 1957年
- 福尾猛一郎 「『讃岐国山田郡弘福寺領田図』考」 杉本直治郎・沖野舜二『社会科教育歴史・地理  
第五 回社会科教育歴史地理研究徳島大会記念』1957年 (後、福尾『日本史選集』福尾猛  
一郎先生古稀記念会 1979年所収)
- 金田 章裕 「条里と村落生活」香川県編『香川県史 1 原始・古代』四国新聞社 1988年
- 高松市教育委員会『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』1992年
- 金田 章裕 『古代日本の景観』吉川弘文館 1993年
- 大山 真充 「考古学と弘福寺領讃岐国山田郡田図」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究  
紀要Ⅰ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1993年
- 大山 真充 「弘福寺領讃岐国山田郡田図の方格線」佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の社会と経  
済』吉川弘文館 1993年
- 石上 英一 「讃岐弘福寺領讃岐国山田郡田図」金田章裕 石上英一 鎌田元一 栄原永遠男編『日本  
古代荘園図』東京大学出版会 1996年
- 石上 英一 『古代荘園史料の基礎的研究 上』塙書房 1997年
- 金田 章裕 『古代荘園図と景観』東京大学出版会 1998年
- 高松市教育委員会『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ 第2次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』1999年
- 金田 章裕 『古地図からみた古代日本 土地制度と景観』中公新書 1999年

# 観 察 表

## 凡 例

1. 残存率は、遺物の図化部分に占める実物の割合を示しており、完形品に対するそれではない。
2. 色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1989年版』を参照した。
3. 胎土中の砂粒の「大」は径1.1ミリ以上、「中」は径0.5～1.1ミリ、「小」は径0.5ミリ未満を示す。含有量は下図を目安に「多」(多量)、「普」(普通)、「少」(少量)で表現した。



報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
1	17		弥生土器 壺	SKa01	口径19.0	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/2にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ナデ	
2	17		弥生土器 甕	SKa01	口径25.1	長石・石英中普	内外：10YR8/3浅黄橙	ナデ・ハケメ		ナデ	櫛描き沈線、波状文
3	17		弥生土器 底部	SKa01	底径8.0	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙		ナデ	指オサエ	
4	18		弥生土器 甕	SKa02	口径26.7	長石・石英中多、その他小少	内：7.5YR8/4浅黄橙 外：7.5YR5/3にぶい褐	マメツ	マメツ	マメツ	
5	18		弥生土器 甕	SKa02	口径24.4	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：7.5YR7/4にぶい橙 外：10YR8/3浅黄橙	ヨコナデ	マメツ	指オサエ後ナデ	
6	18		弥生土器 甕	SKa02		長石・石英中多、その他小少	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR6/6明黄褐	マメツ (指オサエ)	マメツ	マメツ (指オサエ)	櫛描き沈線、櫛描き波状文
7	18		弥生土器 底部	SKa02	底径9.5	長石・石英大多、その他中少	内：10YR8/6黄橙 外：10YR8/2灰白		ナデ・マメツ	マメツ	
8	18		弥生土器 底部	SKa02	底径9.2	雲母小少、長石・石英大多、その他小少	内外：10YR8/4浅黄橙		マメツ	指オサエ	
9	19		弥生土器 甕	SKa03	口径16.9	雲母小少、長石・石英小普、その他小少	内：5YR5/6明赤褐 外：5YR5/4にぶい赤褐	ヨコナデ		指オサエ後ナデ	櫛描き沈線、列点文
10	20		弥生土器 甕	SKa04	口径21.2	雲母小少、長石・石英中少、その他小少	内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR6/3灰黄褐	ナデ		指オサエ後ナデ	刻み目、櫛描き沈線
11	20	32	弥生土器 甕	SKa04	口径28.0、器高24.9、底径7.2	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	指オサエ後ナデ	櫛描き沈線、列点文
12	20		弥生土器 甕	SKa04	口径24.8	長石・石英中多、その他小少	内：5YR6/6橙 外：5YR5/6明赤褐	ナデ	マメツ	マメツ (指オサエ)	櫛描き沈線、櫛描き波状文
13	20		弥生土器 甕	SKa04	底径7.4	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：2.5YR6/8橙		マメツ	マメツ・ナデ	
14	20		弥生土器 甕	SKa04		雲母小少、角閃石小少、長石・石英中多	内：10YR5/2灰黄褐 外：10Y6/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ハラミガキ	ハラミガキ	
15	20		弥生土器 甕	SKa04		雲母小少、長石・石英小少、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：2.5Y3/1黒褐	ヨコナデ	ナデ	ナデ	
16	20		弥生土器 甕	SKa04		長石・石英中普、その他小少	内外：10YR6/2灰黄褐	ヨコナデ・マメツ	ナデ	指オサエ後ナデ	櫛描き沈線、列点文
17	20		弥生土器 蓋	SKa04		雲母小少、長石・石英中多、その他中少	内：7.5YR7/6橙 外：10YR7/3にぶい黄橙		板ナデ	板ナデ	
18	21	32	縄文土器 深鉢	SKa05	口径35.2	雲母小少、長石・石英小多、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙	条痕	ハラケズリ	条痕	
19	21		縄文土器 深鉢	SKa05	口径32.3	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR5/3にぶい黄褐 外：10YR4/1褐灰	板ナデ	板ナデ	板ナデ	
20	21	32	縄文土器 深鉢	SKa05		雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR5/2灰黄褐	ナデ	板ナデ	板ナデ	
21	21		弥生土器 甕	SKa05	口径24.8	長石・石英中多、その他小少	内外：7.5YR7/6橙	マメツ	マメツ	マメツ	櫛描き沈線、列点文
22	21	32	弥生土器 甕	SKa05	口径23.4	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内外：7.5YR7/4にぶい橙	ヨコナデ	板ナデ	ナデ	櫛描き沈線
23	21		弥生土器 甕	SKa05	口径26.2	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR5/4にぶい黄褐	ヨコナデ	ナデ	指オサエ後ナデ	

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色詞	端部調整	外面調整	内面調整	備考
24	21		弥生土器 底部	SKa05	底径9.1	長石・石英小多	内外：10YR7/4にぶい黄橙 内：2.5Y7/4浅黄 外：10YR7/4にぶい黄橙		指オサ工後板ナデ	ナデ	
25	21		弥生土器 底部	SKa05	底径6.9	雲母小少、長石・石英大普、 その他小少	内：10YR5/2灰黄褐 外：5YR7/6橙		指オサ工後ナデ	指オサ工後ナデ	
26	21		弥生土器 底部	SKa05	底径7.4	長石・石英中普、その他小少	内：10YR5/2灰黄褐 外：5YR7/6橙		ナデ	ナデ	
27	22	32	弥生土器 壺	SKa06	口径48.0	長石・石英大普、その他小少	内外：10YR8/4浅黄橙				刻み目、貼り付け突帯 突帯、穿孔
28	22		弥生土器 壺	SKa06	口径28.0	長石・石英大普、その他小少	内：7.5YR8/6浅黄橙 外：7.5YR7/6橙	マメツ	マメツ	マメツ	貼り付け突帯
29	22		弥生土器 甕	SKa06	口径27.1	雲母小少、長石・石英中多、 その他小少	内：7.5YR7/6橙 外：5YR7/6橙	ヨコナデ・指オサ工		ナデ	ヘラ描き沈線
30	23		弥生土器 甕	SKa07	口径25.4	長石・石英中多、その他小少	内：7.5YR6/6橙 外：7.5YR6/4にぶい褐	ヨコナデ	ハケ	板ナデ	
31	23		弥生土器 底部	SKa07	底径7.6	雲母小少、長石・石英中多、 その他小少	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：7.5YR7/6橙		マメツ	ナデ・マメツ	
34	25	32	弥生土器 壺	SKa08	口径7.1, 器高1.3, 底径5.6	長石・石英小少	内：5YR6/6橙 外：7.5YR6/4にぶい黄橙	ナデ	ハケ後ヘラミガキ	指オサ工後ナデ	
35	25		弥生土器 壺	SKa08		雲母小少、長石・石英中普、 その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙			マメツ	ヘラ描き沈線、貼り 付け突帯、刻み目
36	25		弥生土器 体部	SKa08		長石・石英小多	内：7.5YR7/4にぶい黄橙 外：7.5YR6/3にぶい褐		指オサ工	指オサ工後ナデ	貼り付け突帯
37	25		弥生土器 甕	SKa08	口径47.4	長石・石英小少、その他小少	内：7.5YR6/6橙 外：5YR5/6明赤褐	ナデ	指オサ工後板ナデ	指オサ工後ナデ	
38	25		弥生土器 甕	SKa08	口径23.6	雲母小少、長石・石英大普、 その他中少	内外：10YR7/4にぶい黄橙	ナデ	マメツ (指オサ工)	ナデ	
39	25		弥生土器 甕	SKa08		雲母小少、長石・石英大少、 その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙		ハケ後ナデ	ナデ	刻み目、ヘラ描き 沈線
40	25		弥生土器 甕	SKa08		雲母小少、長石・石英中多、 その他小少	内外：7.5YR8/6浅黄橙	ナデ	ハケ	マメツ	ヘラ描き沈線
41	25		弥生土器 甕	SKa08		雲母小少、長石・石英中普、 その他小少	内外：7.5YR7/6橙	ヨコナデ	指オサ工後ナデ	指オサ工後ナデ	
42	25		弥生土器 甕	SKa08		雲母小少、長石・石英中普、 その他小少	内：7.5YR8/4浅黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙	ナデ	マメツ	ナデ	ヘラ描きもしくは 櫛描き沈線
43	25		弥生土器 底部	SKa08	底径10.9	長石・石英中多、その他小少	内外：10YR7/6明黄褐		ナデ・マメツ	マメツ	
44	25		弥生土器 底部	SKa08	底径9.3	雲母小少、長石・石英中多、 その他小少	内：5YR6/6橙 外：5YR5/6明赤褐		ハケ	指オサ工	
45	25		弥生土器 底部	SKa08	底径12.8	雲母小少、長石・石英中多、 その他小少	内：2.5Y8/6浅黄橙 外：5Y6/6橙		ハケ・マメツ	マメツ	
46	25		弥生土器 底部	SKa08	底径6.1	雲母小少、長石・石英大普、 その他小少	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：2.5YR6/6橙		ハケ	指オサ工後ナデ	
47	25		弥生土器 底部	SKa08	底径9.0	長石・石英中普、その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR5/3黄褐		指オサ工後ナデ	指オサ工後ナデ	
48	25		弥生土器 底部	SKa08	底径13.2	長石・石英中多、その他小少	内：10YR8/3浅黄橙 外：7.5YR7/4にぶい黄橙		マメツ (ハケ)	マメツ	



報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
49	25		弥生土器 蓋	SKa08		雲母小少、角閃石小少、長石・石英中少、その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：7.5YR5/3にぶい褐		指オサ工後ナデ	指オサ工後ナデ	
52	26	33	弥生土器 壺	SKa09	口径30.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内：5YR6/8橙 外：7.5YR7/6橙	マメツ	マメツ	マメツ	刻み目、貼り付け突帯
53	26	33	弥生土器 甕	SKa09	口径26.6	雲母小少、長石・石英中少、その他小少	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	ナデ	ハケ	指オサ工後ナデ	刻み目、櫛描き沈線、列点文
54	26		弥生土器 甕	SKa09	口径22.1	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：7.5YR7/3にぶい黄橙 外：7.5YR6/3にぶい褐	ヨコナデ	ナデ	ナデ	刻み目、櫛描き沈線、列点文
55	26		弥生土器 甕	SKa09	口径21.6	長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ	マメツ	ナデ	ヘラもしくは櫛描き沈線
60	27		弥生土器 底部	SKa10	底径8.0	角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙		ナデ後ヘラミガキ	ナデ・板ナデ	
61	27		弥生土器 底部	SKa10	底径8.2	長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：5YR6/6橙		指オサエ・ナデ	マメツ	
62	27		弥生土器 底部	SKa10	底径8.7	長石・石英中多、その他小少	内：10YR5/1褐灰 外：10YR7/3にぶい黄橙		ナデ	ナデ・指オサ工後ナデ	
63	28		弥生土器 高杯が鉢	SKa11		雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内：2.5Y5/1黄灰 外：7.5YR6/4にぶい黄橙		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
66	30		弥生土器 甕	SKa13		雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR8/3浅黄橙	マメツ (ナデ)	マメツ (ナデ)	指オサ工後ナデ	
67	30		弥生土器 甕	SKa13		長石・石英中多、その他小少	内：7.5YR6/6橙 外：7.5YR6/4にぶい黄橙		ハケ・ヘラミガキ	指オサ工後ナデ	櫛描き沈線、列点文
73	31		弥生土器 壺	SKa14		長石・石英中多、その他小少	内外：7.5YR8/6黄橙		マメツ	マメツ	貼り付け突帯、刻み目
74	31	33	弥生土器 体部	SKa14		雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：5YR5/6明赤褐		ナデ	板ナデ	貼り付け突帯、刻み目、円形浮文
75	31		弥生土器 甕	SKa14		雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：5YR6/6橙 外：7.5YR5/4にぶい褐	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラ描き沈線
76	31		弥生土器 底部	SKa14	底径9.0	長石・石英大多、その他小少	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：5YR6/6橙		ナデ・マメツ	指オサ工後ナデ	
77	34		弥生土器 底部	SRa01	底径20.0	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
78	34		須恵器 底部	SRa01		砂粒小少	内外：N6/灰		回転ナデ	回転ナデ	
79	34		須恵器 底部	SRa01	底径11.8	砂粒小少	内外：N7/灰白		回転ナデ	ナデ	
80	34		須恵器 杯	SRa01		砂粒小少	内外：N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
81	34		黒色土器 椀	SRa01	底径6.1	砂粒小少	内：2.5Y3/1黒褐 外：2.5Y8/3淡黄		回転ナデ・ヨコナデ・回転ヘラミガキ	ヘラミガキ	
82	34		瓦質土器 椀	SRa01	底径5.4	砂粒小少	内外：N7/灰白		回転ナデ	回転ナデ	
83	34		須恵器 甕	SRa01	口径21.4	砂粒小少	内：N6/灰 外：N5/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
84	34		須恵器 壺	SRa01	底径10.0	砂粒小普	内：N6/灰 外：N5/灰		ナデ	ナデ	

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
85	34		須恵器 底部	SRa01	底径8.2	砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ・回転ヘラキリ後ナデ		回転ナデ	
86	34		土師器 土釜	SRa01		砂粒小多	内：7.5YR6/4にぶい黄 外：7.5YR4/2灰褐	ヨコナデ・指オサエ後板ナデ		板ナデ	
87	34		土師器 土鍋	SRa01		砂粒中多	内：10YR7/3灰黄褐 外：10YR7/3にぶい黄橙	ナデ		ナデ・ハケ	
88	34		土師器 土釜胴部	SRa01		砂粒小多	内外：7.5YR7/4にぶい黄橙	板ナデ			
89	34		陶器 椀	SRa01	底径4.0	砂粒小少	内外：2.5Y8/2灰白	施釉			
90	34		陶器 椀	SRa01	底径4.5	砂粒小少	内：7.5Y7/1灰白 外：10YR7/3にぶい黄橙	ヘラキリ・削り出し高台		施釉	砂目痕
91	34		土師器 こね鉢	SRa01		砂粒小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR5/3にぶい黄褐	ヨコナデ		板ナデ	
92	34		須恵器 スリ鉢	SRa01		砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ			卸し目
93	34		須恵器 スリ鉢	SRa01	口径34.0	長石・石英小普，その他小少	内：10R5/4赤褐 外：10R6/4にぶい赤橙	ヨコナデ		ヨコナデ	卸し目
95	35		弥生土器 壺	SRa01		雲母小少，長石・石英中普，その他小少	内外：10YR7/2にぶい黄橙	板ナデ・指オサエ・ナデ		板ナデ・指オサエ・ナデ	御描き沈線，列点文
96	35		弥生土器 甕	SRa01		雲母小少，角閃石小少，長石・石英中多，その他中少	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：7.5YR6/4にぶい黄橙	ヘラミガキ		指オサエ後ナデ	
97	35		弥生土器 甕	SRa01		雲母小少，長石・石英中普，その他小少	内外：10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ		板ナデ	刻し目
98	35		弥生土器 甕	SRa01	口径19.6	雲母小少，長石・石英小普	内：2.5Y4/1黄灰 外：2.5Y3/1黒褐	ヨコナデ		指オサエ後ナデ	
99	35	34	弥生土器 甕	SRa01	口径24.1	雲母小少，長石・石英中多，その他小少	内外：10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ		ハケ	御描き沈線，列点文
100	35		弥生土器 底部	SRa01	底径10.0	雲母小少，長石・石英中多，その他小少	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR5/2灰黄褐			板ナデ後ヘラミガキ・指オサエ	
101	35		弥生土器 底部	SRa01	底径8.0	長石・石英中多，その他小少	内外：10YR8/3浅黄橙	板ナデ		指オサエ後ナデ	
102	35		弥生土器 底部	SRa01	底径9.1	雲母小少，長石・石英小多，その他小少	内：5Y4/1灰 外：10YR8/3浅黄橙	板ナデ		指オサエ	
103	35		弥生土器 底部	SRa01	底径7.8	雲母小少，長石・石英中多，その他小少	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	ナデ		指オサエ・ナデ	
105	36		弥生土器 壺	SRa01	口径26.2	雲母小少，長石・石英中多，その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：5YR6/6橙	ヨコナデ		ヘラミガキ	
106	36		弥生土器 甕	SRa01	口径30.8	雲母小少，長石・石英中普，その他小少	内外：10YR6/3にぶい黄橙	ヨコナデ		ナデ	御描き沈線，御描きの山形文
107	36		弥生土器 甕	SRa01		雲母小少，長石・石英中多，その他小少	内：10YR5/4にぶい黄褐 外：10YR4/2灰黄褐			ナメツ（指オサエ後ナデ）	
108	36		弥生土器 甕	SRa01	口径20.6	雲母小少，長石・石英中多，その他小少	内外：2.5Y5/2暗灰黄	ナデ		ナメツ（ヘラミガキ）	ヘラミガキ
109	36		弥生土器 甕	SRa01	口径18.4	雲母小少，長石・石英中多，その他小少	内：5Y7/2灰白 外：10YR6/3にぶい黄橙	ヨコナデ		ナデ	指オサエ後ナデ

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	質量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
110	36		弥生土器 甕	SRa01		雲母小少, 長石・石英小普, その他小少	内: 10YR8/2灰白 外: 10YR7/2にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	
111	36		弥生土器 甕	SRa01		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 5YR5/4にぶい赤褐 外: 10YR6/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	マメツ	ハラ描き沈線
112	36		弥生土器 底部	SRa01	底径10.2	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 10YR8/2灰白 外: 10YR8/2灰白		マメツ・ナデ	マメツ・指オサエ	
113	36		弥生土器 底部	SRa01	底径8.2	雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 10YR6/4にぶい黄橙 外: 7.5YR7/4にぶい黄橙		マメツ (指オサエ)	マメツ (指オサエ)	
114	36		弥生土器 底部	SRa01	底径7.2	雲母小少, 長石・石英大普, その他小少	内: 10YR4/2灰黄褐 外: 10YR7/3にぶい黄橙		ナデ	指オサエ・ナデ	
115	36		弥生土器 底部	SRa01	底径12.4	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 5Y3/1オリーブ黒 外: 10YR7/3にぶい黄橙		ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
116	36		弥生土器 甕	SRa01	口径14.2	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小少, その他小少	内: 10YR7/3にぶい黄橙 外: 10YR7/6明黄褐	ヨコナデ	マメツ	ナデ	下川津B類土器
117	36		弥生土器 底部	SRa01	底径4.7	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小普, その他小少	内: 7.5YR6/6橙 外: 10YR6/3にぶい黄橙		マメツ	マメツ	下川津B類土器
118	36		弥生土器 高杯	SRa01		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英中普, その他中少	内: 7.5YR6/6橙 外: 7.5YR6/4にぶい黄橙		マメツ	マメツ	下川津B類土器
119	36		弥生土器 高杯が鉢	SRa01	口径22.8	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 7.5YR6/6橙 外: 7.5YR6/4にぶい黄橙	ヨコナデ	マメツ	マメツ	下川津B類土器
120	36		弥生土器 高杯が鉢	SRa01		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小少, その他小少	内: 7.5YR6/6橙 外: 7.5YR6/4にぶい黄橙		マメツ	マメツ	下川津B類土器
125	38		弥生土器 壺	SRa02	口径30.0	長石・石英大普, その他小少	内外: 10YR6/4にぶい黄橙		マメツ	マメツ	下川津B類土器
126	38		弥生土器 壺	SRa02	口径16.0	雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内外: 7.5YR8/3浅黄橙		マメツ	マメツ	ハラ描き沈線
127	38		弥生土器 壺	SRa02	口径18.2	雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内外: 10YR8/3浅黄橙	ヨコナデ	ナデ	指オサエ後ハラミガキ	ハラ描き沈線
128	38	34	弥生土器 壺	SRa02	口径19.4	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 2.5Y7/3浅黄	ナデ	ナデ	ナデ	ハラ描き沈線
129	38		弥生土器 壺	SRa02	口径17.8	長石・石英中多, その他小少	内外: 10YR7/3にぶい黄橙 外: 10YR5/2灰黄褐	ナデ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラ描き沈線
130	38		弥生土器 壺	SRa02	口径19.0	長石・石英中少, その他小少	内外: 2.5Y8/2灰白	ナデ	ナデ	指オサエ・ナデ	ハラ描き沈線
131	38		弥生土器 壺	SRa02	口径14.1	雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内外: 10YR8/3浅黄橙	ヨコナデ	指オサエ後ナデ	ナデ	沈線
132	38		弥生土器 壺	SRa02	口径18.6	雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 10YR4/2灰黄褐 外: 10YR5/2灰黄褐	ナデ	ハラ後ハラミガキ・ナデ	ナデ・指オサエ後ナデ	ハラ描き沈線
133	38		弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 10YR8/3浅黄橙 外: 10YR7/2にぶい黄橙	ナデ	ハラ後ナデ・ナデ	指オサエ・ナデ	貼り付け突帯
134	38		弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 10YR6/3にぶい黄橙 外: 10YR5/3にぶい黄褐		ナデ	指オサエ	貼り付け突帯, 刻み目
135	38	34	弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 7.5YR7/4にぶい黄橙		マメツ	マメツ	突帯
136	38		弥生土器 壺	SRa02		長石・石英大普, その他小少	内外: 10YR8/3浅黄橙		ヨコナデ・ハラミガキ	ナデ・板ナデ	貼り付け突帯, 刻み目
136	38		弥生土器 壺	SRa02		長石・石英大普, その他小少	内外: 2.5Y8/2灰白		ナデ	指オサエ・ナデ	櫛描き沈線, 列点文

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
137	38		弥生土器 壺	SRa02		長石・石英大多, その他小少	内外: 10YR6/3にぶい黄橙		マメツ	マメツ	ヘラ描き沈線
138	38		弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 2.5Y8/2灰白			マメツ	ヘラ描き沈線, 列点文
139	38	34	弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英小普	内外: 10YR8/2灰白		マメツ	ナデ・指オサエ	櫛描き波状文, 櫛描き沈線
140	38		弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英中普	内外: 2.5Y7/3浅黄		ハケ後ナデ	指オサエ後ヘラミガキ	ヘラもしくは櫛描き沈線
141	38		弥生土器 体部	SRa02		雲母小少, 長石・石英小多, その他小少	内外: 10YR6/3にぶい黄橙		ヘラミガキ	ナデ	貼り付け突帯
142	38		弥生土器 体部	SRa02		雲母小少, 長石・石英中普	内: 10YR7/4にぶい黄橙 外: 10YR7/3にぶい黄橙		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラ描き沈線
143	38		弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 10YR8/4浅黄橙 外: 10YR7/3にぶい黄橙			指オサエ	貼り付け突帯, ヘラ描き沈線
144	38	34	弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英大普, その他小少	内: 10YR6/4にぶい黄橙 外: 10YR7/3にぶい黄橙		ナデ後ヘラミガキ	ナデ後指オサエ	ヘラ描き沈線もしくは削り出し突帯, 貼り付け突帯
145	39		弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英小少, その他小少	内: 10YR7/6明黄褐 外: 10YR6/6明黄褐		ヘラミガキ	ナデ	貼り付け突帯
146	39	34	弥生土器 体部	SRa02		雲母小少, 長石・石英小多, その他小少	内外: 10YR7/3にぶい黄橙		ナデ	指オサエ (マメツ)	ヘラもしくは櫛描き沈線, 列点文
147	39		弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内外: 10YR7/4にぶい黄橙		ナデ	ナデ	貼り付け突帯
148	39		弥生土器 甗	SRa02		雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 10YR8/3浅黄橙		ナデ・ハケ	指オサエ後ナデ	貼り付け突帯, ヘラ描き沈線
149	39		弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小普, その他小少	内外: 10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ヘラミガキ	板ナデ	ヘラ描き沈線
150	39		弥生土器 壺	SRa02		長石・石英小少, その他小少	内: 10YR7/2にぶい黄橙 外: 2.5Y8/3淡黄	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラ描き沈線
151	39		弥生土器 甗	SRa02	口径24.1	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 10YR6/3にぶい黄橙	ナデ・マメツ	指オサエ	ナデ	ヘラ描き沈線
152	39		弥生土器 甗	SRa02	口径21.6	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 10YR7/3にぶい黄橙 外: 10YR6/2灰黄褐	ナデ	ナデ	指オサエ・ナデ	刻み目, ヘラ描き沈線
153	39		弥生土器 甗	SRa02		雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 10YR7/4にぶい黄橙 外: 10YR6/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ヘラミガキ	板ナデ	
154	39		弥生土器 甗	SRa02	口径20.4	雲母小少, 長石・石英大普, その他小少	内: 10YR5/3にぶい黄褐 外: 10YR4/2灰黄褐	ハケ後ナデ	ハケ	指オサエ後ナデ	
155	39		弥生土器 甗	SRa02	口径19.4	雲母小少, 長石・石英中普	内外: 10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	指オサエ後ナデ	刻み目, ヘラ描き沈線
156	39		弥生土器 甗	SRa02	口径24.1	雲母小少, 長石・石英中普	内外: 10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	貼り付け突帯, 刻み目, ヘラ描き沈線
157	39	34	弥生土器 甗	SRa02	口径30.8	長石・石英小普, その他小普	内: 10YR6/2灰黄褐 外: 10YR7/2にぶい黄橙	ヨコナデ	ハケ	マメツ (板ナデ)	刻み目, ヘラ描き沈線
158	39		弥生土器 甗	SRa02		雲母小少, 長石・石英大多	内: 2.5Y4/7黄灰 外: 10YR8/3浅黄橙	マメツ	マメツ	ナデ	
159	39		弥生土器 甗	SRa02		雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 10YR7/4にぶい黄橙 外: 10YR6/3にぶい黄橙	マメツ・ヨコナデ	マメツ	ナデ	ヘラ描き沈線

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
160	39		弥生土器 甕	SRa02	口径24.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内：7.5YR6/4にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ハケ	指オサ工後ナデ	沈線
161	39		弥生土器 甕	SRa02	口径22.8	長石・石英中普、その他小少	内外：10YR8/3浅黄橙	ヨコナデ	ナデ	指オサ工後ナデ	ヘラ描き沈線
162	39		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英小少、その他小少	内外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ		指オサ工後ナデ	ヘラ描き沈線
163	39		弥生土器 甕	SRa02	口径16.0	雲母小少、長石・石英中多、その他小普	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR8/4浅黄橙	ヨコナデ	マメツ	指オサ工後ナデ	ヘラもしくは櫛描き沈線
164	39		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR8/3浅黄橙	ヨコナデ	マメツ	指オサ工後ナデ	ヘラ描き沈線
165	39		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ハケ	指オサ工後ナデ	ヘラ描き沈線
166	39		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内外：10YR6/4にぶい黄橙	ナデ	ハケ	指オサ工後ナデ	ヘラ描き沈線
167	39		弥生土器 甕	SRa02	口径25.0	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内外：5YR5/4にぶい赤褐	ヨコナデ		指オサ工後ナデ	ヘラ描き沈線
168	39		弥生土器 甕	SRa02		長石・石英中少、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR6/2灰黄褐	ヨコナデ		マメツ	刻み目、ヘラ描き沈線
169	39		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内外：10YR6/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ハケ	指オサ工後ナデ	刻み目、ヘラ描き沈線
170	39		弥生土器 甕	SRa02		長石・石英中多、その他小少	内外：7.5YR7/6橙	マメツ	ナデ・マメツ	指オサ工後ナデ	ヘラ描き沈線
171	39		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英中少	内外：10YR4/2灰黄褐	ナデ		指オサ工・ナデ	ヘラ描き沈線
172	40		弥生土器 甕	SRa02		長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙	ナデ		指オサ工・ナデ	ヘラ描き沈線
173	40		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英中普、その他中少	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	ヘラ描き沈線
174	40		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英中普	内外：10YR8/3浅黄橙	ヨコナデ	ナデ	指オサ工後ナデ	ヘラ描き沈線
175	40		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内外：10YR6/3にぶい黄橙	ヨコナデ		指オサ工	櫛描き沈線
176	40		弥生土器 甕	SRa02	口径30.2	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内外：10YR8/3浅黄橙	ナデ	ハケ	指オサ工後ナデ	櫛描き沈線
177	40		弥生土器 甕	SRa02	口径26.9	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ		ナデ	櫛描き沈線
178	40		弥生土器 甕	SRa02	口径28.0	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：7.5YR6/4にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ハケ	ヘラミガキ	櫛描き文14条、列点文
179	40		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内外：10YR6/3にぶい黄橙	ナデ		指オサ工後ナデ後 ヘラミミガキ	櫛描き沈線、列点文
180	40		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内外：10YR6/4にぶい黄橙	ヨコナデ		ナデ	刻み目、櫛描き沈線
181	40		弥生土器 甕	SRa02	口径34.2	長石・石英中普、その他中少	内外：10YR2/灰白	ナデ	板ナデ・ナデ	ナデ	
182	40		弥生土器 甕	SRa02	口径31.6	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR6/2灰黄褐	ナデ	指オサ工・板ナデ	ナデ	

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
183	40		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英大多、その他小少	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ハケ	指オサ工後ナデ	
184	40		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英小普	内外：10YR6/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	
185	40		弥生土器 甕	SRa02		長石・石英中普、その他小少	内外：10YR6/3にぶい黄橙	ナデ	ハラミガキ	ハラミガキ	
186	40		弥生土器 蓋	SRa02		長石・石英大多、その他大少	内外：5YR7/6橙		マメツ・ヨコナデ	指オサ工	
187	40		弥生土器 蓋	SRa02		雲母小少、長石・石英大多、その他小少	内外：10YR7/4にぶい黄橙		ナデ	指オサ工後ナデ	
188	40		弥生土器 蓋	SRa02		雲母小少、長石・石英大多、その他小少	内：10YR7/6明黄褐 外：10YR6/4にぶい黄橙		ハラミガキ	マメツ	
189	40		弥生土器 蓋	SRa02		長石・石英大多、その他小少	内外：10YR6/3にぶい黄橙		マメツ・ナデ・マメツ (板ナデ)	指オサ工後ナデ	
190	40		弥生土器 底部	SRa02	底径12.0	雲母小少、長石・石英大多	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：2.5Y7/3浅黄		ハラミガキ	指オサ工・ナデ	
191	40		弥生土器 底部	SRa02	底径7.2	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR3/1黒褐		ハラミガキ・板ナデ	指オサ工・ナデ	
192	40		弥生土器 底部	SRa02	底径6.6	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR5/3にぶい黄褐		マメツ	板ナデ	
193	40		弥生土器 底部	SRa02	底径8.8	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内外：2.5Y8/3淡黄		ハケ後ナデ	ナデ	
194	40		弥生土器 底部	SRa02	底径7.5	雲母小普、長石・石英中多、その他小少	内：7.5YR6/3にぶい褐 外：10YR6/3にぶい黄橙		ヨコナデ・ハケ後ハラミガキ・ナデ	ナデ	
195	40		弥生土器 底部	SRa02	底径10.6	長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/2にぶい黄橙		ナデ・板ナデ後ナデ	指オサ工後ナデ	
196	40		弥生土器 底部	SRa02	底径12.0	雲母小少、長石・石英中多	内：2.5Y4/1黄灰 外：10YR7/3にぶい黄橙		ナデ・マメツ	指オサ工・ナデ	
197	40		弥生土器 底部	SRa02	底径8.2	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙		板ナデ・ヨコナデ・ハラケズリ	板ナデ	
198	40	35	弥生土器 底部	SRa02	底径7.8	雲母小少、長石・石英大多、その他中少	内：2.5Y5/1黄灰 外：10YR6/3にぶい黄橙		板ナデ・ナデ	指オサ工後ナデ	
199	40		弥生土器 底部	SRa02	底径9.9	長石・石英大多、その他小少	内外：10YR7/3にぶい黄橙		マメツ	マメツ	
200	40		弥生土器 底部	SRa02	底径6.5	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内外：10YR7/3にぶい黄橙		ハラミガキ・指オサ工後ハラミガキ	ナデ	
201	40		弥生土器 底部	SRa02	底径7.3	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR3/1黒褐 外：10YR6/4にぶい黄橙		ナデ・板ナデ	マメツ・指オサ工	
202	41		弥生土器 底部	SRa02	底径7.6	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内外：10YR7/6明黄褐		ハラミガキ	指オサ工・ナデ	
203	41		弥生土器 底部	SRa02	底径7.4	雲母小少、長石・石英大多、その他大少	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR5/2灰黄褐		ハケ・ヨコナデ・ナデ	ナデ	
204	41		弥生土器 底部	SRa02	底径7.0	雲母小少、長石・石英大多、その他小少	内：10YR5/3にぶい黄褐 外：10YR6/3にぶい黄橙		マメツ	マメツ	
205	41		弥生土器 底部	SRa02	底径7.8	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：2.5Y7/2灰黄		指オサ工後ナデ	マメツ	

報告番号	挿入図番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
206	41	弥生土器 底部	SRa02	底径7.3	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 10YR6/3にぶい黄橙 外: 2.5YR6/6橙		ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ	
207	41	弥生土器 底部	SRa02	底径7.4	雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内外: 10YR7/3にぶい黄橙		ナデ・指オサエ	ナデ	
208	41	弥生土器 底部	SRa02	底径7.0	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 10YR6/3にぶい黄橙		マメツ (ナデ)	指オサエ・ナデ	
209	41	弥生土器 底部	SRa02	底径7.0	雲母小少, 長石・石英中普	内: 10YR5/3にぶい黄褐 外: 10YR6/3にぶい黄橙	板ナデ		ナデ	
210	41	弥生土器 底部	SRa02	底径9.8	雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内外: 10YR7/3にぶい黄橙		マメツ	指オサエ	
211	41	弥生土器 底部	SRa02	底径7.4	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 10YR5/3にぶい黄褐 外: 5YR6/4にぶい橙		マメツ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
212	41	弥生土器 底部	SRa02	底径5.7	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 10YR8/3浅黄橙		ハラミガキ・マメツ	マメツ	
213	41	弥生土器 底部	SRa02	底径5.7	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 5YR5/4にぶい赤褐 外: 10YR6/3にぶい黄橙		ハラミガキ・ナデ	ナデ・指オサエ	
214	41	弥生土器 甗	SRa02	底径6.7	長石・石英大多	内: 10YR7/3にぶい黄橙 外: 5YR6/6橙		ハケ・ナデ	マメツ (指オサエ)	孔1
215	41	弥生土器 甗	SRa02	底径6.5	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 5Y4/1灰 外: 10YR6/3にぶい黄橙		ハラミガキ・ナデ	マメツ (指オサエ)	孔1
217	41	弥生土器	SRa02		長石・石英中多, その他小少	内: 10YR8/2灰白 外: 10YR6/3にぶい黄橙		指オサエ後ナデ・ナデ	指オサエ後ナデ	把手か?
218	41	弥生土器 甗	SRa02	口径21.4	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 10YR6/3にぶい黄橙	ナデ	ナデ	指オサエ・ナデ	刻み目, ヘラ描き 沈線
219	41	弥生土器 甗	SRa02		長石・石英大多, その他小少	内外: 2.5Y8/2灰白	マメツ	マメツ	マメツ	
220	41	弥生土器 甗	SRa02		長石・石英大多, その他小少	内外: 2.5Y8/2灰白	マメツ	マメツ	マメツ	沈線
221	41	弥生土器 甗	SRa02		雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 10YR8/3浅黄橙 外: 10YR7/3にぶい黄橙	ナデ	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	
222	41	弥生土器 底部	SRa02	底径8.4	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: N2黒 外: 10YR7/2にぶい黄橙		ナデ	ハラケスリ後ナデ・ハラミガキ	
223	41	弥生土器 底部	SRa02	底径6.7	長石・石英中多, その他小少	内: 10YR2/1黒 外: 10YR6/3にぶい黄橙		ハラミガキ・ナデ	ナデ・指オサエ	
224	41	巴文軒丸瓦	SRa02		砂粒小少	内外: N4/灰				瓦質
225	42	弥生土器 壺	SRa02	口径18.0	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 10YR6/2にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	貼り付け突帯
226	42	弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英中普	内外: 2.5Y5/1黄灰	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	貼り付け突帯, 刻み目, 孔
227	42	弥生土器 壺	SRa02	口径36.4	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内: 10YR7/3にぶい黄橙 外: 10YR3/1黒褐		ハラミガキ	ハラミガキ	
228	42	弥生土器 壺	SRa0 2		長石・石英中普, その他小少	内: 10YR6/2灰黄褐 外: 10YR7/3にぶい黄橙			指オサエ後ナデ	ヘラ描き沈線
229	42	弥生土器 壺	SRa02		雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 10YR8/2灰白 外: 10YR6/1褐灰		ナデ	ヨコナデ	貼り付け突帯

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
230	42		弥生土器 甕	SRa02	口径41.0	雲母小少、長石・石英中少、その他小普	内外：10YR7/4にぶい黄橙	ナデ	板ナデ	ハラミガキ・ナデ	
231	42		弥生土器 甕	SRa02		雲母小少、長石・石英中普	内外：2.5Y4/1黄灰	ナデ		指オサエ	ハラ描き沈線
232	42		弥生土器 甕	SRa02		長石・石英中普	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR3/1黒褐	ナデ	ハケメ	ハラミガキ	櫛描き沈線、液状文、列点文
233	42		弥生土器 体部	SRa02		雲母小少、長石・石英小普、その他小少	内外：2.5Y8/3淡黄			ナデ	櫛描き沈線、液状文、列点文
234	42	35	弥生土器 体部	SRa02		雲母小少、長石・石英中少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙			ナデ	ハラ描き沈線
235	42		弥生土器 底部	SRa02	底径8.4	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内外：10YR7/4にぶい黄橙		マメツ	指オサエ後板ナデ	
236	42		弥生土器 底部	SRa02	底径7.0	雲母小少、長石・石英中普、その他大少	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙		ナデ	板ナデ	
237	42		弥生土器 底部	SRa02	底径17.3	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y5/2暗灰黄		板ナデ後ナデ・ナデ	ナデ	
240	44		弥生土器 壺	SHa01	口径19.6	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：7.5YR7/4にぶい黄橙 外：7.5YR6/6橙	ヨコナデ	ナデ	マメツ	ハラもしくは櫛描き沈線
241	44		弥生土器 甕	SHa01		雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：7.5YR6/4にぶい黄橙 外：10YR8/3浅黄橙	ヨコナデ	ナデ	指オサエ後ナデ	ハラ描き沈線
242	44		弥生土器 甕	SHa01		雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内外：10YR6/4にぶい黄橙	板ナデ		板ナデ	
243	44		弥生土器 底部	SHa01	底径11.2	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙		マメツ	マメツ	
244	44		弥生土器 底部	SHa01	底径9.2	長石・石英中普、その他小少	内外：10YR6/3にぶい黄橙		ナデ	ナデ・指オサエ後ナデ	
245	44		弥生土器 底部	SHa01	底径12.8	角閃石小少、長石・石英中多、その他小少	内外：10YR6/4にぶい黄橙		マメツ	マメツ (指オサエ)	
246	44		弥生土器 底部	SHa01	底径9.8	長石・石英中多、その他小少	内外：10YR8/3浅黄橙		板ナデ	ナデ・指オサエ	
247	44		弥生土器 鉢	SHa01		長石・石英中多、その他小少	内外：10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	
248	44		弥生土器 蓋	SHa01		雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：5YR6/4にぶい黄橙		ナデ・マメツ	ナデ	
249	44		弥生土器 壺	SHa01	口径16.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小少、その他小少	内外：7.5YR6/6橙	ヨコナデ	ナデ	指オサエ	下川津B類土器
250	44		弥生土器 壺	SHa01	口径17.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小少、その他小少	内外：10YR6/4にぶい黄橙	ナデ	ナデ	マメツ	下川津B類土器 ハラ描き沈線、竹管文
251	44		弥生土器 壺	SHa01	口径16.8	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小多、その他小少	内外：5YR6/6橙	ナデ	ナデ	ナデ	下川津B類土器
252	44		弥生土器 壺	SHa01		雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内：5YR6/6明赤褐 外：5YR6/6橙	ヨコナデ	マメツ	ヨコナデ	下川津B類土器
253	44		弥生土器 甕	SHa01	口径16.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR6/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ハケ・ハケ後ハラミガキ	指オサエ・ハラケスリ	下川津B類土器
254	44		弥生土器 底部	SHa01	底径4.7	雲母小少、長石・石英小普、その他小少	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：7.5YR7/4にぶい黄橙		ハケ・ハラミガキ		



報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
255	44		弥生土器 底部	SHa01	底径5.8	雲母小少、角閃石小少、長石・石英少普、その他小少	内：7.5YR5/4にぶい褐 外：10YR6/4にぶい黄橙		ヘラミガキ・ヨコナデ・板ナデ	指オサエ・ナデ	下川津B類土器
256	44		弥生土器 底部	SHa01	底径5.4	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小少、その他小少	内：7.5YR5/4にぶい褐 外：7.5YR3/3暗褐		ナデ・ヨコナデ	ヘラケズリ	下川津B類土器
257	44		弥生土器 高杯か鉢	SHa01	口径25.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：10YR5/4にぶい黄褐	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	下川津B類土器
259	46		須恵器 蓋	SZ a 01 1層		砂粒小普	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
260	46		須恵器 蓋	SZ a 01 1層		砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
261	46		須恵器 蓋	SZ a 01 1層		砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
262	46		須恵器 底部	SZ a 01 1層	底径7.8	砂粒小少	内：N7/灰白 外：5Y5/1灰	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ	
263	46		須恵器 底部	SZ a 01 1層	底径8.0	砂粒小少	内外：N7/灰白		ナデ	ナデ	
264	46		須恵器 底部	SZ a 01 1層	底径9.0	砂粒小普	内外：N6/灰	回転ヘラケズリ後回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	
265	46		土師器 底部	SZ a 01 2層	底径11.0	砂粒中多	内外：N8/灰白		マメツ (ヨコナデ)	マメツ (回転ナデ)	
266	46		土師器 底部	SZ a 01 2層	底径9.2	砂粒小少	内外：2.5Y8/1灰白		マメツ (回転ナデ)	マメツ (ナデ)	
267	46		土師器 椀	SZ a 01 2層	底径8.8	砂粒小普	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR8/4浅黄橙		マメツ (ナデ)	マメツ (ナデ)	
268	46		土師器 椀	SZ a 01 2層	底径5.5	砂粒小少	内：7.5YR8/3浅黄橙 外：5YR7/4にぶい橙		マメツ (ナデ)	マメツ (ナデ)	
269	46		黑色土器 椀	SZ a 01 2層	底径6.1	雲母小少、角閃石小少、その他小少	内：2.5Y4/1黄灰 外：7.5YR8/3浅黄橙		ナデ	ナデ	内面黒色
270	46		瓦器 椀	SZ a 01 2層	底径4.2	砂粒小少	内外：N4/灰		マメツ	マメツ (ヘラミガキ)	
271	46		土師器 杯	SZ a 01 2層	底径7.2	砂粒小少	内外：5Y8/1灰白		回転ナデ・ヘラケズリ後ナデ・板自痕	回転ナデ	
272	46		須恵器 蓋	SZ a 01 2層		砂粒小少	内：N7/灰白 外：N6/灰		回転ナデ	回転ヘラケズリ後ナデ	
273	46		須恵器 蓋	SZ a 01 2層		砂粒小少	内：N6/灰 外：N7/灰白		回転ナデ	回転ナデ	
274	46		須恵器 蓋	SZ a 01 2層		砂粒小少	内外：N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
275	46		須恵器 杯	SZ a 01 2層	口径13.8	砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
276	46		須恵器 底部	SZ a 01 2層	底径7.4	砂粒小普	内外：N8/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
277	46		須恵器 底部	SZ a 01 2層	底径8.8	砂粒小少	内外：N7/灰白		回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	
278	46		須恵器 底部	SZ a 01 2層	底径7.4	砂粒小普	内：N7/灰白 外：N5/灰		回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
279	46	35	灰釉陶器 椀	SZ a 01 2層	底径7.0	砂粒小少	内：7.5Y6/2灰オリーブ 外：7.5Y7/1灰白		回転ヘラケズリ後 回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	黒色90号窯式
280	46		須恵器 壺	SZ a 01 2層	口径24.0	砂粒小少	内：N6/灰 外：N5/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
281	46		須恵器 壺	SZ a 01 2層		砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
282	46		須恵器 壺	SZ a 01 2層		砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
283	46		須恵器 壺	SZ a 01 2層	底径9.6	砂粒小少	内：N7/灰白 外：2.5GY3/1暗オリーブ灰		回転ナデ・削り出し 高台・ナデ	回転ナデ	ヘラ記号
284	46		須恵器 底部	SZ a 01 2層	底径14.8	砂粒小少	内：N6/灰 外：N5/灰		回転ヘラ切り・削り 出し高台	回転ナデ	
285	46		須恵器 底部	SZ a 01 2層	底径11.0	砂粒小普	内外：N7/灰白		回転ナデ・回転ヘ ラケズリ	回転ナデ	
286	46		土師器 土鍋	SZ a 01 2層		砂粒小多	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙	ナデ	ハケ	板ナデ	
287	46		土師器 甕	SZ a 01 2層		砂粒小普	内外：7.5YR6/3にぶい褐	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	
290	47		瓦器 椀	SZ a 02	口径15.8	砂粒小少	内外：5Y8/1灰白	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
291	47		須恵器 蓋	SZ a 02		砂粒小多	内外：N7/灰白		ナデ・回転ヘラケ ズリ	ナデ	
292	47		須恵器 蓋	SZ a 02		砂粒小少	内外：N6/灰				
293	47		須恵器 蓋	SZ a 02		砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
294	47		須恵器 皿	SZ a 02	口径13.4、器高 2.1、底径10.2	砂粒小普	内外：N7/灰白		回転ナデ・回転ヘ ラケズリか？	回転ナデ	
295	47		須恵器 杯	SZ a 02		砂粒小少	内外：N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
296	47		須恵器 杯	SZ a 02	底径8.0	砂粒小少	内外：5Y8/1灰白		回転ナデ・回転ヘ ラケズリ	回転ナデ	
297	47		須恵器 杯	SZ a 02	底径8.0	砂粒小少	内外：N8/灰白		回転ヘラケズリ・マ メツ (回転ナデ)	回転ナデ	
298	47		須恵器 杯	SZ a 02	底径7.0	砂粒小少	内：N7/灰白 外：N6/灰		回転ナデ・回転ヘ ラケズリ後ナデ	回転ナデ	
299	47		須恵器 杯	SZ a 02	底径7.3	砂粒小普	内外：N8/灰白		マメツ	マメツ	
300	47		須恵器 底部	SZ a 02		砂粒小少	内：N8/灰白 外：5Y6/1灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
301	47		須恵器 底部	SZ a 02	底径10.8	砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
302	47		須恵器 底部	SZ a 02	底径10.4	砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ・回転ヘ ラケズリ	回転ナデ・回転ヘ ラケズリ	ナデ	
303	47		緑釉陶器 椀	SZ a 02		砂粒小少	内：5Y7/1灰白 外：5Y6/2灰オリーブ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	質量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
304	47	36	緑釉陶器 底部	S Z a 02	底径6.6	砂粒小少	内：5Y6/2灰オリーブ 外：5Y7/1灰白		回転ナデ後緑釉・ヘラキリ後緑釉	回転ナデ後緑釉	
305	47		須恵器 壺	S Z a 02	口径7.0	砂粒小少	内：N7/灰白 外：N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
306	47		須恵器 壺	S Z a 02		砂粒小少	内外：N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
307	47		須恵器 壺	S Z a 02		砂粒小少	内外：N5/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
308	47		土師器 土釜	S Z a 02	口径20.2	砂粒小多	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙	マメツ	マメツ	マメツ	
309	47		土師器 土釜	S Z a 02	口径28.6	砂粒小少	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ナデ	
310	47		黒色土器 椀	S Z a 01と02間の堆積層	底径6.6	砂粒小少	内：2.5Y4/1黄灰 外：10YR8/4浅黄橙		マメツ	マメツ	内面黒色
311	47		須恵器 壺	S Z a 01と02間の堆積層	口径21.6	砂粒小少	内：N5/灰 外：N6/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
312	47		須恵器 底部	S Z a 01と02間の堆積層	底径8.0	砂粒小少	内：N7/灰白 外：N5/灰		ナデ	回転ナデ	
313	47		土師器 土鍋	S Z a 01と02間の堆積層		砂粒中多	内外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	
314	47		須恵器 杯	S Z a 01直上層	口径15.2	砂粒小少	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
315	47		土師器 土鍋	S Z a 01直上層		砂粒大多	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	マメツ	マメツ	マメツ	
317	47		須恵器 底部	S Z a 01	底径7.4	砂粒小普	内外：N6/灰		回転ナデ・ナデ	ナデ	
318	47		須恵器 甕	S Z a 01	口径18.6	砂粒小普	内外：N8/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
320	47	36	青磁 椀	I-13 (層位不明) S Z	底径6.0	砂粒小少	内：5Y6/2灰オリーブ 外：10Y5/1灰		回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	
321	47		須恵器 杯	I-13 (層位不明) S Z	底径9.4	砂粒小少	内：N5/灰 外：N6/灰		回転ナデ・回転ヘラキリ	回転ナデ	
322	47		土師質 かまど	I-13 (層位不明) S Z		雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR5/4にぶい黄褐 外：10YR6/4にぶい黄橙				
324	49		土師器 杯	S E a 01		砂粒小少	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/1灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
325	49		土師器 杯	S E a 01	口径12.6	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小多、その他小少	内外：5YR6/6橙	ナデ	ナデ・ハラケズリ	ナデ	
326	49		須恵器 底部	S E a 01	底径11.4	砂粒小少	内外：N6/灰		回転ナデ・回転ヘラキリ	回転ナデ	
327	49		須恵器 底部	S E a 01	底径9.0	砂粒小少	内：N6/灰 外：N4/灰		回転ナデ	回転ナデ	
328	49		須恵器 甕	S E a 01		砂粒中普	内外：N4/灰		回転ナデ・格子目タタキ後ナデ	回転ナデ・同心円	
329	49		土師器 土鍋	S E a 01		砂粒小多	内外：7.5YR6/4にぶい黄	ヨコナデ	ハケ	ナデ	

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
330	49		土師器 土鍋	SEa01	口径23.8	砂粒大多	内外：10YR7/4にぶい黄橙	マメツ	マメツ	マメツ	
331	49		土師器 土鍋	SEa01	口径24.1	砂粒小多	内外：7.5YR7/4にぶい橙	ハケ・マメツ	ハケ	ハケ	
332	49		須惠器 高杯	SEa01	底径8.7	砂粒小普	内外：2.5Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
333	49		須惠器 甕	SEa01		砂粒小普	内：N5/灰 外：N4/灰			回転ナデ	ヘラ描き沈線、複 線波文帯
334	49		須惠器 底部	SEa01	底径12.4	砂粒小普	内：N6/灰 外：N5/灰		回転ナデ・ヘラケ ズリ	回転ナデ	
335	49		土師器 皿	SEa01	器高1.2	砂粒小少	内外：5YR7/6橙	マメツ (回転ナデ)	マメツ (ナデ)	マメツ (ナデ)	
336	49		須惠器 杯	SEa01		砂粒小普	内：2.5Y8/1灰白 外：5Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
337	49		須惠器 蓋	SEa01	口径16.0	砂粒小少	内：N7/灰白 外：N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
338	49		須惠器 杯	SEa01	底径9.0	砂粒小少	内：2.5Y7/2灰黄 外：5Y7/1灰白		回転ナデ・ナデ	回転ナデ	
339	49		須惠器 底部	SEa01	底径8.0	砂粒小少	内外：5Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	
341	50		須惠器 蓋	SDa01	口径13.1	砂粒小少	内外：5Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
342	50		弥生土器 壺	SDa01		雲母小少、長石・石英中普	内外：2.5Y8/2灰白	ナデ	ナデ	ヘラミカキ	
343	50		弥生土器 甕	SDa01		雲母小少、角閃石中多、その他小少	内：10YR7/1灰白 外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ	指オサ工後ナデ	マメツ	ヘラ描き沈線
344	50		弥生土器 底部	SDa01	底径6.6	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中多	内：N3/暗灰 外：2.5YR6/6橙		マメツ	板ナデ	
345	50		弥生土器 底部	SDa01	底径8.4	長石・石英中多、その他小少	内：2.5Y5/1黄灰 外：10YR8/2灰白	ナデ	ナデ	マメツ (指オサ工)	
346	50		弥生土器 底部	SDa01	底径9.2	長石・石英中多、その他小少	内：10YR8/2灰白 外：7.5YR8/6浅黄橙	マメツ	マメツ	マメツ	
347	50		弥生土器 底部	SDa01	底径15.8	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y4/1黄灰		ナデ	指オサ工後ナデ	
348	50		土錘	SDa01		雲母小少、長石・石英小少	内：7.5YR6/6橙 外：2.5Y7/4浅黄				
349	50		弥生土器 壺	SDa02		雲母小少、長石・石英中多	内外：2.5Y8/2灰白	指オサ工後ナデ	指オサ工後ナデ	ナデ	ヘラ描き沈線
350	50		弥生土器 壺	SDa02		雲母小少、角閃石小少、長石・石英中多、その他小少	内：10YR6/2灰黄褐 外：7.5YR6/3にぶい褐				ヘラ描き沈線、竹 管文
351	50		弥生土器 壺	SDa02		雲母小少、角閃石小少、長石・石英中多、その他小少	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：5YR6/6橙		ハケ		貼り付け突帯、刻 み目
352	50		弥生土器 甕	SDa02		雲母小少、長石・石英中多	内外：2.5Y8/2灰白	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラ描き沈線
353	50		弥生土器 甕	SDa02		雲母小少、長石・石英中多	内：10YR8/2灰白 外：2.5Y8/2灰白	ナデ・マメツ	ナデ	マメツ	ヘラ描き沈線

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
354	50		須恵器 杯	SDa02	口径12.8, 器高4.1, 底径8.6	砂粒中少	内: N6/灰 外: N5/灰	回転ナデ	回転ナデ・回転ハケ ラケリ	回転ナデ	
355	50		須恵器 杯	SDa02	口径15.1, 器高4.0, 底径10.8	砂粒中普	内外: N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ・回転ハケ ラケリ	回転ナデ・ナデ	
357	51		土師器 杯	SDa03	底径7.7	砂粒中普	内外: 2.5Y8/2灰白		回転ナデ・回転ハケ ラケスリ	回転ナデ	
358	51		瓦器 椀	SDa03		砂粒中普	内外: 2.5Y8/2灰白	ナデ	ナデ	ナデ	
359	51		須恵器 底部	SDa03	底径9.2	砂粒少	内外: 5P7/1明紫灰		回転ナデ・ナデ	回転ナデ	
360	51		須恵器 甕	SDa03		砂粒少	内外: 2.5Y8/1灰白		回転ナデ・格子目タ タキ後ナデ後カキ目	ナデ	
361	52		土師器 皿	SDa04	口径15.1, 器高2.1, 底径11.8	砂粒少	内: 10YR8/3浅黄橙 外: 7.5YR8/6浅黄橙	ナデ	マメツ	マメツ	
362	52		須恵器 杯	SDa04	口径11.2	砂粒中多	内: N7/灰白 外: N5/灰	回転ナデ	回転ナデ・回転ハケ ラケスリ	回転ナデ	
363	52		須恵器 底部	SDa04	底径10.5	砂粒少	内外: N6/灰		回転ナデ・回転ハケ ラケリ後ナデ	回転ナデ	
364	52		土師器 土鍋	SDa04	口径43.4	砂粒中多	内: 10YR7/4にぶい黄橙 外: 7.5YR6/4にぶい橙	ヨコナデ・ハケ	ハケ	ナデ	
365	54		土師器 小皿	SPA02	口径6.2, 器高1.0, 底径5.5	砂粒少	内外: 7.5YR8/6浅黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ・回転ハケ ラケリ	ナデ	
366	54		土師器 こね鉢	SPA03	底径14.4	雲母少, 角閃石少, 長石・石英中普, その他少	内: 5YR7/4にぶい橙 外: 7.5YR7/4にぶい橙		ナデ	マメツ	
367	54		土師器 こね鉢	SPA04		雲母少, 角閃石少, 長石・石英中普, その他少	内: 5YR6/6橙 外: 7.5YR4/2灰褐	ナデ	指オサエ後ナデ	ナデ	
368	54		土師器 土釜脚部	SPA01		砂粒中多	内外: 10YR7/4にぶい黄橙		指オサエ・ナデ		
370	55		弥生土器 甕	SDa05		雲母小普, 角閃石小普, 長石・石英少, その他少	内外: 5YR6/6橙	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	下川津B類土器
371	55		土師器 土釜脚部	SDa05		砂粒中多	内: 5YR6/4にぶい橙 外: 10YR6/2灰黄褐		板ナデ・指オサエ		
372	56		須恵器 杯	SDa08	口径15.5	砂粒少	内: 5Y6/2灰オリーブ 外: 5Y6/1灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
373	56		土師器 こね鉢	SDa08		砂粒中多	内: 2.5Y7/2灰黄 外: 2.5Y5/1黄灰		マメツ	マメツ	
374	56		瓦器 椀	SDa08	口径15.6	砂粒少	内外: N5/灰	ヨコナデ	回転ナデ	回転ナデ	
376	58		陶器 皿	SDa10		砂粒少	内: 10YR8/3浅黄橙 外: 2.5Y8/2灰白	回転ナデ・施釉	回転ナデ	回転ナデ	
378	59		土師器 椀	SXa01	底径6.2	砂粒少	内外: 2.5Y8/1灰白		マメツ	マメツ	
379	59		土師器 土鍋	SXa01		砂粒中普	内: 10YR8/4浅黄橙 外: 10YR5/2灰黄褐	ヨコナデ	指オサエ後ナデ	ナデ	
380	59		土師器 土釜	SXa01	口径26.8	砂粒中多	内: 10YR4/3にぶい黄褐 外: 10YR7/4にぶい黄橙	ナデ	ナデ	板ナデ	

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
381	59		土師器 土釜	SXa01		雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内：10YR8/4浅黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙		指オサエ後ナデ・格子目タタキ	マメツ・ハケ	
382	59		土師器 土釜脚部	SXa01		長石・石英中多、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR8/4浅黄橙		指オサエ・板ナデ	板ナデ	
383	59		平瓦	SXa01		砂粒小多	内：N5/灰 外：N4/灰		板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ	瓦質
384	60		土師器 土鍋	SXa02		砂粒小普	内外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	
385	60		土師器 土鍋	SXa02		砂粒中少	内外：10YR7/3にぶい黄橙	ナデ	ナデ	板ナデ	
386	60		土師器 土釜	SXa02	口径23.2	砂粒中普	内外：10YR8/3浅黄橙	ナデ	指オサエ・ナデ	板ナデ	
387	60		須惠器 スリ鉢	SXa02		雲母小少、角閃石小少、長石・石英小少	内外：2.5Y8/1灰白	マメツ	マメツ	マメツ、卸し目	
388	60		土師器 把手付鍋	SXa02		砂粒中普	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：7.5YR7/4にぶい黄橙	ヘラキリ	指オサエ	ナデ・指オサエ	
389	60		備前焼 スリ鉢	SXa02	底径16.0	砂粒中少	内外：5YR5/3にぶい赤褐		回転ナデ・回転ヘラケズリ・ナデ	回転ナデ、卸し目	
390	60		土師器 スリ鉢	SXa02	口径37.7	砂粒小多	内外：10YR6/3にぶい黄橙	ヘラケズリ	指オサエ後ナデ	板ナデ後ナデ、卸し目	
392	62		土師器 土鍋	北地区 中世包 含層		砂粒中普	内：2.5Y8/3淡黄 外：10YR6/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	
393	62		土師器 土釜	北地区 中世包 含層	口径34.4	砂粒中普	内：10YR8/4浅黄橙 外：10YR4/2灰黄褐	ヨコナデ	指オサエ	ナデ	
394	62		土師器 こね鉢	北地区 中世包 含層	口径29.6	砂粒小	内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR7/3にぶい黄橙	ナデ	ナデ・指オサエ	ナデ	
395	62		土師器 土釜脚部	北地区 中世包 含層		砂粒中多	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR8/3浅黄橙		マメツ(指オサエ後ナデ)	マメツ(指オサエ後ナデ)	
396	62		土師器 甕	北地区 中世包 含層	口径48.2	砂粒中多	内：10YR7/1灰白 外：10YR7/4にぶい黄橙	ナデ	指オサエ後ナデ(マメツ)	ナデ	
397	63		唐津 皿	北地区 中世包 含層	底径4.2	砂粒小少	内：5Y6/2灰オリーブ 外：2.5Y7/3浅黄		露胎・回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ後施釉	
398	63		備前焼 壺	北地区 中世包 含層	口径13.0	砂粒小普	内：10YR4/1褐灰 外：2.5YR4/3にぶい赤褐	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
399	63		備前焼 甕	北地区 中世包 含層		砂粒小少	内：10YR5/1褐灰 外：10YR3/1黒褐	回転ナデ	回転ナデ	板ナデ	
400	63		土師器 土釜	北地区 中世包 含層		砂粒中普	内外：10YR8/4浅黄橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	
401	63		土師器 土釜	北地区 中世包 含層		砂粒小少	10YR7/4にぶい黄橙	ナデ	ナデ	ナデ	
402	63		土師器 土釜脚部	北地区 中世包 含層		砂粒小多	内：10YR8/2灰白 外：10YR7/3にぶい黄橙		板ナデ(マメツ)	ナデ	
403	63		土師器 土釜脚部	北地区 中世包 含層		砂粒中多	内：2.5Y8/3淡黄 外：10YR8/3浅黄橙		板ナデ(マメツ)	マメツ	
404	63		土師器 茶釜形鍋	北地区 中世包 含層	口径14.0	砂粒小多	内外：10YR6/2灰黄褐	ヨコナデ	ナデ	板ナデ	

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
405	63		須恵器 こね鉢	北地区 中世包 含層		砂粒小少	内外：7.5Y6/1灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	東播系
406	63		土師器 こね鉢	北地区 中世包 含層		長石・石英小普、その他小少	内：10YR5/2灰黄褐 外：10YR4/2灰黄褐	ナデ	ナデ	ナデ	
407	63		備前焼 スリ鉢	北地区 中世包 含層		砂粒小少	内：5YR5/2灰褐 外：5YR6/1褐灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ、卸し目	
408	63		平瓦	北地区 中世包 含層		砂粒小少	内外：5Y7/1灰白		格子目タタキ後ナデ	布目圧痕	須恵質
409	63		丸瓦	北地区 中世包 含層		砂粒中普	内：7.5YR7/3にぶい橙 外：7.5YR8/4浅黄橙	ナデ	ナデ	布目圧痕	土師質
410	64		土師器 杯	北地区 中世包 含層		砂粒小少	内外：5YR7/6橙	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
411	64		土師器 底部	北地区 中世包 含層	底径7.9	長石・石英小少、その他小少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：7.5YR7/4にぶい橙		回転ナデ・板ナデ	回転ナデ	
412	66		磁器 皿	SKa19	底径7.4	砂粒小少	内外：5GY8/1灰白	施釉	施釉	施釉	
413	66		陶器 鉢	SKa19	底径10.0	砂粒小少	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：5YR5/2灰褐	ハケ・削り出し高台	ハケ・削り出し高台	施釉	釉ハギ、白化粧土
414	66		土師器 焙烙	SKa19	口径34.2	砂粒小普	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR4/2灰黄褐	ヨコナデ	指オサエ後ナデ	板ナデ後ナデ	土師質、2孔一對
415	66		土師器 焙烙	SKa19	口径40.0	砂粒小少	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR3/1黒褐	ヨコナデ	指オサエ後ナデ	ヨコナデ	
416	66		陶器 椀	SKa20	底径4.8	砂粒小少	内：2.5Y7/4浅黄 外：10YR8/2灰白	施釉	施釉	施釉	
417	66		磁器 椀	SKa20	底径4.8	砂粒小少	内外：10GY8/1明緑灰	施釉	施釉	施釉	
418	66		陶器 鉢	SKa20	底径10.3	砂粒小少	内：10YR4/2灰黄褐 外：5Y6/2灰オリーブ		ハケズリ・施釉 後削り出し高台	ハケ後施釉	
419	66		土師器 土鍋	SKa20		砂粒中多	内外：10YR8/3浅黄橙	板ナデ	指オサエ	板ナデ	
420	66		備前焼？ スリ鉢	SKa20		砂粒小普	内外：7.5YR5/1褐灰	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ、卸し目	
421	66		備前焼？ スリ鉢	SKa20		砂粒小多	内：2.5YR5/6明赤褐 外：2.5YR5/4にぶい赤褐	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ、卸し目	
422	66		土師器 焙烙	SKa20	口径39.0	砂粒小少	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR4/2灰黄褐	ナデ	指オサエ・板ナデ 後指オサエ	ナデ	
423	67		陶器 椀	SKa23	口径9.0、器高5.5、底径4.4	砂粒小少	内：7.5Y7/2灰白 外：5Y4/3暗オリーブ	施釉	施釉・ナデ	施釉	
424	67		備前焼 鉢	SKa23	口径10.8、器高6.3、底径11.2	砂粒小少	内外：5YR5/4にぶい赤褐	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	
425	67	36	備前焼 鉢	SKa23	口径12.8、器高6.5、底径13.3	砂粒小少	内外：2.5YR5/3にぶい赤褐	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	
426	67	36	土師器 土釜	SKa23	器高8.2	砂粒小普	内外：5Y3/1オリーブ黒	ナデ	ナデ	ナデ	
427	67		土師器 土釜	SKa23		砂粒小普	内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR3/1黒褐	ナデ	ナデ	指オサエ後板ナデ	

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
428	67		土師器 土釜	SKa23	口径24.6	砂粒中普	内：7.5YR8/4浅黄橙 外：7.5YR7/4にぶい橙	ナデ	指オサ工後ナデ	板ナデ	
429	67		土師器 甕	SKa23	口径12.1, 器高18.4, 口径9.8	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英中普, その他小少	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR7/4にぶい橙	ヨコナデ	ナデ	板ナデ後指オサ工・ナデ	底部孔あり
430	67	36	土師器 焙烙	SKa23	口径44.7, 器高8.9	砂粒小少	内：10YR8/1褐灰 外：10YR3/1黒褐	ナデ	指オサ工後板ナデ後ナデ	ナデ	2孔一対, 費通していない
431	67		土師器 甕	SKa23	口径61.8	砂粒中多	内：7.5YR8/6浅黄橙 外：7.5YR7/4にぶい橙	ヨコナデ	指オサ工後ナデ	指オサ工後板ナデ	
432	67		土師器 甕	SKa23	口径54.7	雲母小少, 長石・石英小多, その他小少	内：7.5YR8/4浅黄橙 外：2.5YR6/8橙	ヨコナデ	指オサ工後板ナデ	指オサ工後板ナデ	
433	68		土師器 土鍋	SKa24		砂粒小多	内：7.5YR7/4にぶい橙 外：10YR4/2灰黄褐	ナデ	ナデ	ナデ	
434	68		土師器 土釜	SKa24		砂粒中多	内外：7.5YR8/4浅黄橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	
435	69		弥生土器 底部	SDa11	口径6.1	雲母小少, 長石・石英中多	内：2.5YR7/6橙 外：10YR6/3にぶい黄橙		マメツ	マメツ	
436	69		弥生土器 底部	SDa11	口径6.3	雲母小少, 長石・石英小多, その他小少	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：2.5YR7/6橙		ナデ	板ナデ	
439	70		弥生土器 甕	SDa13	口径23.1	雲母小少, 長石・石英小普, その他小少	内：10YR8/2灰白 外：10YR7/4にぶい黄橙	ナデ	ハケ	指オサ工後ナデ	
440	70		弥生土器 底部	SDa13	口径8.4	雲母小少, 長石・石英小多, その他小少	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR6/4にぶい黄橙		ハケ・板ナデ	剥落	
441	70		弥生土器 底部	SDa13	口径8.4	雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内：7.5YR7/6橙 外：2.5YR6/6橙		板ナデ後ナデ・ナデ	指オサ工後ナデ	
443	71		弥生土器 底部	SDa14	口径7.9	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内：2.5Y5/2暗灰黄 外：2.5YR6/6橙		マメツ (板ナデ)・指オサ工・ナデ	マメツ	
444	71		土師器 椀	SDa15	口径5.8	砂粒小普	内外：2.5Y8/2灰白		マメツ	マメツ	
445	71		土師器 甕	SDa15	口径49.6	砂粒中多	内外：7.5YR6/4にぶい橙	ヨコナデ	板ナデ後ナデ	ナデ	
446	71		土師器 甕	SDa15	口径49.3	砂粒小多	内外：10YR7/3にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
447	71		土師器 井筒か甕	SDa15		砂粒小多	内：10YR4/3にぶい黄褐 外：10YR8/4浅黄橙				
448	71		スリ鉢	SDa16		砂粒小普	内外：2.5YR6/6橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ, 卸し目	
449	71		陶器 壺	SDa15		砂粒小少	内：5Y8/2灰白 外：5Y5/4オリーブ				
450	71		軒棧瓦	SDa15		砂粒小普	内外：N4/灰				瓦質
453	71		土師器 鉢	SDa16	口径32.0	砂粒小多	内外：10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ			
454	71		磁器 椀	SDa16	口径3.4	砂粒小少	内外：10GY8/1明緑灰		施釉	施釉	
455	71		磁器 椀	SDa16	口径3.2	砂粒小少	内外：7.5GY8/1明緑灰		施釉	施釉	



報告番号	図号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
456	72	土師器 杯	池台地埋土及び SDa18	口径11.0, 器高3.1, 底径6.0	砂粒小少	内外: 5YR7/4にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ・回転糸切り	回転ナデ	
457	72	陶器 徳利	SDa18	底径9.6	砂粒小少	内外: 7.5YR4/2灰褐		回転ナデ・ナデ	回転ナデ	
458	72	土師器 井筒	池台地埋土		砂粒小多	内外: 7.5YR5/4にぶい褐	ナデ・ヘラケズリ	板ナデ	板ナデ	
459	72	土師器 かまど	SDa18		雲母小少, 長石・石英小普, その他小普	内外: 5YR6/4にぶい橙				
460	72	土師器 器種不明	SDa18		砂粒小普	内外: 5YR6/6橙		ナデ	ハケ・板ナデ	
461	72	丸瓦	SDa18		砂粒小少	内外: 2.5Y4/1黄灰			布目圧痕	瓦質, 釘穴
462	74	弥生土器 甕	I-8 包含層	口径15.2	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 10YR8/3浅黄橙 外: 7.5YR8/6浅黄橙	マメツ	マメツ	マメツ	
463	74	須恵器 杯	I-8 南側溝	口径11.6, 器高3.9, 底径8.6	砂粒小少	内: N7/灰白 外: N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
464	74	須恵器 甕	I-8 北側溝	口径11.8	砂粒中普	内: N7/灰白 外: N6/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
465	74	土鏝	I-8 南側溝		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 5YR6/6橙 外: 7.5YR7/4にぶい橙				
467	75	弥生土器 壺	I-9 西半 O-18・19南端包含層	口径30.2	長石・石英中多, その他小少	内: 10YR8/6黄橙 外: 10YR7/6明黄褐	マメツ	マメツ	マメツ	ヘラ描き沈線
468	75	弥生土器 甕	I-9 O-21 包含層	口径15.2	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小普, その他小少	内外: 7.5YR6/6橙	ナデ	ハケ	マメツ (指オサエ)	下川津B類土器
469	75	弥生土器 甕	I-9 東半 旧耕作土		長石・石英中多, その他小少	内外: 10YR8/3浅黄橙	ナデ	ハケ	ハケ後ナデ	
470	75	弥生土器 高杯	I-9 東半 側溝	底径12.0	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小少, その他小少	内外: 7.5YR6/6橙	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	下川津B類土器, 孔1
471	75	弥生土器 高杯か鉢	I-9 東半 側溝 / 東半分リカケ	口径28.2	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小普, その他小少	内外: 7.5YR6/4にぶい橙	ナデ	四分割ヘラミガキ	四分割ヘラミガキ	下川津B類土器
472	75	須恵器 杯	I-9 東半 包含層	口径13.3, 器高3.8, 底径9.4	砂粒小少	内外: N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	
473	75	須恵器 甕	I-9 東半 ガリカケ		砂粒小少	内外: 5Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	
474	75	土師器 甕か甕の把手	I-9 東半 表土及び旧耕作土		雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 10YR8/3浅黄橙 外: 7.5YR8/6浅黄橙				
475	75	土師器 土鍋	I-9 現代カク乱		砂粒中多	内外: 10YR8/4浅黄橙	ヨコナデ	指オサエ	ナデ	
476	75	土師器 こね鉢	I-9 現代カク乱		砂粒小普	内外: 10YR8/3浅黄橙	ヨコナデ	マメツ (指オサエ)	ナデ	
477	75	土師器 把手付鍋	I-9 水路北トレン子表土		砂粒中少	内外: 10YR8/3浅黄橙	ヘラケリ	板ナデ	板ナデ	
478	75	土師器 土釜脚部	I-9 東半 側溝		長石・石英小多, その他小少	内外: 10YR8/2灰白		板ナデ後指オサエ	ナデ	
479	75	備前焼 壺	I-9 東半 下位水田耕作土 床土	口径12.8	砂粒中普	内: 7.5YR5/1褐灰 外: 7.5YR6/2灰褐	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
480	75		備前焼 壺	I-9 東半 包 合層	口径10.6	砂粒小普	内：5YR5/3にぶい赤褐 外：10YR5/1褐灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
481	75		備前焼 底部	I-9 現代カク 乱	底径9.4	砂粒中少	内：5YR5/3にぶい赤褐 外：5YR5/3にぶい赤褐		回転ナデ・回転ヘラ ケズリ・ヘラキリ	回転ナデ	
482	75		土師器 甗	I-9 現代カク 乱	口径63.4	砂粒小普	内外：7.5YR8/4浅黄橙	ヨコナデ	指オサ工後ナデ	指オサ工後ナデ	
486	76		弥生土器 高杯か 鉢	I-9 水路北 1トレンチ	口径31.1	雲母小少、角閃石小少、長 石・石英小普、その他小少	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ	マメツ（ヘラミガ キ）	マメツ	下川津B類土器
487	76		土師器 土鍋	I-9 水路北 1トレンチ		砂粒小少	内外：7.5YR6/4にぶい橙	ナデ	ナデ	ナデ	
488	82		弥生土器 底部	SKa35	底径7.6	雲母小少、角閃石小少、長 石・石英中普、その他小少	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙		指オサ工後ナデ	マメツ（指オサ工）	
489	83		弥生土器 壺	SKa36		雲母小少、角閃石小少、長 石・石英中多	内：5YR6/6橙 外：5YR6/6明赤褐	ナデ	ナデ	ナデ	
490	83		弥生土器 壺	SKa36	口径16.0	雲母小少、長石・石英大普、 その他小少	内外：5YR6/6橙	ナデ	ナデ	ナデ	
491	83		弥生土器 甗	SKa36	口径32.3	雲母小少、角閃石小少、長 石・石英中多、その他小少	内外：5YR6/6橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	
492	84		弥生土器 壺	SKa37		長石・石英中多	内外：5YR6/6橙			板ナデ	ヘラ描き沈線、山 形文
493	84		弥生土器 甗	SKa37		雲母小少、角閃石小少、長 石・石英中普、その他小少	内外：5YR6/6橙	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	刻み目、ヘラ描き 沈線
494	84		弥生土器 甗	SKa37		長石・石英中多、その他小 少	内外：5YR7/6橙	マメツ	マメツ	マメツ	ヘラ描き沈線
495	84	37	弥生土器 鉢	SKa37	口径13.3、器高 9.3、底径5.0	雲母小少、長石・石英中多、 その他小少	内外：7.5YR7/6橙	マメツ	マメツ（指オサ工）	マメツ（指オサ工）	
496	84	37	弥生土器 甗	SKa37		長石・石英中多、その他小 普	内外：10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ・指オサ 工	ハケ	ナデ	
497	84		弥生土器 甗	SKa37	口径24.0	長石・石英中多、その他小 少	内外：7.5YR7/6橙	ヨコナデ	ナデ・ハケ	ナデ	
498	84		弥生土器 甗	SKa37	口径28.2	長石・石英中多、その他小 少	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR8/3浅黄橙	ヨコナデ	ナデ	マメツ	
499	84		弥生土器 壺	SKa37	底径24.0	雲母小少、長石・石英中多、 その他中少	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：10YR5/1褐灰		ナデ	ナデ	
500	85		弥生土器 甗	SKa38		雲母小少、長石・石英中多、 その他小少	内外：7.5YR7/4にぶい橙	ナデ	ナデ	指オサ工後ナデ	
501	86		弥生土器 甗	SKa39		長石・石英中多	内外：10YR3/1黒褐	ヨコナデ	ナデ	指オサ工後ナデ	
502	86		弥生土器 甗	SKa39		雲母小少、長石・石英中多、 その他小少	内外：5YR7/6橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	櫛描き沈線
503	86		弥生土器 底部	SKa39	底径8.0	雲母小少、長石・石英中多 その他小少	内：7.5YR7/褐灰 外：5YR6/6橙		ナデ後指オサ工	ナデ	
504	87	37	弥生土器 甗	SKa40	口径28.6、器高 30.2、底径8.9	雲母小少、長石・石英中多、 その他小少	内外：10YR6/6明黄褐	ヨコナデ	ナデ・マメツ・ハ ラミガキ	ナデ・マメツ・指 オサ工後ナデ	刻み目、櫛描き沈 線、複線状文
505	87		弥生土器 甗	SKa40		雲母小少、長石・石英中普	内外：7.5YR5/4にぶい褐	ヨコナデ	ナデ	マメツ	櫛描き沈線

報告番号	補図番号	図版番号	器種	報告遺構番号	分量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
506	88		弥生土器 壺	SHa02		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英中普, その他小少	内外: 7.5YR5/4にぶい褐		ハケ・ヘラミガキ	指オサエ・ヘラケズリ	下川津B類土器
507	88		弥生土器 甕	SHa02	口径15.3	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小少, その他小少	内外: 7.5YR5/4にぶい褐	ナデ	ナデ	ナデ	下川津B類土器
508	88		弥生土器 壺	SHa02	底径2.5	雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 2.5Y6/1黄灰 外: 7.5YR6/6橙		ナデ	ナデ	
509	88		弥生土器 底部	SHa02	底径3.3	雲母小少, 長石・石英中普	内: 10YR7/4にぶい黄橙 外: 7.5YR7/6橙		ナデ	ハケ	
510	88		弥生土器 底部	SHa02	底径5.2	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英中普	内外: 7.5YR5/4にぶい褐		マメツ	指オサエ・ヘラケズリ	下川津B類土器
511	88		弥生土器 底部	SHa02	底径6.8	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小少, その他小少	内外: 10YR4/3にぶい黄褐		ヘラミガキ	ヘラケズリ	下川津B類土器
512	88		弥生土器 高杯か鉢	SHa02	口径28.0	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小少, その他小少	内外: 7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	四分割ヘラミガキ	四分割ヘラミガキ	下川津B類土器
513	88		弥生土器 高杯か鉢	SHa02	口径26.4	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小普, その他中少	内外: 7.5YR5/6明褐	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	下川津B類土器
514	88		弥生土器 高杯	SHa02	底径17.4	雲母小普, 角閃石小普, 長石・石英小多, その他中少	内外: 7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	ナデ	ヘラケズリ	下川津B類土器
515	88		弥生土器 高杯	SHa02		雲母小少, 長石・石英小少	内外: 5YR6/6橙		ナデ	ヨコナデ	
516	88		弥生土器 高杯	SHa02		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小普, その他中少	内外: 7.5YR5/6明褐		ナデ後ヘラミガキ・ヨコナデ	ヘラミガキ・ヘラケズリ	
517	88		弥生土器 高杯	SHa02		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英中普, その他小少	内外: 7.5YR7/4にぶい橙		ハケメ	ナデ	孔
518	89		弥生土器 底部	SHa03	底径4.1	雲母小少, 長石・石英中少, 赤色粒小少	内外: 7.5YR7/4にぶい橙		ナデ・指オサエ	ナデ	
519	89		弥生土器 底部	SHa03	底径5.0	長石・石英中普, その他小少	内: 5YR7/8橙 外: 5YR6/6橙		板ナデ・ナデ	ヘラケズリ	
520	89		土師器 杯	SHa03	口径12.8	長石・石英小少, 赤色粒中少	内外: 2.5YR5/6明赤褐	ナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
521	89	37	弥生土器 製塩土器	SHa03	口径9.8, 器高15.0, 底径4.5	砂粒中普	内外: 10YR6/4にぶい黄橙		ヘラケズリ	指オサエ後ナデ	
522	89		製塩土器 台脚部	SHa03	底径6.2	雲母小少, 長石・石英小普, その他小少	内外: 5YR6/6橙	ヨコナデ	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	
525	90		弥生土器 壺	SXa03	口径15.0	長石・石英小少, その他小少	内: 10YR8/6黄橙 外: 7.5YR8/8黄橙	ナデ	ナデ	ナデ	
526	90		弥生土器 壺	SXa03	底径4.1	雲母小少, 角閃石小普, 長石・石英小多	内外: 5YR5/6明赤褐		マメツ	板ナデ	
527	90		弥生土器 高杯	SXa03		雲母小普, 角閃石小少, 長石・石英小普, その他小少	内外: 5YR5/6明赤褐		ヘラミガキ・ナデ	四分割ヘラミガキ・指オサエ	下川津B類土器
528	90		弥生土器 高杯	SXa03		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小普, その他小少	内外: 5YR5/6明赤褐	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	下川津B類土器
529	90		弥生土器 鉢	SXa03	底径3.5	雲母小普, 長石・石英小多, その他小少	内外: 5YR6/6橙		ハケ	ハケ	
530	90	37	弥生土器 鉢	SXa03	口径45.3, 器高16.9, 底径10.8	雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英大普, その他中少	内外: 5YR5/6明赤褐	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	下川津B類土器

報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
531	91		弥生土器 甕	SXa04	口径17.6	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小少、その他小少	内外：7.5YR6/6橙	ヨコナデ	ハケ	指オサエ	下川津B類土器
532	92	37	弥生土器 壺	SDa22	口径11.3、器高21.5、底径6.5	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中多、その他小少	内外：5YR6/6橙	ヨコナデ	ハラミガキ	指オサエ後ナデ・瓶ナデ	下川津B類土器 沈線、ハラ描き斜
533	92		弥生土器 壺	SDa22	口径14.9	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小多、その他小少	内外：7.5YR6/4にぶい橙	ヨコナデ	ヨコナデ (マメツ)	指オサエ (マメツ)	下川津B類土器
534	92		弥生土器 甕	SDa22	口径17.1	雲母中普、角閃石小少、長石・石英中普	内外：7.5YR5/4にぶい褐	ヨコナデ	ハケ	ハケ・指オサエ	下川津B類土器
535	92		弥生土器 甕	SDa22	口径14.8	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中多、その他小少	内外：7.5YR6/6橙	ヨコナデ	マメツ (ヨコナデ後ハラケズリ)	マメツ (指オサエ)	下川津B類土器
536	92		弥生土器 高杯か鉢	SDa22	口径22.3	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中多	内外：7.5YR5/4にぶい褐	ヨコナデ	ハラミガキ	マメツ (ハナデ・マメツ (ハラケズリ))	下川津B類土器
537	92		弥生土器 高杯	SDa22		雲母小少、角閃石小少、長石・石英中多、その他小少	内外：7.5YR5/4にぶい褐		ハラミガキ	四分割ハラミガキ	下川津B類土器
538	92		土師器 器台?	SDa22	口径10.2	砂粒小少	内外：7.5YR7/4にぶい橙	ナデ	ハラケズリ後ナデ	ナデ	
539	92		弥生土器 底部	SDa22	底径4.2	雲母小少、長石・石英中普	内：2.5Y/7黄灰 外：7.5YR6/6橙		マメツ・ハケ	マメツ	
540	92		弥生土器 甌	SDa22		雲母小少、長石・石英中普	内：10YR6/1褐灰 外：7.5YR7/4にぶい橙		指オサエ	指オサエ	孔1
541	92		弥生土器 甌	SDa22		雲母小少、長石・石英中普	内：10YR8/3浅黄橙 外：5YR7/6橙		タタキ	マメツ	孔1
542	92		弥生土器 底部	SDa22	底径4.1	雲母小少、長石・石英中普	内：7.5YR7/6橙 外：5YR7/6橙		ハケ・ナデ	マメツ	
543	93		弥生土器 底部	SDa23	底径4.5	長石・石英中普、その他小少	内：5YR7/4にぶい橙 外：10YR8/3浅黄橙		マメツ・指オサエ	マメツ	
544	93		弥生土器 甕	SDa 2 3		雲母小少、角閃石小少、長石・石英小少、その他小少	内外：7.5YR5/4にぶい褐	ヨコナデ			下川津B類土器
545	94		弥生土器 壺	SRa03	口径18.0	雲母小少、長石・石英中多、その他中少	内：10YR7/6明黄褐 外：5YR6/6橙	マメツ	マメツ	マメツ	
546	94		弥生土器 壺	SRa03		長石・石英中普、その他小少	内外：7.5YR7/6橙	ヨコナデ			列点文
547	94		弥生土器 壺	SRa03	口径8.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小少、その他小少	内外：10YR6/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ・指オサエ	下川津B類土器
548	94		弥生土器 壺	SRa03	口径15.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR6/4にぶい橙	ヨコナデ	ハラケ後ナデ	指オサエ	下川津B類土器
549	94		弥生土器 壺	SRa03	口径15.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	ハケ	指オサエ	下川津B類土器
550	94		弥生土器 壺	SRa03	口径14.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小多、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	ハケ	指オサエ	下川津B類土器
551	94		弥生土器 壺	SRa03	口径13.3	雲母小少、角閃石小普、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR5/4にぶい褐	ヨコナデ	ハケ	指オサエ	下川津B類土器
552	94		弥生土器 甕	SRa03	口径18.9	雲母小少、長石・石英中多、その他小少	内外：5YR6/6橙	ナデ・ハケ	ハケ	指オサエ後ナデ・ハラケズリ	下川津B類土器
553	94		弥生土器 甕	SRa03	口径26.4	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内：10YR5/4にぶい黄褐 外：10YR6/4にぶい黄橙	ヨコナデ・ハケ	ハケ	ハラケズリ	

報告番号	挿図番号	挿図番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
554	94			弥生土器か土師器 甕	SRa03		砂粒大多	内外：7.5YR6/6橙	マメツ	マメツ	ハラケズリ	
555	94			弥生土器 甕	SRa03	口径17.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他中少	内外：7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	ハケ	指オサエ	下川津B類土器
556	94			弥生土器 甕	SRa03	口径19.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	ハケ	指オサエ	下川津B類土器
557	94			弥生土器 甕	SRa03	口径18.2	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	ハケ	指オサエ	下川津B類土器
558	94			弥生土器 甕	SRa03	口径16.6	雲母小少、角閃石小普、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	ハケ	ハラケズリ後指オサエ	下川津B類土器
559	94			弥生土器 甕	SRa03	口径18.2	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR6/6橙	ナデ	ハケ後ナデ・ハケ	板ナデ後指オサエ	下川津B類土器
560	94			弥生土器 甕	SRa03	口径14.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内：7.5YR6/6橙 外：7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	ハケ	指オサエ	下川津B類土器
561	95			弥生土器 底部	SRa03	底径5.1	雲母小少、長石・石英大多	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR8/3浅黄橙		マメツ・ナデ	マメツ	
562	95			弥生土器 底部	SRa03	底径4.0	雲母小少、長石・石英中普、その他小少	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：7.5YR5/6明褐		マメツ・ナデ	ハラケズリ・ナデ	下川津B類土器
563	95			弥生土器 底部	SRa03	底径5.6	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内：10YR5/4にぶい黄褐 外：7.5YR5/4にぶい褐		ハラミガキ・ヨコナデ	マメツ	下川津B類土器
564	95			弥生土器 底部	SRa03	底径5.6	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他中少	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：10YR5/4にぶい黄褐		ハラミガキ・ナデ	ハラケズリ	下川津B類土器
565	95			弥生土器 甕	SRa03	底径6.1	雲母小普、角閃石小少、長石・石英小普、その他中少	内：7.5YR4/6褐 外：10YR3/3暗褐		ヨコナデ・ハラミガキ	ハラケズリ	下川津B類土器
566	95			弥生土器 高杯か鉢	SRa03	口径22.2	石英中少、赤色粒中少、その他小少	内外：10YR8/4浅黄橙	マメツ	マメツ	マメツ	下川津B類土器
567	95			弥生土器 高杯か鉢	SRa03		雲母小少、長石・石英大多、その他小少	内外：5YR6/8橙	マメツ	マメツ	マメツ	
568	95			弥生土器 高杯	SRa03		雲母小少、長石・石英中普	内外：5YR6/6橙		ハラミガキ	マメツ・ナデ・板ナデ	
569	95			弥生土器 高杯	SRa03	底径12.7	雲母小少、長石・石英小普、その他小少	内：7.5YR7/4にぶい橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ハラミガキ	ハラケズリ・板ナデ	ハラ描き沈線、穿孔4
570	95	37		弥生土器 高杯	SRa03	口径20.9	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：10YR6/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ハラケズリ後四分割ハラミガキ	四分割ハラミガキ	下川津B類土器
571	95	38		弥生土器 高杯	SRa03	口径24.2	雲母小普、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	四分割ハラミガキ	四分割ハラミガキ	下川津B類土器
572	95			弥生土器 高杯	SRa03		雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐		四分割ハラミガキ	四分割ハラミガキ	下川津B類土器
573	95			弥生土器 高杯か鉢	SRa03	口径28.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内外：7.5YR6/4にぶい橙	ヨコナデ	ハラミガキ	四分割ハラミガキ	下川津B類土器
574	95			弥生土器 高杯か鉢	SRa03	口径25.6	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他中少	内外：7.5YR5/6明褐	ヨコナデ	ハラケズリ後四分割ハラミガキ	ナデ後四分割ハラミガキ	下川津B類土器
575	95			弥生土器 高杯か鉢	SRa03	口径26.4	雲母小普、角閃石小少、長石・石英中普、その他中少	内外：7.5YR6/4にぶい橙	ナデ	ハラケズリ後四分割ハラミガキ	ナデ後四分割ハラミガキ	下川津B類土器
576	95			弥生土器 高杯か鉢	SRa03	口径20.2	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐		四分割ハラミガキ	四分割ハラミガキ	下川津B類土器

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
577	95		弥生土器 高杯	SRa03		雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐		ハラミガキ	ハラケズリ	下川津B類土器、孔1
578	95		弥生土器 高杯	SRa03	底径19.6	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR6/6橙	ヨコナデ	ナデ	ハラケズリ	下川津B類土器
579	95		弥生土器 高杯	SRa03	底径21.0	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：5YR5/6明赤褐	ヨコナデ	ハラミガキ・ヨコナデ	ハラケズリ	下川津B類土器、穿孔2孔一対
580	95		弥生土器 高杯	SRa03	底径19.0	雲母小普、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR6/6橙	ヨコナデ	ナデ	ハラケズリ	下川津B類土器、孔1
581	95		弥生土器 高杯	SRa03	底径16.6	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR5/4にぶい褐	ヨコナデ	ナデ	ハラケズリ	下川津B類土器、孔2
582	95		弥生土器 高杯	SRa03		雲母小普、角閃石小普、長石・石英小多、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐		ナデ	ハラケズリ	下川津B類土器、穿孔2孔一対
583	95		弥生土器 製塩土器	SRa03	底径4.0	雲母小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR6/4にぶい橙		板ナデ・指オサエ	マメツ(板ナデ)・指オサエ	
584	95		弥生土器 器種不明	SRa03	底径4.4	砂粒中多	内：7.5YR4/6褐 外：5YR7/8橙		マメツ・指オサエ	マメツ	
588	97		土師器 壺	SRa03	口径16.8	長石・石英小普、赤色粒中少	内外：10YR8/3浅黄橙	ヨコナデ			
589	97		土師器 小型丸底土器	SRa03	口径9.6	石英大多、赤色粒中少	内：7.5YR5/6明褐 外：5YR6/8橙	ナデ	ヨコナデ		
590	97		土師器 甕	SRa03	口径19.6	石英中普、金雲母小普	内外：7.5YR6/4にぶい橙	ナデ	ナデ	指オサエ後ナデ	
591	97		土師器 甕	SRa03	口径17.6	長石・石英中普、その他小少	内外：10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	指オサエ・ハケ後 指オサエ	
592	97	38	土師器 甕	SRa03		長石・石英大多、赤色粒中少	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：10YR6/4にぶい黄橙		ハケ	ハラケズリ	
593	97		土師器 高杯	SRa03		石英中少、赤色粒中少	内外：2.5YR6/8橙		指オサエ後ナデ	ナデ・指オサエ	
594	97	38	土師器 高杯	SRa03	底径10.3	雲母小少、長石・石英小普、赤色粒小少	内外：5YR6/6橙	ヨコナデ	板ナデ	ハラケズリ	
595	97	38	土師器 高杯	SRa03	底径9.9	赤色粒中普	内外：7.5YR7/6橙	ナデ	指オサエ後ナデ	ナデ	
596	97		土師器 高杯	SRa03		雲母小少、長石・石英小普、赤色粒小少	内：5YR5/3にぶい赤褐 外：5YR6/3にぶい黄橙		ナデ	ハラケズリ	
597	97		土師器 杯	SRa03	口径11.6, 器高5.3	長石・石英小少	内外：2.5YR6/8橙	ヨコナデ	ハラミガキ	マメツ	
598	97		土師器 甌が臺の把手	SRa03		砂粒大多	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：7.5YR7/6橙				
599	97	38	須恵器 蓋	SRa03	口径12.3, 器高5.6	砂粒大普	内：N5/灰 外：N4/灰	回転ナデ	回転ナデ・回転ハラケズリ	回転ナデ	
600	97		須恵器 蓋	SRa03		砂粒小少	内：N7/灰白 外：5Y7/1灰白		回転ハラケズリ		
601	97		須恵器 蓋	SRa03	口径12.0			回転ナデ	回転ナデ・回転ハラケズリ	回転ナデ	
602	97		須恵器 杯	SRa03	口径11.4, 器高4.6	砂粒中少	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ・回転ハラケズリ	回転ナデ	

報告番号	図版番号	器種	報告遺構番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
603	97	須恵器 甕	SRa03		砂粒中普	内：10YR7/1灰白 外：N6/灰	回転ナデ		回転ナデ	榊描き波状文
604	98	土師器 杯	SRa03	口径9.7, 器高2.2, 底径5.6	砂粒少	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR8/4浅黄橙	回転ナデ	回転ヘラキリ	回転ナデ	
605	98	土師器 杯	SRa03	口径9.5, 器高2.2	赤色粒大普	内：7.5YR8/3浅黄橙 外：7.5YR7/4にぶい橙	回転ナデ	回転ヘラキリ	回転ナデ	
606	98	黒色土器 椀	SRa03	底径6.1	砂粒大普	内：2.5Y8/1灰白 外：2.5Y4/1黄灰		回転ナデ	マメツ (ヘラミガキ)	内面黒色
607	98	土師器 土釜	SRa03	口径20.0	砂粒中多	内外：10YR8/3浅黄橙		板ナデ	マメツ	
608	98	土師器 土釜	SRa03		砂粒中多	内外：5YR7/4にぶい橙	ナデ	指オサエ・ナデ		
609	98	土師器 土釜	SRa03		砂粒中多	内：2.5Y5/1黄灰 外：2.5Y6/1黄灰	ナデ	ナデ・板ナデ	ナデ	
610	98	土師器 土鍋	SRa03		砂粒中多	内：7.5YR7/6橙 外：5YR7/6橙	マメツ	マメツ	マメツ	
611	98	備前焼 スリ鉢	SRa03		砂粒中普	内：7.5YR3/3暗褐 外：5YR5/3にぶい赤褐	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ, 卸し目	
612	98	土師器 土釜脚部	SRa03		砂粒中多	外：7.5YR6/4にぶい橙		ナデ		
613	98	土師器 土釜脚部	SRa03		砂粒中多	外：10YR8/2灰白		ナデ		
614	98	土師器 甌か甕の把手	SRa03		砂粒中多	内外：7.5YR6/6橙		マメツ	マメツ	
615	100	土師器 杯	SHa04		長石・石英少, 赤色粒少	内：10YR8/4浅黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ	板ナデ	ナデ	
617	103	弥生土器 底部	SHa05	底径8.0	長石・石英中多, その他少	内外：7.5YR7/4にぶい橙		ナデ・指オサエ	剥落	
618	103	土師器 小型丸形土器	SHa05		長石・石英大, 赤色粒中少	内外：7.5YR3/3暗褐		剥落 (指オサエ後ナデ)	剥落 (指オサエ後ナデ)	
619	103	土師器 甕	SHa05	口径16.8, 器高27.3	雲母少, 長石・石英中普, その他少	内外：5YR6/8橙	ヨコナデ	ハケ	板ナデ	
620	103	須恵器 杯	SHa05	口径10.6, 器高4.9	砂粒少	内外：5Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケスリ	回転ナデ	
621	103	土師器 甕	SHa05	口径15.3, 器高24.1	長石・石英大普, 赤色粒少	内外：5YR5/6明赤褐	ナデ	ハケ	ハケ・指オサエ後ナデ	
622	103	土師器 甌	SHa05	口径30.1, 器高27.0	砂粒中多	内外：5YR6/8橙	ヨコナデ	板ナデ後ナデ・ナデ	板ナデ後ナデ	
623	103	須恵器 蓋	SHa05	口径12.2, 器高5.6	砂粒中少	内：N6/灰 外：N5/灰	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケスリ	回転ナデ	
624	103	須恵器 高杯	SHa05	口径16.5	砂粒少	内外：5Y6/1灰	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケスリ	回転ナデ	
625	103	須恵器 高杯	SHa05	底径11.0	砂粒少	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
627	103	土師器 甕	SHa05	口径17.7	雲母少, 長石・石英中普, 赤色粒少	内外：5YR6/6橙	ナデ	ナデ	ナデ	

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	報告番号	報告番号	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
628	103		土師器 甕	SHA05	口径17.0	長石・石英中普, 赤色粒小普	内外: 5YR6/6橙	ヨコナデ	ハケ	指オサエ後ナデ	
629	103		須恵器 蓋	SHA05	口径12.0	砂粒中普	内外: 5RP6/4紫灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
633	104	39	須恵器 杯	SHA06	口径10.9, 器高5.1	砂粒小普	内: 5Y7/1灰白 外: N5/灰	回転ナデ	回転ナデ・回転ハケスリ	回転ナデ	
634	105		土師器 杯	SHA07	口径14.0	長石・石英小普, 赤色粒小少	内外: 5YR6/6橙	ヨコナデ	板ナデ	ヘラミガキ	
635	105	39	土師器 杯	SHA07	口径12.6, 器高5.6	雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 5YR6/6橙 外: 7.5YR7/6橙	ナデ	ナデ	ナデ	
636	105	40	土師器 鉢	SHA07	口径11.6, 器高5.2	長石・石英小普, 赤色粒大普	内: 7.5YR6/4にぶい橙 外: 5YR6/6橙	マメツ	マメツ	マメツ	
637	106		土師器 壺	SHA08	口径16.8	長石・石英中普, 赤色粒小少	内: 10YR8/灰白 外: 5YR7/6橙	ナデ	ナデ	剥落	
638	106		土師器 壺	SHA08		長石・石英中多, 赤色粒小少	内外: 2.5YR6/6橙	マメツ	マメツ	マメツ	
639	106		弥生土器 甕	SHA08		長石・石英中普	内: 7.5YR7/6橙 外: 10YR8/3浅黄橙	マメツ	マメツ	マメツ	
640	106	40	土師器 小型丸形土器	SHA08	口径8.9, 器高7.4	長石・石英小普	内外: 5YR7/4にぶい橙	ナデ	ハケ	指オサエ後ナデ	
641	106	40	土師器 高杯	SHA08	口径14.4, 器高10.9, 底径9.8	長石・石英小普	内: 10YR8/2灰白 外: 7.5YR7/4にぶい橙	ナデ	ハケ・板ナデ	マメツ・ナデ・ヘラケスリ	
642	106		土師器 高杯	SHA08		雲母小少, 長石・石英小多, 赤色粒小少	内: 7.5YR7/6橙 外: 5YR7/8橙	ナデ	マメツ・ヨコナデ	マメツ	
643	106		土師器 高杯	SHA08		長石・石英中普, 赤色粒小少	内: 10YR7/3にぶい黄橙 外: 10YR6/6明黄褐	ナデ	ナデ	ナデ	
644	106		土師器 高杯	SHA08		長石・石英大普, 赤色粒小少	内外: 5YR6/8橙	ヨコナデ	ハケ	マメツ	
645	106		土師器 高杯	SHA08		長石・石英中多, 赤色粒小少	内外: 10YR7/4にぶい黄橙		ナデ・ハケ	ナデ	
646	106		土師器 高杯	SHA08		長石・石英中普, 赤色粒小少	内: 7.5YR6/6橙 外: 10YR7/4にぶい黄橙		ハケ	ハケ	
647	106		土師器 高杯	SHA08		長石・石英中少	内: 2.5YR7/4淡赤橙 外: 2.5YR6/6橙		マメツ	マメツ	
648	106		土師器 高杯	SHA08		長石・石英中普	内外: 5YR6/8橙		マメツ	マメツ	
649	106		須恵器 高杯	SHA08		砂粒小少	内外: N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	櫛描き波状文
650	109		弥生土器 壺	SHA09		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英小少, その他小普	内外: 5YR5/6明赤褐	ヨコナデ	ハケ	ヨコナデ	下川津B類土器
651	109		弥生土器 壺	SHA09		雲母小少, 長石・石英小少, その他小少	内外: 5YR6/6橙	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	半裁竹管文
652	109		土師器 椀	SHA09	口径17.6	長石・石英中多, 赤色粒小少	内: 7.5YR6/6橙 外: 2.5YR7/6橙	ナデ	ハケ	指オサエ後ナデ・指オサエ	
653	109	40	土師器 甕	SHA09	口径14.9, 器高21.7	雲母小少, 長石・石英大普, その他小少	内外: 10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ	指オサエ後板ナデ	指オサエ後板ナデ	



報告番号	挿入番号	図版番号	器種	報告遺構番号	質量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
654	109		土師器 鉢	SHa09	口径21.4	長石・石英大多、赤色粒中少	内外：10YR8/4浅黄橙	マメツ	マメツ	マメツ	
655	109	40	土師器 甕	SHa09	口径17.2	砂粒中普	内外：5YR6/8橙	ヨコナデ	ハケ	指オサ工後ナデ	
656	109		弥生土器 底部	SHa09	底径3.4	雲母小少、角閃石小少、長石・石英中普、その他小少	内外：7.5YR5/6明褐		ナデ・指オサ工	ナデ	下川津B類土器
657	109		弥生土器 底部	SHa09	底径6.7	雲母小少、角閃石小少、長石・石英小普、その他小少	内外：7.5YR5/4にぶい褐		ハラミガキ・ナデ	マメツ	下川津B類土器
658	109		土師器 高杯	SHa09	口径14.2	長石・石英小少、赤色粒小	内外：5YR6/6橙	ナデ	ナデ	ナデ	
659	109		土師器 高杯	SHa09	底径11.5	長石・石英中普、赤色粒小	内外：10YR6/4にぶい黄橙	板ナデ	板ナデ	板ナデ	孔3
660	109		土師器 鉢	SHa09	口径14.0	雲母小少、長石・石英小少、赤色粒小少	内外：2.5YR6/8橙	ハラミガキ	ハラケズリ後ハラミガキ	ナデ後ハラミガキ	
661	109		土師器 杯	SHa09		砂粒小普	内：5YR5/6明赤褐 外：5YR4/6赤褐	ナデ	ナデ	ハラミガキ	
662	109	41	土師器 甌	SHa09	口径24.7、器高20.3	長石・石英中普、赤色粒小	内：5YR6/8橙 外：5YR5/8明赤褐	ヨコナデ	板ナデ	板ナデ後ナデ	楕円形の孔2ないし3
663	109		土師器 甌	SHa09		砂粒中普	内外：7.5YR7/6橙	マメツ	マメツ	ナデ	
664	109		須恵器 蓋	SHa09	口径12.9	砂粒小少	内外：7.5Y6/1灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
666	110		須恵器 甕	SHa10		砂粒小少	内：N7/灰白 外：N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	突帯
667	111		弥生土器 甕	SDa24		砂粒中多	内：5YR6/6橙 外：10YR6/4にぶい黄橙	マメツ	マメツ	マメツ	
668	111		土師器 杯	SDa24	口径12.0	雲母小少、長石・石英小少、赤色粒小少	内：7.5YR8/3浅黄橙 外：5YR6/6橙	マメツ	指オサ工後板ナデ	ナデ後ハラミガキ	
669	111		土師器 甌の把手	SDa24		長石・石英中普、赤色粒小	内：10YR8/4浅黄橙 外：5YR7/6橙		指オサ工後ナデ		
670	111		弥生土器 底部	SDa24	底径7.5	雲母小少、角閃石小普、長石・石英中普、その他小少	内外：10YR6/4にぶい黄橙		板ナデ・ナデ	板ナデ	
671	111		須恵器 蓋	SDa24	口径12.0	砂粒小普	内外：N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
672	111		須恵器 杯	SDa24	口径11.0、器高5.0	砂粒大少	内外：N6/灰	回転ナデ	回転ナデ・回転ハラケズリ	回転ナデ	
673	111		須恵器 高杯	SDa24	底径8.8	砂粒小少	内外：N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
675	113		弥生土器 壺	I-14 包 含層 P-4	口径14.6	長石・石英中普、その他小	内外：10YR8/4浅黄橙	マメツ	マメツ	マメツ	
676	113		弥生土器 壺	I-14 包 含層 P-4	底径6.4	砂粒大多	内：2.5YR6/8橙 外：7.5YR7/6橙		ナデ	ナデ・指オサ工	
677	113		弥生土器 壺	I-14 包 含層 P-4		長石・石英中多、その他小	内：7.5YR6/4にぶい黄橙 外：7.5YR7/4にぶい黄橙		ハケ	指オサ工後ナデ	ハラ描き沈線
678	113		弥生土器 壺	I-14 包 含層 P-4		長石・石英中少、その他小			ナデ	ナデ	ハラ描き沈線

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	報告番号	法量	胎土	色調	端部調整	外面調整	内面調整	備考
679	113		弥生土器 底部	I-14 包 含層 P-4	口径6.5	長石・石英中多, その他小少	内外: 10YR8/3浅黄橙		ナデ	ナデ	
680	113		弥生土器 底部	I-14 包 含層 P-4	口径9.3	雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 7.5YR7/4にぶい橙		ナデ後へラミガキ	ナデ・指オサ工後ナデ	刻み目, へラ描き沈線
681	113		弥生土器 甗	I-14 包 含層 P-4		雲母小少, 長石・石英中多, その他小少	内外: 7.5YR5/4にぶい褐	ナデ	ヨコナデ・ナデ	指オサ工後ナデ	
682	113		弥生土器 甗	I-14 包 含層 P-4		雲母小少, 長石・石英中普, その他小少	内: 2.5YR8/6明赤褐 外: 7.5YR6/4にぶい橙	ヨコナデ	ナデ	ナデ	へラ描き沈線
683	113		弥生土器 甗	I-14 包 含層 P-4		雲母小少, 角閃石小少, 長石・石英中少, その他小少	内外: 5YR7/6橙	ヨコナデ	ハケ	ナデ	
684	114	41	土師器 壺	I-14 包 含層 P-4	口径11.4, 器高15.4	雲母小少, 長石・石英小少, 赤色粒小少	内外: 7.5YR8/6浅黄橙	ヨコナデ	ナデ	指オサ工・板ナデ	
685	114	41	土師器 甗	I-14 包 含層 P-4	口径17.6	長石・石英中多, その他小少	内外: 5YR5/6明赤褐	ハケ	ハケ	ナデ	
686	114	41	土師器 甗	I-14 包 含層 P-4	口径14.4	長石・石英大多, 赤色粒小少	内: 7.5YR6/4にぶい橙 外: 2.5YR6/6橙	ナデ	ハケ後ナデ	指オサ工・ナデ	
687	114		土師器 甗	I-14 包 含層 P-4	口径20.0	長石・石英中普	内外: 10YR5/4にぶい黄褐	ヨコナデ	ハケ	指オサ工後板ナデ	
688	114	41	土師器 甗	I-14 包 含層 P-4	口径19.2	雲母小少, 長石・石英小多, その他小少	内外: 7.5YR6/4にぶい橙	ヨコナデ	ハケ後ナデ	指オサ工	
689	114		土師器 甗	I-14 包 含層 P-4	口径19.4	雲母小少, 長石・石英小多, その他小少	内: 5YR6/6橙 外: 5YR7/8橙	剥落	ハケ	指オサ工後ナデ・へラケズリ	
690	114	41	土師器 甗	I-14 包 含層 P-4	口径17.7	長石・石英中普, 赤色粒小少	内: 10YR5/2灰黄褐 外: 10YR6/3にぶい黄橙	ヨコナデ	ハケ	ハケ・指ナデ	
691	114	41	土師器 甗	I-14 包 含層 P-4	口径20.0	雲母小少, 長石・石英小多, 赤色粒小少	内: 7.5YR7/4にぶい橙 外: 5YR7/6橙	ヨコナデ	板ナデ	指オサ工後板ナデ	
692	114	41	韓式系土器 平底鉢	I-14 包 含層 P-4	口径25.8, 器高25.4	砂粒中多	内: 5YR7/6橙 外: 10YR7/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ハケ後ナデ	板ナデ	
693	114		土師器 杯	I-14 包 含層 P-4	口径15.6	雲母小少, 長石・石英小少, 赤色粒小少	内外: 5YR6/6橙	ヨコナデ	へラミガキ	へラミガキ	
694	114		土師器 杯	I-14 包 含層 P-4		雲母小少, 長石・石英小少, 赤色粒小少	内外: 2.5YR6/8橙		へラケズリ後ナデ 後へラミガキ	マメツ	
695	114		土師器 高杯	I-14 包 含層 P-4		長石・石英小少, 赤色粒小少	内外: 5YR6/6橙		指オサ工後ナデ	ナデ	
696	114		土師器 甗か甗の把手	I-14 包 含層 P-4		長石・石英小少, その他小少	内: 7.5Y7/1灰白 外: 5YR6/8橙				
697	115	41	須恵器 蓋	I-14 包 含層 P-4	口径12.6, 器高4.9	砂粒中少	内: 2.5Y7/1灰白 外: 2.5Y6/1黄灰	回転ナデ	回転へラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	
698	115		須恵器 蓋	I-14 包 含層 P-4	口径12.2, 器高4.6	砂粒小多	内外: N6/灰	回転ナデ	回転ナデ・回転へラケズリ	回転ナデ	
699	115	42	須恵器 蓋	I-14 包 含層 P-4	口径15.9, 器高5.6	砂粒中普	内外: N7/灰白	回転ナデ	回転ナデ・回転へラケズリ	回転ナデ	
700	115	42	須恵器 蓋	I-14 包 含層 P-4	口径12.2, 器高4.1	砂粒小普	内: 5Y6/1灰 外: N6/灰	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	
701	115	42	須恵器 蓋	I-14 包 含層 P-4	口径12.3, 器高5.3	砂粒中少	内外: N7/灰白	回転ナデ	回転へラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	